

【ラブライブ μ's物語 Vol.4】オレとつばさと、ときどきμ
's ~Winning wings 外伝~

スターダイヤモンド

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

◎オレとともに事故に巻き込まれた美人は、元スクールアイドル：『μ'sのメンバー』だった!?

2人とも、被害者なんだが：世間はそれを許さないらしい。

果たして敵は：加害者か？ファンか？マスコミか？

☆2018/5/2の22時を以て、連載完結と致しました。

長い間、お付き合い頂きありがとうございました。

☆感想については、随時受付けてます。

※はるか昔に書いていた「Winning wings」という作品の設定を流用して、ラブライブと掛け合わせってみました。

※#82486『Can't stop lovin' you!』

「花陽ちゃんへの愛が止まらない」の続編という位置付けでもあるので、ちよいちよい、そこからのエピソードを引用しております。お時間があれば、そちらもご覧下さい。

※第一部と第二部の間に登場人物紹介を入れました（ネタバレになるので、本編を読んだあとと見ることをお勧めします）。

※物語が長くなってしまったので、第三部の前に「これまでのあらすじ」を挿入しました。

「初めから読むのが面倒だ」…という方は、こちらをご覧になってください。

※『あとがきのなこと』を記載しました。暇な方は読んでみてください。
さい。

※物語としては一応完結致しましたが、ご要望により(?)不定期投稿ですが『追加エピソード(チャリティーライブからの後日談)』を挿入しました。

目次

第一部

オレの名は	1
意識回復	6
その1分、その30秒…	12
永遠にライバル	18
言葉の重み	23
お客様は神様です	28
交差点…横断歩道…	36
穂むらの跡取り	42
明かされた真実	48
Winnings	54
Winnings	59
Winnings	63
Winnings	69
Winnings	73
Winnings	77
Winnings	84
Winnings	90
Winnings	98
Winnings	105
Winnings	110
Winnings	115
ときどきμs	120

W i n n i n g	w i n g s	く 緑川 沙紀	232
W i n n i n g	w i n g s	く ファーストコンタクト	224
と き ど き ム s	く A—RISE 出現	—	215
W i n n i n g	w i n g s	く アーティストよりも…	208
—	—	—	202
W i n n i n g	w i n g s	く ダイワじゃなくてヤマトだよ	194
W i n n i n g	w i n g s	く 下心、あり	187
W i n n i n g	w i n g s	く 茶番	182
W i n n i n g	w i n g s	く つばさ推しはM?	178
—	—	—	171
W i n n i n g	w i n g s	く Xデー…その時ム s は?	167
—	—	—	167
W i n n i n g	w i n g s	く 仮面ライダーと覆面シンガー	162
と き ど き ム s	く 真姫の葛藤	—	155
と き ど き ム s	く 花陽と凜の夢	—	149
—	—	—	149
W i n n i n g	w i n g s	く 勝利の女神 v s 関西の女神	143
—	—	—	137
—	—	—	137
W i n n i n g	w i n g s	く f・tboldesal	134
W i n n i n g	w i n g s	く 駆け抜けた一年	131
—	—	—	125
W i n n i n g	w i n g s	く かのんと萌絵	125
—	—	—	125
W i n n i n g	w i n g s	く アフターはギターの調べ	125

Winning Wings 羽山 優子 238

Winning Wings 紅白戦 244

Winning Wings 伝えたいこと 254

Winning Wings Love Like (ラブライ

ク) 264

Winning Wings 抑えきれない気持ち 273

Winning Wings 距離感 283

Winning Wings 秘策 291

Winning Wings 盾と矛 301

Winning Wings この快感をあげたい 308

ほろ酔いの海未 316

登場人物紹介

【登場人物紹介①】 330

【登場人物紹介②】 339

第二部

第一報 348

幸せな最期って 358

どうして… 364

母、強し 372

海未、運ばれる 382

梨里の両親と海未の父 390

カヤの外 398

長い夜 406

当たらず、触らず 412

サプライズゲスト 417

マニアックな記憶	426
まさか…ね…	433
そして誰も…	440
ONとOFF	448
リスペクト	455
つばさ×ツバサ	461
残りの1割と2割…	468
始まったバトル	474
混沌とした世界	478
私が私じゃなかった時間	483
a f t e r μ s	492
えればな	497
月に向かって	503
一步前進	512
余計なことを言うなよ	517
返り討ちに遭う	527
沙紀、怒る！	535
新文のスクープ（その1）	543
新文のスクープ（その2）	548
新文のスクープ（その3）	553
新文のスクープ（その4）	559
新文のスクープ（その5）	567
海上保安庁	575
知らないLOVE…	584
恋に落ちちやうわけではないからね…	590

絶対に負けられない闘いが、そこにはある (ブラジル戦 前編)

598

絶対に負けられない闘いが、そこにはある (ブラジル戦 後編)

608

術後

—————

初恋はミステリー

—————

無謀な賭け、勝ちにいかう!

—————

頑張るのは自分の為?

—————

知らないな…誰が来るのかな?

—————

祈っちゃうでしょう…泣いちゃうでしょう…

—————

負けない心で…

—————

近づいた足音…

—————

激闘の行く末

—————

闘い終わって、日が暮れて

—————

なにをして遊ぶ?

—————

どうしよう、どうしよう…迷うよね!?

—————

sweet & sweet holiday

—————

第一部&第二部まとめ

これまでのあらすじ

—————

登場人物紹介

【登場人物紹介③】μs

—————

第三部

なでしこ帰国

—————

つばさと一問一答

—————

2人の関係は?

—————

754

747

741

732

726

714

707

698

687

681

669

665

658

648

643

633

623

617

直接対決！	762
目指すべき場所	770
悩みは尽きないのです…	780
common sense	786
ビルの街にガオー	792
秘密諜報部員と少年A	798
園田さんと高坂さんと南さん	805
風が吹いたの	813
運命感じてよ	819
にわかですけど、なにか？	826
神奈川にはサッカーチームがありすぎる	836
悪魔の遺伝子	843
この世界は哀しみに満ちている	850
繋がった点と点	857
心配にならない…わけがない	863
F u ・ b a l l (フースバル)	873
すれ違う2人	883
キミのくせに…	896
決断	907
内浦の少女たち	916
セカンドレイプ	924
オレの中に潜む残虐性	933
隠しきれない想い	940
step by step	948
高野が決めたこと	961

ぶるべり♡とれいんで、大時化（おおしけ）です

朝食

カウンセラー 真姫（カルーセル麻紀ではないよ）

水の星が愛をこめて

もう、いくつ寝ると…X'mas?

過大評価じゃないですか？

冬、到来

ふたりハピネス

ダイヤモンドプリンセスの憂鬱

触れた手がまだ熱い…

不思議なパワーで、お手伝いしよか？

告白日和、です

新たななる挑戦

第四部（最終章）

Happy new year!!

聖地に雪の戦士

初めての経験

意外と時間はありません

Driving a Go! Go!

細かいことが気になるのが、オレの悪い癖

私は誰でしょう？知りたくなつたでしょう？

海未の覚悟

花陽、危うし!

代役ヨーソロー

μ's…ミュージック スタート!!

打ち上げ	1194
だってパーティー終わらない	1202
そして最後のページには…	1212
あとがきのなこと	
あとがきのなこと①	1227
あとがきのなこと②	1234
あとがきのなこと③	1239
あとがきのなこと④	1244
エピソード集（チャリティーライブからの後日談）	
海未の誕生日	1250
サッカー留学（前編）	1258
サッカー留学（後編）	1265
思い出① クリスマス（前編）	1285
思い出① クリスマス（後編）	1293
海で海未と	1307
ラストゲーム（前編）	1320

第一部

オレの名は

オレは『高野 梨里』。

二十歳。

176cm、63kg、O型。

親戚や古い友人などは、幼い頃のオレを『リサ』とか『リリー』と呼んだ。

そのせいで：知らない人からは「えっ？実は女の子だったの？」と思われたことも少なくないが：

本当は『梨里』と書いて『りさと』と読む。

今でこそ『正しく呼んでもらえるようになった』が、昔はだいぶ苦労した。

大抵の人が『りり』と読み間違えるからだ。

その都度「違います！『りさと』です」と正解を告げることになる。

ところで、この歳になり『ようやくここまでの身体』になったが：中学生くらいまでは女子よりも小さく、細かったから、実際、よく「女装が似合う」と言われたもんだ。

いや、あくまで、そう言われただけで：『自分からした』ことはない。

従姉妹に『させられたこと』はある：が…。

あの時『そっちの道』に目覚めていたら：もしかしたら今頃は、別の世界にいたかも知れない。

幸か不幸か、そうはならなかったのだが。

因みにスペルや発音を気にしなければ『リリー』とは英語で『百合』のことを言う。

『たかのゆり?』

そういえば：『た○の友梨ビューティークリニック』：なんてエステサロンがあるけど：オレとその間に、因果関係はない!：：と思っ
ている。

…百合…

本当に『そっち』に進んでいたら、そこそこ意味深な言葉だな…。

それ故、よく名前の由来について問われるが、なぜこうなったのか、オレもわからない。

両親に訊いても『なんとなく』『雰囲気』『そういう顔だったから』とか言っつて、明確な答えが返ってこない。

それでも5年ほど前までは『なにか隠された秘密があるはずだ』と思っつていたのでが…

ここ数年は『本当にテキトーに付けたんじゃないか』という考えに変わっている。

出世届けを出す際に、書き間違えた…とか、恐らくそんなところだろう。

まあ、名前が知れたお陰で、いちいち訂正することもなくなったし、最近では自分自身、かなり受け入れられるようにはなってきた。

もしオレに子供ができたら、わかりやすい名前を付けてあげよう。

男か女か、すぐわかる：誰もが読める名前。

キラキラネームなんて、以ての外だ。

こういう苦労は当事者じゃなきゃ、わからない。

オレは性格的に虐められるようなタイプではなかったが、気が弱い

子なら十分、その対象になりえる。

たかが名前。
されど名前。

慎重に付けて欲しいと、心から思う。

余談が過ぎた。
オレの紹介を続けよう。

オレは小学1年生からサッカーを始めた。

両親は身体つきも運動能力も、ごく普通の一般人であるため、特にこれといって受け継いだものはない。

だから、プロ選手を目指していた訳でもないし、なれるとも思っていないかった。

ああいう選手は、ある程度、英才教育というか…親が相当力を入れてバツクアップしないと…というのは、誰もが知っているところである。

だが、どうやら、オレにはそれなりにセンスがあったらしい。

自慢じゃないが、サッカーを始めた時から、ボールコントロールが抜群に上手かった。

持って生まれた才能というのは、百の努力にも優る。

背は低かったが、脚は速かったので、このボールタッチを武器にしたオレは、次第にFWを任されるようになった。

高学年になると、快速ドリブラーとして、注目され始める。

ただし、華奢で非力な為、いわゆる『ストライカー』ではなく、敵

陣深く切り込みチャンスメイクするタイプ。

ドリブルで相手を引き付け、空いたスペースにパスを出す。

これが得意のプレー。

所属チームが弱かった為、優勝には縁がなかったが…それでも、5年生と6年生の時には、地区の選抜選手となった。

その活躍が認められ、中学からは、Jリーグの下部組織に入団。

しかし、その3年間は『成長期特有の膝の痛み』との戦いとなり、思うような結果を残せずに終わる。

中学入学時には140cmに満たなかった身長が、平均すると1年で8cmずつ伸び、卒業するころには163cmとなっていた（それでも、まだ十分小さいのだが）。

その身体の成長が、オレのプレースタイルを変えさせた。

接触を避ける為、ドリブルで直線的に突っ込むスタイルから、フェイントを多用し相手を抜くプレーへと、徐々にシフト。

アタッキングゾーンでのプレーが増えてきたことにより、積極的にシュートを放てるようにもなっていた。

元来、ボールコントロールには自信があったオレだが、この頃からキーパーのタイミングを外し、力ではなく、技でゴールを狙うようになる。

それが開花するのは高校に入ってから。

ユースチームでトップ下を任せられるようになり、レギュラーを奪うと、そこから大会で3連覇、ベストイレブンに選ばれるまでになった。

年代別の代表にも選ばれ、高校卒業後、そのままトップチームに昇格。

今年で3年目を迎える。

ただし所属チームでは、なかなかチャンスをもたらえず、ベンチ入りしても、ロスタイムの出場とか…その程度。

歯痒い思いをしている。

そんな中、オリンピックの予選（U—23）では、7試合で4ゴール5アシストを記録。

特に：勝てばオリンピック出場決定という試合で『ジョホールバルの再来』と呼ばれる『ロスタイムでのゴール』をあげ、オレの名前は、一気に全国区になった。

こうして『梨里』という文字は、無事に『りさと』と呼ばれるようになったわけである。

ところが…

代表合宿を1週間後に控えたあの日、オレは事故に巻き込まれてしまった…。

…運命ってヤツは、本当に紙一重だな…

つくづく、そう思う。

あの時、横断歩道の信号が赤にならなければ、オレは事故現場から、数十メートル先を歩いていたのだから…。

くづくく

意識回復

助けた相手が『元スクールアイドルの有名人』だった…と聴いたのは、オレが意識を取り戻した翌日のこと。

事故からは4日が経っていた。

その日は、まず医師から『今のオレの状態』について説明があった。

…取り敢えず、最悪な事態は免れたか…

それが率直な感想。

シヨツクがないと言えば嘘になるが、むしろ、その程度で済んだなら、御の字だ。

そう思った。

オレは決してポジティブ思考の人間ではないが、今回の件については、意外なほど割り切って考えることができた。

後悔はしていない。

それは『あの時の行動に間違いがなかった』という自信がそうさせているのだろう。

オレは意識が回復したことにより、ICUから個室に移され、条件付きだが、面会が認められるようになった。

話しは普通にできそうだ。

それでも、鎮痛剤やら、なんやらかんやらのせいで、頭はクリアな状態ではない。

ボーツとしている。

まだ、半分夢の中をさまよっている…そんな感じだった。

真っ先に対面したのは両親だ。

オレを氣遣ってか、多くは語らなかつた。

だが、そこは親子。

「とにかく余計なことを考えず、治療とリハビリに専念しろ」

と、そう言った。

それだけで何が言いたいかはわかつたし、オレがどう思ってるかも、理解してくれたようだ。

その後、サッカー協会の幹部と代表監督、チーム関係者が見舞いに来たが…みんな一様に、オレよりも落ち込んでいた。

無理もない。

全治6ヶ月と聴けば、そうならざるをえない。

来月に開かれるオリンピックへの出場は絶望的だった…。

いや、どうやっても無理。

…まあ、サッカーは個人種目ではないから、あとはみんなで頑張ってくれ…

今はそれしか言いようがない。

むしろオレは、自分のオリンピック出場云々よりも、助けた彼女の方が気になっていた。

「幸い、かすり傷程度で済んだみたいですよ…」

…そうか…助かつたか…

事情聴取に来た警察から、そう聴かされ少し安堵した。

こっちは被害者だから、オレが厳しく追及されるようなことはなかった…が…それでも、彼女との関係性だったり、なぜ、その時間にその場所にいたのか…など、根掘り葉掘り訊かれた。

あまり気持ちのいいものじゃない。

向こうも仕事だから、それはそれで仕方ない…とは思うが、やはり、この職業の人たちとは…できれば関わりたくないもんだ。

彼女の名前は、その時に知った。

だが『そういうこと』に『疎い』オレは、そんな有名な人だとは、まるで気付かずだった。

彼女については、あとから『チヨモ』が詳しく説明してくれた…。

警察からは、同時に加害者の話も聴いた。

これは…もう…

何をどこに、どうぶつけていいのやら…

怒りとか哀しみとか…そんな感情を通り越して…

『呆れた』

一言で表現するなら、それしかなかった。

あとあと、刑事裁判とか民事裁判とか色々面倒だと思っただが、金で解決できる話じゃない。

失った時間は帰らない。

だが止まっても仕方がない。

先に進むしかない。

取り敢えず、今、できることをやるしかない。

…先は長いな…

考えると気が遠くなるから、取り敢えず、寝ることにした。
まあ、それしかできないんだが…。

翌日…。

目を覚ますと、部屋にはチョモがいた。

「おじさんとおばさんは、一旦、家に帰る…って。…で、その間、留守を任せられちゃった」

「…ああ、そうか…悪いな…」

「ほんとに…こんな大事な時期になにしてるんだか…」

と、溜息混じりにヤツは呟いた。

「まったくだ…」

オレも同意した。

だが、すぐに

「いやいや、そこは『生きててよかったあ!』からの…『チユウ』だろ、普通?」

と毒づいてみる。

「!!…それは…もう終わったから…」

「終わった…って…オレが寝てる間にか?…」

「ま、まあ…」

ヤツは顔を赤らめた。

この『時折見せる女つぼさ』が、メチャメチャ、エロく見えた。

そこで

「じゃあ、もう一回!」

とねだったら『やだ、薬くさいんだもん…』と笑いながら返しやがっ

た。

「可愛いげがないねえ」

「今に始まったことじゃないでしょ？」

「そりゃ、そうだけど…」

「それに…」

「？」

「今、ここでキスなんかしちゃったら…その続きもしたくなっちゃうし…」

つまり、チョモとオレはそういう関係だ。

「お？…おお…」

今度はオレが顔を赤くした。

確かにこの状況では、そういう気持ちになっても何も出来ないだろう。

勿論『して欲しい』気持ちはあるが、今は首から下の感覚がないから、オレだって何もしてあげられない。

「じゃ、じゃあ…退院したら、いっぱいしよう！」

と言うと、ヤツはいつものように『…ばか…』と呟いた。

「そ、それより大丈夫か？そっちは…」

気不味い雰囲気を変えようと、オレはヤツに問う。

「えっ？…う、うん。こっちはこっちでやるから…余計な心配はしないです」

「いや、なんにも、することがないから…。余計なことしか、考えられない」

「じゃあ、テレビ…点ける？」

「いや…いい…。そもそも首が動かないから…観れない」

「音だけでも?」

「それならクラシックでも聴いた方がマシだ」

「プッ!...聴いたこともないくせに!」

とチョモが笑う。

「それはそうだけど!」

前日に比べれば、オレの頭はかなりクリアになっていた。

そのせいか、耳に流れ込む声や物音が、やたらハッキリ聴こえる。

身体が動かない分、五感が研ぎ澄まされてるのだろうか。

それ故、テレビから放たれる音声は、ただの騒がしいノイズにしか聴こえない!そう判断した。

今は遠慮したい。

理由はもうひとつ。

できれば、この事故に関するニュースや、日本代表の話題を耳にしたくない!...というのもあった。

恐らく、これから暫くは、オレにとって『ネガティブな情報』しか耳に入ってこない。

色々な意味で。

こっちは『起きてしまったことに、どう向き合っていくか』という状況なのに、当事者でもない人間が「あーだこーだ」と騒ぎ立てる様子は、これまでの経験から容易に想像がつく。

だから、携帯もPCも見たくはなかった。

もつとも、身体が動くようになるまで、そんなこともできないのだ
が!..

くつづく

その1分、その30秒…

「それより、キミが助けた人…誰だか知ってる？」

チヨモは、よっぽどのがない限り、オレのことを『キミ』と呼ぶ。

「一応、警察から名前は聴いたけど…確か、女子大生だったような…」
「うん」

「大した怪我じゃなかったみたいで」

「かすり傷程度だつて…」

「…らしいね。それならオレも、その人を『突き飛ばした』甲斐があるってものだ」

「そうね」

「一瞬だったから、よく覚えてないが、かなり美人だった気がする」

「…とか言つて、その美人を見つけて、あとを追いかけていったんじゃないの？」

「あはは…まさか、そんなこと…」

…半分、正解…

オレの視力はそれほど良くないが、綺麗な人、スタイルの良い人は、遠くにいても判別できる。

これも持って生まれた才能なんだと思っている。

そして、あの時も…

オレはジムでのトレーニングを終え、駅へと向かっていた。

車の免許は持っているが、特に今は大事な時期…ということで、協会から運転を止められていた。

いつもなら、ジムにタクシーを呼び、そこから乗って、家へと帰るところ。

それが、この日は、駅まで歩いてみよう…と思ってしまった。

何故か問われても、答えは出せない。

「なんとなく」

そうとしか、言いようがない。

これが運命の綾というヤツなのだろう。

駅まではオレの足で、5分ほどの道のり。

時刻は夜の9時過ぎだが、まだ人通りが多い。

そこまで走るといふ選択肢もあったが、別に急ぐ理由もなかったし、行き交う人にぶつかったりしたら、面倒だ。

…たまには、ゆっくり歩いてみるか…

今にして思えば、代表合宿を控え、心にゆとりとか、余裕が欲しかったのかも知れない。

必死に昂る気持ちを押さえつけていたのだろう。

そんな中でも、オレの『センサー』はいつも通りに作動する。

不思議なことに、その歩道には何十人も人が歩いているのに、オレの目は『ある一点』にだけ、ピントが合った。

『彼女』は、オレのはるか前を歩いていた。

進む方向は同じ。

だから、オレが見ていたのは、後ろ姿。

細身の体型。

長い手足。

首筋あたりで、ひとつに束ねた髪は腰までであった。

背筋を伸ばして歩く姿は、気品が漂っていて：一言で表すなら大和撫子：。

視力の良くないオレだが、脳内のモニターには、そんなイメージが投影されていた。

決してナンパしようとか、そんな下心があつたわけじゃない。

しかし、歩く速度と歩幅の違いなのか：彼女との距離はみるみるうちに縮まっっていく。

悲しいかな：

ここまできると、顔を見てみたい：と思うのは男の性。

失礼は承知で、追い抜いてから、振り返ろう：なんて、考えていた。

その矢先。

横断歩道の信号が点滅を始める。

少し駆け足をすれば、渡れなくはなかったが、そうしてから顔を拝む：というのは、あまりに『あからさま過ぎる』と思い、自重した。

そう、なんのことはない。

この時、渡ってさえいれば：オレは事故には逢わなかった。

これもまた、運命の分岐点。

サッカーに限らずだが『あの時パスを出していれば』『あの時シュー

トを撃つていたら』と、いうことはよくある。

『たれば』…ってヤツだ。

それは、自分の意思で決めたこと。

ある程度は納得できる。

だけど…きつと人は、毎日、いついかなる時も、自分が気が付かないうちに、運命というヤツは右に行ったり左に行ったりしているのだろう。

朝、起きる時間が1分早かったり、遅かったりしただけで、実は180度違う人生になっているのかも知れないのだ。

ジムからタクシーに乗らなかつたこと、歩いたこと、彼女の顔を見ようと思つたこと…横断歩道を渡らなかつたこと…。

これは全て自分の意思で決めたこと。

悔やんでも、仕方がない。

一方で、ジムを出るのが、あと1分…いや、30秒でも遅かったり早かったりしたら、どうだったのだろう。

同じ行動をしていても、結果は違っていたはずだ。

これは誰にもコントロールできない…

それこそ『神のみぞ知る』運命。

そう思えてならない。

事故は突然起きた。

まあ、起こるとわかっていれば、被害に遭うことはないのだが。

信号が赤になり『オレたち』が立ち止まった瞬間だった。

『ガシャッ！』だったか『バンツ！』だったか…とにかく激しく物がぶ

つかる音がした。

直感的に「事故った！」とわかった。

その方向に目をやると、車同士が衝突している。

その反動で、1台の：黒のレクサス：が、こっちに向かって突っ込んで来た。

ハツとして振り返る。

素早く首を振って、味方や相手のポジションを確認するのは、サッカー選手のオレにとっては造作もないこと。

その一瞬で、彼女の位置を把握。

同時に、彼女の身体が硬直しているのも確認した。

彼女も、車がこっちに向かってくるのは認識していたであろう。

だが、人間、危険を感じた時は、まず自分の身体を防御しようとして、丸くなる。

身を竦める。

例えば物が落ちてくる。

「上！危ない!!」

と言われたら、大抵の人は、手で頭を隠してしゃがみこむ。

上を見て、落下物からパツと避けられる人は、そう多くない。

彼女も、まさにそんな状態。

「よけろっ!!」

それを見て、オレは咄嗟に彼女を突き飛ばした。

記憶はそこで途切れていた…。

あとから聴いたところによると……オレの身体はボンネットの上へと撥ね飛ばされ……頭から地面に落下したらしい。

一方、車は……そのまま進み、歩道の植え込みに当たって、ようやく止まった……と、事情聴取に来た警察は、オレにそう言った。

くつづく

永遠にライバル

「キミは『ミス』って知ってる?」

一旦、ジュースを買いに病室を出たチヨモが、戻ってくるなり、オレにそう訊いた。

「ミューズ…石鹸だろ?」

「言うと思った…」

「違うんだ?」

「もう今から4年前になるかしら。『スクールアイドル』『ラブライブ』って言葉が、流行語大賞に選ばれたでしょ?」

「ああ…あつたね…」

「その時の授賞式に出席したのは?」

「そこまでは覚えてない…」

「正解は『A—RISE』よ」

「A—RISEは一応知ってる…」

「逆にA—RISEを知らない人がいたら、会ってみたいわ」「まあ…」

アイドルとか芸能人とかに疎いオレでも、彼女たちは知っている。

3人組の女性アーティストだ。

代表戦で国歌を斉唱したこともある。

「A—RISEは、その年の春にメジャーデビューしたんだけど、それまでは高校生で…『スクールアイドル』として活動してたの」

「…スクールアイドル?…」

「その全国にいるスクールアイドルが目指す大会…それが『ラブライブ』…ここまではいい?」

「サッカーで言うところの『冬の選手権』みたいなもんだな」

「そうね…。A—RISEは、スクールアイドルとラブライブを世に広めて、認知度を高めた…として受賞したの。だけど、本当は『もう一組』出ることになっていて…」

「それが『μ's』？」

「当たり前…。結局、既に『解散しているから』…っていう理由で、メンバーが集結することはなかったんだけどね…」

「そんなに凄いんだ？μ'sって」

「μ'sは、ラブライブを目指すスクールアイドルや、ファンの間では『カリスマ的存在』なの。解散から4年が経った今でも、その人気は絶大で…当時のライブ映像は、ずっと再生回数上位にランクインしてるし…特にアキバで行ったラストライブは『伝説』って呼ばれてるのよ」
「伝説？…たかだか4年前の話だろ？『ペレ』や『ジーコ』じゃあるまいし」

「ペレ？ジーコ？」

「いやいや、お前もサッカーやってるんだから、それくらいは知っとけよ！…まあ、とにかく、オレに言わせれば、最近は『カリスマ』だとか『神』だとか『レジェンド』だとか、安易に使い過ぎだと思うんだが…あっ！…」

…そう言えばチョモも、かつてはカリスマって呼ばれてたんだっけ…

「すまん。そういうつもりじゃ…」

「別に…気にしてないわよ。正論だと思うし…。じゃあ、なんでμ'sがカリスマとか伝説とかって呼ばれてるかというところ…スクールアイドル、ラブライブの礎を築いたのが彼女たち…というのが、まずひとつ。μ'sの活躍と努力のお陰で、ラブライブは今、アキバドームで開催されるまでになったの」

「なるほど…。それなら、少しは話がわかる」

「ふたつ目。キミも知ってるそのA—RISEが『今でも私たちのライバルは、μ's』…って公言してること」

「ふくん…チヨモでいうと『緑川 沙紀』みたいな感じ？」

「ちよつと違うかな。確かに沙紀はライバルのひとりだけど、同じチームで一緒にやってるし…」

「ああ、そうか…」

「どつちかかって言えば…バレーやってた時の『弘美』かな…。私がアタッカーからセッターになった時の…私の目標。…結局、彼女を越えることができないまま、私が違う道を歩むことになって…」

「…亡くなったんだっけ…その子…」

チヨモは黙って頷いた…。

その子は…将来、女子バレーボール日本代表にも選ばれようかという逸材だったらしい。

しかし進学した高校で膝を壊し、選手としてプレーすることを諦め。

それでもマネージャーとして、献身的にチームを支えていたのだが…。

自ら命を絶ってしまった。

なにが彼女をそこまで追い詰めたのか…

オレには知る由もない。

ただ、亡くなる直前、彼女はチヨモの所属チームのロッカールームを訪れ、こう言ったという…

「私は今でも、あなたのことをライバルだと思ってる。あなたが、私に追い付こうとして、必死に練習する姿が、私の心に火を点けた。あなたがいたから、今の私がいる…。例えば、今、あなたのやっつてることが違ってても、あなたの活躍する姿が、私を奮い立たせるの…。またいつか、一緒にバレーができたらいいな…」

それが、チヨモが聴いた最後の言葉。

オレたちが高3になったばかりのころだった…。

「A—RISEが、そのμ sを今でもライバル…というのは…つまり…その時を越えるような、熱い思いをぶつけられるような…そんな相手が今はいない…ってことか…」

「…たぶん…」

「想い出っつてのは、どんどん美化されていくからな…」

「そうね…」

チヨモは少し間を空けたあと、再び話し始めた。

「μ sがね、伝説って言われる理由が、もうひとつ。…実は、これが一番大きいと思うんだけど…」

「ん？」

『『実物』を見た人が、ほとんどいないの…』

「？」

「彼女たちは海外でのライブを成功させて、一夜にしてスターになった」

「あつ！思い出した…そうか…あの娘たちか…はい、はい…当時、人数が多くて、誰が誰だか区別がつかない…とか思ってたっけ…」

「彼女たちが、カリスマとか伝説とか…って呼ばれてる真の理由は『さあ！これから！』って時に活動を辞めちゃったから…」

「パツ咲いて、パツと散る…みたいな？」

「そう。μ sの名前が日本中…ううん、世界中に知れ渡った時、もう、彼女たちは解散していた…。だから、ほとんどの人たちが、生で観たことがないの」

『『UMA』みたいなもんか…』

「ユーマ？」

「未確認生物のこと。ネツシーとか雪男とか…要は『幻の存在』ってことだろ？」

「その例えが正しいかどうかは、わからないけど…」

「…で?…」

「…で?…つて?…」

チヨモは、オレの質問の意味を理解していないようだ。

「今まで、お前の口から μ 、 s のミユの字も聴いたことがなかったし…それなのに急に熱く語り始めるから」

「えっ?…」

「だから、その μ 、 s がどうかしたのか?…つて訊いている」

「…」

直接、顔は見えないが、きつとチヨモは冷ややかな目でオレを見ている。

長い付き合いだ、それくらいのことはわかる。

「なんだよ…」

「キミも勘が悪いね…」

「はあ?…」

「キミが助けた人は、その μ 、 s の元メンバーなの!」

「はい?…」

オレはチヨモの言葉に耳を疑った…。

くっくくく

言葉の重み

…事故から救った相手が…^μ sの元メンバー？…

「ビックリしたでしょ？」

「…確かに綺麗な人だな…とは思った。一瞬見ただけだったけど…なるほど、そういうことか…」

「ナンパでもしようとしたんじゃないの？」

「あのさあ…そんなことしてる場合じゃないでしょ？時期が時期だぜ！オリンピック前に、そんなことしてるヒマはない！つつうの」

「どうだか…」

「ひよつとして…妬いてる？」

「…バカじゃないの…」

否定も肯定もせず…。

オレはチョモの前でも、平気で「あの人、胸デケーな…」とか言ってます。もうタイプ。

そんな性格は熟知してるだろうから「彼女が美人だった」と言ったところで、チョモは何も動じない。

いや、内心、もしかしたら傷ついてるかも知れないが…今さら自分のキャラを変えられない…。

「それが全治6ヶ月の怪我人に対する言葉かね？」

「それだけ元気に喋れるんだし、同情する気なんて、まったく起きない…」

「冷たいねえ…」

…まあ、こうやって、普段通りに接してくれていることが、どれだけありがたいか…

「それにしても…スゲーな…オレ」

「なにが？」

「『伝説のスクールアイドル』を救ったんだろ…」

「そうね…」

「それならサインのひとつでも貰っておけばよかつたな」

「あとで貰えばいいんじゃない？」

「ん？」

「お見舞いに来る…って聴いてるわよ」

「あつ？ そうなの？」

…冗談のつもりだったんだが…

「キミが意識を失ってる間も、ずっと病院にはいて、無事を祈ってたみたい。だけど、おじさんとおばさんが、あまりに気の毒になって『今は面会謝絶だから…意識が戻ったら改めて…』って」

「まあな…いてもらっても治るわけじゃないしな」

「こらっ！ そういう言い方しないの！」

「ああ、わかってるよ…」

オレはチョモの言葉を遮った。

悪気があって言ったわけじゃない。

助けた相手が『そういう人だったのは想定外』だが、誰であっても見舞ってもらうつもりはなかった。

「どうかした？」

「いや…サイン云々はどうでもいいんだけど…見舞い、断ってくれないか…」

「私が？なんで？」

「責任…感じちやってるんじゃない？その人…」

「普通の感覚の持ち主なら…」

「…だよな…。オレは別に礼を言つて欲しくて、助けたわけじゃないし…。こんな姿見せちまったら…精神的にキツイじゃん」

「…うん…」

『「こう見えて」一応、オレも有名人だしさ。関わると色々面倒なことになる」

「否定はしないわ…」

「それに、今は『普通の大学生』なんだろう？」

「…うん…」

「元スクールアイドルとはいえ、こんなことで注目されても…迷惑なだけだろ」

「キミの言うことはわかるけど…」

「…けど？…」

「直接、お礼くらいは言いたいでしょ」

「いらぬよ！」

「りさとっ！」

よっぽどのがない限り、チョモはオレの名前を呼ばない。

…ということとは、よっぽどなことだったのだろう。

「なに!？」

「キミが逆の立場だったら？」

「ん？」

「お見舞断られて、お礼も言えなく…『はい、そうですか』って、納得できる？…人として、感謝の意を伝える…当然でしょ？それを固くな

に拒否するのはどうかと思うわ」

「…」

さすがチヨモ。

モデルであり、アーティストであり、『なでしこ』の代表メンバーでもある彼女と、サッカーしかしてこなかったオレとでは、同じ年にも関わらず、人生経験が違う。

チヨモの半生をドラマ化・映画化する話もあるみたいだが、内容が濃すぎて一筋縄ではいかないらしい。

そんなチヨモの言葉には、オレを黙らせるだけの説得力があった。

「でしよ?」

チヨモはベッドの横に立つと、そうやってオレの顔を覗きこむ。

ひよいと顔を近づければ、キスできそうな距離。

だが残念ながら、今のオレにはそれすら叶わない。

とにかく身動きがとれないのだ。

「ああ、そうだな…。ちよつと、先を考え過ぎた…」

「わかれば、よろしい」

「ただ、もし彼女が来るなら、お前もいてくれないか」

「私が?」

「二人きりになったら、恋におちない…とも限らない」

「勝手に…お・ち・れ…ばっ!」

チヨモは利き手の左で、オレの額にデコピンを放った。

チヨモがオレを嗜(たしな)める時の、得意技。

しかし、このシチュエーションでやってくるとは思わなかった!

脛椎損傷してる、オレ。
全身に電気が走った。

「ぬおっ！…オレ、怪我人だつて…」

「ごめん、ごめん！忘れてた…」

「そんなわけ、ねえだろ!!」

…と言いたかったが、ここはガマンした。

今、この状況下では、オレの全治が延びるも延びないも、チョモの左手の力加減ひとつに懸かっているのだから…。

くつづく

お客様は神様です

薬の影響もあるのだろう。

少し喋り疲れて、オレは知らない間にウトウトしていた。

夢見が悪く、ハツとして目を覚ます。

首が動かせないのも、周囲の様子がわからない。

「…チヨモ?…」

「ここにいるわよ…」

「あ、いるのか…」

「どうかした?」

「えっ…いや、別に不安になった!…とかじゃないから…」

「ふふふ…強がっちゃって。…やっぱり悔しいんじゃない?」

…しまった!…余計なことを言ったかな…

「…寝てていいわよ…」

「いや、それじゃ、お前がヒマだろ?」

「大丈夫よ、読書してるし…。ここ、静かだから、すぐ集中できるの」

「時間…平気か?」

「今日は一日空けてあるから」

「…悪いな…」

「今さら…」

そんな会話をしている最中…

病室のドアがノックされた。

オレの代わりに、チヨモが返事をするよ

「高野さんに、面会希望の方がいらしてますけど…」
と担当の看護師が告げた。

「どなたですか？」

事故後、面会したのは…両親、警察、サッカー関係者…そしてチヨモ。

まだ、チームメイトや友人の見舞いは断っている。

『男しくないない』 日常を送ってるんだ。

病室まで男に取り囲まれても、嬉しくも何ともない。

それに「頑張れよ」と励まされたところで、治りが早くなるわけでもないし、オレも相手も…どちらにしても気不味くなるだけ…。

せめて、車椅子に乗れるくらいになるまでは…ってとこだ。

そんな理由で、相手次第では、断るつもりでいた。

しかし、看護師は

『園田さん』とおっしゃる…女性の方です…」

と言った。

「あっ…」

オレとチヨモが同時に声をあげる。

…噂の彼女…

「どうするの？」

「どうも、こごも…そりゃあ、追いつけないでしょ…」

「じゃあ、OKするわよ」

「ああ…」

「どうぞ…」

チヨモが答える。

「失礼します…」

とても落ち着いた声が聴こえた。

そして、そのあとに続く言葉は

「えっ!?…あ…『つばきさん?』…」
だった。

チヨモには、3つの名前がある。

本名と…モデル時代の名前と…今の名前。

彼女が呼んだのは、その最後。

ちなみにチヨモという呼び名は、このどれにも入らない。

恐らく、全世界でそう呼んでいるのはオレだけ。

まあ、それはまたどこかで、機会があれば話すでしょう…。

「あっ！私のことは、気にしないでください。この人の『身内』みたいな者ですから…」

『チヨモ』こと『つばき』…は『園田さん』にそう告げた。

「は、はい…」

「どうぞ、こちらへ。まだ首が動かなくて、横から覗きこまなきや、顔が見えないみたいなの」

チヨモが状況を説明すると、彼女は静かに、オレのそばに来た。

「改めまして『園田 海未』と申します…。頭上から、失礼いたします。

この度は助けて頂き…誠にありがとうございます…」

彼女が深々と頭を下げる。

思った通り、綺麗な人だった。

だが、見惚れてる場合じゃない。

…この距離はヤバイ…

「…顔、近いです…」

オレのベッドの真横に立ち、身体をくの字に折り曲げれば、当然そうなる。

「…す、すみません！」

彼女は顔を真っ赤にして、直立不動になった。

「そのまま、チューされちゃうのかと…」

「！…ちゅ…ちゅ…ちゅう…です…か？…」

彼女はビツクリした顔でオレを見る。

「ごらっ！りさと！初対面の人にそんなこと言わない！」

「あっ…すみません…つい、癖で…」

「は、はあ…」

…おい、おい…どんな癖だよ！…

「園田さん…でしたっけ？」

「は、はい…」

「ごめんない…突然、突き飛ばしたりして」

「えっ？そんな、こちらこそ…」

「かすり傷って聞いたですけど、どこを怪我したんですか？」

「はい？…あ、膝と肘を…でも、もう治りました」

「そうですか…あ、いや、顔じゃなくてよかったです…」

「えっ…」

「その綺麗な顔に傷付けたとあっちゃや、あなたのファンに刺されかねないですからね…」

これは本心だ…。

サッカーでもよくあること。

例えば、試合中、接触プレーで相手が重症を負ってしまったとする。そうすると、故意でなくても、怪我を負わせてしまった選手は、一生ファン…サポーターから恨まれることになる。

ファンやサポーターあつてのオレたち。

気持ちはわかるけど…何事も節度は大事だ。

恨む、恨まない。

許す、許さない。

それは当人同士が、決めること。

その昔『お客様は神様です』なんて言葉があつたらしいが、オレから言わせれば、ルールやマナーが守れないヤツは客でもなんでもない。

…。　　こういうヤツらを野放しにするから、クレーマーが増えるんだよ

…と、話がまた逸れた。

すぐ脱線するのはオレの悪いクセだ。

「まあ、なんにせよ、無事でよかつたです」

「その節はなんと申し上げてよいやら…。高野さんは、充分に逃げられたのに…私のせいでこんなことに…。私の反応が早ければ…」

「ああ、それは違います。あの状況で、瞬時に動ける人はいないですよ」

「でも…」

「とにかく、僕のごときは気になさらずに」

「そんなわけにはいきません！」

「園田さん?…」

「ひとりの人生の…一生を棒に振るような出来事。…その一因を作ったのは、間違いなく私です。ですから、この責任は…」

「園田さん…」

「はい?」

「あなたは大きな勘違いをしています…」

「えっ?」

「僕が恨むべき相手は、あなたじゃない。車を運転していた、あの『ガキ』です。これは…僕とその子との間の話であって、基本的にあなたは関係ありません」

「関係ないことは…」

「いや、関係ないです!」

オレの声は、少しだけ強くなってしまった。

すかさず

「りさとっ!」

とチヨモ。

「あ…失礼…」

「いえ…」

「…あなたは車に接触もしていませんし、幸い、大きな怪我もありませんでした。この件については、僕ひとりが巻き込まれた…それでいい」

「高野さん…」

「実はさ、僕、あなたのことをナンパするつもりで、声を掛けようとしてたところだったんです」

「えっ?」

「だから、偶然じゃないんですよ…隣にいたのは。それで、あの事故でしよう…いいとこ見せよう!…って思ったんですよ…で、僕も上手く避け

られてれば、今頃、違う展開になっていたんでしようけど…見事にしくじりました」

「そうね。バカなのよ、この人…」

チヨモが、オレの意を汲み、同調する。

「つばささん!？」

彼女は突然の乱入に、驚いたように声をあげた。

「この人が勝手にやったことだから、気に病まないで」

「そういうことです!」

「そう言われましても…」

「大丈夫。確かに今はこんな状態だけど、治らない怪我じゃないですから。復帰してプレーが出来るようになったら、応援して下さい」

「高野さん…」

「僕は…むしろ、あなたの方が心配です」

「私が…ですか…」

「はい…さっきの逆パターン」

「えっ?」

「僕は今…意識的に情報を遮断してるので、世間がどうなってるか、知らないんです。そこにいるチヨモ…じゃなかった…つばさからも、話は聴いていないので」

「そうなのですか…」

「まさかと思うますけど…あなた、叩かれたりしてないですよね…」

「えっ!?!…そ、そんなことはありません」

彼女が返答するのに、一瞬、間があった。

…正直な人だ…

その反応で、オレは懸念していたことが、早くも始まっていることを悟った…。

~
~
~
~
~
~
~

交差点…横断歩道…

「園田さん…」

「はい…」

「…あなたを突き飛ばしたことは、間違つてなかった…と思つてます。…自分だけ逃げていて、あなたが亡くなるようなことになっていたら…僕は一生後悔するだろうから」

「…感謝致します…」

「唯一の誤算は…僕がしくじったことですかね！もう少し上手くいくはずだったんですけど…スタントマンのようにはいきませんでした」
「いえ、あの瞬間、高野さんは…自らジャンプして直撃を避けてらっしゃいました」

「へえ…」

「そうでなければ、そのまま車に挟まれていたかと…」

「そうですか…イケてました？」

「はい、素敵でした！」

…サッカー以外でそんな言葉をもたらしたことがない…

…この状況下で言われたら…勘違いするだろ…

…やっぱり、チョモがいてくれて、よかった…

「その上で…ですが…」

「はい…」

「僕が『一般人じゃなかった』ことで、あなたに迷惑が掛かってしまうことを悔いてます…」

「どういうことでしょうか？…」

「あなたが、僕のファンに『攻撃』されないか…つてことです…」

「！」

「その表情を見ると…既に実害あり…って感じですね？」

「い、いえ、そんなことはありませんー！」

「園田さん、嘘はいけませんよ。そんなこと、ちよつとネットを見ればわかることですから」

「ですが…本当にたいしたことでは…」

彼女は強く否定した。

「チヨモ…」

「なあに？」

「正直に答えろ」

「ん？」

「今回の事故について、どういう風に報道されてる？概要を教えてください…」

「…わかったわ…」

チヨモはそう返事をする、スマホで検索して、記事を読み上げた。

《サッカー選手でオリンピック代表の高野 梨里選手が、車にはねられ、意識不明の重体です》

《○月×日、午後9時頃、都内の交差点で、16歳の少年が運転していた乗用車が、信号を無視して侵入し、右から来た大型のトラックと衝突。はずみで歩道に乗り上げ、植え込みにぶつかって止まりました》
《この事故で乗用車の助手席にいた、同じく16歳の少女が頭や胸を強く打つなどして死亡。運転していた少年は、足の骨を折るなどしましたが、命に別状はないとのこと。トラックの運転手に怪我はありませんでした》

《車が歩道に乗り上げた際、信号待ちをしていた男性1人を巻き込んだもようで、意識不明の重体です。男性は男子サッカー オリンピック代表の高野 梨里さん（20）であるとのことですが、現在、警察が身元の確認を急いでおります》

《目撃者の話では、高野さんとみられる男性は、同じく信号待ちをして

いた女性をかばって、はねられたとのことだ…》

「サンキュー…：わかった。それが第一報の記事？」

「うん…」

それを受けて

「さつきも言いましたけど…：あれ以降、警察から聞いた以外の情報は遮断してたので…」

とオレは彼女に向かって説明した。

「チョモ、もうひとつ教えてくれ…：今の記事には、園田さんの名前は出てこないけど…：その後、発表があった？」

「…私も全部、把握してるわけじゃないけど…：たぶんオフィシャルにはなかったと思う…。だけど…」

「どこからか名前が漏れた…」

「…うん…」

「誰がリークしたか知らないけど、まったく余計なことをしてくれるね…」

…あくまでも、オレの私見だけか…

…この国は『加害者』より『被害者の人権』の方が軽く扱われている気がする…

「僕は警察から、あなたの名前を聴きました。もちろん僕にはその権利はあると思うし、当然のことだと思ってます。ですが、かすり傷で済んだあなたの名前が、表に出ること…：それはまったく違うと思つてます」

「そうね…：私もそう思うわ」

「つばささん？」

「私も『こつちの世界』にいる人間だから、そういうことは実感としてあるの。苦しめられたこともあったし」

…チョモのこれまでは、決して順風満帆ではない…

…彼女も様々な苦境を乗り越えてきている…
…オレが知ってるだけでも、誹謗・中傷の類いは数多くあった…

「想像するに…きつと、僕も最初は被害者として同情されていたに違いない。だけど日が経つにつれて『なぜ避けられなかったのか』『そもそも、そんな時間に出歩いているのが悪い』などと、言われてるんじゃないかと…」

「そんなこと…理不尽です!!」

「理不尽よね」

チヨモが相槌を打つ。

「さらに『あなたを助けたのが原因だ』となると、そのとぼっちりが、あなたに向かいます」

「…」

「恐らく『そこにいた女が悪い』…という意見が出てくる…いや、もう出ているのでありませんか…」

「…私は…大丈夫です!」

彼女はひと呼吸置いて、そう答えた。

「園田さん…」

「ご心配頂き、ありがとうございます。ですが、私は大丈夫です」

「あなたは、今は『普通の女子大生』だと聴いています。僕たちとは立場が違う。僕からは、極力そっちに被害が及ばないように努力しますの
で…」

「はい…いや、いいえ…そんなご迷惑は…」

「忘れちゃいけないのは、あなたに『落ち度はなにもない!』ということ
とです」

「はい…」

「どうか、気持ちを強く持ってください…」

「あ、ありがとうございます…」

「何かあったら、私を頼ってね」

「つばささん？」

「この人よりは頼りになると思うわよ」

「はい…ありがとうございます…。あっ…あの…お渡しするタイミングを失ってしまったのですが…」

「？」

「私の友人が和菓子屋を営んでおりまして…」

「あ、それはわざわざ、ご丁寧に…。りさと、お菓子を頂いたわよ」

チヨモが紙袋を上に掲げて、オレに見せた。

「まだ高野さんは、召し上がるのは難しいかも知れませんが、まずは皆様で…」

『穂むら』のお饅頭ね」

「ご存知なのですか!？」

「μ、sのリーダーのご実家でしょ？」

「はい」

「チヨモ…なにげに詳しいな…」

「キミが疎すぎるのよ」

「それはそうだが…」

「私はまだ、音楽業界に片足突っ込んでるし…、リアルタイムで注目してたから」

「こ、光栄です…」

「こつちの世界に戻ってくるなら、それも相談に乗るわよ」

「はい…。では、あまり長居しても、お身体に障るかと存じますので、本日はこれにて失礼させて頂きます…」

「ああ…わざわざありがとうございます」

「いえ、こちらこそ…。また、様子をみてお伺い致します…。では…」

チヨモによると、彼女は何度も何度も頭を下げ、病室をあとにしていったという…。

~^~^~

穂むらの跡取り

「ただいま戻りました」

「海未ちゃん、お帰り！」

「お疲れ〜」

園田海未は、高野梨里を見舞ったあと『穂むら』へと立ち寄った。穂むらは：言わずと知れた『高坂穂乃果』の実家である。

海未はここに住んでいる訳ではない。

故に「ただいま戻りました」という表現は、正確ではない。

だが自宅を出て、ここに寄ってから病院に行った：：という道筋を考えれば、確かにそういう言葉になる。

だから穂乃果も「お帰り！」と返事をしたのだった。

μ'sが、解散して4年余りが過ぎた。

メンバーはそれぞれの道を歩み、全員が一同に会することは、多くない。

それでも、穂乃果が家にいるときは、なにかしら理由を付けて、みんなここにくる。

穂乃果がいない時は、隣の部屋：：雪穂の部屋で寛ぐメンバーさえいる。

彼女たちにとって、自宅以上にリラックスできる場所。

それが穂むらの2階であった。

この日は部屋の主以外に、もうひとりいた。

『矢澤にっ』。

ここは高校を卒業後、調理師の専門学校に進んだ。

そして在学中に調理師免許や、管理栄養士など数種類の資格を取得する。

にっこ曰く「芸能活動をする為の『付加価値』」とのこと。

「色々なスキルを身に付けておけば、どこかしらで、なんかしらに引っ掛かるでしょー！」

加えて：『セカンドキャリア』：将来を見据えて『手に職』を付けておくことが必要：そういう判断もあったようだ。

今は

「二十歳を過ぎて『にっこにっこにっ』が通じるほど、アイドルの世界は甘くない！」

…とのことで、劇団に入り、ミュージカル俳優を目指して稽古に励んでいる。

芸名は『小庭 沙弥』という。

近々、端役ではあるが『初めてのステージ』が決まったと、メンバーに告げていた。

彼女は他のメンバーに比べて、わりと頻繁に穂むらを訪れている。

劇団の活動と平行して、穂乃果の父から、和菓子作りのイロハを学んでいるのである。

穂乃果の母は

「どっちが跡取りなのかしら」

と、自分の娘に向かって、よく嘆いているらしい。

実はこの日も、その勉強をしに、ここに来ており…穂乃果と一緒に

海未の帰りを待っていたのだった。

「どうだった？」

帰ってきた海未に、穂乃果が訊いた。

海未はどのような顔をして見舞いに行ったらよいか、悩んでいた。

高野梨里の意識が戻るまでは、ただひたすら、彼の回復を祈っていた。

食事も喉に通らず、眠ることすらできないでいた。

自分が原因で、相手は大怪我をしてしまった。

それも、オリンピックを目前に控えたサッカー選手。

海未の性格上、自分を追い詰めてしまうのは、仕方のないことだった。

だからと言って、他のメンバーも海未に掛ける言葉がない。

彼女たちもまた、意識が戻るのを祈ることしかできないでいた。

その想いが通じたのか、梨里の両親から、吉報が届く。

事故から3日目のことだった。

しかし、喜びも束の間…新たな悩みが襲ってきた。

それは梨里に対して、どのように接したらよいのか…ということ。

助けてもらったことに関しては、誠心誠意、感謝の意を伝える…それは、問題ない。

しかし、彼は受け入れてくれるだろうか。

不可抗力とはいえ、私がそこにいなければ、こんなことにはならなかった…。

なぜ、あの時、すぐに避けられなかったのだろうか…という、自戒の念が、海未を苦しめていた。

「怪我については全治6ヶ月と聴いた。」

他の人ならともかく、自分の口からは安易に「頑張つて治してください」などとは言えない。

それでも、穂乃果に

「行くしかないよ。行つて、正直に、今の気持ちを伝えよう！」と励まされ、ようやく出掛ける決意をしたのだった。

「…お見舞いに行つたつもりでしたが…逆に勇気付けられて帰ってきました」

「ん？」

「高野さん、私を責めるようなことは、一切しませんでした」

「そりゃあ、そうよ。海未は悪くないもの」

「…はい。ですが、普通は面会拒否をされてもおかしくない状況の中、嫌な顔もせず…ときどき冗談を交えて、私に負担を掛けまいと、明るく振る舞つて頂き…」

「へえ…出来た人だねえ」

「はい、とても優しい方でした。怪我したことで、オリンピックに出られないこと…諸々、相当ショックがあるハズなのです。しかし、逆に私の今後のことを心配して下さい…」

「それって…」

穂乃果もにこも、なにかを悟ったようだ。

ふたりとも、海未の名前がネットを中心に広まっているのを知っている。

梨里が指摘した通り、そのほとんどがネガティブなカキコミだ。

…

>お前がそこにいなければ、梨里さんはあんなことにはならなかったんだよ！

>隣にいた…って、付き合ってるのかよ！

>梨里さんを利用した売名行為か!?

>どう責任取るんだよ!!

…

『強い気持ちを持つてほしい』…そう言つてくださいました」

「うん、海未ちゃん、その通り！だって海未ちゃんは悪くないんだもん」

「そう、そう！気にしない、気にしない！『人の噂も四十九日』って言うしね」

「にこ、それを言うなら『七十五日』です」

「…うつ…れ、冷静じゃない…。まあ、今の世の中、匿名をいいことに、あることないこと、好き勝手に書くから…気にしてたらキリがないわよ」

にこは『かつての自分』を棚にあげ、海未にそう言った。

「はい。とにかく、ふたりとも、とても良い方でした」

「ふたりとも?」

「もうひとりって誰よ?」

「あら、言いませんでしたっけ?高野さんの病室に、つばささんがいたんです」

「つばさ…って、A—RISEの『綺羅ツバサ』?」

「いえ…『シルフィード』の『夢野つばさ』さんです」

「え…っ!!」

穂乃果とにこは、揃って大きな声で驚いた…。

~ ~ ~ ~ ~

明かされた真実

『ユメノトビラ』?」

『夢野つばさ』よ!!」

穂乃果のボケに、にこが素早く反応した。

「し、知っているよ…そんな、怖い顔で見なくても…」

「海未!なんで夢野つばさが、そこにいたのよ」

「なんで…と言われましても…。『身内みたいな者だから、気にしないで』と仰ってましたが…」

「身内なわけないじゃない!これは男と女の関係に違いはないわ!スクープよ、スクープ!ツーショットの写真とかないの?高く売れるわよ!」

「たはは…にこちゃん…」

「にこ、不謹慎ですよ!」

「…冗談よ!冗談!…するわけないじゃない」

「だよねえ…」

「アタシだつて、この世界に片足を踏み入れた身、それくらいの分別は付くわよ」

「それなら、良いのですが」

「でも、ふたりが深い付き合いであるのは間違いなさそうね」

「そうですね。…その…男女の関係…かどうかは知りませんが、親しい仲ではあると思います」

男女の関係…と言った瞬間、海未の顔が赤くなった。

相変わらず、その方面に関しては、成長していないようだ。

「じやなきや、病室にはいないよね!」

「ええ…。それに高野さんはつばささんのこと、あだ名で呼んでらっしやいましたし」

「へえ…なんて呼んでたの?」

「確か…『チョモ』と呼ばれてたかと…」

「『チヨモ』？」

穂乃果とにこは、ふたりして、同時に首を傾げた。

「さすがのにこちゃんでも、それは知らないのか」

「もしかしたら、花陽なら知ってるかもしれないけど」

「わざわざ、今、訊くことではありませんね」

「あの子も忙しいから…」

「はい…。あ、実はちよつと嬉しいことがありまして…」

「？」

「つばささんは私たちのことをご存知でした。それもμ'sをリアルタイムで見えてくれたようで…。かなり、詳しい感じでした。土産で持参した『穂むらのお饅頭』を見て『穂乃果の実家』だと、すぐわかったくらいです」

「へえ…：やつぱμ'sって凄いグループだったんだね。現役のアーティストにまで注目されていたなんて」

「そうよ！最強の9人よ！」

「にこ…」

「アタシの中で、μ'sを越えるアイドルは、未だにいないもの…」

にこは常々、今の世代はビジュアルもテクニクもレベルは上がっているけど『熱さ』が足りない…：とこぼしている。

それは海未も感じていた。

決して自惚れているわけではないが、あの時の自分達は、新しいものを切り拓いていく、冒険心とかチャレンジスピリッツのような…：そんな熱量があった。

今のスクールアイドルを見ると、その辺りが足りない…：と、確かに思う。

海未は黙って頷き、にこに同意した。

「…夢野つばさ…って、私たちと同じ年じゃなかった？」

ふと思いついたかのように、穂乃果が呟く。

「あつ、そうですね…。長く活躍されてるので、つつい、年上かと思ってしまうが…」

「中学の時だよ、モデルやってたの。とても同じ年には見えなかったよねえ」

「はい、大人びてましたね」

「だから余計に年上っぽく、感じるんじゃない？」

「にこちゃんは、相変わらず見た目、中学生だけど」

「ぬわんですって!」

「うそ、うそ。小学生でした」

「それならいいわ…ってなんでよ!？」

にこのノリツツコミを見て、海未は思わず吹き出した。

何年立っても、にこの役目は変わらない。

こんな雰囲気味わいたくて、メンバーは穂乃果の部屋に集まる。

「にこちゃんはどっち派だった? 『AYA派』? 『さくら派』?」

「当然、さくら派よ。AYAのファッションは、絵里みたいなスタイルじゃないと似合わないもの」

「穂乃果もさくら派だったんだけどね…。でも、いつかは、ああいう格好いい服を着てみたいな…って憧れてたんだ。海未ちゃんはAYA派だったよね?」

「強いて言えば…です。私は可愛い服など似合いませんから…消去法でそっちが残っただけです」

「それが数年後、ミニスカートでステージに立つんだから、人生わからないもんだね…」

「私は、あなたに巻き込まれたのですが…」

「あはは…そうでした！」

穂乃果は頭を掻いた。

「モデル時代のイメージだと、ちょっと冷たい感じだった…と思ったのですが…実際は、とても爽やかな人でした」

「そうね。バラエティ番組とかに出るタイプじゃないし、わりとプライベートな部分は、謎に包まれてるわね」

「これまで、かなり苦労があったようなことも仰ってましたが」

「そりやそうでしょ。なんの努力もせずに生き残れるほど、芸能会は甘くないわよ」

「はい…」

そう返事をしたあと、しばらく海未は喋らなかつた。

「海未ちゃん？」

「えっ？あ…」

「どうかした」

「いえ、別に…」

「なにか悩みがあるなら言いなさいよ？」

「はい…ちよつと今日一日を思い返していたのですが…」

「ん？」

「意を決して病室に入ったら、思いもよらない人がいて…その人が夢野つばささんで…ふたりとも本当に優しい方で…逆に励まされて…ふわつとしたまま帰ってきてしまった感じで…本当にこれで良かったのかと…」

「かと言つて、海未がウジウジしてても…高野さん…だっけ？は、良くならないんじゃない？」

「そうだよ！海未ちゃんが、元気でいること！それが大事だよ」

「にこ…穂乃果…」

「うん！」

穂乃果は大きく頷いた。

「そういえば、さつき穂乃果が『ユメノトビラ』と言いましたが…実はあれ…元々は『ユメノツバサ』だったんです！」

「えっ!？」

「衝撃発言!」

「そうなんです。途中まで『ツバサ』だったんです…。当時のノートを見ればわかると思いますが…そのことをご本人伝えるのを忘れてました」

「ユメノツバサだったら、まるパクリでしょ。そのまま出さなくて、よかったわ」

「いや、にこちゃん、その前に誰かが気付くでしょ」

「そうだけどさ…。それに当時、アタシたちにとって『ツバサ』と言えば『綺羅ツバサ』でしょ? わざわざ、ライバルのメンバーの名前をタイトルにしなくても…」

「はい。それに気付いて、変更したのですが…」

「これも、なにかの縁なんだね…きつと。あとで希ちゃんに訊いてみようか」

「今、希は日本にいないわよ!…確か…ペルーじゃなかったかしら」

「ああ、そうだ! えつと…マシユピシユ遺跡?…」

「マチユピチユです!」

「よく言えるね…」

「これくらい、言えて当然です!!」

それを見たにこは、ニヤニヤと笑った。

「なんですか!？」

「やっと、アンタらしくなってきたな…って思ってたさ」

「!」

「なるほど…やっぱ海未ちゃんは、穂乃果がいないとダメなんだね…」
「調子に乗らないでください！」

海未はそういつつも、ふたりと会話をしているうちに、気分が楽
になっていくのを感じていた…。

くっくくく

オレとチヨモの関係…。

ありきたりな言葉を使うなら『友達以上、恋人未満』。

しかし、オレの両親も公認の付き合いをしていることを踏まえれば…やや後者寄り…。

チヨモとは小学生からの知り合いだが、幼馴染みというわけではない。

まともに付き合い始めたのは、高校生になってから。かれこれ4年が過ぎたことになる。

きつかけは、サッカー。

オレとチヨモは師弟関係にある。

当然、オレが師匠で、チヨモが弟子だ。

チヨモの人生は波瀾万丈。

前にも言ったが、ドラマ化・映画化の話があるほど、起伏に満ちていて面白い。

「面白い」と言うと、当の本人は怒るけど。

オレもすべてを知ってるわけじゃないが、彼女のこれまでの人生を、簡単に紹介しよう。

チヨモ…。

本名『藤 綾乃』。

父は元陸上選手で、スポーツ用品のメーカーに勤務。
母は元モデルで、今は女性ファッション誌の編集長。

小学校3年の時に『近所の友達に誘われた』のと『一番近くにあったスポーツクラブ』という理由でバレーボールを始める。

だが、その1年後…

父親が、飲酒運転のトラックにはねられ事故死…。

以降、母子家庭となったが、トラックを所有していた大手運送会社から慰謝料が支払われ、金銭的にはあまり苦労せずに育ったらしい。

『オレとは違って』チヨモは『両親のDNAを良いところ取り』している。

入ったバレーボールクラブでは、高い身長、ズバ抜けた運動神経（特にジャンプ力）、さらには『左利き』という特徴を活かし、5年生から『ウイングスパイカー／ライト』として活躍。

6年生の時には『オポジット（守備免除のセッター対角／スーパーエース。女子の場合はユニバーサルともいう）』としてチームを引っ張り、県大会準優勝の原動力となった。

自身も県のベスト6に選ばれている。

オレは5、6年とチヨモと同じクラスだった。

サッカーとバレーボール…

ともに競技は違えど、同じように『エース』であった為、自分と言うのもなんだが、オレたちは学校じゃ、ヒーロー、ヒロイン的な存在だった。

しかし：

オレとチョモとの間には、圧倒的な差があった。どんなに努力しても越えられない壁。

それが身長…。

当時のオレは138cm。

チョモは確か…167cmだった…と記憶している。

この30cmの差は大きい。

常にか上から見られている感覚。

バカにされている感じ。

自然とオレは、チョモをライバル視するようになる。

今から考えれば、メチャクチャ幼稚だな…と思うけど。

当時のチョモは短髪であった為、どちらかという中性的で、女子から見れば『格好いい』という形容詞で呼ばれていた。

イメージとしては『宝塚の男役』。

性格は明るく、勉強もできた。

クラスを纏めるリーダーでもあった。

それ故、女子から絶大な人気を誇っていた（その人気を妬んだ一部の女子から、陰湿なイジメを受けていたらしいが…なんとか、そこは乗り切った…と言っていた…）。

男子という生き物は『可愛い子』『気になる子』に、ついチョツカイを出してしまうもの。

それはいつの時代も同じだと思うが、その頃のオレたちもそうだった。

ことあるごとに逆らっては…しかし反撃され、返り討ちを喰らっていた。

身体の小さなオレたちからすれば、ヤツは、まさに『巨人』。

可愛いなんて思ったことは、一度もない。

ただし、心の奥深くで、どこか『憧れていた』部分があったのかも知れない。

あくまでも、今、思えば…だが。

女子からヤツは『藤さん』と呼ばれていた。

誰も『藤』とか『綾乃』とか、呼び捨てにはしていなかった。

そう呼ばせないオーラがあった。

逆に言えば、対等な立場の友人がいなかったのかも知れない。

とにかく、なにもかも突出した存在。

頭も良く、明るくて、リーダーシップもあって、体格でもかなわない（おれ自身は、運動神経だけは互角だと思っていたが）。

オレたちの…そんなヤツへの、せめてもの抵抗が『チョモ』という呼び名だった。

「藤さん？ いやいや、そのデカさは『富士山』じゃなくて『チョモランマ』だろ！」

チヨモランマとは、もちろん世界一高い山：『エベレスト』のことである。

エベレストと呼ばなかったのは、そっちの方が『通』だと思ったから。

ガキの頃の発想なんて、そんなもんでしょ？

そして、この時に付けた呼び名を、恥ずかしながら、オレは今も使っているのだった…。

くつづく

チヨモは小学校を卒業すると、都内のバレーボール強豪校（私立）に、特待生として進学する。

そして、ここからヤツの…ジェットコースターのような歴史が幕をあける。

意気揚々と乗り込だチヨモだったが…入った中学では『チヨモランマ』ではなかった。

『富士山』でもなかった。

そう、彼女より高い身長部の部員は何人もいたのだ。

小学生の女子で167cmは、確かに大きい。

しかし、ことバレーボールの世界においては、それでは余りに小さすぎた。

一昔前なら、それくらいの身長で戦う日本人アタッカーはいた。

柔よく剛を征す…高さとパワーが足りない分、スピードと技で立ち向かっていた。

しかし…

今や女子でも180cm、190cmは当たり前の世界。

ややもすると2mオーバーの選手さえいる。

日本が本気で世界と戦うのであれば、選手のサイズアップは必須であった。

そこでチヨモは入学早々、セッターへの転向を命ぜられる。

だが、アタッカーとして勝負したいチヨモは、納得しない。
「なんとコーチに直談判へと打って出た。」

「この身長で通用するかしらないか…テストもしないで、なにがわかるんですか!!」

この負けん気の強さが、今日までヤツを支えてきたと言っている。
コーチはその『気概』については、認めようだ。

だが…

「スーパーエースであればあるほど、サーブで狙われる。それ故、レセプション（サーブレシーブ）が下手な選手は、世界で通用しない。だから、今はきっちり守備力を高めろ」

そう説得された。

結局

「このあと、背が伸びたら、アタッカーへの再コンバートを検討してやる」

と言われ、その条件を呑むことになった。

それからの1年間は、ひたすらレシーブとトスアップの練習に明け暮れた。

そのチヨモには目標とする…いや、越えなければならぬ、同い年の人物がいた。

名を『山下 弘美』という。

彼女は、高い守備力と『正確無比なトスワーク』で、将来、全日本入りを囑望されている、ジュニアの有望株だった。

だが、残念なこと…

彼女は身長が、チヨモよりも『10cm近く低かった』。

ある日、彼女は言った。

「あなたはいいわよ…一時でもアタツカーだったんだから。私なんて、この身長で、スパイクを打つことさえ許されなかったの。だから私の生きる道はここしかなかった！…いい？『にわかセッター』のあなたに、このポジションは渡さない！渡してたまるもんですか！」

この言葉を聴いて、チヨモは自分恥じた。

体格で劣る彼女にとって、自分より背が高く、同等レベルの技術を持つ選手が現れたとすれば…それは即ち…『死』を意味する…。

それくらいの覚悟でプレーをしている。

自分はどうか？

目の前にある与えられた課題を、死ぬ気でクリアしなければならぬ。

その覚悟はあるのか？

そう、まずはこの人に勝たないことには、アタツカーへの挑戦なんて、夢のまた夢。

いつか絶対に追い付き、追い越す!!

小学生時代は、どちらかという守備は免除されていた為、レシーブは苦手だったが、そう決意してからは「地獄の日々を送った」と、チヨモはのちに述べている。

それから1年…。

猛練習の甲斐あって、チョモの技術は確実に進歩していた。

紅白戦では、控え組のセッターとして、コートに立つことも増え…身長は1cmも伸びなかったが…ジャンプ力は健在で、ブロックだったり『左利きの利点を活かしたツーアタック』だったり、攻撃において、弘美とは違う面をアピールすることもできるようになった。

トスワークについては…セッター一筋で生きてきた弘美にはかわない。

しかし、戦況を見て試合を組み立ていく面白さ…のようなものが、少しずつだが、わかり始めてきた。

この経験がのちのち、サッカーをプレーするのに活かされることになる。

セッターに対して、自分の新たな可能性が見えてきた、中学1年の3学期だった…。

くつづく

中学2年生に進級する前の春休み。

部活の完全オフ日を利用し『チョモ』こと：『藤綾乃』は南青山に来ていた。

(一般的な女子と比べて)上背がある綾乃は『サイズが合わないから』との理由で、ガーリーなファッションを避けてきた。

そんなこともあり、中学に入ってから、1年365日、ほぼ毎日ジャージで過ごしている。

綾乃の母：『久美子』にとって、娘のそれは見るに耐えられなかったらしい。

「たまにはオシャレも楽しまなきゃ！それに今の時代、アスリートだって、ヴィジュアルは大事よ！」

と、半ば強引に引っ張ってきた。

この界限に自分の職場がある為、どの店に、どんな服があるか、久美子は熟知している。

南青山から表参道にかけて、数件の店を段取り良く廻り、あつと言う間に、荷物がいっぱいになった。

さすが元モデルで、現ファッション誌の編集長：母が選んだ服に、文句の付けようがない。

…でも、着るヒマがないよ…

両手に紙袋を持った綾乃は、母に感謝しつつも、心の中でそう呟い

ていた。

母の久美子は「ちよつと、銀行に用がある」と、その場を離れた。綾乃は歩道の脇に置かれたベンチに座り、ジェラートを食べながら、戻るのを待つ。

その時…

「写真撮らせてもらってもいいですか？」

と綾乃は声を掛けられた。

見ると、そこには2人の男性。

絵に描いたような、デコボココンビ。

小柄で小太りの中年はカメラを、長身で細身の若者は、大きな板を持っている。

綾乃はそれが『レフ板』だと、すぐにわかった。

…撮影？…

「原宿で仕事が終わって帰ろうとしたら、綺麗な娘がいるな…って」

「はい、わかるんですよね…そういうの」

「どう？1枚、撮らせてもらっていい？」

綾乃は返答に困った。

そもそも『格好いい』と言われたことはあつても『綺麗』などと言われたことがない。

だから、これは詐欺なんじゃないかと疑った。

もしくは『ドッキリ』なのかも知れない。

とにかく、この場から立ち去らねば…と思っているところに、久美子が帰ってきた。

そして、2人に言う。

『シゲさん』『マツくん』ウチの娘をナンパしないでくれる?」

「久実ちゃん!」

「藤さん?」

なんと2人は、久美子と同じ出版社の同僚だった。

久美子のファッション誌がアラサーをターゲットにしているのに対し、2人は『J-BEAT』というローティーン向けの雑誌の、カメランとアシスタントだ。

「久実ちゃんの娘さんか!…そりゃあ、綺麗なハズだ」

「さすがに服のセンスが違いますね」

「ああ、職業柄、遠くからでもすぐにわかる」

「それにしても…藤さんに、こんな大きい子供がいたんですね? 知らなかったです」

「大きい…って、身長のことかしら? 綾乃はこれでも、中2よ!」

その言葉に「とてもそうは見えない!」と驚く2人。

そして「折角だから」と久美子の勧めもあって『記念撮影』をした。

突然始まった撮影会に、たちまち辺りに人だかりができる。

「誰?」

「モデル?」

…いや、違うんだけど…

綾乃は恥ずかしさと緊張のあまり「笑って」というリクエストに応えられず、逆に少し怒ったような表情で、カメラに収まった。

しかし、これが一週間後、大問題になる…。

春休みが終わり、始業式。

綾乃の学年は4クラスある。
登校してから、掲示板に貼り出された名簿を見た。
つまりクラス替え。

その割り振りに、一喜一憂している生徒たち。

半数以上は、知らない名前。

綾乃は人見知りではないが、かと言って、初対面の人に馴れ馴れしく話掛けるタイプでもない。

それなりの緊張感を持って、教室に入る。

その時…先に中にいたクラスメイト数人から、突き刺さるような視線を感じた。

「？」

顔は見たことあるが、会話したことはない。

しかし、単なる初対面だから…という理由だけではない…鋭い視線。

おはよう…と挨拶する綾乃。

おはよう…と返答はあった。

それ以上の進展はなし。

綾乃はすぐに、クラスメイトとなったバレー部の仲間と合流した為、それ以上の会話しなかったが：

彼女たちは、その後もチラチラと様子を窺っているようだった。

…なんか、感じ悪いなあ…

朝からブルーになる綾乃。

「どうかした？」

「えっ？べ、別に…」

「それならいいけど…。今日から新入部員が入ってくるわよ！」

「そうだね！」

「負けないようにしないと！」

「よし！頑張るぞ！」

気合を入れ直し、綾乃は半日を終える。

このあとは、昼食を摂り、部活だ。

仲間とその準備をしていると：朝のグループのひとりだが、綾乃に近付いてきた。

「あなた…確か、藤…綾乃さんだったよね？」

「そうだけど…」

「やっぱりそうだ！」

「なにか…」

「ちよつと来て！」

「えっ？」

彼女は綾乃の腕を掴むと、グループがいる自分の席と引っ張って行く。

「えっ？えっ？なに？」

「これ、あなたよね？」

彼女が自分のカバンから取り出し、机の上に置いたのは、一冊の雑誌。

タイトルは『J—BEAT』だった。

くつづく

「それは…」

机の上に出された雑誌を見て、綾乃は血の気が引いた。

…まさか？…

『J-BEAT』だよ。それで…ここ…」

彼女がページをめくる。

「！」

そこには、2ページに渡り4枚の写真が掲載されていた。

「これ、あなたでしょ？」

綾乃はそれが、先日、表参道で撮影されたものだと、すぐにわかった。

しかし、簡単には認めたくない。

…っっていうか、聴いてないし…

「えっ？いや…似てる？別人じゃないかな？」

「似てるもなにも…」

「ははは…ほら、世の中には自分に似てる人が3人いる…っっていうし」

「でも…ここに書いてあるよ『B学園中等部2年 / 綾乃さん』って…」

「うわっ！」

「どうしたの？」

バレエ部の仲間が近寄ってくる。

「えっ？綾乃？」

「うそっ！綺麗！普段のイメージと全然違う…」

「いつ撮ったの？読モってやつ？」

「あははは…」

しかし、こうなると笑ってごまかせない。

仕方なく、事情を説明する。

ただし「掲載されることは知らなかった」と、そこは強く主張した。

「ちよつと、お母さん！どういうことー！」

家に帰るなり、綾乃が怒鳴る。

母の久美子は、その意味をすぐに悟った。

「見ちゃった？ごめんね、私も知らなかったのよ…」

テーブルの上には、昼間学校で見た『J—BEAT』が置かれていた。

「そんな…」

「あまりにクオリティが高かったから、急遽、挿し込んだんだって」

「プライバシーの侵害だよ！」

「まあまあ…」

「載せるなんて言っていなかったじゃん！」

「わかってるわよ…。でも『綺麗』ってことで掲載されたんだし…怒ることじゃないでしょ？」

「うう…」

…確かに『綺麗』と言われて…照れ臭さはあるが、怒る理由にはならない…

「人生の『ほんの一瞬の記念撮影』だと思えば、いいじゃない」

納得はしてないが、載ってしまったものは仕方がない。

この日は、それ以上どうしようもなかった…。

しかし、思った以上に反響は大きく…

翌日以降、休み時間に綾乃の姿を見ようと、学年を問わず教室に『見物客』が訪れるようになる。

なかには、サインやツーショットの撮影をねだる者もいた。

もちろん、綾乃は

「すみません。モデルでもなんでもないのです、そういうのは、ちよつと…」

と、丁重に断る。

そんな、やりとりを見て

「後輩が入って来て、一段と競争が激しくなるっていうのに…随分と余裕ね…」

と綾乃のライバル…山下弘美はそう皮肉った。

「そんなつもりは、これっぽっちもないわよ。これは『アクシデント』

なんだから…」

「いいんじゃない？サインくらい。この先、代表にでもなれば、絶対に書くんだから。今からその練習をしておけば？」

『『ヒロリ』…他人事だと思つて…』

ヒロリとは弘美のあだ名。

2個上の先輩が付けた。

身長が低く、幼く見える彼女を…誰かが『ロリータ』と言い始め…それが名前と合わさつて、いつの間にかそうなった。

本人からすれば、余り、嬉しくないだろうが

「私も小学生の時は『チヨモ』って呼ばれてたんだ…」

と打ち明けてから、綾乃と弘美の距離は縮まり、こんな『軽口』が言えるほどの仲になっていた。

それにしても…

この騒動は何日か続いた。

たった4枚の写真が雑誌に載っただけで、これほどまで騒ぎになるとは…想像もしていなかった…。

くつづく

騒動発生から、約一週間。

綾乃は突然、校長室に呼ばれた。

中に入ると、そこには担任とバレーボール部のコーチ…そして校長。

「これは…藤綾乃くんだね？」

校長が綾乃のに見せたのは、例の雑誌…『J—BEAT』。付箋で目印を付けておいたページを開く。

「…はい…」

それを見て、綾乃は首を縦に振った。

これが理由で呼ばれたのではないか…という、予想はしていた。

ただ、こんな重苦しい空気の中に身を置くことになるとは、想像していなかった。

「そうか…残念だ…」

綾乃の返事を聴くと、コーチは静かに呟き、そのまま部屋を出ていった。

「藤綾乃くん。…明日は…自宅謹慎とする…」

校長の低く、冷たい言葉が部屋に響く。

「えっ?……」

「詳しくは担任の岡野先生から、聴いてください…」

「えっ?…」

「藤…今回の君の行動は…校則違反と見なされる」

「校則…違反?…」

「我が校は、無許可のバイト活動を禁止している」

「バイト活動!?!」

「同時に芸能活動も禁止している」

「芸能活動!?!」

「明日、君の処遇が審議される」

「処遇?」

綾乃のは余りに突然の出来事に、聴いた言葉をおうむ返しすることしかできない。

「最悪、退学もありえる…。以上!」

「…」

事態が呑み込めず、校長と担任の顔を、交互に数回見た。

だが、ふたりとも押し黙ったまま何も言わない。

「ちよつと待つてください! 誤解です! 私はバイトも芸能活動もしてません!!」

綾乃は耐え切れなくなり、ついに反論をする。

「藤のお母さんには、これから連絡するが…話は明日訊く」

「ウソ…でしょ?…」

「残念ながら、ウソではない。…とりあえず、今日は家に帰りなさい」

「家に…帰る…?…」

綾乃は、そう呟いた。

そこからの記憶がない…。

気が付いたら家にいた…。

カギは持っていたが、中には入らず、玄関のドアに寄りかかり、母が戻ってくるのを待った。

そうしている間に、少しだけ気持ちが落ち着いてきた。

綾乃は父親を亡くしてから、人前で涙を見せたことがない。

バレーボールでチームが負けたときも…

陰湿な嫌がらせを受けても…

卒業式の日も…

「泣くのは、お風呂の中」と決めていた。

だから…家に入らず、泣くのをグツと堪えていた。

外にいれば、泣くことはない。

そう思ったからだ

でも、悲しいのか、悔しいのか…あるいはバカバカしいのか…自分の感情が整理できていないのも事実だ。

そして、泣いても何も解決しない…という冷静さが、頭のどこかに…数%ほどあった。

この数%がなければ、綾乃の心は崩壊していたかも知れない。

「話は聴いたわ…」

どれくらい経ったであろうか…母の久美子が職場から戻ってきた。

「お母さん！」

「綾ちゃん…」

母は娘をギュつと抱き締めると

「…大丈夫、明日ちゃんと説明するから…。話せばわかるわよ…」
そう言って、綾乃の額に、自分の額をくつつけた。

「明日は助っ人も呼んだし…」

「助っ人？」

久美子は力強く頷いた。

「綾ちゃんは、何も心配しなくていいから」

「…うん…わかった…」

綾乃は極力、平常心を保とうと努力した。

いつものよう食事を摂り、入浴して、ストレッチを行い、就寝した。

だがさすがに、気持ちよく眠ることはできなかった。

何度も何度も目を覚まし…それを繰り返しているうちに、朝を迎えた…。

くつつくく

Winning wings \ devil's
proof\

「手元の資料によりますと…藤綾乃さんには、お父様はいらっしゃらないことになっている…かと存じますが…」

担任の一言に、綾乃に同席した口髭を蓄えたスーツ姿の男が

「失礼致します。私はこういうものです」

と、名刺を手渡した。

綾乃が校長室で『一日自宅謹慎』を告げられた翌日…の放課後。

呼ばれたのは理事長室だった。

母の久美子と『助っ人』とともに、3人で出向く。

その助っ人が…この口髭の男だ。

室内には、綾乃の担任と校長…そして理事長がいた。

『J—BEAT』の編集長？」

担任から名刺を手渡された理事長が、口髭の男に問う。

「はい『永井』と申します。綾乃さんの肉親ではございませんが、今回の件につきましては、当方の不手際が原因でございまして…。誠に勝手ながら同席させていただければと…」

永井は深々と頭を下げた。

「わかりました。いいでしょう。…私は当学園の理事長…『横山』です」

「よろしく願います…」

「早速ですが…藤綾乃さんの写真が、この雑誌に掲載されていたことについて、昨日、本人であることが確認されました」

担任はまるで、法廷における検察官かのような口調で、話し始めた。

「本案件は、我が校の『無許可のアルバイト活動の禁止』ならびに『一切の芸能活動の禁止』を示した校則に抵触するものとみなし、その処遇については『無期限の停学』が相応であると結論付けました」

「無期限の停学!？」

突然飛び出した言葉に、綾乃も久美子も…そして永井も、思わず大きな声で訊き返した。

「無期限って、どれくらいの期間のことですか？」

綾乃が訊く。

「期限はありません…。だから無期限なのですが…」

校長が冷たく言い放つ。

「待ってください。それは即ち…『退学』…ということですか？」

「永井さん…言葉に気を付けて頂きたい…。退学ではありません、停学です。ですから学校に籍はありますよ…除籍はしません。ですが…当方の許可なくして、登校することは、許されません…」

校長は表情を変えずに、静かに言い放った。

「なるほど…そういうことですか…」

『退学させた』と『退学した』とでは、受け止め方の印象がまるで違う。

つまりは、極力、自分たちの責任は回避したいのだろう。

「そんな…勝手に…」

「綾!」

綾乃が突つかかりそうなところを、横にいた久美子が制した。

「ただし、一方的に決めてしまうのは、フェアではありません。一応、そちらの言い分も伺いしましょう」

「『一応』…ですか…」

永井は一瞬ムツとした表情を見せたものの、すぐに気を取り直し

て、言葉が続けた。

「先ほども申し上げましたが、今回の件は私どもに落ち度があり、綾乃さんは、なにひとつ、過失はありません。確かに、そこに載っているのは彼女であり、それを撮影したのは私どものクルーです。ただし：話せば長くなりますが：それは掲載を目的に撮影したわけではありません」

「その場には私もいました。私は：彼と同じ職場で：別の雑誌の編集長をしています。娘と一緒に出掛けた先で、たまたま顔見知りのクルーと逢いました。せっかくだから、写真を撮ってもらおう：ただ、それだけの話です。撮影に関してはそれ以上でも、それ以下でもありません。当然、モデル料など発生していません」

「そうなんです！私、載るなんて聴いてませんでした！」

「そう：その撮った写真をスタッフが：彼女に断りもなく：無許可で掲載してしまった。そこに彼女の意思はない。つまり、この責任は編集長である、この私にあります」

永井はそう言うと、再び深々と頭を下げた。

「なるほど：仰ることは、よくわかりました。金銭の授受はなく、また自らの意思で撮影、および掲載を望んだ訳ではないので、アルバイトでも芸能活動でもない：と：こういうことですね？」

校長は至って冷静に、論点を整理した。

「その通りです…」

永井、綾乃、久美子が首を縦に振る。

「では、その証拠を見せて頂けますか？」

「えっ!？」

「金銭の授受はなく、芸能活動の意思もなかったという証明をしてください」

「…痛いところを突いてきますね：『悪魔の証明』：ですか…」

「悪魔の証明？」

永井の言葉に、綾乃が反応した。

『消極的事実の証明』とも言う。事象でも現象でも『あること』『あったこと』を証明するのは、比較的容易いことなんだ。しかし『無いこと』『無かったこと』を証明するのは、非常に難しい…いや、不可能に近い」

「彼の証言では、ダメなのでしょいか？」

と久美子が校長に訊く。

「はい。証拠にはなりません」

「でも、本当にお金ももらってないし、雑誌に載せてほしいとも言っていないし…ないものはないんです！」

綾乃は必死に訴えた。

「そう言われてもねえ…」

校長は困ったそぶりをする。

しかし、それが本気でないことは、すぐにわかる。

「情状酌量の余地もありませんか？」

永井は…さすがに苛立ち始めていた。

ひとつ咳払いをして、気を鎮める。

「その点については…どうでしょう？」

校長が、理事長に問い掛けた。

「よく聴いていただけますか…」

これまで静かだった理事長が、ゆっくりと話し始める。

「我が校は『品行方正』『文武両道』をモットーに、開校より50年余りが経ちました。そのお陰で、これまで大きな『事件』も『事故』も起こさず、やってくることができました。それは何故か？…端から見れば厳しすぎるかも知れませんが…規律を重んじてきたからです」

「否定はしません」

永井は、ひとつ相槌を打った。

「ひとたび、この規律を破る者あれば、この場から退場いただくというのが、この学校の慣わし…。そうやって秩序を保ってきたのです」

「…」

「今回の事案については…なるほど、同情すべき点は多々あるうかと存じます。しかし、この雑誌に写真が掲載されたという『事実』を覆すだけの、証拠なり、証明なり…というのは、残念ながらありません」
「では、逆にお尋ねしますが…この掲載は…事件や事故に匹敵するよ
うなことなのでしょうか？」

「我が校のモットーは『品行方正』です。永井さん…あなたを目の前にして言うのもどうかと思いますが…この手の類いの雑誌は、無駄に流
行を煽り、無駄に金銭を消費させる…その旗降り役だと思っ
よ」

「だいぶ偏見があると思いますが…」

「いえいえ、これでも時代の流れというものは、理解しているつもりですよ。若者文化を否定するつもりはありません。ただ、この校風には合
合わない…それだけです。事実、この雑誌が販売されてからの一週間は、ちよつと校内が浮わつておりましてね…」

…それはそうだった…

…それは認める…

…けど…

「つまり、そういうことなんです。ご本人に自覚がなかったとしても、雑誌に載っただけでスターなんです。そして『私も』『私も』と模倣する者が増える。こういった『気の緩み』が、事故や事件に繋がるのです。これまでも、こういうことが無かったわけではありませんが…い
ずれの事案についても、同様の処置を取らせて頂いております」

「今回の件に関しては、レアケースだと思えますが？」

「例外はありません。例外も、ひとつ許せば、あれもこれもとキリがな

くなります。…そうすると、それは例外ではありません。『常態』です」

「理屈はわかりますが…」

「それが我が校の方針です。これにご納得いただけないのであれば、自らお辞めになればよろしい…」

…歩が悪いな…

永井は、ここまで苦戦するとは思っていなかった。
完全な誤算だった。

「ただし、ひとつだけ…助け船を出してあげましょう」

「助け船？」

理事長の意外な一言に、3人が声を揃える。

「藤さんは…特待生として、我が校に入学している。…確か…」

「バレーボール部です」

担任の岡野がフォローする。

「うむ、バレーボール部ですね…。無期限の停学を免除する代わりに…特待生も解除しましょう」

「特待生を…解除?…」

「つまり一般生徒として学費を払い、通学していただく」

「お金の問題ですか？」

「特待生を解除するということは、即ち…バレーボール部を退部していただく…ということですよ」

「!」

…どこが助け船なのよ…

…バレーボールができなきゃ、この学校に通う意味がない…

…取りつく島もない…つてところか…

「これ以上の交渉は無駄ということですね…」
永井の問いに、理事長は黙って頷いた…。

くつづく

Winning Wings
く引き籠り、始めまし
た。

A：無期限の停学。

B：自主退学。

C：特待生扱いを解除（バレーボールを退部）の上、一般生徒として通学。

綾乃の選択肢は3つ。

Aは単なる『言葉遊び』であり、停学と言いながら、通学できる可能性はゼロ。

実質、自主退学を促している。

Bはそれを即決するかどうかということ。

そしてCは…

一見、情状酌量したかのように感じられるが…この学校には、バレーボールをする為に進学したようなもの。

それができないのであれば、わざわざ、ここに通う意味はない。

いずれにしても、その先にあるのは『退学』という二文字…。

3つの選択肢から決断するまでは、2週間の猶予が与えられている。

早い話が、それまでに『転校先を見つけろ』…ということだった。

綾乃は『通達』を受けてから、すっかり引き籠ってしまった。

バレーボールを始めてから欠かさずに行っていた、ランニングも、筋トレも、ストレッチも…まったくヤル気が起きない。

自堕落な生活…。

昼前に起きて、ブランチを摂り、大量に借りてきた映画や音楽のDVDを、一日中観て過ごす。

おそらく…物心が付いてから、これまで生きてきた十年あまりの情報量を越えるであろう、映像や音楽を一気に詰め込んだ。

だが、なにも感じない。

感動も刺激もなかった。

ただ観ているだけ…。

綾乃を心配して、クラスメイトやバレーボールのチームメイトが、携帯に電話やメール、LINEをよこしたが、その返信すらしなかった…。

少しでも、バレーボールも学校のこととも忘れたかった…。

しかしながら、ギリギリ暗黒面に堕ちなかったのは、志半ばにして逝った父の存在。

…パパがああの世から見てる…

そう思うと、自暴自棄になりそうな心にブレーキがかかった。

「どうしたらいいの？」

という問い掛けに

「自分の道は、自分で決めなさい」

そう言っていた…。

割りきれないハズはない。

それは母の久美子も十分理解していた。

綾乃に落ち度はない。

それでも、どうにもならないことがある。

夫を亡くした時もそうだった。

交通事故による不慮の死。

夫は普通に横断歩道を渡っていただけ。

相手は飲酒運転…。

どこに落ち度があったろうか…。

今でも悔しい。

悔しくて、悔しくて、たまらない。

だから、程度の差はあれ、娘の気持ちはよくわかる。

自分も綾乃がいなかったら、今のように生きていなかったと思う。

気持ちの整理がついたのは、半年以上経ってからだ。

その間の記憶はほとんどない。

ふと我に帰った瞬間…

それは綾乃が発熱で倒れた時のことだった。

何日か前から具合が悪かったにも関わらず、母親に心配掛けまいと、素知らぬフリをして、学校へ、バレーボールへ行っていた綾乃。

結局、無理がたたたり、練習中に病院へと運ばれた。

幸い大事には至らなかつたものの、この時初めて、娘の存在の大きさに気付かされた。

…母親失格…

何度も何度も自分を責めた。

責めて、責めて…たどり着いた答えが『前を向いて生きること』だった。

脱け殻のような半年間を救つたのは、娘の健気な…優しくも強い心だった。

この時から久美子は『母として』『父として』生きる決意をする。

今の綾乃を見て、脱け殻だった自分を重ねる。

だが、いつまでもこの状態を続けるわけにはいかない。どこかで前を向いて歩き出さなければいけない。

綾乃は、それができる。

そうさせるのは…今度は自分の役目だ。

「綾…いい加減にしなさい！いつまで寝てるの!？」

「…ん…？…今日…日曜日だもん…」

「この一週間、ずっと日曜日だったでしょ!?!放電しすぎ」

「…うう…なにもやりたくない…」

「最低限、着替えて顔くらい洗いなさいよ」

「…う…ん…」

「それと…今日は永井さんに会ってよね。気持ちはわかるけど、誰かを恨んだところで、仕方ないでしょ」

永井は、あの日以来、毎日、藤家を訪ねて来ていたが、綾乃が面会を拒んでいた。

しかし、さすがに一週間通い詰められるとなると、多少は「申し訳ないな…」という気持ちだが、綾乃の中に芽生えていた。

「うん…わかった…」

渋々ながら、綾乃は了承した。

すでに選択肢は…B…と決めている。

転校先については、地元の公立中学校へ通うこととした。

…というより、今からでは、そこくらいしか受け入れ先がない。

問題は…

バレーボールを続けていくモチベーションが、失せてしまったこと。

世界を目指していたわけではない。

そこまで自分の実力を過信していない。

それでも…

上手になりたい、負けたくない、上を目指して練習を重ねてきた。

だが今は…

セッターの面白さをわかり始めてきたと同時に感じていた、漠然とした不安…。

それは、この1年間、身長が伸びなかったことに起因している。

立ちはだかる、10cm…20cmの壁…。

これ以上続けても、アタッカーとしてプレーするのは、叶わぬ夢…。

バレーボールを諦めるかどうか…綾乃の心は揺れていた…。

追い討ちをかけたのは、訪問してきた永井が発した一言だった。

「うちの専属モデルになって欲しい」

くっくくく

永井は、2階からリビングへと降りてきた綾乃の顔を見ると

「今回の件は本当に申し訳なかった」

と謝罪した。

いいいえ、お気になさらずに…などと言うのが、大人の対応。

それは理解しているが、綾乃にはそんなセリフは言えなかった。

「何を言っても、起きてしまったことを元に戻すことはできない。我々は今、ただひたすら謝ることしかできない…本当に申し訳なかった」

永井は再び頭を下げた。

「とりあえず座りましょ」

と久美子が着席を促す。

「今回の件で我々は『一枚の写真の重み』を改めて痛感した。写真一枚で人の人生が左右することの重みを…ね」

「…」

「綾！いつまでも、そんな恐い顔しないの！いくらなんでも失礼よ」

「いやいや、それは仕方ない。そもそもそんなに簡単に許してもらえないような話じゃない」

綾乃は…許すとか許さないとか、それはもう、かなりどうだつて良くなっていた。

ただ、急に「はい、わかりました！」とは言えない。

…素直じゃないな…

それは自分でもわかっていた。

「色々考えた…どうしたらよいか。そこで、せめてもの『罪滅ぼし』…
と言っってはなんだが…」

永井は綾乃の目をジッと見つめる。

「うちの専属モデルにならないか」

「えっ!？」

「いや、うちの専属モデルになってほしい」

「専属…モデル?…私が?…」

…この人…何を言ってるんだろう…

「どういうことですか…」

「まず、ひとつ…モデルとしてのキミの反響が大きかったこと」

「反響?」

「各方面から、問い合わせが殺到しててね…」

「問い合わせ?」

「あの娘はどこの娘だ?」

「私が?」

「キミはまだ、自分自身の魅力に気付いていないかも知れないが、我々
はわかるんだよ、そういうの」

「魅力?」

「整った顔立ち、スラリとしたスタイル、長い手足、大人びた雰囲気…
同年代の娘にはない魅力がキミにはある」

「お母さんに似てよかったわねえ」

久美子は自慢気に、ふふふと笑う。

「べ、別に…」

綾乃はやたら持ち上げられて、逆に気味が悪くなった。

「ふたつめ。バレーボールへの興味が無くなっていること」

「えっ！どうして？」

「それはお母さんから聞いたんだ…」

「あなた、この一週間、一回もトレーニングしなかったでしょ？責めるつもりはないけど…情熱が無くなってるように見えるわ」

「勝手なこと言わないですよ！」

「わかるわよ、親だもん！」

「…」

「続けるつもりがあるなら、やめないわよ…どんなことがあってもね」

「…」

「まあ、そこはキミの心の中のことだから…でも、迷っているなら、新しいことを始めてみるのも悪くないと思うが」

「だから迷つてるとか、勝手に決めないでください！」

「じゃあ、続けるの？バレーボール」

「それは…」

「ほらね？即答できない」

「あ、だから、それは…」

「仮に、モデルをやるのであれば、転入先も考えてある…」

「転入先？」

「聞いたことあるだろ？通称『ゲー校』」

…芸能人御用達学校？…

「心配はしなくていい。マネジメントはごっちに任せてくれれば…悪いようにしない」

「…」

「綾！どこ行くの!？」

「ちよつと、外に出てくる…」

「外？」

「頭の中を整理したい…」

「…そうね…」

「そうだな…。これはもちろん、強制する話じゃない。よく考えて結論を出せばいい」

「…行つてきます…」

綾乃は永井の言葉に返事はせず、部屋を出た。

特に行くアテはなかった。

とりあえず、家に閉じ籠っていたから、外の空気を吸おう…そう思った。

そして、近くの公園まできた。

決して大きくはないが、ブランコや鉄棒、砂場などがある。

対象年齢は小学校の低学年くらいまで…というところ。

今も、父娘が逆上がりの練習をしていたり、幼子が鬼ごっこして遊んでいる。

サッカーボールでリフティングをしている少年もいた。

…何年ぶりかな…

…小さい頃はよくここで、缶蹴りや鬼ごっこをして遊んだっけ…

綾乃は誰も使っていないなかったブランコに、腰を下ろした。

…小さい…

綾乃のサイズでは、無理があつた。

さすがに自分で笑ってしまう。

仕方なくベンチに移り、座り直した。

…はあ…

…いきなりモデルだなんて、バカじゃない？…

…でも…

…バレーボールを続けるかどうか、迷っているのも事実…

…どうしよう…

…モデル…か…

そんなことを想いながら、綾乃はリフティングをしている少年を、ボーツと見ていた。

その視線に『オレ』が気が付いた。

そして、オレはヤツが誰だか、一目でわかった。

髪はだいぶ伸びていたが、ついこの間、ヤツの顔を見たばかりだ。わからないハズがない。

「チヨモ？」

オレは近づいて声を掛けた。

「えっ？」

ヤツは不思議そうな顔をしてオレを見た。

誰？っ感じで。

「…チヨモだろ？何してるんだ、こんなところで…」

「その呼び方は…高野…くん？」

「なんだ、今、わかった？」

「えっ！あ…」

「珍しいな…こんなところにいるなんて」

「高野くんこそ」

「オレは結構来てるよ、ガキの頃からここでリフティングしてたし…っていうか、ちよつと会わないうちに、女子みたいな言葉を使うようになったんだな…この間までは高野って呼び捨てだったのに」

「なに言ってるのよ…」

「ちよつと、立ってみ？」

「なに？」

「いいから…うくん…やっぱり、デカイな…」

「失礼ね！急になに？」

「あ、いや、オレ、この一年で結構、背え伸びただけど…まだ、届かねえな」

「そうだね、少し伸びたんだね…。でもね…私、中学に行ったら、チヨモじゃなかったよ」

「あん？」

「…私より大きい人…ばっかりだもん…」

「ん？あ、そうなんだ…まあ、バレーとかバスケとかは、高けりや高いほど有利ってスポーツだからな」

「…うん…」

「でも、チヨモくらいのジャンプ力がありや、たいした問題じゃないだろ？」

「…うん…そうだね…」

「その点サッカーは、そこまで身長、関係ないからな…」

「…サッカー…続けてるんだ？…」

「あ、オレ『マリノスのユース』に入ったんだ」

「へえ…」

「将来、日本代表のエースだから！サインしておこうか？」
「すごい自信だね…」

「そりゃ、それくらい目標を持ってやっていかなきゃ…」
「…だよな…やっぱり、そうだよな…」

「ん？なんか、元気ないじゃん…」

「えっ？そ、そう？別にそんなことないよ…」

「そういうえば、出たな…雑誌…」

「えっ？あ、あれ？…」

「学校じゃ、その話題で持ちきりだぜ…これって、あの『藤』だよな…つて」

「それは、ちよつとした間違いで…」

「はっ？」

「いや、その…」

「あ、逆にオレが先にサインをもらっておかなきゃ…か…」

「ないない…ないから、サインなんて…」

「ふくん…まあ、頑張れや」

「えっ!？」

「なんか…悩んでるんだろ…」

「！」

「あ、顔見りやわかるよ…。チヨモはいつでも自信満々だったからな…」

「…」

「じゃあな、なにかあつたら力になるよ」

「高野…くん…」

「あ、勘違いすんなよ…オレは…ほら、チヨモのことライバルだと思つてたから…競う相手がいなかつまらないべ」

「高野…」

それが小学校を卒業してから、一年ぶりの再会だった。

くっくくく

Winning Wings へ逃げるは恥かな？

綾乃は二週間ぶりに、登校した。

いや、今は放課後だから『訪問した』が正しい。

教室と部室に残した『所持品』を引き上げる為にやってきた。

短い間であったが、それなりに想い出はある。

人前で泣かないと誓っている綾乃でも、少し感傷的になった。

…もう、ここに来ることはないんだね…

ひとしきり、教室の入り口に立ち止まり、中を見回した。

新しいクラスメイトとは半分近く、話しもしないで、ここを去る…。

「藤!？」

不意に誰かに呼ばれた。

「あっ…『スマイレ』『智子』『菜月』…」

振り向いた先にいたのは、バレーボール部のチームメイトだった。

「辞めちゃうんだって?…学校…」

「…うん…」

「次のところでも続けるんでしょ?」

「えっ?…あ…うん…まあ…」

「じゃあ、今度は敵として対戦するかも…だね…」

「…そうだね…」

…嘘つき…

…もうバレーボールは…

「あ、あのさ…それより、心配かけちゃってゴメン…電話とかメールもらったのに、返信もしなくて…」

「いいよ、いいよ…仕方ないよ」

「それは誰だってそうなるよ」

「私は別にいいと思うんだけどな…雑誌に載るくらい」

「うん、ありがとう」

「あれ、『ヒロリ』が『密告（チク）』った』って、噂だけど…」

「智子！」

…ヒロリ？…弘美が？…

「だってスマレ…綾乃がいなくなれば、ヒロリはレギュラー安泰じゃない。誰が得するっていえば…彼女しかいないでしょ」

「あ、藤、それはあくまでも噂だから…」

「私じゃないわよ！」

「ヒロリ!!」

「聴くつもりはなかったんだけど…通りかかったら、たまたま、あなたたちが喋ってて…。でも、これだけは言っておくわ。綾乃が抜けたら、チーム力がダウンするのは誰が見ても明らかじゃない。私は…綾乃にレギュラーを奪われる気なんてことは、さらさら思っていないけど…チームとして考えれば、誰かひとりだって欠けるのは痛いんだよ」

「…」

「練習相手だつて、いなくなる。マイナスしかないわ。ライバルがいなくなつて喜ぶ…なんて浅はかな考え、少なくとも私は持つてないわよ」

…彼女はいつだつて、正々堂々だつた…

…疑う余地もない…

「うん、わかつてる…ヒロリじゃないよ…。それに、私は別に『誰が言った』とか『言わない』とか…そんなこと考えたことないし…誰だかがわかつたところで責めるつもりもないから」

「…」

「そんなこと言い始めたら、無理矢理、あの日、私を連れ出した親がイケない！…つてことになつちやうし…そうするとそのキツカケを作つた自分が悪い…つてことになるし…」

…どれもこれも、どこかで何かズレていけば、こうはならなかつた…

…これが運命なのだろう…

「そう、ならいいわ…。変な疑いを掛けられたまま、一生恨まれるなんて、気分悪いからね。…じゃあ、練習があるから」

弘美はそういうと、スタスタと歩いてこの場を去つていった。

「あ、じゃあ、みんなも練習、遅れるといけないし…」

「あ、うん…」

「じゃあ、また…」

「落ち着いたら、連絡しようだね…」

「…みんな、頑張つてね！影ながら応援するから…」

そうして綾乃は、教室と部室の荷物を引き揚げると、一年間通った学舎（まなびや）をあとにした。

悩みに悩み、迷いに迷い：綾乃は結局、永井の提案を受け入れた。

バレーボールから逃げた…。

逃げてしまった。

それは悔いが残るかもしれない。

例えば結果が出なくても、最後までやり抜くこと。

それが大事なことは充分わかつている。

一方で、新たなことに挑戦する…というのも、別に悪いことではない。
い。

ひとつの選択肢だと思う。

何かの具合で、神は右に進めと命じた。

ならば、今はその流れに逆らわない方がいい。

…自分を納得させる精一杯の言い訳：

右か左か…それが正しいかどうかなんて、誰にもわからない。
でも、先がわかる人生なんて面白くない。

だとしたら…

行ってみたい！

新しい世界へ！

「そうか…受けてくれるのか…」

綾乃が返事をしたのは、永井と面会した二日後だった。

「ありがとう！それならば、これからキミを全力でバックアップする！」

「…はい、お願いします…」

「明日にも転入手続きをしたいところだが…『ゲー校の芸能科』に入るには、ひとつだけ『条件・資格』が必要だ」

「条件ですか…」

「それを得るために、明日、うちのオフィスに来てほしい。フロアは違うが、キミのお母さんと同じ会社だから、場所はわかるね？」

「はあ…」

「じゃあ、明日11時に来てくれるかな？ランチをしながら、打合せをしよう…」

ゲー校。

一般的なそう呼ばれているが、正式には『東京芸術文化振興学校』という。

当初は日本の古典芸能…落語や歌舞伎、能や浄瑠璃、あるいは日舞や茶華道に至るまで…を保護、維持していくことを目的として、戦後まもなく設立された。

生徒は一般教養はもちろんのこと、プラスαとして、古典芸能の知識や専門技術を学び、それぞれの道へと旅立っていった。

どちらかという職業訓練校に近いイメージかも知れない。

そして、この学校の一番の大きな特徴は、学費を生徒側で払うのではなく、国が全額負担していたこと。

にも関わらず、生徒は年々減少し、一度は閉校してしまう。

この時期、若者の目はアメリカ文化に向けられており、古典芸能などと言うものは、軽んじられていたのだった。

そうした流れのなかで、装いも新たに、十数年後、再出発する。

以前との大きな違いは『芸能事務所、またはそれに準ずるものに所属していることが、ここで学ぶ条件』となったことである。

学費は全額、事務所負担。

俗な言い方をすれば『芸能人でなければ通えない』のである。

ただし、芸能人であっても事務所が、学校に通わせるほどの価値がない：と判断すれば、学費の負担はしてくれない。

故に、途中で事務所と契約を打ち切られた者などは、強制的に退学となる。

この状態を『咄家』と呼ぶ。

ドロップアウト ↓ 落後者 ↓ 落後家 ↓ 咄家となったと言われている。

自ら芸能界から身を引く場合は別として、咄家になってしまいうというのは、本人にとって屈辱以外の何者でもない。

つまり、この学校に通っているという事は『売れている売れていないに関わらず』、事務所にとって『商品価値がある』ことを示しており、生徒にとっては、それがステータスでもあるのだ

蛇足ではあるが、現在は中等部と高等部があり、それぞれ『芸能科』『普通科』の2コースに別れている。

一説によると『咄家の受け皿』として普通科は設けられた…とも言われているが、今は学費を自己負担すれば、一般人も入学出来る。

芸能科のカリキュラムは、専門的な技術の取得…という部分が、発声や演技、ダンスや音楽へと変化している。

そして普通科においても、希望すれば、作詞や作曲、脚本や照明、音響などのイロハを学ぶことができる。

この辺りは、普通科と言いながら、他校と差別化が図られている。

兎にも角にも、綾乃がこの学校の芸能科に通う為には、その『条件(資格)』が必要なのだった。

くつづく

「よく来たね」

永井のオフィスを訪れた綾乃は、その本人によって出迎えられた。受付を抜け、エレベータに乗り、彼らが仕事をするフロアにたどり着くと、応接室に通された。

お世辞にも綺麗とも広いとも言えない。

「ここは業者との打合せスペースみたいなもんだからね」

永井はトレーにコーヒーを乗せると、自ら運んできて

「経費節減！今時の編集長はお茶出しもやるんだよ」

そう言って笑った。

ほどなくして、綾乃の母：久美子も合流。

オフィスの近くで早目のランチをしたあと、3人は…とある芸能事務所へと向かった。

「ご無沙汰してます」

年配の女性：社長の『原』に、まず頭を下げたのは久美子だった。

「まさか、あなたの娘さんを連れてくるとはね…」

女社長は苦笑いをして、3人を応接室に通した。

永井のオフィスのそれとは違い、清潔感溢れる部屋だった。

原の事務所：『飛鳥プロ』…は業界でも老舗として知られている。所属タレントは決して多いとは言えない。

しかし俳優から、歌手、芸人まで、いわゆる大御所と呼ばれるクラスが揃っていて、それぞれが司会、ボケ、ツツコミなどが出来ることから『キャスティングに困ったら、まず飛鳥プロ』と言われている。

久美子はモデル時代、この飛鳥プロに所属していた。

「それがねえ…突然『結婚します!』って、辞めちゃうんだもの…」

「その節は色々ご面倒をお掛けしました…」

「まだ『順番を守った』からマシだけれど」

「はい、すみません…」

久美子は平身低頭だ。

「順番?」

綾乃が不用意に呟く。

「わかるだろ? いわゆる『デキ婚ではなかった』…ということだ」

「あつ…」

永井の説明に綾乃が頷いた。

「私は古い人間でね…『時代が変わった』…と言われればそれまでかも知れないけど、どうしても『節操がない』って思っちゃうのよ…あつ! 初対面なのにこんな話しちゃって」

「いえ…原社長、そこなんですよ!」

と永井。

「先にお伝えしました通り、彼女に関しては、業界のあちこちから問い合わせがありました。その中で敢えてこちらを選んだのは…ここがどこよりも礼節…: 礼儀作法を重んじる事務所だからです」

「ふふふ…永井くん、つまりそれは単に古臭いってことでしょ?」

「まあ、そうですね。でも私も藤さんも、この一択しかなかった」

「はい。単に私の古巣だから…ではなく、それが娘にとって必要だと思っただからです。私も…今は、曲がりなりにもファッション誌の編集長をしますから、わかるんです…今の娘たちが、いかに、だらしないか…ってことが」

久美子は眉間にシワを寄せた。

「そうねえ…だから、うちの事務所は若い子がいないのよ…。みんな逃げていっちゃうの…」

「いるじゃないですか!…『浅倉さくら』が…」

永井の声が一段、大きくなった。

「ええ、彼女だけね…」

「そこに、この藤綾乃が加わる…。社長にとっても、悪い話ではないと思いますよ。…語弊があるかも知れませんが、飛鳥プロのタレントさんは、平均年齢が高い。ある程度若い世代を入れて新陳代謝を図らないと、この先、厳しいんじゃないかと…」

「あら、なかなか商売上手じゃない…」

「偶然にも、彼女とさくらは同じ年ですし…良きライバル、良き仲間になるかと…」

「…さくらにもヒアリングしたんでしょ?…」

「…ははは、さすがお見通しで…。もし、そうなれば『歓迎します』と…」

「でしようね…」

「どうやら永井は、綾乃が『良い返事をするを前提に』水面下で色々と動いていたようだ。

「まあ…これだけの逸材をよそに持っていかれるのは、癪だし…ありがたく、このお話をいただくわ」

「ありがとうございます」

「ただし!まだ、本人の意思確認が終わってないわ…あなたはどのような、綾乃さん?恐らくあなたが思っているほど、楽な世界ではないわよ。…この世界で、この事務所ですべていく覚悟はある?」

「は、はい!!私、幼い頃からやってきたバレエボールを捨ててきました!」

綾乃はやおら立ち上がると、直立不動で話し始めた。

「私は母が現役だった頃は、もちろんリアルタイムでは知りませんが、その頃の写真とか見たことがあります。自分の母親ながら、すごく綺麗で…ずっと憧れてました…」

「初めて聴いたわ…」

母の久美子が、横で赤面する。

「今回、このお話をいただいて…迷いに迷いましたが…最後は母のよ

うになりたい！って強く思いました！」

「綾ちゃん…」

「ですから、もし雇っていただけるなら、どんな苦勞も耐えてみせますので、どうぞ、よろしくお願いします！」

「蛙の子は蛙ね…」

「？」

「あなたのお母さんもそうだった。初めてここに来た時も、結婚するって言った時も、まっすぐに力強くて…今、その時のことを思い出したわ」

「社長：イヤだ、恥ずかしい…」

「わかりました！綾乃さんは、うちで預かりましょう！」

「あ、ありがとうございます！」

綾乃と久美子…そして永井は、揃って頭を下げた。

「あ、そういえば…さくら、今、事務所にいるんじゃないかしら？」

「はい。実はその時間を狙って、ここにお伺いしました。このあと、うちのスタジオで撮影があるので…」

「うふふ…抜け目ないわね…そうね、ちょっと待っててちょうだい」

社長の原は、内線を使ってさくらを呼び出す。

ドアがノックされると、社長が返事をした。

「失礼します」

部屋に入ってきたのは、紛れもなく浅倉さくら本人だった。

学校から来たのだろうか、制服を身に着けていた。

…この人が、小中学生の憧れの的！…

…『J—BEAT』のエース！…
…やっぱり可愛い！…

背の高さは山下弘美と同じくらい。

童顔であるため、制服を着ていなければ、小学生と見間違っても知れない。

「さくら…話は聴いていると思うけど…」

「藤綾乃です！よろしくお願いします！」

「浅倉さくらです。こちらこそ、よろしくね」

「はい！」

「…同い年とは言え、この娘は素人だ。悪いが色々、面倒見てやってくれ」

「はい！…えっと、永井さん…藤さんの学校は？」

「これから転入手続きをする…。ゲー校だ」

「なら、クラスメイトにもなるんですね…。藤さん、最初は色々大変だけど負けないでね！」

「はい！ありがとうございます！」

こうして綾乃の『モデルへの道』がスタートしたのだった。

くつづく

Winning Wings Project
A)

「『さくら』と『あや』で…『サクラヤ』はどうだろう?」

「『安さ爆発』 つすか?家電量販店じゃないんですから」

「ダメか?」

「ダメっす!」

「じゃあ『桜藤(さくらふじ)』…」

「関取みたいですネ…」

「編集長のネーミングセンスは古いですよ」

「そうか?」

永井の発言は、ことごとく若いスタッフに却下され、頭を掻いた。

永井は、綾乃の写真を見た時から『J-BEAT』での、モデル採用を検討していた。

その過程において、想定外の出来事はあったものの、結果として、その想いは成就した。

そして、その時から考えていたこと…。

それが、浅倉さくらと藤綾乃でコンビを組ませることだった。

『J-BEAT』はローティーン…小学校高学年から中学生を対象にしたファッション情報誌。

浅倉さくらは、そのJ-BEATにおいて、人気・実力とも誰もが認める絶対的エースだ。

その彼女も中学2年生となり、5年目のシーズンを迎えた。

中学の卒業は、すなわちJ—BEATの卒業でもある。つまり、残りは2年。

彼女の人気は揺るぎないものではあるが、最後にもう一度、爆発させる為の推進力が欲しかった。

その起爆剤。

それが藤綾乃だった。

相反するふたつの個性を合わせることで、お互いの長所を際立たせる。

このふたりなら、それができると永井は直感していた。

綾乃のデビューは極秘裏に計画が進められた。

次号は5月発売。

いささか間が悪い。

だからこそ、いかにインパクトを与えられるかが、大きな課題だ。

社内では綾乃のデビューに向け、特別チームが設けられ、その計画は『Project A』と名付けられた。

冒頭の会話は、その一場面だ。

綾乃は本名ではなく『AYA』という表記で活動することになった。ファッションコンセプトは『Cool』。

大人びた雰囲気、全面に押し出していく戦略である。

そしてコンビ名は『C・A・2』に決まった。

『キャッツ』と読む。

弾ける明るさが魅力の『CuteなAsakura』。

落ち着いた雰囲気漂う『CoolなAYA』。

2人のC・A：そんな意味だ。

ちなみに綾乃は：明るくない訳じゃない：が、前回の撮影時、緊張や恥ずかしさのあまり、上手く笑えず、少し怒ったような顔で写ってしまった。

ところが「その媚びない感じがいい」と評価されるのだから、世の中、何がどう転ぶかわからないものである。

：ということ『AYA』は『綾乃』とは真逆のキャラ設定となった。

諸々の手続きが終わり、綾乃はゲー校への転入初日を迎える。

4月も既に4週目に入っていた。

GWも目前だ。

：なんて中途半端なタイミング：

新しい制服に袖を通しながら、綾乃は思わず笑ってしまった。そして、鏡の前でポーズを決める。

：モデル：か：

既に何パターンか撮影を済ませているものの、実感が沸かない。自分がモデルになった：ということも、不思議でたまらなかった。

学校に着く。

久美子は「一緒に行こうか?」と言っていたが、断った。

親としては心配なのだろうが、入学式でもないし、それくらい、ひとりで充分だ。

職員室に行き、挨拶をする。

担任から「ホームルームで紹介するから」…と、そこで座って待っているよう指示された。

そしてチャイムが鳴る。

綾乃は、担任とともに教室へと入った。

綾乃のクラスは全部で40人弱。

うち、1/4は欠席している。

仕事で休みなのか、サボりなのかはわからない。

男女の構成比、ほぼ半々。

TVや雑誌で見たことがある顔も、数人いた。

「今日から新しい仲間が加わる。藤綾乃くんだ」

「はじめまして、藤です。よろしくお願いします」

綾乃が頭を下げると、まばらな拍手が返ってきた。

どうやら歓迎されているムードではなかった。

事前にさくから聴いた話によれば『ゲー校に入学』イコール『ライバルが増える』ということらしい。

活動するジャンルが被る、被らない…は、ある意味、死活問題なのだという。

まばらな拍手の理由はそこにある。

つまり綾乃の存在は、自分にとってプラスかマイナスか…まだ、そ

の見極めができていない状況。

「確か藤は…浅倉と同じ事務所だったな…」

「はい」

その一言に教室内がザワついた。

それで、浅倉さくらが、このクラスでも一目置かれた存在であろうことは、なんとなくわかる。

「浅倉、隣の席、空いてったつけ？」

「大柴くんですけど…今日は休みです」

「そっか。じゃあ、今日はそこに座っておいて」

…そんな、いい加減な…

綾乃は、口から出掛かった言葉を飲み込んだ。

くつづく

「おはよう」

席に着いた綾乃に、さくらが声を掛けた。

「おはようございます」

「綾乃、学校じゃ私に敬語使わなくていいわよ」

「えっ？あ、でも…」

「このクラスの中では、上も下もないの。変に譲（へ）り下ると『バカ』が付け上がるから、気を付けた方がいいわ」

…バカ？…

綾乃は、さくらの口から突然そんな言葉が飛び出してくると思わず、一瞬、面食らった。

「ほら、さっそく来たわよ…」

さくらは綾乃の顔を見ず、独り言のように囁いた。

「えっと…藤さん…って言ったかしら？」

綾乃の元へとやって来たのは…体格の良い女子。

背はそれほど高くないが『横幅がある』為、そう見える。

「はい、藤綾乃です。今日からよろしくお願いします」

「役者？モデル？」

「私…ですか？」

J—BEATの5月号が発売されるまで、専属モデルになったことは、極秘である。

「えっ？ああ…いや、まだ、その…」

「ふくん、まあ、何かわからないことがあったら、言いなさい。色々教えてあげるから」

「はい、ありがとうございます…」

綾乃は席を立って礼をした。

「今の、誰だか知ってる？」

さくらは正面を向いたまま、綾乃に問い掛ける。

「それが…その…見たことがあるような、無いような…」

「芸名『島崎 涼子』…本名『島崎 圭』…」

「あっ!…」

「わかった? 昔は天才子役として有名だったけど…最近見ないでしょ?」

「ちよっとイメージが…」

「かなり…でしょ? 不摂生なのか、病気が遺伝なのかは…知らないけど、太ったからね…彼女…」

「はあ…」

「事務所は路線変更…コメディエンヌ的な役にシフトしようとしてるんだけど…。もう、昔のようにはいかないのに、本人が認めないのよね…。プライドが高いというか、なんというか」

「そうなんですか?」

「それに輪を掛けて、下手に芸歴が長いから、全員を『下』に見てるの。…『何かあったら、いいなさい』…なんて真に受けちゃダメよ」

…なるほど…

…そういうこと…

「圭だけじゃ…あ、ここでは全員本名で呼ぶから、涼子じゃなくて、圭って言うんだけど…そういうの、多いから」

「わかりました」

「ほら、そこは『わかった』でいいよ」

「あ…うん…わかった!」

「はい、良くできました」

さくらは、綾乃にウインクして、右の親指を立てた。

「さつきも言ったけど、みんな同じ年なんだから、売れてる・売れてな

い、芸歴が長い・短いは無関係ないハズなのにねえ…結構、意識しまくりなの」

「はあ…」

「私は事務所の方針で『学業優先』だから、ほとんど欠席しないのね…ああ、綾乃も社長から言われてると思うけど」

「うん…言われた…」

まだ少しぎこちないが、綾乃は敬語を使わずに返事した。

「そういう例外を除いて、毎日学校に来ている子は…売れてない…つて、見られるわけ」

「そっか…」

「仕事が無ければ、事務所をクビになる格率も高くなるでしょ？そういう状態の人を『前座さん』って呼ぶの。…で、確定しちゃった人は『真打ち』」

先に説明した落後者…咄家から派生した言葉だろう。

「私も聴いた話だけど、中1で40人が入ったとするでしょ？高3で最後まで残るのは、半分らしいわよ」

「半分？」

「そう。…確かに、このクラスも1年で3人辞めてるし…」

「そうなんだ…」

「そういう意味じゃ圭は今、前座さん。位置的には際どいところにいる」

「あの人でも？」

「シビアな世界でしょ？」

「うん…」

「だから、綾乃が入ってきたことに対し、嫉妬してるし、その半面バカにもしてる」

「嫉妬？」

「今、このタイミングで入ってきた…ってことは、綾乃が期待されてる…『これからの人』ってことでしょ？…下り坂の圭にしてみれば、羨ましくて仕方ないわよ」

「バカにしてる…ってというのは？」

「綾乃が無名で、実績も無いから…」

「それは、しょうがないなあ…実際、その通りだし」

「恐らく、他の子たちも、そう思ってる…。そして、注目もしてる。興味津々であなたを見てるわ」

「…」

「もしかしたら、今月のJ―BEATに、あなたが載ってた…って気付いた子がいるかも知れないけど…誰も専属モデルになつたなんて知らない。それがわかった時、どう出るか…」

「どう出るか?」

「冷静でいられるか、いられないか…人間性が…まあ、そのうちわかるわ…」

「人間性…」

「私だって、信用したらイケないかもよ」

そう言った時のさくらの目付きが、あまりに鋭くて、綾乃は少しドキリとした。

「なあんてね…」

さくらは悪戯っぽく笑った。

…モデルの時の笑顔…

…でも、その裏には、きっと人知れぬ苦労がある…

綾乃は、さくらの表情を見て、改めてこの世界でやっていくことの厳しさを知った。

「そう言えば、さつき、学校じゃ本名で呼ぶ…って言ってたよね?」

「うん」

「浅倉さくら…って、本名だったの?」

「今さら？」

「あ、そうなんだ…」

…ダジャレじゃなかったんだ…

くっくく

ときどきμ S く中2の穂乃果、海未、ことりく

「なに見てるの?」

「あ、穂乃果ちゃん、海未ちゃん。J—BEATの最新号だよ」

GW明けの某中学校の…とある教室…の休み時間…。
南ことりの元に、高坂穂乃果と園田海未がやって来た。

2人は、ことりが熱心に見入る雑誌を覗き込む。

「本当にことりは、そういう本、好きですね」

「確か…その中に、ことりちゃんの親戚がいるんだよね?」

「うん。浅倉さくらちゃんは、お母さんのお父さんの、お父さんの、弟の、子供の…」

「あはは…遠いねえ…」

「えへへ…だから会ったことはないんだけど」

「でしようね…」

「それよりも、今月号はすごいんだよ!」

「なにがです?」

「ほら、この人!」

ことりはジャーンと自分で効果音を付けながら、開いたページを見せる。

「!」

「!」

穂乃果も海未も、そこに載っているモデルの姿を見て、ハツと息を呑んだ。

「綺麗な人ですね…」

「…だねえ…」

「やっぱり、そう思うでしょ？この人、ことりたちと同じ、中学2年生なんだって」

「そうなのですか？随分と大人っぽく見えますね」

「この人ね…先月号は『素人さん』として写真が載ってたの。でも、それが今月号から『専属モデル』になったんだよ！」

「おお！それって、シンデレラストーリーだよね？」

「そうですね。その話が本当なら『見初められた』ということでしょうか」

「相変わらず、海未ちゃんは難しい言葉を使うね…」

穂乃果は頭を掻いた。

『AYA』って名前なんだよ」

「ちよつとさ、雰囲気海未ちゃんぽくない？」

「どこがですか？」

「冷たさそうなところ？」

「私は冷たくありません！」

「穂乃果ちゃん、冷たいんじゃないよ『cool』…カッコいい！って言うんだよ」

「そう！それ！」

「本当にわかってるのですか？」

「わ、わかってるよう…」

「でも、海未ちゃんに似合いそうなファッションだよね？」

「そうですか？」

「ことりちゃんはさ、こういう服、着てみたい？」

「着てみたいけど…それより『作ってみたい！』かな？」

「デザイナー？」

「うん！可愛い服、カッコいい服、あんなのや、こんなの…みんなが見て、喜んでもらえるような洋服を作ってみたい！」

「デザイナーになることが夢なのですね？」

「ことりちゃんはスタイルいいから、モデルさんでもイケるんじゃない？」

「ムリだよ！人前に出るのとか…苦手だし…」

「とか言って：将来、芸能人に、なつてたりして」

「そういう穂乃果ちゃんは？」

「私？」

「穂乃果ちゃんは、何になりたいの？」

「パン屋さん！」

「小学生ですか！」

「なんでよう…」

「穂乃果の実家は、和菓子屋さんなんですよ！その娘が、なぜパン屋さんですか」

「だから、イヤなの。お饅頭はもう飽きた」

「贅沢です」

「だったら、海未ちゃんが穂むらの跡取りになればいいじゃん！」

「はい！」

「ん？」

「えっ？」

「あっ…」

「そっか。海未ちゃんが穂乃果ちゃんと結婚すれば、なれるんじゃないかな？」

「こ、ことりは何を言い出すんですか!?なぜ私が穂乃果と結婚しなければならぬのですか！」

「海未ちゃん、慌てすぎ…」

「仮に穂乃果が男の人だとしても、それは絶対にイヤです！」

「そんな、海未ちゃん…全否定しなくても」

「こんな面白い加減な人と、一生連れ添うなど……とても耐えられませんが……」

「そうかな？意外とお似合いのカップルだと思うんだけどなあ」

こどりは、ふたりの様子を見て、ニッコリと笑う。

「まあ、跡取りの話は別として……」

「こどりがおかしなことを言うからです……」

「ごめんね……。それで海未ちゃんは、何になりたいの？」

「私ですか？私は……」

「詩人でしょ？」

「違います!!」

穂乃果の言葉を、速攻で否定する海未。

「街でゴザ敷いて『あなたにピッタリの詩を書きます』みたいな」

「いるね、ベレー帽被って……」

「しません!!こどりまで乗らないでください!」

「それじゃ、あの詩はいつ披露するのさ？」

「ですから、あれは趣味で書いたもので……ああ、穂乃果だけには見つかりたくありませんでした……」

「それで？詩人じゃないとすると……」

「私は……」

「わかった!オリンピック出場だ!」

「オリンピックに弓道はありません!!」

「あるじゃん!」

「あれはアーチェリーです。弓道とは似て非なるものです!」

「そっか……」

「穂乃果ちゃん、それじゃあ、全然話が進まないよ……」

「もういいです……」

「ごめん、ごめん……。真面目に聴くから……」

「私は……私は、いつまでも3人仲良くいられたらいいな……と思います」

「えく……それは夢じゃないじゃん!」

「ですが……と言いますか、将来どんなことがしたいのか……まだ、漠然としていて……。考古学者などの研究者になりたい……と思っではいるの

ですが…」

「海未ちゃん、頭良いもんね！海未ちゃんならなれるよ」

「ことり…ありがとうございます」

「考古学者って…インディジョーンズのこと？」

「穂乃果…どこかに消えてください…」

「うう…どうして、こんなに対応が違うのさ…」

穂乃果は、ことりに涙目で訴えた…。

くっくくく

Winning wings
　　～アフターはギター
の調べ～

GW明けのゲー校…。

登校した綾乃の挨拶に、クラスメイトが応える。
だが、その胸中は十人十色。

羨望の目で眺める者。

嫉妬で対抗心を剥き出しにする者。

敢えて無関心を装う者もいる。

「綾乃、おはよう！」

「おはよう、さくら！」

「ふふふ…」

「どうしたの？」

「周りの顔を見ればわかるでしょ…みんな相当衝撃を受けてるわよ。」

『Project A』は大成功だったみたい」

「…なんか騙してたみたいで、ちよつと心苦しいけど…」

「まあ、この世界は狐と狸の化かし合い…喰うか喰われるか…だからね。特にあなたを『格下』と見ていた連中にとっては、気分が悪いんじゃない？」

「はあ…」

「さて、噂をすれば…来るわよ…ボスが…」

さくらの目線の先には、島崎圭がいた。

「おはよう、藤さん！いや『AYAさん』と言った方がいいかしら」

「おはよう(ぎゅ)…」

「いきなり専属モデルとは…なかなか面白いことをしてくれるわね」

？」

「はあ…そうですか…」

「浅倉も！」

「なにか？」

「しらばっつけて！」

「なに怒ってるのよ？」

「ふん！ドツグだかキャッツだか知らないけど、せいぜい頑張ることね。あなたみたいなの『ポツッ出』がやっていけるほど、この世界は甘くないんだから」

「はい…ご忠告ありがとうございます」

「…まあ、これで立場が逆転したなんて、考えないことね！」

『お圭！』

さくらの大きな声を出したので、クラスメイトの視線がすべて集まった。

「なによ、浅倉!？」

「いい加減にしたら？別に仲良くしろ…とは言わないけど、そうやって先輩風吹かせて、あくだこくだはどうかと思うんだけどねえ」

「あんたこそ、カリスマモデルとか言われて、調子に乗ってるんじゃないわよー！」

「はい、はい…。『前座さん』で焦ってるかも知れないけど、人に当たるのは良くないなあ。まずは自分の心配をしたら？」

「弱小事務所が、吠えるんじゃないわよー！」

「この際だから、ハッキリ言っておくわ。学校の中じゃ、芸歴の長い短いは関係ないから。もちろん事務所の大小もね」

「くっ…」

「ホームルーム、始まるわよ」

さくらに促され、圭は舌打ちをしてから、席に戻っていった。

「どうかした？」

さくらは自分の顔をブーツと見ている綾乃に、声を掛けた。

「さくらって、強いんだね…」

「そう？多かれ少なかれ、この世界にいる子は、みんなそうだと思うよ。ただ、その主張すべきポイントがどこかは、人それぞれ違うんだろうけど」

「前々から、島崎さんはあんな感じ？」

「まあね…。『四天王』って言われてる私が、毎日登校するのが目障りなんじゃない？」

「四天王？」

『J事務所』のジュニア：『田中 成臣』、『Aファクトリー』の15期生で将来のセンター候補：『小野 ルカ』：…そして二世俳優の『井原 龍太』

「名前は聴いたことあるかも…3人も、まだ会ったことがないけど」

「一週間に一度、顔を出すか出さないかだからねえ」

「それだけ忙しい…ってこと？」

「まあ、そうね…で、その3人と…私を含めて四天王…って呼ばれてるの。私はその呼び名、好きじゃないけど」

「それと島崎さんの話はどう繋がるの？」

「前にもは言ったけど、無駄に芸歴だけ長くて…子役時代からチャホヤされてきたから、なんでも思い通りにならないと、気が済まないのよ。それなのに自分よりも『後輩』が活躍するから、許せないわけ」

「はあ…」

「それで、毎日学校に来てる私を標的に…。目障りで仕方ないのよ」

「なるほど…他の3人は学校にいないから…ってことか…」

「そこにあなたが加わったものだから…」

「それは心中穏やかじゃないわね…」

「いつになったら、目を醒ますのやら…」

さくらも綾乃も、事務所の方針が学業優先であるため、平日に休むことは、あまりない。

そもそも、2人ともモデル一本なので、そこまで忙しくない。

撮影は都内近郊で行われる為、泊まりもないし、土日…いや、放課後でも充分こと足りる。

それ故、さくらは知名度のわりには、出席率が異様に高いのだ。

「それより『アフター』は、何を受けるか決めた？」

「うん、それなんだけど…永井さんの勧めもあつて『ギター』を習おうかと…」

「へえ…そっちに行ったか…」

『アフター』とは、一般の学校でいうなら『部活』のことである。

ただし、ここはゲー校。

通常授業にも発声やダンスは組み込まれているが、アフターでは、専属のインストラクターから、徹底的な指導が受けることができる。

コースは演技、歌、ダンス、楽器の4つ。

『部活』である為『入部』は自由だが、仕事の忙しさとアフターへの参加は反比例となる。

逆に言えば、さくらのように時間に融通が利く者は、レクチャーを受けられない手はないのだ。

中学を卒業したら、J—BEATでのモデル活動は終わる。

そのあとは、その上の年齢層をターゲットにした『Super—J』に『昇格』するのが規定路線。

だが、さくらは将来、女優になることを見据え、アフターは演技を選んだ。

モデルとしてのキャリアも長くなり、表情を造ることに対しては、得意と言えた。

それは、つまり感情を表現するということ。

さくらは

「私は運動音痴だし、リズム感もないから…消去法で残ったのが演技」と綾乃に説明したが、芝居をすることが、もつとも自分を活かせると感じていた。

一方、綾乃は…

スポーツをしていただけあって、リズム感はいい。もちろん運動神経は抜群だ。

しかし…敢えてダンスではなく…楽器を選択した。

「ギターが弾ける…というのは、この世界で生きていくうえで、大きなストロングポイントになる」

「さくらとは違う路線を歩んだ方がいい」

と永井のアドバイスを受け入れた格好だ。

確かに自分でも、人前で演技をする柄じゃない…とは思っている。

楽器は…ピアノ、ドラムという選択肢もあったが「ギターなら持ち運べる…どこでも練習できる」ということで、そうなった。

ゼロからのスタートだったが、去年一年間、黙々とレシーブとトスアップばかりしていたことを考えれば、反復練習もそれほど苦ではない。

永井が綾乃にギターを勧めた、もうひとつの理由。

それは…

「左利きのギタリストは、目立つ！カッコいい！」
だった…。

~ ~ ~ ~ ~

季節は巡り、春。

綾乃は中学3年生となる。

進級とともに、4名のクラスメイトが姿を消した。

その中には、J事務所の田中成臣の名前もあった。

表向きは一身上の都合により…となっているが、実際は素行不良…
飲酒、喫煙…が原因で解雇された…というのが、もっぱらの噂だ。

まさか、中学生で…と思うが、芸能界というところは、そういうことが起こりうる世界らしい。

「調子に乗ってるからよー!」

無事(?)進級した島崎圭は、田中の退学を聴き、そう言い放った。

だが、一般社会に比べれば、比較にならないほど、甘い誘惑が多いのは事実であろう。

当然、綾乃もさくらも、社長から耳にタコができるほど「絶対にやってはならない」と指導を受けているが…それでも、明日は我が身と、毎日、心の中で唱えている。

さくらが女優デビューに向かって着々と準備を進める一方、綾乃も次の活動についての戦略が練られていた。

それはJ—BEAT編集部から出向してきた『菊原』が主導となつて行い『Project A2』と名付けられたが、今はまだ、公にはできない。

極秘計画だった。

綾乃は、この4月から大きく変わったことがふたつある。

ひとつは後輩ができたこと。

高齢化の進む事務所が、若返りを図るべく、新人2名を採用したのだ。

名前は『阿部 かのん』と『鈴木 萌絵』。

どちらも中学2年生…綾乃とさくらのひとつ下になる。

阿部かのんは秋田県出身。

身長は161cm。

幼い頃から民謡で鍛えたノドを武器に、地元ではコンテスト荒しとして、名を馳せていた。

性格はおっとりしているが、自らのセールスポイントは、雪国育ちの白い肌と、自称『Eカップ』という豊かなバストと語る。

ただし、それはあくまでも見た目の話で、歌には絶対の自信を持っていた。

一方、鈴木萌絵は大阪出身。

身長は158cm。

こちらも地元では有名な、カラオケクイーンだ。

かのんが柔であれば、萌絵は剛。

パワフルな歌声が特徴だ。

父親は千葉、母親が山梨出身とのことで…いわゆる、ステレオタイプの関西人ではないが…ポケもツツコミもできる明るいキャラである。

萌絵も、かのんほどではないが胸が大きい。

綾乃ときくらはともに『B』…。

2人は

「まあ、胸が大きいモデルはいないから…」

と励まし合っているらしい。

確かに、読者である女子には、そういう体形は好まれない。

だが、かのんと萌絵は…

まだ、あどけなさは残るが、将来はグラビアアイドルとして、十分やっつけていけそうなルックス、スタイルである。

しかし、本人たちには、そういう意識はない。

ともに（偶然ではあるが）外見優先のアイドルとしてスカウトされた事務所を、断っていた。

敢えて飛鳥プロを選んだのは、自分達の実力を認めてくれたからだ。

ふたりのCDデビューは、まだ先。

どのようなジャンルで、どうするかは…未定。

いや、決まっているが、まだは明かせない。

今は「歌の上手い中学生」という位置付けである。

地方出身の2人は、社長宅で下宿することになった。

都会に不案内な彼女たちをサポートするのは、綾乃ときくら。どちらも独りっ子である為「妹ができたようだ」と喜んだ。

くつづく

Winning Wings 駆け抜けた一年

J―BEAT編集部が仕掛けた『Project A』は、目論み通りの成果をあげる。

さくらとAYAのファッションコンセプトを明確にしたことにより、ふたりの個性が際立ち『C・A・2』の人気は爆発する。

さくらを真似する少女を『サクラ』、AYAを真似する少女は『AYA―X（アヤックス）』と呼ばれ、そのファッションは社会現象となった。

それでもふたりは、その人気に傲ることはない。

事務所の方針によるところが大きいのだが、授業の出席率も高く、ともに成績も悪くない。

何があっても、常に中立。

そんな様子に：最初は綾乃と距離を置いていたクラスメイトも、夏を迎える頃には自然に接するようになっていた。

島崎圭は相変わらずだったが、それでも、さくらや綾乃に絡んでくることは、さすがにない。

どうやらそれは、得策ではない…と判断したようだ。

いつしか綾乃は四天王と並び称され、同じ時期にブレイクし始めた男子2人とともに（合計7人は）『ななつ星』と呼ばれるまでになった。

先述した通り、ゲー校は中等部、高等部があり、それぞれ芸能科、普通科に別れている。

しかし両科の行き来はできない。

校舎は同じ敷地内にあるが、その間はフェンスによって完全に分断されている。

これは普通科に通う生徒による（芸能科の生徒への）盗撮やストーリー行為を防止する為：と言われている。

その替わり、芸能科の中等部と高等部は、カフェテリア：いわゆる学食：を挟んで建屋が繋がっており、昼食時は中高生関係なく、同じスペースで時間が共有できる。

そういったことから、綾乃はさくらに紹介されるなどして、モデル仲間の先輩と交流を持つようになった。

事務所は別だが、プライベートでも親しくなり、放課後一緒に食事をしたり、映画に行ったり：ということも増えた。

モデルとして、まったくの素人だった綾乃には、こうした遊びも含めて、何もかもが新鮮であり、勉強となった。

その経験は確実にモデルの仕事にフィードバックされ：特に『感性』が高められ、単に『ＣＯＯ』と言うだけでなく、その中でも強弱や明暗を付けることができるようになっていた。

こうして綾乃は、表参道で撮影された『写真』から始まった激動の一年を終える。

それは、これまでバレーボール一筋で、脇目も振らず練習してきた綾乃にとって、公私とも充実した一年だった。

浅倉さくらは、中学卒業後に女優デビューする計画の為、着々とその準備を重ねていた。

事務所の社長：原も、もちろん本人も：話題ありき、ルックスありきの仕事など望んでいない。

やるからには実力で勝負！

だから、今の人気にあやかり、数々のドラマ出演のオファーがあっても『時期尚早』：とすべて断っている。

中学の残り一年はモデル業に専念し、学校の『アフター』などで、

しっかりとした演技力を身に付ける…そう思っていた。

「売り時を逃すのでは？」と言う声もあつたが、焦って失敗すれば、そのレツテルは一生付いてまわる。

挽回するのは容易ではない。

あと一年。

さくらは、再び開花の時を待つ。

くつづく

W i n n i n g w i n g s \ f \ t b o l d
e s a l \ n \

綾乃に起きた、もうひとつの変化。

それは…

『フットサル』を始めたことだった。

誘ったのは、別の事務所のモデルで、ゲー校高等部3年の『山瀬寧々』。

2000年代初頭は、Jリーグのバックアップもあり（アイドルを中心とした）芸能人女子のフットサルが花盛りであった。

合計10チームほどが参加し、リーグ戦も行われていた。

較べて今は…その頃ほどの盛り上がりはない。

それでも事務所の垣根を越えて、数チームが存在している。

寧々から誘われたのは「バレーボールをしていた」と、何かの拍子に話したのがきっかけだった。

「フットサル…ですか？」

「体力余ってるなら、ちょっと顔出してみない？」

「えっと…バレーボールなら、そこそこ自信ありますが、それ以外の球技はあまり…」

「いいのよ。最初から上手い人なんていないし」

「まあ、それはそうですね…」

「フットサルって、1チーム5人でやるスポーツ…って知ってる？」

「なんとなくは…」

「これが…コートが小さいから…つて、舐めちゃいけないの！意外とハードで…交代選手がいないとキツイ、キツイ…。だから、ひとりでも仲間は多い方がいいのよ…どう？」

「…はあ…わかりました…そういうことなら。でも、本当に期待しないでくださいね…」

綾乃は一年間（授業でダンスなどはあるものの）スポーツとは無縁の生活を送ってきた。

もちろん、その期間はこれまで体験したことがない、とても充実した時間だった。

しかし、長らく…自らを鍛えて、ライバルと競い合い、戦いに挑んできた身である。

少なからず…物足りなさ…みたいなものがあった。

離れてみてわかる。

…やっぱり、バレーボールが好きだったんだな…

そんな時に舞い込んできたフットサルの話。

競技はまったく違うが、身体を動かすことは悪くない。

むしろバレーボールだと、逆に本気を出しづらい。

明らかに『引かれる』。

そういう意味からすれば、ゼロからのスタートは、自分に新鮮な刺激を与えてくれるのではないか。

そう思った。

迎えた初練習の日。

フットサル場には、既に10名ほどが集まっていた。

全員、20代前半までのモデル仲間。

半分くらいは面識があったが、残りの半分は「初めまして」だった。

指導は元Jリーガーの『石井』という男性コーチが行う。

準備運動を済ませると、早速ボールを使った練習に入る。

まずはパイロンを並べて、スラロームしながらのドリブル。

足でボールを扱うことが初めての綾乃。

コントロールが覚束ない。

大きく蹴りすぎたり、パイロンにぶつかったりして、なかなかスムーズに前に進まない。

ただ、周りを見ると、半分はそんな感じであった為、少しだけホツとした。

次は2人一組になってのパス交換。

しっかりボールを止めて、インサイドキックでボールを転がして、相手にパスする。

距離も短く、比較的簡単な練習なのだが、ここでも綾乃は苦戦する。トラップができない。

来たボールは足をすり抜けていき、何度も後ろに走った。

さすがにこれはショックだったようだ。

…ここまで、酷いとは…

「はあ…」と大きく溜め息をつく。

しかし、簡単になんでも上手くいつたら面白くはない。

下手ということは『伸び代』があるということ。
練習をすれば、それだけ、成果が出る。
そう思うと、落ち込んではいられなかった。

そして次はシュート練習。

フットサルはサッカーに較べて、コートもゴールも小さい為、シュートはゴール前でのテクニックが重視される。

いかに『ゴレイロ(キーパー)の隙を突いてシュートを撃てるか』：が、勝敗のカギとなる。

しかし、それは上級者の話。

素人同然の彼女たちには、まず『いかに正確にゴールの枠内にボールを蹴れるか』が求められる。

コーチの石井に『シュートするポイント』を教わった綾乃は、転がってきたボールを、ダイレクトで思いきり蹴った。

「おおー」

メンバーが、そのボールの軌道にどよめく。

綾乃が振り抜いた右足は、タイミング良くボールを捉え、ライナーでゴールへと飛んでいった。

思わずゴレイロ役を務めるコーチの石井も

「ナイ(ス)シュート」

と声を掛けた。

ここまで『いいとこなし』だった綾乃。

しかし、このシュート練習では人が変わったように、低く、鋭い軌道でボールが枠に飛んでいく。

そういえば、綾乃は小学生時代、バレーボールでスーパーエース

だった。

トスをスパイクするのと…転がってきたボールをシュートをするのと…どこか合い通じるところがあるのだろう。

フイーリング？

タイミング？

言葉では表現できないが、身体が勝手に反応しているのを、綾乃自身が感じていた。

「あの…次、左で蹴ってもいいですか？」

綾乃はしばし、自分が左利きだということを忘れていた。

ボールを蹴ること自体、ほぼ初めてに近い状態であった為、周りを見ながらそうしていたら、知らず知らずに右足を使っていた。なんとなくやりづらさを感じていたのだが…ふと、気付く。

…そうだ、私、左利きだったんだ…

…あれ？でも、足にも『右利き』『左利き』ってあるのかしら？…

そんなことを考えながら、訊いたのが、さっきの言葉。

もちろん、石井はダメだとは言わない。

そして、不用意にOKしたそのセリフが、悲劇を招く。

「くぐー。」

コロコロ…

バシッ！

どすっ！

「ごほっ！」

「コーチ！」

「…う…あ…うう…」

「大丈夫ですか!!」

「…タ…マ…が…ダメ…かも…」

「コーチ…」

何が起こったのかと言うと…

綾乃が左足で放ったシュート。

それは、先ほどまでとは桁違いの速さで、ボールが飛んでいき…
不意を突かれた石井の急所に直撃した。

いや、その球筋を目で追ってしまい、避け損なつたと言うのが正しいかもしれない。

地を這うような…という言葉があるが、まさにそれ。

最後は少しホップしていた。

なかなか女子では見ることでできない、凄い一撃だった。

…ひよつとして、俺は、とんでもない『化け物』を見つけたんじゃないだろうか…

石井は、股間を押しえ踞（うづくま）りながらも、そんなことが脳裏に浮かんでいた。

くつづく

ときどき、S　く絵里、希、にこの自己紹介く

「絢瀬絵里です。趣味は…特にありません。今のところ、入りたい部活とかはありません。これから、探してみます…」

それが、のちに音ノ木坂の生徒会長となる…絢瀬絵里…の自己紹介だった。

4月。

この年の音ノ木坂の新生は、約1000人。

例年より、50名ほど少ない。

伝統ある学校なのだが、近くにできたUTX学園に人気を奪われて
いるのが原因だ。

入学式が終わり、ホームルーム。

担任から自己紹介するよう指示があった。

出席番号（五十音）順で…ということになり、最初に挨拶したのが
絵里だった。

…絢瀬さん…か…

…綺麗な人だな…

同じクラスになった…東條希…は、絵里に見惚れていた。

いや、他のクラスメイトもそうだった。

無理もない。

実際、絵里は新入生100名の中で、一際目立っていた。それは『誰もが羨む美貌の持ち主』だからに他ならない。長い手足、完璧なスタイル、碧色の瞳…そして金色に輝く長い髪…。一目で『異国の血』が流れていることがわかる。

ただし、見た目の華やかさと違い、どこか…人を寄せ付けない…そんな雰囲気があった。

それは先程の自己紹介にも表れていた。

「私にあまり関わらないで…」

希には、そう聴こえた。

…ひよつとして、私に似てるかも…

彼女の姿を横目で眺めながら、希はそんなことを思っていた。

ほどなくして、自己紹介は希の番になったが、ボーツと絵里を見ていたので、そのことに気付かない。

「東條さん？」

担任に名前を呼ばれて、ようやく我に返った。

「あ、すみません…私ですね」

慌てて立ち上がり、前に進む。

「東條希です。希望の『希』と書いて『のぞみ』と読みます。趣味は読書と…占いです。入りたい部活は…まだ決めてないです…。宜しく願います」

恐らく、周りのクラスメイトの倍はしてきたであろう自己紹介。それでも、特に気の利いたことも言えず、淡々と挨拶してしまったことに、終わってから自己嫌悪に陥った。

…ああ、高校に入ったら積極的にならなきゃ…って思ってたのに…

席に戻って、軽く頭を抱えた。

希の父は有能な人物で、仕事で大きなプロジェクトが企画されると、その立ち上げ部隊の一員として、現地へと駆り出された。

その影響で、希はこれまで5回ほど引っ越している。

東京で生まれ、北海道、オーストラリア、奈良、栃木と移り住み、昨年東京に戻ってきた。

その父と母は、この春からタイへ。

しかし希は日本に残った。

タイには数々のパワースポットが存在する為（スピリチュアルな世界に興味がある希にとって）『魅惑の地』であることは間違いなかったが「そろそろ落ち着きたいな…」と考え、親元から離れることを選択したのだ。

そういう事情から、希には『幼馴染み』や『古くからの友人』と呼べる人がいない。

なにせ、数年もすると、その土地を離れてしまうのである。

「また会おうねー」などと約束しても、現実には厳しい。

なかなか、そうはならない。

そんなことが解り始めてから、意識的に『友達を作ること』を避けていた。

付き合いをまったくしない…ということではない。

ただ『親友』と呼ぶような仲間は、不要と考えていた。

…どうせ、すぐに別れちゃうんだし…

だから自ら誘って『何かをしよう』などとは思ったことはなく、ひとり静かに本を読むことが、彼女にとっての日常だった。

心境に変化が起きたのは、父のタイ行きが決まった…半年前…のと。

国内の転居ならいざ知らず、今からタイと言われても…という感じだった。

向こうでの生活に不安がある。

何年後に帰国するかわからないのも、心配だった。

既に受ける高校も決めている。

もう、そろそろ落ち着いてもいいのではないか…と思った。

そして…『親離れ』したい時期でもあった。

結局、無理を言って国内に残り、ひとり暮らしをすることを、希は選ぶ。

そうなる…

友達のひとりやふたり、居てもいいのではないか…と思うようになった。

いや、居たほうがいい。

…このまま『親友』という存在ができないまま、大人になるのは寂しすぎる…

高校進学を機に、自分を変えよう！

それが希の決意だった。

…見つけた…

…私と同じ『匂い』のひと…

…自分の殻に閉じ籠って、他人にスキを見せないひと…

…絢瀬絵里…

…きつとあの人となら仲良くなれる…

…きつと…

そして、この日から希の…絵里に対する『ストーカー行為』が始まるのだった…。

「最後は…矢澤さん」

「はい」

担任に名前を呼ばれた少女は、明るく返事をした。

「みなさくん、こんにちは。矢澤にこです！一個じゃなくて、にこ。」

『ニコニー』って呼んでね！将来の夢は、宇宙N.O. 1アイドルになることです！応援ヨロシクね！ニコッ！」

…最後の最後に、凄いキャラが残ってたわ…

…ちっちゃいけど…頭、悪そうだけど…ハートは強そうね…

…気持ちを強く持つこと…それは、見習わないと…

それが東條希の、矢澤にこに対する第一印象だった。

~^~U~U~

Winning wings 勝利の女神 vs 関西の女神

夏。

さくらと綾乃のふたり：『C・A・2』：の仕事は順調だった。

さすがに『サクラ』『AYA-x』といったファクションの、爆発的なブームは落ち着きを見せている。

それでも、J-BEATの発行部数は落ちることなく、むしろ増加していた。

ちやうど海外でも日本の『カワイイ』が注目され始め、その追い風にも乗ったと言える。

さくらはJ-BEAT卒業後の女優デビューを目指し、着々と準備を進めていた。

こちらは綾乃の『Project A2』に対して『S・M・A・P (Sakura model→actress project)』と呼ばれている。

もちろん綾乃も、その日に向けて『特訓』を続けていた。

そんな中、綾乃はフットサルの試合に出場することになる。

芸能界の女子8チーム集まったの総当たり戦。

関西と九州からも、それぞれ1チームずつ参加した。

数年後には正式に『日本女子フットサルリーグ』が開幕する。

人気が下火になりつつあった女子のフットサルを盛り上げようと、

久々に開かれた大きな大会だった。

綾乃は：フットサルを始めてから、わずか3ヶ月足らずで、チームの主力選手になっていた。

元来、運動神経はいい綾乃。

初めは足でボールを扱うことに苦戦していたが『左足』を使うことを覚えてからは、もの凄い勢いで上達していった。

もちろん本人の努力もある。

家に帰ってからリフティングや、足の裏でボールをコントロールするなど、影ながら練習を重ねてきた。

その結果、先輩たちを差し置いて、レギュラーに抜擢されたのである。

フットサルとサッカーでは、コートやボールの大きさ、接触プレーの禁止など、数多くの相違点がある。

しかし、一番わかり易いのは、5人でプレーすることだろう。

ポジションは『ゴレイロ』『フィクソ』（もしくは『ベッキ』）『アラ』『ピヴォ』と呼び、それぞれサッカーで言うところの『GK』『DF』『MF』『FW』に当たる。

綾乃が任されたのは、右のアラ。

コーチの石井は、綾乃の左足にある期待を持っていた。

その為の起用。

大会は横浜にあるアリーナで行われた。

綾乃たち有名モデルや、アイドル、お笑い芸人が一同に会すること：入場料が安価なこと：抽選で豪華景品があたること：などの理由により、会場は満席となった。

綾乃たちの初戦は関西のチーム。

芸人が主体となっているが、プレーは真面目で、歴史もある強豪だ。

この大会のオープニングゲームでもある。

多くの業界関係者とファンが見守る中、綾乃たち『Deusa da
a v i t ・ r i a (デウーサ ダ ヴィットーリア)』と関西芸人
チーム『K a m i i G o d d e s s (カミガッダス)』…ともに『女神』
を名乗るチーム同士の試合が始まった。

だが、開始早々アクシデント発生。

相手チームのゴレイロが倒れこんだのは、ホイッスルが鳴ってすぐ
のことだった…。

なぜか。

中盤でパスを受けた綾乃が、左足を振り抜く。

その瞬間…

おお…という、どよめきが会場から起きた。

観戦していた関係者たちも、思わず声をあげる。

綾乃の左足から放たれたボールは、低い弾道でゴールに一直線に向
かい…

相手ゴレイロの顔面を捉える…。

そのこぼれ球を山瀬寧々が冷静に押し込み、ゴールネットを揺らし
た…。

D d v (デウーサ ダ ヴィットーリア) 先制!

「なんだ、今のシュートは…」

「日向小次郎のタイガーショットだ！」

「いや、松山光のイーグルショットだろ！」

「いずれにしても、あんなシュート見たことない…」

ざわめく観客たち。

「名付けて『キャノン砲』…いや『Kーアヤノ（ん）砲』…」

ベンチで石井が呟いた。

うまい！と言いたいところだが、Kの意味は不明…。

狙い通りだった。

練習で綾乃のシュート力を…まさに『身をもって』体感した石井は、この戦法でイケると踏んでいた。

ゴールを決めたのは寧々だったが、ほぼ綾乃の得点と言っている。

フットサルではあり得ない…セオリーを無視した、掟破りのミドルシュート。

コートの狭いフットサルでは『人口密度』が高い為、遠目からシュートを打つても（敵味方関係なく）ボールがブロックされてしまう可能性が高い。

しかし綾乃は、長年ウイングスパイカーとして培ってきた『コースを見極める目』…つまり、どこにスパイクを打てばよいのか…を瞬時に判断できる能力…を持っていた。

それが、ここでも活かされる。

漫画に「ゴールが見えたらシュートを打て」という有名な台詞があるが、綾乃の場合は「コースが見えたらシュートを打て」だった。

仮にシュート自体が決まらなくても、枠に飛べば、そのこぼれ球を

狙うことが出来る。

そういう意味では、さっきの先制点は理想的な展開だった。

綾乃をアラ（MF）に置いた理由はミドルが打てることだが、もうひとつ。

ピヴォ（FW）に置いた場合、至近距離からのシュートは、あまりに危険…そう判断したからだ。

それでも…

「あのキーパー…立ち上がれないけど、大丈夫か？」

「バカ！知らないのか？フットサルじゃ、キーパーじゃなくてゴレイロって言うんだぜ」

「どっちでもいいよ…あ、担架が運ばれてきた…」

「モロ、顔面いったもんな」

「かわいそうに…」

…ということで、Kamii Goddessは早くも選手交替を余儀なくされる。

負傷退場した選手が出てしまったことは本意でなかったが、これで綾乃たちは完全にゲームを支配した。

あんなシュートを見せられれば、当然、綾乃へのマークは厳しくなる。

逆を言えば、他の選手へのマークが甘くなるということ。

綾乃にパスが渡れば、シュートを狙うフリ…フェイントをして、ボールを叩（はた）く。

こうして自由にボール回しながら、ポイントゲッターである寧々が、ゴールを狙っていく。

それこそが石井の意図するところだった。

結局、この試合は6―0で完封勝ちを納める。
綾乃の放ったシュートは、初めの1本。
得点はゼロ。
アシストは1。

しかし結果以上に強いインパクトを残したことは間違いなかった。
たった1試合…いや試合開始1分でAYAこと藤綾乃は、フットサル界において、一躍注目の人となったのである。

くつづく

ときどきμ S く花陽と凜の夢く

8チームの総当たりで行われる、今回のフットサル大会。

初日は4試合戦い、綾乃たち『Deusa da vit・ria
(デウーサ ダ ヴイツトリーア)』は、3勝1分で終えた。

注目の綾乃はここまで、ノーゴール。

どこのチームも『Kーアヤノ(ん)砲』：あれを見せられたら、マークが厳しくならざるを得ない。

それでもシュートを打つチャンスはあった。

シュートフェイントを多用し、ゲームメイクに徹した格好になったが：実際は、初戦で相手ゴレイロを負傷退場させてしまったことが頭にちらつき、ミドルを打つのに躊躇してしまった：というのが実情だ。

その辺りはコーチの石井も察したようで、試合後、綾乃は何やらアドバイスを受けた。

初日が終わり、その負傷退場した選手：芸人の『山田ベニ子』を見舞った。

検査の結果、脳には異常が見られなかったとのことで、一安心する。

ただし、前歯は1本欠けたらしい。

「まあ、これはこれでネタになるから。気にせんときい」
と芸人らしい言葉をもらい、綾乃はその気遣いに感謝した。

翌日、大会2日目。

5試合目となるこの試合で、綾乃の左足が爆発する。

シュートフェイントから、パス。

そのまま前に抜け出し、リターンを受け、左足を軽く振り抜く。ボールはゴレイロの脇をすり抜け、ネットを揺らした。

実際は力を抜いたコントロールショットなのだが、相手ゴレイロが身構えて、身体を硬直させてしまう為、反応が遅れゴールを許す…という状況。

このパターンがはまり、綾乃は寧々とともにゴールを量産、この試合を含め、3試合で8ゴールをあげる。

チームは5勝1敗1分で優勝。

得点王こそ寧々に譲ったが、綾乃の存在感は十分で、関係者にもファンにも、その姿を焼き付けたのだった。

それをスタンドで観戦していたのは…

中学2年生の『小泉花陽』と『星空凪』だった。

花陽はフットサルには興味はなかったが、無料で複数のアイドルが見られるとあって、親友の凪を誘って足を運んでいた。

目当てのアイドルが登場する度、嬉々としてはしゃぎ、こと細かにその解説をする花陽。

一歩間違えれば『ウザい』と感じてしまうところだが、凪はそんな彼女が、愛おしかった。

「かよちん、アイドルを語ってる時は、本当にイキイキしてるにや」
「あ、つい夢中に…。ごめんね…付き合わせちゃって…」

「ううん、大丈夫だよ。凜、スポーツ観るの好きだし。だけど、それよりも、かよちんの嬉しそうな顔を見るのは、もっと好きなんだにや」
「…ありがとう。凜ちゃんは本当に優しいね」

「違うにや！かよちんの優しさには敵わないにや」
「え〜凜ちゃんの方が…」

花陽はそこまで言いかけて「あつ！…」と、自分の手で口を塞いだ。
毎回毎回、同じやり取りをしていることに気付き

「また、いつもの繰り返しになっちゃうね」
と、凜とふたりで笑った。

「それにしても、アイドルって大変なんだね。ただ可愛いだけじゃなくて、こんなこともするんだ…」

「うん。一口にアイドルって言っても、数えきれないくらいいるからね。可愛いとか、歌やダンスが上手とかはもちろんだけど、何か特徴がないと生き残れない、厳しい世界なんだよ」

「そうなんだ…。凜ね、かよちんがアイドルになったら、またここから応援するね！」

「えっ？…花陽が…アイドル？…いやいや、それは…」
「ならないの？」

「確かに昔はなりたかったけど…花陽じゃ、アイドルなんてなれないもん。可愛くないし、太ってるし、人見知りだし、運動神経ないし…」
「かよちん!!そんなこと言うと、凜は怒るよ!」

「…ご、ごめん…でも本当のことだから…」
「そう思ってるのは、かよちんだけにや」

「凜ちゃん…」
「凜はね、かよちんがアイドルになったら、いっぱい、いっぱい応援するんだから!」

「…うん、ありがとう…。あ、でも凜ちゃんは？」

「にや？」

「凜ちゃんは何になりたいの？」

「凜のなりたいもの？…うくん…ラーメン屋さんかな？」

「あははは…相変わらずだね」

「…ちよつとバカにしてるでしょ？」

「そんなことないよ。凜ちゃんの作ったラーメンなら、絶対に美味しいもん！」

「まだインスタントしか作れないけどね…」

「これからだよ。だって、道具とかなんにも揃えてないんだから…」

「そうにや！さすが、かよちん！凜の言いたいことが、わかってるう」

「ふふふ…。あっ！あのね、凜ちゃん。花陽、このサッカー見てて思ったの…。凜ちゃんこそ、アイドルになればいいんだよ」

「…かよちん？」

凜は花陽の額に、自分の手をかざした。

「何してるの？」

「熱はないにや…」

「えっ？」

「だって、凜がアイドルなんて…かよちん、突然おかしなこと言いだすんだもん」

「おかしくないよ。凜ちゃん、運動神経抜群だから、きつと、ダンスだつてすぐに覚えちゃうし…それに、ほら、みんなアイドルつて、ちっちゃくて可愛い娘ばかりだし…」

「ちっちゃいのは認めるけど、可愛いくはないにや」

「そんなこと言うと、今度は花陽が怒るよ！」

「かよちん…」

「凜ちゃんは絶対に可愛いよ」

「そんなこと言うのは、かよちんだけにや…」

「もう、なんでみんな、凜ちゃんの可愛さをわからないんだろう」

「別にいいにや。凜はかちゃんが可愛いって言ってくれれば、それでいいにや」

「…」

「でも、アイドルの話は別として、これはやってみたいにや！」

「サツカー？」

「フットサルにや」

「そう、それ…。凜ちゃんだったら、バンバン点、獲っちゃうよね」

「当たり前にや！スピードなら負けないにや！」

「そうだよね！」

「でも…」

「ん？」

「あの人はちよつと違うかも…」

「あの人？」

「あの、ちよつと背が高くて、スラツとしてる人」

花陽は凜が指差す方向を見た。

「あ、モデルのAYAさんだね」

「あの人…」

「そうだよ。J—BEATのトップモデル…さくらとAYA…C.

A. 2の…」

「初めて見たにや…」

「凜ちゃんも、たまには読んでみようよ！浅倉さくらさんのファツションとか、似合うと思うんだけど…」

「凜はいいにや…自分の服は自分で決めるにや」

「まだ、スカートのことを気にしてるの？うん、もう何年も前の話なんだから、いい加減忘れようよ…」

「かよちゃんは『女の子』だから、凜の気持ちはわからないにや…」

「また、そういうことを言う…。あ、それよりAYAさんがどうかしたの？」

「えっ？ああ、あの人、凄くスリムだけど、メチャメチャ『バネ』があ

るな…って思ってるな？」

「バネ？」

「凜にはわかるんだ。あの人が、タダもんじゃないにや。絶対に何かスポーツやってたにや。凜はあの人と対決してみたいにや」

「へえ…」

…あとで調べておこう…

アイドルオタクの花陽でも、モデルまではカバーしていないようだ。

「じゃあね、凜ちゃん。また明日…」

「うん、かよちゃん！バイバイ」

観戦が終わって家路に着いた、花陽と凜。

夏休み期間中の為、明日は学校ではないが、一緒に図書館に行く約束をして別れた。

…凜が…アイドル？…

手を振って花陽を見送ったあと、凜は歩きながら、ひとり呟いた。

…にや、にや…

…あり得ないにや…

…かよちゃんのバカ！…

…凜がアイドルなんて…

…アイドルか…

…大勢の前で歌って踊るのって、どんな感じなんだろう…

凛はフリフリの衣装を身に付けてステージに立つ自分を、想像した。

しかし、それをすぐに消去する。

…それは凛だって、女の子らしくしてみたいよ…

…可愛いカッコとかしてみたいよ…

…でもね、無理なんだ…

…それはかよちゃんが一番知ってるでしょ…

…だけど…

気が付くと凛は、コンビニに寄り、J—BEATを買っていた…。

くつづく

とぎとぎに s く真姫の葛藤く

秋。

『西木野真姫』は放課後の音楽室でピアノを奏でていた。

それに聴き惚れるのは、数人のクラスメイト。

真姫が曲を弾き終わると、拍手が起こった。

「やっぱり、いつ聴いても素晴らしいわ」

「そう?」

「もう、せっかく誉めてるんだから、少しくらいは喜びなさいよう。まったく無愛想なんだから…」

「別に、誉めてくれなんて頼んでないし…」

「まあ、そういう媚びないところが真姫らしい…って言えばそうなんだけど」

クラスメイトのひとりはその言って笑った。

「ねえ、それで将来は音大に進むの? 医大に進むの?」

「えっ? あなたたちには関係ないでしょ」

「でもねえ…興味あるじゃない。医者で、お金持ちで、容姿端麗で、頭脳明晰…ピアノも上手…こんな絵に描いたお嬢様が、将来どうなるのか、気にならないわけがないわ」

「何年かしたら、美人女医とか言われて、TVに出てるかもね」

「やめてよ。私は外見だけで判断されるのキライなんだから…」

「それじゃ、高校はどうするの?」

「高校?」

「ほら、そろそろ志望校考えなきゃ…でしょ? 受験までは、まだあと一年あるけど、そろそろ進路指導もあるし…」

「私は音ノ木坂に行く予定…」

「音ノ木坂!？」

そこにいた全員が、揃って声を上げた。

「そんなに驚くこと?」

真姫は少し不満げな表情。

「えっ! あ…いや…てつきり私立のお嬢様学校みたいなどころに行くのかと…」

「ママ…母がね、あそこは由緒正しい伝統校だから、礼儀作法も身に付くし…って、やたらに推すの。まあ、勉強は家庭教師に教えてもらってるから、私は別に、高校なんてどこでもいいんだけど…」

「でもさあ、音ノ木坂って『危ない』って噂でしょ?」

「そうそう! 年々、入学希望者が減ってて、あと何年かしたら廃校になる…って聞いたことある」

「来年廃校になるわけじゃないんでしょ?」

真姫は興味ない…と言った口調。

それを受けて

「廃校にしたところで、あれだけの場所に、あれだけの土地を放置しておくわけにはいかないから『買い手』が付くまでは存続せざるを得ない…とは聴いてるけど…」

と、その中のひとりが言う。

「近くにUTXとかできたしね」

「パンフ見たあ? 凄くカッコいいよねえ」

「私はあるまり、好きじゃない」

そう言うと、真姫はスツと立ち上がり

「じゃあ、帰るから…」

と部屋を出た。

「えっ? ま、真姫?」

突然のことに戸惑うクラスメイトたち。

だが…

「いつものことって言えば、いつものことだけど…」

「ホント、気分屋なんだから…」

「根は悪い人じゃないんだけどね…」

「コミュ障ってやつ？」

「なのかな…」

…などと言われていた。

真姫は…いつからかだろうか…自分の立場について、葛藤していた。

「医者の娘として生まれ、何ひとつ不自由なく暮らしてきた。

それどころか、質、量とも有り余る物を与えられてきた。

しかし、ある時、ふと気付く。

それが『普通ではない』ことを。

そして、それは親が築いた地位や財産によるものであり、自分の力ではないことを。

確かに高価なものを身に付けてはいるが、それをひけらかすつもりはないし、自慢もしない。

「それ高いんでしょ？」なんて言われても、自分が誉められてるわけではない。

それよりも頭の良さとか、ピアノの上手さとか、自分の才能や実力を認めてほしい。

お金だけの人間と思われたくない。

そんな警戒心から、自分の心にバリアを張って生きてきた。

できれば、静かにしていたい。

友達は欲しいと思っっている。

でも、うわべだけの友達ならいらぬ。

医者娘などという『ラベル』を無視して、付き合ってくれる友達。

いる…。

いない…。

真姫はいつも、それで悩んでいた。

そして、相手にそんなつもりはなくても、ついつい、冷めた態度をとってしまった、あとあと自己嫌悪に陥るのだった。

…もつと、素直にならなくちゃ…

それは永遠の課題なのである。

父親の仕事上、似たような環境の子供と会うことがあるが、誰も彼も『見栄の張り合い』で、正直ウンザリしていた。

UTXに進学する生徒は、みんな、そういう人ばかりだと、真姫は勝手に思い込んでいる。

音ノ木坂に進学しようとしているのは、決して母親が推しているからだけではない。

なんの柵（しがらみ）のない、穏便な学校生活を送れるはず…。
そう考えたからだ。

しかし…

つい親に甘えてしまう自分。

それを否定したい自分。
そのアンビバレントな心情が、真姫を苦しめていた。

それはまた『医者になるという規定路線』と『音楽を続けたい』と
いう相反するふたつの気持ちに、どう決着を着けるかという戦いでも
あった…。

くつづく

Winning wings
（仮面ライダーと覆面シンガー）

例年よりも暖かかった冬が終わり、季節は春へと移り変わる。

3月は卒業のシーズン。

ふたりは「また、いつか会いましょう」とJ—BEATの誌面で読者に別れを告げた。

綾乃もさくらも無事に事務所との契約更新をして、来月から高等部に進むことが決まった。

しかし、ふたりとも、その上位誌にあたるSuper—Jのレギュラーモデルは務めない。

先述している通り、さくらは女優へ転身する。

事務所が水面下で進めてきた『S・M・A・P』が奏効し、すでに何本かドラマや映画の出演が決まっていた。

その初めの一步は、清涼飲料水のCM出演だ。

さくらは、卒業してすぐ：4月を待たずに撮影の為、海外へと旅立った。

そして4月…。

新年度に合わせて、彼女が起用された清涼飲料水のCM流される。いまや、浅倉さくらの名を知らない人はいない。

しかし、これまでモデル活動に専念していた為『動くさくら』を見るのは新鮮だった。

彼女にしてみれば、満を持してのCM。

この日の為に、みっちり勉強してきた。

その清々しくも、堂々とした演技はたちまち評判となり、まずは上々のスタートを切った。

時を同じくして、一際、異彩を放つCMが話題となる。

それはオートレースのCMだった。

日本の公営ギャンブルは4つある。

競馬、競輪、競艇：そしてオートレース。

以前、トップアイドルがレーサーに転向したことで話題になったが、一般的にオートレースは：4つの中で一番マイナーだと言っている。

これに対して、協会が勝負に出た。

知名度アップと観客数増加を狙って、これまでにない大規模なプロモーション活動を展開したのだ。

夏には、いわゆるイケメン俳優を集めて撮影された、オートレースに懸ける男たちの映画が公開される。

近年の邦画は、この手の『マイナー競技』にスポットを当ててるのが、ある種の流行りとなっている。

この映画もご多分に漏れず、内容はステレオタイプの青春ストーリーだが、素人（特に女性）の入門編としては、それで十分だと言え

た。

併せて、CMも何パターンか作られた。

そのうちのひとつが『仮面ライダーたちがレースをする』というものだ。

サイクロンやハリケーン、クルーザーやジャングラーに跨がった昭和ライダーたちが、オートレース場でしのぎを削る…というコント仕掛けのストーリー。

シニールな映像が笑いを誘う。

※他にウルトラマンver.もあるが、これはもつとシニールである。

そして、もうひとつのパターン。

こちらは映画公開を意識した作りになっており、その映像が組み込まれていた。

ここで注目を集めたのは、そのCMで流れている曲だった。

女性ボーカルの美しい歌声とハーモニー。

熱い戦いを繰り広げる男たちの映像とは真逆の…まるで子守唄のような優しいメロディ。

ことさら音量が大きくなりがちのCMの中で、一瞬『時が止まった』かと錯覚するような…静かな、しかし、確実に心に溶け入る曲…。

歌手名も曲名も公開されていない為、放送直後から協会へ問い合わせが殺到した。

だが「まだ秘密です」と、その正体を明かさない。いわゆる『覆面歌手』である。

それを受けて、すぐにネットを中心に正体探しが始まった。

歌声から複数いるだろうことは、容易に想像が付く。
では誰か？

現役のアーティスト？

往年のアイドル？

いやいや実は演歌歌手ではないか？

ボーカロイドだろ？…という意見もあった。

ワイドショーでは『候補』と呼ばれる歌手たちの声紋分析まで行い、
正体探しは過熱の一途を辿る。

それはいつしか、国民の関心事となっていた。

CMが流されてから、半月後。

webでフルコーラスが公開されるが、その反響は大きく、アクセス
スが集中。

すぐにサーバーがダウンした。

※営業的戦略により、敢えて公開を打ち切ったという噂もあるが、
真偽は不明。

そして日本中が焦れ始めた、まさにそのタイミングで、ついに協会
はその正体を明かすXデーを発表した。

次のGW：曆的には飛び石連休の平日になる木曜日…の夕方6時
から…ミニライブの形式で行うとのことだった。

くつづく

Winning wings
Xデー…その時μ
'sは?~

「うわぁーそうきたか!!」

協会が発表した『Xデー』について聴かされたTV局の報道デスクは、誰しもそう思ったに違いない。

GW中とはいえ、暦の上では…平日…となる木曜日の夕方6時。通常は、ニュースを放送している時間帯だ。

協会は、いまや国民の関心事となっている『覆面歌手の発表』を、敢えてこの時間にぶつけてきた。

しかも、単なる記者会見ではなく、本人登場でミニライブを行うという。

それは生中継せざるを得ない。

他局も同様に考えているだろう。

NHKがどう出るか…はわからないが、自分のところだけ録画…というわけにはいかない。

…となれば…

その時間帯における(TVの)占有率は、かなりのものになると予想される。

下手をすると、各局の合計視聴率は、70%とか80%を超えるかもしれない。

「これこそ、まさに電波ジャックだな」とあるディレクターは、そう呟いた。

そして当日…。

マスコミが集められたのは、小さなライブハウスだった。ステージ上には、2本のアコースティックギターと1台のキーボードが置かれている。

18時。

時間ピッタリに、進行役の男性が登場した。

「大変お待たせしました。それでは定時になりましたので、早速、ライブを開催させていただきます。CM曲の『風の誘惑』、そして映画『オートレーサー』の主題歌『スピードの向こうへ』の2曲です」

進行役の男性は、そう案内して袖に捌（は）けた。

入れ替わりにステージに現れたのは…

眼鏡を掛けた長身と…少しふっくらした色白と…小柄だがスタイルのいい…

3人の少女だった。

会場が、少しザワつく。

…えっ？誰だ…？

そんな反応。

しかし、一部の人間はその顔を知っているようだった。

彼女たちは、一列に並んで一礼すると、向かって左から長身が左利き用のギターを、色白がキーボードを、そして小柄が右利き用のギターを準備した。

「皆さん、こんばんわ。『夢野つばさ』です」と長身。

「『水野めぐみ』です」と色白。

「『星野はるか』です」と小柄。

「『シルフィード』です」
最後は3人声を合わせて言った。

「それでは聴いてください。私たちシルフィードのデビュー曲：『風の誘惑』です」

夢野つばさの紹介で、水野めぐみがイントロを奏で始めた…。

優雅なメロディと、メインボーカルを務める水野めぐみの、やわらかい歌声が会場に流れる。

それはまるで、上質なクラシックコンサートを聴いていたかのような時間だった。

演奏が終わると、会場に詰めかけた報道陣から、期せずして拍手が起こった。

「ありがとうございます。それではもう一曲、お聴きください。映画の主題歌：『スピードの向こうへ』です」

次は一転して、星野はるかのかの…掻き鳴らすような激しいギターリフから始まった。

フラメンコを思わせる情熱的なメロディ。

メインボーカルの：星野はるかのかの力強い歌声を、夢野つばさと水野めぐみのギターとキーボードが追いかけていく。

疾走感溢れる曲。

会場の熱量が一気に上がった気がした。

「ねえ、ねえ、ことりちゃん。この『夢野つばさ』ってさ、モデルの『AYA』って人じゃない?」

「うん。眼鏡を掛けてるけど、そうだと思う」

「まさか、あの歌を歌ってる人だとは思ってもありませんでしたね」

穂むらでTVを観ていた、穂乃果とことりと海未。

「華麗なる転身!つヤツだよね」

穂乃果は、自分のことのように興奮していた。

「かよちゃん、この人、フットサルの時に見たモデルさんにや!」

「AYAさんだね!」

「こちらは凛と花湯。」

「カッコいいにや!カッコ良すぎにや!」

「うん、すごいね、凛ちゃん!」

「かよちゃんもいつか、あんな風にステージに立てたらいいね!」

「花湯は無理だよ。楽器なんて出来ないし」

「それは、練習するにや!」

「そ、そうだけど…」

…あんなに堂々と人前で歌えたら、どんなに気持ちいいだろう…

花陽はその映像を見ながら、ステージで歌う姿を投影していた。

「えりち、どうやった？」

「音楽のことはよくわからないわ…でも…」

「でも？」

「ちよつと感動したかも…」

「へえ…」

「なに？」

「えりちにも、そういう感情があるんだ」

「当たり前でしょ…私だって普通の人間なんだから…」

「にひひ…」

「だから、なに？」

「そうやって、普段も、もう少し喜怒哀楽を出した方がいいんじゃない？」

人間なんやから…。えりちはクールすぎるんよ」

「よ、余計なお世話よ…」

絵里は希の言葉に、少し顔を赤らめて下を向いた。

ここは自宅でその様子を見ていた。

音ノ木坂に入学して、すぐにアイドル研究部を設立、自ら初代部長

に就任した。

同じ趣味を持つ仲間を引き入れ『ラブリーエンジェル』を名乗り、スクールアイドル活動を始めるもの…

ひとりは転校してしまい、ひとりは『方向性の違い』から辞めてしまった。

アイドルに『なりたい』と、アイドルを『観たい』。

アイドルが好きには違いないが、その差は大きかった。

進級して、ひとり部員集めに奔走しているものの、ここまで成果なし。

そんなときに観たのが、この中継だった。

…確か…あれはモデルのAYA…

…ひとつ下だったはず…

…浅倉さくらとならんでカリスマと呼ばれた彼女が、それに飽きたらず、新しいことに挑戦している…

…そうよ、落ち込んでる場合じゃないわ…

…アタシは諦めないわよ！…

…ひとりでも…

…ここは、拳をギュツと握りしめた。

…そして真姫は…

我、関せず。

…これだけの騒動にも関わらず、なんの興味も示していなかった…。

~^~U~

日本中の関心をさらった覆面歌手の正体…。

それは『夢野つばさ』『水野めぐみ』『星野はるか』の3人からなる女性…いや、少女の…『シルフィード』というグループだった。

NHKが生中継に踏み切ったことにより、シルフィードのライブは、関東圏内での時間帯占拠率が、実に92%を記録した。

制作サイドとしては『狙っていたこと』とはいえ、これだけのプロモーションを『ほぼ無料』で行えたのである。

その宣伝効果は計り知れなかった。

ライブは2曲を歌って終了。

特にそれ以上の会見は開かれなかった為、この時判明したのは、その姿、名前…そして彼女たちの実力だけだった。

視聴者としては『それで結局、誰?』と多少、不満が残ったが…しかし、すぐにネット民たちによって、その人物像が特定される。

何を隠そう彼女たちこそ『藤綾乃』『阿部かのん』『鈴木萌絵』の3人だった。

飛鳥プロが進めてきた『Project A2』。

それは、綾乃を歌手デビューさせること。

しかもアイドルではなくて、ギターの弾ける『アーティスト』として。

今風の言い方なら『ギタ女』である。

その為に、モデル活動と平行して、ギターの特訓を重ねてきた。

J-BEATの編集長…永井は、冗談めかして『左利きのギターリ

ストはカッコいい!』と言っていたが、すでにこの時には計画が始まっていたのである。

しかし当初は、綾乃ひとり：ソロの予定だった。

そこに、かのんと萌絵が加入したことにより、ユニットでいくことへと変更される。

こうして綾乃はまる2年、かのんと萌絵は1年、デビューに向けて準備を重ねてきたのだった。

あくまでもシルフィードとしての3人は、夢野つばき、水野めぐみ、星野はるかであり、年齢等は非公開。

しかしモデルとして活躍していた『AYA』こと綾乃の素性は、いち早くバレた。

眼鏡を掛けてイメチェンしたものの、やはり彼女の知名度は、他の2人よりは高かった。

だが：

これまで素人だった『かのん』と『萌絵』も、本名、年齢、出身地など、アツという間にネットにアップされていた。

その辺りは事務所サイドも制作サイドも、十分想定内ではあるが、今の世の中『公然の秘密』という言葉は、死語となつていっていると言つていい。

もはや、個人情報などというものは、存在しないのかもしれない。

実はこのことが、世の中を二分する論議となる。

それは、未成年（綾乃は高校1年生、かのんと萌絵は中学3年生）が（公営とはいえ）ギャンブルの『片棒』を担いで良いのか?…:というこ

とだった。

これに対し…

それとこれとは別物。

「そんなことを言い出したら、競馬の育成ゲームも未成年はやるな」ということになる」と…という擁護派との間で、激しく意見がぶつかりあった。

一方、製作者側の見解はというと…

まず、覆面歌手としたことについては、偏見なしで楽曲の良さを知って欲しかったとのこと。

容姿や年齢で評価される…それは本意ではない…と。

ライブ形式としたのは、口パクやゴーストシンガーではない…と証明する為。

加工できない生歌・生演奏は、彼女たちのレベルを示す、最高の舞台だ…と述べた。

半分は本当で、半分は嘘だろう。

かのんや萌絵が飛鳥プロを選んだ理由は、そこにあった。

つまり、実力…歌唱力で勝負したいということ。

だから、そういう意味では、間違っではない。

一方、敢えて情報を出さなかったことにより、話題性を高めたのは確かである。

また、各局がニュースを放送する時間にぶつけてきたことも、戦略的な部分が大きいだろう。

未成年云々という議論について、コメントを出すことはなかった

が、これは世論が味方する。

最終的には、歌詞の内容が『ギャングブルを推奨しているわけではない』との論調が多数を占めたのだった。

音楽を性別や年齢で差別すべきではない…との意見もあった。

いずれにしても、シルフィードは覆面歌手としての話題だけではなく、実力そのものが、世の中に認められた存在となる。

その後2枚同時にリリースされたCDはともにミリオンヒットとなり、音楽業界に新たな歴史を刻んだ。

それはプロモーションひとつで、大きな花を咲かせることができるという一例でもあった。

くつづく

Winning Wings
くつばさ推しはM?

シルフィードは、デビュー曲を披露した後、マスコミの前に姿を見せることなく、季節は夏になった。

表向きの理由としては、飛鳥プロの方針はあくまで学業優先であることが挙げられる。

そこは他事務所と一線を画している。句を逃せば、売り時を失う。

それはわかっていること。

しかし事務所サイドとしては『露出過多は飽きられるのも早い』と考え、ギリギリまで『次のタイミング』を窺っていた。

彼女たちの人気を、ブームで終わらせない為の戦略。

目の前の事象に囚われず、中長期的な計画だと言えた。

だがそれは、ある種の賭けであり、実際あまりの露出の少なさに、業界の内外から批判が出たのも事実だ。

放送局サイドとしては、音楽番組だけでなく、トーク番組、バラエティ番組、CM：とにかく出演さえすれば数字が取れる：という思惑が蠢き、右から左から、綱の引っ張り合いがなされた。

だが、事務所は頑として応じない。

90年代には『曲はリリースするが、TV出演はしない』という自称アーティストが数多くいた。

その為『歌担当』と『ビジュアル担当』『作詞作曲担当』は、それぞれ別にいる：などという都市伝説が、実(まこと)しやかに流れたこともあった。

大抵はすぐに消えていなくなった訳だが、当時はバブルのまっ最中。

パツと咲いて、パツと稼げた時代だったのである。

それと較べれば、手段は似てるが、目的は違う。

シルフィードはまだ十代半ば。

これからも長く活躍させる為の、戦略だった。

夏休みに公開された映画『オートレーサー』は事前の宣伝効果もあつて、そこそこの興業成績を上げる。

時期を同じくして、その主題歌・挿入歌を含んだシルフィードのファーストアルバムは、これまたミリオンヒット。

上半期の音楽チャートは、彼女たちの独壇場となった。

そして、この時期に、早くも紅白出場決定の噂が流れ始める。

秋。

浅倉さくらが初主演したドラマが放送される。

その主題歌はシルフィードが担当した。

メインボーカルは夢野つばさ。

さくらのバーターがシルフィードなのか、シルフィードのバーターがさくらなのかはわからないが、この辺りのマネージメントは、さすが老舗芸能事務所だ。

綾乃とさくらは、学校では顔を合わすものの、放課後は殆ど一緒に行動することはなくなっている。

そういう意味では、間接的ではあるが、久々の『共演』だった。

その頃の『オレ』。

周りはシルフィードの話題でもちきりだった。

既にファンは、その見た目から『夢野つばさ』美カテキョ』『水野めぐみ』ファンワリオ嬢』『星野はるか』愛ドール』と呼んでいる。

この日はオレのクラスメイトが、数人集まって、その話をしていた。

「高野は誰推し？」

「えっ？」

「シルフィード……」

「ああ……うくん……特に興味は……」

「嘘つけ」

「本当だよ……」

……顔見知りだけに『夢野つばさ』と言いたいところだが……

小学生の頃のオレとヤツの関係を考えれば、素直にそうは表明できなかつた。

「オレは水野めぐみかな」

そばにいた友達が口を挟む。

「おお！さすがムツツリ！一番の巨乳だしな」

「年下だけど優しく包まれたいわ」

「わかるわあ」

「えー、オレは星野はるかだな。元気いっぱい妹って感じで、一緒にいるだけでパワーもらえそうだもん」

「ああ、それな」

「ヤダ、ヤダ…これだから男子は…」
それを聞いていた女子が、茶々を入れる。

「なんだよ?」

「女子は圧倒的に、つばさ推しよね!」

「そうそう」

「モデル時代から知ってるし、どうしても肩入れしちゃうよね」

「カッコいいよね!まさかギター弾くなんて思ってたし」

「水野めぐみも星野はるかも、男子に媚び売ってる感が強いもんね」

「その点、夢野つばさはモデル時代と変わらず、クールで素敵よね」

「名前はダサいけど…。『AYA』の方が良かったね」

…おお!相変わらず女子人気は、高いな…

「つばさはないわ。デカイし、性格キツそうじゃん!」

「まあ、綺麗だと思うけど…あれが好きって男は『M』だな…」

「だよなあ…」

「ああ!?!」

オレは大きな声をあげてしまった。

「高野…突然どうした?」

ちよつとみんな引いている。

「あつ…スマン。多分だよ…多分、そんなにキツイ性格じゃないんじゃないかな…」

…ん?なに言ってるんだ、オレ…

「なんで?」

「あ、いや、だから…なんとなくだよ…なんとなく」

「ひよっとして、お前、つばさ推し？」

「Mだった？」

「だから、どうしてそうなるんだよ！」

…ただ、知り合いが悪く言われて、腹が立っただけだよ…

…と思っただが、そうなのか？…

…それにしても…

ヤツがモデルになった時も驚いたが、今度はバンドかあ…

追い付かねえなあ…

身長は同じくらいになったし、ユースにも選ばれるようになった。

けど、ヤツは常にオレの想像を越えて先に行く。

知らないうちに、オレはヤツに惹かれていた…。

くつづく

Winning Wings (茶番)

12月中旬。

大晦日に行われる紅白歌合戦の、出演者が発表された。

しかし…

そこにシルフィードの名前はない。

『シルフィード、紅白落選!!』

民放では速報が流れ、新聞は号外が出た。

これまでシングル4枚、アルバム1枚はすべてチャートの1位を獲得し、この年の音楽市場を席卷してきたシルフィード。

年末にかけて、音楽界の賞レースでは、新人賞を総なめにした。

しかし、授賞式に顔を出すことはなく、コメント等はビデオで済ませてきた。

それだけ露出が極端に少ないとあって、ファンならずとも、紅白は生で観られる滅多にないチャンスだった。

しかし、落選…。

世間の落胆の声は大きかった。

この日、NHKにはクレームの電話が鳴り止まなかったという。

だが、それは新たな憶測を生む。

『サプライズゲストでは?』

なるほど、それはあり得る話だ。

これまで、何かと極秘裏に動いてきたシルフィード。最後まで何が起こるかわからない。

それが大方の意見だった。

さらに、その噂を裏付けるかのように…こちらも各演劇界の新人賞を総なめにした『浅倉さくら』がゲスト出演するとの情報が流れてきた。

シルフィードとさくら。

この二組はドラマで『共演』している。

可能性はなくはない。

…であるなら（就労法の関係で）21時までの前半戦に出演するはず。

俄然、注目が集まる。

12月30日。

レコード大賞の新人賞を授賞。

だが相変わらずのビデオ出演。

その方針はブレない。

徹底している。

そして迎えた大晦日。

19時に紅白歌合戦の放送が始まった。

ステージに彼女たちの姿は…やはりない。

番組は淡々と進み、1時間が経過…。

「それでは、ここでスペシャルゲストの登場です！」

総司会者がそうアナウンスすると、会場のボルテージは一気に高まった。

「あの『国民的アニメキャラ』が紅白の為に…」

その瞬間「ああ…」という声が響く。

ブーイングこそ起きなかったものの、かつて登場してこれほど残念がられたゲストがいただろうか…。

会場も、視聴者もジリジリしながら時間が過ぎるのを待つ。

だが、一向にその気配がない。

諦めムードが漂い始めた20時50分…。

ここで再び司会者が、ゲストを呼びんだ。

浅倉さくらだった。

これは！

一気にボルテージが高まる。

さくらへの歓声も大きかったが、この時ばかりは、どうしてもその先の展開への期待の方が大きいように感じられた。

NHKらしく当たり障りのない…つまらないやりとりが交わされる。

「…ところで、さくらさんはモデルさんから女優さんへと転身されて、大変なご活躍だったわけですが、ご出演されたドラマの主題歌を、お友達が歌われたとのこと…」

「はい」

「…呼んで頂けないでしょうかね？」

「えっ？今ですか？…」

「無理ですか？」

「応えてくれるかな…やるだけやってみましよう…』つばさく』めぐみく』『はるか』」

さくらが大きな声で呼び掛ける。

「はーい！」

会場に流れたのは、つばさの声だった。

それだけで、どおう…という、地鳴りのような声。

「さくらだよー！」

「あー、さくらー！つばさだよー！」

「めぐみです」

「はるかです」

「ドラマの時はお世話になりました」

「いえいえ、こちらこそ…」

「レコード大賞 最優秀新人賞授賞、おめでとう」

「ありがとう！さくらもエランドール新人賞おめでとう」

「おめでとうございます」

「おめでとうございます」

「ありがとう…って、ごめん。身内の話をしてる場合じゃないんだ。今、どこにいるの？」

「えっと、今は…スタジオ」

「新曲のレコーディングが終わったところです」

「そっかあ…じゃあ、今から来てなんて無理だよね？」

「どこに？」

「NHKホール」

「…ひよっとして、紅白歌合戦？」

「そう」

「それは出たいけどね…」

「行きたいですけど…」

「いろいろ無理ですよね…」

「じゃあ、そこからでも歌ってもらえないかな？」

「ここで？」

「そう」

「会場の皆さん…どうですか？」

「歌ってもいいですか？」

「聴きたいですか？」

うわ〜っという声と、拍手が沸き起こる。

「…わかりました！」

「じゃあ、ちよつと準備するので…」

「少々、お待ちを…」

3人がそう言うと、ステージは暗転した。

そして…

流れてきたのは、あのCM曲『風に吹かれて』のイントロ…。

それと同時にステージ中央にスポットライトが当てられると…

そこにいたのはシルフィードの3人だった。

生シルフィードに、会場が揺れた。

ワンコーラスを歌い終える。

「こんばんわ〜！シルフィードです」

「皆さんに呼ばれて、NHKホールまで来ちゃいました〜」

「いやあ、すごい盛り上がりですねえ」

「このまま調子に乗って、もう1曲いっちゃって、いいですか？」
うお〜!!

「それでは聴いてください：『スピードの向こう』」

はるかがギターをかき鳴らすと、めぐみが観客に手拍子を求める。
たちまち会場はライブハウスと化した。

「ありがとうございました〜!!」

歌い終わりと同時に時刻は21時となり、映像はニュースへと切り替わった。

実にNHKらしい演出ではあったが、それでも出演したことに対しての評価は高かった。

シルフィード効果。

NHKが彼女たちの出演をギリギリまで引つ張ったことにより、前半戦の平均視聴率は、前年比で5ポイントほどアップした。

そしてシルフィード登場時の視聴率は：実に67%を記録。
今の時代ではあり得ない数字を叩き出したのだった。

その煽りを受けたのが後半戦で、こちらは逆に、前年比で3ポイン

トほど落ち込んだ。

くつづく

Winning Wings く下心、ありく

『チヨモ』から『オレ』に連絡が来たのは、世間はまだ正月気分が抜けきれていない、1月7日のことだった。

オレは元日から『初蹴り』をしているから、あまり関係なかったが、メールに気付いたのは、練習が終わったあとだった。

くお久しぶりです、チヨモです。

く相談に乗ってほしいことがあります。

く近いうちに会えますか？

く藤 綾乃

最初はイタズラだと思った。

芸能人を装って、メールをやりとりして、多額の金額をせしめる『アレ』だ。

そもそも、オレのアドレスを知ってるはずがない。

そう思った。

だが、よくよく見直してみる。

…チヨモです…

…チヨモ…

…ん？…チヨモ？…

そんな呼び方を知ってるのは、ほんの一握りしかない。

それも『AYA』でも『夢野つばき』でもなく、本名の『藤綾乃』名義で送られてきた。

…ということとは？…

オレは半信半疑ながら、返信してみる。

∨前に会った公園、どこだか覚えてる？

すぐに戻ってきた。

∨○×公園だよね？

本物だった…。

それにしても、一体どうして？

オレの心は複雑だった。

今や国民的人気アーティストである夢野つばさが、わざわざピンポイントでオレにメールをよこすなんて…
何かウラがあるに違いない。

…そうだ、あれだ！…

…ドツキリだ！…

…ドツキリ？オレに？…

…あゝ…訳わからん…

…だけど…

…ちよつと期待しちゃうじゃねえか…

…いや、待て待て…

…そりゃあ、確かに昔に比べりゃ女っぽくなつたし、綺麗だと思
うが…

…よく考えろ…

…相手はチヨモだぞ、チヨモ！…

…三つ子の魂、百までも…っていうし、性格なんてそう変わるもんじゃない…

…見た目に騙されちゃいけない…

オレは、ヤツに多少惹かれつつあることを認めたくない気持ちと、そう思えば思うほど意識してしまう感情との間で揺れていた。

「お前は乙女か!!」

オレは自分自身にツツコミを入れた…。

チヨモと会ったのは、それから1週間ほど経ってからのことだった。

オレのアドレスは、小学校時代の友人…オレと同じ中学に進んだ女子…から訊いたらしい。

呼ばれたのはヤツの実家だった…。

何年ぶりだろうか。

小学校の頃に何かの用で3〜4回訪れたことがあったが、それ以来だ。

少しだけ迷いながら、ヤツの家に辿り着いた。

おぼろ気ながらではあるが、当時の様子を思い出す。

…確か…お母さんがメチャクチャ綺麗で、なんとなくドキドキしたような…

ひとり顔を赤らめる。

緊張しながらインターホンを鳴らすと、そのお母さんの声で返事があつた。

「はい」

「あ、高野です…」

「高野くん！どうぞ…」

玄関を開けると、ヤツとお母さんが出迎えた。

…ヤベエ…

…お母さん、相変わらず綺麗じゃん…

…しかも、なんか、いい匂いがするし…

確かオレの母親より、5歳ほど若いはず。
どうしても比較してしまう。

「いらっしやい」

「お、お久しぶりです…」

「さあ、入って…」

「し、失礼します…」

…なんだ、この緊張感は…

「いつ以来かしら？」

「多分…小6ですかね？…発表会の打ち合わせかなんかの時に、お邪魔したのが最後だったかと…」

「あつたわね…そんなこと…。あ、自分の部屋に行く？」

お母さんはジュースとお菓子をお盆に乗せながら、チヨモに訊いた。

「うん」

ヤツはそう返事をする、オレを自分の部屋へと連れていった。

オレはヤツに続いて部屋に入った。

当時は、バレーボールのユニフォームがハンガーに吊るしてあるだけで、かなり殺風景な感じだったと記憶している。

それが、今は…

すっかり女子の部屋だった…。

薄いピンクを基調としたカーテンやベッドカバー。

窓際に並んだ沢山のぬいぐるみ。

それと、几帳面に整理されたカラフルなアクセサリー。

ドラマのセットか、モデルルームか…。

そんな印象。

唯一、壁に立て掛けてある2本のギターが不釣り合いで、違和感を覚えた。

…ああ、そうか。今やアーティストだもんな…

数年前には想像も付かなかったこと。

TVでさえ、生でお目にかかることができない『夢野つばさ』が、ほんの数10cm先にいる。

不思議な感覚だった。

「漁らないでね」

「するか！」

…と言ってみたものの、そりや、物色してみたくなるシチュエーションではあるよな…

「ごめん、その辺に座って…」

「あ、ああ…」

オレは促されて、部屋の中央にあるガラスのローテーブルのそばに、腰をおろした。

「前に会った時は…モデルになる前だったか…」

「うん…」

「すごいな…あれから超人気モデルになったかと思ったら、まさかの歌手デビュー…」

「まあね」

「紅白まで出ちまうし」

「それについては、私が一番驚いてたりして…」

「オレの周りでもすごい人気だぜ」

「ありがとう…。ちなみに高野くんは誰推し？」

「えっ？オレ？…オレは…水野めぐみ？おっぱい大きいし…」

…本人を目の前にして『つばさ推し』とは言えないだろ…

「スケベ！」

ヤツはそう言うのと、オレを見て笑った。

「それにほら、誰かと違って優しそうだし…」

「そうね。私は胸がなくて、性格がキツイもんね」

「いや、チョモ…じゃない…夢野つばさは、女子人気高いぞ。ほぼ全員、つばさ推しって言っていていいくらい」

「それって誉め言葉？」

「…のつもりだけ…」

「あ、そう…ありがとう」

…なんだよ、随分丸くなったなあ…

…昔なら、こっちが反撃できないくらい強い口調で攻め立てきたのに…

「それより、わざわざ自宅って?」

オレは疑問のひとつをぶつけた。

「うん、ここなら人目を気にしないで話ができるでしょ?」

「あ…ああ、まあ…」

「自惚れてるわけじゃないけど、外だと色々気を使うし、ゆっくり話せないから…」

「なるほど…。ってか、自宅に男を連れ込むことの方がマズくない?」

「その為にお母さんがいるんだもん」

「ほほう…」

「そうすれば、変な気を起こさないでしょ?」

…そういうことか…

…いや、そのお母さんにも、変な気を起こしそうなんだけど…

「シルフィードってね、風の妖精なんだよ。知ってた?」

「あ、いや…。女子のサッカーチームに、シルフィードってあるのは知ってるけど」

「えっ!?知ってるんだ!『大和シルフィード』」

「そりゃあ、地元だし」

「やっぱり高野くんに来てもらって良かった」

「ん?」

「実はね、相談はそのことなんだ」

「ああん?」

「誘われてるの、シルフィードに」

「はい？」

オレは何を言ってるか、まったく理解できなかった…。

くっくくく

Winning Wings
くダイワじやなくて
ヤマトだよく

『大和シルフィード』。

オレたちの地元にあるアマチュア的女子サッカーチームだ。
全国的な知名度は低いが、なでしこジャパンの選手を何名か排出している、知る人ぞ知るクラブ。

※後書きに詳細を記載してます。ご参照ください。

…そのシルフィードに誘われた?…

「キャンペーンガールかなんかで?」

「ううん、選手として…」

「マジか!」

「それが、本当なの…」

「いやいや…それはいくらなんでも無謀だろ。そもそも、どうして…」

「私ね、今、フットサルやってるの」

「ああ、それは知ってる。…まだ、続けてるんだ?」

「うん」

「何でもデビュー戦で『えげつないほどの左足』のシュートを放って、お笑い芸人の歯を折ったとか、折らないとか…」

オレはそれを知った時、小学生の頃のヤツを思い出した。

ドッジボールで顔面にボールをぶつけられた被害者が、何人いたことか…。

だから、リアルタイムで見えていなくても、なんとなく、その様子は

想像できた。

「折れたんじゃなくて、欠けたの！」

「似たようなもんだろ？その左足は『かのん砲』って呼ばれてるらしいじゃん」

『K―アヤノ（ん）砲』ね。『かのん』だと『水野めぐみ』になっちゃうから」

「何の話だ？」

「何でもない。…でも、詳しいのね？」

「まあ、一応は…。スポーツ新聞にも載ってたし」

「それでね…私のチームのコーチが…元Jリーガーなんだけど…その人が『是非サツカーに挑戦するべきだ』って。『フットサルじゃ、もつたいない』…って」

「石井だっけ？」

「うん」

「怪我が無ければ、代表までいった選手だよな？」

「そうなんだ？」

「それは知らないんだ？中盤の底をやってた選手で、とにかくマークがしつこい…って…おい、全然興味無さそうだな…」

「ごめん…」

「まあ、それはいいとして…いくら女子とは言え、そんな甘いもんじやないだろ」

「だよね…」

ヤツはうん、うんと二度ほど頷いた。

「それで？まさかと思うが『シルフィード繋がり』で、声が掛かったとか？」

そんな単純な……と思いつつ訊いてみた。

「実は…そうなの」

…凶星か…

「大和シルフィードの社長さんが…今はアマチュアチームなんだけど、数年後には『なでしこリーグ入りを目指す』みたいで。『名前が一緒なのは何かの縁だから、一緒にイベントをしないか』って事務所に声を掛けてきたのが始まりなの…」

「まあ、それなら話はわかるが…」

「これも偶然なんだけど…私が生まれ育った街のチームだし…」

「ああ、それは確かに…」

「それで、たまたま、私がフットサルやってて…名前が『つばさ』で…」

「待て、待て！名前が『つばさ』…って…『キャプテン翼』か？」

「うん…私はあるまり知らないんだけどね…」

「それは『こじつけ』だろ？」

「やっぱり？」

「普通はそう思う」

「そうね…。まあ、そこから石井コーチの薦めもあって『だったら選手に挑戦してみれば』…って」

「強引過ぎないか？」

「そうだよね…でも…やってみようかな…って」

「えっ？」

「サッカー」

「いやいや…さつきも言ったけど、それは無謀だって。確かにお前が運動神経いいことは認めるし、フットサルでもそこそこ活躍してるらしいことは知ってる。だけど、そんな今から始めて通用するほど甘くないし、それはこれまでやってきた人への冒涇だと思っぞ」

オレは少しムツとした。

バレーボール、モデル、アーティスト…フットサル…。

ここまでの経歴は見事だと言わざるを得ないが、ことサッカーに関しては、オレの『本業』だ。

簡単に「頑張れよ」とは言えない。

それを察してか

「怒るよね、普通…」

と、チヨモは苦笑いした。

…なんだよ、その寂しそうな笑い方は…

「いや、怒ってるわけじゃないけど…」

その顔を見て、一瞬、気持ちが揺らいだ。

「ううん、そうだと思うんだ」

「まあ、挑戦する、しないはチヨモの勝手だけど…相当、叩かれるぞ」

「うん。やるからには全力で取り組むつもり」

「そうか…」

「でね…」

「うん？」

「教えてほしいんだ…サッカー」

「あん？」

「入団は3月なの。だからそれまでに、やれることはやっておきたい」

「え…あ…それは構わないけど…なんでオレ？」

「だって、今、サッカーの代表なんですよ？」

「U-18の…な。あ、いや、だけど…」

「それに前に会った時、言ってくれたじゃない」

「ん？」

「『なにかあったら力になるよ』って」

…言ったつけ？…

…言ったな…そういえば…

…つつうか、よく覚えてたな…

「…しかたねえなあ…そういう話なら断れねえな」

…その記憶力に免じて協力してやるか…

「ありがとう」

ヤツは正座をすると、三つ指をついて深々と頭を下げた。

「フットサルとサッカーはまったく別物だぞ」

「うん」

「まあ、サッカーゲームでもやって、ルールからなから、ひとつひとつ覚えていくか…」

「うん」

「時間ないぞ」

「わかってる」

「責任重大だな」

「よろしくお願いします」

改めてチョモは頭を下げた。

「ところで、オレはなんて呼べばいい？…つばさ…かな？」

「ふたりの時は…チョモでいいよ…」

「そうか…。オレからすると、背はそう変わらなくなったから、もうチョモ…っていうほどの差は感じてないんだけどな」

「でも、つばさだと、ちよつと…」

「了解！それならそれでいいや。オレもつばさだと緊張するし」

それからオレは時間を見つけて、ヤツにサッカーのレクチャーをし

た。

〜
〜
〜
〜
〜

Winning Wings
～アーティストよりも…～

2月。

緊急記者会見が開かれた。

それは夢野つばさの、大和シルフィード入団発表だった。

社長、監督と共に会見に臨んだ、つばさ。

登録名は、そのまま『夢野つばさ』となるらしい。

真新しいオレンジ色のユニフォームを社長から手渡されると、カメラマンの要求を受け、高校の制服のブレザーを脱ぎ、ブラウスの上からそれを被った。

背番号は『28』。

わかる人にはわかると思うが、本家『大空翼』が、バルサに入団した時と同じ番号だ。

激しくフラッシュが焚かれ、写真撮影が終わった。

だが、会見が穏やかだったのは、ここまで。

一転、集まった報道陣から厳しい声が飛ぶ。

シルフィードは、マスコミへの露出が極端に少なかった。

だから批判こそあれ（3人とも中高生ということもあつたが）大きなスキャンダルもなく、これまで過ごしてきた。

しかし、成功している人間を見れば、どこかで足を引っ張りたくなるもの。

人の心は振り子のように揺れる、
この会見では、それが露骨に現れていた。

つばさの余りに無謀とも言える挑戦に、容赦のない、無慈悲な、冷たい質問が彼女を襲う。

ここぞとばかりに攻め立てる。

だいたいは、オレが想像した通りだった。

つまり『サッカーを冒瀆しているのではないか』ということ。

これに対し、つばさは：真摯に、丁寧に自分の想いを語った。

「まず、名前が同じだということで、社長からお声掛け頂いたのでありますが……たまたまチームが私の出身地であったりと、なにか『縁』のようなものを感じました。そこで、少しでも地元に恩返しのできるのであれば……という想いから、このオファーを受けさせて頂きました」

《本気でサッカー選手を目指すんですか？

「はい」

《音楽活動はどうされますか？

「しばらく、お休みさせて頂きます。解散するわけじゃありませんが、今年はそれぞれ、ソロ活動が中心になります」

《単刀直入に……人寄せパンダではないかとの声もありますが

「はい。承知してます」

《その事については、どう思われますか？

「ベンチ入りできなければ、私を観に来て頂くこともできません。……お客さんを呼べる、呼べない以前の問題です。なので、まずはそこからだと思ってます」

《サッカーをやってる方たちに、何か一言ありますか？

「……そうですね……恐らく……いい気分ではないかと思えます。……ですが……折角、挑戦する機会を頂いたので、やらないで後悔するするよりは

…と思つてます」

《監督にお訊ねします。今回の入団について：起用方法含めて、どうお考えですか？》

「そうですね…。ポジションはFWになるかと思いますが、そこはこれから見極めていきたいと思ひます」

《他の選手への影響などは？》

「無いと言つたら嘘になるでしょうね。ですが、これくらいのことではバタバタするようなら、精神的に未熟だということ。動じないでほしいですね」

《先程、つばささんがベンチ入り云々と仰つていましたが、監督として：例えば…マスコットのような立場で試合に帯同させることは考えてますか？》

「試合の外：ファンサービスのようなら、してもらふことはあるかも知れません」

《デビュー戦はいつですか？》

「私はチームを勝たせる為に監督をしているので、人気だけの選手は使いません。つばさ選手には大いに期待しておりますが、ポジションは自分で奪い取つてほしいと思ひます。ですから『いつです』などという返答はできません」

《つまり、鼻負はしない？》

「サッカーの監督は数試合結果が出ないだけで、すぐに解任させられる職業です。そんな余裕はありません」

《最後に、つばささん。ファンの方に意気込みを…》

「はい…。これまで応援してくださつたファンの皆さん、関係者の方々、ありがとうございます。この度、夢野つばさは新しいステージ：サッカーというジャンルに挑戦させて頂くこととなりました。もちろん、厳しいご意見もあるかと思ひますが、片手間でできることではありますので、音楽活動を一時休止させて頂き、全力で戦っています。どうぞ、よろしくお願ひします…」

実際はもつと長いやりとりだったが、抜粋させてもらった。

ネチネチと、同じような質問を繰り返す記者に、オレは少し腹を立てながらそれを見ていたのだが：

感想としては『完璧な会見』だったと思う。

余計な演出：例えば、水野めぐみや星野はるかが出てきて花束を渡す：などもなく、非常にシンプルだったことに、好感を持った。

多分『所詮、芸能人だし：』というような誹謗・中傷の類いは出てくるだろう。

失敗しても帰るところがある（と思われる）から、仕方がない。それでも、今、この場での決意表面としては、これ以上でもこれ以下でもない。

ヤツがこの1ヶ月、どれほど真剣にサッカーに取り組んできたか、練習に付き合ってきたオレにはわかる。

フットサルより、サッカーの方がボールはひとまわり大きい、そういうったことも含め、だいぶ前から準備はしていたようだ。

ズ：
…きつとマスコミもチームメイトも、ヤツの技術の高さには驚くはず：

そう思うと、自然とニヤけてしまう。

ただ、サッカー選手としてプレーするには、課題が盛り沢山だ。

…ここからその差をどうやって縮めていくかは、ヤツのさらなる努力に掛かっている：

…結果がすべての世界：

…負けるなよ…

そんなことを思いながら、オレはTVを消した。

チームの広告塔。

それが、まず夢野つばさに与えられた役割だった。

数年後になでしこリーグ入りを目指すチームにとって、実力もさることながら、運営資金をどう確保していくか…ということが、非常に大きな要素となる。

大和シルフィードが夢野つばさを引つ張った『真の目的』は、そこにあつた。

つまり（いみじくも監督も述べていたが）レプリカのユニフォームや関連グッズを、つばさが『売り子』となれば、その売上額は数倍、数十倍にも跳ね上がるだろう。

例えば、そういうこと。

いやそれ以上に、彼女の人気に伴って『スポンサー』を獲得できたことが、何にも増して大きい。

胸にはCM曲でタイアップした菓子のロゴが入り、背中や袖にもIT関連などのスポンサーが付いた。

アマチュアチームに対しては、充分すぎるバックアップである、ちなみに、このCM曲はシルフィードでの活動休止前のラストシングルであり、カップリング曲はチームの公式サポーターソングとなつた。

つばさはチームの『公式リポーター』も兼任することになり、webサイトを通じて情報を発信していく仕事も任された。

今後は、まさにチームの顔として、広報活動に勤しむことになる。

だが、つばさは…それを承知で敢えてこのオフアーを受けた。

そこにあつたのは…自分への挑戦であつた。

振り返れば、小中学生のカリスマと呼ばれたモデルの『AYA』も、紅白出場歌手という肩書きを背負うことになった『シルフィードの夢野つばさ』も、自らの意思によって進んできた道ではない。周りにお膳立てされて、導いてもらってきただけだった。

もちろん、自分なりに努力はしてきた。

それを恥じるつもりはない。

しかし、フットサルを始めてから気付いたことがある。

それは自分が根つからのアスリートであるということ。

アーティストではない。

アスリートなのだ。

スポーツをして、汗を流したあとの充実感。

それは『綾乃』にとつて、やはり特別なものだった。

なににも代えがたい、大事なもの。

バレーボールを不完全燃焼で終わらせてしまったことへの、贖罪もあつたかもしれない。

だが…

自分が自分らしくある為に…自分の意思として何かに挑戦したいと思つた。

だから大和シルフィードから話があつた時『ここだ!』と感じた。
やらずに後悔するのであれば、失敗してもいいからやろう!
そう思った。

それは綾乃の深層心理に、若くして他界した父親の存在があつたの
かも知れない。

人生は長くない。

そう感じているのではないか…。

…人寄せパンダ?…

…広告塔?…

…そんなことはわかつてる…

…でも、私の目標はそこじゃない!!…

…日本代表…オリンピック…ワールドカップ…

…やるからには上を目指す…

…立つよ!頂点に!…

会見を終えた夢野つばさは、ユニフォームの襟元をギュツと握りし
めて、会場をあとにした…。

くつづく

ときどき、 S へ A—RISE 出現へ

夢野つばさが、サッカーチームの入団発表を行ったその日…

矢澤にこは、忸怩（じくじ）たる思いで、秋葉原の駅前にある巨大
ヴィジョンを眺めていた。

…本当ならアタシが、ここに映し出されるはずだったのに…

にこの視線の先には…

『ラブライブ』優勝チームの『A—RISE』が、軽快なステップでダ
ンスをしていた。

にこの憧れの存在。

だが、彼女のプライドを傷付けたのもA—RISEだった。

…今に見てなさい！…

にこの心は、ファンと敵対するライバルとの間で揺れていた。

遡ること、十ヶ月ほど前…

世間では覆面歌手がどうのこうの…と大騒ぎになっている頃、密か
にあるイベントの開催が発表された。

それは『ラブライブ』と銘打たれた、スクールアイドルたちの大会
だった。

スクールアイドルという…サークルとも部活とも言えるグループは、これまでも存在していた。

しかし、それに対する『確固たる定義』があるわけではなく、各々バラバラに活動している為、世に知られることは余りなかった。

にこも、そのスクールアイドル活動を行っているひとりである。

しかし高校に入学してすぐ、アイドルに憧れる『仲間』と共に『ラブリーエンジェル』というユニットを組んだもの…1年もたずして解散。

※詳細は#82486『Can't stop lovin' you!』花陽ちゃんへの愛が止まらない』の『にこ編』を参照願います。

新たな仲間を探している最中に入ってきたのが『ラブライブ開催』のニュースだった。

全国のスクールアイドルが、そのパフォーマンスを競い合う初めての大会は、ネットに動画をアップして、視聴者からの投票で優勝チームを決めるとのこと。

参加資格は以下の四つ。

プロでないこと。

高校生であること。

サークル、もしくは部活として活動しており、参加に際しては学校に届け出て、許可を得ること。

そして複数人数（グループ）であること…。

※この時点ではオリジナル曲でなくても構わなかった。

スクールアイドルである為には、学生であることを証明しなければならぬ。

それはつまり、学校名が公表されること。
だからこそ、所属する学校に許可をもらう必要がある…。
そんな理屈だ。

しかし…

音ノ木坂のように、伝統的な…言い換えれば古風な学校から、ラブ
ライブ参加の許可を得ること自体、とてもハードルが高い。

いや、それよりも…

一番のネックは、やはり『複数人数であること』ということだった。

1人単独での参加を認めてしまうと、エントリー数が際限なくなる
…ということは、容易に想像ができる。

それに個人の戦いならば、カラオケ大会でもやればいい。
しかし、ラブライブの趣旨はそうではなかった。

イメーজするところは高校野球…甲子園か。

だから個人参加だと『学校対抗』『地区代表』的な意味合いも薄れて
しまう。

仲間と協力しながら作品を仕上げていく…そんな青臭い…ある意
味、大人が『理想とする若者像』が、主催者にはあった。

…ふん！アタシひとりで充分なのに！…

参加資格を満たしていないにこは、そう毒付いた。

辛うじて『アイドル研究部』ではあるものの、今は他に部員がいな
い。

参加するには、急ぎ仲間を集める必要がある。

エントリーの締め切りは、夏休みが終わる8月末。
その後、専用サイトにアップされた映像に、閲覧者が投票。
最終的に得票数の多かった…ランキング1位のチーム…が優勝となる。

2年生に進級したにこは、新入生を中心に、必死に部員の勧誘を行った。

強風でビラが飛ばされても…雨にその文字が滲んでも…。
それでも、成果は得られず…
無情にも春は過ぎ…あつという間に夏休みも終わってしまった。

にこはこれにより、夏が終わったばかりだというのに、部室に籠り、半年近くも冬眠のような放課後生活を送ることになる。

ラブライブはというと…エントリーは締め切られ、いよいよ投票開始。

その直後から、とてつもない勢いで票を伸ばしていったのが『綺羅ツバサ』『結城あんじゅ』『統堂英玲奈』の3人組…音ノ木坂とは目と鼻の先にある高校…UTX学院のスクールアイドル…

『A—RISE』。

にこの最初の印象は…

『シルフィード』の二番煎じじゃない…」
…だった。

この時、シルフィードは既に正体が明らかになり、日本中に旋風を巻き起こしていた。

確かにA―RISEの3人は、容姿だけを見れば、雰囲気似ていると言えなくもない。

スラッとした長身の『英玲奈』が『つばさ』、色白で胸が豊かな『あんじゅ』は『めぐみ』、小柄な元気者『ツバサ』は『はるか』…と、それぞれがどことなく『キャラ被り』していた。

…これで、この長身の名前が『ツバサ』だったらモロなだけど…

冷ややかな目で動画を眺める、にこ。

しかし、すぐに最初に持った印象を、全面否定することになる。

…スゴいわ、この人たち…

…ダントツじゃない！…

途中経過ながらランキングの1位をひた走る彼女たちの、パフォーマンス…クオリティの高さに目を奪われた。

…これがスクールアイドル？…

…まるでプロ…

にこは自分の『アイドルスキル』に絶対の自信を持っていた。ルックス、飛びきりの笑顔、愛らしい仕草…歌やダンスがそれほど上手じゃないことも含めて『でも、それがアイドル』…そう思っていた。

だが…

一瞬でその概念を吹き飛ばされてしまった。

…アタシ、この人たちに一生ついていく…

矢澤にこが、A—RISEに心を奪われた瞬間だった。

「かよちゃん、なに見てたにや?」

花陽の部屋に遊びに来た凜は、机の上に置かれている開きっぱなしのPCを見て、彼女に訊いた。

「あ、これ? えつと… 『ラブライブ』っていう、スクールアイドルたちの大会だよ」

「ラブライブ? 凜とかよちゃんのことみたいにや」

「ラブライブだよ」

「ふくん…」

「ごめんね、凜ちゃんには興味ないよね? すぐ消すから」

花陽は慌ててPCの画面を消そうとする。

「見てる途中なら、凜も一緒に見るにや」

「うん、じゃあ、ちよつと… この『A—RISE』だけ」

「わかったにや… って、この人たち、誰?」

「何を隠そう、この人たちは、あのUTX学院のスクールアイドルなんだよー!」

花陽は、なぜか自慢気に言った。

「へえ! スゴいにや!!… って… スクールアイドル?」

「あはは… だよねえ…。あのね、凜ちゃん、スクールアイドルとは、基本的に学校の中でアイドル活動してる人たちのことを言うんだよ」

「部活?」

「うくん… 部活だったり、サークルだったり… ただ単にお友達同士だったり…」

「何をするの?」

「何って…本物と同じような衣装を着て、同じように歌って踊って…
アイドルを疑似体験する…っていうのかな…」

「かよちゃんもやってみたい?」

「う〜ん…私は見てるだけで充分なんだ…」

花陽は両の手を胸の前で組むと、モジモジしながら人差し指を擦り
合わせた。

「かよちゃん…」

…凜、知ってるよ…

…それは、かよちゃんが嘘を言うときの癖なんだにや…

「あつ、ち…違うの、凜ちゃん!凜ちゃんにも、この人たちを見てほし
いんだ」

凜が自分の手元をジッと見ていることを悟った花陽は、ひとり言い
訳をした。

「このUTX学院の人?」

「そうなの!!この人たちね、A—RISEって言うんだけど、他のス
クールアイドルと較べて、歌もダンスもプロ級で…って…ごめん…つ
い興奮しちゃった」

「ううん、凜はアイドルを熱く語るかよちゃんも大好きにや〜」

凜はいつものことと、気にも止めていない。

むしろ、好きなことに夢中になる花陽を見る方が、凜は好きだった。

…いつか、凜にも、これくらい夢中になってくれたらいいのにや

…

花陽の顔を見るたびに、凜はそう思っていた。

「凜ちゃん?」

「にや?」

「どうかした?」

「うん、別に…あ、でも、かちゃんがそこまで言う…ってことは、相当スゴい人たちなんだね」

「うん、なにかも…今すぐデビューしてもおかしくないくらい」

「そうなんだ…かちゃんがそう言うなら間違いないね！あ、ねえ、かちゃんもUTXに行けば、この人たちに会えるんじゃない？」

「えっ？」

「高校…」

「…」

「えっ？凜、おかしいこと言った？」

「あ…うん、そんなことないよ…。お母さんはUTXに行けば…って言うてくれてるんだけど…」

「ダメなの？」

「ダメってわけじゃ…」

「だったら…」

「うん、そうなんだけど…花陽にはちよつと合わないかな…って…」

「なにが？」

「校風っていうのかな？」

「ああ、それは凜もわかるにや！なんかみんな、意地が悪そうな感じがするもんね…」

「そこまでは言っていないけど…。それで凜ちゃんは？」

「凜は…かちゃんと同じところに行くにや！」

「花陽は音ノ木坂に行こうかと思ってるんだけど…」

「うん、じゃあ、音ノ…にや？…音ノ木坂？」

「う、うん…」

「にやあ！む、無理にや〜！凜には無理にや〜！」

「あ、無理して同じ学校じゃなくてもいいんじゃない？」

「…うう…酷いじゃ、かよちゃん！かよちゃんがない学校生活なんて、ラーメンのないラーメン屋さんみたいなものだよ！凛には、そんなのあり得ないにや！」

「う、うん…ごめん…。わかったような、わからないような例えだけど…」

花陽はちよつと困ったあと、軽く微笑んで凛に言った。

「それじゃあ、凛ちゃん。もう少しだけ、お勉強頑張ろう！わからないところは花陽が教えてあげるから…」

こうして、凛の受験勉強はスタートしたのだった…。

A—RISEが優勝を決めたのは、大晦日のこと。

シルフィードが紅白に出演する、数時間前…。

にこと…花陽（と凛）は、行き交う人に紛れながら、秋葉原駅前の大型ヴィジョンに流れる『祝 優勝』の文字と、彼女たちのパフォーマンスを見て、地味に盛り上がっていた。

その日、その時、その場所で、3人が居合わせていたことは、数年経ってから発覚するのだった…。

くつづく

Winning Wings
くフアーストコンタ
クト

「え〜…今日からチームに合流する夢野つばさくんだ。まあ、つばさくんについては、みんなの方が良く知ってると思うが…じゃあ、自己紹介を…」

大和シルフィードの監督…『田北』…が、つばさに挨拶を促した。

「はい…。初めまして、今日から大和シルフィードの一員としてお世話になります、夢野つばさです。色々やりづらい部分があるかと思いますが…私自身はレギュラーを獲得つもりで、ここに来ました…」

その一言に、聴いていたチームメイトの目付きが厳しくなった。

「一日も早く、戦力となるよう頑張りますので、ご指導、ご鞭撻のほど、よろしく願いましたます」

つばさがそう言って頭を下げると、拍手が起こった。

しかし、つばさにはわかる。

それが歓迎されたもの…でないことを。

つばさ目当ての報道陣がいなければ、恐らくそれは、もっとまばらなものであっただろう。

歓迎されている雰囲気ではない。

だが…

つばさも並々ならぬ気合いで、この場に臨んでいる。

それは頭を見ればわかる。

モデルを始めてから伸ばしていた髪を、バツサリと切ったのだ。

それはまるで、小学生時代に戻ったほどの短さだった。

3月…。

つばさはチームの始動から1ヶ月遅れで、練習に合流した。
今日はその初日だった。

大和シルフィードは、下部組織は年代別に3チームあり、100名ほどが在籍している。

その上にあるのがトップチームで…つばさを含めて、30名となった。

うち社会人が19名。

大学生が8名。

つばさを含めた高校生が2名。

プロ契約している選手が1名。

…とはいえ、つばさを高校生とカテゴライズしてよいものか…という疑惑がある。

年齢的には（ゲー校に在学中の高校2年生であり）次の誕生日で17歳になるが…夢野つばさとして稼いだ年間収入は、社会人と…プロ契約しているチームメイト20人の収入を合計しても、はるかに上回る。

やはり…芸能人1名…という区分けが必要かも知れない。

日本の女子サッカーを取り巻く環境は、相変わらず厳しい。

なでしこジャパンの活躍を受け、代表戦こそ、そこそこ盛り上がるが、ではリーグ戦はどうかというと、こちらはサッパリである。

女子のサッカー人口は増えているものの、プロスポーツとして成功しているとは言いがたい。

代表に選ばれるような選手でさえ、アルバイトをしたりしているのが現状だ。

大和シルフィードの社長は…つばさを引つ張ってきた理由に打算的なところはあるが…一方では、もつと女子サッカーを盛り上げたい…という想いも強い。

その起爆剤として、つばさに白羽を立てたのだった。

しかし…

受け入れる側のチームメイトは、そう思っていない。

…芸能人が何しに来た!?!…

そんなところだろう。

でも、今は、大勢の報道陣が見ている手前、表向きは穏やかに…平静を保っている。

保ってはいるが…

(自分が撮られている訳ではないことを知っていても)やはり、緊張だったり、照れが出てしまう。

強豪とはいえ、昨日まではまったくのアマチュアチーム。

マスコミ慣れしていないのは、当然のことだった。

アップ、ストレッチが終わり、チームはボールを使った全体練習に入った。

しかし、つばさだけは別行動。

ひとり、フィジカルトレーニングとなった。

当然である。

サッカー経験ゼロの選手を、いきなり同等には扱えない。まずは夢野つばさがどんな選手か、見極める必要があった。

これに対し、不満の声をあげたのは、報道陣だった。

折角サッカーの取材にきたのに、ボールを蹴る様子が撮れないのであれば「画（え）」にならない。

「監督！練習、変えてもらえないですか？」

「ボール蹴ってくださいよ！」

「つばささん、こっちに目線もらつていいですか？」

「シュート打つところ、撮りたいんですが」

記者やワイドショーのリポーターが、好き勝手に注文をつける。

つばさは、チラリと視線を監督の田北に向けた。

頭を搔く田北…。

しかし、特に何も言わない。

黙々とトレーニングを続けるつばさに、なおも取材陣がしつこく要望を出す。

「えーいーうるさい！！取材をするのは自由だが、練習の邪魔はするな！！」

キレたのは、田北だった…。

突然の出来事に、押し黙る報道陣…いや、にわか記者と芸能リポーター。

田北が短気な性格なのは、スポーツ記者なら承知のこと。

そして彼らは、つばさをサッカー選手として、取材している。

一方、つばさにあれこれ要求していた連中は…あまりにチームに対する配慮が欠けていた。

それに対して田北の堪忍袋の緒が切れた。

「面倒くせえー！つばさ！一本シュートを打ってやれ！」

「は、はい!？」

「シュート打つところを撮らしてやれって言ってるだよ！」

「は、はい…」

「ほら、アンタらも。それが撮れなきや帰れないって言うなら、撮らせてやるよ。その替わり、その後は静かに願いますよ！」

田北の剣幕に押された、にわか記者と芸能リポーターは「はい…」と小さく返事をした。

「緑川！お前がパスを出してやれ！」

田北が叫ぶ。

「私…ですか？」

少し離れたところでボールを蹴っていた、小柄な選手が呼ばれた。

「他にいるか？」

「…いません…」

「なら、いちいち確認するな」

「はあ…すみません…」

「つばさは確か…左利きだったな？」

「はい」

つばさが頷く。

「じゃあ、緑川、向こうから蹴ってやれ」

「えっ！」

「早くしろ！」

「はい、はい、わかりましたよ！行けばいいんでしょう？行けば！」

「はい…は一回でいいー！」

緑川と呼ばれた選手は、渋々さっきの位置…ピッチの向こう側へと歩いていった。

「まったく、アイツは俺のことをなんだと思ってるんだ…」
田北は少し苦笑いをした。

どうやら緑川が出したパスを、つばさがゴールに向かってシュートする…そんな構図とするようだ。

つばさがゴール前へと移動するのに合わせ、カメラも動き、準備は整った。

つばさが緑川に合図を送る。

「夢野つばさ…アンタの実力がどれほどのものか…お手並み…じやない…お足並み拝見といきますか！」

緑川はボールをセットすると、2歩3歩と後ろに下がった。

「いくよー」

右足でパスを出した。

いや、パスというほど優しくはない。

かなり強めのライナー。

…もう！…

…意地悪…

…だ…

…なっ！…

ばしゅっ！！

てん、てん、てん…

ボールはネットを揺らしたあと、静かに転がった。

静まり返る練習グラウンド。

ことの成り行きを見守っていたチームメイトも、コーチも、そして取材陣も…つばさが放った殺人的シュートの威力に、言葉を失った。

…なに、今の…

パスを出した緑川も例外ではなかった。

今のつばさのシュートをリプレイすると…

『もう！』の時に、ボールのスピード、高さを判断して軽くジャンプ。『意地悪』で、胸トラップ。

『だ』でボールを地面に落とし、最後の『なっ！』で、左足を振り抜いた。

…なんて正確なトラップなの…

…あのスピード、あの高さを簡単に抑え込んだわ…

…そして、あの左足…

…ハーフバウンドでボレーだなんて…

…さらに、あの威力…

…合わせるだけでも難しいのに…

…化け物が現れたわ…

奇しくも最後の言葉は、フットサルのコーチ石井が、初めてつばさの左足のシュートを受けた時と、同じ表現だった。

…夢野つばさ…

…ただ者じゃないわね…

これが、のちにつばさのパートナーとなる『緑川 沙紀』のフアー
ストコンタクトだった…。

くつづく

『衝撃の左足!』

『驚異の弾丸シュート!』

『魅せた!身体能力の高さ!』

翌日、スポーツ新聞の見出しに、そんな文字が踊った。

朝からワイドショーでも、繰り返し、そのシュートシーンが放送されている。

コメンテーターからは一様に、そのパフォーマンスの高さに驚く声が聞かれた。

一方、所詮は『練習でのシュート』。

騒ぐのは、試合に出て、ゴールを決めてから…との声もある。

極めてまっとうな意見だ。

そこで、昨日の『騒動』を受け、撮影はOKだが、練習中のリクエストには一切応じないことが、通達される。

その替わり、練習終了後に『応対する』ことで、取材協定を結んだ。

…これで、多少は落ち着くだろう…

監督の田北は、胸を撫で下ろした。

夕方になり、練習時間を迎える。

さすがに昨日ほどではないが、それでも、これまでの何倍もの報道

陣が詰めかけている。

またスタンドには『つばさ見たさ』の、にわかファンが集まっていた。

いや『にわか』を否定する訳ではない。

それこそが、つばさに与えられた使命のひとつなのだから。

きっかけはどうであれ、結果に繋がればそれでいい。

つばさは男女を問わず送られる黄色い声援に、時おり、手を挙げて応えた。

「緑川：ストレッチ、つばさと組んでやれ」

「私：ですか？」

「うちのチームに、お前以外、緑川がいるか？」

「いません…」

「なら、お前だ」

「…はあ…」

「まったく、毎回毎回、同じ会話をさせるな…。お前とつばさは同い年だろ？色々と面倒見てやれ」

「はい、はい…わかりましたよ」

「はい！一回でいいー！」

それを見て、周りからは笑い声が漏れる。

どうやら、このやりとりは日課のことらしい。

「…っていう訳で、私がアナタの教育係になったから」

監督の田北に指示を受けた緑川が、つばさの元へとやってきた。

「あ、は…よろしくお願いします」

「沙紀でいいわ。私もアナタのこと、つばさって呼ぶから」

「はい…」

「もしくは、私のこと『ヴェル』って呼んでくれても構わないわ。先輩たちは、みんな、そう呼ぶし」

「ベル?...鈴?」

「ベルじゃなくて、ヴェルよ!ヴェ・ル!」

「ヴェルサーチの...」

「そう、それ!なんでそう呼ばれてるかと言うと...つばさは『東京ヴェルディ』って知ってるでしょ?」

「...お店の名前?...」

「ウソツ!知らないの?」

「はい...」

「あのね、東京ヴェルディって言うのは...」

「コラッ!緑川!仲良くするのはいいんだが、練習中だ...私語は慎め」

沙紀が監督に怒られた。

「つばさのせいで私が怒られたわ...」

「あ、ごめんなさい...」

「なんてね...。じゃあ、続きはあとで...ということだ」

「はい...」

...良く喋る子だな...

それがつばさの...沙紀に対する印象だった。

ちなみに、何故、緑川沙紀がヴェルと呼ばれているか...あとから聞いた説明によると...

Jリーグの名門『東京ヴェルディ1969』。

かつてホームタウンが川崎だった頃のチーム名は『ヴェルディ川崎』だった。

ヴェルデとはイタリア語で、チームカラーである緑を意味する。

つまり『緑の川崎』であった。

そして、これは、まったくの偶然の一致。

両親は狙って付けた訳ではないとのことだが…

彼女の名前は『緑川沙紀』。

『緑（の）川崎』と『緑川沙紀』…

誰が言い始めたか覚えていないが、気付いたときには『ヴェルデイ川沙紀』と呼ばれていたという。

そこから今はヴェルに。

沙紀自身、自分の名前に入っている『緑』は、結構、意識してきた。好きな色…ではないが、無視できない色。

だから、このヴェルというあだ名も、それほど違和感なく受け入れられたという。

…私のチョモより、全然いいわ…

彼女の話聴いて、つばさは思った。

そのつばさをチョモと呼ぶ…恐らく世界で唯一の人間…高野梨里の自宅へは、レクチャーを頼んでからの1ヶ月、ほぼ毎日通った。

まず高野は、つばさに座学を叩き込んだ。

サッカーにおけるシステム、ポジション別の役割、動き方などを、ゲームをしながら詳しく教えた。

つばさは左足の破壊力を見込まれて、FWでの登録となるようだが

…所々でゲームを止め

「これがDFラインを上げるということ」

「これがウラをとる…という動き」

…などと、逐一説明する。

そして全てのポジションの立場で

「この時と、この選手は何をケアしなければならないのか」

「この時、ボールを持った選手に、どうアプローチしたらいいか」

「この時、どんなプレーをしたら、相手は嫌がるか」

…等々、こと細かくレクチャーした。

このお陰でつばさは、ルールを含めて、フットサルとの違いを、かなり理解できたと思っている。

もうひとつは、実技。

こちらについては、つばさのボール捌きがあまりに上手くて、逆に高野が驚いた。

特にトラップの上手さや、ダイレクトでボールを叩（はた）くそれは、目を見張るものがあった。

つばさ曰く

「ボールの回転がわかる」

のだと言う。

にわかには信じられない話だが、本人によると、バレーボールの頃に、死ぬほど練習したトスアップのお陰らしい。

レシーブされて上がってくるボールは、時に不規則な回転が掛かっている。

それをドリブル（ダブルコンタクト）せぬよう、見極めているうちに

「どのくらいの力加減で、トスを上げればいいのか」
が身に付いたらしい。

サッカーでもそれは同じで、来たボールのスピード、回転を見極めれば、どのくらいのボールタッチで、どうすれコントロールすればいいかわかると言う。

：仮にそうだとしても、それをサラッとやっちまうことが、スゲエよなあ：

高野は声にはしなかったが、つばさの底知れぬポテンシャルの高さに、少しだけ畏怖の念を抱いた。

ダイレクトにボールを捌ける上手さは、元来アタッカーだった名残だろうか？

タイミングの合わせかたが、抜群に上手い。

上記の2点については、文句の付けようが無かった。

しかし圧倒的に足りないことがある。

それはフィジカルの強さと、90分戦い抜くだけの持久力…そして実戦。

こればかりは、短期集中講座でどうこうなるものではなかった。

それはチームが行った能力テストでも明らかに…。

くつづく

「どうだ？」

「予想通りでもあり、予想以上でもあり…ですね」

田北に訊かれたチームのトレーナー…中村はそう答えた。

つばさが練習に参加してから3日後。

チーム全体で体力測定が行われた。

田北が気にして訊いたのは、やはり、つばさの結果であった。

「予想通りでもあり、予想以上でもあり？」

「はい」

「…というと？」

「小学生時代、バレーボールをやっていて、特待生として中学に進んだ…と聞いていましたし、フットサルでの実績もありますからね…瞬発力系はそこそこで、反対に持久力系は厳しいだろうな…というのが、測定前の予想でした」

「それで？」

「ははは…100m走と垂直跳びが…異常でした」

と中村は、大笑いする。

「ほほう…そんなにか？」

「はい。まず100mですが…12秒5で走りました」

「12秒5？」

「女子の日本記録が11秒21…10位で11秒45ですからね…素人としては『異常』でしょう」

「なるほど」

「ちなみに、うちのチームでは緑川沙紀の12秒フラットに続いて、2位のタイムです」

「快速ツートップか…」

田北はボソツと呟いた。

「続いて、垂直跳びですが…まあ、これは計測方法によって差が出るので、参考記録程度に聞いてほしいのですが…女子の高校生平均が40cm程度とすると、彼女は60cm跳んでます」

「60cm?…」

「男子高校生並みです。つばさは身長が170cm近くあるので、高さなら『馬場 聖子』にもひけをとりませんね」

『くさび』もいけるのか…」

「あくまで、データだけなら…ですが…実戦で活かされるか、どうかは話が別です」

中村は注釈を付けた。

「…だろうな…」

「速さも高さも、ボールがあつて、相手がいて、その時にその力が発揮できるか…つてことですからね」

「ふむ…」

「それとスタミナ系のデータはやはり悪いですね。いえ、それでもチームの平均をやや下回る…という程度ですが…まあ、90分戦うには、まだまだつてとこですな」

「なるほど…」

「今のデータだけを考慮して、ゲームに出場させるならば、ラスト5〜10分。相手のスタミナが切れたところで投入…ぐらいがベストでしょうね」

「あとは高さを活かしたパワープレーか…」

「対人プレーがどうかというところですかね。とりあえずこれで、強化すべところ、伸ばすべきところがわかりました」

「あとはあの左足をどう活かすか…か」

「そこは…監督の腕の見せどころじゃないですか?」

中村が挑発するように言った。

「…そうだな…」

田北をそう呟くと、ニヤリと笑って中村の顔を見た。

「失礼します」

田北と中村のいるミーティングルームに入ってきたのは『チーム唯一のプロ契約選手』：『羽山 優子』だった。

羽山は、中学生までこのチームに所属していたOGで、その後、大学生の時に、なでしこジャパン入りした名MFだ。

日本で5年プレーしたあと、フランスに渡る。

しかし、アシスト王も狙えるかというほど、好調だった3シーズン目：相手DFの厳しいタックルを受け、選手生命が危ぶまれるほどの大ケガをしてしまう。

チームは表向きは慰留に努めたが、復帰には1年以上が掛かる見込みだと知ると、日本に戻りリハビリに専念するよう迫られた。

実質的には解雇あった。

引退も考えた…。

そんな時、声を掛けたのが『古巣』大和シルフィードの社長だった。

なでしこリーグ入りを目指すチームにとって、世界のレベルを知るトップ選手の力は必要不可欠だった。

「リハビリ期間中は、コーチとして面倒を見てくれないか？そして、うちのチームで復帰してほしい。その後、万全な状態に戻ったら、海外でもどこでも挑戦すればいい。とにかく、我々は君のプレー、経験、そしてプロ選手としてのメンタルを必要としているのだ…」

羽山は悩みに悩んだ末、そのオファーを承諾する。

ひとつは、古巣への恩返し。
そして、ひとつは：代表への復帰。

自分のサッカー人生を、怪我のせいで終わらせるのは、やはり納得がいかなかった。

…もうひと華咲かせるわ…

ここから1年、辛いリハビリ生活が始まった。

その合間を見てはチームを訪れ、コーチとしての指導も行ってきた。

そして…

今シーズン、選手として、ピッチに戻る事となった。

「どうだ、調子は？」

部屋に入ってきた羽山に、田北が訊く。

「どうでしょう…60〜70%ってどこですかね…。ボールを蹴るのに、違和感はなくなりましたが、知らないうちに庇ってるんがあるて…」

「自分自身が、どれくらいできるのか…ってことは、正直言ってワシには判断がつかん。だからお前の場合は『自己申告制』にするからな」
「はい、わかりました」

「無理するなよ」

「ありがとうございます」

「それから体力測定の結果が出た。中村さんと数値をよく見て、1ヶ

月後に開幕に合わせて、上手く調整してくれ」

「はい」

「中村くん、よろしく頼むぞ」

「任せてください」

「それと、もうひとつ…3日後に主力組と控え組にわけて紅白戦をやる」

「はい」

「そこで…お前は控え組に入ってほしいんだが…」

「仕方ないです…」

「指揮を執れ」

「えっ?」

「不満か?」

「いえ…」

「どちらかと言えば、控え組の特徴はお前の方が心得てるだろう?適任だと思うが」

「はあ…」

「そして…夢野つばさも、そこでテストする」

「つばさ…ですか…」

「どうした?」

「私も、あの娘には興味ありますので。…3日後ですか?」

「うむ」

「では、今日から主力組と控え組と分けて練習させてくれないですか」

「ん?」

「例え紅白戦でも、負けるつもりはありませんので」

羽山はニコリと笑ったが、田北も中村も、それを見てゾクリとした。

笑顔の奥に秘められた、決意のようなものを感じたからだ。

「ああ、わかった…」

田北は、やっつこのことで、そう返事した…。

~ ~ ~ ~ ~

紅白戦当日。

事前に、つばさがwebサイトを通じて、告知を行ったこともあり、スタンドは地元サポーターや、つばさファンが詰めかけていた。

…と言っても、ホームとしているグラウンドはメインスタンドではなく、キャパも千人程度と決して大きい訳ではない。

陸上競技場と兼用の為、ピッチまでの距離も遠い。

スタンドの傾斜が緩いこともあり、余計そう感じるのかも知れない。

このあたりは、今後に向けて、改善が必要だろう。

それでも、女子のアマチュアチームとしては、この環境は恵まれている方だと言えた。

つばさは、アウェー用の白を基調としユニフォームを身に纏い、控え組に入った。

しかし、同じ高校生の緑川沙紀とともに、ベンチスタートのようだ。スタメンが発表されると、つばさファンからブーイングが起きた。

指揮を執るのは羽山優子。

自らの出場は、後半からを予定している。

紅白戦ということで、30分ハーフで行われる旨の場内アナウンスが入った。

ウォームアップ、ボール練習を終え、いよいよキックオフ。

笛が鳴る。

前半は、主力組が高いボールポゼッション（支配率）で攻め立てるが、5バックで退（ひ）いて守る控え組のディフェンスを、なかなか崩すことができずにいる。

アタッキングゾーンまでボールを運ぶものの、フィニッシュまで持っていけない。

シュートを打つても、枠に飛ばない。

それはまるで、アジアの格下チームと戦う、日本代表を見ているかのようなだった。

逆に控え組も、カウンターのチャンスが何度かあったにも関わらず、スピードに欠け、チャンスらしいチャンスが作れないでいた。

そうこうしているうちに、ペナルティエリア内でファールを与えてしまい、PKを献上。

これを決められ、0―1で前半を折り返した。

盛り上がり欠ける展開に、スタンドは沸かない…。

自然発生的に、つばきコールが起こった。

しかし、まだ出ない。

後半、先に登場したのは緑川沙紀だった。

控え組は1点ビハインドの状況となったことで、システムを5―3―2から両サイドを上げ、3―5―1―1―1に変更。

沙紀ひとりのワントップにして、中盤を厚く、高い位置から積極的にボールを獲りにいく戦術とした。

沙紀が献身的に前からチェイスすることにより、主力組のボール回

しの精度が低下。
パスミスが増えてきた。

逆に控え組は、ボールを奪ってから、シヨートカウンターを発動させる。

沙紀がゴール前へ走り、そこへパスを出す…という動きが見られるようになってきた。

選手もようやくエンジンが掛かってきたのか、徐々にヒートアップ。

接触プレーも増え、紅白戦から実戦さながらの様相を呈してきた。控え組ひとつでは、ベンチ入り、レギュラー奪取のアピールの場。主力組以上に力が入る。

そして、後半10分（残り20分）。

羽山優子がピッチに立った。

背番号は…10。

一昨年までは、なでしこジャパン…日本女子代表。

サッカーファンならずとも、一度はその名前を聞いたことがある、トッププレーヤー。

大ケガで引退が噂されたものの、厳しいリハビリを経て、約1年ぶりにピッチに帰ってきた。

それも地元のチームに！

スタンドに詰めかけたほとんどのサポーターは、それを知っている。

選手交代で彼女の名前が告げられると、大きな拍手と歓声が沸き起こった。

それに呼応するかのように、羽山がいきなり魅せる。

トップ下に入ると、最初のボールタッチでいきなり、ノールツクのヒールパス。

そのままリターンをもらって抜け出そうとするが、ここはパスが合わずに失敗に終わる。

だが、このワンプレーだけ見ても、そのレベルの高さが窺えた。

…ふむ…

反対側のベンチで見ている監督の田北は、思わず唖った。

…やはり、現状は羽山に頼らなければならんのか…

監督としては…上を目指すのであれば、あと数人は彼女レベルの選手が欲しいところだろう。

後半20分（残り10分）…。

選手交代が告げらる。

ついに…つばさがピッチに現れた。

羽山の登場…いや、それ以上の歓声。

登場するだけで、雰囲気を変えられる選手。

チームの切り札。

ジョーカー。

「実力が伴えば、つばさはその最有力候補だな…」

田北は、そう呟いた。

大方の予想を裏切り、つばさは左のサイドハーフに入る。

まだワールドの大きさに慣れていないつばさには、運動量が多いそのポジションは、体力的に厳しいと思われた。

果たして…

ファーストタッチは、味方クリアのこぼれ球だった。

ピッチの左サイドでそれを拾う。

すかさず、相手DFが間合いを詰めた。

その瞬間！

「フェイント!?!」

『エラシコ』で躲す。

ボールをアウトサイドに出すと見せかけて、インサイドに切り込む、フェイントの高等技術。

「おおー！」

このプレーにスタンドが沸く。

つばさは、そのままタッチライン沿いを、ドリブルでスイスイと駆け上がる。

対応に遅れたDFがプレスにしようとした瞬間、つばさの左足が振り抜かれた。

アーリークロス…。

ボールは鋭くカーブを描きながら、ゴール前にあがる。飛び込んだのは：

沙紀！

だが、彼女の頭にはわずかに合わず、ボールはそのままエンドラインを割った。

ああ…という溜め息がスタンドから漏れる。

羽山は親指を立て「ナイスプレー」と言っているが、沙紀は不満顔だ。

「なんか決められない私が悪い…みたいになってるんですけど…」

「はい、はい！文句言わない！次だよ、次！」

羽山は手を叩いて、沙紀を鼓舞した。

ゲームのリズムは、完全に控え組だ。

羽山が長短のパスを自在に出し、主力組に『ボールの取りどころ』を絞らせない。

パスの技術は健在だ。

ブランクを感じさせない。

くわえて、沙紀が右に左にとドリブルで突っ込み、相手の体力と集中力を擦り減らしていく。

つばさが次にパスをもらった時は、早めにチェックを受け、ドリブルに入る前に潰された。

身体を寄せられ、そのまま吹っ飛ぶようにして、ピッチに転がる。一瞬ヒヤツとしたが、すぐにプレー続行『可』のサインを出した。主力組もガチできている。

お互い負けられない。

『特につばさには』やられる訳にはいかない。

…素人に好き勝手はさせないよ…

D F陣の気合いが入る。

残り2分。

久々に、ボールがつばさに渡った。

フリーだ。

先ほどと同様、タッチライン沿いをドリブルで上がる。

同じことはさせない！…と、クロスを警戒して、間合いを計るD F。

…うん、同じことはしないよ！…

それを嘲笑うかのように、つばさは一転して中へと斬り込み、ペナルティエリアまで近づくと、迷わず左足でシュートを放った。

だが、これはG Kの真っ正面。

ボールがホップした為、前にこぼしたものの、なんとか押さえた。初ゴールならず…。

だが、その距離からでも、威力は充分だ。

…あの細い身体のどこに、そんなパワーが…

G Kならずとも、全員が同じ感想を持ったに違いない。

そして、控え組が1点追いかける展開のまま、迎えたロスタイム。中盤でパスカットした控え組のM Fが、そのままドリブルで上がる。

恐らくラストプレイ。

ボールは、右のスペースにいた沙紀に出た。
相手DFの人数は揃っている。

自分で入っていくには、スペースがない。

その時、彼女の視界に、ファーポストへ走り込むつばさの姿が映った。

コーナー付近から、ハイボールのクロスをあげる沙紀。

つばさが、DFとヘディングで競り合う。

空中戦！

頭ひとつ高い!!

先に触れたのは、つばさ。

「うぐっ……」

しかし、着地に失敗……背中から落ちた。

競ったボールは、足元へと転がり……そこに羽山が走り込む。

合わせるだけ。

ボールはGKの脇を抜け、ネットを揺らした。
いわゆる『ごつつあんゴール』。

同点……。

そして、そのままタイムアップとなった。

つばさは激しく咳き込んでいるが、頭は打っていないなかったようだ。チームメイトに手を引っ張られ起き上がると、スタンドの声援に、両手を挙げて応えた。

ゲームが終わると、クールダウンもそこそこに、集まった観客に向けてサイン会が行われた。

当初はつばさひとりであったが、監督の計らいで、羽山も並んで対応することとなった。

「ナイスプレーー！」

小さく呟いた声に気付くと、ヤツは色紙から顔を上げ、オレを二度見した。

「た、高野くん！…来てたの!?あれ、練習は？」

「今日は親戚がひとり亡くなった…ことになっている…」

「悪いんだ…」

ヤツはクスツと笑った。

「あとで会えるか？」

「…えっ?…あ、うん…」

「じゃ、連絡する。…後ろが詰まってるから…また…」

「わかった…」

オレは羽山優子にもサインをもらおうと、まだまだ続く長蛇の列を見ながら、ふと思った。

…夢野つばさに羽山優子…

…つばさと羽か…

…なんか、面白いチームになりそうだな…

くっくくく

「お疲れ」

今日はオレがヤツの部屋を訪れた。

「そつちこそ…。わざわざ観に来るなんて聴いてないわよ。それも練習サボってまで…」

「一応、オレは『コーチ』だからな。特訓の成果がどれほどのものか、見届ける義務がある」

「ふふふ…偉そうに…。それで点数は？」

「5点つてどこかな？」

「10点満点で？」

「いや、100点満点だ」

「うそっ!？」

「…うそ…」

「もう…」

「まあ、上出来なんじゃないの？ゴールこそ奪えなかったけど、あれだけやれりゃあ、たいしたもんだよ。正直、いきなりエラシコとか…『はあ?』って思ったけど」

「あれはフットサルでもやってたから…あんなに上手くいくとは思わなかったけど…」

そうなんだ。

元々器用なのかもしれないが、ヤツは長身のわりに足技が巧い。

フットサルの狭いコートで、相手を抜く技術を色々身に付けたらしい。

俺と練習で1対1をやった時も、平気な顔をしてシザースのフェイ

ントを交えてた。

だが、今日の紅白戦は、想像通り弱点も露呈した。

「身体…大丈夫か？」

ヤツは2度ほど吹っ飛ばされた。

フットサルは接触プレーが禁じられている故『当り』には慣れていない。

これをどう『いなして』いけるのか…今後のサッカー人生に大きく関わってくる。

「最後のプレーは、背中から落ちたから、一瞬息ができなかったけど…

ケガはないみたい」

「ちっと心配したぞ」

「ちよつと？」

…お？なんだ、その寂しげな表情は…

「い、いや…『メチャクチャ』心配した」

オレは即座に言い直した。

「でしょ…」

ヤツは悪戯っぽく笑う。

「なにはともあれ、ケガがなくて良かったよ」

「うん…。でも、やっぱりヘディングは苦手かな…。高くジャンプすると、どうしても『スパイク』打ちたくなっちゃうのよね…」

「あははは…」

「まだ、おでこにちゃんと当たらないし」

「それはしかたない。なんでもすぐに全部できたら、苦労しない」

「まあ、それはそうだけど…」

「だけど『その高さ』は、結構な武器になる。それは間違いはない」

「不思議な感じ…」

「何が？」

「バレーボールじゃ『身長が低い』から…って、セッターに転向させられたのに…それが高いって言われて」

「ああ、そうか…そりゃ、競技が違えばな」

…オレは逆に身長が低かったことが、コンプレックスだったんだけどな…

「…どうかした？」

「…いや、なんでもない。それを思うと、ようやくオレも身長は追い付いたかな…と」

「身長は？サッカーじゃユースの代表でしょ？日本の代表なんだから、すごいと思うんだけど…」

「いやいや、夢野つばさに比べれば、オレの知名度なんて『これっぽっち』だよ」

「結構、自分を卑下するんだね。昔はもつと自信満々だったのに」

「小学生の時は、ずっと『チョモには負けまい！』って勝手にライバル視してたんで…。正直、スポーツ以外は全敗だったけど」

「確かに、やたら絡んできたよね」

「絡むとは、人聞きの悪い。勝負を挑んだ…と言ってほしい」

「ライバル視…ね…」

「ん？」

「私のこと…『好きで』ちよっかい出してるのかと思ってた…」

「はい!？」

…やべえ！…

…いきなり核心をついてきやがった！…
…だけど、その話はまだ早い…
…オレの準備ができてねえ…

「と、突然、な、なにを言い出すんだよ…」

「そっちこそ、なに慌ててるのよ…」

「あん？あ、慌ててねえし…」

「ねえ…当時、好きな娘とかいた？」

「当時？小学生の時か…えっと…須崎…松宮…紅林…」

「なんか、みんなタイプがバラバラだね」

「そうか？」

「須崎さんは目がクリツとして可愛い感じだったし、松宮さんは逆に切れ長の目の美人…紅林さんは…ちよつとヤンキーっぽかったかな？」

「…そうだな…。でも、3人とも見た目が良かったことには、かわりない」

「そうね」

「残念ながら、中学は学区が違って、その後は会えず仕舞い…。今、どんなになってるか…」

「彼女とかいないの？」

「オレ？」

「学校、共学なんですよ？」

「中学の時はいた。すぐ別れたけど」

「どうして？」

「性格の不一致」

「ふくん…」

「…今は…何回か、告白（こく）られたことはある！…だが、付き合っ
てはいない」

「へえ…」

ヤツは疑っているようだが、ウソではない。

「こう見えて、意外にモテるんだぜ」

「まあ、スポーツができると『カッコイイ』って勘違いしちゃうのよね」
「勘違いってなんだよ、勘違いって」

「付き合ってるんだ？」

「今は『サツカーに命を懸けてる』んで」

そう言うのと、ヤツはプツと吹いた。

「笑うところか？」

「本当にそれが理由？」

「…えっと…すまん、ウソをついた。正直に言う…タイプじゃない
かった…」

「あ、可哀想…」

「でも、見た目って大事だろ？そりゃあ、性格がいいに越したことはな
いけど…そんなのって、すぐにわからないじゃん」

「うくん…」

「例えばだよ…ずっと同じ空間で過ごして『あつ、こいつ、ルックス
はそうでもないけど、性格は悪くないじゃん…気が合うかも』…とか
はアリだと思う」

「はあ…」

「だけど、ほぼ初対面みたいな状態で『付き合ってください』…みたい
なこと言われても…。そこは第一審査として、タイプかどうかは関
わってくるだろ？」

…異論は認める…

しかし、よっぽどの物好きでない限り、まずはルックスありきだろ
う…。

「チョモだつて、同じ性格の人がふたりいたら、自分の好みのタイプを
選ぶだろ？まあ、格好いいかどうかは別として、好みのタイプを」

「…そう…かな…」

「そうだろ…」

「だね…」

無理矢理言わせた感はあるが、世の中、そんなものでしょ？

「…で？チヨモは？」

「えっ？」

「彼氏…」

「いないわよ…。恋愛禁止だし」

「そうなの？」

「いや、禁止じゃないけど…ほら、色々あるじゃない？だから…」

「ああ…あるな…」

別に誰が誰と付き合おうと個人の自由だが、ファンがいると、そうはいかないらしい。

…現在進行形でなくても、ダメだもんな…

…過去に一緒に撮ったプリクラー一枚で、大騒ぎだし…

『リベンジなんとか』とか怖いしなあ…」

…やるほうもやる方だけど、撮ることを許してる訳だから、自業自得のところもあるかのな…

「…つて、何の話だっけ？ああ、彼氏がいるかいな…か。それでも、好きな人はいるだろう？」

「格好いい人は周りにいっぱいいるよ」

「へえ…」

「学校…芸能人しかいないし」

「そうだった…」

「だから、マヒしてるかも…」

「なにが…」

「高野くんが…ちよつと、いいいな…つて、思うことがある…」

「えっ？」

…マジっ…

「…って言ったらどうする？」

「…だよなあ…。そりゃあ…チョモとはいえ、夢野つばさだからな…。そんなこと言われれば、光栄っちゃあ、光栄だけど…」

「『チョモとはいえ』は、失礼ね…。夢野つばさとならいいんだ？」

「言葉の綾だ…」

「あ、でも、高野くんは『めぐみ派』だったんだっけ？おっぱい大きいから」

「比較論で言う『3人なら誰？』って話で…つつうか、本人目の前にして『つばさ』とは言わんだろ？」

「そうなの？」

「当然だろ？そりゃ、これだけ身近にいるんだもん、応援しないわけないじゃん」

「そっか…そういう理由…」

「何かおかしいか？」

「ううん、別に…」

「そもそも、お前にその気がないのに、そんな話されても…」

「そうだね…ごめん…」

「…」

「…」

…なんだ？…

…変な空気になっちゃったぞ…

「えつと…」

「あの…」

オレとチヨモは同時に声を発した。

「えつ？あ、なに？」

「いえいえ、お先にどうぞ…」

「いやいや、チヨモから…」

「高野くんから…」

「じゃあ、オレから」

「えっ、それなら私が…」

「…って、ダチヨウ倶楽部か！」

オレの突っ込みにヤツは笑った。

…すげえな、ダチヨウ倶楽部…

…何年経つても、使えるもんな…このネタ…

そのお陰で、少し部屋の雰囲気は緩んだ。

「なにか話があったんじゃない？」

…そう、ここからが本題…

「あ、ああ…実は…臨時コーチは今日で退任しようと思って」

「！」

一瞬、ヤツの呼吸が止まった…。

「まあ、ある程度、教えることは教えたし。あとはチームのスタッフが
いるだろうから…」

「そっか…」

「それに…そろそろ、こうして会うのもマズイんじゃないかと…。
さっきの話じゃないけど、噂にでもなったら問題だろ？」

「…うん…それは…」

「オレはユースに選ばれるようになったし、チョモもこれからスター
トだし…今はそっちに集中しないとな」

「…そうだね…」

「サツカーでわからないことがあれば、連絡しろよ」

「うん、わかった…」

「じゃあ、そろそろ行くわ。頑張れよ…」

オレは立ち上がった。

他にも伝えたいことがあったが、今は言うべきじゃない。

そう思った。

「あのね…高野くん」

「ん？」

ヤツが、オレの腕を掴んで呼び止める。

「あのね…これまで、色々ありがとう」

「いいって。将来お前が代表にでも選ばれたら『アイツを教えたのは
オレだよ』って自慢させてもらうから」

「うん」

「ほんじゃ…」

「待って！」

「？」

「待って…もうひとつ…伝えなきゃいけないことがあるの…」

「伝えたいこと？」

「さっきの話…ウソじゃないんだ…」

「さっきの話？」

オレは頭の中で、部屋に入ってきてからの会話を、早送りで再生した。

…どの話だよ…

くっくくく

W i n n i n g w i n g s \ L o v e L i k
e (ラブライク) \

「どの話のことだ？」

「もしかしたら」…と淡い期待を寄せつつ…「いやいや、そんなばかな」
…と直ぐに打ち消す。

世の中そんなに甘くない。

しかし…

「高野くんのことを…ちよつといいかな…つて思ってること…」

…おっ？…

「…ま、まあ…ちよつとだろ、ちよつと…たまにはそう思うこともある
だろ…相手がオレだし…」

「ううん、違うの…そうじゃなくて…」

「そうじゃなくて？」

「好きなの…本当は…」

「…マ…ジ…っ？…」

…淡い期待が…

…『気体』じゃなくて『固体』になった…

…目に見えなかったものが、形となって現れたよ…

…でも…

『ドッキリ』ってヤツだろ？どこかにカメラあるんじゃない？いやあ、参ったなあ…」

オレは『放送されることも考えて』大袈裟な仕草で、困ったフリをした。

100%ないと思うが、真面目に受け取って、騙された様子が流されるとなると、その後のオレの『沽券』に関わる。

一生バカにされる。

ここは用心するに越したことはない。

オレは振り返り、部屋を見回す。

…どこかにカメラがあるんじゃないか？…

オレは窓際に近づくと、並んでいるぬいぐるみをマジマジと見た。

「何してるの？」

「この辺にカメラが…」

「無いわよ…」

「じゃあ、この机のどこかに…」

「無いって…」

「この収納ケースか…」

「それはダメ!!」

ヤツの声が、一際大きくなった。

「おお！これか！やっぱり…」

…見つけた！…

引き出しに手を掛けようとした瞬間、ヤツは言った。

「…そこは下着が…」

「あ…そりゃ、ダメだな…いや、逆に余計確認しなくなったかも…」

2割冗談、8割本気。

「…バカ…」

ヤツの顔が真っ赤になった。

それは、オレが初めて見た、ヤツの恥じらしい表情だった…。

「あ…えつと…その…なんだ…」

動揺して言葉が出ない。

オレが向き直ると、ヤツはオレの目を見て言った。

「私ね…高野くんのが好きだって気付いたの…」

ヤツの瞳は、みるみるうちに潤んでいく…。

…惚れてまうやろう!!…

心の中で叫ぶオレ。

「な、なんて顔してるんだよ…」

「ついに言っちゃったな…って思ったら…急に…」

ヤツは一瞬オレに背を向けると、シャツの袖を自分の目元に押し当てた。

「ふう…セーフ！危なく、目から汗が流れるところだった…」

…セーフじゃねえよ、バカ…」

…あんな顔見せられたら、抱き締めたくなっちゃうだろうが…

「少し、冷静になれ……。たぶん、あれだ……。とりあえず紅白戦まで終わって、少し張り詰めてた気持ちが一緩んだんだろ……。今の言葉は聴かなかったことにするから……」

オレは再び部屋を出ようと、ドアへと向かった。

だが……

「お願い……。ちゃんと話を聴いて……」

ヤツがオレの手首を掴む。

「わ、わかった……」

……冷静になれ……

今度は自分に、その言葉を投げ掛けた。

「私ね……。気付いたの。高野くんが好きだってことに……」

「あ、ああ……。ありがとう……。なのかな、こういう場合……」

「きつと、小学生のころから、好きだったんだと思う」

「えっ?」

「その時はよくわからなかったけど……」

「はあ……」

「ほら、私、大きかったから、男子に怖がられてたし……」

「その筆頭がオレだけ……」

「確かに『チヨモ』とか、変なあだ名つけられるし、それは嫌だったけど……不思議と高野くんには、嫌いになれなかったの……」

「へえ……。何でかね?」

「たぶん、いつも一所懸命だからじゃないかな……。結果はどうあれ、手

を抜かないで、まっすぐだったから…」

「それは…さつきも言ったけど…お前には負けたくなかったっていうか…なんていうか…」

「あとね…私、友達もいなくて…」

「女子人気、高かったじゃん」

「…なのかな…。でもバレーボール中心だったから、あんまりみんなと遊んだこともないし、変に正義感が強かったから、クラスでも、ちよつと浮いた存在だったでしょ？」

「浮いた…っていうより、なにもかも、突出してたよ…。スポーツ万能で、勉強もできて、明るくて、スタイル良くて…非の打ち所がないって、こういうことじゃん」

「でもね…よく思っていない女子もいたじゃない？」

「…いたな…」

チヨモは、結構な嫌がらせを受けていた。

上履きや笛などが『行方不明』になることは、日常茶飯事だった。

ノートがビリビリに破かれていたり、黒板に悪口を書かれていたこともあった。

だが、ヤツは学校では、いつも明るく振る舞い、泣いた顔を見せなかった。

やがて相手方は『効果なし』と見たのか、嫌がらせは『鎮静化』していった…と聴いていた。

「あれね、高野くんのお陰なんだよ…」

「えっ？」

「私には内緒で、いつも探してくれてたでしょ？」

「…記憶にない…」

「ちゃんと覚えてるもん！」

「そうだったか…」

「無くなった筆箱を公園で見つけて、家に届けに来てくれたこともあるし…」

「忘れた…」

「その時に、ね…言ったんだよ…『チョモはなにひとつ、悪くない。だから、絶対に泣くな』…って」

「何かの間違いだ」

『「だけど、怪我したとか、命に関わるようなことなら話は別だ。何かあったら相談に乗るから』…って」

「オレが？そんな恥ずかしいことを？小学生で？」

「うん…」

『「何様だよ」…って感じだな…」

「ううん…嬉しかった。ああ、私にもちゃんと心配してくれてる人がいるんだって…」

「…役に立ったんなら、何よりだ…」

「その時は、その感情を上手く表現できなかったけど…だから、本当に感謝してるの。そうじゃなければ…命を絶ってたかも知れない…」

「おいおい、物騒な…」

「そのくらい辛かった…ってこと」

「そっか…そこまで追い詰められてたとは知らなかった…」

「お父さんにね…『まだ、早い！』…って夢の中で追い返されたのもあるんだけど…」

「あ…」

ヤツの親父さんは、6年ほど前に他界していた。

それも交通事故という不幸な形で…。

オレはまだこの歳まで、人の死というものに直面したことはない。じいさんも、ばあさんも健在だ。

だが、ヤツは…小4で最愛の人を亡くしている。

それだけに死というものがどういふことなのか、よくわかっているのだろう。

自ら命を經とう…などとできるハズがなかった。

でも、強い…。

オレは確かに、イジメとか許せなかった。

だいたい犯人グループは目星が付いていたし、間接的にやめるよう働きかけもした。

だけど…

仮にオレがそんなことを言ったとしても、実際に泣き言も言わず、耐えてきたヤツの精神力…。

「やっぱり、お前はスゲーわ…」

「えっ?」

「なにもかも、手の届かない存在だよ…」

「手の届かない存在?」

「いや、なんでもない…あ、あとで親父さんに線香上げさせてくれるかな…何回か来てるけど、一度もしたことないから…」

「うん、ありがとう」

ヤツは大きく頷いた。

「それでね…」

「まだ、続きがあるんだ?」

「うん…。その時はまだ、子供だったし…付き合うとか、付き合わないとか…そんなのってよくわからなかったでしょ」

「ああ…」

「だけど、あの日…私がバレーボールを辞めるか辞めないかで悩んだ時…偶然、公園で高野くんに会った」

「…会ったな…。あれから3年か…」

「その時も、あの時とおんなじ言葉を掛けてくれたんだよ」

「なんか言ったつけ？」

「何かあつたら相談にのるよー』って…」

「社交辞令だよ」

「かもね。それでも嬉しかった」

「単純だな」

「でも、高野くんが、言葉だけじゃないこと知ってるから…」

「あの時だって『サッカーの日本代表になる』って宣言して、それ通りになってるし」

「まだ、代表ではない。ユース代表だ」

「一緒だよ。私は…結局なにかもが中途半端で…周りの人に助けられて、今、こうしてられるけど、自分の実力で、そうやって登り詰めたんだもん…私にとって尊敬すべき存在」

「オレが？」

「だから、私がサッカーをやる！って決めたときも、真っ先に聴いてほしかったし…コーチもしてほしかったの」

「持ち上げすぎだな…。また『なくんてね…』とか言わねえだろうな」

「嘘付いてるように思う？」

「…あ、いや…」

「それで、今更ながら、気付いたの…。『私、高野くんが好きなんだ…』って…」

「でも、それって『like』だろ？『love』ではないんじゃない？」

「うん。愛してるとか、それとは違うかも。でも限りなくloveに近いlike…かな」

…そうか…

…そうなのか…

…チヨモがオレのことを、そんな風に見てたなんて…

「あ、いや、でも、何で今？このタイミングは…」

「だって、コーチ、辞めちゃうって言うから…」

「それは…ほら…」

「今、言わないと…もう言えない気がしたから…」

「そんな『永遠に会えない』みたいな言い方しなくても…」

…どうする？…

格好つけた方がいいのか。

自分の気持ちに素直になった方がいいのか。

迷った末に出した結論…。

それは…

くつづく

Winning wings
ちくく抑えきれない気持

ヤツに好きだと言われた。

オレは…

「チヨモ…」

「はい？」

「…オレも…お前のことが…」

「えっ!？」

「…好きだ…」

「…うそ?…」

「この状況で嘘を言うと思うか?…オレも同じだ。ずっとお前が好きだった…」

「…信じられない…いつから?…」

「…小学生の頃から…」

「聴いてないよ…」

「お前と一緒に…。当時は、それが好き…っていう感情だとは気付かなかった。むしろ、お前のお母さんの方が好きだった。ムチャクチャ綺麗だったし…今もそうだけど」

「元モデルだからね」

「そうなの？そりゃあ、綺麗なわけだ…」

「高野くん…ひよつとして、熟女好き？」

「違えりよ！…違うって！…まず、お前のお母さんは熟女じゃねくし…えつと、その…だから、あれだ！お前のお母さんはそれだけ綺麗だし若く見える…ってこと」

疑惑については、全力で否定。

…だけど、もし誘われたら…断る自信はない…

「…うん、わかった。まあ、私から見ても、そう思うから、それはそれでいいけれど…。…で、私はどうだったの？」

本題に戻った。

「お前は…お前は倒すべき相手だと思っていた」

「倒すべき相手？」

「上手く表現できないが…勉強でも性格でも、どうやっても勝ち目がないことは知っていた。オレにないものを持つてるお前が、羨ましかった」

「…」

「だから…なんとか認めてもらいたい…っていう気持ちがあったんだと思う」

「認めてたよ、私は…」

「今、知ったよ…お前の気持ち」

「うん…」

「だから、さつき『ライバル視してた』みたいなことを言ったけど…反面、どこか憧れみたいところがあつたんだと思う」

「憧れ?…」

ヤツは首を傾げた。

「なにが一番そうさせたのか…って言う…やっぱり身長だな」

「…身長?…そんなに気にするものなの?」

「あつ! わかつてねえなあ…そりゃあ、気にするよ。…人によるかも知れないけど…」

「特に小学生の時なんて、だいたい女子の方が高いわけじゃん。チビ扱いされるのは、イヤなわけ」

「私、そんな扱いしてた?」

「直接『チビ』とは言わなかったが、いつも見下ろされてた」

「ぷっ! だって、それは仕方ないでしょ」

「だから、それはこっちの被害妄想だ」

「だよね」

「だけど、男なら考えるぞ。彼女が、自分より大きかったらどうなるか。一緒に傘に入るの大変だな…とか、壁ドンとかできないじゃん…とか、お姫さま抱っこしたら、そのままシュミット式バックブリーカーになるな…とか」

「シュミット式バックブリーカー?」

「抱き抱えられられずに『こうやって、こうなる』ことだ」

オレは方膝を立てて、人をへし折るフリをした。

「小学生で、そこまで考えるんだ?」

ヤツは、笑うかと思つたら、逆に真剣な顔でオレを見た。

「考えるよ」

「そうなんだ…」

「だから…チヨモは『対象外』にしていた…というか…」
「…なるほど…」

「あ…上手く言えねえ！…伝わってるか？…」
「なんとなく…」

言葉で説明するのは難しい。

「今思うと…好きだったと思う。お前の性格、嫌いじゃなかったし…でも、素直に認めたくなかった。そうこうしてるうちに、卒業しちゃって…」

「そうだね…」

「だから、公園で再会したときは、正直嬉しかった」

「偶然だったけど…」

「ああ、あそこで会わなければ、そのまま思い出で終わってたんだけどな…」

「うん、あんなどころで会うとはわなかったね…」

…運命なんて言葉、簡単には信じないが、あの時会わなければ、今はない…

「だけど、お前はバレーボール辞めて、モデルになってるじゃん」

「うん」

「その瞬間、お前は永遠に手の届かない存在になった」

「大袈裟だよ…」

「大袈裟じゃねえよ…」

「こっちは張り合えるところはサッカーしかないからな。そしたら、まったく違う分野に行っちまいがった」

「ごめん…」

「あ、いや、謝らなくてもいいんだけど…。そんでもって、また、忘れた頃にコーチを頼まれて…」

「うん…」

「もしかしたら『オレのこと、好きなんじゃね?』とか思い始めて…そうしたら、なんかスゲー意識しちやつて…『あれ?好きだったのはオレかも』みたいな…」

「じゃあ、これって…両想い?…」

「…なのかな…」

「…ホントに私なの?私、女の子っぽくないよ?」

「知ってる。優柔不断より、よっぽどいい」

「私、束縛されるの嫌いだよ」

「大丈夫。オレも嫌いだから」

「私…胸大きくないよ?…」

「大きくても垂れてたら意味ないし、乳輪が大きいのも好きじゃない」

…何を言ってるんだ?…

さすがに、これはヤツもスルーできなかつたらしい。

「ばか…」

再び、ヤツが呟いた。

「い、今のは置いといて…。なんでオレがそんなことを言ったかというと、やっと、並んでも恥ずかしくない背の高さになったから…」

「また、身長の話?私はそんなに気にしてないよ」

「気にしろよ!こっちはやっと対等な目線で話せるようになったんだから」

「…でも、本当に並んだのかしら?」

「並んだよ!いや、抜いただろ!」

「どうかな?」

「じゃあ、そこに壁に背中付けて立ってみ?」

「ことう?」

「お前の頭が、この高さだろ…」

オレは自分の掌を、ヤツの頭の上に置いた。

「あつ!」

ヤツが先に声を出す。

「おつ!」

オレもその状況に気付いた。

…近い!…

「これって…壁ドン?」

「…いや…そういうつもりじゃなかったんだが…」

「してみたかったんでしょ?」

「してみたかったわけじゃない。…それに…何か違う…」

…あと、10cm身長が足りないか?…

「オレが上から覗き込む形にならない」

「ふふふ…そうだね」

理想的な壁ドンではなかったが、期せずして近い状態にはなった。
ヤツは壁に背を向けたまま『動かない』。
オレも、ヤツの正面に立ったまま『動けない』。

ふたりの時間が止まった。

暫くして、ヤツは目を閉じた。

…これは!…

「…チヨモ?…」

オレの呼び掛けに、ヤツは小さく頷いた。
何が言いたいのか、悟ったようだ。

オレは覚悟を決めた。

ヤツの唇を見る。

こんなに間近で見るのは初めてだった。

艶々として、柔らかそうだ。

オレはヤツの頭に手を回し、顔を近づけた。

だが…

寸前で止めた。

「チヨモ…今、キスなんかしちゃったら…オレ、それだけじゃ収まらない気がする…。お前のお母さん、下にいるし…」

キスもエッチもしたことがない…わけじゃない。

だけど…

…相手は夢野つばさだぞ！…

ちよつと怖じ気付いた。

「…高野くん…」

「…スマン…」

「ううん…なんか、私こそ…ごめん…」

ヤツはそう言うのと、その場にドスツとしゃがみ込んだ。

「おい！大丈夫か!?!」

「緊張が解けたら、腰が抜けちゃったみたい…」

「なんだ。…らしくないな」

「どうせ…私は…女らしくないですよ!」

ヤツはそう言うのと、壁に手を付き、立ち上がろうとしたが、またよろけて、再度尻餅をついた。

「おいおい、大丈夫かよ」

「大丈夫…」

「手え、貸すよ…」

「ありがとう」

オレは右手を差し出し、引っ張りあげると、ヤツは立ち上がった勢いで、全体重をオレに預けてきた。

「ぬおつとー!」

ヤツを抱き止める…。

「すまん、不可抗力だ！」

オレはすぐに身体を離そうとした。

しかし、ヤツがオレの腰に回した両腕は、離れない。

「チヨモ!？」

「ちよつとの間だけ、こうさせて…。少しだけ、私にも好きな人ができた…。って、実感させて…」

「…ああ…わかった…」

…どこが女っぽくないだよ…

オレはリクエストに応じて、一旦は下ろした腕を、肩越しからそつと巻き付けた。

どれくらいの時間、そうしたか。
ヤツは一向に離れる気配がない。

…寝てるのか?…

「チヨモ?」

オレは呼び掛けた。

「…なあに…」

「あ、いや…動かないから寝たかと思って…」

「…寝てないよ…。だけど、なんか、すごく幸せな気分になっちゃって…ちよつと、意識をなくしてたかも」

「はっ・じゃあ、もつと意識なくしてみる？」

オレの精一杯の照れ隠し。

…「ばか」って言うに決まってる…

でもヤツは…

何も言わずに頷きやがった！

そうなたら仕方ない。

「許せ…」

オレはチョモを壁際に押しやると、ついに自らの唇を、ヤツの唇に重ねた…。

知り合ってから、約6年。

初めてお互いの秘めていた想いが、結実した瞬間だった…。

くっづくく

「どうですか？サッカーの方は？」

『水野めぐみ』こと、阿部かのんに質問されたのは『夢野つばさ』こと、藤綾乃。

「うん、まあ…頑張ってるよ。でも、ゲームに出られるからどうかは…」

「今週末ですもんね…頑張ってください」

「ありがとうございます！」

『星野はるか』こと、鈴木萌絵の激励に、綾乃は笑顔で応えた。

ここはゲー高のカフェテラス。

春休みが終わり、新学期になった。

かのんと萌絵は、高校の入学式を終えて、綾乃と合流。

夢野つばさが音楽活動を休止した為、シルフィードの3人が集まるのは、久々のことだった。

今週末、夢野つばさが所属するサッカーチーム『大和シルフィード』は、地域リーグの開幕戦を、ホームで迎える。

最初は、つばさの挑戦を冷ややかに見ていたチームメイトも、彼女が真剣に練習する姿に、考えを改めるようになっていた。

そして、日が経つにつれて、つばさのサッカーに関する才能が開花していく様子に、驚きを隠せなくなる。

…うかうかすると、レギュラー獲られるかも…

そう思わせるほどの実力。

周りがシヨボいのではない。

つばさが異常なのだ。

チームメイトの見る目が変わる。

そのつばさの存在が『いい緊張感』をもらたし、レギュラー争いは激化。

結果、短期間でチームの総合力がアップした。

つばさの才能にいち早く気付いたのは、キャプテンを務める『羽山優子』だ。

あの左足の破壊力は、誰しもが認めるところだが…

それ以上に驚いたのが、パスの正確さと視野の広さだった。

つばさは、バレーボールのセッターをやっていたお陰で、ボールの回転、スピードが把握できるという『特殊能力』を持っている。

だから、ダイレクトでボールを捌くときも…それを見極め、どのくらい力加減で、どこを蹴ればいいのか…が、感覚的にわかるのだという。

加えて…

セッターはレシーブが乱れてポジションを動かされても、アタッカーの打ちやすいところへ、きちっとトスを上げるのが役目。

どこからでも、決められた位置にトスアップしなければならない。

サッカーのパスも同じ。

相手の欲しいところに、ボールを出す。
つばさに言わせれば「まったく一緒」らしい。

さらに言えば、セッターは相手の陣形を常に見て、どのように攻撃すればいいのかを考えるポジション。

敵チームの『穴』を探している。

その観察眼：戦術眼とも言えるかもしれない：が、サッカーにおいても活かされている。

つばさは敵味方の位置を、瞬時に把握する能力に長けていた。

だから、どこの誰にパスを出すのが効果的か：あるいはドリブルで仕掛けた方がいいのか：言葉は妥当ではないかもしれないが『セッター目線』でピッチに立っていた。

視野が広いとは、故にそのことを差す。

羽山は、正確無比なパスを武器に、フランスでアシスト王寸前まで登り積めた自分と、同じ『匂い』を、つばさに感じていた。

…この娘は、絶対に中盤の方が活きるわ…

ミドル：いやロングシュートが撃てるのも魅力的だった。

羽山は徹底的に自分の知識、テクニックを叩きこんだ。

チームを勝利に導くには、それを出し惜しみしている場合ではなかった。

自分の負担を軽くする：マークを分散させる為にも、絶対に必要なことだった。

つばさは、こうしてアタッカーだけでなく、ゲームメイカーというオプションを手にしたのである。

しかし、レギュラーを奪うのには、圧倒的な足りないものがあつた。それは一朝一夕ではどうにもならないもの。

持久力だ。

トレーナーの中村と二人三脚で、スタミナアップに励んできたものの、まだ、90分戦えるだけの体力は持ち合わせていない。

これは、未だ、克服できていない。

現状ではスーパースブという役割が濃厚。

あとは…つばさが、緒戦にベンチ入りできるかどうかは、監督の田北の腹積もりひとつだった。

「そっちはどう？緊張してない？ちゃんと盛り上げてね！」

開幕戦のイベントとして、めぐみとはるかは、試合前にサポーターズソングを披露することになっている。

生で歌うのは、年末の紅白歌合戦以来だった。

「任せてくださいー！」

「はい、それは、何の心配もいりませんよ」

ふたりは、顔の横でVサインを作った。

「ソロのレコーディングは順調？」

「お陰さまで」

かのんはにこやかに答えた。

「私は、ちよつと遅れています。どうしても、感情が上手く込められなくて…」

と萌絵。

「珍しいわね、スランプ？」

「…っていうか、プレッシャーですかね…。これまで3人で歌ってきたから」

「でもデビュー前は、ひとりですつと歌ってたんじゃない？」

「それはそうですけど…初めてのソロシングルとなると、別問題です…。それに…」

「それに？」

「かのんとはライバルになるわけですから、そう思うと、変に意識しちゃって…」

「繊細なんだねえ…」

「はい。そうなんですよ、こう見えても萌絵はナイーブなんです」

かのんが『代わりに』答えると、萌絵は「えへへ…」と笑って頭を掻いた。

綾乃は2人より、学年がひとつ上だ。

初めて会ってから2年が過ぎたが…かのんと萌絵は、綾乃にも…ともに教育係を任せられた浅倉さくらにも…完全に心を開くことはなかった。

当時の彼女たちは、人気絶頂のモデル。

だから、どこか気後れや遠慮があったのかもしれない。

また、慣れない東京の生活と、デビューに向けて必死だったこともあるのだろう。

本人たちに悪気はなかったが、どうしても『先輩・後輩』という立場から離れることが、できないでいた。

いや、上下関係は大事だ。

礼儀作法にうるさい事務所の社長は、言葉遣いも含め、そこは厳しく指導している。

しかし、同じユニットを組んで活動する以上、もう少しフランクに付き合っても良いのでは…と感じながら、ここまでできた。

綾乃は（学年が違うこともあり）2人の話題に入っていけず…時おり疎外感のようなものさえ感じることもあった。

さくらにそのことを相談すると

「気にすることはないんじゃない？いつかは、慣れるわよ。それでも親密になりたいって言うなら、一週間くらい、合宿でもしてみれば？そうすれば、色々わかるんじゃないかしら」と言われた。

確かに…考えてみれば、綾乃にも心を許せる『親友』と呼べる人間は、さくらしかいない。

のちに『ゴールデンコンビ』とまで呼ばれるチームメイトの緑川沙紀とは…同じ学年である為、仲良くはしているが、まだ『この時点では』プライベートで遊びに行くほどの、関係ではなかった。

…山下弘美…

…彼女となら、意外と上手くやっていけたかも…

綾乃はかつての目標であり、ライバルの存在を、ふと思い出した。

…元気にしてるかな？

一瞬、遠い目をした綾乃。

「…綾乃さん？」

「どうかしました？」

「ううん、なんでもない。大丈夫だよ、萌絵ちゃん。自信持っていこう！かのんちゃんと同じ曲を歌うわけじゃないんだから、比較するとかしないとか、そんなの関係ないよ！」

「綾乃さんは、いつもポジティブですよね」

「そうかな？それって私が能天気ってこと？」

「はー！」

「はい!？」

「ウソでくす」

萌絵は笑って、ペロツと舌を出した。

「先輩を…からかうんじゃ…ないの!」

綾乃は利き手の左で、彼女の額にデコピンをする…フリをした。

「痛っ!」

「当たってないから」

「ですね…」

再び萌絵は舌を出して、ケラケラと笑う。

つられて、綾乃とかのんも笑った。

鈴木萌絵は普段から、こんなキャラだ。

いつも明るい。

ムードメーカー。

だけど、時おりナーバスになる。

特に思い通りのパフォーマンスができなかった時…彼女の場合、それは歌と演奏なのだが…それが練習であっても、激しく落ち込む。

しかし、人前でそれを見せることはない。

ひとり、その場を離れ、気分を落ち着かせてから戻ってくる。

だから、さっきのように「プレッシャー」だと言って悩む姿など、綾乃は見たことがなかった。

逆に言えば、それは『少し心を開いた証し』とも言えなくもない。

彼女たちが、同じ高校生になったこともあるのだろう。

皮肉なことに、3人でいた時よりも、今の方が距離が近い気がした。

「綾乃さん、なにかいいことありました?」

「えっ!かのんちゃん、どうして?」

「だって、今日は会った時から、ずっと笑顔ですよ」

「いつも、そんなに怖い顔してる？」

「いえ、そうじゃなくて…なんていうのかな…『幸せオーラ全開!』みたいな」

思い当たる節はある。

だが、彼女たちにそのことを話す訳にはいかない。

「そ、そうかな？あ、あれじゃない？久々にあなたたちと会えたから…」

「とか言つて、好きな人でもできたんじゃないですか？」

「あ、わかる？」

と、ここはワザとノツてみる。

「いいなあ…私にも誰か紹介してください…」

かのんはそう、うそぶいた。

阿部かのんは、おつとりしているように見られがちだが、実は決して弱音を吐かない、芯の強い少女だ。

ほんわかとした外見とは裏腹に、とてもストイック。

そして誰よりも冷静で、どこか冷めている…そんなイメージ…。

だが、彼女もまた、少し余裕が出てきたのだろうか…綾乃に対して軽口を叩けるようになっていた。

綾乃は、初めてふたりと打ち解けたように感じたのだった…。

くつづく

雲ひとつない晴天。

例年より遅く咲いた桜が散り始め、風に花びらが舞う。

暑すぎず、寒すぎず、絶好のサッカー観戦日和だ。

4月2週目の土曜日の昼下がりに。

サポーターが待ちに待った開幕戦。

大和シルフィードが本拠地とするスタジアムには、入場待ちの長蛇の列ができています。

この日の為に、北側に位置するゴール裏（トラックの第3〜4コーナー）には、超大型ビジョンが運びこまれた。

またメインスタンドしかなかった観客席は、急遽、仮設のボックススタンドが造られ、そのどちらも、チームの並々ならぬ気合を感じさせた。

ボックススタンドの後ろには、道路を挟んで、小田急線の電車がひっきりなしに行き来しており：さらに上空は、市内と綾瀬市にまたがる厚木基地から、爆音を立てながら、米軍機が飛んでいる。

そんな騒音に負けじと、早くも熱心なサポーターが、試合前にも関わらず、チャント（応援歌）を歌い、声を枯らしていた。

混乱を避けるため、開門が30分早められる。

無償でタオマフ（タオルマフラー）が配られ、チームカラーであるスタンドはオレンジに染まった。

両チームの選手がピッチに登場。

試合前のウォーミングアップが始まる。

その中にいる背番号28を見つけると、集まったサポーターから大きな歓声があがった。

そして、いよいよスタメン発表。

まずはアウェイチームが紹介され、続いて大和シルフィード…。

アナウンスの度に、サポーターがその選手の名前をコールし、手拍子で盛り立てる。

だが、スターティングイレブンに羽山優子、緑川沙紀…そして夢野つばさの名はない。

彼女たちは、ベンチスタートだった。

スタメン発表に続き、サブのメンバーがアナウンスされる。

背番号28が呼ばれると、スタンドからつばさコールが沸き起こった。

試合に先立ち、行われるイベント。

シルフィードの水野めぐみ、星野はるか…『アクアスター』が、サポーターズソングをアカペラで披露。

レプリカのユニに身を包んだ2人は、圧巻の歌唱力で、観客を魅了した。

試合前のこうしたイベントに否定的な、サッカーファンは多い。

確かに、バレーボール大会における、某アイドルなどの扱い方を観ていると、そういう気持ちもわからなくはない。

本末転倒。

どっちを観に来ているんだ？と言いたくなる。

そういう意味では、めぐみとはるかの2人は、チームの応援歌という大義名分があったわけで、決して『受け入れ難し』というパフォーマンスではなかった。

大きな拍手で見送られ、ピッチをあとにする。

相当緊張していたのだろう。

引き上げる時の、ふたりの安堵の表情が、それを物語っていた。

場内にお馴染みの『FIFA Anthem（別名、ワールドフットボールアンセム）』が流れ、主審を先頭に、両チームの選手が入場。左右のピッチに散った。

市長による『始球式（キックインセレモニーともいう）』が終わり、いよいよキックオフのホイッスルが吹かれた。

大和シルフィードの基本システムは、中盤をダイヤモンド型にした4-4-2。

両サイドバックが、いかに高い位置を取れるかが、カギとなる。

前半は、この絶望的なアウェイ感の中で戦う相手チームの『引き分けでもよし！』という戦術にはまり、無得点のまま、40分が経過する。

それでも43分。

右サイドバックの上がりから、チャンスが生まれ、コーナーキックを得る。

このチャンスに、最後はこぼれ球を押し込み、シルフィードが先制！

ところが…。

前半終了間際。

一瞬の隙を突かれ、同点ゴールを許してしまう。

ロスタイムでのプレーだった。

時計を気にして集中力が切れたところ、ロングボール一本から上手く繋がれ、GKが振られたところを、ゴール前で合わされ決められた。悔やんでも悔やみきれない失点。

後半。

大和シルフィードは、同点に追い付いたショックからか、リズムが悪い。

逆に、相手チームが前半とは違い、高い位置からボールを奪いにくるようになったことで、プレッシャーが掛かり、凡ミスが増える。

何度かゴールを脅かされるが、クロスバーに救われた場面もあった。

見かねて、後半15分（残り30分）。

ついに、ベンチが動く。

羽山優子と緑川沙紀…2枚のカードを同時に切る。

しかし…

2人がピッチ横で交代の準備をしていたその矢先…

痛恨の2失点目!!

どうやら、この大観衆の前に浮き足だつてしまい、ホームの地の利を活かせなかったのは、シルフィードだったようだ。

勝ち越しを狙つての選手交代のハズが、まさかの展開。
一転、まずは追い付かなくては…という状況になった。

しかし、監督の田北はそのまま2人を投入する。
ポジションは羽山がトップ下、沙紀はツートップの右に入った。

果たして…

勝ち越しに成功した相手チームは、再び、前半同様、退(ひ)いて
守り、カウンター狙い。

シルフィードは中盤まではボールを回せるものの、前線にボールが
入れられない。

羽山が徹底マークされ、有効なパスが出せないこと…沙紀の快速を
活かせるスペースがないこと…これが苦しい。
ギリ貧。

そうしているうちに、20分経過。

スタンドがザワつきだす。

アップをしていた夢野つばさが、ベンチに呼ばれたからだ。
いよいよか？

そして、後半38分（のこり7分）。

つばさが、ウォームアップスーツを脱いだ。

選手交代。

スタンドは、先制点以来の盛り上がりを見せる。

ピッチに入ったつばさは、FWのポジションへ。

沙紀が下がり、羽山と並ぶ。

ワントップ、ツーシャドー。

システムは4―3―2―1となった。

つばさのワントップ？

作戦は明白だった。

パワープレー。

つばさの左足の威力については、あまりにも有名。
だが、高さに関しては…

相手チームは守りを固めている為、ディフェンスラインが低い。

前線に張り付くつばさが、オフサイドに掛かるリスクは少ない。中盤では、ボールキープできていたシルフィード。ボールを奪うと、一気に前線へと放り込む。すると、その作戦が適中。

空中戦でつばさが競ることにより、そのこぼれ球を拾えるようになってきた。

そして、後半41分（残り4分）。それが結実する。

羽山が上げたクロスに、つばさがヘディングで落とす。走り込んだのは…

沙紀!!

多少不恰好ながらも、気持ちでボールを押し込み、ついに同点に追い付いた!

最初の紅白戦では、沙紀 ↓ つばさ ↓ 羽山での得点だったが、今回は逆に羽山 ↓ つばさ ↓ 沙紀で獲った。

ずっと練習していた形。

つばさのオプシヨンのひとつである、高さ。

残念ながら、ヘディングで競った際、わずかに相手DFが触れた為、アシストは付かなかったものの、狙っていた形で点が獲れたのは、チームとしても、つばさとしても大きい。

しかし、まだ、同点。

ホームでの開幕戦。

もう1点、どうしても欲しい。

さて、どうする？

残り時間はない。

相手チームは、こうなると『引き分け狙い』でくることはわかりきっている。

これまでに増して、ゴール前でのスペースはない。

迎えた後半45分（ロスタイム1分）。

最後のチャンスが訪れる。

クロスをあげると見せ掛けた沙紀が、そのままドリブルで仕掛け、フアールをもらう。

ゴールエリアのやや外：距離にして、約20m。

ゴールのほぼ正面：若干右寄り。

とはいえ：

シルフィードにはフリーキックのスペシャリストがいない。

セットプレーを任されているのは、羽山。

直接狙えない距離ではないが：誰かに合わせるのか？

チーム最長身のDF『馬場聖子』が、ゴール前へ上がっていく。

相手チームは6枚の壁を作る。

間に紛れて、沙紀。

ゴール前に…つばさは…いない？

羽山が右指を3本立て、手を挙げてから、数歩、後ろに下がる。
リスタートの笛が吹かれた。

羽山が助走に入る。

そして右足で蹴った。

放たれたボールは…放物線を描き…いや、描かない！

壁の右端の方へと、コロコロと転がっていった…。

ミスキック！

誰もがそう思った瞬間だった！

そのボールに猛然と突っ込む選手がいる！

背番号28。

夢野つばさ！

転がってきたボールを、思いきり左足で蹴り込んだ。

出たあ！

『K—アヤノ（ん）砲』炸裂！

ボールは低い弾道で、ゴールへと一直線。

oooooooooooo!!

味方の壁で、羽山の位置がブラインドとなっており、ボールの出所がわからなかったGK。

ケアしていたのは上がってきた馬場聖子と、壁の隙間に入った緑川沙紀だった。

しかし、シュートは予想外のところから飛んできた。
しかも、もの凄いスピードで。

まったく反応できず。
気が付いた時には、ボールはネットを揺らしていた。

あまりにも見事なトリックプレーに、相手チームの選手は啞然とす
るしかなかった…。

そして、この瞬間、タイムアップ。

オレンジのスタンドが揺れた。

その歓声は、小田急線の電車よりも、米軍の戦闘機よりも、大きな
音量だった…。

くつづく

W i n n i n g W i n g s く盾と矛く

季節は飛んで…10月…。

水野めぐみと星野はるかとは、それぞれ春、夏と1曲づつリリース。チャートの1位を交互に分けあった。

そして今は『アクアスター』名義で、デュオ曲を発売中。こちらの売れ行きも好調だ。

また、これまで、露出過多を避けるため断ってきたTVは、音楽番組のみ出演を解禁。

これまでベールに包まれていた、2人の個性が明らかにつれて、より人気が高まっている。

当面、この勢いは止まりそうにない。

浅倉さくらも同様。

女優デビューからの7クールで、5本のドラマ出演。

現在放送中のCMは6本を数え『元カリスマモデル』ではなく、すっかり『若手女優』と呼ばれるようになっていた。

年末には、初の主演映画が公開されるということで、今はその撮影の大詰め…多忙を極めている。

こちらも怖いくらいに順調。

そして夢野つばさは…

大和シルフィードの、スーパーサブとして活躍していた。

徐々に出場時間も増え：

時には前線でポスト役をこなし：

時にはスピードを活かしたドリブルでかき回し：

時にはミドルシュートで相手チームを脅威にさらし：

12試合で2ゴール3アシスト：と、数字的にはもの足りないものの、ゲームでの貢献度は高く、チームには欠かせない存在となっていた。

全10チームで争われている地域リーグ。

ホーム&アウェイ方式で、計18試合が行われる。

大和シルフィードはここまでで、8勝2敗2分で首位。残り6試合。

下位チームに取りこぼしをしなければ、優勝：というところが見えてきた状況。

しかし、ここからが正念場。

疲労が蓄積され、怪我人も増える。

累積による出場停止選手も出てくる。

だからこそ、つばさや沙紀のようなバックアップメンバーの力が必要とされるのだ。

所属チームがアマチュアということもあり、めぐみ、はるか、さくらほどの派手さもなく、注目度も低くなっているが、つばさはつばさで地味に頑張っていた。

『ラブライブ』…どっち勝つと思う?」

なんとなく街が、ハロウィーンのカボチャに占拠され始めた頃、さくらが綾乃に訊いてきた。

多忙であるとはいえ、2人ともまだ学生。

学校では顔を会わす。

今は昼休み。

普段はここに、かのんと萌絵が加わるが、今日は向こうのテーブルでクラスメイトと食事をしている。

「どっちが?」

『A—R I S E』か『μ, s』か…」

「二択なんだ?」

「他に選択肢がある?」

「うくん…『一応』4チーム残ってるから…」

『一応』…でしょ?」

「あはは…言葉の綾…。綾乃の言葉の綾」

「ややこしいから!」

2人は顔を見合わせて笑った。

『ラブライブ』とは全国のスクールアイドルが、そのパフォーマンスを競う大会。

今は第3回大会（※あとがき参照）の最中で、東京からは『A—R I S E』『μ, s』ほか2チーム…の計4チームが勝ち残り、年末に行われる最終予選に向けて、その時を待っている。

第1回大会は…昨年末、日本が『シルフィード狂想曲』に浮かされ

てる中、ひっそりと開催された。

その時の覇者がA―RISE。

彼女たちの素人離れした完璧なパフォーマンスは、一躍、芸能関係者の目を引くことになる。

この時点で、早くも何社かスカウトが動いた…という噂があったほどだ。

そのA―RISEの出現により、ラブライブは『アイドルの原石の宝庫』と呼ばれ、今や芸能事務所が、出場チームを隅から隅までチェックするまでの大会となった。

A―RISEは夏に行われた第2回大会も優勝し、2連覇。

絶対的王者：3連覇間違いなし！という立場で迎えた今大会。

ところが、思わぬ伏兵が現れる。

それも同じ地区から。

それこそが、彗星のように現れた…音ノ木坂のμ s…だった。

9人の大所帯ながら、その個性を活かした歌とダンスで、A―RISEを脅かす存在として評価されており、この地区最終予選は、事実上『全国大会（本戦）の決勝戦』だとも言われている。

ゲー校にスクールアイドルはいないが、前述した通り、ラブライブ出場チームから芸能界入りする可能性がある為、生徒たちも結構注目しているようだった。

幸い、さくらと綾乃はジャンルが違う為、それほど仕事に影響がないと思っているが（…というより、まったく気にしていないが…）同じアイドルとして活動している生徒にしてみれば『明日はライバル』である。

嫌が応にも、意識せざるを得ない…というのが、実情だ。

「A—RISEとsかあ…」

綾乃もラブライブのことは知っている。
両者のパフォーマンスも見ていた。

「単純には較べられないなあ…。同じ曲を歌って優劣をつけるならわかるけど、どっちも個性が違うし…」

…あれ？…

…何カ月か前に、似たようなことを萌絵ちゃんに言ったっけ？…

…正直、どっちがいいとか、悪いとか…そんなのわからないよ…

「最終予選に、どんな曲を持ってきて、どんなパフォーマンスをするか…そのデキがどうだったか…それで決まると思うけど…あとは好みの問題じゃない？」

「なるほど…。じゃあ、アーティスト『夢野つばさ』から見て、両チームの評価は？」

「アーティストって…」

綾乃は自分をアーティストだと思ったことはない。

さくらはそれを知ってて、敢えてそう言った。

「そうねえ…うまく言えないけど『盾』と『矛』かしら？」

「盾と矛？矛盾？」

「A—RISEは2連覇してるし…パフォーマンスひとつひとつは、とてもクオリティが高いと思う。でも、どこか『できあがった感』があるのよね。そういう意味で、守りに入っている…っていうか。無理はしない感じ…」

「さすがに鋭いわね…。確かにA—RISEは洗練され過ぎてるかな」

「その点々、sは攻撃的というか、勢いがあるというか…もちろん挑戦者だから、当然と言えば当然なんだけど」

「だから、矛なのね？」

「イメージだよ、イメージ…」

「わかる気がする…。そっかあ…面白いわね。盾が攻撃を受けきれるか、矛は突き破ることができるか…か…」

「個人的にはμ、sに頑張ってほしいけど」

「どうして？なんとなくシルフィードとA—RISEってキャラが似てるから？」

「違うわよ！よくわからないけど、彼女たちを見てると、心を突き動かされるものがあるのよね…」

「わかるかも。一生懸命さが伝わってくる感じ？」

「うん。なんだかわからないけど『頑張れ！』って後押ししたくなるよ
うな…それでいて、彼女たちからパワーをもらえるような…」

「なるほど、なるほど」

さくらは大きく頷いたあと、言葉を続けた。

「私もμ、s推しなんだ」

「さくらも？」

「実は…この中の『南ことり』って、私の遠い親戚なんだって」

「えっ！そうなの？」

「私もつい昨日知ったんだけど…父方の遠縁って言ってたかな。家で、なんかの拍子にμ、sの話題になって、そこから音ノ坂の話になって、そうしたら『その理事長はお父さんの親戚だぞ』とか言うから『えっ！』ってなって…」

「そっか、ことりちゃんって、理事長の娘なんだっけ？」

「だから『じゃあ、私、この人と親戚関係にあたるんだね？』って」

「なるほど、それは応援しちゃうよね」

「でしょ？あつ、あとね、余談だけど…」

「うん」

「この『絢瀬絵里』っていう人、ウチの事務所、狙ってるらしいよ」
「すごく綺麗だもんね」

「まあ、ウチが動くなら、他も動くだろうけど」

「もしかした、この中から一緒に仕事する人がいるかもなんだね…」

そんな話を聞いたとたん、綾乃は、このμ、sというグループに、俄

然、興味が沸いてきたのだった…。

くつづく

Winning Wings　　この快感をあげた
いゝ

何年ぶりかの大雪が降った、12月の下旬。
それはラブライブ最終地区予選の当日だった。

積雪に対して脆弱な都市の交通網は、完全に麻痺。

延期すら考えられる状況であったが、それでも出演者、関係者の熱意がそうさせたのか、雪も弱まり、何とか開催できることとなった。

μ'sは、2年生組が会場入りできなくないかも…という事態に陥るも、音ノ坂全生徒の協力もあって、それを回避。

そんなアクシデントに見舞われながら、逆にそれで集中力が高まったのか、最高のパフォーマンスで、A-RISEほか3チームを抑え、見事、予選を突破した。

「μ'sか…」

ポツリと呟いたのは、ネットでその様子を観ていた萌絵。

「μ'sだね…」

と、こちらは隣にいるかのん。

「どっちも良かったと思うけど…テーマとか季節感とかがハマったかな？」

「μ'sの方が、お客さんの心を、少し多く掴んだ…ってこと？」

「ライブだから…そういう空気感は大事だよね」

「私たちはそのあたり、不慣れだから…逆に勉強になったかも」

「そうだね…」

水野めぐみ、星野はるか『アクアスター』は、デビュー3年目の

来春、初めてライブツアーを行う。

今はシルフィードの楽曲を含む『セトリリスト』を作製している最中であるが、目下の不安は2時間の長丁場をこなす体力の有無と、MCである。

「ああ、ツアーの時だけ、綾乃さん、戻ってきてくれないかしら」

普段は元気印の萌絵だが、時おりポロツとこういう言葉をこぼす。「ダメだよ、頼っちゃ。それは確かに綾乃さんがいれば心強いけど…今はダメ。サッカーに集中させてあげなきゃ」

穏やかな外見に似合わず、意外としっかり者のかのんが、彼女を諭す。

「わかってるよ…ちよつと言ってみただけ…。私たちだけでも大丈夫だよ！つてとところを見せるんだもんね」

「そう！それが今まで面倒を見てきてくれた綾乃さんへの、恩返しなんだから」

「そういえば、明日つて、大和シルフィードの最終戦じゃなかったっけ？」

「うん…あ、ねえ、応援に行かない？」

「いいねえ！たまにはサプライズで…でも、こんなに雪積もつてやるのかな？」

「やるんじゃない？サッカーは雨でも雪でも関係なく、やるハズだよ」

「さすが雪国出身者！」

それを聴いた秋田出身のかのんは、軽く微笑んだ。

その大和シルフィードが本拠地としているスタジアムは、人海戦術で雪掻きが行われ、ピッチコンディションは最悪ながらも、試合ができないレベルではない…ところまで、こぎつけた。

チームは2節前に優勝を決めているが、ホームで迎える最終戦とあって、多くのサポーターが詰めかけている。

白銀の中から現れたピッチ。

スタンドを埋めつくしたチームカラー。

その3色が、鮮やかなコントラストを映しだしている。

会場に訪れた萌絵は

「雪の白と、マフラーのオレンジの対比がさ、昨日観た『μ』sのライブ』みたいだね」

と一緒に来たかのんに言った。

「ブワ〜っと、照明が点くところでしょ？あの演出は、鳥肌が立ったよ」

「やつぱり？実はあの瞬間、なんかわからないけど、ちよつと泣きそうになっちゃって」

「あ、実は私も…。恥ずかしいから言わなかったけど…」

「A—R—I—S—Eとの差…そこにあつたかも…」

「それだけじゃないだろうけど、一因ではあるよね」

「私たちも、ライブ、色々工夫を凝らさなきゃ…だね」

「うん」

萌絵とかのんは、サポーターの熱気に包まれるスタンドで、そんなことを話し合った。

雪上戦用のピンクボールが用いられた試合は、前半で3—0とワンサイドゲームになったこともあり、初めて後半始めからつばさを投入。

ファンサービスの意味合いもあつたかも知れない。

だが、シルフィードは攻撃の手を弛めない。

羽山とのコンビプレーから、つばさがスルーパスを出すと、ウラに抜け出した沙紀がこれを決めて4—0。

日に日に、つばさと沙紀の連携が高まっている…と感じさせるに十分なゴールだった。

これ以上の失点を避けたい相手チームだったが、今度は羽山のクロスに、つばさが豪快なボレーで蹴り込み、追加点を奪われる。つばさはこれで、今シーズンの4得点目を記録。

後半終了間際には、CKでつばさが競ったこぼれ球を、最後は羽山が押し込み、6―0。

シルフィードは、きっちり勝ちを収め、今シーズンの有終の美を飾った。

13勝2敗3分の成績で『なでしこリーグ(2部)』へ自動昇格を決めた。

来月末には、正式承認されるはずだ。

これだけの成績を残しながら、チームから、得点王、アシスト王は誕生しなかったのは少し寂しいが、裏を返せば、ロースコアの展開でも、しっかり勝ちきれた：勝負強かった：ということだろう。

シーズン通してのMVPには、シルフィードの長身DF『馬場聖子』が選ばれた。

チームの生え抜き。

羽山優子が万全でない中、フル出場を果たし、最終ラインからチームを鼓舞し続けた。

シルフィード優勝の立役者。

この結果は当然と言えた。

来シーズンもチームの柱として、期待される選手だ。

試合終了後、チームからサポーターに向けての挨拶が行われ、今シーズンの戦いは幕を閉じた。

つばさの成績は出場14試合(出場時間98分)4ゴール、6アシストだった。

そして大晦日。

水野めぐみと、星野はるか「アクアスター」として、紅白歌合戦のステージに立っていた。

ことしはサプライズゲストではなく、紅組として出場して、それぞれのソロ曲からのメドレーを披露。

2人の年内の仕事は、これをもって終了した。

それをつばさは…

沙紀と一緒に、羽山の部屋で観ていた。

羽山は都内にマンションを借り、独り暮らしをしているが「年越しそばと一緒に食べよう」

と2人を誘ったのだ。

「去年はあっちにいたんでしょ？」

TVの画面を指差し、沙紀が訊く。

「うん。なんか、信じられないけどね…。こうやって観ると、すごいところで歌ったんだな…って思う」

「すごいよね、あの人前で歌うんだから。私にはムリ！」

と笑う沙紀。

「でもね『ヴェル』、代表戦になると何万人って中で試合をするんだよ」
羽山がそばを茹でながら、沙紀に言う。

「何万人…」

「グルッと360度から聴こえてくる君が代に、毎回ゾワゾワってして…ちよつとイツちやいそうになるの」

「表現が下品なんですけど」

「あはは…ヴェル、ごめん、ごめん」

「といいつつ、悪びれる様子はない。」

女もアラサーになると下ネタのひとつやふたつ、なんとも思わないらしい。

「じゃあ、その中でゴールなんか決めたら…」

「身体の『芯』から地鳴りみたいな振動が伝わってきて…すべての人が私を見てる！って思ったら意識が吹っ飛ぶわ。つばさなら少しはわかると思うけど…」

確かに、昨年の紅白出場時に、似たような経験はしている。

だが4万、5万の観衆となると、その何十倍である。

ちよつと想像がつかない。

「ほんの少しですけど。でも規模が違いますし、360度ではないですから…」

「本当に気持ちいいよ！だから2人には、あの興奮と快感を味わってほしいのよね」

「それは…代表を目指せ…ってことですか？」

つばさが訊く。

「正解！」

「私たちが…」

「代表!？」

「そんなに驚くことじゃないでしょ？」

「いえ、ヴェルはともかく、私は…」

「あら？つばさは入ってきた時『やるからにはレギュラーとるつもりですから』みたいなこと、言わなかったっけ？」

「…言いました…」

「だよねえ！同じことでしょ？やるからには代表目指しなさいよ」

「はあ…」

「今シーズン、あなたたち2人とプレーしてわかったわ。ヴェルもつばさも、それだけの素質は持ってる。私が言うんだから、間違いないわ」

「あ、ありがとうございます」

「本当はもう少しレベルの高いチームで戦ってほしいけど…とはいえ、順番ってものがあるから、まずは私と一緒にシルフィードを1部に導いて。そうすれば、自ずと代表への道は開けるよ」

「はい」

沙紀とつばさが頷く。

「私はもう長くないから…」

「えっ？」

「やっぱり…膝がもたないみたい…」

「そんな…」

「大丈夫、死ぬわけじゃないし。国内レベルならまだまだ、十分イケるわ。でも、代表復帰は…」

「なに言ってるんですか！一緒に代表目指しましょうよ」

「ありがとう、ヴェル。だけど自分の身体は自分が一番わかるから…」

「羽山さん…」

「その替わり、来シーズンは2人にバシバシ、アシストして…ガンガン、いくから！ガシガシ、ゴール決めなさいよ!!」

「あ…はい！」

「わかりました！」

「よし！じゃあ、年越しそばを食べて、初詣に行くわよ！」

「は…い！」

くっくくく

ほろ酔いの海未

事故があつた『あの日』…

『園田海未』は、大学の弓道部…の飲み会に参加していた…。

多くの同級生が、大学入学と同時に（新歓コンパと称される飲み会で）アルコールデビューするなか、頑なに20歳になるまで、それを拒んできた。

海未の誕生日は3月の終わり。

つまり、公の席でアルコールを口にしたのは、この春…大学3年生になってから…だった。

もつとも…20歳の誕生日を迎えた瞬間『飲酒解禁！』とばかりに、半ば無理矢理『悪友たち』から、吞まされていた…のではあるが。

海未は元々、炭酸飲料が苦手だ。

シユワツと鼻に抜ける感覚、時間差で込み上げてくるゲツプ…。
どうも性に合わない。

穂乃果にビールを勧められた時も、激しく抵抗したのだが

「ビールはまったく別だから…」

と説得されて、口にした。

結果、見事に騙された。

「穂乃果の言うことは、金輪際、一切信用しません！」

もう、何年も繰り返されている、2人のやり取り。

それを、集まった元々、sのメンバーは微笑ましく見ていた。

海未の誕生日会。

この時、集まったのは穂乃果のほか、にこ、希、真姫、凜の5名。

メンバーは9人いるが、誕生日は被っていない。

その為、誕生日会は、ほぼ毎月開催できる。

全員揃うことは滅多にないが、基本的に本人含めて過半数の参加があれば、OKらしい。

とはいえ、まだ未成年者がいる為、居酒屋などには行くわけにはいかない。

穂乃果の部屋に集まって、わいわい騒ぐのが、お決まりのパターンである。

「ビールがダメやったら、こっちの方が合うんやない？」

『外の世界』では、標準語で会話する希だが、このメンバーの前では『エセ関西弁』を操る。

逆に希が標準語を喋ると「気持ち悪い」とか言われるので、敢えてそうしているのだ。

希は買い物袋をガサゴソと漁ると、日本酒のワンカップを取り出した。

「渋っ！」

それを見たにこが、大袈裟に驚く。

「でも、確かに海未ちゃんのイメージだと、こっちかにや？」

凜もメンバーの前では、猫語が出てしまう。

「そうね、ワインとかカクテルのイメージではないわね」

「未成年のあなたがたには、言われたくないです」

海未は眉間にシワを寄せ、険しい顔をした。

「あら、私はあと半月もすれば誕生日だから、今呑んでも、そんなに変わらなと思うけど」

「真姫ちゃん、ズルいじゃ！そうしたら凜も呑みたいじゃ！」

「ここら、それはダメやって！その後なにかあったら、穂乃果ちゃんのお父さん、お母さんに迷惑かけるやん」

「じよ、冗談よ」

「そう、そう、もうちよつと我慢しなさいよ！」

「…と、一滴も呑めないにこちゃんと言ってますけど…」

「うるさいわねえ、穂乃果は黙ってなさいよ！」

「海未ちゃんが呑まないのなら、穂乃果がもらうね？」

そう言つて穂乃果は、海未が残した缶ビールを手にとると、グビグビと一気に呑み干した。

「ぷはーっ！」

「ありや、穂乃果ちゃん、フライングはいかんよ。まずは海未ちゃんやん」

「あ、ごめん、ごめん。つい…」

「いいです、私は無理に呑まなくても」

「まあ、まあ…。海未ちゃんも社会に出れば、そういう席も増えるんやし、アルコールが合うかどうかは調べておく必要があるんやない？」

「でもさ、希ちゃん…いきなり日本酒はキツいんじゃない？まずは3%くらいのカクテルからにした方が…」

「私も穂乃果の意見に賛成。日本人はアルコールの分解能力が、西洋人に比べて低いから、半数がお酒に弱いつて言われてるし」

「なんで未成年のアンタがそんなこと知ってるのよ」

「医者の娘として常識よ、常識」

「真姫ちゃん、物知りじゃ！」

「ジャーン！期間限定、プレミアムピーチカクテルを買ってきたんだ！」

穂乃果が缶を見せる。

「桃…ですか？」

「まあ、これならジュースみたいなものだから…とりあえず、一口だけ味見してみてくださいよ」

「本当に大丈夫でしようね？」

さつき『金輪際、信用しない』と宣言したばかりなのだが、もうそれを忘れたのだろうか。

「騙されたと思って、ね？」

「はあ、では…」

コクツ…

「なるほど、ジュースですね！」

「でしょ？」

「はい、これなら吞めそうです」

「ジュースなら凜も吞みたいにゃ！」

「だからダメやって！」

「うう…」

「はい！そう思って、にこちゃんと、凜ちゃんと、真姫ちゃんにはノンアルコールのカクテルを買ってきたよ！」

「穂乃果ちゃん、やるにゃ〜！」

「それっていいの？」

心配そうに真姫が訊く。

「一応、ノンアルやったたら、法的には問題ないハズやけど…未成年の飲酒への興味を導くから、道徳的にはどうか…って感じやったかも」

「まあ、まあ、細かいことは気にしない！じゃあ、みんな開けて？では…海未ちゃん、20歳の誕生日、おめでとう！カンパ〜イ！！」

「カンパ〜イ」

グビツ…グビツ…グビツ…

「あ、海未ちゃん、そんな一気に呑んだらダメやって…」

「ふう：美味しかったです！」

「一気しちやっただ…」

海未のいきなりの呑みっぷりに、穂乃果たちは、啞然とした。

「ひよっとして、海未ちゃん、イケるクチなんやろか？」

希がそう呟いた瞬間、海未の顔が、ほんのり赤みが差してきた。

「なんだか、すごく、暑くなってきましたね…」

海未は着ていたブラウスのボタンをひとつ外して、手でパタパタと扇ぎ始める。

「おお、海未ちゃん：なんか色っぽい」

「ほんまやね…」

「そうですか？…」

「海未はすぐ顔に出るタイプなのね」

と、にこ。

「ふくん、3%といえども、侮れないのね」

海未が空にした缶の表示を、まじまじと見つめる真姫。

「うふふ、身体は正直やからね」

「なんか、アンタが言うと、すごく卑猥に聞こえるんだけど…」

「にこつち、考えすぎやって」

希はニヤツと笑う。

「希ちゃんは、強いよね！なに呑んでも酔わないし」

「ん？ウチ？そうやろか？」

「顔にも出ないし」

「少しは出た方がいいんやけど」

「希ちゃんは、酔っぱらったりしないにや？」

「あは！結構、酔うよ」

「へえ、そうなるかどうかなの？」

「アタシも、アンタが酔ったところなんか見たことないんだけど」

真姫とにこが、希に問い掛ける。

すると希は両の腕を前に突き出し、掌をパツと開くと、おもむろに指を折り曲げた。

「メツチャ『ワシワシ』したくなる！」

「のわっ！」

「ヴェ〜〜…」

にここと真姫は、スウェーバツクして、その危機から脱した。

「…つて言うか、アンタはいつも、発情期じゃない！酔う、酔わない、関係ないでしょ！」

にこが怒鳴る。

「違うんよ、酔うと『メツチャ』したくなるんやって！」

「『メツチャ』なんだ」

穂乃果が笑う。

「誰か久々に試してみるん？かなりバージョンアップしてるんよ！」

「何よ！バージョンアップって!？」

「せやから…試してみ…」

「するか！この色情魔が！」

「ほんなら…真姫ちゃん」

「ヴェツ!?なんで私？」

「発展途上やった5年前から、どれくらい成長したか、確認する必要があるやん！」

そう、真姫は高校入学間もない頃、まったく面識がなかったにも関わらず、背後からいきなり「攻撃（ワシワシ）」されて『発展途上やけど、大きくなる可能性はあるかな』と言われた『屈辱的な過去』がある（※前書き「2」参照）。

「よ、よく、覚えてるわね…」

普通、やられた方は覚えていても、やった方は忘れているものだ。

…やっぱり、この人はいまだに理解不能だわ…

真姫に、かつて抱いた希への印象が、ふつふつと沸き上がってきた

(※前書き「2」参照)。

「さあ、覚悟しいやあ!」

希の両腕がストリートファイターのダルシムが如く、ヌツと真姫へと伸びる。

「いい加減に…」

と真姫が怒鳴ろうとした瞬間だった。

「ブフツ!」

と誰かの…堪えていた笑いが漏れた。

「!？」

「うふふふ…8点途中ですか…ふふふふふ」

「海未?」

「海未ちゃん?」

「希は面白いことを言いますね」

「海未ちゃん?」

「…ということは、にこや凜の胸は、8点でなく、0点ですね…なんて

…ふふふふふ…」

「あ、海未ちゃん、面白いやん！」

「こらこら！なによ、0点って！アンタだってこっちの一員じゃないの！」

「そうにや、そうにや！凜をにこちゃんと一緒にしないでほしいにや！ちよつとは大きくなったんだから」

「凜、アンタねえ！ミリ単位の話で自慢するんじゃないわよ」

「ぷっ！ミリ単位ですって」

海未がとても楽しそうに笑う。

「なるほど、今日は『フラット5（※前書き「3」参照）が揃い踏みやね」

「ふふふ…そうですね…希とにこ…同じ生き物とは思えませんもね…それにしても、にこの胸はどこに消えたのですか？…二個どころか、一個もないですよ…なんて…」

「海未ちゃん？」

5人は、ここにきて、ようやく彼女の異常に気が付いた。

「あなた、酔ってる？」

真姫が海未に訊く。

「酔ってる？…ですって。真姫は面白いことをいいますね」

「どこがよ…」

「ふふふ…酔ってるかどうかはわかりませんが…ふふふ…いい気持ちですよ…ふふふ…」

…ありやりや…

5人は顔を見合わせた。

…やっぱり、海未も変わってるかも…

真姫はひとり思った（※前書き「1」参照）。

「まあ、最初やし…気持ちよくなってるんなら、いいんじゃない？」

「そ、そうね…酒癖が悪いよりはよっぽどね…」

にこが同意する。

「海未ちゃん、大丈夫？…って寝てるにや!!」

海未は座ったまま、気持ち良さそうに、眠りに落ちていた。

「しばらく、このままにしておいてあげよつか？」

穂乃果は、海未の寝起きの悪さを知っている。

「そ、そやね」

穂乃果だけでない、みんな知っている。

「でも…海未の誕生会で、本人が寝てる…ってどうなのよ？」

「真姫の言う通りだわ」

「いいやん、いいやん。それはそれ」

「今の内に、海未ちゃんの顔に落書きするにや！」

「ちよつと、凜ちゃん！それはちよつと…楽しそうやん!!」

凜と希に悪魔が乗り移った…。

海未が目覚めた時には、にこと真姫、凜はいなかった。

…すっかり、寝てしまいました…

…ですが、非常にスッキリした気分です…

…適度な飲酒は緊張を和らげ、リラックス効果をもたらすと聴きますが…

…なるほど、こういうことですか…

穂乃果と希はグツスリと眠り込んでいた。
見ると結構な数の空き缶が、並んでいる。

…察するに…

…3人が帰ったあとでも、相当呑みましたね？…

…まあ、今日はこのままにしておきましょう…

…では、私は失礼します…

そして海未は、物音ひとつ立てずに、部屋を出て、自宅へと戻って
いった…。

ぎゃあ〜〜!!

深夜の園田家に、海未の悲鳴が響き渡った。

家に帰った海未が、化粧を落とそうと鏡に向かった瞬間…

凜と希が仕掛けた『メッセージ』に気が付いた。

両の頬には『祝』『二十歳』とマジックで書き込まれていた。

そして鼻の下には、お決まりのちよびヒゲ…。

…希と凜…です…

…次会った時には、命はないと思ってくださいよ…

海未は鏡の前で、ニコツと微笑んだ…。

負けず嫌いな海未は、その日から、少しずつアルコールを口にすることができるようになった。

ここは、体質的に身体に合わないようだが、海未はそこまでではないようだ。

初めての時は要領がわからず、一気に吞んで、いきなり酔ってしまっただが、毎日、少量ずつ慣らしていけば、大丈夫。

根拠はなかったが

「何事も日々の積み重ねです」

と海未らしい理屈に基づくものだった。

こうして、6月を迎える頃には、チューハイなら2杯くらいはイケるようになっていた。

そして、あの日：

昼間、大学の弓道部では、新人戦が行われた。

その打ち上げ。

今まで、呑めないことを理由に出席を拒んできた海未だが、3年生になり年齢的な言い訳は通用しなくなった。

同時に：穂乃果たち以外の人間とも付き合う必要性を感じていた。

いつまでも『彼女たちだけ』に依存していると、いつか社会に取り残される。

そんな漠然とした不安。

海未ほど『我が道を行く』タイプの人間であっても、二十歳を過ぎれば、多少のことは考えるようになる。

これから社会に出る以上、周りとのコミュニケーションを図ることも大事だと思うようになる。

だから、初めて参加した。

なるほど、こういう席にいくと、色々なことが見えてくる。

笑い上戸、泣き上戸、怒り上戸…下戸でも盛り上げ上手もいるし、やたら気の回る者もいる。

まさに十人十色。

呑み過ぎて人に迷惑を掛けるのは、どうかと思うが『飲み会』というものに少しだけ偏見をもっていたことに、反省した。

海未はカンパイの時こそ、ビールを口にしたものの…いや、舐めたものの…あとはサワーをもらい、そのあとはウーロン茶で過ごした。昔の体育会系ほど、一気だなんだ…とうるさくなく、それで十分許してもらえた。

そして、お開きの時間を迎える。

そのまま、カラオケに行く連中もいたが、海未はここで帰ることにした。

…酒は呑んでも呑まれるな…です…

慣れないことをして、酔いが回り、粗相するようなことはしたくなかった。

「では、今日はこれで…」

大丈夫？送ろうか？と何人か声を掛けられたが、丁重に断り、駅へと歩き始めた。

…大丈夫です…

…足取りはしっかりしてますし、頭も冷静です…

そう思っていた。

しかし…

海未も、衝突した車がこっちに向かってくるのはわかっていた。普段なら、何事もなく身を躲（かわ）したに違いない。

だが、動かなかった…。

動けなかった…。

それをアルコールのせいにする訳ではないが…
どっちにどう動けばいいのか、わからなかった。

一瞬の判断力が鈍った。

その分だけ、反応が遅れた。

「よけろっ!!」

隣にいた男性に突き飛ばされた。

そして、その人は…

車に跳ねられ…宙を舞い、頭から落ちた…。

それはスローモーションのようでも、コマ送りのようでもあった。
不思議なことに、そのシーンはあらゆる角度から、脳内で再生される。

横から、正面から…そして上から…。

そこからあとのことは、あまり覚えていない。
モノクロの映像のなか、大勢の人の飛び交う声が、ノイズのように響いていた。

かすかに救急車に乗せられたことは、記憶している。

正気に戻ったのは、病院に運ばれ、治療を受けて、何時間も経ってからのことだった…。

く第1部 完く

登場人物紹介

【登場人物紹介①】

【高野 梨里（たかの りさと）】

本作の主人公。

神奈川県出身

1月3日生まれ（20歳）／O型

176cm／63kg

『横浜・F・マリノス』所属のMF（#27）／オリンピック（U-23）代表（#7）

幼い頃から難読な名前と、伸びない身長に不満を持っていた。

古い友人からは『リサ』や『リリー』などと呼ばれるが、いまだもって何故『梨里』と名付けられたのかは不明。

身長に関しては、幼い頃から小さく（中学1年生時で138cm）常にコンプレックスだった（その後の8年間で40cm近く伸び、今は解消）。

サッカーは小学1年生から始め、中学からマリノスのユースに入団。

高校卒業と同時にトップチームに昇格。

生粋のドリブラーで、俊足を活かした直線的なプレーが特徴だったが、成長期を境に、小刻みなステップで相手を躲すスタイルへと変わった。

キーパーのタイミングを外すシュートが得意。

オリンピック代表に選ばれたが、合宿直前に、交通事故に巻き込まれた。

綾乃とは小学生時代からの知り合いで、恐らく世界で唯一『チョモ』と呼ぶ人物。

その綾乃との関係は、本人曰く

「友達以上、恋人未満」

とのこと。

基本、スケベ。

視力はあまり良くないが、ピッチから（観客の）綺麗な女性を探しているうちに、遠くからでも（後ろ向きでも）容姿を判別できる『特殊能力』を身に付けた。

好みのタイプは適度に細身で、可愛い…というよりは、綺麗な女性。

プラスαの要素として巨乳、ポニーテール。

ただし、バストはデカければ良いというわけではなく（D〜Eカップくらいが理想）、乳輪が大きいのはNGらしい。

アイドルや芸能人については、あまり興味がなく、*μ's*についても

「見たことはあるけど、顔と名前が一致しない」

と言っているが、恐らく上記の条件であれば『絢瀬 絵里』あたりはストライクゾーンのだ真ん中だと思われる。

絵里の乳輪については把握してないが…。

明るい娘は好きだが、うるさい娘は嫌い。

サバサバした娘は好きだが、ガサツな娘は嫌い。

色々、面倒くさい。

しかし、それらは、あくまで理想論であり『好きになった人がタイプ』とも言っている。

愛車はエルグランド。

好きなサッカー選手は、ベタだが『リオネル・メッシ』。

【梨里の父（りさとのおちち）】

梨里の父。

職業は公務員。

ありとあらゆるスポーツに精通しており、知識だけは豊富。

運動神経は悪くないようだが、特別スポーツ経験があるわけではない。

梨里に言わせれば、単なる『スポーツ好きのオヤジ』。

真面目な性格だが、天然ボケでもあり、特にどこかへ出掛ける際には、必ず（スリッパのまま玄関を出る、行き先を間違えるなど）『なにかやらかす』。

梨里の命名理由については「何となく」「雰囲気で」などと、明言を避けている。

【梨里の母（りさとのはは）】

専業主婦。

料理上手のしっかり者。

煮物が得意だが、梨里があまり好きじゃないのが、不満のようだ。

梨里の命名理由については「お父さんに任せたらわからない」と、明言を避けている。

【藤 綾乃（ふじ あやの）】

前作『Winning wings』の主人公。

※現在、公開はしていません。

神奈川県出身

2月8日生まれ（20歳）／A型

167cm／50kg

B80（B）／W58／H81

なでしこ1部リーグ『大和シルフィード』所属のFW（#28）／
なでしこジャパン代表（#28）

『飛鳥プロ』所属のアーティスト（V○兼Gt）

父親は、小学4年生の時に他界。

飲酒運転のトラックドライバーによる交通事故死だった。

以後、母子家庭で育つ。

小学生時代はバレーボールの『左利きの』ウイングスパイカーで、守備免除のスーパースペースだった。

しかし、特待生として進んだ中学では『背の低さ』からセッターへのコンバートを命ぜられる。

中学2年生から『AYA』名義で、『JーBEAT』の専属モデルとなり、『浅倉さくら』とのコンビ『C・A・A・2』で一世を風靡する。

彼女の真似をしたファッションは『AYAーx』と呼ばれた。

高校入学と同時に、バンドスタイルのユニット『シルフィード』の『夢野つばさ』としてデビュー。

その年に紅白出場を果たす。

AーRISEの『統堂英玲奈』に似ていると言われたことがある。

現在はバンド活動を休止して、サッカー選手に転向。

所属チームの『大和シルフィード』は、入団から4年で地域リーグ↓ なでしこ2部リーグ ↓ なでしこ1部リーグへと昇格。

その原動力となった。

チーム1、2を争う俊足で、シルフィードでは主に右ウイングを任

されているが、高いジャンプ力と正確無比なパスセンスを兼ね備えている為、状況によつては、ワントップでポスト役や、OMF、SMF、SBに入ることもある。

しかしなんと言つてもストロングポイントは『Devil wing (デビルウイング)』と称される、左足から放たれる女子離れした強烈なシュートで、彼女自身は『Beautiful Lefty Sniper (美しき左利きの狙撃手)』の異名を持つ。

フットサルで身に付けた足技 (フエイント) が得意。スタミナには、やや難がある。

同じ年齢のチームメイト『緑川 沙紀』と併せて『なでしこのゴールデンコンビ』と呼ばれている。

一時期、かつての友人 (山下 弘美) の死 (自殺) を知り、精神的にも肉体的にもボロボロになるが、『浅倉 さくら』や『羽山 裕子』や『緑川 沙紀』らの支えによつて、見事復活を果たした。

ただし父、友人と身近な人が亡くなつていふこともあり「死」といふ言葉に対しては、かなりナーバスになっている。

梨里からは『チヨモ』と呼ばれている。

相思相愛なのだが、お互い忙しく、イマイチ『深い仲』になりきれていない。

父親を早くに亡くしているため、多少ファザコンの気があり、渋めの男性がタイプ。

『永井』に恋心 (のようなもの) を抱いていた時期があつた

自動車免許証は取得しているが、車は持つておらず、ペーパードライバー。

好きなバレーボール選手は『カーチキライ (米)』と『アンドレア ヌゾルジ (伊)』。

リアルタイムで観たわけではないが、幼い頃に知り「カツコイイ」と

思っている。

ちなみにサッカー選手はあまり詳しくない。

【藤 久美子（ふじ くみこ）】

綾乃の母。

大学時代にモデルをしており、『飛鳥プロ』に所属していた。卒業と同時に結婚。

翌年、出産。

従って綾乃と同年代の母親に比べると、かなり若い。

現在でも美貌は健在で、実年齢よりも10歳は下に見える。

出産後、しばらく専業主婦をしていたが、モデル時代の縁で出版社から声が掛かり、編集部勤務。

今では出世して、女性ファッション誌『EVERY』の編集長を勤めている。

10年前に夫を交通事故で亡くしてから、綾乃を女手ひとつで育ててきた。

『永井』とはモデル時代からの知り合い。

【綾乃の父（あやののちち）】

享年36歳。

元陸上の走り高跳びの選手で、インターハイ出場の経歴を持つ。

大学卒業後は、スポーツ用品のメーカーに就職し、広報の仕事に携わっていた。

長身のイケメン。

妻の久美子とは、仕事を通じて知り合い、猛アタックの末、結婚。

自分の身長に釣り合う女性を探していたところ、モデルだった久美

子が現れたという。

子供も生まれ、幸せな家庭を築いていたが、帰宅途中、飲酒運転のトラックに跳ねられ、帰らぬ人となった。

〔山下 弘美（やました ひろみ）〕

千葉県出身

享年17歳

中学時代は、将来を嘱望されたバレーボールのセッターで『アタッカーからコンバートさせられた綾乃』の目標でもあり、ライバル。

小柄で童顔だったことから、付いたあだ名は、名前をもじって『ヒロリ』と呼ばれていた。

高校に入って膝を故障。

選手を諦め、マネージャーとなるが…。

ある日、サッカー選手として活躍する綾乃（つばさ）を、激励に訪れ、

「また一緒にバレーボールができたらいいのかな…」

…と笑顔を見せるも、その翌日、遺体となって見つかった。

自殺と断定されたが、遺書は見つかっていない。

バレーボールができなくなったことに対する、精神的苦痛が原因とされている。

一方で、所属チームのコーチによる性的虐待があった…との噂も流れたが、現在に至るまで真偽は不明。

〔永井（ながい）〕

口ひげを生やした、ダンディーな中年で、雑誌『J―BEATの』編集長。

中学を『自主退学』した綾乃を、モデルの世界に引き入れた。

綾乃の母、久美子とはモデル時代からの知人。
彼女に好意を寄せているが、それを伝えられず、今日まで至る。

【原（はら）】

老舗芸能事務所『飛鳥プロ』の女社長。

礼儀作法に厳しいことで知られ、社員教育も、自らが先頭に立って行っている。

故に、業界からの信頼も厚い。

ただし、柔軟性がないわけではなく、聴く耳は持っている。

所属タレントの高齢化が進んでいる為、若い人材を求めているが、なかなか自分の眼鏡にかなう子が現れず、苦戦している。

そんな中『浅倉さくら』は、綾乃が入るまで、唯一の若手だった。

綾乃の母、久美子もかつて飛鳥プロに在籍していた為、親子二代の面倒を見ることになった。

【浅倉さくら（あさくら さくら）】

東京都出身

3月9日生まれ（20歳）／O型

154cm／42kg

B77（B）／W56／H78

『飛鳥プロ』所属の女優。

冗談みたいな名前だが、本名。

元、小中学生のカリスマモデル。

『J—BEAT』では『AYA』とのコンビ『C．A．2』を組んでい

た。

彼女を真似したファッションは『サクラ』と呼ばれ、一世を風靡する。

高校入学と同時に女優に転身。

デビュー当初から演技力に定評があり、演劇界における賞を総嘗めに行っている。

アカデミー賞では、新人賞、助演女優賞、そして今年は主演女優賞を授賞し、史上最年少で『3冠』を達成した。

綾乃とは『親友』と呼べる仲で、彼女が精神的にも追い詰められた際には、何かと気を遣い、フォローした。

元μ'sの『南ことり』は遠縁にあたるが、お互い会ったことはない。

【登場人物紹介②】

【阿部 かのん（あべ かのん）】

秋田県出身

8月1日生まれ（19歳）／O型

163cm／50kg

B86（F）／W62／H88

『飛鳥プロ』所属のアーティスト（Vocal Key）。

中学3年生でバンドスタイルのユニット『シルフィード』の『水野めぐみ』としてデビュー。

その年に紅白出場を果たす。

翌年より『夢野つばき』の音楽活動休止を受けて、ソロデビュー。

同時に『星野はるか』と、派生ユニット『アクアスター』を結成し、以降、昨年末まで3年連続（シルフィードから数えれば、4年連続）で紅白に出場している。

『大和シルフィード』の公式サポーターズソングを歌っている。

幼い頃から民謡を習っており、ロングトーンが得意。

星野はるかとの兼ね合いで、ソフトに歌うが多いが、やろうと思えばハードに歌うこともできる。

ただし、その場合『こぶし』がまわってしまいうクセが出る。

民謡を習っていた為、三味線が弾ける。

（人前で披露するレベルではないが）尺八も吹くだけならできる。

その他、ピアノ、ギター、ドラムとなんでも器用にこなし、ツアーなどで披露することがある。

シルフィード結成時、少しふっくらした体型だった為

「（前に出て動き回るギターよりも）キーボード向き」

と言われ、少なからずショックを受けたらしい。

チャームポイントは真つ白な肌と、豊かな胸。

デビューから、ひとつカッパサイズが上がった。

だが、そこだけ注目されるのは本意でないと、いつも露出は少なめである。

見た目のほんわかした雰囲気とは違い、かなり気が強く、しっかり者。

A—RISEの『優木あんじゅ』に似ていると言われるが、かのんの方が全体的に、一回り大きい。

A—RISEデビュー後は、音楽番組などで競演機会も多い。

【鈴木 萌絵（すずき もえ）】

大阪府出身

5月5日生まれ（20歳）／AB型

155cm／45kg

B80（D）／W58／H79

『飛鳥プロ』所属のアーティスト（Vo兼Gt）。

中学3年生でバンドスタイルのユニット『シルフィード』の『星野はるか』としてデビュー。

その年に紅白出場を果たす。

翌年より『夢野つばさ』の音楽活動休止を受けて、ソロデビュー。

同時に『水野めぐみ』と、派生ユニット『アクアスター』を結成し、以降、昨年末まで3年連続（シルフィードから数えれば、4年連続）で紅白に出場している。

『大和シルフィード』の公式サポーターズソングを歌っている。

（シルフィードの中では）小柄だが、その体格からは想像もつかないほ

ど、エネルギーでパワフルな歌声が特徴。

幼い頃からダンスを習っており、女子では珍しい『ロック』や『ブレイクダンス』が踊れる。

これらはツアーなどで披露することがあり『ウインドミル』は一番の見せ場となる(『ヘッドスピン』もできるらしいが、これはスタッフから止められている)。

だが、あくまでも歌が本業と考えており『歌って踊れるスタイル』は目指していない。

大阪府出身ではあるが、小学4年生から移り住んだ為、いわゆるステレオタイプの関西人ではない。

しかし、多少なりとも大阪の空気を吸って育ったことにより、ボケ、ツッコミをそつなくこなし、ムードメイカー的な役割を担っている。(あまり人前では見せないが)テンションのアップダウンが激しい。

落ち込む時は、とことん落ち込む為、陰でかのが励ましている。

A—RISEの『綺羅ツバサ』に似ていると言われるが、萌絵の方が優しい顔つきをしている。

A—RISEデビュー後は、音楽番組などで競演機会も多い。

【石井(いしい)】

フットサルチーム『Deusa da vit・ria (デウーサ
ダ ヴィットーリア)』のコーチ。

『Deusa da vit・ria』はモデルを中心にした女子芸能人のフットサルチームで、そのコーチを努める。

元Jリーガーで、ハードワークが売りのMFだったが、足首の故障に苦しみ、代表候補になったことはあるものの、アマッチに出場することなく、現役生活を終えた。

フットサルを始めた綾乃の『左足の驚異』を体感し、その後チームのエースに育て上げた。

彼女が放つ『左足のシュート』の『最初の犠牲者（股間にボールが直撃）』で、悶絶しながらも「化け物を見つけた」と喜んだ。

綾乃が放つ、女子離れした強烈なシュートを『キャノン砲』をもじつて『Kーアヤノ（ん）砲』と名付けたが、広く浸透はしなかった。

※現在、マスコミは『デビルウイング』と呼称している。

シュート以外にも綾乃の身体能力に、高いポテンシャルを見出（みい）だしおり、女子サッカーに挑戦することを強く後押しした。

【大和シルフィードの社長（やまとしるふいーどのしゃちよう）】
なでしこー部リーグ『大和シルフィード』の社長。

数多くのなでしこ代表を排出している、アマチュアチーム『大和シルフィード』を『なでしこリーグ』に昇格させる為、6年前に就任。

監督に元日本代表で『仕事人』の異名を持つ『田北』、コーチに大怪我からの選手復帰を目指す、シルフィードOGの『羽山 優子』を招聘。

戦力アップの基盤を作る。

さらに当時、芸能人のフットサルリーグで活躍していた『夢野つばさ』を入団させ、チームの広告塔に据えた。

つばさが地元の出身であること、ユニット名がチームと同じ『シルフィード』であることなどから『縁（えにし）』を感じ、熱心に勧誘。最終的に、つばさが

『選手として相当な覚悟をもって挑戦する』

ことを受け入れた為、入団に至った。

しかし、当然のごとく、実力未知数、サッカーに関しては素人同然のつばさの入団は

「サッカーを冒読している」

と関係者・ファン双方から大バッシングを浴びる。

※つばさ自身にもネットを中心に、尋常じやないほど叩かれた。

だが大和シルフィードのなでしこリーグ入りは、地元民の悲願でもあった為『人寄せパンダ』と批判されようと、彼女のネームバリューは必要だった。

結果、夢野つばさ（或いはシルフィード）とタイアップすることを条件に、多くのスポンサーを獲得。

当面の運営資金を得るに至った。

一方、社長は代表戦以外に盛り上がらない、女子サッカーの現状を憂いており『スター選手』が現れれば、状況は一変するとも考えていた。

その起爆剤が『夢野つばさ』であった。

実はつばさを、単なる広告塔とは考えておらず、彼女が所属していたフットサルのコーチからは『なでしこジャパンを狙える逸材』とお墨付きをもらっていた為、実力も高く評価しての勧誘だった。

また『トップアスリート』 ↓ 芸能人』ではなく『芸能人』 ↓ トップアスリート』という『逆シンデレラストory』を実現させたいという野望もあったようである。

【田北（たきた）】

埼玉県出身

58歳

なでしこリーグ『大和シルフィード』の監督。

元サッカー日本代表のDF。

熱くなりやすい性格で、現役時代は『瞬間湯沸し器』『カードコレクター』の異名を持った。

引退後はJリーグのコーチ、監督を歴任。

監督として(それぞれ違うチームで)『リーグ戦』『カップ戦』『天皇杯』を制し、3冠を達成している。

良くも悪くも『昭和の頑固オヤジ』タイプであり、かなりワンマン。その為、結果を残しながらも、フロント、選手とトラブルになることが多く、1チームに4年以上留まったことがない。

シルフィードの監督就任に至っては、社長の熱心な誘いに根負けして受諾した。

一方、Jリーグほど厳しく結果が求められないため、ある程度好きに采配が振るえるとも考えたようだ。

シルフィード監督就任後は(チームの積極的な補強も相まって)5年で地域リーグから、なでしこ1部リーグに昇格させた。

ちなみに今年で6年目に入ったが、もちろん過去最長である。

【緑川 沙紀 (みどりかわ さき)】

東京都出身

3月3日生まれ (20歳) / B型

151cm / 46kg

B70 (A) / W55 / H75

なでしこ1部リーグ『大和シルフィード』所属のFW (#11) / なでしこジャパン代表 (#16)。

チームNo. 1の俊足で、同じくトップレベルの持久力を併せ持つ、アタッカー。

しかしドリブルの技術はさほど高くない。

類いまれなるスピードと、無尽蔵のスタミナを活かし、前線から積極的にプレッシャーを掛ける…いわゆる『ファーストデイフェンダー』としての役割が大きく…味方がボールを奪えば、ゴールに向かって一気に走り出す彼女にパスを出し、カウンターを仕掛けるというのが、得点パターンのひとつである。

トップギアに入ってからからの加速力は凄まじく、そうなると相手はファールでしか止められない。

チームメイトからは『ヴェル』とよばれている。

これはJリーグの『東京ヴェルディ1969』が以前『ヴェルディ川崎』だったことに由来している。

『ヴェルデ』はイタリア語で緑を意味しており、チームカラー。

つまり、チーム名は『みどり(の)かわさき』である。

『みどりがわ・さき』と『みどり・かわさき』…全くの偶然だが、気が付いた人は偉いと思う。

ここから彼女のあだ名は『ヴェル』となった。

しかし同い年の『夢野つばさ』がチームメイトになってからは、高校生コンビ(当時)として注目され始め、マスコミからは『みどりがわ さき』を縮めて『みさき』の愛称が付けられた。

漫画『キャプテン翼』の『大空 翼』のベストパートナーが『岬太郎』だったことをなぞらえたもので、今では『つばさ』『みさき』で『なでしこのゴールデンコンビ』と呼ばれている。

しかし

「岬くんは主役じゃないー」

と当の本人は不満に思っているようだ。

ほかに『つばさき』『さきつば』という呼び名もあったが、前者は『手

羽先』を、後者は『某事務所のコンビ』を想像してしてしまう為、自然淘汰されていた。

夢野つばさには隠しているが、実は弟が、つばさの大ファン。「知人に頼まれた」

とつばさにサインをもらい、弟にプレゼントしたことがある。

【羽山 優子（はやま ゆうこ）】

神奈川県出身

8月8日生まれ（35歳）／A型

160cm／56kg

B非公開／W非公開／H非公開

なでしこ1部リーグ『大和シルフィード』のコーチ。

『大和シルフィード』のOGで、小中学生時に在籍していた（当時は中学生の部までしかチームのカテゴリがなかった）。

大学2年生時に代表入りしてから、ワールドカップ2回（ベスト8、優勝）、オリンピック2回（優勝、2位）出場の経歴を持つ。

大学卒業後、5年間日本でプレーしたあと、フランスに渡る。

アシスト王も狙えるかという3シーズン目に、相手選手と交錯し『左膝前十字靭帯断裂』（全治1年）の重症を負い、退団。

この年に出場予定だった自身3度目のワールドカップは、夢と消えた。

引退を考えていたところに古巣『大和シルフィード』の社長から声が掛かり（リハビリ期間限定で）コーチに就任。

翌年、大和シルフィードで選手として復帰。

途中出場が多かったが、その中でも全盛期を彷彿とさせる長短の正

確なパスで、幾度もチームを、勝利に導き、チームを『地域リーグ』から『なでしこリーグ1部』へ昇格させる、立役者となった。

プレーだけではなく、チームの精神的な柱であり、アマチュアのチームに、プロの精神を叩き込んだ。

監督の田北も、全幅の信頼を置いていた。

しかしながら、怪我の影響は大きく、併せて体力の限界を理由に、昨シーズンを以て引退。

今シーズンからコーチに戻った。

シルフィードのトレーナー『中村』と、年末に結婚することを発表している。

『羽山 満里奈(はやま まりな)』という、プロサーファーの妹がいる。

第二部 第一報

「…心配なニュースが飛び込んできました…。男子サッカーのオリンピック代表で『ジョホールバルの再来』のゴールを決めた『高野 梨里』選手、20歳が…交通事故に巻き込まれ意識不明の重体です…」

アナウンサーが悲痛な顔で原稿を読み上げると、思わずスタジオにいたスタッフから

「えっ!?!…」

という声が出た。

おそらく、その一報を知った誰もが、同じ反応をしたであろう。

『夢野つばさ』こと『藤 綾乃』もそのひとりだった…。

オリンピックの合宿を目前に控え、明日から7日間『リフレッシュ休暇』に入る。

その為、つばさは今日の練習を最後に、一旦チームを離脱する。

所属する『大和シルフィード』からは、同い年の『みさき』こと『緑川 沙紀』も代表に選出されていた。

今や『なでしこのゴールデンコンビ』と称される『つばさ』と『みさき』。

2人の息の合ったプレーを、日本中が期待をしている。

練習終わりにはチームメイトから花束が渡され、簡単な壮行会が開

かれた。

意外なことに、監督の田北の目には、うつすらと涙が浮かんでいた。手塩に掛けて育てた可愛い娘を、嫁に出す…あるいはそんなシーンを思い浮かべたのだろうか。

それを選手が見つつけ、冷やかした。

「そんなわけないだろ！目にゴミが入ったんだ！」

と、お決まりの言い訳をしながら、その場から立ち去る田北。

その慌てふためく様子がおかしくて、みんなが笑い、和やかな雰囲気のまま、壮行会は終わりを告げた。

状況が一変したのは、各人がシャワーを浴びたあとのこと。

「えっ?!嘘でしょ?」

「なにこれ…本当なの?」

「なんで…」

着替えを終わった選手が、スマホに入ってきたニュースメールを眺め、口々に呟いた。

「なに?なに?…」

まだ、それを見ていないチームメイトが、興味深そうに訊く。

そこまで、深刻な話だと思っていない。

だが、彼女たちの言葉を聴いて、全員の血の気が引いた…。

『高野くん』が、意識不明の重体だって…」

「高野くん…って…マリノスの?」

「…うん…」

「まさか…」

「信じられない…」

「どうして…」

「交通事故に巻き込まれたって…」

「!!」

つばさが「ハッ」と息を飲む、

『りさと』が!？」

思わず下の名前を呼んだ。

「そうみたい…高野 梨里…」

つばさは、慌てて自分のスマホを手にとると、電話を掛けた。

《お掛けになった番号は電波の届かないところにいるか…》

…出て！…

…無事って言って…

だが、無情にも不通を告げるアナウンスが終わり、ツ…ツ…ツ…と
いう音に切り替わった。

…そうだよ、今は出れないだけなんだ…

つばさは必死に自分に言い聞かせた。

だが…

「…目撃者の話によると、衝突した車が、はずみで歩道に突っ込み…」
誰かがニュースを読み上げる。

「男性は車に跳ねられたあと、頭から落ちたとのこと…」

「この男性は所持品などから、男子サッカーオリンピック代表の高野
梨里選手と見られ…」

その瞬間…

ゴトツ…

つばさの手からスマホが落ちた…。

「イヤあゝゝゝっ!!」

突然大きな声で叫ぶと、つばさは膝から崩れ落ちた。

「っ、つばさ!？」

「大丈夫!？」

「どうしたの!？」

「り、りさとが…はあ…はあ…いやっ…そんな…はあ…うそ…」

正座の姿勢で前のめりのつばさは、まるで今、走り終わったかのよう
に呼吸が荒い。

「ちよ、ちよっと、つばさっ?」

「はあ…はあ…はあ…」

つばさの呼吸はますます荒く、そして早くなっていく。

いつの間にか、着替えたばかりのシャツが、ビツシヨリだ。

尋常じゃない汗の吹き出し方。

明らかに、熱を持っているのがわかった。

「はあ…はあ…はあ…」

「誰か『中村さん』を呼んできて!!」

沙紀が叫ぶ。

ほどなくして、トレーナーの中村が、走ってドレッシングルームに飛び込んできた。

「つばさ!大丈夫か!」

「はあ…はあ…わから…ない…はあ…はあ…身体が…はあ…動かない…はあ…はあ…」

「わかった!大丈夫だ、意識はある…誰か、水とバスタオルを持ってきてくれ!医務室に運ぶ!」

「中村さん!」

「大丈夫、おそらく過呼吸だ」

「過呼吸?」

「落ち着けば、収まる。ちよっとベッドで休ませよう」

「でも、どうして急に…」

「わからん。喘息でもなきや、精神的なものかもしれないが…それより、今は運ぶのが先だ」

「あ、はい…」

中村はつばさを抱き起こすと、おぶって医務室へと連れていった。

「どうだ、具合は？…少し眠って落ち着いたか？…」

ベッドに横たわるつばさが目を覚ましたのに気付くと、中村は静かに声を掛けた。

「…寝てたんですか…」

「少しだけ。…鎮静剤を射った…」

「そうですか…」

「危ないクスリとか、使っていないでしょうね」

中村の後ろから、沙紀の声。

「…ごめん…心配掛けて…」

「別に大事に至らなきやいいけどさ…」

「…うん…」

「でも、相当うなされてたよ」

「…そうなんだ…ごめん…」

「何かあった？」

「…」

「まあ、なんにもなくて『ああ』はならないな」

中村が口を挟む。

「すみません…」

「いい精神科医を紹介しようか？」

「…」

「そう難しい顔をするなって…。なんでもないなら、別にいい」

「困るのよ、しっかりしてくれないと。『岬くん』の相方は『翼』しかないんだから…」

沙紀なりの激励。

「…うん…そうだね…」

つばさには、その優しさが十分伝わった。

「ありがとう…」

「いいわよ…お礼なんて…」

沙紀はそう言って、うしろを向いた。

だが、すぐに向き直り

「ねえ…」

と、つばさに声を掛ける。

「ひよつとして…高野 梨里って…つばさの…コレ？」

沙紀は親指を立てた。

「えっ!?!…なんで…」

「そりゃあ…何度も名前…呼んでた もん…」

「!」

「隠さなくたっていいわよ…つばさに彼氏のひとりふたりいたって、別に驚かないから…」

「彼氏かどうかはわからないけど…大切な人…」

「なるほど…。つまり、この事故の話が過呼吸の引き金か…」

中村が呟く。

「行くんでしょ?病院」

「えっ…」

「お見舞い…」

「あつ！…でも、どこに運ばれたか…」

「そんなの協会に訊けばわかるわよ！」

「いや、そんな手間掛けなくてもわかる」

と中村。

「えっ？」

「ツイッターに出てる」

「嘘でしょ？」

「救急車のあとを追っかけたバカがいる…」

「信じられない…」

「その通りだな…不謹慎極まりない」

「まったく、なに考えてるのかしら…ほら、つばさ、行くわよ！」

「えっ!？」

「えっ…じゃないわよ。それがいいか、悪いかは別にして、取り敢えず病院がわかったんだから、行くわよ！」

「ヴェル…」

「私も付き合うわよ」

「だけど…」

「なにグズグズしてるのよ！大切は人が生きるか死ぬかって瀬戸際なんでしょ！行かなくてどうす…」

「いい加減ことを言わないで！」

沙紀の言葉を遮るように、つばさが叫んだ。

「いい加減なことって…」

予期せぬ反応に、たじろぐ沙紀。

「死なないんだよ…梨里は。死ぬなんてあり得ない…死んじやいけないんだよ」

「つばさ…」

「死ぬなんて言葉…軽々しく使わないで」

「つばさ…」

「…どうして…『また』…交通事故なの…」

「！」

…そういうことか…

沙紀は以前、つばさの父が事故死しているという話を、聞いたことがあった。

…だとしても…

「つばさ…私はあなたじゃないから、あなたの気持ちはわからない。その人がどれほど大切な人なのかもわからない」

「…」

「だけど、私なら行く。何がなんでも行く。あとで後悔したくないもの」

「…」

「彼、闘ってるよ！頑張ってるよ！そばに言って、応援してあげなきゃ！」

「ヴェル…」

「大丈夫！大丈夫だから…」

その言葉に、なにひとつ根拠がないことはわかっていた。だが、今はそれしか言えない。

「車…出そうか？」

「中村さん!？」

「この病院だと…電車なら新宿から廻っても、横浜から廻っても、1時間チョイは掛かる。車なら東名使って上っていけば、半分で着く」
「でも…」

「デモもストもない。つばさも『みさき』も、有名人だ。公共の交通機関の利用は避けたほうがいい…。こんな状況でサインを求められて

も、対応できないだろう？」

「中村さん……」

「意識不明が本当なら、面会はできないかもしれないが、それも『込み』で確認しに行った方がいい。ここにいってもラチが開かない」

「中村さん……」

「乗り掛かった舟だ……構わん。よし、行くぞ！準備しろ」

「すみません……」

つばさは深々と頭を下げた。

くつづく

幸せな最期って

つばさと沙紀を車に乗せると、中村は一路、高野が運ばれたとされる病院へと向かった。

車内はノリの良い音楽が流れていたが

「さすがにそういう感じではないな…」

と、すぐに消す。

後部座席の2人は押し黙ったままで、空気が重い。

セットしたカーナビの、行き先を案内する声が時おり聴こえるだけで、それがまた静けさを際立たせた。

車が走り出してすぐに、沙紀はつばさが小刻みに震えていることに気が付いた。

「寒い？」

つばさは首を横に振る。

しかし、震えは止まらない。

それを見て、沙紀はつばさの右手を引き寄せ、太股の上に置き、そこに自分の手を重ねた。

少しでも落ち着かせようとする配慮だった。

3年ほど前にも一度、つばさがおかしくなったことがある。

生気を失っていた…とも言うべきか。

とにかく覇気がない。

細い身体が、一段と痩せて見えた。

見かねた羽山と沙紀が問い質（ただ）すと

「中学生の頃の友人が自殺した…」

と告白した。

亡くなる前日、練習中のつばさを訪ねてきて、会話をしたにも関わらず、翌日、遺体で発見された…とのこと。

遺書はなかったが、現場の状況からして、他殺ではないと断定された。

沙紀も、その友人が来たことは知っていた。

自分と同じくらいの背丈で、なんとなく似てるな…などと思っていた。

その人が…自殺…。

まったく面識のない沙紀でさえ、ショックを受けるのだ。

ましてや、それが友人となれば…。

つばさの気持ちも理解できる。

彼女は何の為に、わざわざ、つばさを訪ねてきたのか？

つばさ自身は

「自殺を止めてもらいにきたに違いない」と言う。

そして、それができなかったことを、激しく悔いていた。

チームメイトの前では、何事もないように振る舞っていたが、明らかに様子が変だった。

そして、問い詰めた結果、そういう話だった…という訳だ。

自殺を止めてもらいたかった…。

果たして、本当にそうだったのだろうか…。

真相は、闇の中だ。
今となつては誰にもわからない。

ただひとつ、言えることは…

彼女が亡くなる前の『最後の話し相手』が、つばさであったこと。
これは間違いない。

長らく顔を会わせることがなかった彼女が選んだ、最後の相手。

「きつと、止めてほしいとかほしくないとか…そんなことじゃなくて、
ちゃんと挨拶がしたかったのよ…。光栄なことじゃない、あなたは選
ばれた人間なのよ」

羽山がつばさを諭す。

「光栄？選ばれた人間？」

「いい？自ら命を絶つ…つてことには賛成できないけど…その娘は達
成感があったんじゃないかしら」

「達成感？」

「二日に、何人の人が亡くなるかわからないけど、どれだけの人が会
いたい人に会えて、この世を去ることができるしら…」

「…」

つばさの父…藤 綾乃の父も、朝、普通に職場に出掛けた。

まったく、いつもと変わりなく。

しかし…

病院に駆けつけた時には、既に霊安室の中で…顔には白い布が掛け
られていた。

父は、妻や娘に別れを言うことなく、この世から去った。

「だから…つばさの友達は、それができただけでも、良かったんじゃないかな…」

「幸せだった…とでも?」

「そうは言っていないわ。でも、少なくともあなたは『それでも理由付けをしない限り』納得しないでしょ?」

「…」

「だって、その娘があなたに『どうしてほしかったか?』なんて、もう、一生わからないんだし…。それとも、あの世に追いかけて行って、訊いてくる?」

「…」

「まあ、そういうこと。よく聴くフレーズかもしれないけど、あなたがクヨクヨしても、死んだ人は生き返らないんだから。あなたはあなただけ精一杯生きなさい!」

羽山の言葉には説得力があった。

自身も、一時は引退を考えるほどの大怪我を負ったが、必死にリハビリして、ピッチに戻ってきた経験を持つ。

だから、つばさには、この『精一杯生きなさい』は、かなり響いた。「あなたは、あなたの為に生きるのよ。決してバカなことは考えないで。あなたが活躍することで、勇気付けられる人がいることを忘れないで!」

…勇気付けられる人がいる…

…そうだ…

…無謀な挑戦だとわかって、飛び込んだ世界…

…まだ、なにも成し遂げていないんだ…

…まだ、なにも…

これを機に、少し前を向き始めたつばさ。

『浅倉さくら』らのフォローもあって、何とか立ち直ったのだった。

…あの時のつばさも、相当ダメージが大きかったけど…

…もし、今回、同じようなことになれば…

…サッカーどころじゃないわね…

…下手すると、あとを追うことすらあり得るかも…

沙紀は思わず重ねていたつばさの手を、ギュツと強く握ってしまった。

…バカ！何を考えてるのよ！…

…勝手に人を殺すな！…

ダメだ、ダメだと首を振る、沙紀。

…それより、つばさと彼の関係…

…メチャクチャ気になるんだけど…

…『大切な人』って？…

…訊きたいけど、今はムリね…

誰ひとり喋らない中村の車は、渋滞にはまることもなく、東名、首都高を抜け、高野が収容されている病院へとたどりついた。

~^~U~

どうして…

中村の車は、病院の正面入口を通過した。

「あれ？」

沙紀が首を傾げる。

「マスコミが『わんさか』いるところに、わざわざ突っ込む必要はない」
「あっ…なるほど」

沙紀はその意味を理解した。

中村は車を、裏側にある夜間通用口へと回した。

沙紀が車を降りる。

だが、つばさは出てこない。

見ると、手に力が入らないのか、シートベルトを外すのに手間取っている。

「もう、しっかりしてよー！」

「…ごめん…」

沙紀が手伝い、車から降ろす。

まだ、つばさの動揺は収まっていない。

…頑張っつて！つばさ！…

沙紀は心の中で叫んだ。

だが、弱っている人間にその言葉を掛けるのは、あまり良くないと聞いたことがある。

「行くわよー！」

他に思い付く言葉もなく、沙紀はつばさの背中を押すようにして歩き始める。

3人は夜間受付の前に来た。

「どうなさいましたか?」

『サッカー関係者』だ!急いでる!」

中村は病院の受付担当者にそう答えると、半ば強引にそこを突破した。

「以下、同文です!!」

沙紀もつばさの手を引っ張り、あとに続く。

時刻は、夜の11時半過ぎ。

事故が発生してから、2時間半…一報が入ってからは一時間半が経過していた。

院内の廊下は既に暗く、ところどころ、常夜灯だけが光っている。

少し進むとロビー（待合室）が現れた。

ここも受付カウンター内の照明だけが灯されており、薄暗い。

よく見ると、そこには何人かの人影があった。

バタバタとやって来た3人に、その人影たちが一斉に顔を向ける。

「誰だ?」

その内のひとりが訊いた。

『大和シルフィード』の『緑川 沙紀』と『夢野つばさ』です」

沙紀はつばさの身体を引き寄せると、カウンターの前に立ち、顔を晒した。

だが逆光で、実はあまりハッキリ見えていない。

「…と、その『保護者』でトレーナーの『中村』です」

「シルフィードの?どうしてここに?」

「同じオリンピック代表ですから…とにかく居ても立ってもいられな

くて…」

沙紀が答える。

「ああ、そうか…ご苦労」

あつさり、そんな言い訳が通った。

『そうは言っても』冷静に考えれば、簡単には納得出来ない理由である。

いくら同じ代表とはいえ、身内でもなければ、これだけ素早く駆けつけることはない。

しかも、女子だ。

だが、この状況下で『下衆な勘繰り』をする者はいなかった。

沙紀と『保護者』の中村の存在が、いいカモフラージュになっている。

「状況はどうですか？」

中村が、誰とは言わず問いかけてみる。

「…いや…なんとも…。我々もここで待機だ。…まあ、立ってても仕方がない…その辺に座りなさい」

誰かが答えた。

よく見ると、それはサッカー協会の副会長だった。

確かに、待機を命ぜられているなら、どうしようもない。

3人は空いているイスに腰を下ろした。

時間が経つにつれ、ロビーにいる面子が判明する。

日本サッカー協会の副会長、男子オリリンピック代表監督、マリノスのコーチ…それから代表とマリノスのチームメイトが数人。

全部で10名ほどがいた。

「君たちはどうやって、中に？」

副会長が中村に問う。

「向こうから強行突破しました」

中村は、入ってきた夜間受付の方向を指差した。

「なるほど…賢明な判断だ。正面から入ってくれば、マスコミの餌食になっていた…」

「はい」

中村が運転中に想像したとおり、どうやら正面入口にはマスコミが『わんさか』詰めかけているらしい。

だが、ここは病院。

一般人も入院している為、病院側が立ち入りを規制しているようだった。

ましてや、今は夜。

院内で大騒ぎされる訳にはいかない。

ごくごく当然のこと。

それでも、中の様子を見ようと、カメラがこっちを狙っている。

つばさも沙紀も、顔見知りの男子選手はいたが、軽く会釈をした程度で、それ以上は誰も口を開かない。

彼らは一様にスマホを眺めている。

もちろん、ゲームをしている訳ではない。

SNSやツイッターに入ってくる情報をチェックしていた。

「ああ『3人にも』伝えておく。こちらがOKを出すまで、この件に関するコメントは差し控えるように」

副会長はそう『命令』した。

コメントとは、つまり『そういった類い』のことも含めてを指す。

つばさは目を瞑っている。

強く握りこんでいる拳が、必死に何かと闘っているように見えた。

今は、掛ける言葉がない。

沙紀はそう思い、立ち上がると、少し離れたところに歩いていき、そこで自分のスマホを見た。

その後、事故について、どのような報道されているのか…あまり深くは考えずに、検索をかけた。

そして、沙紀は絶句した…。

…嘘でしょ？…

この事故はどのニュースサイトでもトップニュースで扱われているが：『高野 梨里が意識不明の重体』：という状況は更進されていない。

追加情報として、彼のこれまでの生い立ちや、成績などがアップされているくらいだ。

関係者とされる：それこそ『ここにいる面々』の

≫詳しいことがわからないので、なんとも言えない

≫無事であることを祈るしかない

…などというコメントは載っている。

院内に入る前に、マイクを突きつけられたのだろう。

そこまでは理解できた。

しかし、そのあと続く関連ワードは…

『死亡』『五輪絶望』『終わった』『臨終』『五輪終』『役立たず』『韓国』

『暗殺』『女』『μ』s』『園田 海未』『誰得』『本間 洋平』

…等々が羅列されていた。

思わずゾツとする、沙紀。

…ちよつと、なんなのよ…これ…

恐る恐る、それらのワードが書かれた内容を覗いてみた。

…

《重体とか言ってるけど、既に死んでんだろ？

《おい、おい、勝手に殺すな

《現場にいたけど、即死だったぜ

《生きてても、オリンピックは絶望的だな

《五輪終わったな

《これがホントの『ご臨終（五輪終）』ってか

《→草生えた

《喜ぶな！

《肝心な時にいないなんて、なんて役立たず

《役立たず言うな！

《高野なんて、いてもいなくても同じ

《同じじゃねーよ

《冗談抜きで、高野がいないのは痛い

《りさと…

《韓国人に暗殺されたんじゃない？

《それはない！

《なんでもアツチと結びつけるなよ

《自作自演、乙

《テロか？

《女と歩いてたって噂

《マジか！オリンピック前にイチャついてるんじゃないやねーよ、バーカ

！

《なお、元々、sの園田 海未の模様

《特定早っ！

《嘘だろ？海未ちゃんかよ！

《だったらいいよ、死んで！

≫海未ちゃんは無事か
≫一緒に運ばれた
≫高野、殺す！
≫だから、死んでるってw
≫死んでねーよ！
≫高野が死んだら誰得よ？
≫本間 洋平じゃね？同じポジションだし
≫じゃあ、犯人はヨーヘーだな
≫傭兵でも雇ったか…
…

…見なきやよかつた…
…なによ…これ…
…狂ってるわ…
…酷すぎる…

突然、沙紀の目から涙が溢れ落ちた。

…怒り？…
…哀しみ？…
…哀れみ？…
…わからない…

…でも、ここで私が感情的になっちゃいけない！…
…そんなことになったら、つばさが…

沙紀は爆発しそうな気持ちと、得も言われぬ吐き気を堪（こら）えて、口元を押さえながらトイレへと駆け込んだ…。

~^~U~

母、強し

「大丈夫か？」

沙紀がトイレから出てくると、その前で中村が立っていた。

「女子トイレの前で待ち伏せなんて、変態ですか？」

沙紀は中村を軽く睨み付けた。

その目は充血しており、明らかに異変が見られる。

『『つわり』じゃないだろうな』

状況が状況だけに、囁くように話す。

「なっ…何を？」

「口元を押さえてトイレに駆け込めば…まずは『それ』を疑いたくない」

「見てたんですか？」

「見ちゃった」

「だとしても、そんなわけないじゃないですか…。こんな時に、つまりない冗談はやめてください」

「こんな時だからこそ、余計心配なんだ」

「大丈夫です…そんなんじゃないやありません…」

「吐いた（もどした）のか？…」

「何も出ませんでしたけど」

練習が終わってから、今まで、食事はおろか、水も口にしていない。

胃の中は空っぽだった。

「確かにな…お茶くらいは飲んだ方がいい」

中村はロビーにある自販機へと歩き出した。

沙紀も、そのうしろをついていく。

「ジャスミン茶でいいか？」

「ジャスミン茶？」

「リラックス効果があり、眠りを誘う薬でもある」

「眠りを誘う薬？」

「知らないのか？『オリビアを聴きながら』」

「はあ…」

「まあ、いい…」

中村はジャスミン茶を2本買った。

「あとで、つばさにも渡してやれ」

「はい…ごちそうになります」

自分は缶コーヒーを選んだ。

「それで…どうした？」

「私…ですか？」

「他に誰がいる？…田北監督みたいなことを言わせるな…。こう見えても一応、トレーナーだから、選手の体調管理は、俺の仕事だ」

缶コーヒーのプルタブを起こしながら、沙紀に言う。

「…これを見てたら、具合が悪くなりました…」

沙紀は持っていたスマホを差し出した。

ジツとその画面を眺める、中村。

「なるほど…」

「わけがわかりません…」

沙紀がそう言った意味はふたつある。

ひとつは書き込まれた内容。

もうひとつは、それを見た自分の感情。

「こんな『落書きの類い』は、今に始まったことじゃないし、お前が気にすることでもないだろう？」

「わかってますよ…わかってますけど…。私だって、シユート外した

時はバカだの、アホだの…死ねだの…言われます。だから、それくらいのことには、慣れてます。でも、これは…」

沙紀はそこまで言っ、言葉を詰まらせた。

「…酷すぎます…」

「そうか…」

「自分のことじゃないのに…高野くんのごことは数回顔を会わせただけで、よく知らないのに…すごく悔しくなって…」

「ほう…」

「だってそうじゃないですか！まだ、そうなったなんて、誰も言ってないのに！ここにいて私だって聴かされてないのに！」

沙紀の声が大きくなるのを、中村は指の前で人差し指を立てて制した。

「気持ちはわかる。俺だって気持ちのいいもんじゃない。だが、少し落ち着け…」

「…はい…」

沙紀は言われて、ひとつ大きな深呼吸をした。

「自分のことじゃなく、他人のごとでそういう感情が沸くってことは、人として、とても大切だ。沙紀にそういう感情があるってことは、誇りに思っ、いい」

「冷静ですね」

「当事者でもなければ、関係者でもないからな…今のところは…という注釈が着くが」

「えっ？」

『結果次第』で、お前とつばさと…2人のメンタルケアをしなければならぬ。とてもオリンピックどころじゃなくなる」

「中村さん…」

「そうならないように祈るしかないんだがな…」

沙紀は黙って頷く。

そしてそのまま、一旦は歩きかけたが、すぐに踵（きびす）を返した。

「どうした？」

「さっきの内容の中で『女がどうの…』ってあつたじゃないですか…」

あれ、事実ですかね？」

「知らんよ…俺に訊くな」

「もし、つばさっていう彼女がいながら、そんなことしてたとしたら…」

「お前が踊らされてどうする？」

「…ですよね…。なんか、もしそうだったら、つばさがあまりに可哀想だな…なんて思っちゃって…」

「ずいぶんとつばさ想いなんだな」

「はい、惚れてますから！」

「ん？」

「あ…いや、なんでもありません。何だかんだで4年一緒にやってきましたし、私の力を最大限引き出してくれるのは、つばさしかいないですから」

「うまい言い訳だな…」

「えっ？」

「いや、別に…。まあ、共倒れにならないように気を付けろ」

「あ…はい…」

…なんだか、複雑な話になってきたな…

中村は開けた缶コーヒーを、グビリと飲んだ。

その時だった…

座っていた関係者、選手が次々と立ち上がる。

奥の方から、白衣を着た人物が現れた。

「先生！」

「梨里は!？」

「どうなんですか!？」

「無事なんですよね!？」

矢継ぎ早に、言葉を浴びせる。

医師はそれを受け…ゆっくり頷を振った。

「えっ!!」

「あ、いえ…無事ではないです…。ですが…」

「じゃあ！」

「まあ、落ち着いてください、今、説明しますから…」

医師は「座って、座って」と、いうジェスチャーをした。

「では、高野さんの容態について…あ、今、ご両親には説明してきたのですが…非常に危険な状態…頭を強く打っており、昏睡状態です」

「昏睡状態…」

誰ともなく、呟く。

「意識が回復するかどうかは…ここ一晩二晩が勝負でしょう」
「身体の方は？」

「幸い…と聞いていますか、外傷という部分で言えば、奇跡的に太股を強く打った程度で済んでいます。いわゆる打撲です。骨折はしていません」

「ああ、じゃあ、意識さえもどれば…」

「ただし…」

「ただし？」

「車との直撃は避けようですが…頭から落ちており…その結果、頸椎損傷をしています」

「頸椎…」

「損傷…」

「それじゃあ、意識を取り戻しても、プレーは…」

「それどころか…四肢に影響が残ることさえ、考えられます…」

「…」

絶望。

誰もがその言葉を思い浮かべた。

それ以外の言葉が見つからなかった。

呼吸すら、忘れる。

そんな、重く、静かなロビー。

ここだけ時間が止まったようだ。

医師もその空気に飲み込まれたかのように、そこから立ち去ることをしなかった。

もうすでに、ここでの仕事は終えたはずなのに…だ。

時を動かしたのは高野の両親だった。

先ほど医師が現れた方から、ゆっくりと歩み寄ると、ロビーに集まっている面々に、まずは深々と一礼をした。

「この度は、息子が大変なご迷惑とご心配をお掛けしてしまい、申し訳ございません」

高野の父はそう言うと、再び頭を下げた。

「いえ、いえ、どうか頭を上げてください。高野くんがこのような事故に巻き込まれて…私たちも大変なショックを受けておりますが…とにかく今は意識が回復するのを祈ることしか…」

「ありがとうございます」

「ご両親もお辛いと思いますが…」

「いえ…。逆にこのように皆様駆けつけてくださり、感謝しております。誠にありがとうございます。ですが、…梨里は今、ICUにおり、私たち中に入ることはできません。いつまで待っていてもアレですし、時間も時間ですので…今日はお引き取り頂いたほうがよいかと…」

「いや、しかし…」

「皆様も大事な時期であることは、承知しておりますので…。状況に変化があれば、速やかにお伝え致します」

正直、結果がどちらに転ぼうと、顔を見るまでは帰れない…そんな感じだったのだが、ICUから出てこないのであれば、これ以上待っていても仕方がない。

心苦しいが、それはそれで仕方ないことだった。

「わかりました。では、私たちは一旦、引き上げます…」

「はい」

「どうぞ、彼を責めないでください。我々は彼がピッチに戻ってくるのを祈ってますから」

「ええ、必ず戻りますよ…梨里は！」

関係者と選手は、ひとりづつ一礼をしたあと、病院をあとにした。医師も、持ち場へと戻る、

それを見送った両親は「はあ…」と大きく溜め息をひとつついた。そして、崩れ落ちるようにして、ロビーのイスに腰掛ける。

「お父さん…」

「ああ…」

それだけで会話が成立したようだ。それが夫婦というものなのだろう。

「喉が乾いたな…」

父がイスから立ち上がろうとするのを「私がいきますよ」と妻が制止した。

そして彼女が自販機の方へと振り向くと…

そこには、忘れ去られたかのように、静かに佇む、3人の人影があった。

「きやつー！」

一瞬のけぞる妻。

だが、すぐに

「ごめんなさい、誰もがいなと思っていたので…」
と謝った。

「いえ、こちらこそ、驚かせてしまい、すみませんでした。なんか、帰りそびれちゃって」

「あら、関係者の方ですか？これは失礼致しました」

「おばさん…おじさん…『綾乃』です」

「えっ!？」

「『綾乃』ちゃん?」

「おばさん!」

綾乃はフラフラと歩き出すと、高野の母にしがみついた。
それを彼女がしつかりと抱き止める。

「どうして、綾乃ちゃんがここに…」

「いても立ってもいられなくて…仲間に連れてきてもらったの!」

梨里の母は、沙紀と中村に頭を下げる。

2人は軽く会釈した。

「ごめんね、梨里が迷惑掛けて…」

「迷惑だなんてそんな…」

「綾乃ちゃんも大事な時期なのに…」

「私のことはいいんです!とにかく、梨里が心配で…」

「ありがとう…。本当にありがとう。でも、私たちは、今、何もできないの。顔を叩いて起きるものなら、何度でも叩くけど」

「おばさん…」

「それとも、綾乃ちゃんがチューしてくれたら、目を醒ますかしら」

「白雪姫ですか!」

「うふふ…立場が逆だったかしら…」

「それで起きるならしますけどね…チュー」

「そうしてくれる?私のチューじゃ起きないから…」

「…おばさん…」

「泣かないの。大丈夫。あの子は丈夫なのが取り柄なんだから。小中の9カ年皆勤賞を舐めちゃいけないわよ」

「ふふふ…ぐすつ…それ、関係ある?」

綾乃は泣き笑いをしていた。

…気丈な母親だな…

中村はその様子を見て、目に熱いものを感じた。

…俺も歳かな…

…涙腺が脆くなってる…

中村は沙紀に気付かれないよう、そつとトイレへ逃げ込んだ。

その沙紀は…

鼻水をすすりながら、2人の様子を見ていた。

なぜか涙が止まらなかった…。

くつづく

海未、運ばれる

『私』は病院のベッドに横たわっていました。

大きな怪我はしていません。

落ち着くまで安静にしているように…と指示があったので、それに従っていたのです。

別段、興奮状態にあったわけではありませんが…では、落ち着いたか…と問われれば、返答に困ります。

ボーツとして頭が働かない…というのが、正解なのでしょう。

ですが、事故の瞬間は、鮮明に覚えています。

激しい衝突音。

こちらに向かってくる車。

動けない自分。

そして…

隣にいた男性の顔。

その人は、私を見ると「よけろっ！」と叫んで、突き飛ばしました。身体が流されていくなかで…私は彼を見ていました。

不思議ですね。

そういう状況にありながらも、私の目は、彼の姿を追っていたのです…。

男性は、走り高跳びの背面跳びのように、身体が反らせながら、ジャンプをしました。

うまくボンネットの上に乗ったように見えたのですが…フロントガラスにぶつかり…転がるようにして頭から落ちました…。

その時、私は道路に倒れた状態でした。

咄嗟に手を伸ばしたのですが、届きませんでした。

いえ、もしかしたら、伸ばしたつもりになっているのかもしれない。

彼が地面に落ちた瞬間、私の目の前は真っ暗になりました。

それ以降の記憶は、断片的にしかありません。

突っ込んできた車は、歩道の植え込み…街路樹…にぶつかり、止まっていました。

頭には…周りにいた人の悲鳴、叫び声が残っています。

何人もの人に

「大丈夫か!？」

と訊かれたのは覚えていますが、なんと答えたかは定かではありません。

気が付くと私は、救急車の…薄暗い車内のベンチに座っていました。

人差し指には、大きなクリップのようなものが付けられています。どうやら、これで脈拍を計っているようです。

飲酒後だった為か、それとも緊張の為か、救急隊員の方が

「かなり早い！」

と言っていました。

名前を訊かれ

「園田 海未と申します」

と、それだけはハッキリと答えたと言っています。

ですが、連絡先については…

やはり気が動転していたのでしょう、誤って穂乃果の自宅の番号を伝えてしまったようです。

言ったあとに違和感を覚えて、すぐに訂正しました。

隊員の方が自宅に電話を掛けて、簡単に事情説明して、これから向かう病院を告げてくださいました。

「お父さんが、来てくださるようですよ」

…父ですか…

まさか、二十歳を過ぎて父の世話になろうとは。

…情けない…

心なしか、お酒を飲んだということの…後ろめたさのようなものがありました。

ふと、前方に視線を移すと…

そこには彼が横たわっていました。

それまで自分のことに気をとられ、目に入ってこなかったのです。

…情けないです…

自分の視野の狭さに、再び落ち込みました。

私と彼は、同じ救急車で運ばれていました。

車内では、隊員の方の声と、無線からの声が、交互に聴こえてきます。

しかし何を言っているかは、まったくわかりません。

頭に入ってきてませんでした。

ですが、目の前の光景は、ドラマなどで観るそれと同じでした。

バカですね。

現実を起こっていることなのに、それを『受け入れられない気持ち』があつたみたいです。

切羽詰まった状況にあるにもか関わらず

「こういうシーン、観たことありますね…」

などと思っていました。

なんて最低な人間なんでしょう。

自己嫌悪に陥ります。

時おり、自分の名前が呼ばれます。

「私は大丈夫ですから、彼を！」

そう答えたつもりでいましたが、果たしてちゃんと届いていたのでしょうか。

私は偽善者です。

なぜなら、今初めて彼の容態を心配したのですから。

そして救って頂いた感謝すらも。

それに気が付いたのは、病院に着いてからでした。

サイレンが鳴り止み：救急車は病院に到着しました。

彼はストレッチャーに乗せられ、先に出ました。

そして、恥ずかしながら、ここで気付いたのです。

：私は彼にお礼をしていませんでした：

慌ててそのあとを追おうと立ち上がりましたが：指にはクリップが付けっぱなしでした。

足ももつれてしまい、私は車内で転んでしまいます。

隊員の方に

「ここでケガを増やさないでくださいね！」

と冗談混じりに注意されました。

それから私は車椅子に乗せられ、院内に向かいました。

このような状況になるとは、数分前には考えてもみませんでした。

自分が運ばれている姿を、客観的に想像し、とても恥ずかしくなり
ました。

目立った外傷は擦り傷程度でしたので、そちらの治療はすぐに終わ
ったのですが

「念のために」

と、レントゲン、CTスキャン、MRIなど一通りの検査を受け、ようやく解放されました。

幸いなことに、私は大事には至りませんでした。

しかし

「今は気が張っているのだからわからないかもしれないが、あとから具合が悪くなることもあるので、少し休んでいなさい」

と言われ、ベッドの上にいました。

「園田さん…具合はいかがですか？寒くないですか？」

看護師さんが声を掛けてくれました。

「寒くはありませんが…お水を頂けないでしょうか…。少し、ブーツとしておりまして…」

私がおのように返答すると、水が入ったコップ手渡されました。

「ふう…」

冷たいものが身体中に染み渡り、私は少し生き返った気がしました。

やっと、頭が冴えてきた…そう感じたのです。

そして思い出します。

彼のことを。

「看護師さん、一緒に運ばれてきた男性は…」

「えっ!? ああ…今、治療中よ」

「助けて頂いたお礼を言わねば…」

「それは無理だわ。気持ちにはわかるけど…今は無理よ。また、目を改めてからになさい」

「では、治療が終わってから…」

「園田さん…残念ながら、今はそういう状況ではないの…。私の口からはハッキリ申し上げられないのだけど…察してください？」

「！」

「…その気持ちがあるなら、無事を祈ってあげてちょうだい…」

「は、はい…」

…無事を祈ってて…

…と、いうことは亡くなったわけではないのですね…

…とはいえ…

まだ、最悪の事態を免れた訳ではありません。
私には祈ることしかできませんでした。

しばらくすると、父がやってきました。
タクシーに乗って駆けつけたようです。

これまでの経緯を話すと、父は怒ることなく、ただただ安堵の表情を浮かべてました。

それを見て、私もホツとしたのか、ポロポロと涙が溢れ落ちてしまいました。

穂乃果がいなかったのは、不幸中の幸いです。
彼女だけには、私のこんな姿は、絶対に見られたくないのです。
つまらない意地ですね…。

検査も終わり、容態も落ち着いたとのことで、私はこのあと警察の方から、事情聴取を受けました。

もちろん、私は被害者ですから、詰問されるようなことはありませんでしたが、事故の状況を覚えてる限り、お伝えしました。

警察官からは、後日、現場検証を行うとのことで、その時は立ち会ってほしい旨、お話がありました。

病院、警察とも「今日はこれで終わりです」と帰宅の許可を頂いたのですが…

私は帰りませんでした。

彼の容態が気になったからです。

それを父に伝えると、素直に了承してくれました。

彼はICUで治療中とのことで、面会は出来ないとのことですが、それを承知でその部屋の前へと向かいました…。

そこには、彼のご両親がいらっしやいました。

くつづく

梨里の両親と海未の父

海未は父と共に、ICUの前へと移動した。

その前のベンチには、男女の中年が腰かけている。

海未は、それがすぐに男性の両親だとわかった。

その姿を見て…足が止まる…。

…私はなんと声を掛ければよいのでしょうか…

男性の容態が気になり、無事を祈りたい…そう思っただけで来たが、そこに両親がいることは想定外だった。

いや、掠り傷で済んだ自分でさえ、父が迎えに来たのだ。

冷静に考えてみれば当然だった。

「どうかしたか？」

海未の父は、立ち止まる娘に訊いた。

「あ、いえ…あちらにいらっしやるのは、私を救って頂いた方のご両親かと思うのですが…なんとお声掛けしたらよいものかと…。息子さんが生死をさまよっている中『私は無事でした』と、のこのこ顔を出してよいのでしょうか？」

「ふむ…海未の言わんとすることもわからなくはないが…まずは素直に、感謝の気持ちを述べなさい。それは人としての礼儀です。そのあとについては…先方の様子を見ながらになさい。場合によっては、気を悪くされることもあるだろう。しかし、それも仕方のないこと…。覚悟しておきなさい…」

「はい…」

「じゃあ、行こうか」

父は、海未の背中を軽く叩いた。

2人の近づく足音に気付き、ベンチに座り俯いていた中年の男女が、顔をあげる。

廊下は薄暗く、ハッキリ顔が見えるわけではないが、お互いの視線が交わったことは確認できた。

先に頭を下げたのは、海未だった。

「園田 海未と申します。この度は息子さんに助けて頂きまして…ありがとうございます。まずはお礼をと思ひ…」

「海未の父です。私からも感謝申し上げます」

海未と父は、深々と頭を下げた。

すると、ベンチに座っていた2人が立ち上がった。

「ああ…」一緒に運ばれたという…。高野の父です。わざわざご丁寧に…」

…高野さんとおっしゃるのですね…

海未はこのとき初めて、彼の姓を知った。

「お怪我はありませんでしたか？」
と母。

「お陰さまで…。掠り傷程度で済みました」

海未は、恐縮しながら答えた。

「よかったわ…大事に至らなくて…」

と高野の母は、胸を撫で下ろす仕草。

その姿を見て、海未は胸が苦しくなる。

…いえ、お母様…

…私の心配は要りませぬ…

「ですが、その代わりに…ご子息が犠牲になられたと…なんと申し上げてよいのやら…」

海未の父は、娘に代わってそう告げた。

今、この状況の中で、一番ナーバスな部分。

その重い話を、娘に切り出させるわけにはいかなかった。

ことと次第によつては、彼らが感情的になり、攻撃されるのも、やむを得ないと思っていた。

だが…

帰ってきた答えは、想定のはるか斜め上をいく。

「いやいや、それはお気になさらずに…。助けたなどと大袈裟な話ではなく、どうせ、お嬢さんに見惚（と）れていて、よけ損なつたのでしよう。その時に、たまたま、あなたにぶつかって…」

「そうですね。偶然そういう感じになつたのではないかと…と思いますよ」

高野の両親は、まったく意に介していないかのように振る舞つた。

…たいしたものだ…

…普通なら愚痴のひとつも言いたくなるものを…

海未の父は、彼らの態度に感服した。

しかし…

「違います!!」

海未は、高野の父と母の言葉を強く否定する。

「彼は間違いなく、私を救ってくださいました。偶然でも何でもありません。反応が遅れて動けなかった私を、間違いなく救ってくださいましたのです」

「そうですか。だとしたら…それは誉めてあげなくちやいけませんね」

母はニコリと微笑んだ。

「えっ?」

「悪いことをしたら叱る。いいことをしたら誉める。それが親の役目です。息子が人様のお役に立ったというのであれば…その部屋から出てきたら、誉めてあげましょう」

…どうしてなのですか…

…どうして、そんなに冷静なのでしょう…

「あ…あ…あの…」

心配ではないのですか…と問いかけて、口を噤（つぶ）む。

余りに穏やかに話をする高野の母に、海未は少し拍子抜けした。

いや、その言葉が妥当かどうかはわからないが、逆に何をどう話しているか…言葉が出ない。

子供のことは気にならないのか? そんな風にすら見えてしまう。

その海未の、不思議そうな顔を見た高野の父は、意を察して自らそれに答えた。

「私たちも連絡を頂いた時には…それはショックでした。私たちにとっては、たったひとりのかけがえのない息子ですからね…。それと同時に『なぜ、こんな時に!』とも思いました」

海末も父も、まだ、この時は高野の素性を知らない。
従って『こんな時に！』の意味はあとから理解することになる。

高野の父は言葉を続けた。

「ただ、まだ命を落としたわけではないので、今は私たちが悲観的になっ
ていてはいけない…そう、頭を切り替えました。悲しい気持ちは
家に置いてきたのです。ですから…今は…回復を祈る、それだけなの
です」

「話を聴けば、息子は事故に巻き込まれたとのことで…しかも、他人様
を庇ったらしい…とのことでした。事故を起こした人に対して、憎い
というか、悔しいというか…そういう感情はありますよ。ですけど、
今、ここで恨んでみたところで、意識が回復するわけではありません
から…」

高野の母も、その想いを語った。

理屈ではわかっていることであるが、そう簡単には割りきれるもの
ではない。

内心…海末のことはともかくとして…忸怩たる想いでいるに違
ない。

しかし、素振りは見せない。

もしかしたら、2人は『こういうことを想定して』申し合わせてい
たのかもしれない。

海末も、その父も、それくらいのことを見当がついた。

それでも、これだけの対応ができるとは…立派と言わざるを得な
かった。

「園田さん…とおっしゃいましたっけ？…そういうことで、私たちは、
あなたにどうのこうのと言うつもりは、一切ありませんよ。あなたも
被害者なのですからですから…。なので、このことについては、どう
か、お気になさらずに」

「申し訳ありません…」

「逆にお心遣いを頂き、ありがとうございます」

海未と父は、深い感謝の念を示した。

「ご迷惑でなければ…私もこちらで、回復をお祈りさせて頂いてもよろしいでしょうか」

海未は元々の目的を、高野の両親に告げた。

「えっ!？」

「今の私にできるのは、それくらいしかありませんので」

「そのお気持ちだけで、結構でございます」

高野の父は、海未の申し出をやんわりと断った。

しかし、海未は食い下がる。

「いえ、どのみち、この時間からでは帰る『足』もありませんし」

タクシーを拾えば帰れるが、もちろん、そういうことを言っているわけではない。

「ええ、それがどれくらいお力になれるかはわかりませんが、そうさせては頂けませんか。気になさるな…と仰いましたが、受けた恩はお返ししなければなりません。自己満足になってしまいましたが、せめて、それくらいのことくらいはさせて頂いても、罰（バチ）は当たらないでしょう」

海未の父も、彼女の意見に同調した。

この娘にして、この親あり…。

…なんて思慮深い父子だろう…

今度は逆に、高野の両親が感心した。

「…そうですか…私が許可するとかしないとか、なんともおこがましいですが…そう言ってくださるのであれば…」

「そうですね。そのお気持ちはきつと息子に伝わると思えますよ」

高野の両親は、揃って頭を下げた。

「ありがとうございます…。では、海未、私は家に連絡をしてくるから…」

「あ、私もいきます。やはり、直接、伝えた方が…」

「うむ…。高野さん、すみませんが、少しだけ席を外させて頂きます」

「どうぞ、どうぞ。ご家族に無事を伝えて、早く安心させてあげてください」

「申し訳ございません…しばし、お時間を頂戴致します」

海未と父は一礼すると、電話が掛けられそのような場所を探した。

病院内で通話することは、昔に比べ規制が緩くなったとはいえ、既に深夜。

どこで喋っても声が響く。

2人はそつと裏口に廻り、外へと出た。

ここなら、大声で話さなければ、それほど迷惑にはならないだろう。

父は、院内に入るときに切った携帯の電源を立ち上げる。

思った通り、自宅から何度か着信があった。

折り返すと、妻が出た。

父は海未が無事であったこと、諸事情により病院で夜を明かすことを、手短かに説明した。

最後に、海未が自らの声を聴かせ、園田家への報告は終わった。

だが、海未は新たに報告すべきところがあることを発見する。

なんの気なしに、バッグに仕舞っておいたスマホを覗いてみる。

何度か着信を告げるバイブが響いていたのは知っていたが、状況が状況であった為に、見るのを控えていた。

そして、このタイミングで初めて見たのである。

するとそこには、数えきれぬほどの着信、メール、LINEが入っていた。

その大半がμ sの元メンバーからのものだった。

…はて…何かあったのでしょうか…

海未はまだこの時、自分の置かれた立場を理解していなかった…。

くつづく

カヤの外

…いったい何があったというのです?…

海未は着信と、メールやLINEのメッセージの多さに驚いた。
その履歴の『一番最初』に遡ってみる。

〈海未、事故に巻き込まれたって本当? ケガはないの!?

…21時42分…にここからですね…

μ sの元メンバーで作っているLINEのグループ。

その中に『始まり』があった。

『穂乃果』や『ことり』からではなく、真っ先に『にこ』からというのが、海未からしてみれば少し意外な気がしたが、心配してくれていることに関しては、素直に嬉しかった。

…ですが…

…何故にこは、私がこうなったことを知っているのでしょうか…

その答えは、にこのLINEに反応した穂乃果たちとのやりとりから判明する。

〈にこちゃん、それ本当なの? (穂乃果)

〈海未ちゃんがケガ? (ことり)

〈あんたたち、ニュース見てないの? サッカー選手が事故に巻き込まれたってヤツ (にこ)

〈ニュース…これか…でも、海未ちゃんの名前なんて出てないよ？
(穂乃果)

〈海未の話はSNS情報よ。巻き込まれて、一緒に運ばれたって(にこ)

〈なんだ、SNSの情報か(穂乃果)

〈あてにならないよね(ことり)

〈凜も見たにや！(凜)

〈凜ちゃん！(穂乃果)

〈凜は専門学校の友達から連絡がきたにや(凜)

〈こんばんわ、絵里です。にこのLINE見て、すぐに電話したけど…出ないわね…(絵里)

〈私も電話してみたけど…出ないわ(真姫)

〈真姫ちゃんも来たのね(穂乃果)

〈このLINEにも、反応ないにや(凜)

〈たまたま、近くに携帯がないとか、見られない状況にあるんじゃないかな(ことり)

〈だと良いのだけど(絵里)

〈そもそも、その情報が正しいかどうかわからないんですよ？(穂乃果)

〈そうだよね(ことり)

〈だから、確かめてるんじゃないの(にこ)

〈確かに…(穂乃果)

〈まあ、あんまりみんなで電話しても仕方ないし、代表して穂乃果が連絡するっていうのがいいんじゃないかしら？(絵里)

〈うん、わかった(穂乃果)

〈海未だってLINEに気付けば、何らかの反応があるだろうし(絵里)

〈そうだね(ことり)

〈わかったにや(凜)

〈なんでもなきやいいけど(真姫)

〈大丈夫だよ、海未ちゃんだもん(穂乃果)

〈じやあ、穂乃果よろしくね（絵里）

〈任せたわよ（にこ）

〈了解！（穂乃果）

…なるほど…

…それで、この着信ですか…

希と花陽がLINEに参加しなかったのは、彼女たちは今、仕事で海外にいるからである。

…みんな、私のことを心配してくれているのですね…

μ、sが解散してから3年あまりが過ぎたが、絆の強さは今も変わらない。

これを見て、仲間たちの想いに感謝した。

…と同時に頭に浮かぶ疑問と、若干の恐怖。

海未はこのやりとりから、何点かの情報を得た。

ひとつは、出どころは不明だが、自分が事故に巻き込まれた…という情報が出回っていること。

次にそれが『園田 海未』である…と特定されていること。

海未はゾツとした。

…いつ、誰が見ていたのでしょうか…

…いえ、事故の目撃者は多数いたのですから、そう考えればわからなくもありませんが…

…何故、私の名前がそのようなところに…

無理矢理、推理するならば…

弓道部の飲み会の帰り道の出来事だ。

海未は二次会の誘いを断り、その場をあとにした訳だが…他にも同じように帰宅の途についた部員がいて、通りかかった際に、事故現場に遭遇。

その者がSNSに投稿した…というところだろうか。

…だとしても、個人名を載せるのはどうかと思うのですが…

海未は、少し憤りを感じた。

だが、海未はそれよりも、もうひとつ得た情報…そっちの方が気になった。

それは、自分が助けてくれた『彼』が、サッカー選手であるらしい…ということ。

この時、海未の頭の回路が、いきなりバシッ！と繋がった。

…サッカー選手？…

…高野さん…

…「なにも、こんな時に！」と言った、彼のお父さんの言葉…

…まさか…

…彼はサッカーのオリンピック代表選手!?!…

それほどサッカーには興味がない海未でも、高野 梨里の名前は知っていた。

オリンピックの最終予選…その運命を分ける大事な試合で決勝ゴールを挙げ、日本を本大会出場に導いた『時の人』である。知らないハズはなかった。

ただ顔までは…

見たことはある。

今、思い出せば確かにその人だった。

だが、あの時は…

暗くて良く見えなかったこともあるが、そんなところに、そんな人が歩いていようとは…

想像だにしなかった。

…高野 梨里さん？…

突如、海未背中に悪寒が走った。

…ああ…私はなんてことをしてしまったのでしょうか…

彼が本当に彼が高野 梨里であるならば、仮に意識が戻ったとしても、来月に控えたオリンピックの出場など、とても困難であることは、小学生でもわかること。

『被害者が誰であったか』によって、命の重さ、怪我の大きさに差をつけるのはおかしい話だが、それでも、一般人と有名人では、その意味合いが変わってしまう。

高野の父が言った

「こんな時に」
が、胸に響く…。

…そうですよ…

…そんな大事な時期に、何故わざわざ、あんなことを…

高野の行動に疑問を抱く、海未。

そして、車から逃げる事が出来なかった自分に対して、再び激しい後悔が襲う。

さらには…

…そして、私はこんな大事な話を、どうして『にこたち』から知らされなければならぬのでしょうか…

…よりによって、当事者の私が一番最後に知るなんて…

「1本電話をしてもよいでしょうか？」

海未は父にそう断りを入れ、スマホの画面をタップした。

「もしもし？海未ちゃん？」

「はい、海未です。穂乃果…寝てましたか？」

「ううん、起きてたよ。えへへ、実は…隣にことりちゃんもいるんだよ」

「ことりがいるのですか!？」

「あ、待って…今、替わるね…」

「もしもし、海未ちゃん？ことりだよ」

「海未です」

「LINE見たかなあ？みんな、すごく心配になっちゃって」

「すみません…私としたことが…。まず事故に巻き込まれた…というのは、事実です」

「えっ？」

「ですが、幸い大事には至りませんでした。掠り傷程度で済みました。ただ念のために…という事で病院に運ばれて、一通り検査を受けたので…」

「そっか…それで今まで連絡がつかなかったんだね」

「はい。みんなには多大な心配を掛けました。まさか、こんな騒ぎに

なっているとは夢にも思わなかったものですから…」

「そうだよね…」

「それで実は、まだ病院におりまして…ええ、父に迎えにきてもらって
ますので、それは問題ないのですが…あの、私と一緒に事故に遭った
のは『高野 梨里』さんなのでしょうか…」

「…うん…そうみたい…」

それも海未ちゃん知らないの？と、ことりの隣から穂乃果の声。

「ええ…誰もそこまでは教えてくれなかったものですから…。それで
すか…」

「どうしたの？」

「はい、高野さんは私の身代わりになって、事故に遭われたのです」

「えっ？」

海未は簡単に事故のいきさつを説明した。

「で、でも…海未ちゃんが悪いわけじゃ…」

「もちろん、そうなのですが…なんだかやりきれないのです」

「気持ちはわかるけど…。あ、とりあえず、みんな心配してるから、こ
とりがLINE送っておくね！」

「はい、すみません。お願いします」

「だから、海未ちゃんは今もうちよつと、頑張つて。明日…あ、もう今日
だね…穂乃果ちゃんと一緒に迎えに行くから」

うん、うん、海未ちゃん、ファイトだよ！と穂乃果の声。

…この台詞に何回元氣付けられたのでしょうか…

「はい、わかりました…。では、みんなに連絡のほどお願い致します」

海未は電話を切った。

穂乃果とことりの声を聴き、少しだけ元気がもらえたものの、心に残った重いものを取り除くには、まだまだ不完全な状態だった…。

くつづく

長い夜

穂乃果たちとの電話を終えると、海未は父を見た。

「高野さんは…サッカーのオリンピック代表選手でした…」

彼は黙って頷く。

父はそばで電話の内容を聴いていた為、海未が何を言わんとしているか、すぐに悟ったようだ。

「私は…私は…」

『この大きさ』を知らされた海未は、身体に震えを感じた。

歯が噛み合わず、言葉が続かない。

それを見た父は娘を抱き締めると、静かに言った。

「海未…。今回の事は、非常に不幸なことだし、残念に思う。しかし、彼が逃げずに海未を助けたことは『彼の意思』で行ったこと。それを知っているのは海未だけだ。先程、向こうのお母様が言っておられたが、彼は人として立派なことをした…。であるなら、私たちは、その勇気を讃えようではないか」

「勇気を讃える…」

「それができるのは、当事者である海未だけだ。場合によっては『的外な批判』が出てくるかも知れない。…だが海未に非はない。そんなことになれば、私が海未を全力で守る」

「お父様…」

「だから海未は毅然としていなさい。そうでなければ、彼が海未を助けた意味がなくなる」

「…」

海未はしばらく言葉を発しなかったが、やがて意を決する。

自分の両頬を、二度三度と掌で叩き、喝を入れた。

「わかりました。これも何かの運命なのですね。…であるならば、甘んじて受け入れましょう。園田 海未、逃げも隠れもしません！立ち向かいますよ！」

海未の力強い宣言に、父は娘の頭をポンポンと軽く叩いた。

院内に入りICUの前に戻ると、高野の両親と医師が話をしていた。

さすがに、そこへ入っていくのは気が引け、海未は少し距離をおいて、その様子を見守る。

少しすると、医師がその場を離れていった。

海未はそれを見て、両親の元へと歩み寄る。

「あ、園田さん…」

「先生はなんと…」

「今日、明日がヤマであろう…」と

「そうですか…」

「すみません。今度は私たちが、少し席を外させて頂きます。下（1階）に…息子の職場の関係者がいらしてるものですから、ご挨拶に…」

「あ、はい…」

「では、失礼…」

「あ、あの…」

「はい？」

「息子さんは…オリンピック代表選手の…高野 梨里さん…だったのですね…。私…さつきまで、そのことを知りませんで…本当にこのように大事な時期に…」

「園田さん…事故に巻き込まれたのが、たまたま息子であっただけで、それ以上でも、それ以下でもありません。大丈夫です。息子は必ず戻ってきますよ。私は彼を信じてますから」

「…はい、そうですね…」

「では、一旦失礼します…」

高野の両親は一礼すると、階下へと降りていく。

このあと2人はロビー（待合室）にて、医師と共に『関係者』や『つばさたち』と面会し、現状についての説明を行った。

夜が明ける。

今年はカラ梅雨らしく、雨が降らない。

日の出と同時に、ジリジリと照りつけるような朝陽が、窓から射し込んだ。

明るくなるにつれ、ICUの前にいる4人…海未と父、高野の両親の顔がハッキリとわかるようになった。

お互い、一睡もしておらず、さすがに憔悴している感じは否めない。

高野の母が気を利かせて、飲み物を買ってきた。

「…どうぞ、お構いなく…」

手を左右に振り、断る海未。

高野の母は、眩しそうに目を細め

「今日も暑くなりそうね」

と海未に声を掛ける。

「はい。…このところ、降っておりませんね」

「はあ…これでまた、お野菜が高くなるわ…」

「えっ？」

「あ、ごめんなさい。家計を預かる主婦としては、こんな時でも、そんなことを気にするものなのよ」

高野の母はフッフと笑う。

それが本当のことなのか：それとも気を紛らわす為に、敢えてそんなことを考えているのか：

海未には計りかねたが、何となく後者であるような気がした。

それでも、窓辺から射し込む朝陽と共に、彼女の穏やかな語り口調が、海未の心を明るくする。

「大雨は困りますが、それでも梅雨は梅雨らしくあつてほしいものです」

海未は思わず、そんな言葉を漏らした。

「そうね…どんなものでも、適度な潤いが必要なもの。：特にあなたなんか、まだお若いんだから：睡眠不足と水分不足はお肌の敵ですよ」

「：はあ…それはそうですけど…」

「だから…はい！」

彼女は再び、海未にペットボトルのお茶を手渡した。

「えっ?」

「乾いちやダメなのよ。身体も、心も。それに、脱水症状なんかになったら大変でしょ? 私たちが具合悪くなっても、仕方ないんだから。摂るものは摂らないと…でしょ?」

「…一本取られました…では、ありがたく頂戴致します」

海未は両手でそれを受けとると、キャップを空け、喉を潤した。

…乾いちやダメ…ですか…

…まるで『愛してるばんざ〜い』の歌詞ですね…

海未は『数少ない自分が作詞した曲でない』歌詞の一部を思い浮かべた。

…それにしても、高野さんのお母様はお強いですね…

…この状況下で、なんて余裕なのでしょう…
…私も見習いたいものです…

笑みこそなかったが、男は男で、思うところがあるのだろう…横を見ると、海未の父も高野の父と、なにやら小声で話していた。

時刻が6時を迎える頃には、院内が『わさわさ』としてきた。

海未のいるフロアは静かだが、上下階は朝食の支度やら、朝の巡回の準備やらの音が感じられ、1日の始まりの忙(せわ)しなさが伝ってくる。

ICUには…夜中から、もう何度めになろうか…医師が様子を見に訪れた。

「今のところ、変化なしです…」
それだけを告げると「では、また、あとで」とその場を去っていった。

続いて、看護師が高野の両親と二言三言、話しをする。
その輪が解けると、両親は海未の元へとやって来た。

「園田さん、私は一旦、家に戻ります。『着の身着のまま』出てきたもので、色々、やらなきやならないことがあります…。園田さんも状況は同じかと思いますので、そろそろ…」

と高野の父。

海未は父の顔をチラリと見たあと

「私はまだ…」

と、居残ることを意思表示する。

「ありがとう。でも、もう十分よ…。さつきも言ったけど、私たちまで具合が悪くなったら大変ですもの。自分の身体を大事になさって」

高野の母が海未を諭す。

海未の父は、そっと彼女の肩に手を置いた。

…これ以上、海未がいても、逆に2人には精神的な負担になる…

この辺が限界だろう…海未の父も、そう判断した。

「長い時間、本当にありがとうございました。意識が回復しましたら、必ずご連絡しますので」

「それと、あなたがずっといてくれたことも、ちゃんと息子に伝えますから」

「…はい、かしこまりました…。では、申し訳ございませんが…」

「いえいえ…お気を付けて」

「はい。失礼致します」

高野の両親は、海未の連絡先を訊くと、最後に一言付け加えた。

「正面玄関にはマスコミが詰めかけてます。息子のせいで変な『とばっちり』をくらうといけません。裏にタクシーを呼んで、そちらから帰るとよいでしょう」

穂乃果とことりが病院に来る…と言っていたので、海未は断りの連絡を入れたあと、後ろ髪を引かれる思いで、父と共に、手配したタクシーに乗り込んだ。

海未の元に、吉報が届いたのは、それから2日後のことだった…。

くつづく

当たらず、触らず

『オレ』が意識を取り戻してから3日目。

とりあえず親父は、仕事に復帰した。

おふくろも『病室にいてもやることはない』とのことで、午前中少し顔を出して帰っていった。

オレはといえば…

ほぼ一日中ベッドの上で過ごしている。

身体が動かないんだから仕方がない。

できるだけ『くだらない報道』や『代表の情報』は耳にしたくないと、TVやラジオを点けることを拒んでいるオレだが…さすがに何もしないでいることに飽きた。

薬の影響からか、うつらうつらと寝てしまうこともあるが、夢見が悪い。

今回の事故について、頭の中では割り切っているつもりでも…深層心理…心の奥深いところでは納得していない自分があるのだろう。

これで美人のナースでもいれば、多少は目の保養…癒しにでもなるのだろうが、現実はそんなに甘くない。

これじゃあ、夢の中でも『楽しいこと』など、起こるハズもない。

そのオレを担当してくれている看護師によると、オレが意識を取り戻したことにより、病院に詰めかけていた報道陣は姿を消したとのこと。

…残念だったな、死ななくて…

オレは心の中で、毒づいた。

無事を祈ってます…などと言いながら、本当は悲劇を期待している。

マスコミなんて…いや、日本人なんてそんなものさ。

そんなことを考えていると、サッカー協会の広報担当者が面会にやってきた。

意識が回復して、容態が落ち着いたということ、コメントを発表することになっていた。

当面、男とは会いたくなかったのだが、こればかりはどうしようもない。

現れたのは、40〜50歳くらいの男性だった。

名前は『小野』という。

「どうだい、気分は？」

「いいように見えますか？」

「絶好調に見えるな…ハッハッハッ」

オレはこの一言を聴いて、手強いな…と感じた。

…結構な皮肉を言ったつもりだが…

…それに動じず、逆に切り返してきやがった…

報道できないようなコメントを羅列してやろうかと『半分』考えていたが、そう容易な相手ではないと、一瞬で悟った。

「さてさて…冗談はさておき…高野くんの意識が回復したということ、『元気です』『頑張ってます』的な言葉を、もらうわけだけど…こう

いうのは、ある程度、定型文みたいのがあってね」

「定型文？」

「そりゃあ、好き勝手コメントされちゃうと、色々なところに反響が及ぶから、当たらず触らず…が望ましいわけ」

「…へえ…」

サッカーに関する取材しか受けてこなかったオレにとっては、そんなものなのか…と思うしかなかった。

「例えば…今回の事故を起こした車は『レクサス』だった…ってことは周知の事実だけど、コメントの中でそんな車種の名前なんか出せないでしょ？イメーჯダウンに繋がるって、すぐにクレームになる」

「そんなことは言いませんけどね」

「例えばの話だよ、例えばの話。ただ、今回は交通事故だよね…。高野くんが所属するマリノスは、親会社が日産だから、車社会や車の性能を批判するようなことも、避けなきゃいけない」

「ああ、それは確かに…」

「同様に、それ以外のスポンサーにも気を遣わなきゃいけない」

「面倒くさいですね」

「そう、その通り。だけど、よっぽどの物好きでない限り、わざわざ下手なコメントをして『炎上』しようとは思わないだろ？自分の身は、自分で守るのさ」

「…なるほど…だから、結局のところ、似たり寄つたりのコメントになる…」

「そういうこと。じゃあ、内容が理解できたところで、文章を作っているか…」

…で…

できた『作文』がこれ。

……

〽こんにちわ。横浜・F・マリノスの高野 梨里です。

〽この度は関係者、およびファンの皆さまには、多大な心配をお掛け致しましたことを、まずはお詫び申し上げます。

〽また代表やマリノスのH・Pを通じて、非常に多くの方から私に関する応援メッセージを頂き、誠にありがとうございます。

〽事故に遭った経緯等については、先にサッカー協会から発表があった通りです。

〽トレーニングの帰りに、信号待ちをしていたところで巻き込まれたもので、一部噂されている『女性と一緒にいた』という情報は、事実と異なります。

〽その方も、私の隣で信号待ちをされており、同じように巻き込まれた…と聴いておりますが、私自身面識は一切ございません。

〽幸い、軽傷で済んだようですし、一般の方とのことですので、できれば静かに見守って頂きたい思います。

〽さて、皆さまのお陰をもちまして、私は一命をとりとめました。

〽今後については医師と相談しながら進めて参りますが、一日も早く元気な姿を見せられるよう頑張ります。

〽最後に。

〽オリンピックの出場は叶いませんでしたが、代表メンバーは必ずやメダルを獲得してくるものと信じております。

〽身体は日本にありますが、魂は現地に飛んでおり、一緒に戦うつもりで応援します。

〽頑張れ！ニッポン！

〽横浜・F・マリノス

高野 梨里

#17

……

「本当に無難な文章ですね…」

「これでいい。誰も傷つかないし、誰も怒らない」

「オレはメチャメチャ怒ってますよ！車を運転していたガキに！」

そう、車を運転していたのは16歳のガキだった。
当然、無免許だ。

コイツには、言いたいことがヤマほどある。

しかし、それすらも

「だからと言って、ここでのコメントは控えた方がいい」
と小野さんに言われた。

…100対0で相手が悪くても、文句すら言えないのかよ…

まあ、オレもことを荒立てるつもりはないが、釈然としないのは確かだ。

…あとで、どこかで、爆発しそうだよ…

こうして、オレと小野さんが作った『作文』は、夕方、マスコミ各社にFAXされたのだった。

くつづく

サプライズゲスト

「高野さん、ご面会の方が見えてますけど…」

病室のドアがノックされ、看護師がオレに声を掛ける。

「男だったら断ってください」

彼女は冗談だと思って笑っているが、オレは至って本気だ。

「じゃあ、大丈夫ということぞ！」

オレが許可していないのにも関わらず、ヤツは勝手に入ってきた。

代表の広報と、ほぼすれ違いのタイミングで病室にきたのは『夢野つばさ』だった。

「なんだ…『チョモ』か…」

「なんだ…はないでしょ？こうして時間を割いて、逢いにきてるのに！」

「ああ、ありがとな。さすがにヒマしてて…話し相手が欲しかったところだ」

「どう？具合は？」

「いいように見えるか？」

「絶好調でしょ？」

「お前は『小野さん』か！」

「小野さん？なんの話？」

「いや、いい…」

さっきのやりとりを見てたんじやないかってほどの、見事なまでのリプレイに、オレは笑ってしまった。

「ほら、元気そうじゃない」

「いや、だから、これは別件で」

「別件？」

「気にするな…」

笑いのツボを他人に説明することほど、野暮なことはない。

「それより、今日はスペシャルゲストを連れてきたよ」

…チヨモこそ、楽しそうなんだが…

「スペシャルゲスト？」

オレが鸚鵡返すと、ヤツは意外な人物の名前を呼んだ。

「めぐみ！はるか！」

「えっ？」

「失礼します…」

声を揃えて入ってきたのは…『水野めぐみ』と『星野はるか』だった。

「男の人じゃないからOKなんだよね？」

チヨモが悪戯っぽく笑う。

「えっ？えっ？…どうしてここに？」

あまりに突然の出来事に戸惑うオレ。

「私、明後日から代表の最終合宿じゃない？それで壮行会っていうのかな…2人がこのあと開いてくれるって…で、その前に寄りたいところがあるんだけど…って言ったたら、一緒に付いてきてくれて…」

「初めまして。水野めぐみです」

「星野はるかです」

「あ、高野 梨里です。いや、すみません…こんなところにわざわざ…」

「いつも、ウチの『つばさ』がお世話になってます」
はるかがそう言うと

「別に世話になんてなってるわいよ！」
とつばさが返した。

「でも…彼氏…なんですよね？」

めぐみがつばさに詰め寄る。

「彼氏…なの？」

つばさがオレに振った。

「オレに訊いてる？」

「うん」

「…まあ、じゃあ、そういうことで…」

「別に2人とも、照れなくてもいいですよ」

と、めぐみ。

「そうそう、見てるこっちが恥ずかしくなりますから」

はるかが、それに同調した。

オレとチヨモの関係については、ある程度認識しているようだ。

じゃなければ、ヤツもここには連れてこない。

ヒマをしていたオレにとっては、願ってもないサプライズプレゼント。
ト。

病室が一気に華やぐ。

…できれば、寝たきりの状態じゃなくて、元気な時に逢いたいねえ
…

「大丈夫なの？騒がれなかった？」

「はい。ナースステーションは、少しザワザワしてましたけど」

「私はそうでもないんですけど…めぐみはわりとバレるんですよ。
やっぱり、みんな最初に胸に目がいくみたいで。そのあと顔見て…

『あっ！』みたいなの」

はるかは自分の胸元を見てから、つばさの胸へと視線を移した。

「ごろごろ、私の胸は見なくていいの！」

「ちつちやくくなりました？」

「なっていないよ！」

「…って言ってますけど、そうですか？」

「…オレに言ってる？えつとねえ…って言えるか！」

めぐみとはるかが笑う。

つばさも笑っていた。

「この人ね『シルフィード』の中で、誰が好き？って訊いたら、めぐみって答えたんだよ。おっぱいが大きいから…って」

「昔の話だろ…」

「でも、普通に3人並んでたら、今でもめぐみを選ぶでしょ？」

「うん」

「ねっ？こういう人なのよ…デリカシーがないって…いうか」

「正直でいいんじゃないですか？私はムツツリより好きですけど」

「おっ！はるかちゃん、若いのにわかってるね」

「若いのに…って、私たちのひとつ下じゃない」

「この世界にいと、セクハラまがいのことは結構ありますからね…」

それくらいの話なら、かわいいものですよ」

「まあね…」

…容姿がいい…ってことも、それなりの苦労があるんだろうなあ…

チヨモからは、あまり芸能界の裏事情的な話は聴かないが（…というより、そういうことをペラペラ喋るタイプではないが）それはそれで、大変なんだろう。

「それより、2人は忙しいんじゃないの？」

とオレ。

「はい、今、全国ツアーの真っ最中なんです」

「実は、来週から関東で…」

「本当はサプライズゲストで、つばささんに出てもらうつもりだった

んですけど…」

「ちようど最終合宿に行ったあとで…」

「…って、まだ歌えるの?」

シルフィードの活動を離れてから、3年余りが経過している。

オレは素朴な疑問をチョモにぶつけた。

「キミならわかると思うけど、サッカーの練習って普段、2〜3時間くらいで終わっちゃうじゃない。そのあとの空いてる時間を利用して、ギターを弾いたりとかはしてるわよ」

「ああ、そうか」

「高野さんも、やります?ギター?それでシルフィードに入ります?」

「へっ?いきなり何を?」

「あ、めぐみ、それ面白いかも!『シルフィード with T』みたいな?」

「夢野つばさ、水野めぐみ、星野はるか、高野りさと…名前の並びもピッタリだし」

「ムリ、ムリ、ムリ!この人、サッカー以外の才能はゼロなんだから」

「そこまで強く否定するかね…」

「リコーダーで『ドレミファソラシド』吹けたっけ?」

「口笛なら得意だけど」

「…だって!」

「人間誰しも、苦手なものはある!」

「体育以外に得意な課目ってあるの?」

「…動けないことをいいことに、すげえ、デイスられてるんですけど…」

オレがそう呟くと

「それだけ仲がいい!って私には見えますよ」

とめぐみは言った。

「…」
「…」

「だから、それくらいで照れないでくださいよ！中学生ですか！」
はるかがニヒヒ…と笑い、つばさをからかう。

その時だった。
病室のドアがノックされた。

「高野さん、またご面会の方が…」

…ん？今日は忙しいな…

「男だったら断つ…」

「女性ですよ！」

担当看護師は、笑いながら、少し喰い気味に反応した。

「ああ、じゃあ…どうぞ」

「はい、失礼致します。こんにちわ、園田です…」

入ってきたのは、園田 海未だった…。

「えっ!?…あつ…『アクアスター』？」

彼女は『昨日』とまったく同じリアクションをした。

…リプレイか！…

今日2度目の出来事に、オレはひとり、声を押し殺して笑う。

だが、彼女が驚いたのも無理もない。

昨日、オレの病室に『夢野 つばさ』がいたことすら想定外なのに、まさか、その翌日『アクアスター』の2人がいて『シルフィード』が勢揃いしていいようとは。

今や、オフィシャルでも、滅多にお目に掛かれない、超貴重な3ショットだ。

啞然として立ち尽くす彼女を、チヨモが室内へと呼び込んだ。

「どうぞ、こちらへ」

「あ、ご迷惑であれば帰ります」

「迷惑なわけではないじゃない…どうぞ」

「…はい…では、失礼致します…」

「えっと、この2人は…」

「はい、存じております。アクアスターの…いえ、シルフィードの水野めぐみさんと、星野はるかさんでいらつしやいますよね」

「はい、夢野つばさです」

「水野めぐみです」

「星野はるかです」

「3人揃ってシルフィードです!!」

「おお！本物だ！」

チヨモたちのサービスに、思わずオレが声をあげた。

オレとチヨモとの付き合いは、どちらかというところ『サッカー選手 夢野つばさ』としての比重が大きくて『芸能人 夢野つばさ』として接することは少ない。

だから、こんな至近距離で…しかも生で見れて、オレは素直に感動してしまった。

「今日はたまたま、私に付き合ってもらって…。ごめんなさい、驚か

すつもりはなかったの」

「いえ、私こそ、突然お伺いしたものですから…あ、初めまして、園田海未と申します」

「お会いしたかったです、園田さん！」

「ええ、私も！」

「えっ？」

「私たち、μ'sのファンだったんですよ！」

「だから、お会いできて光栄です」

「ど、どういうことでしょう…」

めぐみとはるかの告白に、彼女は言葉を失っている。

「私がオリピックに行くからって、彼女たちが壮行会を開いてくれることになって…。でも、その前に、お見舞いに行くって言ったら、じゃあ付き合います…って、そういう流れで2人はここにいるんだけど…」

「つばささんが、もしかしたら園田さんと会えるかもしれない…っていうから」

「無理矢理付いてきちゃいました」

「えっ！じゃあ、オレの見舞いがオマケなの!？」

「はい！」

はるかが即答した。

「なんて日だ!!」

オレは聞き齧（かじ）ったことのある芸人の決め台詞を叫ぶと、室内が笑いに包まれた。

ただ、彼女…園田 海未だけは、狐につままれたような…キョトンとした顔をしていた。

~ ~ ~ ~ ~

マニアックな記憶

「どうかした？」

妙に明るい病室の空気に、戸惑っている様子の海未。

それを見て、つばさが声を掛けた。

「…いえ…あの…皆さんお見舞いにいらしたんですね…」

海未は何となく申し訳なさそうに尋ねた。

シルフィードの3人は、それぞれ顔を見合わせる。

その問いに、合点がいったのはつばさだった。

「なるほどね。言いたいことはわかるわ。遊びに来たようにしか見えないものね…でも半分そうかも」

「えっ？」

「とりあえず『死なない』って、わかったから…『しんみり』しててもしかたないでしょ？病人ならともかく、この通り元気みたいだし…」

「おいおい、元気ではないだろ！」

「じゃあ、何も喋らないで大人しくしてた方がいい？」

「いや、それは…」

「ねっ！…って、言うことだから」

「はあ…」

海未は返す言葉に詰まった。

…なぜ、この人たちは、こんなにもポジティブなのでしょうか…

…ご両親も、つばささんも…そして当のご本人も！…

…ひよつとしたら、穂乃果以上かもしれないね…

「園田さん？」

「はっ！すみません、少し考え事を…」

「まあまあ、リラックスしてくださいな」

「…って、はるか。まるで自分の部屋みたいだね」

めぐみはそう言つて笑つた。

「でも、ほら、知らない仲じゃないんだし」

「かなり一方的だけどね。面と向かつて会うのは初めてだから」

「あの…」

「はい？」

「先程、お二人は、μ、sのファンです…とか、私に会いにきた…とかおっしやいました…それは一体どういうことでしょうか」

「私たちがμ、sのファン…っておかしいですか？」

はるかは決して威圧的ではなく、本当に『なんで？』という感じで、逆質問をした。

「それはその…私たちがμ、sとして活動したのは、ほんの1年足らずで…それも世間の皆様に名前を覚えて頂いたのは、海外ライブのあとで…ですが、すぐに解散してしまいましたし…」

「私はその全然前から、応援してましたよ」

「そうなのですか？でも、その時、すでに皆様はシルフィードとして活躍されてらして…そんな方々が素人の私たちのファンなどというのは…」

「そんなことないですよ…ね？」

「うん。それは全然違いますよ」

めぐみの否定に、はるかが同意した。

「ラブライブ…」

「えっ？」

「私たちも注目してたんです、ラブライブ」

「皆さんがですか？」

「最初は：『ラブライブっていうのが開催されるらしいよ』『全国のスクールアイドルがパフォーマンスを競うんだって』『へえ…』みたいな感じだったんですよ：私たちも」

「だけどその中に『A—RISEっていうチームが、かなり凄い』って、話題になって。ほら、彼女たちって、その時からプロデビューの話があったじゃないですか。『スクールアイドル？ただのお遊びでしょ？』って言ってた人たちも『ちよつとバカにできないかも…』ってなつて」

「業界全体がね：『次世代アイドル発掘の場』みたいに捉えるようになったんだよね」

「うん。私たちは『歌って踊る』っていう方向性じゃなかったから、スクールアイドルに対して、それほど意識してなかったけど、同じジャンルの娘たちは、結構気にしてたよね？だって、もしかしたら、ライバルになっちゃうかもしれないんだから」

「でも、ちよつとA—RISEは別格だったかな。彼女たちのパフォーマンスを見ちゃうと、どうしても…ね？」

「そうだったのですか。そういう業界の事情みたいなものは、私たちはまったく知りませんでした…」

スクールアイドルをやっていた者の中には『当時の矢澤にこのように』本気でアイドルを目指していた生徒も少なくなかったに違いない。

だが、いまだかつて、A—RISEを超えるアイドルは出てこない。そういった意味では、デビュー前から注目され、今も活躍を続けている3人は、やはり特別な存在と言えよう。

…あのA—RISEと時を同じくしていたなんて…

…今でも信じられないのですが…

めぐみとはるかにラブライブの話を聴かされて、海未は少しその頃

を思い出した。

「それで、誰もがA―RISEの3連覇かな…って思ってたときに、現れたのが…」

「μ'sだったんです」

「私たち…ですか」

「はい」

海未の言葉に、めぐみとはるかが首を縦に振った。

「正直言うと、私はそこまでラブライブに注目してなかったんですよ。さつきも言いましたけど、やってるジャンルが違ってたので。どちらかというと、はるかの方が」

「はい。私は趣味でダンスをやってるので…もちろん、そのアイドルの振り付けとはまったく違うんですけど、勉強にはなるかな…って、色々なチームを見てましたよ」

「そうしたら、はるかが『あのA―RISEが挑戦状を叩きつけたチームが現れた』って」

「挑戦状…ですか？」

海未は身に覚えがない…とばかりに呟く。

「あれ？お忘れですか？アキバでA―RISEに煽られて、急遽アカペラを披露したときのこと」

「!!」

「見てたんですよ、たまたま。ネットで中継されてたじゃないですか」

『μ's』が『A―RISE』にライブ会場として『UTX』の屋上を提供してもらい『ユメノトビラ』を披露してから、少し経ってからの

こと…。

アキバで『利き米コンテスト／愛・米・味（あい・まい・みー）』が開催された。

μ，sからは希、にこ、穂乃果、凜…そして花陽が参戦。

そしてそこには、なんとA—R—I—S—Eの統堂英玲奈も、虎視眈々と優勝を狙って参加していた。

決勝に残ったのは…μ，sからは予想通り、花陽。

そして、英玲奈。

予選、準決勝を勝ち上がった、2人は激しいバトルを繰り広げる。

その死闘を制したのは…花陽。

彼女はこうしてアキバの『初代お米クイーンの称号』と『優勝商品の新米120kg』を手に入れたのだった（余談だが、のちに花陽はその新米を食べ過ぎて、穂乃果と2人で『海末の強制ダイエットメニュー』の敢行をさせられることになった）。

その利き米コンテストのサプライズゲストとしてライブを行ったのが、地元のスター『A—R—I—S—E』である。

その時に、何を思ったか『綺羅ツバサ』は、（参加者とその応援で）会場に全員集まっていたμ，sに、1曲歌えと要求したのだ。

このプロレス的なマイクパフォーマンスに、盛り上がる観客。

だが、まったく予期していない、突然の挑発に戸惑うメンバーたち。当然、衣装もない。

打ち合わせも何もしていない。

花陽はこの時、臀部を打撲しており、ダンスは難しかった。

この状況で、なにができるのか…
中途半端なパフォーマンスなら、やらない方がいい。

果たして…

穂乃果は受けて立った。

には

「売られたケンカ、買ってやろうじゃないの！これは最終予選の前哨戦よ！」

と息巻いた。

そして、私服の9人が披露したのが…

『愛してるばんざーい！』のアカペラだった。

奇策と言ってもよいパフォーマンス。

しかし、その歌声は（歌詞の内容とも相まって）観客の心に大きな感動をもたらした。

いみじくもそれは、μ'sが『ただの大所帯ユニットではない』ことを示す、アピールの場となり、一躍、A|R|I|S|Eのライバルとして注目を集めることとなったのだ。

あの時、なぜ綺羅ツバサは自分達のライブの時間を削ってまで、μ'sをステージに立たせたのか、その真意はいまだ謎である。

μ'sを本気で潰そうとしたのか…自分達のライバルとしてふさわしいかどうか、試そうとしたのか…。

ただひとつ言えることは、3連覇確実と言われていたA|R|I|S|E

にとって、自らがステツプアップするための起爆剤に、μ sが選ばれたことは間違いなかった。

そして、9人は、その期待に違わぬ成長を遂げていったのだ。

その時の一連の出来事を、はるかには『A—RISEが叩きつけた挑戦状』と言ったのだ。

※詳細は#82486『Can't stop lovin' you!』花陽ちゃんへの愛が止まらない』の『にこ編』を参照願います。

「その時から私は、μ sのファンになったんです。生意気なことを言わせて頂くと、素人なのに凄いパワーを感じたというか…。ああ、なるほど…A—RISEが挑発しただけのことはあるな…って」「恐縮です…」

海未は顔を赤らめた。

名前が売れてからではなく、その前から…しかも、かなりマニアックなシチュエーションのライブを、こうまでハツキリと覚えている人は、そうはいない。

いや、いるかも知れないが、面と向かって、そういう話を聴いたことがない。

それがまさか、星野はるかのかの口から語られようとは…。

嬉しさ半分、恥ずかしさ半分といったところだった…。

くつづく

まさか…ね…

「私は、はるかが μ sを応援するようになってから、一緒に見るようになって」

とめぐみ。

「ありがとうございます」

「中でも印象的だったのが、最終予選かな。白い世界から、パーってオレンジに染まっていく瞬間、なんだかわからないけど、泣きそうになっちゃって…」

「私も」

はるかが相槌を打つ。

「あの時は、アクアスターとして全国ライブをすることが決まった時間で…」

「でも、私たちライブって経験がなくて、すごく不安を感じてた時期だったんだよね？」

「えっ？その前の年に、紅白歌合戦に出場されていたかと…。逆にあれだけのお客さんの前で歌っているのに、不安があるなど考えられないのですが」

「その時は3人だったし、勢いだけで歌ってた…って感じで」

「2人だけで単独ライブでしょ？3時間も体力もつかないとか、お客さん飽きないかな…とか…ね？」

「うん。それで、 μ sのパフォーマンスを見て、ひとつヒントをもらった…ってどうか」

「それはどういうことでしょうか？」

「演者が最高のパフォーマンスをするのはもちろんなんですけど、観客を満足させるのって、それだけじゃ足りないと思うんです。プラス α が必要なんです」

「プラス α …ですか？」

「生意気なことを言わせて頂くと、A—RISEもパフォーマンスは完璧だったと思います。じゃあ、勝敗を分けたものはなんだったのか：私はμ、sの方が、少しだけ観客を魅了する力が上回っていたんだと思うんです」

「観客を魅了する力…ですか？」

「上手く表現できませんけど…強いて言うな『熱さ』ですかね…。A—RISEは淡々と自分たちのパフォーマンスに終始したように見えただんです」

「それが悪いとは言わないですし…収録ならそれでいいと思うんですけど…」

はるかが、めぐみの言葉をフォローする。

「うん。でも、ライブだからね…。その点、μ、sには私たちの胸を打つ何があつたと思うんです」

「それが、熱さ…ですか…」

「はい」

「確かに、私たちもA—RISEに勝つたという実感がなかったというか…。終わってから、穂乃果もA—RISEのツバサさんに訊かれたみたいですけど…。『何が勝敗をわけたのか。μ、sを突き動かしているのはなにか』と」

「なんだつたんですか？」

「すぐには答えが出ませんでした。ですが、やがて気が付いたのです。私たちは自分たちの力だけで、ここまで来たのではないと。多くの方に助けられて、ここまでこれたのだと。それが感謝の気持ちとなり、私たちのパフォーマンスの原動力だったのです。」

『みんなで叶える物語』：μ、sのキャッチフレーズですね」

「はい、よくご存じで」

「つまり、ライブで必要なこと…それは、いかに集まって頂いたファンの方々と一体になれるか…だと思っんです。それを、あの時μ、sが教えてくれたんです」

「私たちはただただ、夢中でしたけど…そうやって頂けるのは、嬉しいです」

「それから私は、μ、sの映像は全て観ましたよ。ジャンルは違っても、目指すことは一緒だと感じてましたし、何より、どの楽曲も素敵で」

「自分たちで、作詞作曲して、振り付けから、演出まで。同世代なのに凄いな…って。私もめぐみも、楽器は演奏できますけど、そこまで全部はこなせないですもの」

「だから、私たちがμ、sのファンだって言っても、全然不思議じゃないんですよ」

「恐れ入ります。ですが、私たちも、全部がひとりで担当していたわけではありません。作詞、作曲、振り付け、衣装、演出…分業制でしたので」

「園田さんは、作詞担当でしたよね？」

「はい。全ての曲ではありませんが。先程話題に出ました『愛してるばんざーい!』は、真姫が作りましたし」

「ね?そういう才能の塊の集まりだったんだよ、μ、sって」

それまで黙って話を聴いていたつばさが、高野に向かって言った。

「あ、この人『μ、sのミュ』の字も知らなかったらしくてね…私が『キミが助けた人は、こうこうこういう人だよ』って教えてあげても『誰?』みたいな」

「失礼ながら、そういうことには全く興味がなくて…。そんなに凄い人だったんですね」

海未とはまだ距離がある為、話し方が丁寧になる高野。

「いえ、別に凄いななんてことは…。ただ、私個人がどうこうではなく、確かに集まったメンバーは最高の仲間でした。彼女たちに巡り逢えた私は、幸せ者だと思います」

この部屋に入ってから、海未は初めて力強い声で語った。

「あ、ごめんなさいね。2人を連れてきちゃって。迷惑だったかしら?」

「とんでもございません。私にそんなことを言える資格はありませんから…。ですが…何故、今日私があると」

「女の勘…ってやつ？」

「えっ？」

「冗談。この人のお母さんから聴いたの。今時、あんなに律儀な人は、珍しいって。だから、きつと今日も来る！って思ってた」

「律儀などでは…」

「それに、私も彼女たちも、園田さんと色々お話してみたかったの。もちろん、μ、sのファンだってこともあるんだけど、それ以外のことも…ね？」

つばさが、めぐみとはるかに同意を求めると、2人は『その通り』だと、二度三度と頷いた。

「あつ、そう言えば、私も昨日、つばささんに伝え忘れたことがあります」

海未は右手を小さくあげて、発言の許可を得る。

「なにかしら？」

「μ、sの曲の中に『ユメノトビラ』という曲があるのですが…」

「知ってます！UTXの屋上で披露した曲ですよね？」

はるかが即答した。

「さ、さすがにお詳しいですね…」

「μ、sの中では、衣装も含めて少しタイプが違いまよね？振り付けも可愛らしくて、全体的にフェミニンな感じで」

「ええ。実は私たち、一旦はラブライブの出場を諦めて、活動も休止したことがあったんです。ですが『もう一回頑張りましょう！』っていうことになり、合宿をして…その時にみんなでアイデアを出し合って作ったのが、あの曲なんです」

「それが凄いやね？私とはるかなんて、2人で話し合っても、何も生まれないもんね？」

「ね？」

2人はそう言ってケラケラと笑った。

「それですね、作詞は私がしたのですが…最初のタイトルは『ユメノツバサ』だったんです」

「えっ?」

つばさ、はるか、めぐみがそれぞれ驚きの声をあげた。

「はい。無意識だったんですが…。完成して、見直している時に気が付きました、慌てて修正したんです」

「別に『ユメノツバサ』でも良かったんじゃない?」

「いえ、さすがにそういうワケには。それに『片仮名表記』で『ツバサ』としたならば『綺羅ツバサ』の名前がどうしても出てきてしまいますし」

「ああ、それは確かにそうかも」

つばさはそれを聴いて笑った。

「ライバルですものね、A—RISEは」

「はい、はるかさん、その通りです。…ですから、昨日、夢野つばささんとお会いしたときは、ただならぬ『縁』のようなものを感じたのです」

「『縁』?」

「はい。先程、お二人が、sの事を語ってくださいましたが、当然ながら私もの皆様のことはよく存じております。特につばさんは、モデル時代から活躍されてらっしゃって」

「それほどでも…」

「一緒にモデルでコンビを組まれていた『浅倉さくら』さんが、私の友人の『南ことり』の遠縁だとのことで、まことに勝手ながら、私も身内のひとりみたいなつもりで見えております」

「そうなんだってね。私もさくらからその話は聴いたわ。会ったことはないけど…って」

「そんなこともあつて『AYA』さんが『夢野つばさ』さんになった時は本当にびっくりしましたし、そのインパクトが私の心の奥底にあつたんだと思います。だから、無意識のうちに曲のタイトルに」

「うふっ…光栄ね」

「そんな方とまさか、こういう形でお逢いできるとは思っておりませんでした」

「へえ…あるんだねえ、そういうこと」

「運命っていうのかな?」

はるかめぐみは、ちよつと大袈裟に騒ぎ立てた。

「どうなんでしょうか…。実は、もうひとつございまして…。こちらはいささか『こじつけ』ではあるのですが」

「はい?」

「私は非公式ではありますが『東條希』と『星空凜』と3人で『リリーホワイト』というユニットを組んでいたのですが」

「リリーホワイト?」

「はい。それで高野さんのお名前が『梨里(りさと)』さん…あだ名が『リリ』と呼ばれているとお聴きしまして」

「『リリー』と『リリ』…。面白いわね」

「それはさすがに…こじつけだろ?」

と高野は笑った。

しかし、内心…

…いや、これが本当に運命で、そんな理由がオレたちを引き寄せたとしたら…

…親父、何者なんだ? って話だよ! …

…ってことは、彼女がオレの運命の人? …

20年間明かされていない自分の名前の由来に、常々疑問を持っていた高野。

そんなバカと思いつつ、もしかして…と、一瞬心が揺らいだのだった。

くつづく

そして誰も…

「…ところで、高野さん、お具合はいかががでしょうか…」

高野は『いいように見える?』とさつきまでなら答えていたが、訊いてきたのは園田 海未だ。

さすがにそうはいかない。

冗談を真に受けそうだ。

「絶好調です」

と答えた。

それを見てクスツと笑ったのはつばさ。

『格好つけて…』と言いたげだ。

「ですが、先程、元気ではないと…」

「ウソ、ウソ！元気、元気です！だって、この病室に『あの』水野めぐみと星野はるかがいるんですよ。それだけでも驚きなのに、そこに園田さんみたいな美人が加わってるんだから、元気にならない方がおかしいですよね!？」

「ひとり忘れてない?」

つばさはスツと左腕を、高野の眼前に差し出す。

指先はデコピンの発射準備がされていた。

「えっ? あっ! ……も、もちろんチョモ…じゃない、夢野つばさも入ってるよ」

高野は慌てて一言付け足した。

「いやあ、暑い、暑い！」

「ねえ？窓、開けようか？」

「えっ？」

つばさと高野が同時に声をあげた。

「確かにさつき『照れなくてもいいですよ』…とは言いましたけど」

「そんな、見せつけなくてもいいじゃないですか」

「な、なに言ってるのよ、ふたりとも…。そんなつもりは…」

「あ、ああ…そんなつもりは…なあ？」

「う、うん」

「はい、はい。ごちそうさまです」

…!!…

めぐみのこの一言に『鈍感な』海未は、ようやく気付いた。

…高野さんとつばさんは…なるほど、そういう関係だったのです
ね…

…いえ、そんなことは、わかっていたハズですが…

…なんででしょう…

…この切ない感じは…

海未は少しだけ、キュツと胸が締め付けられたような気がした。

しかし、それはすぐ、彼女たちに掻き消される。

「やっぱり、私たち、来なかった方が良かったですかね？お邪魔みたい
ですし」

「ちよつと、めぐみ！」

「帰ろっか？」

「はるか！」

「じああ、失礼しまゝす」

「高野さん、お大事に！」

アクアスターの2人は、揃って病室を出ようとする。

「待って、待って！」

と小走りにあとを追うつばさ。

めぐみとはるかが、その声に立ち止まると、つばさは勢い余って2人を巻き込みながら…そのまま『ドン！』と音を立てて、壁にぶつかった。

間、髪入れず病室のドアが開く。

「高野さん!!…のお見舞いの方々!…いくら個室だからって騒ぎ過ぎですよ！」

看護師は、人指し指を立て『お静かに』と示した。

「す、すみません…」

項垂（うなだ）れるシルフィード。

一瞬、静寂。

その沈黙を破ったのは、海未だった。

「ぶふっ！」

「園田さん？」

「はっ！す、すみません…。なんだか、今のお三方がとても可笑しくて。皆さん、大スターなのに、子供みたいだっものですから、つい…すみません…」

「良かった笑顔を見せてくれて」

「えっ？つばささん…今、なんと？」

「今日、ここに来て、初めて笑ってくれた」

「うん、うん。園田さんって、ステージの時にはあんなにイキイキしてるのに、普段は物凄くストイックな人だ！…とは聴いていたけど…今も変わらないんですね」

「そのギャップが魅力なんでしょうけど」

「でも…思い詰めちゃダメですよ！…って、私が言う話じゃないか」

「はるかさん…めぐみさん…」

「そうそう、2人の言う通り。この人も暗い雰囲気なんか望んでないし」

「だけど、看護師さんに怒られるほど騒いでもいいとは言っていないぞ！」

と高野。

「ふふふ…それはゴメン！謝るわ」

「ゴメンね、ゴメンねえ！」

はるかが、突然、栃木弁をネタとする漫才師のギャグを口にした。

「…」

「…」

「…」

「…」

「ブフッ！」

再び、海未の笑い声が、部屋に訪れた静寂を切り裂いた。

それを皮切りに、めぐみが、つばさが…そして高野が笑いだす。

「ちよつと、園田さん！」

「す、すみません！急に静かになったものですから…」

「今のは、はるかが悪い！」

「私？」

「このタイミングで、そのギャグやる？」

「逆にあそこしかできないギャグでしょ？」

「だからって」

「うふふふふ…」

「園田さん？大丈夫？」

「は、はい…皆さん、面白いですね…ふふふふふ」

「ツボに入っちゃった？」

「高野さん!!…お・し・ず・か・に！」

再び看護師がドアを開けて、病室を覗き込む。

先程より、一段、表情が厳しくなっていた。

「すみませくん…」

病室の5人は囁くように、謝罪した。

それがまた可笑しくて、今度は全員が、声を押し殺して、クスクスと笑った。

海未はこの空間に、少し『居心地の良さ』のようなものを感じ始めていた。

それは、sとして活動していた頃の、騒がしくもキラキラした時間、一瞬戻ったような気がしたからだ。

今ではかなり落ち着いてしまったが、当時の凜やかに、真姫は毎日のようにからかい、からかわれ、賑やかに1日を過ごしていた。

今、目の前で繰り広げられたのは、まさにそんな光景。

…第一線で活躍されてらっしゃるだけのことはありませんね…
…私たちとはパワーが違います…

海未とつばさは同じ年、めぐみとはるかとはひとつ下のハズなのだが、すっかり隠居した老人が如く、心の中で呟いた。

シルフィードの3人となんとなく打ち解けた海未は、高野を交えてしばし雑談をして時間を過ごす。

どれくらい経っただろうか…

「そうだ！このあと、園田さんも一緒に壮行会に来ませんか？」

はるかは脈絡もなく、突如、そんなことを言い出した。

「えっ!？」

「あ、それナイスアイデアかも！別に構わないですよね？」

めぐみがつばさに伺いを立てると

「もちろん！」

と、二つ返事でOKを出した。

「ですが、ご迷惑では…」

「大丈夫ですよ。壮行会…って言っても、そんな大袈裟な話じゃなくて、3人で食事するだけですし…」

「場所は抑えてあるけど、別に料理とかは頼んでないので、今からでも全然問題ないですよ！」

「しかし…」

「遠慮はいらないわ。何か特別な用があるなら別だけど…」

「いえ、そういうわけでは…」

「実は、A—R—I—S—Eも呼んでるんで…」

と言い掛けて、はるかは慌てて自分の口を、手で塞いだ。

しかし、時すでに遅し。

「えっ!？」

驚いたのは海未だけでなく、つばさもだった。めぐみは少し呆れた顔で、はるかを見ている。

「はるか、そんな話聴いてないんだけど…」

「内緒の話だったんですけど…言っちゃった…」

「A—R I S Eが来るんですか?」

海未が訊く。

「誘ってはいるんですけど、来られるかどうかは…。収録が押さなければ、間に合うんじゃないかな?」

「そうですか…」

「…というので…つばさんは、聴かなかったことにしておいてください。それでA—R I S Eが来たら『えく、知らなかった!ありがとうございます』みたいな『てい』で」

「いやいや、それは無理があるって。私はさくらじゃないから、そんなお芝居はできないわよ」

「うう…」

「A—R I S Eですか…会えるのであれば、会ってみたいですわ…」

「そうですよね!？」

はるか、自分の失言に喰い付いてきた海未に『意を得たり!』と笑みをこぼす。

「はい…」

「…じゃあ、OKということ。まだまだ話し足りないから、続きはまたあとにしましょう!」

「本当によろしいのでしょうか?」

「どうぞ」

「ありがとうございます。では、お言葉に甘えて、ご一緒させて頂きませう」

「…というわけで、そろそろ行くね…」

つばさが高野に声を掛ける。

「えっ？あ、ああ……自由に」

と返答したものの、彼の表情は寂しそうだ。

「すみません、高野さん。お見舞いにきたハズだったので……」

「構わない、構わない。滅多にない機会なんだろうから、楽しんできてね」

「はい。あ、あの……」迷惑でなければ、明日もお伺いさせて頂きます」

「迷惑ではないけど、無理はしなくていいよ。自分の生活を優先して」

「はい」

「じゃあ、行きましようか!!」

はるかにはツアーガイドのように『エア』で旗を掲げると、お大事にと言い残し、病室を出ていった。

めぐみが：つばさが：そして最後に海未があとに続く。

海未は室内を振り返ると、深々とお辞儀をして、静かにドアを閉めた。

……うむ……

……祭りのあとの静けさとは、まさにこのことだな……

……夢のような時間が終わってしまった……

……身動きの取れないオレが、4人の美女に悪戯される……という展開を期待したんだが……

……世の中そんなに甘くないな……

高野は誰もいなくなった病室の中、ひとりベッドの上で、自分のバカさ加減に呆れ返ったのだった……。

くつづく

ONとOFF

シルフィードの3人と海未はタクシーに乗ると、病院からさほど離れていない、飲食店が立ち並ぶ繁華街と出向いた。

はるかが先頭を歩き、ビルの地下にある隠れ家的な店へと到着した。

看板には『Rosso Nero Bianco (ロツソ ネロ
ビアンコ)』と書いてある。

どうやらイタリアンの店らしい。

「予約した『鈴木 萌絵』です」

はるかを出迎えた店員に伝えた名前は、彼女の本名だった。

「いつもありがとうございます。お待ちしておりました」

入った店はシルフィードとして馴染みの店らしく、店員も誰だかは知っているようだったが、だからといって騒ぐことも、特別扱いをすることもなく、淡々と席へと案内した。

はるかが予約した個室は、8人が座れる席だった。

「ふふふ…あとから誰か来ますよ…ってバレバレじゃない」

つばさが笑いながら突っ込むと

「…ですね…」

とバツが悪そうに、はるかは舌を出した。

A—RISEが来ていないので、4人は固まって座る。

主役のつばさは上座の奥に、その対面には『ゲスト』の海未、つばさの隣にめぐみ、その前に本日の幹事であるはるかが位置した。

「先にお飲み物を…」

案内をした店員が4人に尋ねる。

「綾乃さん、飲みます?」

幹事らしく、はるかが取り仕切る。

「今日はやめておくわ。オレンジジュースで」

「園田さんは?お酒:スパークリングワインとかありますよ?」

「いえ、私もオレンジジュースで結構です」

「飲めるなら遠慮しなくてもいいんですよ?」

「いえ…」

「そうですか…。かのんは?」

「私も同じので」

「じゃあ、オレンジジュースを4つ。それと…これと、これと…これとこれ!全部、人数分で」

はるかがメニューを見ながら、迷うことなく、手早く料理を注文すると、店員はオーダーを復唱して、部屋をあとにした。

「『はるか』さんは『萌絵』さん…とおっしゃるのですか?」

海未は店に来た時に、はるかが店員に告げた名前を思い出した。

「はい!あ、そうですね…急に誰?って話ですよね…。基本的にプライベートな時間は、本名で過ごしてるんです」

「ちなみに私は『かのん』です」

「私は『綾乃』よ」

「私は『海未』です」

「知ってる」

「知ってます」

「はい、知っていますよ」

3人から突っ込みが入る。

「あ、いえ、皆さんが下の名前で呼ばれるなら、私も海未でいいです…と言いたかったんですが」

「ああ、そういうことですか。『園田 海未』っていう芸名があつて『園田 海未』って本名があるのと…」

「園田 海未役の園田 海未』的な…ね？」

「なっ！はる…いえ、萌絵さんも、かのんさんも

、なぜそんな話を！」

「μ，sフアンなら常識ですよ！」

「『μ，s伝説』に載ってますし」

「『μ，s伝説』？」

「あれ？知りませんか？誰がまとめたかはわかりませんが、μ，sの歴史から、楽曲、メンバーの裏話等々をまとめたwebサイトです」「聞いたことはあります…。ですが、見たことは…」

「へえ、そうなんですか。でも、案外、そういうものかも知れないですね。自分たちのことは自分たちが一番よく知ってますから…いちいち過去のこともなんて見ないですよね…って、じゃあ…今の話は本当なんですか？一種の都市伝説みたいなものかと思ってましたけど…」

「えっ？あ、はい、いや…その…はるかさ…ではなくて…萌絵さん…」「無理しなくていいですよ、はるかでも全然平気ですから」

「すみません。それで、その…ええ、確かに、昔、そんなことを言ったかと…」

「ふふふ…意外と天然なんですね？」

「こら！萌絵！それは海未さんに失礼だよ」

「いえ、そうかも知れません」

「あの…海未さん」

「はい、なんでしよう、かのんさん」

「ずっと気になってたんですけど…もつと、肩の力を抜いてくださいいな。私と萌絵は年下ですし、そんな敬語で喋って頂かなくても…。つて、私たち、そんなに緊張させてます？」

「そんなことはごいません！むしろ、こんなにも距離を詰めて頂いているのに…。ですが、私はμ，sの中においてもこういう感じなので…決して特別ことではないのです！」

「なるほど…噂通り、本当に大和撫子なんですね…」

「穂乃果にもよく言われるんです。真面目すぎるとか、堅すぎるとか。ですが、これはもう、生まれ持った性格でして、今更に変えられないのです」

「いいんじゃないかな、それで」

「つばささ…失礼しました…綾乃さん…」

「いいのよ、訂正しなくても」

綾乃は軽く微笑んで、話を続けた。

「海未さんみたいな人がいたから、μ s はあの人数でも、ひとつにまとまったんでしょ？それは海未さんに人望があったからだと思うわ」
「そういつて頂けると、少し救われます。時おり、自分で自分が嫌になるときがあるんです。もつと楽になればな…」

「息抜きは必要ですよ。だから、今日は楽しくお喋りしましょう」

「かのんさん…。はい、ありがとうございます！」

海未の顔が、パツとほころんだ。

「ところで、皆さんは芸名と本名を使い分けるのは、大変ではないのでしょうか？」

「そうねえ。大変ではないかな？逆にON/OFFの切り替えができるというか…」

「当然メリット、デメリットはありますよ。本名で生活するのって、すべてがバレちゃうわ けですから。でも、だからこそ、下手なことができないってこともあるし」

「それなりの緊張感をもって暮らしてるよね？」

萌絵がそう言うと、綾乃もかのんも、首を縦に振った。

『仕事以外は本名』

これは事務所の…というより、事務所の社長の『原』の方針なのだが、一般生活において『芸能人』であることを理由に、特別優遇されるようなことがあつてはならない…というものだった。

芸能人だというだけでチャホヤされるのは、本人の為に良くない。

特に若いうちは実力も経験もないのに、周りに流されて、自分を勘違いしてしまうから気を付けなさい」と、厳しく教育されてきた。

長らく芸能界を見てきた社長の原にとって、才能がありながらも、天狗になり、若くして金や酒、クスリ、異性関係などで身を滅ぼした人間を山ほど知っている。

自身の事務所からだけは、そういった人間を出すまいと心掛けてきた。

だから、浅倉さくらについても『芸名を付けてあげれば良かった』と後悔してしていたらしい。

彼女の名前は本名なのだが、あまりに芸名っぽかったので、当時はそれはそれでいいだろう」という判断だった。

しかし、どこにいくにも、なにをやるにも、その名前について回る。本人にそのつもりはなくても、周りが気を遣う。

今で言うところの『忖度』だ。

結果、仕事とプライベートの区別がつかなくなる。

幸い彼女は、名前を誇示して公私混同をするようなタイプではなかったが、このことを教訓に、綾乃以降のタレントについては芸名を与えることとした。

名前を使い分けることで、スイッチの切り替えができるのが、このことの一歩のメリットだろう。

もつとも、プライベートだからと言って（芸能人としての）緊張感がなくなっているか…というのは、また別問題である。

こういう時代だ。

いつ、どこで、誰が、何をして、どうなったかなんて、芸能リポーターやパラッチでなくても、簡単にネットやSNSに曝すことができる。

それは芸能人である、ないに関わらず、プライバシーの侵害という問題とどう向き合っていくか…という、もつと大局的な話になるのだ

が…。

「そういうことですか。わかる気がします。私は弓道を嗜んでいるのですが、ジャージで弓を持つのと、袴を身に付けて弓を持つのでは、全然集中力が違います。つまり、そういうことなのですね？」

「うん、多分そうです」

「多分って」

と、かのんが笑う。

「いきなり弓道が出てくるとは思わなかったから」

「す、すみません」

「だから、謝らないでください」

「すみません」

「ほら！」

「あっ！」

「ふふふ…海未さんて、本当に生真面目なんだね」

「はあ…」

「これでステージに立つと投げキッスとかしちゃうんだから、海未さん、素敵すぎます！」

「萌絵さん…いや、それは…お恥ずかしい…」

海未の顔はみるみる赤くなった。

「失礼します」

店員が、飲み物と料理を運んで、テーブルに並べていった。

「それでは、皆さん、グラスを持って…えへん！…我らが夢野つばさのオリンピックメダル獲得祈願と、ムsの園田 海未さんとの出会いを祝して…」

「カンパ〜イ!!」

はるかが音頭を取り、4人はグラスを合わせた。


~~~~~

## リスペクト

「それにしても、オリンピック代表かあ。信じられないよね」

「日本代表だもんね」

萌絵とかのんはピッツアをむしやむしやと頬張りながら、綾乃の顔を見る。

「そんな食べながら言われても、全然敬意が感じられないんだけど」

と苦笑いしながら綾乃。

「そうなんですよ。ここにいる綾乃さんと、サッカーやってる夢野つばささんは別人ですから」

「ユニフォーム着てる夢野つばささんは、話し掛けづらいもんね」

「そんなこと言ったら、あなたたちだって。何度かライブ前に楽屋に行ったけど、ピリピリしてて…特に星野はるかの緊張感なんて、ハンパじゃないじゃない。お互い様でしょ」

「そうなのですか？」

「なにがです？」

「いえ、そういうことには無縁の人なのかと」

「普段はね。でも、実は3人の中で、一番、気性のアップダウンが激しいのが、星野はるかなんです。落ち込んでる時なんか、近寄れないですもの。闇の世界に引きずり込まれそうで」

「あははは…」

かのんの言葉に、萌絵は照れ笑いを浮かべた。

…人は見掛けによらぬものですね…

「海未さん、どうかした？」

「いえ、かのんさん。少し安心したというか…。皆さん、芸能界の第一線で活躍されてらっしゃっているのに、でも、根本の部分では、私た

ちとそう変わらないのかと思ひまして」

「変わらないよね？」

「うん、変わらない。ただし、この人だけは別ですけど」

「私？」

綾乃が自分を指差す。

「やっぱり、あり得ないですよ。モデル ↓ アーティスト ↓ オリンピック選手だなんて」

「違うのよ。オリンピック出場は幼い頃からの夢だったのよ。その時はバレーボールだったけど。それが、ちよつと寄り道して、違うことを経験させてもらつて…って話。だから、こつちが本来の自分なの」

海末も粗方、綾乃の歩んできた道は知っている。

彼女がオリンピック代表に決まった時、連日のようにその報道がなされていたので、逆に知らない人の方が少ないだろう。

「何が凄いつて、モデルもアーティストも、本意でなかったとか言いながら、サラツとこなしちやう才能が凄いやね？」

「それも一回はトップに登り詰めてるんだから、なお」

「それは周りの人たちに恵まれただけ。私の力だとは『これっぽっちも』思つてないわよ。モデルの時は、さくらと組ませてもらったからこそその人気だし…シルフィードだつて、あなたたちがいてくれたからこそだもの。正直、ソロでデビューしてたら、今、私はここにいなかったかも知れない…」

「縁…ですね…」

海末はその言葉を噛み締めるように呟いた。

「縁…タイミング…そうね。本当にそう。あの時、ああだつたら…この時、こうだつたら…つて考えると…人生、どこでどう変わつていたか、わからないものね」

「はい…私も穂乃果が『スクールアイドルを始める』などと言わなければ、あのような経験は一生しなかつたでしょうし…」

「梨里(りさと)がね…前に面白いことを言つてたわ。例えばサッカーでプレーしてて、ここでパスすべきか、ドリブルで仕掛けるべきか、あるいはシュートを狙うべきか…。そのワンプレーの判断はほんの一

瞬のことで：もしかしたら、どれを選択しても、その時はゴールに結び付かなかったかも知れない：結果は同じだったかも知れない。だけど、そのどれかを選んだかによって、数分後の結果は変わるんだって」

「難しい話ですね」

「哲学的ですね」

萌絵とかのんは揃って首を傾げた。

「面白い話だと思います」

「わかる？」

「はい。私たちは、いつ、何時であつても、何かを選択しながら生きていくということですよね」

「正解！例えば、このオレンジジュース：これを飲もうと飲むまいと、人生が大きく変わることはないと思うでしょ？」

「はあ…」

萌絵は、不思議そうな顔をして、綾乃を見た。

「でも、ジュースを飲んだら、トイレに行きたくなつて、この部屋を出たら、素敵な人に出逢つた：とか、あるかも知れないでしょ？逆に飲まずにトイレに行かなかつたら、その出逢いはないままで終わるの」

「まあ、わからなくはないですけど」  
「逆もありますよね？部屋を出なかつたからこそ、得をした：みたいな」

「あるかもね。それが運命の分かれ道でしょ？だけど、そんなことは誰にもわからないこと：予想つかないことじゃない。確かに人生において、自分自身で大きな決断を迫られるときがあるけど、そうじゃなくて、日常生活においても、何を選ぶか、どう行動するかで、一分、一秒：運命って変わってるんじゃないかと思うの：って、梨里の受け売りなんだけど」

「なるほど、仰る通りですね。私は穂乃果に誘われて、sを始めましたが、そもそも穂乃果がそんなことを考えなければ、誘われもしなかつた：ということですよ」

「でしょ？私だって、母と一緒に買い物に行かなければ、雑誌に写真が

載ることもなかったし、それがなければ、モデルになんてなることもなかったんだから」

「そう考えると、一言で運命って言いますが、自分でできることなんて、タカが知れてますね」

「だから、私はあなたたちこそが凄いなと思うんだ。歌手になりたい！って夢を、そういう運命に流されずに、ちゃんと叶えたんだから」  
「ブホッ！」

突然、誉められた為か、萌絵はジュースを飲もうとして噎（む）せた。

「大丈夫？」

「…じゃないです…ああ、びっくりした…」

「どうしたの？」

「今日は夢野つばさの壮行会ですよ！私たちが誉められても…って話です」

「いいのではないでしょうか！お互い尊重し合える仲ということですよ。素敵だと思いますよ」

「まあ、そうですね。私も綾乃さんのことは、本当にリスペクトしてるんです。さつき、縁だとかタイミングだとか言っていましたけど、本人の努力なくしては、絶対、成功しなかったと思うし」

「それはね、かのん…みんな努力はするわよ」

「そうかも知れないですけど、ちゃんと実を結ぶ努力をしてた…ってことです」

「さらに言えば、サッカー選手になって、日本代表になるなんて…やっぱりどう考えてもあり得ないですよ」

「確かに。話は戻りますけど、ここにいる綾乃さんは、私たちの仲間でもあり、お姉さんでもあり…。だけど、サッカー選手 夢野つばさは、スターとしか言いようがないんです。別格の存在なんです」

「プッ！ちよっと誉めすぎじゃない？」

「だって、今日はそういう会なんですから」

萌絵は事も無げに言った。

「ん？」

「もちろん、本心です！本心！」

慌てふためいて取り繕う姿を見て、3人が笑った。

「ところで、サッカーの方は…メダル獲れそうなんでしょうか？」

海未は一転して、心配そうな表情で質問を切れ出した。

「世間では『死の組』などと言われていますが」

「一戦必勝…これしか言いようがないわね。正直、苦しい組に入ったのは間違いないわ。ブラジル、フランス、南アフリカ…全部ランキングは日本より上だしね。だけど、それはあんまりアテにならないかも。女子は力が拮抗してるし…とにかく、一戦一戦、全力でプレーするしかないわ」

「緊張とかしないのですか？私など…弓道は個人競技ですが…思うように力が出せないことが多々あります。それなのに、個人でなく国を背負うなどは…とても考えられません」

「まだ、そこまでは…。別に国を背負うなんて、考えてないけどね…でも、どうかな？実際にピッチに立ったら、足が震えちゃうかも…わかんないな…」

「でも、予選とかで、何万人のサポーターの前で試合してるじゃないですか？大丈夫ですよ」

「だといいんだけど…こればかりは私も初めての経験だから…」

「そうですね。こういう時、私たちはなんと言えば良いのでしょうか…。頑張れというのも失礼な話ですし」

「いいわよ、頑張れで」

「はい、そう仰るなら！日本の為とかではなく、是非、綾乃さん…夢野つばさのやりたいサッカーをしてきて下さい！現地には行けません、日本から応援させていただきます！」

「ありがとう…そう言ってもらえると心強いわ」

綾乃はテーブルの上で、左手を差し出した。

「それじゃあ、応援、よろしくね！」

「はい！全力で応援します！」

海未は、綾乃の手を強く握り返す。

ふたりは手だけでなく、目でも握手を交わしていた。

「ゴメン、遅くなったわ…もつと早く終わるはずだったん…えっ…園田…さん？…」

海未と綾乃が、心を通い合わせているところに、個室の戸がスツと開き、姿を現したのは…

A—RISEだった。

「ご無沙汰しております」

海未は緊張の面持ちで、綺羅ツバサと、優木あんじゅ、統堂英玲奈と顔を合わせた。

反対にその3人は、驚きの表情で、海未を見つめた。

くつづく

## つばさ×ツバサ

「えー、なんで、あらいずが!?もしかして、わたしのために、きくれたの?うれしい!」

「プツ!綾乃さん、それはさすがに棒読みしすぎじゃないですか?」

「あははは…それは、あなたが悪いんでしょ?先に『来る』って教えちゃうんだから…」

「そうなんですけどね、もう少し、上手にやりましょうよ…って、なんか逆に向こうがビックリしてますね…。綾乃さんへのサプライズが、AIRISEへのサプライズになっちゃった…」

「どうして園田さんがここに?」

「はーい!私が呼びました!」

綺羅ツバサの問いに、萌絵が手をあげて答えた。

「はるかさんが?」

「詳しいことはあとにして…まあ、座ってくださいいな」

「あ、今、場所を空けますね?」

かのんが自分のグラスと皿を持って、席をズレた。

「いや、そんなことをしなくても…私たちはここでいいわよ」

ツバサは元々空いていた席を指し、かのんにそう言ったが

「まあまあ…」

と半ば無理矢理腕を引っ張られ、イスに座らされる。

あんじゅと英玲奈も同様のことをされ、並び順は…綾乃(つばさ)、ツバサ、あんじゅ、かのん(めぐみ)…反対側に海未、英玲奈、萌絵(はるか)となった。

店員に飲み物を訊かれ

「同じのでもいいわ」

とツバサ。



あんじゅと英玲奈もそれを頼む。

萌絵も、自分たちの分がなくなつたから…と追加注文をした。ほどなくして、7人分のオレンジジュースがテーブルに運ばれる。

萌絵が全員にグラスが行き渡つたのを確認すると

「それじゃあ、改めて：『夢野つばさ、オリンピックでメダル獲つてこないと、許さないぞ！の会』を始めます。カンパニー!!」

と、再び音頭を取った。

「カンパニー！」

「…って、そんな名前の会だつたっけ？」

「はい、綾乃さん。シルフィードの活動を休んで、これに懸けてきたんですから、それはメダルを獲つてきてもらわないと…ねえ？」

「萌絵の言う通りです」

「うん、まあ、やるだけのことにはやるわよ。それより、A—RISEの皆さん、わざわざ、ありがとうございます」

「他ならぬ、シルフィードの夢野つばさの壮行会なもの？それは来ないわけにはいかないでしょ？」

ツバサは綾乃にそう告げた。

シルフィードとA—RISEの関係は、少し複雑だ。

年齢でいうと、上から：A—RISE、夢野つばさ、アクアスターという順になる。

一方、芸能界のデビューは早い順から夢野つばさ、アクアスター、A—RISE。

綺羅ツバサたちは一番後輩だ。

さらに夢野つばさは、カリスマモデル『AYA』として、A—RISEがデビューする3年も前から活躍していた。

彼女たちからすれば、年下ではあるが芸能界の『大先輩』と言える。

そういう事もあり、夢野つばさとA—RISEには、少し『距離』がある。

アクアスターの2人ほど親密とはいいがたい。だからこそ、今日、3人が来るといするのはサプライズだったのである。

実は、夢野つばさとA—RISEが会うのは、これが3回目だった。それは『つばさが音楽活動を休止したのと入れ替わりで、A—RISEがプロデビューしたから』であり：つまりアクアスターの2人とは何度も競演しているものの、つばさと絡む機会がなかったからである。

仕事で一度。

音楽のイベントでアクアスターを激励に訪れた時に、楽屋で居合わせたことが一度。

それ以外に：すれ違った：くらいことは、あるかも知れないが、ほぼその程度だ。

その唯一の仕事は、音楽雑誌の企画『シルフィード×A—RISE』の対談で：それも、つばさが『サッカーに専念するから』とオフア—を断り続け：オリンピック出場が決まってから、昨年末によくやく実現したものだだった。

話題は、お互いの音楽感や衣装・ステージのこだわり、休日の過ごし方から趣味の話まで多岐に及んだ。

進行役のライターが、それぞれの印象について訊ねると：シルフィードはA—RISEがデビューする前から、注目していたことを打ち明けた。

そして、自分たちと同じジャンルでないことにホツとした：と素直な気持ち語った。

A—RISEも、シルフィードと同じような印象を持っていたよう

だ。

ただし、世間に知られるようになったのは、A—R—I—S—Eの方が少しあと。

それ故、かなり苦勞もしたらしく、今まで明かすことのなかったエピソードを、初めて述べた。

例えば…3人の風貌がシルフィードの3人と似ていたことから、彼女たちのモノマネを強要されることもあったらしい。

「私たちの方が先に生まれてるのに、なんでシルフィードのマネとか、二番煎じって言われなきゃいけないの？」

とえらく立腹したそうだ。

ツバサはツバサで、名前に関して

「（夢野つばさ人気にあやかっ）お前もツバサかよ…」  
みたいなことを随分言われたという。

その度に

「向こうは芸名、私は本名なの！と反発していたのよね」  
…と笑った。

だが

「私たちは私たち。自分たちの歌を、ダンスを突き詰めていこう！」  
という想いが、今に繋がっている…とも語った。

その上で

「シルフィードは年上とか年下とか、そういうことは関係なく、尊敬すべきアーティスト。ジャンルこそ違い、私たちに刺激を与え続けられる、大切な人たち」

との言葉を残している。

更に

「夢野つばさは芸能界においても、スポーツ界においても、唯一無二の存在であり、同じ名前を持つ者として心から応援している」

とツバサは言った。  
それは社交辞令ではない。  
彼女の本心だった。

「いつか6人でステージに立てたらいいね」

対談の最後は、そんな一言で締め括られた。

その6人が、ステージではなく、イタリアンの店で集まろうとは、その時は誰も想像しなかった。

綾乃が事前に知らされたとしても、A—RISEの参加は、サプライズに間違いなかったのだ。

「オリンピックかあ…凄いわね…」

「ああ、何故かわからないが、こっちが緊張してしまう」

あんじゅは少しアンニユイに、英玲奈はやや男言葉で…その喋り方は昔から変わらない。

「どう、調子は？」

『ツバサ』は横にいる『つばさ』に問い掛ける。

「可もなく、不可もなく…ですね。本番にピークを持っていきたいので、これから徐々に」

「なるほど」

「明後日から合宿なので、リラックスできるのは、今日までって感じですよ」

「そう…。そんな大事な時に呼んでもらって、逆に光栄だわ」

「メダルは保証できないけど…精一杯暴れてきます」

『藤綾乃』じゃなくて『夢野つばさ』で出るんだから、世界に『羽ばたいて』ほしいわ。私もいつか絶対に世界に羽ばたいてみせる！でも、その前に…頼むわよー！」

「はい、頼まれました！」

綾乃はツバサの言葉に、敬礼をして答えた。

「折角なら、園田さんとアクアスターで、応援歌を作ってあげたらどうだ？」

「えっ？私が…ですか？…」

英玲奈の唐突な提案に戸惑う、海未。

ツバサもあんじゅも…シルフィードの3人も、驚いて彼女の顔を見る。

『何故、ここににいるか？』の理由は、まだ聴いていないが、稀代の名作詞家がこの部屋にいる。ギターリストも、キーボーディストもいる。壮行会ならそれくらいのプレゼントをしてもよいのではないか？

「なるほど…それは面白いですね。英玲奈さん、ナイスアイデアです！」

「た、大したことではない…」

萌絵に誉められ、英玲奈は顔を赤らめた。

「それでしたら… タイトルは『Winning Wings』などというのは、いかがでしょうか？」

「早っ！」

「もう、できたんですか？」

「いえ、萌絵さん、かのんさん…できた…というよりは降りてきた…というところでしょうか」

『Winning Wings』…勝者たる翼…か。夢への翼が、夢じやなく現実のものとなり…さらにオリンピックでメダルを目指し、勝利をもぎ取る…『つばさ』にピッタリのタイトルだ」

「韻を踏んでて、語呂もいいわね」

「さすが、園田さん。まったくブランクを感じさせない」

「恐縮です…」

「ところで、はるかさん。『何故、園田がここに？』…の説明はいつしてくれるのかしら？」

綺羅ツバサは核心を突いてきた。

「すみません、本来、私は参加する資格などないのですが…」

「園田さん、誤解しないでほしいわ。居てはいけない…という意味ではなくて、私たちが最後に会ったのは、もう3年以上前だったから…今、目の前に入るのが、嬉しくもあり、懐かしくもあり…。実は色々な感情が溢れだしてきて、少し興奮しているの！訊きたいことも、山ほどあるし」

「右に同じ」

「私もだ」

「ツバサさん…あんじゅさん…英玲奈さん…」

…なんか私、出る幕ないかも…

萌絵は4人の様子を見て、心の中で呟いた。

くつづく

残りの1割く2割…

海未がこの会に参加していることについて、簡単に萌絵とかのんが説明した。

「色々、驚いたわ。つさばさんと『その人』が、そういう関係にあったこととか…その事故に巻き込まれたのが『本当に』園田さんだったこととか…シルフィードとμ、sのこととか…」

「まったくだ」  
ツバサの言葉に、英玲奈が相槌を打つ。

「サプライズだらけね」  
あんじゅも、ゆっくり脚を組み替えながら同意した。

『事故』については、大々的に報じられた為、サッカーに興味がない人でも知っている。

当然A—RISEも承知していた。

それと同時にネットで目にした『元μ、s 園田海未』の名前。  
一時は『重症である』とか『死亡した』とかの情報が流れ、3人も動揺が走った。

しかし、すぐにそれは『ガセ』だとわかり、胸を撫で下ろしたのだった。

だから今『本当に』現場に居合わせ、そういうことになっていた…という事実を聴かされて、彼女たちは少なからず衝撃を受けているのである。

「じゃあ、ネットの情報もあながち嘘ではなかった？…」

「そこに居た…ということ以外は、全部嘘ですが…。実は、私も一緒に病院に運ばれており…その方が高野さんであったことや…私の名前が出ていることは、あとから知ったのです」

「当事者よりも、部外者の方が情報が早いなんてね…」

綾乃は顔を顰（しか）めた。

「余計なことをする者がいるものだな。…今は、園田さんの名前だけでなく、μ sのメンバー全員、名前が…」

「英玲奈！」

「あつ！…」

その発言を嗜（たしな）めたのは、あんじゅだった。

「す、すまん…」

「いえ…。μ sのメンバーに迷惑を掛けてしまっているのは、申し訳なく思っております」

「何を言ってるのよ。それとこれとは話が別でしょ？まずは無事で何よりだったじゃない」

「ですが、ツバサさん。その代わりに高野さんが…」

海未はチラリと綾乃を見た。

「本当になんと申し上げたらよいのやら…」

「…つて、思い詰めちゃうと、精神衛生上良くないんじゃないかなあ…つてことで、実は今日の壮行会は『高野さんの彼女』である『綾乃さん』が誘ったんですよ」

萌絵が綾乃に顔を向けた。

「えっ？綾乃さんが？萌絵さんからお声掛けを頂いたじゃないですか…」

「そうなんですけどね…発案者は綾乃さんなんです」

「そうだったのですか！」

「まあ…梨里はああいう性格だから、病室で暗い顔してても仕方ないしね。それに、ほら…私が誘っても、逆に海未さんが気を遣うでしょ？だから、萌絵に…」

「でも、私たちが会ってみたかった…つていうのは本当なんですよ！」

「ありがとうございます…」

…綾乃さん、芝居は下手だななんて言っていましたけど…

…すっかり、騙されましたわ…



…それにしても…

海未は自分より辛い立場であろう綾乃の思いやりに、心底感心した。

「そういうことだったの？これで園田さんがいる理由はよくわかったわ」

「意外と世の中は狭いんだな」

「まさか、そんなところで、繋がりがあるとはね」

「はい、私もそう思います」

「それで、園田さんは大丈夫なの？色々大変だと思うけど…」

「高野さんが、とても優しい方で…とても救われております」

「それは海未さんが美人だからよ！」

「えっ？綾乃さん？」

「そうじゃなかったら、あんなに優しくしないし…そもそも助けなかったかも」

「そんな…」

「アイツ、スケベだし」

「高野さんは、そんな人じゃありません!!」

「…えっ？」

その場にいる誰もが耳を疑うような、海未の大きな声。

「高野さんのご両親を見ればわかります！とても慈愛に満ちた、素敵な方でした。息子さんのことを大変信頼されてらっしゃいますし…そして、ご本人もこれだけのことにも関わらず、愚痴も文句も言わず、逆に私のことを気遣ってください…いくらなんでも、うわべだけでできることではありません。人の容姿で命の重さを判断するようなことなど、ありえませんか！あそこにいたのが誰であっても、絶対にそうしていたはずです!!」

「そ、そうね…」

海未の剣幕に、綾乃はそう答えざるを得なかった。

…海未さん、それは買いかぶりすぎよ…

…相手が男だったら、絶対助けてないから…

…と、いいそうになったところを、綾乃はグツと堪えた。

「なんだか、園田さんの方が彼女みたいね？」

ツバサが海未の主張を聴いて、ツツコミを入れた。

「はっ！…すみません、綾乃さん！知ったような口を…」

「別にいいわよ。海未さんがそう思ってくれているなら」

「はい、もちろんです！」

「それなのに、まったく関係ない人たちが、まったく関係ないことで盛り上がってるのは、非常に腹正しい！」

そう憤ったのは英玲奈だ。

「それは…『μ's』vs『A-RISE』のことですね？」

かのんの言葉に、彼女たちは大きく頷いた。

事故が発生してから、まだ1週間と絶っていない。

そんな中、ネットの世界では、ある意味、高野梨里が想像した通りの展開となっていた。

だが、それくらいは高野でなくとも、ある程度予想がつく。

しかし今、現在の状況は…

その想定のはるか斜め上を行っている。  
それこそが、かのんが言った『μ s』vs『A—RISE』なのである。

オリンピックの希望の星が、突然の事故により、意識不明の重体…  
この衝撃的なニュースに、誰もが驚き悲しみにくれた。  
海外からも同情の声が集まった。

それは今でも変わらない。  
集計した訳ではないが、世間の8割〜9割は、彼を非難することはしないだろう。

どう考えても被害者なのだから。

ところが…だ。

どこの世界にも『そうは思わない人間』が少なからずいる。  
仮にそのカテゴリーに属する者たちを『アンチ』と呼ぶとしよう。

彼ら…あるいは、彼女らは、この悲劇の主人公に対して、実に汚い言葉で罵った。

それは高野梨里の活躍によって、最良の選手の出番が奪われた『サポーター』によるもののだろうか。

それとも彼に対する、個人的な恨みを持つ者なのか。  
もしくは、成功者が一転、絶望の淵へと追いやられたことに『悦び』を感じる思考の持ち主なのか。

自分が『名誉毀損や威力業務妨害で訴えられる』ことを、考えることもできない『幼稚な悪ふざけ』なのか…。

そこには、見るに堪えない『誹謗・中傷・罵詈雑言』の言葉が並ぶ。  
『火の無いところに煙は立たぬ』というが『根も葉もない噂』が、平然

と書き込まれていた。

その被害者の筆頭…とぼつちりを受けたのが…

園田海未だった。

くつづく

## 始まったバトル

園田海未に非はない。

それは普通に考えればわかること。

彼女はただ、信号待ちをしていただけだった。

そこに車が突っ込んできて：事故に巻き込まれた。

唯一、落ち度があつたとすれば：その車を、自分自身の力で避けきれなかったことである。

しかし、それさえも、非難の対象にはあたらない。

その局面に陥れば、誰にでも起こりうることである。

彼女の不幸は、その場に居合わせたのが『高野梨里』であつたこと。

そして、自身が『園田海未』であつたこと…。

この2点だ。

マスコミは海未の名前について、一切報道していない。

「…ほか1名が、手や足に掠り傷を負いましたが、命に別条はないとのことだ…」

ニュースとして流れてきた文言は、概ね、こんな感じである。

名前どころか、性別すら報じていない。

それでも、彼女の名前が広まったのは…

現場に海未を知る者がいたからである。

強いて、もうひとつ海未の『不運』を挙げるとするならば、この者がμ、sの『コアなファン』だった…と思われることだ。

日本国内、老若男女、μ、sの名前を『聞いたことある、ない』で言えば、前者の方が多いだろう。

ただし、メンバーの顔と名前まで認識している人は少ない。

現役でないこと…活動時期があまりに短かったこと…そして人数が多かったこと…それらが主な理由だ。

高野も綾乃に、初めて海未の名前を聴かされたとき「人数が多くて、顔と名前が一致しない」と言っていた。

解散から3年余りが経ち（ネット上ではいまだに人気が高いとはいえ）あの状況で瞬時に彼女を『園田海未』だと断定できる者は、知人かファンか、そのどちらかしかないだろう。

その者が、何を意図してそうしたのかはわからない。恐らくは、ただ単に『報告』しただけだと思われる。

たまたま事故を目撃したら、そこにいたのが元々 s の園田海未だった。

それだけの理由。

悪気もなく「有名人（あの、*μ* s の園田海未）を見つけた！」みたいなノリで載せたのだろう。

『報告』が妥当でなければ『自慢』かも知れない。

それが『普通の状況』であれば、まだ許されるだろうが、事故の被害者であることを考えれば、あまりに非常識な行動と言えた。

しかし、その『報告』は瞬く間に拡散する。

そして広まっていくうちに『男と一緒に運ばれた』という『事実』が、根も葉もない噂…デマとなり、そのスピードは加速していった。

まず『高野と一緒にいた』あるいは『彼女のせいで高野が犠牲になった』ということで、彼のファンが海未を責め立てた。

もちろん、当人同士はまったく面識はなかったのだが『一緒に運ばれた』という情報が、勝手に『付き合っている』と『変換』され、その印象だけがひとり歩きする。

ファンというものは、仮に自分の応援する対象に非があったとして

も、素直に認めたくないものだ。

つまり、この場合、怒りの矛先は『この大事な時期に高野と付き合っている、空気の読めない』海未へと向けられたのだ。

事実無根である。

しかし、一度、付いたレッテルは剥がれない。

いつの間にか、2人はカップルにされていた。

海未への攻撃に『アンチ海未』が便乗。

μ, sのファンの中でも、いわゆる推しメンはそれぞれ違う。

海未に好意をもっていなかった者たちが、ここぞとばかりに、彼女のマイナス面を書き込んでいった。

それも、この事故とはまったく関係のないことで…。

逆に『アンチ高野』は、この時期に女と一緒に歩いているヤツが悪い：自業自得だと反論し、これに同調する形で、μ, sや海未のファンが、高野が『海未を奪った』と悪人のごとく騒ぎ立てる。

また、μ, sのメンバーの中では一番『清廉潔白』のイメージが強かった海未に『男の影』が見えたことに対して、幻滅するファンの声もあった。

すでにスクールアイドルでもなく、成人である海未が、誰と付き合いおうと、一般人には関係ないハズなのだが、熱烈なファンというのはそうではないのだろう。

『裏切られた』などの言葉が並ぶ。

それだけならまだマシだ。

中には2人の殺害を仄（ほの）めかす記述もあった。

昔から『恋の病は盲目』などというが、熱心なファンと狂信的なファンとは紙一重だ。

実際にファンというよりストーカーと呼ぶべき輩（やから）が、予告通り：あるいはゲリラ的に傷害罪や殺人未遂を犯しているのだから

ら、看過できない。

海未も

「極力、ひとりでは出歩かないように…」  
と『にこ』から助言を受けていた。

いずれにしても、現実世界で起きたことと、ネット上で語られていることは、事実と大きく乖離している。

大半は、それが誤った情報だと冷静に判断していた。

だが、そんな不毛なやりとりに眉をひそめながらも、それを真剣に正そうとする者はいない。

下手に関われば、逆に執拗に叩かれる。

我、関せず…。

それが今の世の中、一番無難な過ごし方であると言えた。

こうして、この事故をキツカケにした『高野ファン』『アンチ高野』『海未ファン』『アンチ海未』が入り乱れての誹謗・中傷バトルが始まったのだ…。

くつづく



## 混沌とした世界

ネット上のバトルは、当事者のファン、アンチだけに留まらなかった。

『μ, s』という文字が検索ワードで急上昇すると、それまで鳴りを潜めていた『かつての彼女たちのファン』が堰を切ったように書き込み始めた。

一番多かつたのは、μ, sの復活を望む声。

本人たちは『やりきって解散した』のだが、ファンからすると『まだこれからだったのに!』という想いが強い。

(公式ではない)ファンが作ったμ, sの応援サイトなどでは、常にそういう意見はある。

しかし、ここに来て『思い出』として胸にしまっていた者たちの中に『μ, s復活』の文字が降って湧いてきた。

俄然盛り上がる『再結成希望派』。

署名を募る動きまで始まっている。

一方『μ, sのファンではあるが、再結成は反対』という意見もある。

比率にすれば、半々くらいであろうか。

「μ, sは彼女たちが『女子高生』だったことに意味があつて、二十歳を過ぎて『劣化』した姿など見たくない!」

などの理由がほとんどだった。

この議論はなにも、μ, sに限ったことではない。

解散、もしくは活動停止したバンドやグループには、必ず出てくる話題である。

その場合、一般論として、否定派の方が多い。

見た目はもちろんのこと、パフォーマンスのクオリティが『当時とまったく同じ』ということはあり得ず…いわゆる『劣化』によるイメージダウンを怖れるためである。

「こんな姿は見たくなかった…」と後悔するくらいなら、見なかった方がマシというワケだ。

もちろん（海未に非がないにせよ）、今、ここで再結成の話を持ち出すなど、あまりに不謹慎である…という、至極まっとうな意見もある。

高野梨里は意識を取り戻したとはいえ、現役復帰できるかどうかもわからないほどの重症なのだ。

それを差し置いてμ、sの再結成…お祭り騒ぎなど、考えられないという話である。

「このタイミングでμ、sがどうこうは、ひとまず置いておいて…好きだったアーティストの復帰の賛否については…どっちの意見もわかりますね」

と萌絵。

「うん、わかる…。たぶんμ、sに限って言えば『やるからには』中途半端なことほしくないでしょうし、逆にレベルを上げてくると思いますけど、それがファンのニーズに合致するかどうかは別問題ですし…」

かのんがそう言うと、萌絵は二度ほど頷いた。

「私個人としては『大人の魅力溢れるμ、s』も見てみたいんですけどね」

「萌絵さん…」

「あ、いえ…気にしないでください。あくまでも個人的な意見ですから…」

「確かに、今もμ、sを愛してくださっている方がいらしやることについては、幸せと申しますか…それは本当にありがたいと感じております。…ですが…」

「わかってますよ。私たちが同じ立場となったら…やっぱり悩むと思

いますし」

萌絵は、海未の言葉を遮った。

今、その話をすべきでないことは、萌絵もわかっている。

だが、目の前に本人がいる以上、可能性の有無について、訊いてみたくなるのは致し方ないことだった。

「すみません、今の話は忘れてください」

萌絵は、もつと突っ込んで訊きたい気持ちを抑えて、ペコリと頭を下げた。

「問題はメンバーの『プライベートシーが荒らされていること』じゃないかしら…。これはなんとかしなきゃいけないと思うわ」

「そうねえ…。さつき英玲奈が言いかけた時、私は止めただけ…。やっぱり、そこは避けられない…。か…」

「ああ。我々とは立場が違う。早いうちに手を打たないと」

ツバサ、あんじゅ、英玲奈…A—RISEの3人が次々に口にした。

そう、彼女たちの言う通り、ネット上では、sの『復活する、しない』から派生し、各メンバーの現状に対する書き込みが急増している。

『あの人は、今!?!』である。

TVや雑誌の企画ならまだしも、ネットユーザーの推測や伝聞に基づく、無責任な書き込みを、A—RISEの3人は憂いた。

それはシルフィードの面々も同じだ。

そして、そうなったことに関する責任を一身に受けているのが…海未だった。

いや、この場にいる誰もが『彼女に責任がある』…など思っていない。

見当違いも甚だしい。

海未も、周りに諭され、頭では理解しているもの  
「…とはいえ、やはり私がこうならなければ…」  
と堂々巡りのやりとりに陥ってしまう。

『あの人は、今!』的な書き込みは以前からあった。  
なかったわけではない、

それでも、これまででは実害が及ぶことはなかった。

それが、この数日で状況が一変する。

具体的、かつ詳細な情報が明らかに増えている。

今は玉石混淆…。

ニセの情報の中に埋もれていたり『真実を否定する』書き込みがあつたりで、上手い具合にぼやかされている。

だが、見る人が見ればわかる。

そして、同時多発的に別の話題が書き込まれる。

『μ、s 解散の原因は、メンバーの不仲』

誰が言い始めたのか…

これがキツカケで『実は園田海未のシゴキにメンバーが耐えられなかった』だとか『矢澤にこがアイドルに見切りを付けて、裏切った』だとか『誰と誰が絶交状態である』…など、本人たちからすれば、笑ってしまうような情報が、平然と流されている。

加えてμ、s の中にも『アンチ海未』がいるように、各メンバーのアンチが『攻撃的な主張』を繰り広げ、彼女たちを取り巻く状況はカオスと化してきた。

その内容は、μ'sメンバーのみならず、穂乃果や絵里の妹『雪穂』や『亜里沙』にまで及んでいる。かなり危険な状態。

高野は病室から『オフィシャルなコメント』として

「事故に巻き込まれた女性は、自分と一切関わりがない一般人であるため、そっとしておいてほしい」

と、マスコミ向けに発表した。

丁度、今時分、それが公開されているものと思われる。

だが、既に手遅れだ。

ネットユーザーたちの話題は、当事者だけでなく、メンバー…その親族にまで及んでいる。

この状況を鑑みるに、果たしてそのコメントが早く出ていたところで、歯止めが利いたかどうか…。

そして、もうひとつ。

μ'sの復活の話題と共に、盛り上がっているのが『μ'sとA-RISEの実力はどちらが上か?』という、ファン同士の争いだっただ…。

くつづく

私が私じゃなかった時間

「μ， sは永遠に私たちのライバル」

シルフィードと対談した際、A—RISEはそんな発言をしていた。  
た。

それがこの騒動の発端だ。

当初はA—RISEのファンも

「彼女たちが言うなら、そうなのだろう」

と受け止めていた。

反対にμ， sのファンは

「ずっとそう思っていてくれて嬉しい。ファンとして誇りに思う」と好意的だった。

ところが…

『μ， s再結成希望』の話題が出てきてから、にわかに情勢が変わる。

μ， sのファンがA—RISEを叩くようになったのだ。

その根拠はやはり、μ， sが『ラブライブ！』で初優勝を飾った時に、予選でA—RISEを破ったことにある。

「μ， sが現役であったなら、今のA—RISEはない！実力差は歴然！早く消えろ！」

などと攻撃を開始した。

これに対して

「μ， sはただメンバーが多いだけ。3倍の人数でようやくA—RISEと対等…もしくはそれ以下」

とA—RISEファンが反論。

さらに

『永遠にライバル』って言葉は社交辞令だ」

と続けた。

実際はもつと口汚い言葉で互いを罵っているのだが、ここでは省略する。

ファン同士が『代理戦争』を名乗って、激しくやりあってる様に

「まったく、迷惑な話だわ。私たちを勝手に巻き込まないでほしい…」

とツバサは嘆き、ひとつ大きな溜め息をついた。

「なるべく見ないようにしているので、細かいところまではわからな  
いのですが…かなり、大変なことになっているのですね…」

と海未も困惑した顔だ。

「私たちもそれは同じだ。下手に反応しない方がいい。所詮、落書き  
にしか過ぎないのだから」

「でも、ちよつと度が過ぎるわね…」

英玲奈もあんじゅも『頭が痛い』…そんな感じだ。

「そうですね…私やメンバーはまだしも…雪穂や亜里沙の話題まで出  
てくるのは、頂けませんね…」

「完全にプライバシーの侵害ですよ！」

「法的手段に出た方が…」

「でもね、萌絵、かのん…まだ実害が出てる訳じゃないから、それはな  
かなか難しいかも」

「でも、綾乃さん！」

「実害が出てからじゃ遅いですよ！」

「それはわかってるけど…」

「まずは私たちから発信してみるわ」

「ツバサさん!？」

「仕掛けたのは、sのファンかも知れないけど、私たちのファンも  
張り合っちゃってるしね…」

「私はファンと呼ぶのに抵抗があるが」

「中には、便乗して騒ぎたいだけの人もいるかもね。でも、私たちじゃ

その区別はつかないし」

「ああ…それはそうだが…」

「私たちも何ができるか、専門家に相談してみるわ」

「綾乃さん…」ご迷惑をお掛けします」

「やっぱり、看過できないもの。梨里も海未さんも物騒な言葉で脅されて…それがμ、sやA—RISEにまで波及してる…。明日は我が身だし」

「えっ?」

「たぶん私もオリンピックで結果が出せなかったら『やられる』わ。他の代表選手以上に…ね」

「綾乃さん…」

「まあ、そうならないように戦ってくるつもりだけど…。それより、この件は…著しい誹謗・中傷は管理者に頼んで削除してもらおうとかしない」と

「そうですね。私たちも関係者を当たってみます」

「はい」

かのと萌絵が、綾乃の言葉に呼応した。

「…ところで…」

と切り出したのはツバサ。

「はい、なんででしょう?」

「μ、sの復活は、本当にないのかしら?」

「えっ!?!」

驚きの声をあげたのは海未だけではなかった。

英玲奈もあんじゅも…シルフィードの3人も、質問主の顔を一齐に見た。



「それ、今、訊いちやいますか？私はさつき、そうしたかったのをグツと堪えたんですけど…」

と苦笑いしながら萌絵。

「だって、こんな機会は滅多にないでしょ？今すぐ『どうこう』はなくても将来的にありえる話なのかは、気になるじゃない」

「異論はありませんが…ということ、どうなんでしょう？海未さん…」

「ツバサさん、萌絵さん…私ひとりの判断で回答するのどうかと思いますが…限りなくその可能性はないかと…」

「そう…残念ね…」

「すみません…」

「でも、寂しくなったりしないですか？あれだけのパフォーマンスをして、あれだけの歓声や拍手を受けて…スパッとやめられるものなんですか？」

萌絵の問いに、海未は困った顔をして、返答に窮した。

「それは…その…」

「すぐに否定しないということは、無いわけでは、ないのだな？」

海未の様子を見て、英玲奈が訊く。

「…はい。未練のようなものはありませんが…皆さんが活躍している姿を見ると『ああ、私もこういうことをしていたのですね…』と思うことはあります」

「それは園田さんだけなのか？」

「どうなのでしょう…」

しばし考える海未。

そして、ゆっくりと口を開いた。

「メンバーひとりひとりが、今現在どう思っているかはわかりませんが、なぜかと言いますと…私たちは、わりと頻繁に集まるのですが、一切、そのことには触れないからです」

「そうなのか？」

「意識的に『避けている』のかも知れません」

「避けている？」

「μ、s：はみんな納得して解散したのですから『仮に誰かの胸にそういう気持ちがあつた』としても…今さら、蒸し返すようなことは…」

「その件なんだけど…」

とツバサ。

「はい？」

『9人じゃなければ意味がない』ってμ、sを解散したでしょ？それは私も納得しているの。…でも、そのあとも『スクールアイドルは続ける』んじゃなかったのかしら？あなたたちが不仲になった…とは思ってないけど、どうして活動をやめてしまったのかと」

「確かに…それは私も気になってました。μ、sの名前は使わなくても、6人で続けることはできたと思うし…」

「…そうですね…みなさんならお話しても良いかとは思いますが…でも今日は『夢野つばささんの壮行会』だったかと。私たちのことなど…」

「あら、私は全然構わないわよ。むしろ、これまで謎だったことをスッキリさせてくれた方が、気持ち良くオリンピックに行くから」

「綾乃さん…」

「ふふふ…なあんてね！言えないような話なら、無理には訊かないけど」

「大丈夫ですよ！週刊誌に売ったりはしませんから」

「ごらごら…」

萌絵の言葉に全員が突っ込んだ。

「ツバサなんて、フツとした瞬間に『そういえば高坂さんは元気かしら』とか言うんだ。どうやら何年もの間、気になって気になって仕方がないらしい」

「え、英玲奈！な、なにを突然言い出すのよ！」

「恥ずかしがらなくてもいい。事実を言ったまでだ」

「穂乃果ですか？相変わらず…ですよ。天真爛漫といえますか…一向に大人になりません」

「そ、そう…相変わらずなのね。少し安心したわ」

「たまには連絡するように伝えましょうか？」

「い、いや…それには及ばないわ…」

「ごめんなさい。悪気はないのですが…みんな各々『ラブライブ』『μ's』から離れた生活をしているもので…決して不義理をしているつもりはなく…」

「それは理解してるわ。だから、こちらからも連絡はしてないし…」

「でも矢澤さんからは、大きなイベントの時には必ず花を頂くんのだ。『毎回、毎回ありがとう』と、今度会ったら伝えてくれないか？」

英玲奈の言葉に、海未は少し驚いた表情をした。

…にこ…

…いまだにA—RISEを…

…ひよつとしたら、自分の諦めた夢をこの人たちに託したのかもしれませんね…

「承知しました。伝えておきます」

「矢澤さんは…ミュージカルの道に進んだ…と聞いたけど…」

「はい、にこだけです。そちらの世界に進んだのは…」

「芸名は…確か…」

『『小庭 沙弥（にこにわ さや）』です』

『『にこにわ さや？』…ひよつとして…』

「逆から呼んだら『やさわ にこ』…ですね？」

「萌絵さん、正解です！」

「なるほど、彼女らしいわ。自己プロデュース能力が長けている」

ツバサは大納得といった面持ちで、ふふふと笑った。

「自己顕示欲の塊みたいな人ですから」

思わず海未も笑う。

「だが、私は彼女のプロ意識の高さは素晴らしいと思ってる」

「英玲奈さん、ありがとうございます。ここにとってA—RISEの皆さんは憧れの存在でしたから…きつと喜ぶと思いますよ。あっ！そう言えば…初舞台が決まったと言っていました。端役だけ…」

「そう。じゃあ、今度は私たちがお花を贈らないと…。あ、ダメよ、ちゃんと内緒にしておいてくれなきゃ」

「あんじゅさん…」

「それくらいのお返しはしないと…ね？」

「はい。ありがとうございます」

「だけど、どうしてわざわざ芸名にしたんですか？『矢澤にこ』の方が全然ネームバリューがあると思うんですけど」

「萌絵はわかってないなあ！なんかかの七光り…じゃないけど、要はμ sの名前に継（すが）りたくなかった…ってことでしょ？」

「そうですね。ここはああ見えて、大変しつかりしていますので…単体でアイドルになることは厳しいと判断して、ミュージカル俳優の道を選んだのです。さりげなく自分を『矢澤にこ』だとアピールしているところは、彼女らしいといえれば彼女らしいのですが…。その一方で、セカンドキャリアのこともちゃんと考えているようですし、穂乃果などと比べればよっぽど…ハッ！すみません…つい、いつものクセで愚痴を…」

「いえいえ『素』の海未さんが見れて嬉しいですよ」

「お恥ずかしい…。あ、いえ、で、ですから…ここは本当にイチから頑張っていますので、何卒、応援のほどを…」

「わかったわ」

「絶対に舞台、観に行きます！」

「はい。お願いします！」

海未が深々と頭を下げる。

「解散してもμ sはμ s。絆は強いわね…。ネットで流れてる不仲説なんて、問題外ね」

綾乃の言葉に全員が頷いた。

「海未さん…やっぱり『元々、s』って看板は重かったですか？」  
訊いたのは、かのん。

6人は食べることも飲むことも忘れて、すっかり話に夢中になっていた。

「私たちはともかく…にこ、絵里、希の3人は大変だったみたいです。高校を卒業してそれぞれ、専門生、大学生、社会人となったわけですが、最初はどこに行っても、何をしても注目されるというか…そういうことは多々あったと」

「…ですよね…」

「それに比べれば、私たちの学年は卒業までに1年、下の学年は2年空きましたので、そこまでの苦労…といえますか…そういうものは少なかったかと…」

「上手くフェイドアウトできた？」

「いえ、あんじゅさん…そうは言っても、知ってる方、わかる方はいらっしやいますので、まったくゼロでは…」

『歌って!』とか言われたりするでしょ?」

「…はい…。丁重にお断りさせて戴きますが…」

「歌っちゃえばいいのに!」

「無理です、無理です!とても人前で歌うなど…」

「そうですね、人前で歌うなんて無理に決まっています…って、やってたじゃないですか!」

萌絵が関西仕込みのノリツツコミで、周囲を笑わせる。

「ですから…μ、sの活動時期だけが、特別…異常な状態だったんです。違う人格だった…と言ってもよいです。…にこは別としても…他のメンバーは『アイドル』になろうなんて、誰ひとり考えていなかったのですから」

「それがアイドル活動を続けなかった理由?」

とツバサ。

「全てではありませんが、一部ではあるかと思えます…」

「じゃあ、他にも理由が？」

「はい…」

ツバサの再度の問い掛けに、海未は小さく頷いた…。

くっくく

「一番の要因は、モチベーションの低下だと思えます」

「モチベーション…ですか？」

海末の言葉に、萌絵が鸚鵡返しをする。

「はい…。まず私たちがスクールアイドルを始めたのは、母校の廃校阻止が目的でした。A—R—I—S—Eの皆さんを見た穂乃果が、本当に思い付きで言い出して…」

「その行動力とか決断力が、高坂さんの素晴らしいところね」

「いえ、ツバサさん。それは褒めすぎです。私はそのせいで、どれだけ振り回されてきたか…あつ、すみません。つい穂乃果のことになると、愚痴ばかりが出てしまい…」

「構わないわよ。園田さんが高坂さんを、どれだけ好きか…は知っているもの」

「あ、いえ…それは…」

「それで、廃校は阻止ができたんですね？」

「えっ？は、はい！そうです。お陰さまで…」

一瞬、ツバサの言葉に顔を赤くして、返答に困った海末だったが、萌絵のフォローに救われたようだった。

「そして、次に生まれた目標がラブライブでした。諸事情で一旦はエントリーを断念しましたが…その後、もう一度挑戦することができ、A—R—I—S—Eの皆さんと戦えて…なんの間違いか優勝までしてしまいました…」

『間違い』などと言わないでほしい。それでは私たちが納得できない。あれはμ'sの実力だ」

「英玲奈さん…そうですね…ですが實力以上の『なにか』があったのも事実です」

「そうかもね。勢いとかタイミングとか…でも、そういうのを引き寄せるのも實力があつてこそ！でしょ？」

「運も実力のうち…って言いますしね」

あんじゆの言葉を、かのんが継いだ。

「勢い…というのは、その通りかもしれませんが。海外ライブも、アキバでのラストライブも、無我夢中でしたから」

「飛ぶ鳥を落とす勢い…ってこういうことだと思っただわ」

「その節は…ツバサさんたちにもご協力頂きありがとうございました  
た」

「私は…またいつか、ああいうことができると期待していたんだけど…」

「…はい…」

「燃え尽きた？」

「えっ？」

「その短い間に完全燃焼しちゃったんじゃない？」

「綾乃さん…」

「私はね…バレーボールも、モデルも、アーティストも…全部中途半端に終わってるから、このサッカーはボロボロになるまでやろうと思ってるの。でもμ、sは…その短期間でやりきっちゃったんじゃないのかな？」

「仰（おっしや）る通りです。3年生の3人が抜けて『μ、sがμ、sじゃなくなつた』…と気付かされた時…もう私たちには、新しく何かを始める気力は残されていませんでした…」

「精も根も尽き果てた…って感じですか？」

「はい、萌絵さん。しかしながら…私たちだけでしたら、どこかで活動を再開していたかもしれません」

「…と言いますと？」

「新入部員の存在が、大きく方向性を変えました」

「新入部員…ですか？…」

「私たちの場合、μ、sは『アイドル研究部』という『部活の中』に存



在しておりましたので、年度が替わり、部員が新しく入ってくる…と  
いうのは、当然のことなのです」

「部活…か…」

「ただ…私たち9人は…学年こそ違い同じ時期に活動を始めた…いわば『創設者』みたいなものでしたから、実質、後輩を迎え入れるというのは初めてのことで…彼女たちとどうやっていくかが、一番の課題だったのです」

「なるほど、なるほど…つまり、新入部員も同じグループで、一緒に活動するかどうか…ということですよ？」

と萌絵。

「ええ…。それが、ひとりふたりなら、それもありえたと思うのですが…10名以上も入ってくるのは想定外と申しますか…いえ、そのような事も考えてはありましたが…」

「あれだけ派手な活躍をすれば、当然の結果であろう」

さもありません…と英玲奈が呟く。

「はい…嬉しい誤算でした。それだけの人数が集まる…ということ  
は、私たちが認められた証しだとも言えますので。…それと同時に、  
彼女たちを育てなければならぬという『責任』が発生しました」  
「責任？」

「目指すべき目標がない私たちと、同じユニットで活動をさせる…と  
いうことは、大変な失礼だと思えました。それに生徒会の仕事もあり  
ましたし、充分、そこに注力できないのは目に見えてましたから」  
「いざ自分がその立場になったら…って考えられると難しい問題ですね  
…」

かのんは腕を組んで「うくん…」と唸った。

「それで、私たちは新入部員たちを指導、育成していく道を選んだので  
す。スクールアイドルは曲も、衣裳も、振り付けも…全て自分たちで  
作るのが基本ですから」

「そうだな」

頷く英玲奈。

「穂乃果は生徒会長でしたので、どうしても、そちらの仕事を優先せざる

るをえなかつたのですが…私は作詞、真姫は作曲と歌唱指導、ことりは衣裳デザインや裁縫、凜は体力トレーニンとダンス…そして花陽は総合演出…と分担して指導にあたりました。それはそれで充実した毎日だったと思います」

「でも…ム、sのように目立った活躍はなかつたですよ？その後輩たちは…」

「彼女たちの目標が、必ずしも『ラブライブ出場』『優勝』ではなかつたということですよ。もちろん、そういう部員がいなかつたわけではな

いですが『楽しく、そういうことをしてみたい』という者もいましたし」

「ストイックで有名な園田さんとしては、それは『アリ』なのかしら」

「ツバサさん、私も鬼ではありませんので…」

「これは失礼…」

「いえ、実を言うと…花陽に言われたんです。『多様性を認めてほしい』と」

「多様性？」

「アイドルが好きって言っても、歌うのが好き、観るのが好き、可愛い衣装が好き…曲を作りたいとか、プロデュースしたいとか…一様ではないと。だから、新入生が入ってきた時には、できるだけその人の要望を聴いてほしい…」

「小泉さんらしい考えだ」

「はい。彼女自身、幼い頃からアイドルに憧れていて、知識も豊富で…でも内向的な性格から、それを披露することもできず、随分寂しい思いをしてきたようですよ。そういう人、そういう境遇の人の、受け皿になりたい…というのは強くあつたようです」

「確かに。私たちは大勢のスタッフに支えられて今がある。そういうことに興味をもつてくれた人が、その道に進むこともあるだろうし」

「ええ。花湯自身、この経験が活きて、今や新進気鋭の映像クリエイターですよ」

「それってA—RISEの皆さんが橋渡しをしたんですよ？」

「彼女が録ったPVを、一緒に仕事しているディレクターに紹介した

だけだ」

「そのチャンスをものにしたのは彼女の實力よ」

英玲奈とあんじゅは微笑みながら、萌絵に話した。

「いつか、私たちも一緒にお仕事するかもしれないですね」

「そう遠くない気がするわ」

かのんの問い掛けに、ツバサがそう答えた。

くつづく

えればな

『夢野つばさの壮行会』というよりは『園田海未と語る会』となった7人の会食は、2時間ほどでお開きになった。

最後は年頃の女子らしく「〇〇のブランドのファッションが可愛いよ」とか「〇〇のスーツが美味しい」などの話題になり、和やかな雰囲気で終了した。

ただ、海未には少し、縁遠い話ではあった。

大学生になっても、海未のスリムなプロポーションは健在で…その辺りは女性として、自分自身かなり意識しているところであるが…と、服装に関してはあまり興味がない。

どうしても、地味目で実用的で…なおかつ安いもの…を選んでしまう。

従って彼女たちの語る『華やかな』話は、海未にとって異世界のこゝと等しかった。

海未自身は（本人にそのつもりはないが）良家のお嬢様であり、望めば贅沢な生活はいくらでもできるハズだ。

しかし、海未の性格上それを許さず、慎ましく暮らしている。

シルフィードやA-RISEがいくら稼いでいるのか、海未には知るよしも無かったが…自分がこの世界に入ったら、果たして、どんな生活になるのだろうか…などと考えながら話を聴いていた。

会計は

「主役と大学生とゲストに出させる訳にはいかないから…」

とアクアスターが支払い、7人は地上へと出た。

黒い雲が、月を隠している。

もつとも都心のビル群の中になると、月が出ていようと出ていまいと、明るさはさほど気にならない。

心配するのは傘がいるか否かである。

「ひと雨来そうね…」

一番先にいたツバサが、空を見上げてポツリと呟いた。

「店に着いたときには、そんな感じではなかったがな」

「でも少しは降った方がいいんじゃない？乾燥しすぎでノドがやられるわ」

英玲奈とあんじゅは手の平を上に向け、雨の様子を確認する。

「今年もカラ梅雨で水不足って言いますし」

「でも、ゲリラ豪雨はごめんかな…」

「なんで降ってほしいところに降らないんだらうね…」

かのん、萌絵、綾乃も空を見上げた。

「そうかと思えば、私の田舎は豪雨で田んぼが全滅したって…」

「そっか…かのんは秋田出身だもんね」

「はい。今年は米不足になるかもしれないですよ」

「そうなんだ！それは大問題なんだ！さぞかし小泉さんも心配していることだらう…」

「えっ？」

「花陽…ですか？」

「あつ、すまん。小泉さんは関係ない。米が不足するというのは、ゆゆしき問題だ…と言っただけだ」

シルフィードの3人も…そして海未も、彼女が『利き米コンテストに出場した』ことは知っているので「それはそうか…」という顔をした。

しかし、ツバサとあんじゅは「ふふふ…」と笑っている。

「何がおかしい？」

と不満げに英玲奈。

「英玲奈が本当に気にしているのは、お米よりも小泉さんのことでしょ?」

「あ、あんじゅ!」

「ええっ!」

海未はその言葉を聴いて、目を丸くした。

「あら園田さんもわりとニブいのね? 英玲奈がずっと小泉さんが好きだったこと、気付いていなかった?」

「ツバサ、余計なことを!」

「さっきのお返し。英玲奈だって『高坂さんのことが…』って言うてくれたじゃない」  
「くっ…」

返す言葉がない。

「英玲奈は初めて小泉さんを見た時から…彼女にしたい…って思ってたのよね?」

「いや、あんじゅ! それは語弊がある! 『もし私が男だったとして彼女にするならば…』という話だ」

「似たようなものじゃない…」

「全然違う!」

「だけど私が『小泉さんて可愛いわね。食べちゃおうかな…』って言うたら、物凄い剣幕で怒ったじゃない」

「当たり前だ! あのような純粋な人を、あんじゅのような淫靡な者に、弄ばれるようなことがあってはならないのであって…」

「冗談に決まってるでしょ?」

「あんじゅのそういう話は冗談に聴こえない」

「そう?…だから、あの時『好きだ』って言っちゃえば良かったのに!」

「あの時…とは?」

「ええ、園田さん。私たちが音ノ木坂に押し掛けて、ラストライブの準備をさせてもらった時よ」

「それはまた、随分前のことですね…」

「その時は小泉さんと南さんの仲が、あまりに良すぎて、英玲奈の入る隙がなかったんだけど…」

「…結構、ガチな話なんだね…」

「…だね…」

萌絵とかのんは、笑いながら一歩後ずさりをした。

「ほら、このようにあらぬ誤解を生むではないか」

「別にいいんじゃない？事実なんだから」

「ツバサ！」

「そうですか…英玲奈さんは花陽のことを…」

と言った海未の口元は、少し緩んでいた。

「園田さんまで、私をバカにしているのか」

「あのね…小泉さんが撮ったPVを、私たちのディレクターに『売り込んだ』のは、英玲奈なのよ」

とツバサがシルフィードの3人に説明した。

「A—RISEが橋渡しした…ってというのは知っていましたけど…」

「売り込んだっていうのは…」

「良いものは良い！そう思っただけだ。特別、彼女が作ったからだとか…そういう理由ではない！」

「でも、ずっとチェックしてたでしょ？小泉さんのこと」

「あ、いや、それは…私を負かして『初代お米クイーン』になった人だ。それはいつかりベンジすべく…」

それはいつかりベンジすべく…」

それはいつかりベンジすべく…」

「酷い言い訳だわ」

ツバサとあんじゅは呆れ顔をした。

「…英玲奈さんの気持ちはわかりますよ。私も危うく花陽に心を奪われそうになったことがありますから」

「園田さんが!？」

「はい。ですが…花陽を手に入れるのは、一筋縄ではいきませんよ！」

「手に入れる？」

「希も花陽のことを『うちのお嫁さんになってや』と公言して憚（はば）か）りませんし、さつき話に出たことりとは『花陽ちゃんのことりの

か）りませんし、さつき話に出たことりとは『花陽ちゃんのことりの

大事な妹だもん!』と言っております。にこも負けじと『花陽は私の弟子だけど、妹でもあるの!。それに、こころたちのお姉さんなんだから!』と主張しております。あ…こころというのは、にこの実の妹なのですが…実際、花陽は彼女たちに大変慕われております」

「うひゃあ…花陽さん、恐るべし!」

「μ、sは花陽さんがいなければ、こころはなつてなかったかも…って話は知ってるんですけど…なんか凄い人なんですね…」

萌絵とかのんは前のめりになって、海未の話を聴く。

「それと真姫は、親友として絶大な信頼を置いてますし、雪穂に至っては…姉の穂乃果よりも尊敬しています。あの絵里でさえも、花陽には助けられたと申しています。…この件については、私も詳細はわからないのですが…」

「ありやあ…英玲奈さん、これはなかなかハードル高そうですね!」  
「からかうな!」

萌絵の一言に、英玲奈はそっぽを向いた。

「それ以外にも、花陽は3年時に生徒会長もしておりましたし…全国スクールアイドルの取り纏めも行っていましたので、後輩…もしくは学校外からの人気も高く…」

「それは知っている…」

「なんか、小泉さんがその気になれば、政党が出来そうな話ね…」

ツバサが呟く。

「あ、言い忘れましたが…星空 凜という最難関がいることをご承知おきください」

「もちろん、それもよく知っている…」

「どうする? ライバル多すぎじゃない?」

「あんじゅ、何をどうすると言うのだ? 別にどうもしない。小泉さんなら、それだけの人望があつて当然だ」

「…そうね…。じゃあ、今度、小泉さんに会ったら、英玲奈も好きだつて言つてた…って伝えといて」



「かしこまりました」

「園田さん、あんじゆの言うことを真（ま）に受けないでくれ」

英玲奈は泣きそうな声で言った。

「そう言えば…さつき海未さんも『心を奪われそうになった』って言うってけど…」

と、これまで黙ってそのやりとりを楽しんでいた、綾乃が訊く。

「えっ？あ、それはですね…おや、あれは…」

海未が説明をしようとした時、彼女たちの目の前に黒塗りの車が、音もなく停まった。

A—RISEがチャーターしたハイヤーだった。

「残念ね。どうやら時間みたい…」

「あ、ああ…」

「園田さん、その話の続きはまた今度聴かせてね？」

「は、はい…」

「じゃあ、私たちはこれで…今日は色々楽しかったわ」

「こちらこそ、ありがとうございました」

そう言って綾乃は深々と頭を下げた。

「オリンピック…頑張ってたね！」

「検討を祈る！」

「期待してるわ」

綾乃と握手を交わすA—RISE。

シルフィードと海未にも別れを告げると、3人はハイヤーに乗り込んだ。  
んだ。

車が走り出す。

窓から出た手は、見えなくなるまで、ずっと振られていた…。

くつづく

## 月に向かつて

「萌絵、かのん、海未さん…今日はどうもありがとう。お陰で、とてもリラックスした時間が過ごせたわ」

A—RISEを見送った綾乃は、3人に感謝の意を表した。

「いやいや。綾乃さんは日の丸を背負って戦うんですか、これくらいのことはお安いご用で」

萌絵は綾乃にVサインを突き出す。

「このあと私たちは、ちよつと服を見に行こうかな…と思うんですけど…綾乃さんはどうします?」

と、かのん。

「うくん…付き合いたいのはやまやまだけど…今日は家に帰るわ」

「…ですよね!さすがに明日出発ですものね…」

「ごめんネ!」

「ゆっくりしてください」

「お土産、期待してますよ!」

「そうね。余裕があったら」

「海未さんはどうします?一緒に行きませんか?」

「いえ、私も今日はこの辺で失礼させて頂きます」

「そうですか…じゃあ、またの機会に…。海未さん、今日はお付き合い頂き、本当にありがとうございました」

「ありがとうございました」

かのんと萌絵が頭を下げる。

「こちらこそ…」

「ネットの件は、後ほど連絡しますね」

「えっ?あ…はい、ご迷惑をお掛けします…」

「では、また」

萌絵とかのんは、2人に別れを告げると、人混みの中に消えていっ

た。

「さあ、それじゃあ、そろそろ私たちも…」

「はい。あ、あの…」

「ん？」

「オリンピックク…頑張ってください！」

「…」

海未の言葉に、綾乃は一瞬困ったような顔を見せた。

「？」

「…頑張れる…かな…」

「えっ？」

「…こんな時に、サッカーなんてやってて…いいのかな…」

「綾乃…さん？」

…この感じ…以前にもあったような…

…!!…

…ことり!?!…

…そうです、ことりが留学しようとした時、穂乃果に言い出せず悩んでいました…

…今のそれは、まさしくその時と同じ表情でした…

「綾乃さん？」

「あ、やだ…私、今、変なこと言ったわね…。やっぱり、オリンピックク

に出るのって凄いことなんだ…国を代表するって大変なことなんだ…  
…って思ったら、急に怖くなっちゃって…」

綾乃は「えへっ!」と舌を出した。

「す、すみません!プレッシャーですよね…」

「ううん、そうじゃないの。大丈夫、なんでもないから」

…そっちの重圧(プレッシャー)ですか…

…それは確かにそうですが…

…本当にそれだけでしょうか…

「……と言うわけで…1カ月…」

「えっ?」

「私は1カ月、日本に帰ってきません!!」

「即ち、それは…決勝戦まで…ってことですね?」

「もちろん!」

綾乃は、胸を張り、首を大きく縦に振った。

だが、すぐに

「…その間…留守をお願いするわね…」

と小さな声で言った、海未に言う。

「留守…ですか?」

「海未さんに頼むのはスジじゃないとは思うけど…梨里のこと…」

「あっ!」

「あの人、ヒマするだろうから…たまにでいいから話し相手になって  
くれれば…あ、気が向いた時で構わないんだけど…本当にたまにで  
いいの」

「私が?…」

「こんなこと言える立場じゃないことは、わかってるんだけど…。海  
未さん、美人だから、居てくれるだけで、癒されると思うの」

「そんな、美人だ…などと…」

「だって、病室にいた時のことを思い出してみて?あの人、ずっとニヤ  
ニヤしてたでしょ?」

「そうだったでしようか…?」

「普通なら、海未さんが襲われないか、心配になるところだけど…今の梨里は動けないから、変なことはしないと思うし」

綾乃はニツコリと笑い、うんうんと二度ほど頷いた。

海未には、その仕草が、自分を無理矢理納得させているように見えた。

「…お役に立てるのであれば…」

海未は二つ返事で、それを承諾した。

実は海未も、そのつもりでいた。

彼が復帰するまで、邪魔にならない程度に、サポートしようと思心に決めていた。

ただし、梨里には綾乃という、素敵な彼女がいる。

だから、あまり出しゃばってはいけない…とも思っていた。

しかし、今、1カ月という短期間であれ、それをする事の許しを得た。

海未にとって、断る理由はなかったのだ。

「ありがとう…無理を言っちゃって…。海未さんだつてツライ立場なのに…こんなことを頼むのはおかしい…って、わかっているのに」  
「いえ…」

「本当は…本当は…私がそばにいないくちやいけないのに…」

綾乃は声を詰まらせると、海未に背中を向けた。

…綾乃さん！…

海未がどう声を掛けようか…と迷っているうちに

「ふうー危ない、危ない。危うく変なスイッチが入るところだった…」

今はやっぱり、ダメね…オリンピック前で色々正常じゃないかも…」

と綾乃は振り返りながら、そう言った。

「大丈夫です。留守は預かりました。だから、綾乃さんは安心して、向こうに行つてきてください！」

海未の力強い言葉に、綾乃は両手を胸の前で合わせ、深々と礼をした。

その時だった。

2人の髪の毛に、水滴が当たる。

「えっ？雨？」

「雨ですね？」

「海未さん、傘は？」

「ありません……」

「私も……」

その瞬間、綾乃と海未の目と目が合う。

以心伝心……

相手の考えていることがわかった。

「駅まで！」

「走ります！」

現地点から駅まではおよそ150m。

2人は猛然とダッシュした。

「ハア、ハア……さすがに見事な走りです。ハア……私も脚には自信がないわけではないのですが、まったく着いて行けませんでした」

「伊達に『快足FW』とは呼ばれてないもの。でも、海未さんもそれだけ走れば、たいしたものよ」

「恐縮です……。それにしても、凄い雨ですね……。よく『バケツをひっくり返した』などと言いますが、まさにこのことですね」

「間髪もなくてヤツね……」

「はい」

「私は新宿経由で小田急線なんだけど…」

「私は逆方向です」

「そっか…：だったら、ここでお別れね」

「そうですね」

「気を付けて帰ってね…：電車止まらなきゃいいけど」

「綾乃さんも…。安易に『頑張ってください』などと言ってはいけないのでしょうけど…：こちらのことは気になさらずに、サッカーのことだけ、集中してください！」

「うん、ありがとう」

「では、いつてらっしゃいませ。1カ月後に会いましょう！」

「では、また…」

2人は両手でガツチリと握手を交わすと、改札を抜け、綾乃は山手線の外回り…：海未は内回りのホームへと、それぞれ別れた…。

突然の豪雨に駅はごった返しており…：故に、変装などせずとも、誰にも気付かれることなく、無事帰宅の途についた。

海未が自宅の最寄り駅に着く頃には、雨は上がっていた。

通り雨と呼ぶにはあまりに激しく、それは道路にできた水溜まりの大きさが、短時間にどれだけ降ったか…：を如実に現していた。

スマホに入ってきたニュースメールを見ると、先程までいた場所は、道路が冠水し、大変な騒ぎになっているらしい。

幸い、海未はたいして濡れることなく自宅にたどり着いたが、この雨のせいで湿度は上がり、蒸し暑さが倍増している。

汗が身体に纏わり付く。

早くこの不快な状況から脱したいと、海未はすぐに入浴した。

「ふう…サツパリしました…」

海未はシャワー派ではない。

夏であろうと湯船に浸かり、今日一日を振り返るのが、彼女のルーティーン。

しかし、この日は様々な出来事があった為、風呂から出て、延長戦をすることにした。

…このままいたら、のぼせてしまいますものね…

海未は洗い髪もそのままに、Tシャツとハーフパンツ、首にはバスタオル…と、普段の海未からはおよそ想像つかないようなラフな格好で、縁側へとやってきた。

手には缶チューハイと枝豆。

アルコールへの免疫強化の為、誕生日から事故当日まで続けてきた『晩酌』。

あの日依頼、自粛していたのだが…というより、とてもそんな気にならなかつたのだが、今日はなんとなく『飲みたい』という気持ちになった。

本当を言えばドラマで良くみるような…バーみたいなどころに言って、無口だけど、やさしいマスターに話を聴いてほしい…そんな心境だった。

海未はまるでお茶を立てるかのように、背筋をピンと伸ばし、正座をした。

縁側の床板が、素足にひんやりとして、心地よかった。

「いただきます」

海未は缶チューハイのプルタブを起こすと、コクリと一口…喉を潤した。

そして、枝豆をつまみにしながら、綾乃の事を思った。



…綾乃さんは、明らかに葛藤しています…

…大切な人が大変な時に、そばにいられないツラさ…

…そんな時に、自分がサッカーをしていてよいのか…という戸惑い

…

…私は大きな勘違いをしていたのかもしれない…

…綾乃さんも、高野さんも、ご両親も…穂乃果以上にポジティブな  
考えの持ち主だと思っていました…

…皆さん、決して強い人ではないのです…

…強くあろうとしているだけなのです…

…壊れそうな自分を、必死に抑えているのです…

…それはわかっていたつもりですが…

…私は、その優しさに甘えているのではないのでしょうか…

…もつと正々堂々、世間と戦わなければいけないのではないので  
しょうか？

…私に今、できること…

…これ以上、高野さんやシルフィード、A—RISEの皆さん、そ  
してμ'sのメンバーに迷惑を掛けないこと…

…綾乃さん…夢野つばささんの健闘を祈ること…

…そして高野さんの復帰を全力で支援すること…

海未は心にそれを刻むと、やおら立ち上がり

「はい、やりますよ!!」

と、ひとり、空を見上げて、ようやく顔を出した月に向かって宣言  
した…。

~^~U~

## 一步前進

翌日。

『なでしこジャパン』の選手たちは、お揃いのスーツに身に纏い、空港に現れた。

搭乗口の前には、彼女たちを見送ろうと、レプリカのユニフォームを着込んだ大勢のファンが詰めかけた。

スーツケースを押して通り過ぎる選手ひとりひとりに、歓声が沸き、カメラのフラッシュが焚かれる。

中でも、一際それが大きく、激しかったのは…『夢野つばき』だ。

170cm近い彼女は、周りの選手よりも頭ひとつ抜けており…従って、遠くからでも一目でわかった。

集まったファンを良く見てみると『背番号28』を付けたユニが、半数近くを占めている。

夢野つばきの、代表での背番号だ。

彼女はスタミナに難がある為、途中交代（あるいは途中出場）することが多い。

しかし局面でのチャンスメイク、ここぞという時の決定力はチーム随一で、いまやつばき抜きの日本代表など考えられない…という存在になっていた。

彼女の左足から放たれる、強烈な弾丸シユート『デビルウイング』が炸裂することを、日本国中が期待している。

その現れが、この『背番号28』の多さであった。

この後、彼女たちは現地に飛び、約1週間の合宿を行う。

その間に練習試合が2ゲーム組まれており、最終調整の上、本番に

挑むスケジュールとなっている。

それから遅れること4時間…。

同じ場所に姿を見せたのは、男子のオリンピック代表だった。

見送りに駆けつけたファンの数は、女子の倍以上に膨れ上がっていた。

選手が姿を見せると、先程とは真逆の…黄色い歓声…ではなく、野太い声で『ニッポン!』コールと手拍子が沸き起こった。

それに手を挙げながら通り過ぎる選手たち。

だが…

そこに『高野梨里』の姿はない…。

その代わりに、彼が代表で付けるはずだった『背番号7』のユニを身に付けたサポーターの姿が、かなりいた。

梨里の代わりに『本間洋平』という選手が追加召集されたが、彼は別の番号を付けた為、今大会の『7』は欠番となった。

チームとして、梨里に敬意を表してのことだった。

その空港の様子を、病室で見た梨里は

「ありがたいことだ…」

と、ひとり静かに呟いた。

『オレ』は、ようやく上半身を起すことができるようになった。

…とはいえ、それは可動式の（医療用の）ベッドの力を借りてのことであり、首にはコルセットが巻かれたままである為、不自由であることには変わりない。

それでも天井を見ているだけの日々から開放され、気分的にはだいぶ違う。

なにしろ、寝ている間は『常に上から覗き込まれる』感じで、あまりいい気はしなかった。

それは小学生時代に『チョモ』がオレを、いつも見下ろしていた…というコンプレックスが起因しているのだろう。

まさか、この歳になってそんなことを思うとは思ってもいなかったが、これでやっと面会者とも看護師とも『対等な目線』で会話ができるというもんだ。

…ということで…半身が起こせるようになったオレは、ベッドサイドテーブルの上に（お袋に頼んで持ってきてもらった）自分が使っていたタブレットを据え付けた。

代表出発の様子は、それで見たと…というわけだ。

自惚れるつもりはないが、自分のファンがああいったことをしてくれたことについて『オレもなかなかやるじゃん！』と思った。

プロのサッカー選手として、どうせやるなら、人気は無いよりあった方がいいに決まっている。

実はこの日、オレの気分を楽にさせた話が、もうひとつあった。

それは手術の日程が決まったことだ。

今日から10日後…調度、女子の代表が緒戦を迎える日になった。

細かいことはよくわからないが、手術は、そこまで難しいものではないらしい。

しかし、回復具合は、かなり個人差があるようだ。

数%の確率で麻痺が発生するかもしれないとのことだった。

普通にリハビリをすれば、半年くらいで日常生活を送るくらいの回

復はするとのことだが…しかし、痛みが治まるかといえば『保証できない』と医師に事前通告されてしまった。

むしろ『痛みが消える…という方が珍しい』とさえ言われた。

どうやら、一生付き合うことを覚悟しなきゃいけないみたいだ。

まあ、仕方ない。

その痛みがプレーに響かないように祈るしかない。

もうひとつ、医師から言われたのは…

無意識のうちに怪我したところを『庇ってしまう』ことがあるとのこと。

こいつはなかなか厄介らしい。

頭でわかってても、心がいふことを利かないみたいで…例えばオレの場合…首への振動が伝わるヘディングなどは、反射的に拒否してしまふことなど…が考えられる。

なるほど…。

そう簡単に復帰できるとは思っていなかったが…色々課題がある…ということとはよくわかった。

あとは…元のように動けるかどうかは、オレの努力次第ってことか。

それでも、復帰への筋道が少し見えたことで、オレは精神的に楽になった気がした。

これまでも決して後ろ向きだった訳ではないが、目標があるのとなんのでは、だいぶ違う。

おそらく『代表の出発を見よう』などと思ったのも、そんなことが理由だったかも知れない。

ネガティブな情報はシャットアウトしようと、これまでTVやラジオなどの視聴を拒んできたオレだが…やっぱりサッカーが好きなんだな…正直、試合は見たい。

日本代表の戦いに興味がないわけではないが、それよりも（オリンピックの男子サッカーは年齢制限がある為）世界各国の自分と同年代の選手が、どんなプレーを魅せるのか：そっちの方が楽しみだ。

もちろん、そこにオレがいたら、何ができて、何ができないのか：を思いながらの観戦になるのは間違いないが、ひとりのファンとして、開幕するのが待ち遠しかった。

付け加えていうなら：

オレの弟子である『チヨモ』：夢野つばさの活躍も期待している。サッカーは個人競技ではないので、ひとりでどうこうはできないが、それでも、何かやってくれる：とオレは信じてる。

それには、いかにヤツにボールが集められるかがキーになるが：ヤツとコンビを組む『みさきちゃん（緑川 沙紀）』にも密かに：いや大いに期待している。

彼女がボールを持って、ガンガン仕掛けてくれれば、ヤツへのマークも減るっもんだ。

：などと考える余裕が、ようやくできてきた。

気付けば、事故から1週間が経っていた：。

くつづく

余計なことを言うなよ

「よう！ヒマか？」

「オレは『杉下右京』か！」

病室に入ってきた親父に、思わずそう突っ込んだ。

「ヒマに決まってるだろ！」と、続けて悪態をつきたいところだったが、親父も仕事終わりに、わざわざ神奈川から都内の病院に来てるんだ。

それを考えれば、自重せざるを得なかった。

「まあな…そりゃ、ヒマじゃない…わけがない」

「だろうと思って、土産を持ってきたぞ」

「土産？」

親父はベッドサイドテーブルの上に、1冊の本を置いた。

『a i l e b l e s s e』。

タイトルはそう書いてあるが…

「読めない…。何語だ？」

「フランス語だ。『エール ブレッセ』…『傷付いた羽』っていう意味らしい」

「フランス語？誰の本？」

「何を隠そう、あの『羽山優子』の本だ」

「えっ!?!羽山優子？」

羽山優子。

オレと同郷の『大先輩』で、元なでしこジャパンの名MF。

フランスでプレー中、相手選手と接触し、靭帯断裂の大ケガを負ったが…その後懸命なりハビリの末、見事に選手として復帰。

大和シルフィードで、つばさや緑川沙紀と一緒にプレーして、チー



ムを一部リーグに昇格させる原動力となった。

昨シーズンをもって現役を引退し、今はサッカー解説者として活躍している。

つばさとは、公私共に仲が良く、オレが（サッカー選手 つばさの）『師匠』なら、彼女は『育ての親』という感じか。

出身地が同じということで、オレも地元イベントなどで、何度か会ったことがある。

「今日発売の新刊だぞ」

「へえ：羽山さん、本を出したんだ」

「それでさつき、発売イベントがあつてな…」

「ん？」

「握手とサインをしてもらつてきた」

と、自慢気に親父は本を開いた。

確かに、背表紙の裏には彼女のサインがある。

そして、その横には気になる一文が。

『負けるな、梨里!!』

そう見えた。

「親父：ひとつふたつ訊きたいことがある」

「なんだ？」

「ひとつめ。このサインの横の文字は？」

「読めないのか？お前への励ましの言葉だ」

「：ひよつとして：『梨里の父』ですとか言つたのか？」

「その通り。一緒に写真も撮つてもらつた：：ほら！」

親父はオレに、スマホの中に入っていた画像を見せた。

「…」

開いた口が塞がらない。

「なにか？」

「ふたつめ。そのイベントってどこでやったんだよ？」

オレは心を落ち着けて、もうひとつの質問をした。

「有楽町の…」

「おいおい、仕事サボって、なに遊んでるんだよ！」

「サボってはいない。ちゃんと届けを出して早退した。今なら『息子のことで…』って言えば、特にそれ以上理由を問われることもないからな」

悪びれる様子もない親父。

「仕事が終わって見舞いに来てくれたのかと思ったら、違うんかい！」

『親の心、子知らず』だな。お前の為を思って、わざわざ行列に並んで買ってきたというのに」

「並んだのかよ！どっちがヒマ人だ！」

「何を怒ってるんだ？」

「呆れてるんだよ」

「なぜ？」

「たいいてい、そういうイベントは、マスコミが取材するもんだろ？そこに早退した親父が現れて『梨里の父です』なんて名乗ったら、格好のネタじゃないか！」

「ネタ？」

「息子が入院してるのに『父親は能天気サインもらってました』なんてことになりかねないだろ？しかも写真まで」

「ほうほう…」

「ほうほう…じゃねえよ！」

「まあ、そう言うな。これもお前の為を思ってしまったことだ」

「ツーショットを撮ってもらうことがか？」

「いや違う、それはオマケだ。そうではなくて、見てほしいのは本の内容だ」

「本の内容？」

「この本は、いわば彼女のリハビリ日記みたいなものだ。負傷してから復帰…引退するまでの出来事が綴られている」

…あつ…

…『傷付いた羽（山）』…

…そういう意味か…

「怪我して絶望の淵に追いやられてから、復帰するまでの長い道のり…その中であつた苦悩とか葛藤とか…彼女の当時の心境が赤裸々に記されている。状況こそ違え、お前もこれから同じような経験をするんだ。読んでおいて損はないだろう」

「あ、ああ…まあ、そういうことなら…」

「そこには手術を受けた時のことも書いてある。事前の心構えとか…色々参考になると思うぞ」

「お、おう…つて、もう読んだのかよ」

「うむ、一気読みした」

「マジか！」

…結構、厚い本だぞ…

…オレと違って親父が頭いいのは間違いないが…

…どれだけ早くから並んで買ってきたんだよ…

「と、取り敢えず、サンキューな。あとでゆっくり読むわ」

…数ページで寝ちやいそうだが…

「それより、見たか？今日、オリンピック代表が出発したぞ」

「ああ、見た…」

「父さんもさつきニュースで見たんだが…背番号7が大勢いて、少し泣きそうになってしまった」

「死者を追悼するんじゃないだからさ、そんなことくらいで泣かないでくれよ」

…とかいって、オレも少なからず感動したけど…

「いよいよだな」

「ああ…」

「客観的に見て、どうかね。1勝1敗1分で予選通過を狙っていると  
か言われてるが」

「やってる側から言わせりゃ、3戦全勝のつもりでいるよ」

「それはそうだが…だから客観的に見て…と訊いている」

「オレにそれを言わせるか？」

「父さんは、お前が抜けた穴は大きいと思っっている。代わりに入った  
本間くんもいい選手には違いないが…1週間やそこらでチームにア  
ジャストできるとは思わない」

「まあ、そうだろうな…」

「それに、お前のようにドリブルで仕掛けて局面を開くわけでは  
なく、どちらかというと周りを使うタイプだからな。他の選手が意図  
をもって動き出さないと、ボールを持っても孤立する」

「…」

親父は（運動音痴ではないようだが）特にスポーツが得意という訳  
ではない。

だが、あらゆる種目に精通していて、知識だけは豊富だ。

今の話も…新聞やニュースの受け売りじゃなくて、ちゃんと自分の  
意見として発言している。

下手をすると評論家より評論家らしいことを言う。

もつとも経験がないだけに、説得力はまったくないんだが。

「まあまあ、苦しい試合になることは間違いないだろうけど…別にい

いんだよ、どんだけシュート撃たれたって。決められなきやいいんだから」

オレはガンダムに出てくるシャアの『当たらなければどうという事はない』という名セリフを引き合いに出して言った。

「正直言うとなな…父さんは全敗してほしいと思っている」

「はあ!?!」

オレは親父の言葉を理解するのに、数秒掛かった。聞き間違えかと思っただからだ。

「3戦全敗…それが父さんの希望」

どうやら間違いではなかったようだ…。

「何を言ってるんだ?」

「親バカだということだ」

「あん?」

「お前の代わりに入った選手が活躍して、日本を勝利に導く…なんて、父さんはどんな顔をして、それを観ていればいい?」

「親父…」

「父親としては『やっぱり梨里がいなかったのは大きかった…』そう思ってもらいたい」

「…非国民だな…」

「そうだな」

「気持ち嬉しいけど…そんな余計なこと、外で絶対に話すなよ。エライ目に遭うぞ」

「わかってる。2人だから言える話だ」

…本当に大丈夫か?…

…意外と天然だからな…

「オレは…半々だな…」

「半々？」

「親父の意見もわかる…つつうか、オレは当事者だからな。やっぱ自分が出れなかった試合で代わりの選手が活躍する…っていうのは手放しじゃ喜べない。だけど、3戦全敗とか、手も足も出ずに惨敗…つつうのは、なんだかな…って思う。日本のレベルはこんなに低いのか…って思われるのも『日本人のサッカー選手として』癩に障(さわ)るだろ。だから、誰がどうのじゃなくて、チームとして戦って、結果を残してほしい。それがオレの偽ざる気持ちだ」

「大人の発言だな」

親父は何故か嬉しそうな顔をしてした。

「当たり前だ。今はちよつと何か言えば、すぐ叩かれる時代だからな。一言喋るにも色々気を使う。オレの辞書に『炎上商法』なんて単語はないんでね」

「うむ、そうだな。この間も、国会議員がレッズサポーターを挑発して騒ぎになったしな。本人もその…炎上商法？と認めたようだが」

「は？」

「あ、お前は知らないのか。あつたんだよ、そういうことが」

「へえ…命知らずだな」

小さい時は、レッズの応援を『敵ながら』カッコいいと思ったこともある。

時おり行われる『サポーターによる360°のコレオ(人文字)』などは、鳥肌ものだ。

だけど、どんなに熱心なファンであろうと、サポーターであろうと…チームに迷惑をかける人は、客でもなんでもない。

ましてや神様でなんか、あるはずがない。

レッズサポーターのカッコ良さは『男っぽさ』にあると思っている。だけど『硬派』と『武闘派』は違う。

そこをわかっていない輩（やから）が多い。

サポーターが問題を起すことは、どこのチームでもあることだが、ことさらレッズが目立つのは、そういった『悪しき伝統（大いなる勘違い）』を引き継いでいるから…じゃないだろうか。

大事なことだから何度でも言うが、どんなにチームを愛していても、迷惑を掛けるようなら、それは背任行為でしかない。

そういうことをする人は…チームを愛してる『つもりの』自分…が好きなんだろう。

「オレの愛は、こんなに深いんだぜ！だから、何してもいいんだ！誰にも邪魔させねえ！」…みたいな。

…なんだか、DVの論理に似てるな…

話が横に逸れた。

その（一部の輩のせいでも）『過激』と言われるレッズサポーターを挑発するなど、オレにとってはあり得ないことだった。

「オレは言論の自由は否定しない。誰が何を言っても構わないけど…自分の発言は責任を持たないとな」

「まったくだ」

「だからオレはブログもしないし、SNSもしない。その辺の雑談ならいざ知らず、わざわざ証拠となるものに、無責任な発言は載せられないからな」

「懸命な判断だ」

「…で、何の話から、こうなったんだっけ？」

「お前が大人の発言をするようになったな…ということからだ」

「ああ、そうそう、思い出した。だから、親父、くれぐれも外では慎重に頼むぜ」

「わかってる」

「本当かよ…」

「それより、昨日は随分賑やかだったみたいだな」  
「ん？」

「若い女の子に、囲まれたらしいじゃないか」  
親父がニヤけた顔で俺を見る。

「あ、ああ…つて言つても、チヨモとその友達と…園田さんだけだな」  
「楽しかったか？」

「楽しい？…まあ、悪い気はしなかったな…つて、何を言わせるんだよ」

「いや、羨ましいなと思つて」  
「アホか！」

「園田さんつて娘は、いい子だな」  
と今度は急に真顔になった。

「えっ？ああ…今までオレが会つたことがないタイプだな。礼儀正しい…つていうか、生真面目…つていうか」  
「うむ、父さんもそう思う。今時、珍しい」  
「…だな…」

「ああいう娘が嫁に来てくれたらな…」  
「ああ…じゃない、オレにはチヨモが…」  
と言い掛けて、口淀んだ。

…ヨメ？…

…結婚？…

…するのか、オレたち…

「父さんは、もちろん綾乃くんのは好きだが…アスリートの嫁さんとして選ぶなら、園田さんみたいな娘もいいと思うぞ」  
「よ、余計なお世話だ！」

…と言つたものの…



…確かに、親父の言うこともわからなくはない…

…いやいや、何をバカなことを！…

…園田さん…か…

オレの頭の中で『チヨモ』と『園田さん』の姿が、替わるがわる現れた。

…うくん、どっちも、胸の大きさが…

…いや、それ以上は言うまい…

くっくくく

## 返り討ちに遭う

「園田 海未さんですね？」

「は、はい……」

「すみません。少しお話を聴かせて頂いてもよろしいですか？」

「どちらさまでしょうか？」

「失礼……私はこちらのものです」

海未に声を掛けてきた『男』は、スーツの内ポケットに手を入れると、無造作に名刺を一枚取り出した。

『週刊 新文』？』

海未が手渡された『それ』を見て呟く。

「……の、柏木です。今後、お見知りおきを」

その男……柏木……は、軽く頭を下げた。

……ついに、きたのですね……

海未はその瞬間、そう思った。

彼女が向かおうとした先は、高野の病室である。

夢野つばさに……いや綾乃に「梨里の話し相手になってほしい」と頼まれてから、4日が経った。

あまり頻繁に訪れるというのは、さすがに非常識である。

そう思い、少し時間を空けた。

東京の天気は不安定で、日中は晴れていても、夕方から夜にかけて局地的な豪雨……という日が『あれから』続いている。

今日の予報も、昨日と変わらない。

それでも「遅くならなければ、大丈夫でしょう」と出掛ける決心を

した。

だが「念のため…」と、バッグにはレインコートを入れた。

あの雨量では、折り畳みの傘などなんの役にも立たないことは、十人が十人知っていることだ。

海未は空を見ながら、家の門を出た。

柏木と名乗る男に声を掛けられたのは、まさに矢先のことだった。

しかし、不意の出来事にも関わらず、海未は落ち着いている。

何故か？

そろそろ来るんじゃないかと『予想』していたからだ。

海未がつばさの壮行会に参加した夜、高野梨里のコメントが報道された。

本人が『作文』と揶揄した、アレである。

ニュースでは主に『意識を取り戻したこと』『復帰に向けて意欲を見せていること』『日本代表にエールを送ったこと』が取り上げられた。

だが『異性関係』について触れたメディアは少ない。

一方、ネットなどでは、その『全文』を公開しており、サッカー協会も追従する形で、高野の『身の潔白』を強くアピールした。

広報の小野が、彼の意を汲んで画策した結果である。

高野が一番訴えたかったことは、自分のことでもなく、代表のことでもなく、何より『一般人である海未』への気遣い、配慮だった。

また、同日の深夜にはA—RISEが、自身のHPとブログにて「最近、心無い方々の、人を深く傷つけるようなカキコミが増えてます」とした上で、ファンに不毛なやりとりの自粛を要請。

「仮に挑発を受けても乗らないように」と、冷静な対応をしてほしい旨のコメントもした。

「敢えて、sの名前は出さなかったが、彼女たちのファンなら、それが何を指しているか、すぐにわかることだった。」

それらが奏功したのか、ネット上では高野や海未を叩く声、μ、sのファン同士…あるいはA—RISEを巻き込んだ争いを疑問視するカキコミが一気に増え…これにより、彼らの言葉を借りるなら『一時停戦』と相成った。

ところが…である。

それと入れ替わるように現れたのが…あの男だった。

最初の報告は穂乃果から入った。

そして、その日のうちに、ことり、凜、真姫…そして絵里からと、次々に同様の連絡が届いた。

フットワーク軽く、こうも1日のうちに何人もと接触できるものか…と海未は驚いたが、ひよつとして『柏木』と名乗る男が複数いるのではないか…とも思った。

彼女たちの報告内容には『週刊 新文の柏木と名乗る男』としか触れておらず、その容姿には言及していないからである。

しかし、ひとりであろうと、複数であろうと、柏木の取材目的はひとつであった。

『あの人は、今!?!』である。

ネットの影響を受けているのは明らかだった。

安易な企画である。

そもそも、μ、sが解散してから、まだ4年ほどしか経っていない。

あの人は…と言われるほど、歳を取っているわけではない。

しかし、売上数が絶対の週刊誌がなんのネタもないまま、ただそんなことに飛び付くハズがない。

おそらく、真(まこと)しやかに噂されている『不仲説』を軸に、あることないこと書き立てるのであろう。

実はそれについては『小庭 沙弥』こと、矢澤にこからμ、sメン  
バーに事前通達されていた。

曰く

「μ、sに対して好意的でない取材に対しては『すみません、急いでま  
すので…』と、ひたすらノーコメントを貫きなさいよ。どうせ喋って  
も喋らなくても叩かれるんだから…だったら余計なことを言わない  
のが、一番傷が浅く済むの。アタシ？アタシは『事務所を通してくだ  
さい』で逃げるわよ」

…と。

これはにこが高校を卒業するとき語った言葉なのだが…穂乃果  
たちは、それを思いのほか早く実践することになった。

彼女たちは一様に「ノーコメント」を貫き通し、この取材をやり過  
ごしたのである。

海未はこの情報があつたからこそ、冷静でいられたのだった。

しかし…

…にもかかわらず、海未は立ち止まった。

「どういうご用件でしょうか？」

逆に柏木の方が、驚いたような顔をした。

まさか話を聴いてくれるとは思わなかったのだろう。

「えっ？ああ…実は我々の企画でμ、sのその後を追っているんです  
が」

「はあ」

「単刀直入にお訊きします。高野梨里選手とはどういうご関係で？」

…やはり、そういうことですか…

海未は一瞬、フツと笑ったような表情を見せた。

…本命は私…ということなのですね？…  
…高野さんもA―R I S Eも…そして、シルフィードや、sのメ  
ンバーも、私を助けようとしてくださいます…  
…しかし、当の本人がなにもしないのは、おかしい話です…  
…この問題は自ら解決しなくてはなりません！…  
…これ以上迷惑は掛けられないのです…  
…受けて立ちましょう…

「高野さんとの関係ですか？高野さんは私を事故の危機から救ってく  
ださった恩人です。それ以上でも、それ以下でもありません」  
「…そうですか…。ところで、彼とはどこで知り合われたのですか？」  
「いえ、その時まで一切面識はありませんでした。居合わせたたのは  
偶然ですし…その方が高野さん…サッカー選手だったと知ったのは、  
病院で検査が終わってから…それも外からの情報で知ったところで  
す」

「その時はどう思いました？」

「大変なことをした…そう思いました。自力で逃げていれば、こうは  
ならなかつと悔いました」

「その後、あなたは何回か、彼の元へと訪れていますよね？それはどう  
いうことで？」

「えっ？」

海未は声を詰まらせた。

…見られていたのですか？…

…いつから？…

「そんな難しい顔をしないでくださいよ。彼の病院を張っていたら  
『噂通り』あなたが現れた…ってことですよ。さすがに病室まで付い  
ていく訳にはいかないですから、何をしていたかまではわかりません

けどね」

「そういうことですか。何を期待されているかは存じ上げませんが、疾（やま）しいことはしておりません、お見舞いに伺っただけです」  
「見舞い？」

「はい。命の恩人をお見舞いすることに、なにか問題があるのでしようか？」

「そこで恋が芽生えた…恋心を抱いている…ということはありませんか？」

「なっ…」

「今日もこれから、彼の元へと行くところだったのでは？」

「！」

「凶星ですね」

「お見舞いに行こうとしているのは、事実です。ですが、恋心云々とはあまりに失礼です！」

「別に隠さなくてもいいじゃないですか。お互い未婚なんですし」

「そういうことを言っているではありません。それに高野さんには彼女が…ハッ…いえ、なんでもありません」

「ほう、彼には彼女がいるんですか？」

「し、知りません！」

「ひよつとして、その人は…『夢野つばさ』じゃありませんか？」

「…知りません…」

「ははは…あなたは嘘がつけない人のようだ。顔には『そうです』と書いてある」

海未はトランプの『ババ抜き』が異常に弱い。

それはポーカーフェイスが保てないからである。

相手がジョーカーを抜こうとすると、明らかに安堵の表情を見せ…それ以外を引こうとしたら、今にも泣き出しそうな顔をする。

バレバレなのだ。

柏木からの想像もしていなかった質問に、海未の脆さが露呈した。

不意をつかれ、弓道で培った精神力を発揮できなかった。

「夢野つばさは、今、国内にいませんよね？その間に逢瀬ですか…」

「ち、違います！そういうつもりはありません！」

「わかりました…そういうことにおきます。では、質問を変えましょう…ズバリ、あなたのアイドル復帰はありますか？」

「えっ？*ム*、sじゃなくて…私…ですか？」

「シルフィードとA—RISEと、その話をしてたんじやないんですか？」

「!？」

…なぜ、それを…

「言ったでしょ？彼の病院で張ってたって。そうしたら、夢野つばさだけでなく、アクアスターも現れて…最後はあなたと一緒に出ていったんでね…おもしろそうだったから、店までご一緒させてもらったよ」

「…」

「そうしたら、A—RISEまでやってきて…お陰でいい写真が撮れたよ」

「隠し撮りですか！」

「そんなことはない。店から出て、外で話しているところを『堂々と』撮らせてもらいましたよ。もっとも、あなたたちは気付かなかったようですが」

「卑劣です」

「そうかな？別に疚しいことをしてるんじやないなら、写真の1枚や2枚、構わないんじゃないのかい」

「変なことを書いたら、名誉毀損で訴えますよ！」



「安心してください。訴えられて負けるような記事は書きませんから  
…では、お時間を取らせました。私は次がありますので、この辺で失  
礼します。あなたは彼のところへどうぞ…。ごゆっくり」  
そう言うのと柏木は、アツという間に海未の前から姿を消した。

呆然とする、海未。

完敗だった。

彼女の強い正義感が、完全に裏目に出た。  
相手が1枚も2枚も上手だった。

…にこの助言を聴いておけば…

海未の顔に悔しさが滲む。

思わず、拳を握り込んだ。

思いきり叫びたくなつた。

しかし、ここは住宅街のど真ん中。

ぐつと堪えた。

替わりに、目から熱いものが零れ落ち、頬を伝った。

…私はなんて愚かなことをしたのでしよう…

…皆さんの好意を無にしてみました…

海未は…まるで、蠟人形かのように微動だにせず、しばらくそこに  
立ち尽くしていた…。

くつつくく

沙紀、怒る！

《つばさ、絶不調!!》

《シュートゼロ、存在感なし》

《エースに何が?》

スポーツ新聞の見出しには、そんな文字が踊った。

サッカー女子オリンピック代表…なでしこジャパンの練習試合の  
1戦目。

本番のブラジルを想定したアルゼンチンとのゲームは、良いところ  
なく、0―3で敗れた。

その大きな要因は、夢野つばさにあった。

日本はエースである彼女にボールを集めるが、この日はいつもの様  
なキレがなかった。

ドリブルで仕掛けるわけでも、ロングパスで局面を打開するでもな  
く、消極的なプレーに終始した。

そして、つばさの前に転がってきたコーナーキックのこぼれ球…こ  
こから『デビルウイング』をぶちかまし、ゴールを決めるのが、日本  
の得点パターンのひとつなのだが…ここでもなぜか、シュートを撃た  
ずパスをして、チャンスを逃した。

試合後、マスコミの取材に対し

「すみません…見ての通りです」

とだけ言い残し、つばさはバスに乗り込んだ。

これは非常に珍しいことだった。

つばさは長らく『芸能界』に身を置いている。

今はサッカーに専念しているが、事務所を辞めたわけではない。

その所属先は、芸能界でも1、2を争う『礼に厳しい事務所』で、こ  
ういったマスコミ対応においても、常に誠実に向き合うことを指導さ

れてきた。

それ故、浅倉さくらもアクアスターも、そしてこの夢野つばさも、マスコミ関係者からの評判はすこぶる良い。

悪い話を聞いたことがない。

また、つばさは『大和シルフィードの広報担当』として、ゲームに出ても出なくても、勝つても負けても、取材には丁寧に応じてきた。

だが、この日は違った。

恐らく初めての『取材拒否』。

体調不良？

プレッシャー？

そんな時に、遠く日本から聞こえてきた『高野梨里』との噂。日本時間の『明日』発売の週刊誌に、その記事が載るといふ。

「つばさ…大丈夫？…」

宿舎で同室の緑川沙紀が、心配して声を掛けた。

「…ヴェル…」

「色々あるのはわかるけど…アンタがしっかりしてくれないと…」

「ごめん、わかってる…」

つばさは、手を合わせて謝った。

今、なでしこジャパンにおいて『つばさ』と『高野』の関係を知っているのは沙紀だけだ。

正確に言うと『小学校時代の同級生』だとか『高野にサッカーを教わった』くらいのこと、周知の事実である。

しかし、いわゆる『彼氏彼女の関係』だということは、知られていない。

高野もつばさも、隠しているわけではないが、敢えて言う必要もないと考えていた。

だから

「バレたらバレたでいいや…」

と思っっている。

だが、そもそも『そういう関係なのかどうか』が、怪しい。

お互い好意を持って接しているが、それが結婚に繋がるかどうかは、まったく未定だからだ。

しかし、この大事な時期に、そんなことが報じられようとは…。

当然、その噂はチーム関係者や、選手も知ることになり、試合終了後には「どうなんだ?」「どうなの?」と質問攻めに遭う。

「それは…帰国してから話します。今はサッカーに集中しないと…」

とお茶を濁したが、一番集中していないのは、つばさ本人である。

仮に本人が否定しようとも、今日のデキの悪さは『それが起因している』と結びつけたくなるのは、ごくごく自然のことだった。

「週刊 新文も、どうしてこのタイミングかな…」

その憤りは本人より、事情を知っている沙紀の方が強かった。

「とにかく、いい? 高野くんの件は確かに残念だったけど、アンタが言うように『死ななかつた』わけだから…アンタが元気にプレーすることが、彼の一番の特効薬でしょ?」

「うん、わかっている。わかっているけど…」

「サッカーは個人競技じゃないの。アンタひとりなら、その結果がどうこうしても関係ないけど、そうはいかないのよ! 是が非でも、アンタが活躍してくれなきゃ困るわけ」

「う、うん…そうだね…」

「何を迷ってるのよ!？」

「頭では理解してるの。取り敢えず、今はサッカーだって。でも、プレーしていると、梨里なら『ここでドリブルするのかな?』とか『一回リターンをもらってから、シユートなのかな』とか、思っちゃって…」

「なんで彼が出てくる…まあ、わからなくはないわよ。アンタにとっ

て、彼が如何に大きな存在かは。本当なら2人で一緒に、この地に来てるハズだったんだから」

「…」

「それでも、その無念を力に変えてくれないと困るのよ!!」

「ヴェル…」

「アタシには…その…アンタみたいに大事な人はいないし…気持ちをわかかって言われても、正直ムリだけど…チームの為とか、日本の為とか言わないから…お願い!アタシの為に、その力を貸して!!」

「えっ?」

「アンタがチームに来たときは『芸能人が何しに来たの?』って、思ってたわ。でも、その考えは一瞬で砕かれた。あの練習初日のシユートを見せられてからね…」

チームに合流したつばさは『シユートを撃つシーンが欲しい』とのマスコミの要求を受け、希望通りそれを披露した。

目の覚めるような、鮮やかな左足でのボレーシユート。

その時、パスを出したのが沙紀だった。

「懐かしい話をするのね…。あの時は…すごく意地の悪いボールだったことを覚えてるわ」

「そうね。結構、速くて強めのライナー蹴ったのよね…。だけどアンタは、それを事も無げに、ジャンプしながら胸でトラップして…ボレーでゴールへと叩き込んだ…。バケモノだと思ったわ」

「バケモノ…って…」

「それから、今日まで、ずっと一緒にプレーしたけど、アタシはただの

1回でも、アンタに勝てたと思っただことはない…」

「えっ?」

「悔しいけどね」

「そんなことないよ。だってヴェルは脚だって速いし、スタミナだってあるし…」

バシッ!

いきなり沙紀の右手が、つばさの左頬を捉えた!

「あっ!」

声をあげたのは、何故か叩いた沙紀だった。

「ご、ごめん…芸能人の顔を叩いちゃった。やるならボディだった」

「…」

つばさは、無言で沙紀を見る。

何故叩かれたのか、理解していないようだった。

「アンタはアタシの気持ちを理解していない!」

「えっ?」

「わかってるわよ、自分の長所も短所も…。わかってるわよ…そんなこと。だけど、日本のエースは、アタシじゃなくて『夢野つばさ』…マスコミ含めて、日本中がそう思ってるじゃない。そんな現実が見えないほど、アタシはバカじゃないわ」

「ヴェル…」

つばさがサッカー選手に転向してから、同じ年ということでも、練習パートナーに指名された、沙紀。

それがきっかけで、常に行動を共にしてきた。

そのお陰で『阿吽の呼吸』を習得し、息の合ったプレーでゴールを量産、チームを勝利に導いてきた。

そんな2人はシルフィードの『JKコンビ』と呼ばれ…そして、それはいつしか、なでしこジャパンの『つばさ&みさき』…『ゴールドコンビ』と評されるようになった。

緑川沙紀を縮めて『み・さき』。

名付けられた当初は「うまいことを言うな…」と思った沙紀だったが、すぐに『つばさありき』のネーミングに、疑問が湧いた。

ファンやマスコミから「みさき『くん』などと呼ばれようなら「アタシは太郎じゃない！」とか「父親は画家じゃないから！」とか思っていたという。

しかし、どんなに頑張っても、常に『夢野つばさ』に話題を奪われてしまうことに、忸怩たる思いでいた。

それは例えば…同点ゴールがつばさ、逆転ゴールが沙紀だとしても、見出しはつばさ。

その逆であっても、見出しはつばさ。  
理不尽だと思った。

…仕方ない…

…つばさのプレーには華がある…

…元々ルックスだっていいんだし、それはそれで、認めざるを得ない…

そう卑屈になった時期もあった。

だが、彼女がただの天才だったわけじゃないことを知っている。

練習を重ねて、今がある。

活躍の裏には、ちゃんとした努力があった。

一緒にトレーニングをして、それを目の当たりにしてきた。

だから『つばさ憎し』という感情は不思議と起きなかった。

そして、もうひとつ。

シルフィードという活動を休止して、この世界に飛び込んできた覚悟…。

…そう、つばさの方がよっぽど苦しかったはず…

…アタシたちにはないプレッシャーがあった…

…わかってる…わかってる…

…アタシは、夢野つばさにはなれない…

…緑川沙紀だ…

…みさき？ いいじゃない、それで…

…つばさがいなければ、そんなあだ名さえ付けてもらえなかったかも知れないんだから…

…こうなったら、2人で頂点目指すわよ！…

沙紀はつばさを敵視するどころか、リスペクトしていた。

「でもね、だからこそ…頑張つてほしいのよ。アタシが認めたバケモノが、その実力を発揮しないまま…なにもしないまま終わるなんて困るのよ」

「…」

「いい？アタシのプレーを一番理解してくれてるのは、アンタしかないの。逆にアンタを一番理解してるのは、アタシしかない。望むなら、90分チャージを掛け続けてやるわ。ゴール前でファール受けまくってやる！だから、お願い！アタシと一緒に闘って！今、この時はサッカーに集中して！」

沙紀はそう言うと、土下座をした。



「ヴェル…やだ、頭を上げて…土下座なんて…」

「アンタがサツカーに集中するっていうなら、やめるわよ」

「するよ、するから…」

「本当だろうね」

「誓うわ」

「よし！」

沙紀は膝をパンパンとはたきながら、ゆっくり立ち上がった。

普通、土下座は許しを請う者がするのだが、この場合は逆だった。

何故か沙紀の方が

「許してやろう」

と、つばさに言った。

続けて

「さつきはゴメン…思わずカツとなつて…」

と謝罪した。

「…初めてかも…あんなことされたの…。結構、痛いんだね…」

「ホント、ゴメン…」

「大丈夫。ありがとう、お陰で目が覚めた。うん、そうだね…今はサツカーに集中しなきゃ…うん、うん…」

つばさは、何度も何度も頷いた。

…つばさ…

…ごめんよ…こんな方法でしか『やりよう』がなくて…

…これで解決したとは思えないけど…

…でも、アンタなしでは、闘えないんだ！…

…頑張ってくれ…

沙紀は、気合いを入れ直しているつばさを横目に、そう祈った…。

くつづく

## 新文のスクープ（その1）

《大物カップル！高野梨里と夢野つばさ!?!》

《高野梨里 二股疑惑!?!》

《元スクールアイドルの裏切り行為!?!》

『週刊 新文』は、3大スクープと銘打って、センセーショナルに売り出された。

〱 オリンピックの開幕を直前に控え、日本国内でも各種目、メダル獲得の期待が高まっている。

〱 そんな中『悲劇のヒーロー』と呼ばれているのが、男子サッカーオリンピック代表候補だった『高野梨里（20）』だ。

〱 ご存知の通り、オリンピックのアジア最終予選でロスタイムに『ジョホールバルの再来』と呼ばれる劇的なゴールをあげた、日本が誇る中盤のドリブラーである。

〱 当然、オリンピック本番でも、その活躍が期待される選手であったが、合宿の直前、交通事故に巻き込まれるアクシデントに見舞われ、一時は意識不明の重体に陥った。

〱 幸い一命は取り留めたが、しかし頸椎損傷という重傷を負い、今日現在入院中だ。

〱 残念なことに、オリンピックに出場できなかつたばかりか、今後の選手生命まで危ぶまれている状況である。

〱 ここまでは、既に報道されている通りで、今更説明する必要もないだろう。

〱 先日、復帰に向けた決意と、日本代表に送ったエールが公開されたが、本人の無念はいかほどのものか…我々では計り知れず、この不運には同情せざるを得ない。

〱 しかし、彼にはそんな悲しみを癒してくれる、素敵な彼女がいる

ことが、我々の取材で判明した。

＜その人の名は『夢野つばさ（20）』である。

＜モデル、アーティストとして活躍したあと、サッカー選手に転身し、いまや、なでしこジャパンのエース的存在となっている、あの夢野つばさである。

＜「ええっ!？」と驚いたかたも多いだろう。

＜夢野つばさは、いわゆるスキャンダル処女で、それこそ、これまで浮いた話のひとつもなかったのだから、無理もない。

＜しかし、中には「やっぱり…」と思った方もいるかも知れない。

＜2人は小学校時代の同級生であり、それが縁で夢野つばさがサッカー選手に転身する際、高野梨里に諸々レクチャーを受けた…というのは、関係者やファンなら、あまりにも有名な話である。

＜だからこそ「もしかしたら、そういうことがあるかも知れない」と考えていた人も多いはずだ。

＜関係者の話によると、やはり二人は「それだけの関係ではない」という。

＜それが判明したのは、高野が事故に遭った当日の夜。

＜一報を聴きつけ、病院にはサッカー協会やオリンピックピック代表の幹部など複数の関係者が集まった。

＜そこに現れたのが夢野つばさであった。

＜報道陣を避けるように、緊急外来口から入ってきたという。

＜「同じオリンピック代表として、居ても立ってもいられなくなつて」と、その理由を述べた夢野。

＜その時は混乱の中にあつて、特に誰も疑問には思わなかったが、冷静に考えてみれば「あの状況下で単身病院に駆けつけるというのは、よっぽどのこと」と、その場に居合わせた関係者のひとは明かす。

＜「確かに、事故については速報が流れたくらいですし、その時点で知っていることについては、まったく不思議じゃありませんが、身内

でもない人があの時点で病院に駆けつけるといのは、ちよつと早すぎますよね」と前出の関係者。

＜しかし、それだけなら同級生やサッカーの師匠という間柄であつて、本当に心配してのことでは？と思わなくもない。それに対し「もちろん、それはあると思いますが、私にはもつと親密な間柄に見えました。そこには当然、ご両親がいたのですが、つばきさんと高野のお母さんが会話している様子は『仲の良い嫁と姑』という感じでした」と言い「とても、単なる顔見知りではなかった」とも語った。

＜交際期間は不明だが、その様子からすると、両親公認の中であり、かなり長い間、密かに愛を育んできたことが窺い知れる。

＜それを裏付けるように、その後、病院内では、度々、夢野の姿が目撃されている。

＜長身の彼女は、それだけでも目立つ存在なのだが、特に変装することもなく、人目も憚らず来院していた。

＜自身もオリンピックピックを直前に控え、色々大変な時期である。にも関わらず、ほぼ毎日のように高野を見舞っていたようだ。

＜意識が回復した今も、基本的に高野は面会を拒否しているが、彼女だけは別らしい。

＜当初は投薬の影響で眠っていることが多かった高野だが、夢野は静かにその様子を見守っていたという。

＜「彼女は幼いときに父親を交通事故で亡くしていますからね。同じようなことが起きて、相当ショックだったようです。ですから、必死に回復を祈っていたと思いますよ。もし最悪の事態になっていたら、とてもオリンピックピクどころの騒ぎじゃなかったかも知れません」と、こちらは夢野をよく知る事情通。

＜この献身的な回復祈願の甲斐もあり、幸い高野は一命を取り留めた。

＜そして彼女自身のオリンピックピク欠場も回避されたのだった。

ここまでを読み終えて高野は

「浅い記事だな…」

と呟いた。

…そもそも誰だよ？関係者とか事情通って…

…まあ、いつかはわかることだし、バレて困るわけじゃないが…

…このタイミングで出すかね!?!…

高野の顔が険しくなった。

「このタイミングしかなかったんだろ？」

病室にいた父親が言う。

高野にこの週刊誌を見せた張本人だ。

「どうということだよ？」

「彼女が発する前にこの記事を出す…というのは、いくら新文とはいえ、気が退けたのだろう。不祥事でも不名誉なことでもないが、さすがに熱愛報道で取材陣が殺到すると、世間の反応は『新文よ、大事な時期に何報じてるんだ!?!』となりかねないし、バツシングは免れない」

「実際にそうなってるけど？」

「いや、彼女は今、日本にはいないから、下衆な芸能リポーターの追及を受けるようなことはない」

「でも、マスコミは結構詰めかけてるだろ？」

「現地にいるマスコミで、このタイミングでそんなことを訊く人はいないよ。そういう人は…よっぽど空気が読めないか…炎上覚悟の目立ちがり屋だ」

「そうかな…。でも、それなら帰国してからだって構わくないか？」

「彼女たちが、いつ帰国するかわからない」

「ん？」

「早ければ1週間で帰ってくるだろうが、決勝まで残れば1ヶ月だ。仮に後者だった場合、折角のスクープネタを塩漬けすることになる。」

その間に他社に出し抜かれてもしたら、目も当てられない」  
「なるほど」

「それに普通に考えれば、お前は入院中、向こうは本番直前。記者会見など開いたり、コメントを発表する余裕はない」

「そりゃあ、まあ」

「先に関係を知らしめておけば、結果がどっちに転んでもネタになる。

活躍できれば『梨里のお蔭』、できなければ『梨里のせい』だ」

「『オレありき』か…」

「だから、このタイミングなんだよ」

「へえ…」

…言われてみれば…つてとこだな…

高野は、父親の話に妙に納得した。

しかし、記事には続きがある。

高野にとっては、こっちの方が、頭が痛いことだと感じていた…。

くつづく

## 新文のスクープ（その2）

高野は週刊誌を読み進める。

＜しかし、高野を支えているのは夢野だけではなかった。彼にはもうひとり、面会を許す女性がいるのだ。

＜その人は『Sさん（20）』という。

＜Sさんは伝説のスクールアイドル『M's』の元メンバーで、現在は都内の大学に通う3年生だ。

＜M'sで活動していた当時は作詞を担当しており、等身大の彼女たちの感情を表現した詩は、多くの若者の共感呼び、今なお歌い継がれている。

＜彼女は歌唱力、運動神経の良さにも定評があり、スティックな性格も相まって、チームを引っ張るリーダー的存在だった。

＜また趣味は書道、特技は弓道という和風テイスト漂う、文字どおり、文武両道のクールビューティーである。

…へえ、弓道ねえ…

…初めて彼女の後ろ姿を見たとき、オレの脳裏に浮かんだ『大和撫子のイメージ』は、まんざら間違いじゃなかった…ってワケだ…

＜さて、まずは彼女と高野との接点だが、あの事故と一緒に巻き込まれたのがSさんだったらしい。

＜衝突して向かってくる車に対し、逃げ損なったSさんを助けたのが、高野だったということだ。

＜高野と一緒に救急車で運ばれたSさんだったが、検査の結果、掠

り傷だけで、頭とかは打っておらず、幸い大事には至らなかつた。

＜しかしSさんは、高野が意識不明の重体と知ると、一晚、回復を祈り、病院内に留まったという。

＜高野が意識を取り戻してからも何度か、彼を見舞っている。実は我々が取材した当日も、病院へ向かう最中だった。彼女曰く「助けていただいた恩人を見舞うのは当然のこと」だという。今時、実に義理堅い、健気な女性である。

＜しかし、夢野つばさ不在時に、彼と二人きりになるといのは、いかがなものか？

＜実は高野の病室で、夢野つばさとSさんは、同席している。それも一度ならず二度までも。

＜共に、訪れるには純粹な理由があり、たまたま見舞った時間が同じだったということなのだろう。

＜また後述するが、二度目に同席したときは、まず夢野が星野はるか和水野めぐみ（つまりアクアスター）と一緒に病室を訪れ、そこにあとからSさんが合流している。

＜さらに4人は、病室を出たあと一緒に出掛け、なんとA—R I S Eと共に食事をしているのだった。

＜それだけ「親密な付き合い」をしているわけだから、Sさんが高野と夢野の関係を知らないというのは、逆に不自然なことである。

＜実際、我々の取材に対し「高野さんには彼女がいますので…」と証言したのはSさんのみだから。

＜…であるならば、夢野がオリンピックで不在の中、ひとり病室に乗り込むというのは「いくら恩人の見舞い」とはいえ、あまりにも軽率な行動ではないだろうか？

＜李下に冠を正さず。

＜その仲を疑われても、仕方がないことである。



…おいおい…ツツコミどころ満載だな…

…そもそも、園田さんはあの日以来、ここには来ていない…

…まあ、オレはその必要はないと思っていたから、別に気にもしていなかったが…

…いや、待てよ…

…本当はここに来るつもりだった？…

…だが、その途中に捕まり、やむ無く予定を取りやめた？…

…だったら、それは本当にとぼっちりだ…

…チツ！なんてことだ…

高野は舌打ちをして、一旦、週刊誌を閉じた。

だが、記事はまだ続いている。

苦々しく思いながらも、その文章に目を落とす。

〈さて、もうひとつ。疑問がある。

〈何故、彼女は高野と一緒に事故に巻き込まれたのか…ということだ。

〈これについて高野は「女性と一緒にいた事実はない」とコメントを発表している。同じようにSさんも「事故現場で居合わせたのはまったくの偶然で（彼が高野選手だということも）まったく知らなかった」と、我々に語った。

〈片やサッカー界のホープ。片や伝説の元スクールアイドル。この広い日本で、2人が偶然居合わせるといふ確率は、天文学的数字であり、にわかにその話を信じることができない。

〈Sさんはこの日、大学の弓道サークルの飲み会に参加していたが、二次会を断り、早々に帰宅したという。事故はその道中で起こった。

〈「もしかしたら、そのあとデートの待ち合わせでもしていたのかも

知れませんか」とは、同じサークル仲間の話。  
「なるほど、それなら少し合点がいく。」

「いかねえよ!」

黙読していた高野は、思わず声を出した。

「どうした?」

「なんだよ、この『そのあとデートの待ち合わせだったかも知れない』とか、テキストな話は…。それに『偶然会う確率は、天文学的数字』だと。そうだろうとなんだろうと、そうだったんだから仕方ないだろ」「論点をぼかして、話題をすり替える。ゴシップ誌の常套手段だよ。数字の根拠を明確にしてないだけで、間違っではない」「

「ああ?」

「確かに『地球上で偶然会う確率』はそうなんだろう。だがそれは世界の人口に対しての話であって、日本の人口に対してなら? 都内なら? 新宿区なら? という数字ではない」

「…」

「文章を読んでも『○○だろう』『○○らしい』とか、断定した言葉はひとつもない。この辺が上手いところだな」

「感心してる場合じゃないだろう」

「向こうは売れてナンボだからな。その為ならなんでもする」

「人を不幸にしても…か?」

「…しかし、真実はひとつしかない…」

「コナンみたいなことを言うなよ…」

「まあ、お前のことはどうでもいいが、彼女のことは心配だな」

「ああ…」

高野は最後まで読むのをやめようかと思ったが、彼女を守る為、内容の確認だけはしようと思った。

~ ~ ~ ~ ~

## 新文のスクープ（その3）

〈さて、そのSさんであるが…ネット上では、わりと早い段階から、高野梨里と一緒に事故に巻き込まれたことは話題になっていた。

〈そのSさんの名前が検索ワード等で急浮上したことにより、彼女たちのファンから、アイドル活動再開希望の声が増えている。元々、そういう話がなかった訳ではないが、これを機に爆発したようだ。

〈そこで、元メンバーに直接取材を申込み、彼女たちの今と、ユニット復活の可能性を探ってみた。

〈まずはM，sのリーダーで、現在は都内の大学に通う『Kさん（20）』。

〈実家が和菓子店というのはファンには有名な話で、ここは『聖地』と呼ばれている場所のひとつとなっている。

〈Kさんは、たまに店頭に立つこともあるらしい。明るく屈託のない笑顔は今も健在で、彼女逢いたさに訪れる客も少なくなかないという。

〈我々は、そんな彼女の通学中に遭遇し、取材を申し込んだ。当時と比べ、かなりふつくらとしたように見える。

〈人懐っこい微笑みで我々に挨拶してくれた彼女であったが、アイドル活動の再開について話を向けると「すみません。急いでいますので…」と丁寧に一礼して、その場から去ってしまった。

〈大学の同級生によると、普段はムードメーカー的役割で、周囲にはいつも仲間がいるという彼女だが、スクールアイドル時代の話はしただけがないという。

〈現在はマスコミ関係の制作に携わりたいと、就活中のKさん。彼女のポテンシャルなら、裏方ではなく、華やかな表舞台の方が良く似合うと思うのだが…。

「う〜…『かなりふつくら』したとか…あんまりだよ〜」  
穂乃果が大きな声で叫ぶ。

高野梨里がベッドで週刊 新文の記事を読んでいるのと、時を同じくしてμ'sのメンバーも、ここ…穂乃果の部屋…に集まって、それを見ていた。

「まあ、そこは間違っていないから、仕方ないにや〜」

「そんなに太ってないよ〜」

「それは穂乃果ちゃんが認めてないだけにや〜」

「いやいや、そんなことないって〜」

「あるわよ。私たちが忠告してるにも関わらず、全然言うことを聞かないんだもの。まあ、もうアイドルじゃないんだし、私たちには関係ないことだけど〜」

真姫は少し冷ややかな目で、穂乃果を見る。

「そんなに変わったかな？体重だって少ししか増えてないんだけど〜」

「毎日見ていけば、わからないかもしれないけど、久々に見ると一目瞭然なのだと思っわ〜」

絵里の言葉も手厳しい。

「だって、高校卒業してから、まともに運動らしい運動してないだもん〜」

「それを『自堕落』っていうのよ〜」

「うう…にこちゃんまで海未ちゃんみたいなことを…」

穂乃果はさすがのような目でこもりを見たが、彼女は「うふふ…」と笑って、それを受け流した。

「そ、それにしても…訊かれてもいないことまで、よく書くよねえ。穂乃果は、一言も就活の話なんてしてないのに〜」

形勢が不利と知った穂乃果は、慌てて話題を変える。

「確かに。そのリサーチ力と、それを『さも聴いたかのように』書く能

力は大したものね…」

真姫は皮肉たっぷり、呟いた。

「次は凛のことが書いてあるにや」

集まったメンバーは、その先の記事を読む。

「～続いて直撃したのは小柄ながら、バツグンの運動神経で人気を博した『Hさん（19）』。現在は専門学校に通っている。」

「～授業終わりに訪ねたのだが…記者は彼女の外見が変わっていなかったことに、まず驚いた。話し方こそ、大人っぽさを感じたものの、髪型含め、見た目はまったく同じで、恐らく当時の写真と比べても遜色ないであろう。」

「～我々の取材に対し、落ち着いて受け答えしてくれたものの、アイドル活動再開について話を振ると「そのことについてはノーコメントで…」と、口を閉ざしてしまった。」

「～噂によると彼女には、付き合っている男性がいるとのこと。同じ専門学校に通うイケメンらしいが、その件についても顔を赤らめながら「ノーコメントです」と、答えてもらえなかった。」

「～これは全員に言えることだが、今は一般人として生活している元メンバーたち。彼女たちのルックスを見れば、男性が声を掛けない方がおかしいというものだ。彼氏のひとりやふたりいたとしても、全然不思議ではない。」

「～それはさておき、スポーツクラブのインストラクターを目指して勉強中だという彼女。キレキレのダンスを貴方が直接教わる日も、そう遠くないと思われる。」

「～もしかしたら、その時に、恋のチャンスが貴方にも訪れるかも知れない。」

「にや～！凛は『何にも変わってない』…って書かれてる…。これは誉

められてるのかにや?」

「そうだと思うよ」

ことりはニツコリと微笑んだ。

「う〜ん…」

「どうしたの?」

「だって、ことりちゃん! 凜はもうすぐ二十歳だよ! 大人っぽく、女っぽくなりたいのに…まるで成長してないみたいな書かれ方に…」

「いいじゃん! 穂乃果みたいに太ったとか言われるよりは」

「それはどうでもいいにや」

「うう…」

凜の『にべもない』一言に、穂乃果は撃沈した。

「まあ、老けたとか言われるよりは、格段にいいんじゃないかしら。それに、私たちから見ても、凜は凜のままだし」

「私もそう思う。凜がどういう女性を目指しているのかわからないけど…」

「真姫ちゃん、絵里ちゃん…。凜の理想は、やっぱり『かよちん』なんだにや…。凜も誰からも愛される人になりたいにや」

「アンタには無理よ。花陽の『愛され力』は天性のものなんだから」

「そんなことは言われなくても、凜が一番知ってるにや!」

「そりや、そうね…」

ここは愚問だったと、納得した。

「それでどうなの? 彼氏とはうまくいつてるの?」

真姫の問いに、そこにいるメンバー全員が、興味津々で凜を見る。

「にや!? 彼氏?」

凜の顔が瞬く間に、真っ赤になった。

「アタシたちに、全っ然、報告がないじゃない」

「にや? にこちゃん…どうもこうも…まだ付き合っつて、そんなに経ってないし…」

「まさか凜ちゃんに彼氏ができるとはねえ」

「あら、穂乃果。それは失礼よ」

「違うよ、絵里ちゃん。そういう意味じゃなくて…凜ちゃんは花陽ちゃん一筋だと思ってたから、まさか男の人と付き合うとは…って」  
「それはそうだけど…」

「正直、凜も戸惑ってるにや。凜のこと『凄い好きだ』って言ってくれて…そんなに想ってくれてるなら、受け入れてもいいかな…って感じで…」

「一回、会ったことがあるけど、顔も悪くないし、優しそうな人だったし…何か不満でもある？」

「うーん、真姫ちゃん…例えばだけど…彼はご飯を2杯しか食べないにや」

「えっ?」

「かよちゃんなら軽く4〜5杯食べるから、なんか物足りないんだにや…」

「花陽と比較する!?!」

と真姫。

言葉を発したのは彼女だが、そこにいた全員が同じことを思った。

「花陽ちゃんを基準にしたら、彼氏さんが可哀想かな…」

さすがに、ことりも苦笑する。

「そうよ、花陽に敵う相手なんて、フードファイターくらいなものよ」  
「にこも追従する。」

「例えばって、言ったでしょ!」

「他には?」

「かよちゃんなら、凜が『あそこ行きたい』って言ったら『うん、いいよ』って言うってくれるけど、彼は『そこよりもこっちに行ってみよう!』とか言うにや」



「はあ…それは凜、無理があるわよ」

「真姫ちゃん、どういうことによ？」

「凜の中から花陽を消さない限り、一生結婚なんてできないってこと…」

「えく!?凜から、かよちんを消すのなんてムリにや〜」

「でしょ?だったら彼氏と花陽は分けて考えないと…」

「それはわかってる…にや…」

「まあ、気持ちはわからなくないけど…。私も花陽がそばにいてくれないと、時々不安になるし。彼女はそこに存在するだけで、精神安定剤みたいな安らぎを与えてくれるから」

「真姫ちゃん…」

「でも…だから中途半端に付き合うのは、よくないと思うわ」

「…うう…」

「まあ、凜の彼氏の事は、私たちがとかやくいうことじゃないけど…こういう事が記事になる…っていうのは、頭にくるわね。私たちはまだいいにしても、直接関係のない第三者のことを載せる…っていうのは…認められないわ」

「絵里の憤りに、全員が大きく頷いた。」

くつづく

## 新文のスクープ（その4）

記事はまだまだ続く。

▽次に会ったのはスラリとしたスタイルながら、豊かなバストの持ち主で『ユニットNo. 1の美女』と呼び声高い『Aさん（21）』だ。

▽実際、高校在学中から、各芸能事務所がスカウト合戦を繰り広げていたという噂があるほどだ。

▽しかし、彼女は引く手数多（あまた）の誘いを断り、現在は都内の外語大学に通っている。

▽Aさんと言えばポニーテールをしている印象が強いが、今はむしろ、髪をおろしている方が多いらしく「ここ1年でグッと大人の色気が増した」と評判が高い。

▽当然、そんなAさんを周りが放っておくはずもなく、アタックする男子はあとを絶たないという。しかし今のところ、彼女のハートを射止めた者はいないとのこと。

▽記者も、突撃取材を試みた際、彼女の美貌と吸い込まれそうな蒼い瞳に、完全に心を奪われてしまい、危うく本来の趣旨を忘れるところであった。

▽ふと我に返り、本題であるアイドル活動の再開について尋ねたところ、彼女はうつすらと笑みを浮かべて「без коммента риев」と言い残すと、そのまま町中へと消えていってしまった。帰って調べてみると、それはロシア語で「ノーコメント」と言っていたことがわかった。

※Aさんは祖母がロシア人のクォーターである。

▽通訳になる為（ロシア語は堪能だが）苦手な英語を猛勉強中らしい。近い将来「美しすぎる通訳」として、対象者よりも話題になることは間違いないだろう。

「なに？この気持ち悪いほどの礼賛記事は？新文の記者にいくら渡したのよ」

露骨に嫌悪感を現したのは、にこだった。

「絵里ちゃんが美人なのは認めるけど、ちよつと誉めすぎだよね」と穂乃果も不満そうだ。

「明らかに『絵里推し』ね。昔からのファンなのかしら？」

真姫の言葉に、絵里は

「さあ…」

とだけ答えた。

「いいなあ、絵里ちゃんはモテモテで」

「穂乃果だつてモテるでしょ？」

「うくん…友達はいっぱいいるけど、告白されたことは…」

「絵里ちゃんは彼氏作らないの？」

「ことりが、絵里の顔を見る。」

「そういうわけではないけど…いい人がいない…つていうか…」

「そりゃあ、絵里ちゃんに見合う人は、なかなかいないよね」

穂乃果がそう言うと、他のメンバーも同意した。

「違うの。見た目がどうかじゃなくて…それこそ、さっきの凜の話じゃないけど、希を超える存在じゃないと納得できないというか…」

「なんだ、絵里ちゃんも他人（ひと）のこと、言えないにや」

「ええ、だから私は凜のこと、否定しなかつたでしょ？」

「そうだったにや！」

「やっぱり、付き合いが長いし…全部言わなくてもわかってくれらるというか…」

「わかるよ、かよちゃんも一緒にや」

「もつと言うとね…μ sに入つて…あなたたちに出会つて、私は変わった。今はあなたたちという時が、一番リラックスできる時なの。素の自分でいられる…というか。だから…私が本当に『好き』つていう人が現れて、心を許せる人が現れない限り、お付き合いとかは…」

「ひよえく…穂乃果なんか、好きって言われたら、それだけでクラッと来ちゃうけど」

「アンタは単純過ぎるのよ」

「それが穂乃果ちゃんのいいところなんだけどね…」

「ことりちゃん…暗に穂乃果のこと、バカにしてない?」

「そ、そんなことないよ…」

「次はそういうアンタのことが書いてあるわよ」

「ことりのこと?」

〈4人目は『正統派美少女』の『Mさん(20)』である。

〈高校時代の一時(いつとき)メイドカフェで『○ナリンスキー』と名乗ってバイトをしたことがある。期間はほんの数ヶ月であったようだが、愛くるしい表情と「脳がとろける」と揶揄されるほどの甘い声、そして神接客が相まって、一瞬で『カリスマメイド』と呼ばれる存在となった。業界関係者によれば、彼女は今でも『伝説』と語り継がれ、その時の生写真はネットで数十万円で取引されているという人気がぶりだ。ちなみに前出のAさんとは違い、ロシアとの関わりはない。

〈今は美大に通っているMさん。当時と変わらない可愛らしい声と、潤んでいるような瞳を目の当たりにすると、記者も一瞬で骨抜きにされそうな『魔力』を持っている。

〈アイドル活動の再開について質問すると「さあ、どうなんでしょう?ちゆん、ちゆん!」と誤魔化されてしまった。ブサイクな女子にこんなことを言われると殴り飛ばしたくなるが、彼女のそれはすべて許せる!!天性のオジサンキラーだ。

〈ユニット在籍当時は、衣装製作を担当していた彼女。将来は、洋服だけでなく、アクセサリーやインテリアのデザイン、さらには空間演出などを行うトータルコーディネーターを目指しているという。

〈彼女が造り出すモノ。それは甘く優しく…きつと我々に癒しを与えてくれるに違いないだろう。

「…なに？このオヤジ目線のスケベな記事は！絵里の以上に気持ち悪いんですけど…」

にこは「おえっ！」と1回吐く真似をした。

「これだけ読むと『女性が選ぶ嫌いな女子』の典型みたいな人物像ね…」

「真姫ちゃん、ズバツと言いきりにや…」

「でも、ことりの場合、狙って作ってるキャラじゃなくて、誰に対してもこの喋り方だし…」

「絵里、それはわかってるわ。私はことりのキャラを非難してるんじゃないくて、この記事の書き方がいやらしい…って言ってるの」

「真姫ちゃんの言う通り！だいたい絵里ちゃんは『ユニットNo. 1美女』とか、ことりちゃんは『正統派美少女』とか書いてあるのに、穂乃果はなんで『かなりふつくら』なのさ！差別だ、差別！人権団体に訴える」

「…」

「ん？」

「まあ、それはそれとして…ことりが『正統派』なら、にこは『本格派美少女』って感じかしら」

「相変わらず、妄想癖が激しいにや」

「なんでよー！」

「ことりちゃんは？彼氏作らないにや？」

「うーん、今はあんまり考えてないかな…」

「でも、周りに言い寄られるでしょ？」

「なくはないけど…でも美大の学生って男女問わず、やっぱり芸術家肌の人が多くて、みんな自分の作品に没頭してるから…」

「へえ…」

「まあ、アンタみたいなタイプは男が放っておかないから、作ろうと思えばいつでも作れるんじゃない？…変なヤツに引っ掛からないようにしなさいね」

「は〜い！」

「にこちゃんは自分の心配をしたほうがいいにや」

「うるさいわね…私は大丈夫なの」

「そうだよね、にこちゃんは家庭的だもんね。男の人は、そういう女性にに惹かれるから…」

「そういうこと！見た目だけで、料理のひとつもできないような女には負けないんだから！」

ことりの言葉に、一切の否定をしないに。

「料理のひとつもできない…って、それ、て私のこと？」

「あら？アタシは別に真姫とは言ってないけど…」

「別にいいけど…」

「その真姫ちゃんが、次の記事だにや」

「へっ？私？」

凜は週刊誌の文字を読み始めた。

〈続いてはユニットでは主に、作曲を担当していた『Nさん(20)』だ。

〈彼女は現在、医大に通っている。

〈『医大』と聴いて『意外』と思われる方もいらっしやるかも知れないが(決してシャレではない)、彼女の両親が医師であることを考えれば、医学への道は幼い頃からの規定路線だったといえよう。

〈逆に我々が取材をして意外だったのは、彼女が元スクールアイドルで活躍していたことを、同級生のほとんどが知らなかったことだ。受験勉強で忙しく、そういうことに興味がなかったということか。

〈彼らによると、普段は眼鏡を掛け(医大生である為当たり前であるが)白衣で過ごしており、休憩中も独りで目を閉じて携帯音楽プレーヤーを聴いているとのこと、非常に地味な存在だという。

「ただし、私生活は少し違うようだ。休日には真つ赤なスポーツカー（外車）を駆って、海へドライブに行くなど、一転してアクティブな一面を見せる。その身なりは地味どころか、高級ブランド服を華麗に着こなした『令嬢』といったところで、元スクールアイドルだけあって、身のこなしも軽やかだ。」

「我々の取材に対し「アイドル活動の再開？なにそれ？意味わかんない…」と剣もほろろの塩対応。根拠はないが、きつと『ツンデレ』に違いない。対面してみて、そう思った。」

「メロディメーカーとして、数々の名曲を産み出してきたNさん。果たして、再びピアノを奏でる日は来るのであろうか。」

「真姫ちゃん、友達いないにや…」

「い、いるわよ！」

「知ってはいたけど、相変わらず寂しい人生を送ってるのね」

「ここは半笑いで真姫を見る。」

「そ、そんなわけないじゃない。勉強は勉強でちゃんと集中したいだけ。医者になるって、そんな簡単じゃないんだから」

「でも、休日だって独りじゃない」

「あのねえ、私にはあなたたちがいるから、それで充分なの！」

と真姫は、ここを見据えて言った。

「…あ、当たり前でしょ…そんなこと…」

「ここは視線を外しながら、そう呟く。」

「でも…私たち、いつまでこうしていられるのかな？」

「穂乃果？」

「今はみんな、まだ学生だったりで、わりとこうして会えるけど、仕事持ったりとか、家庭持ったりとかしたら、やっぱりそうはいかなくなるよね…」

「うん、頻繁には会えなくなるね」

と、ことり。

「だよねえ…」

「そうしたら、真姫は孤独死しちゃうかもね」

「しないわよ！つていうか、にこちゃん。別に私、大学に友達がいなくていいから！この記事が大袈裟過ぎるのよ」

「無理しない、無理しない」

「だから、いないわけじゃ…」

「穂乃果の質問だけ…」

「絵里ちゃん？」

「直接会えなくても、大昔と違ってコミュニケーションは日々発達してるわけだし、みんなが元気だったら、いつまでだってこうしていられるわよ」

「そうだね」

「ただ…」

「ただ？」

「さっきも言ったけど、みんなへの依存度が高すぎて…それがたまに心配になることはあるわ。逃げ道がある…つて言うのかしら…。何かあっても、みんながいる…つていう安心感」

「それじゃダメなのかにゃ？」

「だけどそれは裏を返せば、みんながいなくなった時、どうしよう…つていう不安があるわけですよ。だから、どこかで、甘えすぎは良くないんじゃないかな…とも思うの」

「その時はその時よ」

「にこ…」

「頼れるうちは頼ればいいんじゃないの？これだけ固い絆で結ばれてる仲間なんて、世界中探しても、そういないと思うんだけど」

「そうね…」

にこの言葉に、絵里は大きく頷いた。



~  
~  
~  
~  
~

## 新文のスクープ（その5）

〈さて、残念ながら今回、直接取材できなかつたメンバーもいるので、近況だけでも伝えておこう。

〈グラマラスなボディと、すべてを許してくれそうな包容力が魅力の『Tさん（22）』は、高校卒業後、旅行会社に就職。入社後、企画グループに所属すると、パワースポットを巡るツアーなどを次々と立案し、同社の主力商品へと押し上げた。英語が堪能な彼女は、海外へと飛び出し、現地のコーディネートからアテンドまでをこなすという、多忙な日々を過ごしているようだ。

〈我々が取材に訪れた際も、南米に出張していた為、会うことはできなかつた。

〈もうひとりには『K泉さん（19）』。

※前出のKさんと上も下もイニシャルが同じである為、ここでは『K泉』さんと表記する。

〈K泉さんは高校卒業後渡米し、現在は著名な音楽プロデューサーのもと、スタッフとして働いており、米国人歌手フランクIIゴードイツシュのPVを手掛けるなど、業界内外からも注目されている、新進気鋭の若手映像クリエイターだ。

〈K泉さんの渡米に関しては、あのA—RISEが橋渡したというのは、ファンには有名な話である。

〈日本には年に数回しか帰ってこないとのこと、Tさん同様国内におらず、やはりコメントを取ることはできなかつた。

〈というわけで、彼女たちの近況をお伝えしてきたわけだが…

「ちよっと、待ちなさいよー！」

「にゃ？」

突然にこが怒鳴ったので、凜は朗読をやめた。

『Yさん』の記述を飛ばさないでよ！」

「Yさんって誰にゃ？」

「矢澤のYよ！ヤ・ザ・ワ！決まってるじゃないの!!」

凜は目元をゴシゴシと腕で擦ったあと、目をパチクリとさせながら誌面を見直した。

「…ないにゃ…」

「はあ？」

「Yさんの『ワ』の字も…」

「なに、バカなことを言ってるのよ！」

「ホントだつてば…」

「ちよつと、貸しなさいよ！」

凜が言い終わるか終わらないうちに、にこは週刊誌を引ったくつた。

そして…

「…」

「ね？」

「ぬわんでよつ!!」

「にこちゃんをオチに使うなんて、この記者、わかってるにゃ」

「アンタ、殺されたいわけ？」

「わー！凜に怒らないでほしいにゃ！」

「き、きつと…ほら、にこちゃんは唯一芸能活動してる『有名人』だから、あえて紹介しなくても…って思ったんじゃないかな？」

と、必死にフォローすることり。

「うん、うん、それだ！きつとそうだ」

穂乃果がそれに同調するが、にこは納得しない。

「そもそも、にこは取材されたの？」

「…」

絵里のもつともな質問に、にこは黙りこんだ。

「それは載らなくても当たり前じゃ」

「いや、だからそれは…事務所に取材が…ああ!!ムカつくわ。新文め！アタシをコケにするなんて、絶対に許さないんだから！」

「にこ、落ち着いて…」

「これは陰謀よ！アタシをこの世界から消し去る為、ライバルが仕掛けた陰謀なんだわ！そもそも、今、ここで、こんな記事が出ること自体、おかしいのよ！」

「それよ、それ！私たちのことはともかく、本題はそのことでしょ！」  
「うっ…まあ…そうだけど…」

真姫にピシヤツと言われて、にこは我に返る。

「ここから先に書いてあることが大事なんですよ」

「わ、わかってるわよ…」

真姫はにこから週刊誌を取り上げると、朗読が途切れたところから読み返した。

〈〜というわけで、彼女たちの近況をお伝えしてきたわけだが、全員元気にしており、それぞれの分野でそれぞれの道を目指していることがわかった。ファンだった皆さんにとっては、まずはホッとしたことだろう。〉

〈だがしかし、取材を通じて気になったことがある。〉

〈それは誰もが、自分達が築いてきたスクールアイドル時代の歴史を『封印』していることにある。〉

〈彼女たちの周辺で「彼女たちがスクールアイドルをやっていた」と知っている人は、あまり多くはなかった。中にはネットなどで動画を何度も観ていたにも関わらず、目の前にいるのが『本人（同一人物）』

だと知らない人もおり、記者がその旨を告げると「えっ！そんなんですか！」と驚きの声をあげることもあった。

◁もつとも「グループとしては知っているけど、個人名までは…」という話はわからなくもない。

◁では、どうして彼女たちは、華やかな過去を公開することに、拒否反応を示すのか。

◁「スクールアイドル」「ラブライブ」という言葉を広めたのは、間違はなく彼女たちである。そして、今をときめくA—R—I—S—Eに至っては「彼女たちは永遠のライバル」と公言して憚らないのに…である。

◁その真相を解き明かす為、我々は彼女たちの母校を訪れた。しかし在籍したアイドル研究部は現存するものの、彼女たちが残した輝かしい功績の数々：優勝旗やトロフィー…は跡形もなかった。その光景はまるで「歴史からの抹殺を謀（はか）ったのではないか」と思わせるほどの違和感だった。

◁また今回の取材に対しても、誰もが多くを語らず、アイドル活動の再開について、前向きな回答をするメンバーはひとりもいなかった。

◁なぜか。

◁確かに、それぞれの夢に向かって歩き始めた彼女たちにとって、過去の話が決してプラスに働くとは限らないし、昔の名前に拘らない彼女たちの潔さに敬意は表す。

◁だが、理由はそれだけであろうか。

◁そこでフアンの間でまことしやかな噂として流れているのが『メンバーの不仲説』である。

◁そして、その原因が冒頭の記事で紹介した『Sさん』にあるとい

うから、穏やかな話ではない。

〈「Kさん」「Sさん」「Mさん」の3人は幼馴染みで、M'sの創始者である（残りのメンバーはそのあとに加入）。だが関係者の話によるとリーダーだったKさんと、実質的にユニットを取り仕切っていたSさんは性格が合わず、口論が絶えなかつたという。それでも活動を継続し、その名を日本中に轟かせるまでになったのは、同い年のMさんを始め、先輩、後輩が調整役として間を取り持っていたからである。

〈ところがメンバーのうち3人が高校を卒業すると、そのパワーバランスが崩れ、KさんとSさんとの間の溝が埋まらなくなっていたという。

〈前述した通り、Sさんはかなりストイックな性格である為、過度なトレーニングを強要し、それがメンバーを苦しめていたという話もある。実際、Hさんは登山に無理矢理連れて行かれて遭難しかけたと言い、K泉さんは食事を制限され餓死寸前までに陥つたという。また、一見、アイドル活動とは無関係な20kmの遠泳を計画したこともあったようだ。

〈今、彼女たちは、こうした「シゴキ」とも言えるスパルタ指導を受けたことがトラウマとなっており、スクールアイドルとしての華やかなりし活動を『闇の記憶』へと変えてしまったのではないのだろうか。

〈それなら、取材に対し一様に口が重いのも頷ける話だ。当時のこととは思いついたくない、そういうことなのであろう。

〈だとしたら、彼女たちのアイドル活動再開など「以ての外（もつてのほか）」ということになる。

〈ところが、Sさんだけは様相が違うようだ。ひとり活動再開を画策しているのではないかと、思われる節がある。

〈それが冒頭に紹介したシルフィードとA—RISEと同席した

「会食」だ。

〈写真を見てほしい。音楽活動を休止している夢野つばさが、星野はるか、水野めぐみと一緒に写っている。まずこれが、いまや非常に珍しいことである。だが、注目してほしいのは、さらに同じフレームの中にA—RISEが納まっていることである。まさにレア中のレアと言っている。業界も驚くスクープ写真だ。

〈そして、その並びの一番端にいるのが、件（くだん）のSさんである。

※Sさんは一般人であるため、顔に目隠し加工をしています。

〈Sさんは、高野梨里が事故に巻き込まれたのは偶然だと言い、そもそも、彼がその人物だと知ったのは、病院に運ばれたあとだと語った。

〈その高野には、夢野つばさという、今、日本中が注目している彼女がいる。

〈そして夢野を交えて（彼女が所属する）シルフィードと、かつてのライバルでもあるA—RISEと食事を共にしたSさん。そこにはいったい、なにがあったのか。

〈店の関係者は取材に対し「オーダーを取りにいったときとか、料理の上げ下げの際に聴こえた程度で、全部知ってるわけじゃありませんけど…」と前置きした上で次のように語った。

〈「シルフィードの皆さんは、常連さんで…いつも最前にももらっています。つばささんの（オリンピックピックの）激励会という主旨で、星野はるかさんが企画されたのだっただけだと思います。髪の毛の長い方（Sさん）は、どこかで見たことあるな…くらいな感じで。えっ？元M’sのメンバー!?…どおりで、素人さんではないな…とは思ってましたけど」と、その正体を知り驚いた様子だ。

〈「そのあとA—RISEがやって来て…思わず『おお！』って思いましたよ。だって、シルフィードとプライベートで交流があるとは、

思わないじゃないですか…。ちよつと興奮しましたね。誰かに伝え  
たかったですけど、さすがにそれは…と自粛しました。最初のうちは  
わりと静かだった感じですけど、後半はかなり盛り上がりつてしま  
よ。ええ、アルコールは飲まれませんでした…。そうですね、印  
象に残ってることですか？その…Sさんですっけ？…に『色々相談に  
乗る』って言ってましたよ。『力になるから』…って。良くわからな  
かったですけど、あのシルフィードとA—RISEが協力するよ…っ  
て話ですからね…この人は何者なんだろう？…って思っていました…」

＜その話こそ、Sさんのアイドル活動再開の話ではないか？

＜夢野つばさとしては、複雑な立場だったに違いない。共にオリ  
ピックに出場するハズだった恋人が、生死をさまようような重症を  
負ったわけだ。意識は回復したが、その夢は絶望的である。しかし自  
分は代表を辞退するわけにはいかない。なでしこジャパンのエース  
として闘わなくてはならない…。この食事は、だからサッカー選手  
として気持ちを切り替える為に、敢えて臨んだのだろう。その心中は  
察するに余りあるし、その行動を否定することは出来ない。

＜しかし、そこにSさんを同席させた理由については、理解しがた  
い。恐らくは、事故に巻き込まれた彼女を想ったことだろう。

＜だが、果たしてそれは正解だったのか？

＜そもそも、先に述べた通り、事故に巻き込まれたのが、偶然だっ  
たかどうか、まず怪しい。

＜そして、アイドル活動の再開を目論んでいたところに現れたのが、  
シルフィードとA—RISEである。Sさんは「これ幸い」と、その  
両者に取り入ったのではなからうか？

＜であるならば、とんでもない裏切り行為である。ひつつは夢野つ  
ばさに対して。もうひとつはM'sの復活を期待しているファンに  
対して。



〱 Sさんは、高野に恋愛の情を持って接しようとしているのは明らかだ。でなければ、いくら「命の恩人」であるとはいえ、夢野つばさの不在時を狙って訪れるなどという、常識外れのことはいらないだろう。しかも、高野との関係を暴露しておきながら…というのだから、タチが悪い。Sさんの立場をおもんばかって食事会に同席させた、彼女の純粋な想いを踏みにじる行為だといえる。

〱 またM、sの活動再開が絶望的となった今、その原因を作った張本人だけが、復帰を考えているというのは、いかなものか。しかも、その相談相手は、かつてのライバルであるA—R—I—S—Eだ。これをファンに対する裏切りと言わずしてなんと言おう。そしてなにより、元メンバーが納得するはずもない。

〱 Sさんは我々の取材に対し、最初は強気に応じていたものの、形勢が不利と見るや、最後は曖昧な回答に終止した為、残念ながら疑惑の解明には至らなかった。

〱 高野にも、夢野つばさとSさんの二股交際の可能性が浮上したわけだが、2人には今後、某政治家のように、詳しく丁寧な説明を求められるであろう。

〱 我々も深く追求していききたい。

〱 つづく

## 海上保安庁

バンツ!

記事を読み終えた真姫は、音が立つほど勢い良く週刊誌を閉じた。

「サイテーな記事…」

真姫は小さく呟いたが、そこには怒り…いや深い悲しみが込められているように感じられた。

「私たちのことはさておき…海未のことについては、都合のいい事だけを切り貼りして並べた『完全な捏造』ね」

絵里は自分自身を落ち着かせるかのように、静かに、冷静に話した。

しかし、表情は驚くほど険しい。

「実際にあつたエピソードのブレンド加減が、絶妙だわ」

「なんで、にこちゃん誉めるにゃ!」

「誉めてなんかいないわよ!やり方が汚いつて言ってるの!!」

「確かに、穂乃果ちゃんと海未ちゃんの口喧嘩とか、凜の遭難事件とか…それらは全部事実だけど…かよちんの餓死は大袈裟過ぎるにゃ…」

「これ、情報リークしてるのヒデコたちじゃないでしょうね!」

「にこちゃん!そんなわけないよ!ヒデコたちはそんな悪いことしないよー!」

「冗談に決まってるでしょ!」

「この場面で言うことじゃないにゃ…」

「まあ、μ、sに関しては当時の在校生とかが、私たちの関わってないところで、色んなサイトを立ち上げてるから…探せばこれくらいのこと、いくらでも出てくるわよ」

「真姫の言う通りね。これまでは実害もなかったし、特に気にしてなかったけど…」

「でもこの記事は、明らかに『海未を悪者に仕立てあげて』読者にそう思わせようとしている。別に『それ』が原因でμ、sが解散したわけじゃないのに」

「真姫ちゃん、それって『確信犯』ってことにゃ?」

「正式な使い方ではないけど…一般的にはそう言うかも」  
「許せないにゃ！」

「私、文句行ってくる！」

やおら、穂乃果が立ち上がった。

「どこに行くのよ!?!」

「もちろん、この出版社だよ!!」

「よしなさいよ」

「どうして?だって、にこちゃん、こんなの海未ちゃんが可哀想すぎるよー!」

「わかってるわよ!わかってるけど、なんの策もなく飛び込んでいったって、軽くあしらわれて終わりよ。向こうはプロなんだから」

「これって名誉毀損で訴えることができるんじゃないかな…」

「やれば勝てると思うわ。でもね、ことり…個人で争える金額なんて、たがだか1億円程度よ。ヤツらは『負けて払う賠償金』以上に、このネタで稼げばいいって思ってるの。長引かせれば長引かせるほど不利だと思うわ。新たなネタを探してくるんだろうし、なければ作ればいいんだから」

「泣き寝入りしろ?ってこと」

鋭い目でにこを睨む真姫。

「そうは言っていないでしょ?でも、一回、狙いをつけられたら、逃れるのは至難のワザってこと。下手をすれば、アタシたちにまで飛び火する恐れがあるわ」

「もう、飛んできてるわ」

真姫は、ひとつ深い溜め息をついた。

「じゃあ、どうすればいいのさ」

穂乃果の目には、うっすらと涙が光っている。

「アタシたちが海未を守る…それしかないわ」

「でも、どうやって…」

「それは…」

「私たちのことはどうでもいいけど、高野さんのことだけは、疑惑を晴らしたいわね。ちゃんと『お見舞いに行くことを、つばささんに頼まれた』って証明できれば」

「絵里ちゃん、そこだよ！なんで海未ちゃんは、その時そう言わなかったんだろう？穂乃果には、あんなにズバズバ言うのに」

「…これは私の想像だけど…それを言っちゃうと『高野さんとつばささんの関係』を明言しちゃうようなものでしょ？だから、海未なりに気を使っただんじやないのかしら…」

それを聴いて、全員が黙りこんだ。

…もし、自分だったら、どう対応したんだろう…

「だから海未は責められないわ」

絵里の言葉に、全員が首を縦に振った。

「こうなったら！」

「穂乃果！どこに行くの？」

「にこちゃん！つばささんに直談判してくる。つばささんから証言してもらえれば…」

「はあ？アンタ、バカじゃない？夢野つばさは今、海外でしょ？そこまですごくつもり？」

「そうでした、そうでした」

「確かに、彼女がちゃんと話してくれば一番いいのだけど…」

「でも、絵里。オリンピックの本番直前でしょ？普通は今ここで、そんなことは言わないわよ」

「そうね。それはわかってるけど…」

「真姫ちゃんも、絵里ちゃんも、海未ちゃんよりオリンピックの方が大事なの？」

「凜!？」

「もちろん、そういうことじゃないわ。でも、私たちじゃ…」

「だったらさ、高野さんに頼もうよー！」

「穂乃果!?!」

「高野さんなら、入院してるとはいえ、話くらいならできるでしょ?」  
「それはそうかもしれないけど…彼だって疑惑を掛けられちゃってる方だから、証言したところで説得力はないと思うわ」

「じゃあ、絵里ちゃん!どうすれば…」

「今のところ、八方塞がりって感じね…」

「…どうして海未ちゃんを助けたのが…高野さんだったんだろう…」

「えっ…穂乃果ちゃん?」

穂乃果がボソリと呟いたのを、ことりは聴き逃さなかった。

「もつと、全然知らない人だったら良かったのに!」

「穂乃果ちゃん…」

「だって、ことりちゃん、そうでしょ!助けたのが高野さんじゃなかったら、海未ちゃんはこんなに苦しまなかったんだよ!」

穂乃果の声が、徐々に大きくなっていく。

「高野さんが、つばささんと付き合ってたなきゃ、こんな大騒ぎにならないかったんだよ!」

「穂乃果ちゃん!!」

「どうして海未ちゃんは、高野さんなんかに助けられたのさあ!!!」

穂乃果の感情は一気に昂り、泣き叫びながら訴えた。

「穂乃果!いい加減にしなさい!!」

「ダメ!絵里ちゃん!」

絵里は右手を振り上げたが、それをことりが身を挺して防ぐ。

「ことり…」

「ダメだよ…」

「ことり…」

「たたくのは…ダメ…」

「うん、ありがとう…止めてくれて…」

「えへっ…良かった。止まってくれて」

「でも、穂乃果の言葉は許せないわ」

「うう…絵里ちゃん…だって、だって…ヒック…だって…」

『高野さんだったから』海未は助かったんでしょ？」

「…うう…うん…そう…だけど…」

「それとも、海未が轢かれても良かったとでも？」

穂乃果は首を横に何度も振った。

「でしょ…。だから、高野さんに当たるのは筋違いよ。恨むべきは…車を運転していた犯人でしょ？」

今度は、穂乃果の首が縦に動いた。

そして

「…ごめん…」

と絵里に頭を下げた。

「そういえば、犯人の話って出てこないわね」

と、真姫。

「そうにや！普通だったら、もっと報道されてもいいハズにや！」

「未成年だからかしら」

「さあ…確かに今までことを考えれば、不自然かもしれないけど…それより、今は海未の事を…」

絵里は「さあ、どうしたものか…」頭を抱え、思案にくれる。

「オリンピックが終わるまで、待つしかないんじゃない？」

「はい!？」

「その間、海未に対する風当たりは強いかもしれないけど…凌ぐしか

ないわよ」

「無責任すぎるにや…」

「じゃあ、他に方法があるの?」

「…」

「それしかないのよ、今は。そりやあ、これまで以上にネットは荒れるだろうし、夢野つばさが結果を出せなかったら『海未のせいだ!』つてなるかもだけど…その時こそ、アタシたちが守ってあげないと…」  
「うん、そうだね。そうしたら、私たちはつばささんを、全力で応援しなきゃいけないよね。『海未ちゃんのせい』つて言われないうよう、活躍して、優勝してもらわなきゃ!」

穂乃果が鼻水を啜(すす)りながら、にこの言葉に、反応した。

「うん、穂乃果ちゃん! ことりもサッカーはあんまり詳しくないけど、一生懸命応援するね!」

「凜も頑張るにや!」

「ねえ…だったら、いつそうのこと現地に行つて応援しない?」

「えっ!」

「ま、真姫ちゃん!」

「親父…園田さんの連絡先、知ってるんだろ?」

穂乃果たちがそんな話をしていた頃、高野も同じように新文の記事を読み終えた。

もつともこちらは、真姫とは違い、その誌面をビリビリに破き捨てていた。

「園田さんの連絡先？父さんは知らないが、母さんなら…」

「ちよつと訊いてくれないか？」

「訊いてどうする？」

「電話するに決まってるだろ！彼女のメンタルが心配だ」

「今は、そうつとしてあげた方がいいんじゃないか」

「どうして？」

「…なんとなくだ…。お前からの慰めは、逆に色々、ツラくなる…そんな気がする」

「…」

「気持ちわかるが…」

「チッ！」

「それより、自分の身を案じなさい。明後日には手術だろ。身体も心も整えておくと、あの本にも書いてあったろ」

『傷付いた羽』か…。それはわかってるけど、こんなイライラした状態で落ち着けるハズがない！」

高野は、手元に残った新文のページを再び破ると、クシヤクシヤに丸めて投げ捨てた。

その夜…。

キンコン！

海未のスマホが鳴る。

正確に数えていないが、この日だけで、数十回目の通知だった。相手はわかっている。

μ, sのメンバーだ。

記事を受けて、きつと自分を励まそうと、LINEにメッセージを



送っているに違いない。

しかし、今の海未にとって、その優しさは苦痛以外の何物でもなかった。

…どこかに、消えてしまいたい…

そう思った。

それでも手元にそれを置いておくのは、自分がまだ見捨てられていないことを確認する為の証しだった。

これ以上迷惑は掛けたくない…だけど助けてほしい。  
その狭間で海未は揺れている。

部屋の片隅で膝を抱え、ただボーツと座っているだけの時間が、どれからい続いているのだろうか。

気が付いたら、夕方になっていた。

いや、もう19時になるうかとしている。

夏場となり、日の入りがだいぶ遅くなっていた。

スマホが鳴った。

…また、ですか…

半分、氣遣ってもらえていることに感謝しつつも、残りの半分は放っておいてほしいと思っていた。

だが、やがてそれがLINEの通知音でないことに気付く。

…えっ？電話ですか!!…

慌てて画面を見る。

非通知ではなかったが、アドレスに登録してある番号でもない。出るか出ないか迷っているうちに、電話は切れた。

…はて、どなただっのでしょうか…

ふと海未の頭に、とある人物の顔が過（よぎ）った。

…ですが、まさか…

その時、再びスマホが鳴った。

今度はショートメールを知らせる着信音だ。

相手は…

海未の想像した人物…

高野梨里だった…。

くつづく

知らないLOVE…

～高野梨里です。今の電話、オレです。いきなりすみません。連絡ください。待ってます。

…高野さん!?!…

海未はあの日…新文の柏木と会った日…に、病院に行きそびれて以来、高野と顔を合わせていない。

それどころか、話すらできていない。

本当ならその時の出来事を、真っ先に報告し、謝罪しなければならなかったのに…。

それでも、訪問しようという努力はした。

しかし、あの記者が、またどこかで待ち伏せしているのではないか…と思うと、足が前に進まなかった。

…ああ、なぜ高野さんは私などを助けたのでしょうか…

なにをを考えても、最終的に行き着くのはそのことだけだった。

…高野さん…

海未の頭の中に、あの時の様子が蘇る。

アクションスターのような身のこなしで、自分を救ってくれた人…。

そして、病室で目にした優しい笑顔と、思い遣りの心。

思い出すだけで、胸が締め付けられるように苦しくなる。

…なんて素敵な男性なのでしょう…

そう思ったのは、間違いなかった。

前々から、妄想癖がある海未。

一瞬「このような人が私の彼氏だったら…」と想像したのも事実だ。

しかし、そんな淡い想いも、つばさの存在を確認したことにより、打ち消される。

…私が愚かでした…

…そうですよね…

…サッカー界のスターでありながら、驕ることなく、こんなに素晴らしい性格の人に、彼女がいないわけがないじゃないですか…

…しかも、お相手は『あの』夢野つばささんです…

…私など出る幕はありません…

…と、そんなことは、すぐに理解したハズなのに…

…高野さんは命の恩人…それ以上でも、それ以下でもないハズなのに…

…なぜ、彼の事を考えると、いまだに胸が苦しくなるのでしょうか

…生まれて初めてです…

…こういう気持ちで泣きたくなるのは…

海未は着ているシャツの胸元を、右手でギュツと握り締めた。

オレは結局、彼女に電話をしてしまった。  
何が、どう力になれるかはわからないが、卑劣な記事に負けないでほしい。  
それを伝えたかった。

だが、出ない。

出れないのか、出たくないのか…。

…ああ、そうか…  
…いきなり、電話はマズかったか…  
…知らない番号だったら出ないよな…

それに気付き、慌ててショートメールを送ったのだが…果たして彼女は連絡をくれるだろうか…。

…だが、待てよ…  
…オレはなんて言葉を掛ければいいんだ…  
…オレのせいで彼女を苦しめているのに『頑張れ』は、あまりに無責任過ぎるだろう…  
…とにかく、今回の報道について、オレは一切気にしていないから…  
…とだけは伝えたい…  
…それで少しでも楽になるなら…

そんなことを考えていた。

そうこうしているうちに、ニュースメールが届いた。

～までしこじヤパン、練習試合2戦目はスコアレスドロー。夢野は出場せず。

オレは敢えて『チヨモ』とは、連絡を取っていない。

手術の日付が決まったことも、伝えていない。

とにかく試合に集中してほしいからだ。

だから、現地でどのような状態なのかはわからない。

少なからず、こつちの報道の影響があるだろうことは、容易に想像付くが：ヤツなら必ずやってくれる。

オレはそう信じてる。

：だが、欠場か：

ケガには滅法強いヤツのことだ。

ちよつとやそつとのことで『出場しない』ということはないだろう。

オリンピックのプレッシャー？

メンタルがやられてなきやいいが…。

練習試合に欠場した夢野つばさは、ベンチ入りすらしなかった。

当然、マスコミからは監督に質問が飛んだが「戦略上の理由」とだけしか明かされなかった。

しかし、ここに来て、今さら『手の内を隠す為に欠場させた』などということは、考えづらい。

彼女が秘密兵器ならともかく、どのチームもマークするエースなのである。

本番で通常とは違う使い方：奇策を用いることはないともみている。

そうなる、体調不良か…あるいは調整…のどちらかしか考えられなかった。

「どう？」

「お陰さまで、だいぶリフレッシュできたわ」

ゲームを終えて、宿舎に戻ってきた緑川沙紀の問い掛けに、夢野つばさは笑顔で答えた。

ピッチに立ったものの、まるで屍のように覇気がなかった練習試合の1戦目とは打って変わって、その顔は実にスッキリしていた。

この日の欠場は、つばさが監督に直訴したものだだった。

表向きは、本戦に向けたコンディション調整ということにしたが、にわか騒がしくなってきたマスコミからの回避…という側面の方が強かった。

監督はその意図を汲み、了承した。

どのみち、つばさ抜きでは戦えないのであるし、この期に及んで連携云々もない。

逆に不安定な気持ちのままゲームに出て、怪我をされる方が怖い。特例中の特例で、リフレッシュ休暇を与えたのだった。

報道については、もちろん、耳に入っている。

高野との交際については、間違いではないので、特に問題視していない。

海未が、自分のいない間に高野を奪おうとしているのでは…ということについても、関係ないと思っている。

そもそも、自分が海未に託したことだ。

仮にそんなことになったとしたら…それは自分の見る目がなかった…と諦めるしかない。

だが、そうならない自信はある。

問題は…

良かれと思って海未にしたことが、裏目に出て、彼女に迷惑が掛かっていることだ。

こればかりは心が痛い。

だが、海未には悪いが、今はどうすることもできない。

下手にコメント出せば、しばらくはそれに振り回される。

しかし、それだと（沙紀にも言われたことだが）チームに迷惑が掛かる。

今のつばさに求められているのは、結果のみだ。

勝てば官軍。

結果を残せば、なんとかなる…そう思った。

宿舎に留まったつばさは、そんな諸々の騒音を掻き消すべく、持ち込んだギターを一心不乱に弾きまくった。

何もかも忘れて…。

「うん、大丈夫そうね」

つばさの吹っ切れた顔を見た沙紀は、安堵の表情を浮かべた。

くつづく



恋に落ちちやうわけではないからね…

「…園田です…」

海未はすっかり暗くなった部屋の中、直立不動でスマホを耳に当てている。

高野のショートメールを受信してから、1時間以上が経過していた。

「あ、高野ですー…良かったあ、連絡もらえて…」

…なんて優しい声なのでしょう…

海未は、その言葉を聴いただけで、目頭が熱くなった。

高野の声に『心からホッとしている』という、温もりが伝わってきたからだった。

「あ、あの…その…」

だが、意を決して電話を試してみたものの、海未の言葉は続かない。

逆に、先手を打ったのは高野だった。

「色々、辛い思いをさせちゃって…だから、まずは一言謝りたくて」「えっ?」

「チョモ…じゃない…夢野つばさの分も含めて、謝らせて頂く。本当に申し訳ない」

「そ、そんな…。謝罪しなければならぬのは私の方で…。私が余計なことを話さなければ…」

「その件は気にしないでほしいんだ。その…『ふたりのこと』については、まあ、ウソではないし…遅かれ早かれバレただろうから、それはそれで仕方ない…って」

ウソではない…という言葉が、海未の胸に突き刺さる。

「それよりも、園田さんにあらぬ疑惑が掛かっちゃって」

「いえ、私のことは…」

「なに言ってるの！そっちの方が大事だよ!!」

「あつ…」

「あ、ごめん。ちよつと、声が大きくなっちゃった…」

「い、いえ…」

「オレは園田さんの仲間の事、よくわからないんだけどさ…そっちの方は大丈夫？」

「は、はい…それは…。はい、全然問題ありません。あそこに書かれている記事は事実ではありませんし、メンバーとの関係も極めて良好です。今も私を心配するLINEメッセージが止まらないくらいで…」

「本当に？」

「はい」

「無理してない？」

「えっ？安心してください、本当です」

「うん、オレも園田さんはそういう人じゃないって思ってるから、ハナから信じちやいないけど」

「はい」

「そっか…少しだけ安心したよ。これが原因で、園田さんたちの友情にヒビでも入ったら、どうしようかと…。と、なると…厄介なのは、こっちの話か…」

「私なら平気です」

「平気なわけないでしょ！オレがこれだけのこと書かれたら、引き籠っちゃうよ」

海未もつい今しがたまで、その状態だった。

「あのね、園田さん。オレがこんなことを言うのは、どう考えてもおかしいんだけど…オリンピックが終わるまでの…あと1ヶ月間だけ…なんとか耐えてほしいんだ」

「耐えるもなにも…」

「男子も女子も…オリンピックの結果がどうなるうとも、オレたちは

会見を開かなきゃいけない…恐らく、そういう流れになると思う。だから、その時にまとめてクリアにしたいんだ。甚だ勝手な話だと思うけど」

「いえ、わかります」

海未も、今がどれだけ大事な時期か…を理解していないほど、馬鹿じゃない。

「実はオレ、明後日手術を受けるんだ。ヤツには知らせてないけどね」  
「えっ？」

「順調にいけば、1ヶ月後には寝たきりの生活から解放されるんじゃないかと思ってる」

「そんなに早く？」

「そう。だから…すなわちそれは、オレの『復帰会見』でもある」

復帰のハズがない。

せいぜい『退院会見』くらいだろう。

復帰までは1年以上かかる。

だが、海未はそこまで詳しい事情を知らない。

素直に

「復帰のですか…」

と、言葉を返した。

「お腹の筋肉じゃないよ！…それは腹筋！」

「…」

「…みたいなギャグは嫌いかな…」

「すみません、あまりに唐突だったものですから…」

「…だよね。オレもそう思う…」

「ぷふっ！」

「ん？どうかした？」

「高野さんはおかしいです」

「ギャグが…じゃなくて、オレが？」

「はい。ご自身が一番厳しい状況のハズなのに、深刻さがまったくあ

りません！」

「え〜と…それは怒られてるのかな？」

「違います！むしろ、その逆です。とても気持ちの強い人だと感心しているのです」

「そうなの？ふっ…基本、能天気だから。深く考えてないだけだよ」

「そんなことはありません！この間もそうでしたが、自分より私ばかりを気遣ってくださり…。この電話も」

「あ、これも『考えなし』にしちゃって…ちよつと後悔してたんだ」

「どういうことでしょう？」

「なんて声を掛ければいいんだろう…って。こっちに原因があるのに、頑張つてとは言えないでしょ、だから…」

「いえ…その、お心遣いが、とても嬉しかったです。私は自分の置かれている立場から逃げようとしてました。ですが、頂いた電話で気付かされたのです。一番辛いのは高野さんだということを忘れておりました」

「ウソでも『嬉しかった』なんて言ってもらえるのはありがたいなあ」

「本当です！」

「じゃあ、そういうことにおこう」

「はい」

「今から、ちよつとだけ真面目な話をするけど、そのまま聴いてもらえるかな」

「はい」

「今、園田さんは完全にアウエーのピッチの上に立たされてるけど、オレが必ずホームにしてみせるから！」

「！」

…高野さん…

…今、私の胸にラブアローが突き刺さりました…

…その言葉…格好良すぎです…

「過ぎちゃったこと、起きちゃったことは変えられない…それはもう、受け入れるしかない。だけど未来は違う。決まってないんだ。そりゃあ、選んだ道や方法が正しいかどうかなんて、誰にもわからないし…自分の意思だけではどうにもならない事だって山ほどある。でもさ『何かをしようと思わなかったら、何もできない』って、オレはそう考えてるんだ。『意思あるところに道あり。道あるところに光あり』ってね」

…何かをしようと思わなければ、何もできない…ですか…

…確かにそうですね…

…あの時もそうでした…

…廃校を阻止する為、穂乃果がスクールアイドルを始めようなどと言い出さなければ…

「どこかの芸能人がさ…『努力は必ず報われる』みたいなこと言ってたけど、あれ、ウソだと思っんだ」

「えっ?」

「報われないよ…どんなに努力したって。だってさあ、どんな世界だってトップに立てるのは、ほんの一握りしかないんだから」

「ええ、それはそうですが…」

「でもね、オレの好きな言葉に『努力した者がすべて報われるとは限らん。しかし成功した者は皆、すべからく努力しておる』っていうのがあって…とある漫画の台詞なんだけど」

「…含蓄のある言葉です…」

「好きなんだけどね…これもウソだと思ってるんだ。成功する人の要素の8〜9割は才能が占めるでしょ…どう考えても」

「…そうなのでしょうか…」

「どんなに頑張っても、持って生まれた遺伝子は変えられないから」

…このお話はどこに向かっていくのでしょうか…

「身体能力とかき。特にスポーツやってれば、絶対感じることだと思  
うんだ。でもね、それじゃ、悲しすぎるじゃん。世界に通用しないっ  
てわかってて戦うなんて虚しすぎるじゃん。だから、立ち向かう為の  
努力が必要なのさ。頭と技を使ってね」

「はい」

「それ以外でも同じで…何もしない人に『いい流れ』なんてくるはずが  
ない」

「だから、高野さんは常に前向きなのですね！」

…為せば成る 為さねば成らぬ 何事も 成らぬは人の為さぬな  
りけり…

…上杉鷹山ですね…

『シユートは打たなきや入らない』『反省はしても後悔はしない』それ  
がオレの信条なんだ」

「なるほど…」

「…で、何を言おうとしたんだっけ？ああ、そうだ。だから、その…園  
田さんがこの逆境をどう乗り越えるか…努力とはちよつと違うけど  
…決して下を向かないでほしいな…って」

「はい、そうですね…。私たちの歌にもあります。『壁は壊せるものさ  
倒せるものさ 自分からもつと力を出してよ…勇気で未来を見せ  
て』と」

「うん、いい歌詞だ…って、ごめん。スゲー偉そうに語っちゃったよ。  
でも園田さんなら理解してくれるんじゃないかと」

「はい。電話して良かったです」

「ああ、そうだ。チョモ…じゃない、夢野つばさが帰国したら、一緒に  
病室に来ればいい。そうすれば、変な誤解も解けるだろうし…一石二  
鳥じゃないかな？」

「…迷惑でなければ」

「迷惑だなんて、全然…。あ、困ったことあればいつでも連絡して…ヒ

マしてるからさ。解決はできないかもしれないけど、話くらいなら聴けるし」

「ありがとうございます」

「盗撮でもされない限り、LINEくらいなら大丈夫でしょ」

「そうですね」

「じゃあ、そろそろ…あんまり遅くなっても悪いから」

「いえ、こちらこそ…」

「おやすみ」

「あ、待ってください!!」

「ん？」

「ス、スキです!!」

「…えっ!?!…」

「あ、いえ、間違いました!!…ステキです!!…その…あの…高野さんの考え方が…」

「ああ、そっち…」

「えっ?…」

「いや、別に…ああ、あれは別に理想論みたいなもので」

「す、すみません、今日はありがとうございます!おやすみなさい!」

海未は早口言葉の様にまくし立てた。

「…切れた…」

高野はスマホの画面を見つめる。

…ビツクリしたあ…

…告白されたのかと思ったよ…

そう呟きながら、受話器を置くアイコンをタップした。

一方の海未は…顔を真っ赤にして、その場にへたりこんだ。  
確認することはできないが、全身が紅潮しているハズである。

…ビツクリしました…

…私は何を口走ってしまったのでしょうか…

…思わず本音が出てしまいました…

…まだまだ修行が足りませぬ…

…すこし頭を冷やした方が良さそうですね…

海未はゆっくりと立ち上がると、そのまま浴室に向かい、頭からシャワーで冷水を浴びた…。

くつづく



## 絶対に負けられない闘いが、そこにはある（ブラジル戦 前編）

なでしこジャパンのオリンピック初戦。  
相手はブラジルだ。

この試合を見届けたあと、オレは手術室に入る。  
できれば、勝利を目にして、気分良く麻酔を掛けられたい。

下馬評はかなり不利。

『プロ』のオレから見ても、厳しい戦いになると思っている。  
それでも何が起こるかわからないのが、サッカーだ。  
アッパセット（番狂わせ）がもつとも起きやすいスポーツだと言える。

日本は世界の頂点に立った『黄金期』から、一気に世代交代が進み、  
若手主体のメンバーになった。

今、ピッチにいる11人のうち、実に7人が、オリンピック初出場  
だ。

そこにはチョモもいる。

心配したが、無事スタメンに名を連ねたようだ。

しかしフレッシュなのはいいが、これは諸刃の剣で、本来ならベテ  
ラン、中堅、若手がバランス良く混ざっているのが望ましい。

果たして、これが吉と出るか凶と出るか…。

システムは3―3―2―2。

高さはないが個人技に優るブラジルを、なるべく好き勝手させない  
為、まずは中盤を厚くして、守備に重きを置く布陣となった。

3バック（CB）、1ボランチ（DH）、並ぶようにしてサイドハーフ（SH）…いや、どちらかと言うとサイドバック（SB）に近いか。マイボールになったら、ボランチに入った選手がゲームメイカーとなるらしい。

2列目の右に夢野つばき。

ヤツの最大の武器である『デビルウイング』…左足のミドル…が一番狙えるポジションだ。

2トップの片割れには、緑川沙紀が入った。

恐らくは少し下がり目で…1・5列目的な役割になるだろう。

彼女は前線からボールを追う、汗かき役の動きも求められている。

…魔の5分などと言われるが…

…こうした大一番は、特に入り方を気を付けないと…

大事な初戦。

右から左に攻めるのが日本。

前半は、強い追い風を背に受ける。

ブラジルボールでキックオフされた。

しかし、ここで、いきなりゲームプランを狂わせる出来事が起こる。

ホイッスルと同時に、長いボールを入れてきたブラジル。

高く上がったボールは逆風で押し戻され…目測を誤ったか…日本のCBがクリアミス。

ヘディングしそこなったボールを相手フォワード（FW）に拾われ、開始0分で先制を許してしまう。

きつと、日本中が呆然としているに違いない。  
選手も何が起こったのか、把握できないだろう。  
それくらい、アツと言う間のことだった。

『しかし、まだ始まったばかりです。時間はたっぷりありますよ！  
焦らずにいきましょう!!』

中継の解説者はそう言う。

そんなことは、選手もベンチも百も承知だ。

だが、そう簡単にはいかない。

特にミスした選手は、気持ちの切り替えができない。

それが守備を統率するCBなら、なおさらだ。

やらかした！と失敗を引きずったまま残り90分プレーするので  
は、デイフェンスラインの統率、コーチングなどできるハズもない。

それほど大きなミスだった。

攻撃陣なら、点を獲って名誉挽回、汚名返上といきたいところだが、  
守備陣となるとそうはいかない。

1回のミスが命取り…。

残酷なものだ。

カメラは、意地悪くもそのCBの顔をアップで抜く。

…うん、目が泳いでる…

…意地でも動揺を見せちゃいけない…

…ボールが悪い！くらいに思わないと尾を引くぞ…

…こういう時にチームを鼓舞する…あるいは落ち着かせるベテラ  
ンがほしい…

「羽山優子がいれば…」

怪我がなければ、まだピッチに立っていただろうレジェンドの名

を、オレは思わず口にする。

「とにかく落ち着こう！」

オレはまるで自分がピッチに立っているが如く、呟いた。

中継の画面を見れば、センターサークル内でボールをセットするチヨモと沙紀が、守備陣に向かって手を叩き「これから、これから」と叫んでいるのがわかった。

：そうだ、2人は羽山優子の愛弟子なんだ：

JKコンビと言われたのも、過去の話。

いまや若くして『なでしこのゴールデンコンビ』と呼ばれ、代表の主軸へと成長したのも、羽山優子がメンタル面を指導したことが大きい。

特に、沙紀が汗かき役を厭わずこなせるようになったのは、その教えの賜物なのだろう。

羽山優子は、とにかく『世界の頂点に立つ喜び』を2人に味わってほしいと公私問わず面倒を見てきたのだ。

その想いが結実する手前までできている。

オレは2人の姿に、彼女の影を見た。

試合は、日本のキックオフで再開。

まずは一旦、呼吸を整えるかのように、中盤で短いパスを繋ぎ、相手の出方を伺う。

不用意なバックパスは避けたいところだ。

だが、ブラジルはあまりガツガツとプレッシャーを掛けてこない。ゲームは始まったばかり：まだ勝負どころではないからだろう。しかし「ここ！」と言うときの仕掛けは、驚くほど速い。

この辺りが日本のサッカーと大きく違うところで：こちらは全般的に、体格やスピードに劣る分、プレッシャーを掛け続け、スタミナ

勝負を強いられるのが辛いところだ。

ハーフライン付近でボールを受けたつばさは、相手が出てこないとみると、右サイドをゆっくり上がった。

ひとり、ふたりと相手選手が間合いを詰めてくる。

つばさをフォローしようと、ボールをもらいに沙紀が寄る。

一瞬、彼女に目をやった。

つられて、マークが沙紀の方向へと流れた。

ビッグプレーが生まれたのは、その時だった！

「おおっ!!」

つばさは左のアウトでボールを『チョーン!』と出すと、そのままノーステップで左足を振り抜いた。

GKのパントキックのように高く上がったボールは、風に乗り、ぐんぐんゴールへと向かっていく。

超ロングのループシュート!!

前目に位置していた相手GKが、慌てて下がる。

…決まった!!…

しかし…

「うっ! わっ!!」

ジャンプ一番!

わずかにボールはGKの手が触れ、クロスバーを越えていった…。

「おお〜」

と、会場からどよめきが起こる。

俺も同じリアクション：天を仰いだ（もつとも実際にはコルセットをしており、オレは上を向けないのだが）。

そして、それはすぐに大歓声に変わった。

打ちも打ったり、守りも守ったり。

双方のプレーに、会場から惜しみ無い拍手が送られる。

いいプレーには敵味方なく讃える。

これこそが、スポーツを愛する人の本来の姿だ：と、オレは思う。

それはさておき、開始0分で先制点が入られ、かなりシラケ気味だった日本サポーターを活気付けるには、充分過ぎるプレー：：ナイストライだ。

しかし、それ以上のビッグプレーがブラジルに出た。

：あそこで触っちゃうかね：

紙一重とはまさにこのこと。

とにもかくにも、点が入らなかったことは間違いない。

どんなに惜しくても、ゼロはゼロだ。

：だけど：チョモは冷静だな：

あんなシュートが打てるのは、周りが見えている証拠。

練習試合を欠場するとかして、少しだけ心配したけど：：なかなかどうして！

本番に強い。

：伊達に紅白の舞台に立っていない：

：ヤツは大丈夫だ：

今のプレーでオレはそう確信した。

しかし、サッカーはひとりではできない。

折角得たCKだが、味方が蹴ったハイボールをそのままGKにダイレクトキヤッチされると、一気に速攻を喰らう。

逆風など、まったくお構い無し。

長く速いグラウンダーのパスを3本ほど繋ぎ、瞬く前にゴール前へやってきた。

詰め寄るDF2人を、サイドステップでかるくいなすと、最後はGKの位置を落ち着いて確認し、ボールを流し込むようにシュートを打たれた。

開始5分で2失点…。

…あちやく、これは痛い…

完全なミスだった。

CKの場面、早めに点を取り返そうと、前がかりになったところをやられた。

まだ序盤。

そこまで焦ることはなかった。

当然、カウンターはケアしていきやいけなかった。

だが、最初のミスで冷静さを欠いたのか…広く空いた後ろのスペースを、スルーパス1本でやられた。

…ふう…

…これはマズイなあ…

こうなると日本のストロングポイントである、積極的な守備がしづらくなる。

ブラジルはのらりくらりとボールを回し、隙を見て縦に速いパスを送るということを繰り返す。

これにより、日本のDFはゴール前に張り付くことを余儀なくされた。

これ以上の失点は許さない！…という、対応。

しかしSHもDHも守備に追われ、一向に反撃に転じることはできない。

風上を意識してか、最終ラインから長いボールを放り込むが、FW陣には繋がらず…得点の匂いがまったくしない。

沙紀は献身的に前からボールを追うものの、逆に下がりすぎてしまう為、FWひとりが孤立するという悪循環を繰り返す。

『守備陣は勇気を持って、ボールを奪いについてほしいですね。』

解説者は無責任に言う。

しかし果たして、それは正解なのか？

これ以上点を与えられない中、リスクを侵してでも、攻めるべきなのか？…ベンチは明確にしなければならぬ。

だが、作戦タイムがないのがサッカーだ。

監督がピッチサイドまで出て、声とジェスチャーで選手に指示を送るが…届いているだろうか…。

そうこうしているうちに、35分が過ぎた。

ここまで打たれたシュートは11本。

ピンチの連続だが、よく堪え忍んでいる…という感じ。



…とはいえ、そのシュート1本1本が守備陣の神経を磨り減らし、ボディブローのように効いてくる。

どこかで流れを変えたい。

一方、日本の放ったシュートは4本。

最初のつばさの超ロングなループシュートのほか、FW2人が苦し紛れに打った3本。

いずれもペナルティーエリアの外から狙ったものだが、残念ながら枠を捉えらることはなかった。

そして残り5分…。

日本に、この日初めてと言っていいくらいのチャンスが訪れる。

少しこの展開に焦れたのか、ブラジルが中盤でパスミスをする。

これがかつさらったのは…

沙紀だ！

センターサークル付近とかなり深い位置ではあるが、ドリブルで仕

掛け一気に駆け上がった。

相手DFはペナルティーエリア内に4枚…きっちり揃っている。

…どうする？…

沙紀は一度は突っ込むフリをして、すぐにボールを右にはたいた。

コーナー付近にボールが転がる。

それに追い付いたのは…

…チヨモ!!…

…ダイレクトでクロス？…

…逆足？…

「おおっ!!」

…出た！エラシコ!!…

ヤツは詰めてきた相手DFを得意のフェイントでかわすと、ゴール前に左足で低くて速いボールを入れた。

…触れば1点！…

「ああっ!!」

オレはまるで我が事のように、大きな声をあげた。

「おお…PKだ!!PK!!」

くっくくく

## 絶対に負けられない闘いが、そこにはある（ブラジル戦 後編）

右コーナー付近から、つばさが放ったグラウンダーのクロス。

あるいは角度のないところから狙った、シュートだったかも知れない。

GKが出られない絶妙な位置にボールが入り『誰か触れば1点！』という場面で、ゴール前に突っ込んできたのが…沙紀だった。

相手DFが必死に脚を伸ばしクリアを試みたが、その先端…爪先…が捉えたのはボールではなく、沙紀の足。

この瞬間、彼女は前方に大きくふっ飛び、身につけた背番号11が空を向く。

これがファールと判定され、日本はPKを得た。

ブラジルはシミュレーションじゃないかと猛抗議するが…判定は覆らない。

オレも『転び方が派手だったから』ドキツとしたが、これは正当なジャッジだ。

問題ない。

ファールを犯した選手は、レッドカードで『一発退場』かとも思ったが、こちらはイエローカードのみの提示に留まった。

これはこれで仕方ない。

故意かどうかは、画面からではちよつと判断できなかった。

サッカーにおける2―0のスコアというのは面白いもので、次の1点がどちらに入るかによって、試合の流れが大きく変わる。

追いかける側からすると、当然0―3になれば、かなり心が折れる

展開になるが…逆に1―2なら、俄然、同点、そして勝ち越しへの期待が高まる。

勢いってヤツだ。

サッカーでの2点差は、決してセフティリードじゃない。

実際（統計をとった訳ではないが）このスコアから数多く逆転劇が生まれている。

そういう意味でも、このPKは大きい。

確実に決めておきたい。

ペナルティーアークにボールをセットしに行くのは…

「チヨモだー」

オレはヤツのPKは見たことないが、こういう場面でビビるヤツじゃない。

おもいつきり蹴りこむだろう。

ボールからまつすぐ3歩、斜め右後ろに2歩ほど下がった。

会場が静まり返る。

2万という観衆が、この広いピッチの片側…ただ2人だけの勝負の行方を見守っている。

ホイッスルが鳴る。

ゆっくりとつばさが動き始めた。

『さあ！どうだ？決まった！ゴールーール！！日本、1点差！1―2！GKもよく反応しましたが、その左手を弾いて、ボールはゴール右上にズバツと決まった！緑川沙紀と夢野つばさ、日本が誇る若きゴールデンコンビが、反撃の狼煙を上げました！！』

…いやあ…参った！…

…いくらなんでも、あのコースに、あのスピードで蹴れるかね…

PKは決めて当然と思われているが、もちろん、そんなことはない。数々の名選手がシュートを外し、悔し涙を流してきた。

…だが、ヤツは…

…駆け引きなんか眼中になく、気持ちで蹴り、その魂がボールに乗った…

昔から気が強かったが、まったく臆することなく向かっていく様に、改めてオレは惚れ直した。

さて、とにもかくにも1点入った。

ここからが大事だ。

余裕がなくなったブラジルがバタつくのか、あるいはギアを上げるのか。

前半の残り時間は少ない。

…ここは無理せず、後半仕切り直しだ…

しかし、時計を気にし始めたのか、落ち着かないのは日本だった。パスが繋がらない、不用意にファールを犯す。

そして迎えたロスタイム。

日本はFKを与えてしまう。

ブラジルから見て、左45度。

距離にして約20mほど。

直接狙える距離だ。

恐らくこれが最後のワンプレー。

…イヤな位置だな…

日本の壁は5枚。  
つばさもそこに入った。

…とにかく集中！集中！…

だが…

『ブラジル、FKを蹴るのは2点目をあげている『マリア』。直接狙うのか？それとも誰かに合わせてくるのか？…ゆつくりと後ろに下がります。さあ、助走から…蹴った！あつ、壁に当たった。こぼれ球…クリア！できない！拾われた？そして、ゴール前…ボールが入る！繋がった！反転して…シュート！ブロック!!…ああ!!入った？入った!?!入ってしまったあ!…日本、ロスタイムに失点!…そして、ここでホイッスル！前半終了…1―3でハーフタイムを迎えます…。』

アンラッキーと言えばアンラッキーだ。

ブラジルが放ったシュートは、DFがブロックしたものの、それでコースが変わった。

GKは逆を突かれ、力なく転がったボールは、無情にもゴール右隅へと吸い込まれてしまった。

不幸にも、ボールを足に当てたのは、先制の失点に絡んだCBだった。

今のは責められない。

必死にクリアにいった結果である。

そもそも、あそこでFKを与えるのが間違いだし、もつとえばバタバタした感じが、この展開を生んだ。

…今日は彼女の日ではなかった…ということか…

そうとしか言いようがない。

2失点目以降、堪えに堪えてきた日本だが『ついに…』だ。しかし、まだ45分残っている。果たして、どう立て直すのか。

仮に今日負けても、あと2試合に勝利すれば、予選突破の目は残る。場合によっては、1勝1敗1分でもイケるかも知れないが…

…だとしても、これ以上の失点は許されない…

2チームないし、3チームが勝敗で並べば、最後は得失点差の争いになる。

後半、日本はメンバーを交代した。

件(くだん)のCBをベンチに下げ、前半まったく機能しなかったSHを、完全にSBとして、DFラインは4人になった。

システムは攻撃的な選手(OMF)を1人増やし、中盤はダイヤモンド型の4-4-2となった。

守備一辺倒となった反省を踏まえて、攻撃のリズムを作りたい…そんな意図が見える。

対するブラジルもメンバーを交代して、システムを4-4-2から3-4-1-2とするようだ。

日本とは逆に、少し守備的に変えてきた。

かと言って、守りに入ったワケではない。

ブラジルは2-3人で、ゴール前までボールを運んでしまう速さがある。

決して油断してはいけない。

日本のキックオフで後半が始まった。

エンドが替わり、向かい風となった日本は、短く速いパスを繋ぎ、攻撃のリズムを作る。

後半の5分過ぎ：スループスに抜け出した沙紀がGKと1対1になる。

相手をかわして打ったシュートは、惜しくもポストに弾かれ：得点機を逃す。

さらに後半12分には、CKから途中出場のOMFがヘディングシュートを放つが、これもクロスバーに嫌われた。

その直後、今度はつばさが果敢にミドルを狙っていく。

しかし、GKの真つ正面：ゴールラインを割ることができない。

そして迎えた後半22分：日本はまたもやCKを得た。

素早いリスタートで、ショートコーナーからゴール前にクロスが入る。

そこにファーから飛び込んできたのは：つばさ！

「いけっ!!」

だが、オレの叫びも虚しく：ヤツは空中でおもいつきり吹っ飛ばされ、左肩から落下した…。

誰もがファーだと思ったが：しかし、結果はまさかのノーホイットスル。

つばさが倒れたままゲームがつづく。

その様子にスタンドから大ブーイングが起こり、ようやくブラジルはボールを外に蹴り出した。



すぐに担架が用意され、つばさは一旦ピッチの外へ運ばれる。

…あの角度はヤバい!!…

いくら怪我に強いとはいえ、あの落ち方は危険だった。

その間、日本は「ファールじゃないか!」と激しく詰め寄るが、主審は人差し指を立てると左右に振り、抗議を受け入れない。

VTRで見れば、相手DFはボールを競りにいった…というよりは、明らかにつばさの身体目掛けて飛んでいた。

膝がつばさの鳩尾（みぞおち）に入っているようにも見える。

それでもノーファールの判定としたのは、その選手が前半に1枚、イエローをもらっていたからなのか？

2枚目のカードとなれば、即、退場。

PKの帳尻合わせか…ゲームを荒れさせたくないという感情か…あるいは単なる技術不足なのか…

いずれにしても、日本には悔しい判定。

今後、禍根を残すかも知れない。

だが、それも含めてサッカーだ。

今は割り切るしかない。

強いチームが勝つんじゃない、勝ったチームが強いのである。

プレーが再開されて、しばらく経ってから、つばさはピッチに戻った。

左手の親指を立てチームメイトに「大丈夫」とアピールするもの、かなり肩は痛そうだ。

無理はさせたくないが、この展開で彼女に代わる選手などいない。ここが日本の苦しいところだ。

しかし、この辺りから流れはブラジルへと傾いていく。

後半33分：ルーズボールがブラジルのFWに渡る。

この瞬間、日本のDF陣がボールウォッチャーになってしまった。マークの受け渡し：連携不足か？

フリーにさせてしまう。

最初のシュートはGKが身を呈して防いだものの、こぼる球を押し込まれ：日本は敗戦濃厚：決定的な4点目を失った。

これで意気消沈したのか、日本の足は完全に止まる。

後半41分には、ブラジルにいいようにパスを回されたあと、サイドから悠悠々とクロスを上げられる。

これを頭できっちり合わせられ、決勝トーナメント進出さえも絶望的となるような：5失点目を喫する。

ロスタイム…。

勝利を確信して気が緩んだブラジルDFの隙を突き、沙紀がつばさとのワンツートで抜け出すと、そのままペナルティーエリアに侵入。

再度GKと1対1の勝負になったが、今度は冷静に浮き球で相手をかまし、無人のゴールへと蹴りこんだ。

しかし、ここでタイムアップ。

日本の大事な大事な初戦は、スコア以上の完敗で終わった…。

「高野さん、そろそろ準備を始めますよ…。」

看護師がオレに声を掛ける。

そう、オレは今から手術だった。

「サッカー、どうでした？」

「…はあ…今すぐにも麻酔をしてほしいですね…。」

「…というと…」

「今、観ていた時間を消したいくらいの…惨敗です」

画面では監督のインタビューが映っていたが、オレは観るのをやめた。

このあと、キャプテンや、得点を決めたチヨモ、沙紀らが呼ばれるハズだが…彼女たちの顔を直視し、話を聴ける自信がなかった。

くつづく

## 術後

オレが目覚めたのに気付くと、看護師は医師を呼びに行った。

気分は悪い。

それはまだ麻酔が抜けてないから：ではない。

目覚めて、尚、悪夢が続いているような感じだからだ。

ほどなくして、病室に入ってきた医師は

「手術は無事終わりました。成功です。2、3日様子を見て、特に問題がないようでしたらリハビリを始めていきましょう」とオレがに告げた。

今の時刻は、午後の5時半。

そう『難しくない』：と聴いていたが、手術開始が午前9時だったハズなので：かれこれ10時間以上が経過していた。

つまり、今朝行われたブラジル戦が終了してから、早くも半日が過ぎたわけだ。

だがオレは、それが『ついさつき』のような感覚でいる。

それはそうだ。

その間の記憶がまったくないのだから。

それでも、夢は見えていたらしい。

対戦相手がどこだかは不明だが、大量失点して落ち込んでいる『なでしこイレブンのメンバー』に替わってオレがピッチに入り、次々とゴールを決めていく。

しかし、オレは大ブーイングを浴びてしまう。

なぜならオレは男子だから。

そこに『園田さん』が現れて

「高野さんは怪我をしているので、ハンデがあります。ですから、今の實力は女子と同等なのです」

などと言う。

：そんなワケはない…と反発しつつも、もしかしたら「そうかもしれない」と思い、落ち込んでしまう。

それを見たアクアスターの2人から、なぜか

「男として最低だ」

と言われ

「つばさが可哀想」

とやたら責め立てたてられた。

しかし園田さんが弓矢を持って

「高野さんは私が守ります！」

と今度はオレが彼女に助けられる。

だが、オレの身体はどういうわけか『ゴーゴンによって石にされた如く』身体が動かなくなつて苦しむ…みたいな話だった。

そのあとは、あまり詳しく覚えていない…。

夢に『前後のエピソードの整合性』を求めちゃいけない。

ワケがわからないのが、夢なのである。

まあ、どう考えても、直前に観たブラジル戦の結果を引きずつたものだった…のは間違いないだろう。

それが麻酔から覚めても、気分が悪い理由だった。

夢と現実の境目が、一瞬わからなかった。

当事者でないオレが、そんな夢を見るんだ。

実際戦った選手たちはどうなんだろう。

特にあのCB…トラウマにならなきゃいいが…。

今頃、TVやネットでは失点シーンが繰り返され、チームへの厳し

い声が溢れかえっているに違いない。

身贖する訳ではないが、チヨモも沙紀も、よく戦ったと思う。

特に1―5とされてからのゴールは、まだ勝負を諦めていないという、彼女たちの意地を見た。

結果として得点に絡んだのは、この2人だけであるし、負けたチームの中にあつては、及第点を付けていい。

それでも流れの中で『消えている』時間も多かったし、決めべき場面で決められなかったのは、大いなる反省点である。

きっとチヨモ自身も『PKによる1点のみ』なんて、納得してないハズだ。

そうでなければ困る。

それで満足しているようじゃ、上は狙えない。

それより心配なのは、あのCBだ。

今日の敗戦の『全責任』を背負わされることになるだろうから。

確かに序盤のミスは大きすぎた。

しかし、敗因のひとつではあるが、すべてではない。

勝てた…とは言わないが、互角に持ち込める可能性はあつたと思う。

ただ、結果的にチームとして、それができなかった。

サッカーは個人競技ではないのだ。

誰かひとりを戦犯に仕立てあげ、よつてたかつて徹底的に叩く…という風潮は今に始まったことではないかも知れないが『批判』と『誹謗・中傷』の類いはまったく違う。

別物だ。

ネットなどでは匿名なのをいいことに、安易に『死ぬ』だの『殺す』などの言葉が使われるが『もし自分が逆の立場で同じことを言われた

ら…』とか思わないのだろうか。

…思わないんだろうな…

厳しい言葉は、一生懸命応援した結果の裏返しかもしれないが、その気持ちは『口にしていい言葉』かどうかを、よく考えてほしい。

…オレたちは意外とメンタル弱いんだぜ…

…アンタみたいにも、神経、凶太くないだよ…

この日の深夜（日本時間）に、男子代表の初戦が行われた。相手はコートジボワール…今年のアフリカ大陸王者である。

身体能力が高く、もちろん強敵には間違いないが…実は日本にとって、アフリカの国とはわりと相性がいい。

それほど苦にしていない。

時おり「漫画かよ!!」と言いたくなるようなスーパーゴールを決めてしまうスピードとパワーを持っているが…その確率は極めて低く…つまり基本的に何本かに一本決まるかどうか…のシユートをケアしていれば、それほど怖い相手ではない。

だが、守るだけでは勝てない。

男子はこのあと戦うのが、ウルグアイ、オランダであることを考えれば、確実に勝っておきたい相手である。

観戦したかたつたが、術後ということもあり、医師から止められた。仕方ない。

ここで変に無理をして、治りが遅くなっても困る。

オレは指示に従うことにした。

明けて翌日。

結果は1―0で勝利したと知る。

お互いにチャンスを潰し合った末、終了間際によく日本が得点して、そのまま逃げ切ったらしい。

内容には色々不満はあるが、大事な初戦に勝利したということは評価すべきことだろう。

食事、採血、検査：それ以外にすることもないので、結局オレは、サッカー関係の情報をタブレットで眺めることになった。

気乗りはしない。

誰でも負けた記事を見るのは、面白くないだろう。

案の定、女子については『惨敗！』あるいは『無惨（夢散）』などの大見出しが並ぶ。

続けて『疑惑の判定』『天にも見放された』という言葉。

マスコミの記事は概ねどこも同じで、尽きるところ

「最初の失点がキツカケでリズムに乗れず（ベンチワークを含めて）建て直すことができなかった」

という内容だった。

その通りだ。

一方、ネット民の反応は相変わらずで：ミスをしたCB、ファールを見逃した主審への罵詈雑言が羅列されている。

そして、その影に隠れて散見される、夢野つばさに対する非難コメント。

…『期待はずれ』『役立たず』『今すぐ帰れ』だど？…

…無慈悲な言葉だな…



「さてさて、夢野つばさは日本が挙げた全得点に絡んでるんだぜ。序盤の超ロンググループシュート、空中戦での接触プレー、痛みに耐えながらの全力ファイト…お前たちが言うほど酷くはなかっただろ!？」と、ひとりひとり面に向かって、反論してやりたい。

さらに読み進めれば…やはりというか、なんと…彼らの怒りの矛先はオレや『園田さん』にも向けられていた。

…いやいや、園田さんは関係ないだろ…

…あんなことが原因でどうこうなるような、ヤツはそんなに柔（やわ）じゃない…

オレがちよつとムカつき始めた頃、LINEのメッセージが入った。

「園田さんからだ…」

名前を見ただけで、オレの心はスツと軽くなった…。

くつづく

## 初恋はミステリー

- ◇園田海未です。
- ◇おはようございます。
- ◇昨日は手術、お疲れさまでした。
- ◇お加減はいかががでしょうか。
- ◇落ち着かれたら、ご連絡ください。
- ◇お見舞いにお伺いしたいと思います。
- ◇女子のサッカーは残念でしたね。
- ◇微力ながら、精一杯応援させて頂いたのですが…。
- ◇それと、つばささんの怪我は大丈夫でしょうか？
- ◇とても心配です。
- ◇それでは、また。

「手紙か！」

オレは絵文字もスタンプもない…良く言えば「飾り気のない」…別の言い方をすれば「味も素っ気もない」彼女からのLINEメッセージを見て、思わずそうツツコんだ。

「真面目か！」

…真面目なんだろうな…

オレは勝手に…彼女が書道でもするが如く、床にスマホを置き正座しながら入力している姿…を想像して笑った。

ブラジル戦の結果、手術中に見た悪夢、そしてネットの反応…気が滅入ることばかりだったので、彼女からのLINEは嬉しかった。

ヤツが見たら

「バカじゃない？ニヤニヤしちゃって…社交辞令でしょ？」  
と言われるだろう。

そんなことはわかってる。

わかってるけど…

なんとなく、女子と初めて付き合った頃を思い出した。

中1の時から…。

小学生の時もモテてはいたけど、当然、個人的に付き合う、付き合いがないなんてことはあり得なかった。

けど、進学したとたん、突然交際を申し込まれて：「前から好きでした」なんてね。

可愛い子だったし、そりゃあ、舞い上がったよ。

恥ずかしいくらいにね。

まあ、結局、性格が合わなくて、サヨナラしちゃったんだけど…  
そういえば、彼女、今、どこでなにしてるんだろうな…。

あのまま付き合ってたなら、オレの人生はどう変わったのかな…。

…みたいなことを考えているうちに、当時のドキドキした感覚が甦ってきて：今の気持ちとリンクした。

…考えてみれば、ここ数年、チヨモ以外の女子にLINEなんていたことないからな…

オレもスケベを自認しながら、口だけ番長で、こう見えて意外と一途なのである。

「えつと…』『おはようございます。高野です』『お気遣い頂き、ありがとうございます』『手術は無事終わりました』『なにもなければ、2〜3日後にリハビリを始められそうです』…と。それで：『女子は力負けでしたね。まだあと2試合残ってるので、引き続き応援お願いします』『つばさは心配ですが：怪我には強いので大丈夫でしょう』『では、

また』…ふう…できた」

LINEのメッセージで、こんなに丁寧な文章を打ったことないからな…緊張するわ。

代表の広報の小野さんに添削してほしいくらいだ。

しかし、そうも言ってもらえないので、勇気を出して送信する。

その時だった。

ふと頭の中に過(よぎ)った。

…オレ、チヨモのこと…本当に心配しなくていいのか?…

心配してないわけじゃない。

あの痛み方は、相当なものだ。

…だけど…

今はオレの事で余計な心配は掛けたくない、サッカーに集中してほしい…と、敢えて連絡を絶ってきたのだが、今、この状況下にあつて、本当にそれでいいのか?

手術は無事終わったと伝えて、安心させてあげべきなのでは? 敗戦のショックを慰めて、または叱咤激励すべきでは?

そして何より、怪我の心配をしてあげるべきなのではないのか?

オレはヤツが意思の強い人間だと思ってる。

泣いてる顔を見たことがない。

でも、それは…

泣いていないのではなく『見せない』だけだ。

知っている…オレはそれを知っている。

だけど、オレの役割として、本当にそれでいいのだろうか?

少なくともオレは彼氏であるならば、ヤツが普通に弱味を見せられ

るような存在でなきゃいけないんじゃないか？

…オレは薄情な男なんじゃないかな…

…いかん、いかん、園田さんのLINEに受かれてる場合じゃない

…

オレは自分を戒めた。

「海未ちゃん、それはやっぱり『恋』じゃないかな？」  
とことり。

「『Carp』ですか？確かに、今年も広島は調子良さそうですが…」  
「…」

「にこと凜がいないと、誰もツツコまないのね…」

真姫はそう呟くと、絵里とことりが苦笑いしながら同意した。

穂乃果だけが「？」という顔をしている。

ここは、穂乃果の部屋。

真姫が『提案した計画』の打ち合わせに、希、にこ、凜、花陽以外のメンバーが集まった。

あの一件以来、引き籠り状態だった海未は、久々の外出である。  
高野と直接話ができただけで吹っ切れたらしく、顔色も表情もいつもの海未に戻っている。

その海未が、あまりに饒舌に『高野の人柄』について語るのも、そこにいる誰もが「ひよつとして…」と感じていた。

そこで穂乃果が、芸能リポーターのように根掘り葉掘り訊くと、彼女は「高野さんの事を思うと、なんだか切なくなりました」だの「声を聴いたら、心が晴れやかになりました」だのと言い出したので「これはやはり！」となったワケだ。

「海未、ボケてる場合じゃないわよ。やっぱりそれは、ことりが言うように恋したんだと思うわ」

「真姫、今なんと？」

「いい加減、現実を見なさいよ」

「私が高野さんに恋をしていると？」

「ズルいよ、海未ちゃん！穂乃果を差し置いて！」

「穂乃果は黙っててよ、話がややこしくなるじゃない！」

「うう…」

「きつと『吊り橋効果』ってヤツだと思っけど」

「真姫ちゃん、吊り橋効果って？」

「そうねえ、穂乃果にもわかるように説明すると…心理学的なことなんだけど…吊り橋の上のような不安や恐怖を強く感じる場所出会った人に対して、恋愛感情を抱きやすくなる現象のことをいうの。そういう状況下で普段と同じことをしても、何倍も格好よく見えたりして」

「ああ、なるほど。聞いたことあるかも」

「パニック映画とかアクション映画でもよく観るわね。ピンチに陥った主人公とヒロインの2人が、危機を乗り越えていくうちに、だんだん恋愛関係になっていく…っていう…」

「うん、うん、あるよねえ！たぶんそうなるだろうな…って思っっても、やっぱり2人が結ばれるとキュン！ってしちゃうよねえ」

「わかるわ」

「絵里もことりも、案外ベタなのが好きなのね…」

「確か…昔、スノハレの曲を作る時も、DVD観て号泣してたよね？」

穂乃果は「そういえば…」と手をポン！とひとつ叩いてから言った。

「あの時は花陽ちゃんもいたんだよね！」

ことりは絵里の顔を見ながら言うと、彼女は「そうだったわね…」と懐かしそうに答えた。

「穂乃果は寝てましたよね？」

「そう言う海末ちゃんは、座布団頭から被って『破廉恥です！』って、ずつと怒ってたじゃん」

「破廉恥なものは破廉恥なのです！」

「どこがさ？」

「観てもいないアナタに言われたくありません！」

また、いつものが始まった…と顔を見合わせる絵里と真姫と、ことり。

それでも、やつと海末が海末らしくなってきた…という感じでもあり、表情は穏やかだった。

「はあ…はあ…」

「…はあ…はあ…」

「まったく、毎回毎回飽きないわね…」

「すみません…。穂乃果のせいで、話が逸れました。ええ…と…そうでした。高野さんのことですね？私が高野さんに恋をしているのではないかと…」

穂乃果は「自分のせい」…と言われ膨れるが、ことりに「まあまあ…と制せられる。

「ありません！私が高野さんに恋心を抱くなどありえません。確かに高野さんは素敵です。吊り橋効果などなくても、十分格好いいです。ですが、高野さんには夢野つばささんがいます。私など…出る幕などありません！」

「でも好きなんですよ？」

「はー…」

いとも簡単に、真姫の誘導尋問に引つ掛かる海末。

一堂、目が点になる。

「…」

「あ、いえ、違います！そ、その男性としてどうのでもなく、ひとりの人間として尊敬できると言いますか…」

「まあ、海未ちゃんは恋愛経験がないからねえ…。それが恋かどうかなんてわからないんだよ」

「穂乃果に言われたくはありません!!」

「まあまあ…。でも、海未がそこまで惚れ込んでいる人なら、一度会ってみたいわね」

「真姫！ですから『惚れている』というのは語弊があります」

「私も会ってみたいなあ…海未ちゃんの初恋の人」

「ですから初恋の人ではありません！それに高野さんは手術したばかりですし、穂乃果のような騒がしい人を連れていくわけには参りません」

「だったら、落ち着いてからならいいのかな？」

「そうね。オリンピックが終わってからなら…」

「ことりと絵里は絶対ダメです！」

「えっ？」

「どうして？」

「…あ…いえ…なんでもありません…」

「？」

…確かつばささんの話では、高野さんは胸が大きい人が好みだと  
言っていました…

…であるなら…絵里とことりを会わせるのは危険です…

…そんなことしたら、私など見向きもされなくなってしまう…

…希と花陽も会わせないようにしましょう…



「海未ちゃん…どうかした？」

「！」

「大丈夫よ。ちよつとからかってみただけだから」

「そうそう。海未が珍しく男の人のことを語るから…ちよつとね」

「…絵里も真姫も酷いです…」

…でも、ちよつと心配だわ…

…おかしな方向にいかなきやいいけど…

…海未ちゃん、意外と「こう！」と思つたら周りが見えなくなつちやうんだよね…

絵里、真姫、ことりは海未を見て、そう思つた。

「ところで、肝心の計画の話だけ…」

ひとしきり穂むらの饅頭でお茶をしたあと『発起人』である真姫が切り出した。

「往復の飛行機と、観戦チケットは希がなんとかしてくれるみたいで、目処は立ったわ」

「ひゅく!!さすが希ちゃん!持つべきものはツアー会社に勤めてる友達ねえ!」

「でも、さすがにホテルはどこもいっぱい…諦めざるを得ないかも…」

「ひよつとして野宿?ガーン…」

古風なりアクションで、大袈裟に倒れる穂乃果。

「だけど、パパの知り合いが、近くにコンドミニウムを持ってて…そこを使っていい…って言ってってくれたの」

「ハラショー…」

「さすが西木野財閥!持つべきものは…」

「や、やめてよ!」

抱きつく穂乃果を真姫が振り払う。

「それじゃあ、みんなでお泊まりできるんだね？」

ことりが目を輝かせて彼女を見る。

「ま、まあね…だけど全員は無理かもしれないわ…」

「そうね…私たち学生は夏休みだから融通が利くけど…」

と絵里。

「今日はここにはいないけど、凜もたぶん大丈夫…って言ってたわ。希とにこちゃんは…調整中みたい」

「花陽は…やっぱ難しいのかしら？」

絵里が寂しそうな顔を見ると、みんな同じ表情になった。

「仕方ありません。いえ、むしろ仕事が忙しいのはいいことです。あの花陽が異国の地で、しかもひとりで頑張っているのです。感慨深いというか、私たちの仲間として、実に誇らしいではありませんか！」

「おお！久々に海未ちゃんが、海未ちゃんらしいことを言った！」

「茶化さないでください！」

「そうね。それは海未の言う通りだわ。ただ、あの娘は手を抜くとか、楽をするとか知らないから…。あまり頑張りすぎて身体壊さなきゃいいけど」

「私も絵里と同意見」

「でも、それはお互いさまでしょう？絵里ちゃんも、真姫ちゃんも…そして海未ちゃんも」

「ふふふ…ことりもですよ」

「えへっ」

「えつと…みなさん…誰かひとり、お忘れでは？」

「…」

「…」

「…」

「…」

「ほらほら…『穂』の付く人が抜けてますよ？」

「！」

「もうおわかりですね？せくの！」

『雪穂ちゃん』！」

4人が声を合わせて答えた。

「ガーン」

崩れ落ちる穂乃果…。

あはははは…

何週間ぶりかに、穂乃果の部屋に明るい笑い声が響き渡った。

「呼びました？」

ドアを開けて顔を出す、穂乃果の妹。

「ごめんなさい。呼んだだけ…」

くっくくく

無謀な賭け、勝ちにいこう！

ブラジル戦から中2日。

なでしこジャパンの2戦目はフランスだ。

強引にドリブルで運ぶと言うより、パスサッカーを展開するチームである。

個々の選手は日本に較べると速さはないが、しかし身体が大きく当り負けしない為、ボールが足元に入ると、なかなか奪うのが難しい。そして、なんとと言っても怖いのはセットプレーで：特に高い打点から放たれるヘディングシュートは要注意だ。

フランスは初戦の南アフリカを2-1で勝利しているが、どちらもCKとFKからエースの『レベツカ』が頭で決めたものだった。

ただし、彼女はスタメンに名を連ねていない。その試合で腰を痛めたとの情報だ。

迎え撃つ日本は3-3-2-2：ブラジル戦の前半と同じシステムで挑む。

ただ、若干メンバーに変更がある。

『日本のスタメンです。GKは初戦の『西村』に代わって、ハイボールの処理には定評のある、経験豊富な『佐藤』がゴールマウスを守ります。DFはスリーバック：左から『菊池』『馬場』『黒崎』：今日は『坂巻』に代わって馬場が入りました。中盤の底には『桐原』、SHは左に『森嶋』右に『須田』。前線2列目は左が『藤城』、右には：右には『斉木』：今日は斉木が入ります。夢野つばさはベンチスタート。そしてFW、ツートップは『九条』と：ブラジル戦全得点に絡む活躍を見せた『緑川』です…。

聴いての通りだ。

DFはあのミスを犯してしまったCBに代わり『馬場聖子』が入った。

彼女はかつて、つばさや沙紀とともに大和シルフィードでプレーしていた長身選手で、現在はイングランドのプレミアリーグに在籍している頼れるベテランだ。

このメンバー変更が、相手の高さを警戒した戦略上のことなのか、あるいは初戦の結果を加味してのことなのか…そこは不明。

おそらく前者だと思われるが、後者であるならば、彼女の今日の汚名返上とはならなさそうだ。

GKも選手変更があつたが、こちらは元々の計画だろう。

実況にもあつたように、高さに強い選手である。

ただし、彼女は練習中に右足を捻ったとのことで、万全ではないらしい。

もつとも、この情報は『三味線』の可能性がある。

相手エースの腰の状態もしかり。

情報戦…。

ホイッスルが鳴る前から、駆け引きが始まっているのだ。

しかし、なんと言つても心配なのは夢野つばさの状態である。

ノースリーブのウォームアップシャツの左肩からは、痛々しいまでにガチガチに固められた、ベージュのテーピングが目立つ。

日本にとつては、とにかく負けが許されない試合。

なんとしても先制点がほしい状況下で、チームのポイントゲッターでもあり、チャンスメイカーでも彼女を外すというのは大英断だ。

いや、そうせざるを得ないほど、肩の具合が悪のだろう。

しかし、そんなことは言つてられない。

とにかく、今、ピッチに立つ11人の選手で闘うしかないのだ。

キックオフの笛が鳴った。

日本はブラジル戦の反省を生かして、落ち着いてボールを回す。フランスもゆっくりとパスを繋ぎ、序盤はお互い様子見と言った展開。

しかし、沙紀を中心に連動して選手が動き、高い位置からプレッシャーを掛けていくことで、徐々に流れは日本に傾いていく。これが功を奏し、何度かカウンターで相手ゴールを脅かした。

試合が動いたのは、前半21分。

ハーフライン付近でボールを奪った日本は、大きくパスを展開し、左サイドを駆け上がったきたSHの森嶋菜々にボールが渡る。

森嶋はそのまま中に切れ込むと、自らゴール前まで持ち込みシュート。

これが見事、右サイドネットを揺らし、待望の先制点をあげる。

これで波に乗りたい日本。

ところが、そう簡単には勝たせてくれない。

すぐさま注意していたハズのセットプレーから失点してしまう。

右コーナー付近からのFK。

ボールはグラウンダーでマイナス方向に蹴られ、後方から走り込んできた選手にダイレクトでズドン！と決められてしまった。

高さを気にするあまり、ゴール前に人数を掛けていたが、この選手にマークがついていなかった。

フランスに裏をかかれた格好で、日本は1-1の同点に追い付かれる。

前半はこのあと、ともに数回チャンスを作るが決められず、得点がないままハーフタイムに入った。

後半戦、キックオフ。  
お互いメンバー交代はない。

開始8分：相手のパスミスからインターセプトした日本は、ショートカウンターを発動させ：沙紀がドリブルからGKの股間を抜く：今大会2点目のゴールを決めて勝ち越す。

すると、ここから点の取り合い：シーソーゲームになる。

5分後：今度はフランスがパスを繋ぎゴール前までボールを運ぶと、左サイドからのクロスに、ゴール正面でボレーシュートを打たれる。

GKもよく反応したのだが：こぼれ球を流し込まれ：再び同点。

さらに後半21分には『これぞ、ワールドクラス』『芸術としか言いようがない』というような、角度のない難しい位置からFKを直接決められ、逆に勝ち越しを許してしまう。

それでも、この試合、絶対に負けられない日本は意地を見せて、必死に食い下がる。

後半26分、今日、先制点を挙げた森嶋を起点に、DMFの桐原、OMFの藤城がポジションを入れ換えながら上手く左サイドを崩し：最後は森嶋がもう一度、ゴール前へ低くて速いクロスを放り込む。

これに飛び込んだ沙紀：は、潰されてしまうが：その後ろをフォロウしていたトゥットップの片割れ：九条がスライディングしながらボールを押し込み、スコアは三度（みたび）振り出しに戻った。

なんとというゲームだ！

これはもう、なにがどつちに転んでも、まったくおかしくない試合

になった。

お互い激しくボールを奪い合う展開となり、体力の消耗が激しい。延長でもないのに、フランスの選手は度々足を攣（つ）り、ストレッチをしている。

そんな状況下、後半30分。

先に日本のベンチが動く。

ここまで好守に渡り奮闘してきた森嶋だが、運動量が落ちたと見たか、選手交代。

SBが本職の宮下が入る。

これに伴い、日本はシステムを変更する。

右SHのポジションを下げ、最終ラインは左から宮下、菊池、馬場、須田となった。

CBだった黒崎が前目に位置し、ボランチの桐原とコンビを組む。前線の2列目：藤城と斉木はワイドに開き、中央には沙紀が入る。そしてFWは九条のワントップ。

4-2-3-1となった。

ところが、この選手交代とシステム変更が裏目に出る…。

直後にフランスも選手交代で2枚のカードを切った。

1枚は再三、森嶋にやられていた自陣の右サイドに、フレッシュユな選手を入れ活性化を図る。

そしてもう1枚は…『レベッカ』だ。

満を持して、エースが登場。

狙いは明白。

彼女の頭だ。

フランスはSHがいなくなり、中盤に空いた（日本の）両サイドのスペースから、アーリークロスを何度も放り込んでくる。



体力が落ちてきた中で、単純だが一番効率のいい作戦だ。初戦を勝っているフランスは、日本より少しだけ余裕がある。負けなければいい…。多少、そんな感じも見え隠れする。

日本は苦しい。何度も何度も跳ね返すが、こぼれ球が拾えず、クロスを入れられてしまう。

そして後半36分：ついに怖れていたことが起きる。ゴール正面からあがったセンタリングに、レベツカがバックヘッド：後ろに擦らされたボールは、ポストに当たってゴールラインを越えてしまう。

3—4…。

日本、痛恨の一撃を喰らう…。

馬場も身体を寄せていたのだが、一步及ばず：技ありの一発に屈する。

だが、日本、まだ諦めてはいない。

1点差で負けようが、2点差で負けようが、2敗すれば、その時点で予選突破は絶望的。

であるならば…。

日本、奇策に出る。

白瀬と：つばさがピッチサイドに立つ。

交代は3点目を挙げた九条と、今日、つばさに代わりスタメンに入った斉木。

つばさは九条と入れ代わり、そのままFWの位置に入るようだ。

こちらもつばさの高さを活かしたパワープレーか？

否！

少し違う。

もうひとり長身の選手が前線に入る。

馬場聖子だ!!

一度ボランチに上がった黒崎が、再びDFラインに戻り、宮下、黒崎、菊池でスリーバックを形成。

ボランチは桐原。

2列目は藤城、沙紀、そしてSBにいた須田が入る。

前線は3人。

ややセカンドトップ(ST)気味に：ブラジル戦で途中出場して、クロスバーを叩くヘディングシュートを放った白瀬。

そして馬場とつばさ。

3—1—3—3：捨て身の戦術。

残された時間は：あと8分+α。

とにかく前線でタメを作り、厚みのある波状攻撃を仕掛けたい。

フランスはレベツカを残し、残りのフィールドプレーヤー9人が自陣で守る。

もう、このまま逃げ切る。

リスクは侵さない。

沙紀が左右にボールを散らしながら、藤城と須田が前線にクロスをあげる。

後半40分、馬場が頭で落としたボールを、つばさがダイレクトボレー！

しかし、これはわずかに枠の外。  
ポストを掠めて、エンドラインを割る。

その2分後。

今度は楔（くさび）のパスを受けたつばさが、ワンタッチでボールをはたき、沙紀から白瀬へ：最後は馬場がシュートを放つが、これもDFにクリアされ、ゴールならず。

そして、ロスタイム…。

攻め続けた日本に、最後のチャンスが訪れる。

右サイドで粘りに粘った須田が、ボールを相手にぶつけて、CKを得る。

キッカーは黒崎。

もう、日本の自陣には誰もいない。

ラストプレーに、GKの佐藤も上がる。

一か八かの：いや、万にひとつのギャンブルプレーだ。

『さあ、日本、最後のチャンスです！右からのCK：キッカーは黒崎。もう自陣には誰もいません！…覚悟を決めました…文字通りのラストプレー。』

『ニアポストに馬場、ファーポストにGKの佐藤と白瀬。夢野つばさは：ゴールからは少し離れたところ。こぼれ球を狙います。』

『さあ、主審がホイッスル吹く！…ショートコーナーを使ってきた！須田がゴール前にあげる！ニアサイド、馬場が落とす！もう一度、須田へ。今度はファーだ！白瀬、ヘディングシュート！…DFに当たる…こぼれ球を…つばさあ！！ああ！キーパー弾いた？弾いたところ…佐藤!?佐藤！佐藤が決めたあ！！ゴー…ゴール！同点！同点！日本同く点く！！土壇場で追い付いたあ!!!』

アナウンサーの血管は切れそうだ。

いや、視聴者も同じくらい絶叫したかも知れない！  
日本、起死回生の同点ゴール！

執念のプレーが実を結んだところでタイムアップ。  
劇的な幕切れとなった。

首の皮一枚、予選突破への道が繋がった。

バツタリと倒れこむフランスの選手たち。

歓喜に沸く日本とは対照的な光景だ。

フランスは『安全策』が裏目に出たか、ほんの少しだけ厳しさが足りなかった。

ボールへの寄せが甘かった。

もう1点獲られていたら、日本は息の根を止められていた。

それがサッカーの難しいところ。

万全を図って逃げ切りにいったハズなのに『受け』に回っやられてしまった。

逆に日本は魂であげたゴールだ。

最後、決めたのはGKの佐藤。

キーパーが弾いたところ、素早く反応して、足が伸びた。

痛めていた右足だった。

馬場と佐藤は泣いている。

苦しい戦いだった。

思いもかけない4失点。

守備陣として、ベテランとして、責任を感じていたのだろう。

その2人が絡んで、なんとかかもぎ取った勝ち点1。

現地でインタビューしたアナウンサーも、思わず貰い泣きをして  
た…。

~^~^~

頑張るのは自分の為？

…いやあ、凄い試合だった…

見終わったオレは、グツタリと疲れてしまった。

サッカーを始めて15年近く立つが、ここまで壮絶な打ち合いは、あまり見たことがない。

「ナイスフアイト！」

それ以外、言葉が出なかった。

内容的には誉められたものではなかったかもしれないが、日本中の魂を震わせる熱い戦いだった。

ブラジルは、南アフリカを3―0で下した為、最終戦を待たずして決勝進出となった。

これにより日本が予選を突破するには、次の南アフリカ戦に絶対勝つことはもちろん、フランスがブラジルに負けてくれなくてはならない。

尚且つ、得失点差は現時点で日本が―3、フランスが＋1であることから、これを跳ね返すくらいのゴールが必要だ。

他力本願。

だが、何を言っても始まらない。

とにかく、自分たちの力を出しきるしかないんだ。

そして、改めて思った。

応援してくれる人たちの気持ちを。

オレたちは、特定の誰かの為にプレーしているわけじゃない。

もちろん、サポーターあつてのオレたちであることは、重々承知し

ているが、それ以前にサッカー選手として上手くなりたい：：最高のプレーヤーになりたい：：という、自己の欲求を満たす方が、上位にくる。だが、そのプレーに胸熱くする人がいる。そのプレーヤーに憧れる人がいる。

しかし『こっちかた』にいと、ついつい、そのことを忘れがちである。

つまり『チームを』あるいは『オレたちを』応援してくれることは、当たり前だと思ってしまう。

でも違う。

それは一生懸命プレーしてくれるから、応援してもらえるのだし、応援してもらえるから一生懸命プレーするのだろう。

つまり、我々プレーヤーにその熱意がなければ、きっとその関係性は成り立たない。

オレたちは『国の為に』戦っているつもりはない。

たが『国の代表』である限り、精一杯のプレーはしなければいけない。

無責任にメダル、メダルと騒ぐマスコミには同意しかねるが、応援してくれる人には報いる努力はしなくちゃいけない。

気持ちの入ったプレーであれば、例えばその結果が、どうであれ、ある程度の方は納得してくれるであろう。

今日の試合を観て、改めてそう思った。

ついでに男子の2戦目についても、触れておこう。

南米の古豪、ウルグアイとの1戦は1―1のドロー。

オランダもコートジボワールと（予想外に）引き分けた為、なんと2チームが1勝1分、2チームが1敗1分となり大混戦となる。

※説明していなかったが、初戦でオランダはウルグアイを3―2で下している。

次の結果次第では、1勝1敗1分で4チームが並ぶ可能性がある為、こちらも、決勝進出の行方は最終戦に委ねられた。

いやはや、こっちも大変な状況だ。

翌日から、オレのリハビリが始まった。

一般的に頸椎損傷と言えば、下半身不随や部分麻痺などの後遺症が想像されるが、オレの場合はそこまで酷くないらしい。

難しいことはわからないが『奇跡的』に軽度だったようだ。

正確に言えば頸椎損傷という表現は少し語弊があるのだが、首の骨が傷ついたことには間違いないので、そう使わせてもらう。

だが、甘かった。

そう簡単ではない。

『たかだか数週間』ベッドの上にいただけなのに、身体：特に下半身の関節が固まって、まったく動かない。

膝を曲げることすらできない。

オレのリハビリはまず、それが曲げ伸ばしできるようマッサージから始まった。

よく映像で見る『平行棒のようなものに掴まってする歩行訓練』など、まだまだ、全然先の話だ。

…こりゃあ、プレイヤーとして復帰するなんて、無理じゃねえか？



…

さすがに不安になる。

それでも、担当してくれる理学療法士が、わりと綺麗な女性であることがわかり、オレのモチベーションは高まった。

…ふん、単純で悪かったな…

実力に差があるなら論外だが、そこに違いがなければ、男より女のの方がいい。

さらに言えば、やっぱり見た目がいいに越したことはない。

まあ、ごくごく普通の男子はそう思うだろ。

これは差別と言わない。

本能だ。

「先は長いですが、一緒に頑張りましょう…」

「は、はい！お願いします」

オレより、5歳上だという彼女の、優しい声に癒される。

しかし、だからといって簡単に足が動くわけではない。

「はい、ゆっくり曲げていきますよ…」

「うっ…うう…」

「はい、頑張ってください…はい、もどします」

「くはっ！」

オレの顔は苦痛に顔が歪むが、彼女は極めてビジネスライクに作業を進める。

決して『メイド喫茶の女の子のような微笑み』は見せてくれない。当たり前か。

足首、膝、股関節を少しずつ揉みほぐしながら動かしたあとは、電

気を流す。

ピクピク、ビリビリ…。

僅かではあるが、刺激されている感覚はある。

感覚があるということは、神経が生きている証拠であるらしい。

「今日はここまでです。ただ、なにもしなければ、またすぐに元に戻ってしまうので…横になってる時でも、自分で意識的に力を入れて、曲げる努力をしてください」

担当が男だろうと女だろうと、関係なかった。

冗談のひとつも言う余裕もなかった。

ただ

「実は私、マリノスのサポーターなんです。だから、高野さんの事故の話を知ったときは本当にショックで、悔しくて…。泣いちゃったんです。でも、こうやって復帰に向けて協力することができるのですが、すごく嬉しいです…」

と打ち明けてくれた。

そして

「全国にいるファンの為にも、闘いましょう！」  
とも。

…そうかオレには、身内以外にも泣いてくれる人がいるんだ…

…オレにはまだ帰れるところがあるんだ…

…こんなに嬉しいことはない…

わかる人だけわかってくれればいい。

オレは某アニメの主人公の名台詞を、心の中で呟いた。

くつづく

知らないな…誰が来るのかな？

「うわあ…これがサッカーのスタジアム!」

穂乃果はバックスタンドから、フィールドを見下ろして、感嘆の声をあげた。

「まさか、本当にここまで来るとはね…」

ここは掛けていたサングラスを外しながら、眩しそうに空を見上げる。

「凄いね!芝が綺麗な模様になってるよう」

「ことりちゃん、あれがピッチ職人の腕の見せどころなんだにや」

「ピッチ職人？」

「芝目の模様は、刈りこむ向きによって変わるんだよ。芝刈り機が、芝を倒した方向で光の当たり方が変わって…見た目が違くなるんだにや」

「へえ…」

「さすが凜ね!」

「伊達にスポーツのインストラクターを目指してないにや!」

絵里に誉められると、凜は「えへん!」とペツタンコな胸を突き出した。

「…でも、ここまで来て夢野つばさが出なかつたら、どうするつもりよ？」

ここはオペラグラスを目にあてがうと、キョロキョロとウォームアップし始めた選手を覗き見る。

「どうするもなにも…それはそれで仕方ないです。個人的には、もちろん出て欲しいですが…」

「まあ、あまり状態はよくない感じだけど…いいんじゃない?普通に日本を応援すれば…」

「そうですね。勝てば次がありますから」

真姫の言葉に『いつもと違う姿をした』海未が頷いた。

そう：彼女たちは女子サッカーの応援をする為に、海を渡って遠路遙々、この会場までやってきたのだった。

凜以外は生のサッカー観戦は初めてである。

観戦はおろか、ことりや真姫はルールすら知らない。

それでも：

海未の疑惑を晴らすため：「海未のせいで夢野つばさが活躍出来なかった」などと言わせない為、直接現地で応援するに至ったのだ。

なでしこジャパンの第3戦、南アフリカとの試合会場は、2万人収容のサッカー専用スタジアム。

ピッチと客席が近い為、満席になるとかなり圧迫感がある。

向かって左のゴール裏では、すでにウルトラス（日本のサポーター）が詰めかけ、気炎をあげている。

しかし、開始時間までまだ早いからか、ブラジル戦、フランス戦と比較べれば空席が目立つ。

いや、少し違う。

実は前の2戦は、日本のサポーターはもちろん、両国のサポーターが大挙して押し寄せたことと：注目度が高い対戦だった為、地元民も多数足を運んだことにより、（会場は違ったが）立錐の余地もなかった。

だが、南アフリカは：というと、サポーターがそこまで来ることもなく、人気カードというわけでもないの、地元民の観客もあまり多くない。

希が『チケットをわりと容易に入手できた理由』もそこにあった。

日本のホームゲーム：そんな感じである。

「この辺でいいかな？」

一行はバックスタンドの中段：ピッチ全体が見渡せる位置に陣取った。

「みんなお揃いのようやね？」

「!？」

馴染みのある関西弁が、不意に背後から聴こえた。

「希!?お休み取れたの?」

その顔を見て驚く面々を代表して、絵里が言った。

「チケットを手配したのは、誰だと思ってるん?ウチ、ただ働きは嫌いなんよ」

と、希はニヒツと笑う。

「みんな、早く着いたんやね?」

「ええ、穂乃果が寝坊しなかったし、ことりも自分の枕を忘れなかったから」

「あはは…」

「えへっ…」

真姫の皮肉混じりの言葉に、照れ笑いを浮かべる穂乃果とことり。希もつられて笑う。

しかし、そこにいるメンバーの『ある異変』に気づき、希は大きな声で叫んだ。

「ちよつと、海未ちゃん!!髪、どうしたん!？」

希の姿を見て驚いたメンバー以上に、彼女は驚いた。

それほどの違和感。

それほどの変わりよう。

「禊(みそぎ)…と言えばよろしいのでしょうか…。もしくは、必勝祈願の願掛け…とでも言いますか」

こともなげに語る海未だが、その自慢の長髪は…

バツサリと切られていた。

わかりやすく言うなら『凜とほほ同じ長さ』に…である。

「さすがに『坊主にする』っていうのは全員で止めたけど…」

と、にこが呆れた顔をして海未を見る。

「中途半端では意味がありませんから」

「だからって坊主はやりすぎだって！」

「…海未ちゃん…そっか…そやね…。うん、きっとその想いは伝わる…」

その姿、その言葉を聴いて、希の目に涙が溜まる。

「希、何を泣いているんですか？私は特になんとも思っていないですよ。ずっと、切れたかったんです…ですが…キツカケがなくて…。初めは少し、首筋がスースーしましたが、もう慣れましたし」

「泣いてなんかないよ…目にゴミが入っただけやから…」

海未の言葉は、半分嘘だ。

だが、本人がそう言う以上、希はもう何も言えなかった。

「でも、似合ってるやん」

希にその声を掛けられると、海未は顔を赤らめながらも

「はい、私もそう思います」

と力強く答えた。

「あとは、かよちんだけにや…」

眩いたのは凜だが、他のメンバーも同じことを思っていた。

「一応、チケットは送ったんやけどね…」

「まあ、仕方ないですね」

事前話していた通り、メンバーの中で一番忙しくしているのは花陽である。

しかし…もしかしたら…という期待がなかったわけではなかった。  
だが、それはどうやら無理だったようだ。

「残念だにあ…」

凜は、再び悲しげに呟いた。

その時だった。

「ご一緒させて頂いてもよろしくて?」

「!？」

「お久し振りね、μ sの皆さん」

「!!」

「ツバサさん! あんじゅさん! 英玲奈さん!」

振り向いた先にいたのは…A—RISEだった。

「ど、ど、どうしてここに!？」

「どうしてここに? 矢澤さん、それは愚問だ。 私たちも夢野つばさを  
応援しにきたのさ」

「英玲奈のいう通りよ。 それに私個人としては、同じ『ツバサ』を名乗  
る者として、共に闘っていきたいの。 その…フィールドは違うけど、  
彼女の活躍が私の刺激になるから」

「確かに、壮行会の時もそう仰（おっしゃ）っていましたね」

同席していた海未は、確かにその言葉を聴いていた。

「なるほど…。これは心強い仲間が増えたわ!」

と絵里。

「私たちのファンとμ、sのファンが、色々とやってくれてるけど… 私たちは一切そんなつもりはないから…。だから、今日は一緒に、精一杯応援しましょう！」

「はいー！」

周りの観客が振り向くほど、穂乃果が大きな声で返事した。

「…ところで、園田さん、その頭は一体…」

A—RISEの質問に、希にした説明を、もう一度する海未。

…さすが、園田さん…

…その潔さ、その精神力…

…μ、sは彼女がいたから強くなれた…

ツバサは海未の顔をジッと見つめた。

「私たちも、仲間に入れてもらっていいかしら？」

「えっ!？」

「星野はるかです！」

「浅倉さくらです！」

「水野めぐみです！」

『『アクアサカクラスター』です！』

「うそでしょ!？」

「μ、sの皆さんは…海未さん以外『初めまして』…ですね…」  
はるかがそう言うと、めぐみとふたりで頭を下げた。



「私は全員と初めましてかな…A—RISEも…」  
遅れて、さくらが一礼をする。

「どうしてここに…って思ってますよね？でも、一緒ですよ。夢野つばさの応援です」

「…っていうより、むしろ『私たちが応援しなくて、誰がする？』ってことですよ。だってつばさは『シルフィード』のメンバーなんですから」

「私もそう。元C・A・2の相棒ですもの」

「す、凄い…A—RISEとアクアスターと浅倉さくら…そして小庭沙弥が一同に会するなんて…。こんな豪華な顔合わせってある？…あり得ないわ!!…そう、あり得ない！」  
とここ。

「に、にこちゃん、興奮しすぎだから！」  
と穂乃果。

「小庭沙弥は余計じゃないかにや？」

「ぬわんでよ!!」

凜の『にこ弄り』に、全員が笑う。

「初めまして、ことりさん」

「初めまして、さくらさん」

「そっか、ことりちゃんとさくらさんで、親戚だったんだっけ？」

穂乃果がその様子を見て、口を挟む。

「すっごくく、遠いけどねえ」

「まさか、こんなところで初対面となるとは、思わなかったわ」

「うん。ことりも」

「改めてよろしくね」

「こちらこそ」

「ことりとさくらのふたりが、握手をかわす。

「役者は揃った…ってどこやね」

「…希…これってまさか、あなたが？」

偶然にしては出来すぎてる…海未の顔はそう言いたげだ。

「さあ…ウチはなんも知らへんよ。みんなの想いがひとつなった…そういうことやない？」

「…わかりました。無粋な詮索はやめましょう。あとはつばささんを…日本を…全力で応援するだけですわね」

海未はギョツとこぶしを握りこんだ。

「…ところで、海未さん、その頭は一体…」

アクアスターの質問に、三度（みたび）、同じことを答える海未。

「海未ちゃん、いちいち説明するのが面倒だったら、背中に『イメチェンしました』…って貼り紙でもしておいたら？」

「いえ、結構です！」

穂乃果の案を、海未は即、却下した。

「そう、そう、ことりね、こんなの作ってきたんだ」

ことりはそう言うと、持ち込んだ袋から、なにやら布を取り出す。

「穂乃果ちゃんはこつちを…海未ちゃんはこつちを持って…広げてく  
ださい！」

ことりの指示通りにふたりは布を持ち、お互い反対方向と歩き始めると、それは3mほどの長さになった。

「横断幕？」

そこには白地に赤く『YES！自分を信じて　ーユメノツバサ

!!』と染め抜かれていた。

「ことり…これはもしかして？」

「うん！『ユメノトビラ』の歌詞だよ。海未ちゃんが『ユメノトビラ』はタイトルが、本当は『ユメノツバサ』だった…って言ったのを思い出して」

「ユメノトビラ…いい曲ですよね！」

「はるかさん？」

「びつくりしなくてもいいですよ。はるかはμ s マニアなんです」  
めぐみが、彼女について説明した。

「♪Yes！自分を信じて、みんなを信じて」

「♪明日が待つてるんだよ…行かなくちゃ」

はるかがいきなり口ずさみ始めると、めぐみがあとに続く。  
すると

「♪Yes！予感の星たち胸に降ってきた…輝け！…迷いながら立ち  
上がるよ…」

と『ここは私のパートよ』とばかりに、絵里、にこ、真姫の3人が  
歌い出した。

ある種の条件反射なのかも知れない。

そうなれば他のメンバーも、黙ってはいられない。

穂乃果とことりも、そのあとに続く。

そして大サビの歌詞は…『トビラ』を『ツバサ』に変えて、A—R  
I S Eを含めた13人で、ワンコーラス歌いきった。

その様子を浅倉さくらは、楽しげに見ていた。

「あはは…つい歌っちゃったね」

「うん、穂乃果ちゃん。なんか久々に歌ったけど楽しかったね！」

その思いは、他のメンバーも同じである。

自分たちの歴史を否定するつもりはないが、だからといって想い出  
にすぎるつもりもない。

だからこれまで、ハミングすることくらいはあっても、これほどま  
でにガッツリ歌うことはなかった。

…やっぱり、みんなと歌うのは楽しいなあ…

μ s 全員が、感慨深げな表情をした。

彼女たちを見ていたのは、さくらだけではなかった。  
歌声に気付いた周りの観客が、期せずして起こったミニライブに、  
拍手を送った。

そして、それはざわめきが変わる。

「あれっ?よく見るとA—RISEじゃね?」

「こっちはアクアスターだよ」

「マジか!?浅倉さくらもいるじゃん」

「…そして、もしかして…μ s?」

まさかの状況に、周辺は騒然とした雰囲気になる。

だが、ここで海未はスクツと立ち上がると、ポケットからハチマキ  
を取りだし、頭に素早く巻いた。

ハチマキには『必勝!』の文字が見える。

「みなさん、今日の試合は日本にとって運命の一戦です。私たちも一  
緒に力の限り闘いましょう!!」

「おお!!」

海未の応援団長然とした、気合いと気迫に、ミーハーな気分は吹っ  
飛ぶ。

周囲の観客は、瞬時に戦闘モードに入った。

くっくくく

祈っちゃうでしょう…泣いちゃうでしょう…

《日本の命運は第3戦に持ち込まれました。日本はここまで1敗1分。フランスの結果次第ですが、決勝への道は、勝利しか残されておられません。とにかく日本は勝たなければなりません。》

《対するは南アフリカ。ここまで2戦2敗。予選敗退が決まっています。しかし、国の威信を懸けて…自らの、サッカー選手のプライドに懸けて、日本に全力で立ち向かってくるでしょう！お互いの意地と意地がぶつかり合う、素晴らしい内容のゲームになることを期待しましょう！》

《では早速、日本のスターティングイレブンを紹介します。システムは過去2戦の3-3-2から変えてきました。中盤をダイヤモンド型にした、オーソドックスな4-4-2のスタイル。負けはもちろん引き分けも許されない状況。点を獲りつつ、守りつつ…といった、攻守のバランスを重視したシステムと言えます。》

《まずはGK。…GKは『深山』を入れてきました…今大会初出場。非常にコーチングが上手い選手。後方から守備陣のポジショニングをコントロールします。》

《続いてDF…フォワードバックです。左から…フランス戦では左のSHに入り、攻守に渡って大活躍…1ゴール1アシストの『森嶋』…機を見てオーバーラップを仕掛けたいところ。CBには…ボランチもできる『黒崎』と…『坂巻』が入りました。坂巻はあのブラジル戦で悔しいミスがありました。今日は是非とも名誉挽回といきたいところ。そして、右のSBは『近江(このえ)』です。近江も今大会初出場です。果たしてどんなプレーを見せるのか？》

《中盤はワンボランチ。ゲームキャプテンでもある『桐原』…攻撃の起点になります。SHは左に『藤城』、右に『須田』。》

《トップ下には…スタメンに戻ってきました『Beautiful』》

lefty sniper』こと『夢野つばさ』!!ブラジル戦で痛めた肩の状態は思わしくありません…それでも、日本を勝利に導く為、崖っぷちに追い込まれた日本を救うため、ピッチに立ちます!』

『そして、ツートップは、ここまで2試合連続ゴール中と好調の…スピードとスタミナを併せ持つ頼れるドリブラー『緑川』と…今日は『神谷』が入ります。この選手も初出場。ゴールへの嗅覚に優れた選手です。』

『これで日本は、登録メンバー18人すべてが出場したことになります。』

『この試合、南アフリカの強力ツートップ『クリスティーナ』と『ジェニファー』を、いかに抑えるかがカギとなります。とにかく、どこからでも、どんな体勢からでもシュートを放ってきます。精度はあまり高くありませんが、油断は出来ません。フランス戦であげた得点は、ジェニファーのバイシクルシュートを、クリスティーナが頭で方向を変えたという、アクロバティック、かつトリッキーなものでした。』

『さあ、生きるか死ぬか、運命の一戦…今、キックオフのホイッスル!!』

『南アフリカ、いきなりロングボールを入れてきた!DF、坂巻、クリア!大丈夫です、大丈夫です。今日は坂巻、落ち着いています。』

『南アフリカは、夢野がボールを持つと、寄せが早い。遠目からでも強烈なシュートが打てることをよく知っています。その分、周りの選手のフォローが大事になってきます。』

『おっと、夢野倒された!ボールをもらって、ドリブルにいかがかというところ。南アフリカの選手の足が掛かりました。やはり、夢野』

にはタイトにきています。チェックが厳しい！…少し、左肩を押さえ  
ているが…大丈夫か？

≫南アフリカ、速いパス交換から、左サイド…ジエニフアア下がつ  
てボールをもらいにきた…おおっ！この位置から、ロングシュート!!  
…これはGK正面、がっちりキャッチ！深山、抑えました。しかし、ヒ  
ヤリとする場面。遠い位置でしたが、力強いシュート…やはり恐ろし  
い選手です。

≫ああ…つと夢野、また倒された。ハーフライン付近…あっ！日本、  
早いリスタート！桐原、大きく前線へ！緑川…通った！…いや、オフ  
サイド？…オフサイドです…僅かに裏への飛び出しが早かったか？  
日本、惜しいチャンスを逃しました。しかし、この人のスピードは世  
界でも引けを取りません。いいチャレンジでした。

≫前半16分。南アフリカ、初めてのCK。…低いボールが入る！  
日本、クリア！しかし、こぼれ球拾われた！日本危ない！繋がれる…  
シュート！クリア！クリア！ここは坂巻がクリア！今日は坂巻、集中  
しています。クリステイナのかかとで流すシュート、よく反応しま  
した。

≫そして、このボールを…日本は近江がオーバーラップして持ち上  
がります。右サイド…須田に預けて…夢野…もう一度、須田…逆サ  
イド、藤城が呼んでいる…が、外から近江が走り込む！渡った！右サ  
イド深いところ！神谷が寄る…あつと、このパスは合わない…緑川ま  
で流れた！…しかし、ゴール前…シュート打てるか？おっと、ヒール  
で後方にパス…ここに夢野!?…決まった！ゴー…ゴール！左足!!  
日本先制!!ペナルティーエリアの外からでしたが、デビルウイング炸  
裂！GKは一步も動けず、ボールはゴール左隅に突き刺さった!!日  
本、欲しかった、欲しかった先制点は、エースの左足から生まれまし  
たあ！見たか南アフリカ！見たか世界よ！これが日本の夢野つばさ  
だあ!!GKも驚きの表情を隠しきれません。…夢野、この大会の鬱憤

を晴らすが如く…の…目の覚めるようなミドルシュート！フリーになつたとはいえ…よく決めました！

《そして、さすが日本が誇るゴールデンコンビ！…緑川と夢野…阿吽の呼吸。緑川がシュートを打つと見せかけて、ノールックでバックパス…夢野の動きを感じていました。南アフリカのDF陣は、これに誰もついていきません。この調子でゴールを量産してほしいところ。

《しかし、日本はこのあとを気を付けなければなりません。フランス戦では、すぐに1点を返され、結局、それが4―4という、もつれる展開を生みました。ここは早く、もう1点奪って、南アフリカを突き放したい。今日の日本は勝つだけじゃダメなんです。フランスのスコアにもよりますが、大量点が欲しいんです。

《そのフランス対ブラジルは…日本と同じ時間にキックオフしています。今のところ0―0です。こちらの情報も、随時皆様にお伝えして参ります。

《前半30分が回りました。いい時間帯に先制した日本。早く追加点がほしいのですが、ちよつと膠着状態が続いています。攻めあぐねている感じ。南アフリカが、思った以上に反撃に出てきません。かなり守備的である為、日本かボールを持つても、なかなかスペースがなく前線に運べません…。なんとかギャップを作ろうと、中盤で速くて短いパスを繋ぎますが、縦に入れることができません。

《ならば…と攻撃陣がロングシュートを放っていきませんが、南アフリカもこれには動じず、冷静に対応しています。

《しかし、南アフリカも「負けていい」とは思っていないでしょう。どこかで攻めに転じるハズです。その隙は逃したくないところ。…ですが…その前に、どうしても追加点が欲しいんです。

《さあ、日本…痺れを切らしたように、左SBの森嶋が上がってきます。日本、一時的にスリーバックの形。森嶋、どうするか？…中盤、この辺りまではわりと自由にボールを持たせてくれますが、ここから先の攻め手がない。ボールは森嶋から藤城…夢野…桐原…須田…



大きくサイドチェンジして再び森嶋……そして緑川……ここはドリブルで強引に……いや、奪われた！カウンターに注意！あつ、しかし、すぐに藤城が奪い返します。ルーズボールを夢野！ナイスフォロー！そのまま前へ……あゝつと倒された！ホイッスル！ホイッスル！これはカードが出ます。イエローカード。

《夢野がドリブルで仕掛けようというところ、南アフリカの選手に、ユニホームを引っ張られて倒されました。その選手にイエローカードが出ました……が……夢野は大丈夫でしょうか？起き上がれませんか……。

《VTRで確認しましょう……。倒した選手とは別に……もうひとり……夢野のチェックきた選手と交錯したんですね……。倒れたあと、その選手に押し潰されたような形になりました。これは不可抗力ですが……。今日は、再三厳しいマークを受け、削られてきた夢野。それでも一瞬の隙を突き、見事な先制点をあげました。しかし、ここはかなり苦しいか……一旦、担架で運ばれます、

《……とはいえ、日本FKのチャンスです。ゴール正面からやや左……ペナルティーエリアの少し外。距離にして約20mほどでしょうか……。

《日本のセットプレーは、夢野がターゲットになる場合……あるいは、こぼれ球を狙う場合……とあるのですが、今はピッチの外。どちらのパターンもあります。果たして、どう攻めるのか？

《まだ、無理をする時間帯ではありませんので、フランス戦のようなパワープレーは早いでしょう……。しかし、このチャンスは活かしたいところ。今日のスタメンの中では……一番長身の坂巻ですが……ゴール前には上がりません。ボランチの桐原がファーポスト付近に向かいます。

《ボールに近づいていくのは……左SBの森嶋と右SHの須田。左利きの森嶋なら、GKから逃げていくボール……須田ならゴールに向かっていくボール。果たして直接狙うのか？桐原の頭を狙うのか？……緑川、神谷、藤城はペナルティーエリアの中……南アフリカの壁は3枚。ジェニファーとクリスティーナはハーフライン付近に残ります、

《主審が壁の位置を下げます……そして……笛が鳴った！須田……スルー

！そして、森嶋！桐原の頭！…は合わない…GK、ダイレクトキヤツチ！…そして、すぐさまロングスロー！…カウンターだ！日本、中盤に大きくスペースが空いている！ジェニファーがドリブルであがる！逆サイドにはクリステイナ。速い！！しかし、日本はDF3人残っている！…ここは遅らせた！…ボールはジェニファーからクリステイナへ…クリステイナ、中央に切り込み…ペナルティエリア強引に入ってきた！！…危ない日本！…ここは坂巻とクリステイナ！坂巻、スライディングで奪う。クリステイナ倒れたが…黒崎がクリア！！…ボールはこちら側のタッチラインを割り…ま…し…いや、待ってください…

《！？

《えっ？笛が鳴っていた？ファールですか？

《主審は…ああ！ペナルティエリアポットを差しています！！なんと、PKです！PK！日本PKを与えてしまいました！そして…坂巻にイエローカードが出されます。今大会1枚目…ですが…これは厳しい判定…。坂巻の足は…ボールにいつてます。クリステイナが転んだのは…その後のこと。接触はしていません。

《リプレーで見ても…ノーファール。足にはいつてません。

《ああ、これは日本、猛抗議です。逆にシミュレーションではないかと…ベンチから監督も飛び出して来ましたねえ…。しかし、ここはあまり熱くならないでもらいたいところ。まだ失点したわけではありません…ですが…収まりません…。数人の選手が必死に監督と坂巻を宥（なだ）めています…

《主審は首を大きく振って、抗議を受け付けま…あつ？胸ポケットに右手を入れた…ああ！カードです！カードか出ました。イエローとレッド、2枚持つてます！…なんということでしょう！坂巻に…2枚目のイエロー…た、退場です…。そして、監督にも…いきなりレッドカード!?なんと監督にもレッドカード！退場を言い渡されましたあ!!

《いやあ、大変なことになりました!!…すみません…私もちよつと、冷静ではられません…。

《坂巻は…立てません。膝から崩れ落ち…泣いています…泣いていきます…涙が…大粒の涙が頬を伝います。

《初戦のブラジル戦。敗戦の責任を、一身に背負うことになってしまったクリアミス。フランス戦は出番がありませんでした。それだけに今日の一戦に懸ける意気込みは大きかったはず。実際、今日は集中していましたし、何度もいいプレーが見られました。それだけに…無念でしょう…。

《ですが…このプレーに関して、あなたを責める人はいません!!涙を拭いて下さい。まだ、終わってません!まだ、あと試合は50分も残されています。大丈夫です!仲間を信じましょう!日本の…なでしこジャパンの底力を信じましょう!祈りましょう、奇跡を!

《今、坂巻は馬場と佐藤に両肩を抱えられて、ピッチをあとにします。…そして…場内、日本のサポーターからは『ちづる』コールです。この声があなたの耳に届いているか!?!…タッチライン…フィールドに振り向いた坂巻…一礼して…ベンチへと下がります。この姿にスタンドから大きな拍手です!

くつづく

負けない心で…

《さあ、しかし…ここは集中しなければいけません。前半、残り時間はあと10分。ピッチの中の混乱は、ひとまず収まったもよう。これからPKです。南アフリカ、蹴るのは…クリスティーナ。日本サポーターから、大きなブーイングを浴びています。しかし、涼しい顔でペナルティースポットにボールをセット…数歩下がってホイッスルを待ちます。

《一方、絶望の淵から日本を…そして坂巻を救えるか!? GKは深山。二度、三度と頬を叩いて、気合いを入れました。そして、少し腰を落として、小刻みに身体を揺らします。準備は整ったか？

《場内が静寂に包まれます。…キッカーとキーパーとの1対1の勝負！その距離わずか11m。果たして軍配はどちらに挙がるのか？今、笛が鳴りました。…クリスティーナ…蹴った！止めたあ！弾いたボールは…クリアー!!近江が大きくクリアー…タッチラインを割りました。ジェニファーも詰めていましたが…間一髪、近江の反応が早かった。日本、大ピンチを脱しました！

《いやあ…止めた！止めた！止めましたあ!!深山、ビッグセーブ!!選手の祈りが…サポーターの祈りが…皆さんの祈りが…日本中の祈りがGKの深山に届きました!…左に跳んだ深山、右腕一本でボールを弾きました。ドンピシャのタイミング!そして、そのあと近江も良く反応していました。

《ですが、日本、退場者が出て1人少ない状況…いや、夢野は治療の為、まだピッチの外。従って2人いません。苦しい状況には違いありません。

《さて、あと10分余り…ピッチ内、かなりの混乱がありましたので、ロスタイムが相当あると思われませんが…まずはここを凌ぎたい。そしてハーフタイムを使って、一旦、ゲームプランを含めてリセットしたいところ。

《南アフリカのスローイン！このボールを前線にフィード：おつと、これは直接ゴールラインを割りました：日本助かりました：ゴールキックに変わります。そして治療を終えた夢野が、ここでピッチに戻りますね。：ポジションの修正を指示しています。：。どうなりますか：坂巻が抜けたところは：どうやらボランチの桐原が下がるようですね。そしてSHのふたりが中を絞り：STに緑川と神谷。ワントップに夢野。前線の3人は前後が入れ替わりました。そうですね、ここまで、あまり積極的ではなかった南アフリカが、数的優位になったとみるや、一転して攻勢に出てくる恐れがありますから、ここはある程度守備重視もやむを得ないでしょう。

《どうでしょう：南アフリカが前掛かりになってきたことで、少しスペースが空いてきたか？ボールが奪えれば、スピードのある緑川、夢野が仕掛けるチャンスはあります。：ですが、取り処が難しい。チェックに寄っていくと、スツとボールを捌かれ、体力だけが奪われていきます。あつと、ここでジェニファーがドリブルで仕掛けてくる！ペナルティーエリア左側！：しかし、ここは近江、対応しています。今日が初出場となりますが、落ち着いています。

《そして、このボール：日本、繋いでいます。須田：藤城：前線に送る！：夢野には？：長すぎました。少し合わなかったか？

《さあ、前半41分になりました。ここまで、ボランチから最終ラインに入った桐原を含めて、南アフリカに決定的な仕事をさせておりません。何度もピンチがありました、ギリギリのところまで持ちこたえています。あと少し：なんとか堪え凌ぐことができるか？：ロングボールが入ってくる！黒崎、ヘディングでクリア！しかし、このボール拾われた！右サイドに展開：森嶋、スライディング！躲された！ペナルティーエリア、入ってくる！日本、危ない！ゴール前、ジェニファーに渡る！反転してシュート!!：は、クロスバー!!危ない、危ない：肝を冷やしました。：。あわや1点というところでしたが、日本にまだツキがある！

《ロスタイムは…なんと、5分の表示!!まだまだ前半は終わりません。

《ここで日本、久々にマイボールになった!緑川、ドリブルで上がる。おっ?ひとり、ふたりと躲す!華麗なステップで、アタッキングゾーンまできた。しかし、南アフリカもゴール前は人数が揃ってる:Fオローに藤城:ワンツで抜けた!緑川、切り返す!ライナーのクロス!夢野、左足!!DF、吹っ飛んだあ!!高く上がったボールは:キーパーがキヤッチ。

《いやあ:凄いシュートでした!夢野が放ったダイレクトボレーは、コースに入った、南アフリカのDFの顔面直撃!身体ごと後ろに吹っ飛ぶ破壊力。先制ゴールよりも、威力、スピードは倍あるか:と感じさせるほど。恐ろしいまでの気迫です。しかし、残念ながらゴールはならず:南アフリカのDFも身体を張ったプレー!譲りません。執念の顔面ブロック!

《:そのDFですが:ああ、ちよつと動けませんねえ:鼻からでしようか?口からでしようか:出血も見られますねえ:大丈夫でしようか?あるいは脳震盪ということも考えられます:まともにいきましたから:大事に至らなきたいのですが:いやダメですね。南アフリカのトレーナー、バツを出しました。交代です、交代です。前半はもう、ロスタイムを残すのみとなりましたが、それでも、5分ありますからね、これはやむを得ないでしょう。

《前半ロスタイムも残りわずか。このまま終わりたい日本。南アフリカもここにきて、少しペースダウン:攻め疲れが見られます。それだけ、日本のDF陣が堪えてきました。おっと、藤城、パスカット!さあ、これが前半最期の攻撃か?前線へ大きく送る!夢野へ:渡った!緑川が走り込む!

《いや、そのままシュート!?:フェイント!:もう1回シュート!ゴooooooooo!!夢野2点目!!なんと、なんと、ここで決めてきたあ!

信じられなくい！日本、追加点！悪夢からの脱出！奇跡への序章！日本を幸せに導く夢の翼が羽ばたいたあ！！

≫シュートフェイントからのコントロールショット！先程の強烈な一撃がありました。DF、GKともに一瞬、身構えてしまったか？それを見透かしたかのような、技ありの一発。ボールはフワリと弧を描き、ゴールの右隅に！GKは啞然呆然。エンドラインの上で立ちすくみます…。日本に大きな、大きな1点が入りました。

≫ここで、ホイスツル！長い長い前半が終わりました。2―0でハーフタイムを迎えます。

≫そして気になるフランス対ブラジルですが…ブラジル先制！！前半42分、マリアのゴールでブラジルが1点のリード。…仮にこのままいきますと…日本が得失点差―1…フランスは0…まだ届かないか？もう1点、もう2点、いえ、3点でも4点でも欲しい。

≫後半、日本のゴールラッシュに期待しましょう！

くつづく

近づいた足音…

「ふう…なんて試合なの。点を獲るならもつとサクサク獲ってよねえ！」

「ここはグツタリと疲れた様子だ。」

「そんな簡単に獲れるなら、苦労はしません！」

「わかっているけどさあ、こんなに劇的な展開にしなくても」

「スポーツは筋書きのないドラマなんです。それに、まだ前半が終わったばかりですよ。これから勝負です!!」

「まあまあ、海未ちゃん。まだあと45分あるんだから、少し休もうよ…。この緊張感を持続させるなんて、無理だし」

「穂乃果の集中力は、せいぜい10分程度ですからね…」

「そういうことじゃなくて…」

「今、入ってきた情報によりますと…日本が決勝進出する為のカギを握るフランスは、前半終わって0―1なんだそうです」

「おっ！負けてるじゃん！…つてことは？」

「ただし、仮にこのまま終わった場合、得失点差で1点及びません。ですからもつと点を獲らないと」

「大丈夫じゃない？2―0で勝ってるんだし。そもそも南アフリカつて、ここまで全敗でしょ？そんなに強くないんじゃないの？」

「そうやってすぐ気を抜くところが、穂乃果の悪い癖です」

「海未ちゃん、それは今、関係ないんじゃない？」

「オリンピッククに出ってくるくらいなんだから、弱いつてことはないんじゃない？」

「真姫ちゃんの言う通りにや。後半はかなり苦しい戦いが待ってるにや」

「どうして？」

「うん、ことりちゃん。日本は退場者が出て1人少ないから、スタミナ



切れが心配…ってこと。1人足りない分を、みんなでカバーしなきゃいけないから、その分運動量が増えるにや」

「そっかー1人少ないんだったね…」

「だけど、夢野つばさって、本当に凄い選手だね。これだけ活躍してくれば、わざわざここまで応援にきた甲斐があるって…」

「穂乃果、甘いです。これで満足してもらっては困るんです。まだ、目的は半分しか達成してませんから」

「半分？」

「予選突破で完遂です!!」

「相変わらず、熱いわね…」

ツバサが前に座っている穂乃果に、耳元で囁いた。

「でも、海未ちゃんはこうでなくっちゃ!」

穂乃果の回答に、ツバサは

「そうね」

と納得した様子で返事をした。

「実はね、さっきのプレー、生で観たことがあるんだにや!」

「さっきのプレー…ですか?」

「生で観た?」

海未と穂乃果が、凜を見る。

「うん。中学の時だったかな。かよちんに連れられて、フットサルの大会を観に行ったことがあって…その時につばささんがいたの。まだ、モデルさんだった頃」

「へえ…」

「それで、その時も、すっごいシュートをバーン!って打って、GKの人の顔にバシッて当たって、ドーンってなって…」

「爆発したの?」

「しないにや!!」

凜は、穂乃果の間抜けな相槌を、すぐさま否定した。

「つまり、さっきみたいにボールが顔に当たって、倒れたってことです」

ね？」

と海未が通訳する。

「うん！それでね、そのあとは相手の選手が、シュートを打つフリをするだけで怖がって、動けなくなっちゃって…。2点目のシーンを観て、その時のことを思い出したにや」

「その時、会場にいたんですか？実は私たちも応援に行ってたんですよ！」

「でも本当は『シュートを打つフリ』じゃなくて、つばきさんの方が『またぶつけたらどうしよう…』ってシュート打つのを、躊躇してたらしいんですけど…」

とはるかためぐみが解説する。

「へえ…」

裏事情を聴き、一同驚きの声をあげる。

「GKの人の前歯折ったんだっけ？」

「はるか、『折った』って言うと、つばきさん怒るわよ。『欠けただけ』って」

「どっちにしても、凄いな…」

思わず穂乃果が呟く。

「…モデルだった人が、サッカーの日本代表だなんて…本当に驚きだわ」

と絵里。

「あの人は、別格ですよ」

「はるかさん？」

「絢瀬さん…あつ、絵里さんと呼ばせてもらってもいいですか？」

「えっ？ええ…どうぞ…」

「あの人は元々、小学生の時には『オリンピックを目指そうか』っていうくらい選手だったらしいので、運動神経がいいのは、当然って言えば当然なんです。なので、モデルがアスリートになったんじゃないかと、アスリートがモデルになったんですよ。そもそも、それが間違いの始まりなんですけど」

「間違いではないけどね…」

めぐみは苦笑しながら、発言を正した。

「どつちにしろ、それで両方ともトップに立つちやうんだから、凄すぎるよね」

「うん！」

穂乃果の言葉に、ことりが頷いた。

「ふん！『天は人に二物を与えず』とか言うけど、二物どころか、三物も四物も与えるなんて、不公平極まりないわ！」

「にこつち！」

「ほ、誉め言葉よ！だってそうでしょ？ルックスが良くて、歌も歌えて、ギターも弾けて、サッカーも上手くて、素敵な彼氏がいて…なんて、あり得ないわ！」

素敵な彼氏…という言葉に、海未は一瞬ピクツと反応した。

にこはさらに続けて言う。

「それにさ、今、この瞬間、日本中のすべての人が、彼女の一挙手一投足に注目して、応援してくれてるわけでしょ？こんな幸せなことはいじゃない！」

「そうですね…。でも、綾乃も決して順風満帆な人生じゃないんですよ…」

と、これまで静かに話を聴いていたさくらが口を挟む。

「綾乃？」

「あ、つばさの本名です。私は昔からそつちで呼んでるので…」

「順風満帆ではない？…」

海未はポツリとその言葉を繰り返した。

「はい。あまり知られてないですけど、これまで何回も精神的に追い込まれるようなことがあって…それを乗り越えて、今があるんです。今回の高野さんの事故だって…」

「さくらさん！」

めぐみが「それ以上言わない方が…」という顔をした。

「あつ…ごめんさい。そういうつもりじゃ…」

「いえ、大丈夫です。それがあつての今日の応援ですから」

「…そうですね。ただ、綾乃は決して才能だけの人じゃないことをわ

かってもらいたくて……。ギターだって、サッカーだって、一から勉強して、努力してここまで来たんだ……って」

『努力は必ず報われるとは限らない。でも、成功した人は、間違いなく努力している』……ですわね……」

「海未ちゃん、なにそれ？」

「奇しくも高野さんが仰（おっしゃ）っていた言葉です。何かの漫画のセリフらしいのですが」

「だから、それがどうしたのさ？」

「穂乃果ちゃんも勘が悪いやねえ。つまり、つばささんには、元々そういう才能……素養があったのは事実かも……やけど……それに驕ることなく、弛（たゆ）まぬ努力を続けてきた……ってことやろ。だからこそ、モデルだけやなくて、アーティストとしても、サッカー選手としても結果を残した……」

「さすが希、その通りです！」

「なかなか奥深い言葉ね」

絵里は「なるほどね……」と感心した表情だ。

「でも、だったら少なからず、ここにいるみんなは、そうなんじゃない？特に後ろの席の人たちは」

と真姫。

彼女の後列にいるのは、A—RISEとアクアサクラスターだ。

その6人は、お互いの顔を見合わせたあと、発言主に視線を送る。

「な、なによ……」

「結構恥ずかしいことを、サラツというのね……」

「西木野さんて、他人を誉めない人だと思ってたから……」

「イメージと違いますね」

そう言ったのは、あんじゅ、ツバサ、はるか。

残りの3人も、うんうんと頷いている。

「あのねえ……」

と彼女たちに反論しようとした真姫だが、μ'sのメンバーが声を押し殺して笑っているのを見て

「もういいわよ！今日はみんな野宿しなさいよね！」

と言つてのけた。

「うそー！うそー！うそー！真姫ちゃんゴメン！」

と穂乃果。

こういう時のリアクションは早い。

「真姫ちゃんはそのういう意地悪、しないにやあ！」

「そーやね！」

「もう、遅いわよ。今日はみんな、野宿だから」

「真姫ちゃん…」

彼女の足元で泣きすぎる穂乃果の姿を見て、みんなで笑った。

その時だ！

「みんな、静かにするにや!!」

凜が叫ぶ。

「えっ?!凜ちゃん、どうしたの、急に…」

「穂乃果ちゃん、黙って！」

と凜は人差し指を、自分の口の前に立てると、目を瞑り、耳を澄ます。

…うんしょ…うんしょ…

「…聴こえる…」

凜の脳内に、可愛らしい声が響く。

…あれえ…みんなどこだろう…

…ここじゃないのかなあ…

…もう少し、下かなあ…

…迷っちゃったかなあ…

…ダレカタスケテエ…

「かよちゃんにや!!」

「えっ!？」

「かよちゃんが来たにや!!」

「まさか!？」

「うそでしょ?」

凧はスクツとイスから立ち上がると、キョロキョロと周りを見回した。

「いた!あそこにや!!」

凧は十数段上の列を指差す。

「あっ!花陽!」

「うわあ、花陽ちゃんだあ」

「ハラショー!」

「テ、テレパシー?」

「穂乃果、それは非科学的です」

「スピリチュアルやね」

「出たな、希の決め台詞!」

「おくい、かよくん!こつちにや!」

「ハッ!今、凧ちゃんの声が聴こえたような!」

「こつち!こつち!」

「!?!?!凧ちゃん!?!みんな!」

μsのメンバーに気付いた花陽が、少し離れた通路を、上から駆け降りてくる。

しかし、その姿がフツと消えた。

「えっ!」

「花陽?」

そして2秒後…数段下から現れた。

「転んだにや…」

「転びましたね…」

「ドジ…」

「相変わらずやね」

「花陽ちゃん、怪我ないかなあ…」

「こういうところは何年経っても変わらないのね…」

「にこちゃんの一番弟子だからねえ」

「穂乃果、それは関係ないでしょ!」

「はあ…はあ…皆さん、お久しぶりです!遅くなつてすみません!」

「かよちゃん!」

凜が花陽に抱き付く。

「花陽ちゃん!」

こつこつと抱き付く。

「ちよつと、2人とも抜け駆けしたらいかんよ…」

「…つて、なんで希も来るのよ…」

「にこつちこそ…」

「ちよつと、私の花陽を取らないで…」

「真姫…ちゃん…?…」

「…つて、絵里が言ってるわ…」

「わ、私?」

目が点になる絵里。

「羨ましい…」

「英玲奈？」

「ん？いや、何でもない」

「ヨダレ、出てるよ」

「えっ？」

「うそよ！」

「あ、あんじゅ!!」

「ほらほら、花陽が困ってるじゃない！その辺にしなさい」

「よっ！さすが元生徒会長！ビシツと纏めるねえ」

「茶化さないですよ…って、アナタもそうだったでしょ？」

「いえ、穂乃果は名前だけですから」

「海未ちゃん、またそういうことを言う…」

「へっ？海未ちゃん？」

「？」

「どこに海未ちゃんが、いるんですか？」

「私はここにおりますが…」

「…」

「…」

「ぴゃあ！う、海未ちゃん!?!どうしたんですか、その髪形は!?!」

海未はこうして、本日4度目となる事情説明をしたのだった…。

「それにしても、よく来たわね…」



「すみません、絵里ちゃん。最初から来れなくて」

「そんなこといいのよ。こうやって、元気な花陽に会えただけで充分だわ」

「恐れ入ります…」

「かよちゃん、髪延びたにや…」

「えへへ…ちよつとイメチェンしようかな…なんて。昔の絵里ちゃんみたいでしょ?」

「凄く似合ってるにや〜」

「うん。とつても可愛いよ」

「凜はこつちのかよちゃんも大好きにや〜」

「ありがとう、凜ちゃん、ことりちゃん。でも、本当はなかなか髪を切りにいくヒマがなくて…」

「私も…似合ってると思うぞ…」

「?」

「ひ、久しぶりだな…元気にしてたか?」

「ぴやあ!え、英玲奈さん!?…つて、A—RISEのみなさん!!わっ!わっ…ビックリです!いつからそこに…」

「試合が始まる前から、ここに…」

「ツバサさん!それは失礼しました!」

「私たちってそんなに存在感ないかしら?」

「あ、あんじゅさん!ご、ごめんなさい…決してそんなことは…」

「こらこら、二人とも、ウチの花陽ちゃんを苛めんといってくる?」

「ウチらの…でしょ?」

「にこつち、そこは別にどうだっていはいやん…」

「ふふふ…やっぱり可愛いわね。英玲奈が惚れるのもわかるわ」

「へっ?」

「ツ、ツバサ!!」

「？」

「ちなみに私の隣にいるのが…アクアスターと、浅倉さくらさんだったりして…」

「ツバサさんの隣？…うひゃ！あつ、あつ…あの…初めまして、小泉花陽です!!」

「水野めぐみです！」

「浅倉さくらです！」

「星野はるかです！」

「アクアサクラスターです!!!」

「そ、それは…」

「今日だけの限定ユニット…ですね！」

「す、すごい！すごすぎます！こんなにも豪華なメンバーが、このようなどころで集結するなんて！…にこちゃん、ちゃんとサインもらいましたか？写真撮りましたか？」

「ぬわんでよー！こーう見えて、にこも女優なんだから、そんな端（はした）ない真似するハズないでしょ！」

…欲しいけど…

「そ、そっか…そうだよね…」

「っていうか、アンタも立場としては対等…いや、それ以上なんだから、もつと堂々としなさいよ！」

「はう…」

「…あとでサインください…」

花陽は小声で彼女たちに訴えた。

そんなこんなをしているうちに、ハーフタイムが終わる。  
いよいよ後半戦だ。

ちなみに…

このハーフタイムの間、中継カメラはことりの作った横断幕とともに、何度も彼女たちを抜いていた。

∨カメラマン、A|R|I|S|Eたちってわかって映してるよな？

∨だけどアナウンサー、一切触れず…

∨放置プレイ？

∨アナウンサーが、彼女たちをマジで知らない可能性もある…

ネットにはそんな言葉が溢れていた。

くつづく

## 激闘の行く末

《後半が始まります。日本、メンバー変更はありません。最終ラインは森嶋、黒崎、近江。桐原がボランチに戻りました。その前に藤城、須田。2列目に緑川、神谷。ワントップに夢野。

《一方、南アフリカはDFを1人下げて、FWのエマを入れてきました。ジェニファー、エマ、クリステイナのスリートップ。これはなんとしても点を獲りにいくという意思表示でしょう。

《日本は絶対に失点は許されません。なおかつ、得点も欲しい。フランスの途中経過も、選手の耳には入っているでしょう。しかし、相手はフランスではありません！南アフリカです！まずは目先の敵を叩きましょう!!頑張れ!日本!

《ホイッスルが鳴りました。日本のキックオフです。まずは、須田が大きく蹴り込んでいきましたが…これは夢野には届きません。そのままゴールラインを割ります…。夢野も前半かなり削られていまずし、体力的には相当きついハズですが、懸命に走ります。

《南アフリカ、エマにボールが渡った…フレッシュな選手。クリステイナと入れ替わるように、右サイドを上げる!森嶋が対応するが…あつと!簡単に抜かれた!クロスが入る!GK、フィステイング!こぼれ球、ジェニファー!!…これはクロスバーを大きく越えていきました…。

《クリステイナが右サイド。エマとのワントップで抜け出す。森嶋、スライディング!躲された!ペナルティーエリアに入ってくる!シュート!!防いだ!!GK深山、前に出て、身体で止めたあ!!ファイセンサーブ!非常に勇気があるプレーでしたが、よく飛び出しました!しかし、日本の左サイドを度々崩してきます南アフリカ。少し森嶋が

クリスティーナとエマの早さに苦戦しているか？

《ここで、情報です。フランス対ブラジルですが…後半12分、ブラジル、追加点!!マリアの今日2点目のゴールで0-2!!…ということとは…このままいけば、日本、得失点差で並び…これまでのゴール数が日本が8、フランスが6ですから…日本が上位になり、決勝トーナメント進出となります。しかし、まだわからない。あと30分あまり、まったく気を抜けません!。

《おっと、日本、ここでファール!森嶋がクリスティーナを倒してしまいました。イエローカードが出ます…この大会1枚目。ゴールからは遠い位置…30mくらいはあるでしょうか?ややタッチライン寄り。蹴るのは?…ジェニファーですか…左サイドから、ボールに近寄ってきます。今日のジェニファーは度々、強烈なロングシュートを放ってきてます。距離はありますが、直接狙ってくるかもしれない。油断は禁物です。

《日本、壁は作りません。南アフリカはゴール前に、クリスティーナとエマ。さあ、ホイッスルが鳴りました。ジェニファー…ゴール前に上げる!クリスティーナの頭…落としたところ…エマ!ダイビングヘッド!!近江、クリア…しきれない…入った!入った!入ってしまった…日本2-1…1点差に詰め寄られてしまった!

《後半15分…南アフリカ、セットプレーから1点をもぎとりました!決めたのは後半から出場のエマ!これは見事なシュート…女子ではなかなかお目にかかれない、超低空ダイブ!近江必死に足を伸ばしましたが、一步及ばず…日本のリードは1点となりました。

《これで日本の得失点差は-2、フランスは-1。またもや決勝トーナメント進出のチームが入れ替わりました。これは本当に最後までどちらに転ぶかわからない!

《そして、ここで森嶋に代わって、宮下が入ります。…そうですね…後半に入ってから南アフリカは右サイド…日本の左サイドから何

度もチャンスを作っていましたからね。そして、その森嶋のファールからやられてしまいました。……ここは森嶋がカードを1枚受けたこともあり、S Bが本職の宮下が入り守備を固めます。しかし、ワンテンポ遅かったか？

《日本はなかなか追加点が奪えません！やはり数的不利な中、かなり体力を消耗しているようです。足元へのパスが多くなり、スペースに動き出してボールを受けるといふプレーが、少なくなっています。アタッキングゾーンに進むことができません。

《後半20分：日本は、勝負を掛けてきました。須田と神谷を下げ、白瀬と九条を入れてきました。ポジションはどうしますかね：2列目を藤城、白瀬、九条としました。……そして緑川と夢野がツートップ！ああ、今大会ついに、日本のゴールデンコンビが、ツートップを組みます！さあ、もう1点、もう1点です！

《入ったばかりの九条がスペースに走る……が……これはDFクリア!!……しかし、日本はこれを繰り返していくしかありません。

《藤城から夢野：ワンタッチで緑川：シュート!!……これは、ポストの右：ジャストミート出来ませんでした。ですが、少しリズムが出てきたか、日本。

《フランス対ブラジルも接戦です。後半32分、フランスはレベルカのゴールで1点を返したのですが……その1分後、ブラジルはマリアのシュートのこぼれ球をレオが決めて、1-3となりました。いやあ、こちらも、どうなるかまったくわかりません！

《両チーム一進一退のまま、後半43分となりました。次の1点はどちらに入るのか？このまま終わるのか？

≫クリスティーナ、右サイド上がろうというところ、宮下、上手く身体を寄せて、ボールを奪った！エマがチャージに行く！宮下、ここは落ち着いて桐原へパス！桐原から…白瀬…九条…夢野…緑川から…夢野がリターンをもらおう！ペナルティーエリア外から…マルセイユルーレット!?…反転して突っ込む！DFの足が掛かった！…が…倒れない！踏ん張ってそのままシュート!!ポストだ！跳ね返りを緑川！DFブロック！もう1度、白瀬！ああ、外した！外した！日本、決定機を逃しましたあ！

≫夢野、鮮やかなターンからペナルティーエリアに進入！…DFの足が掛かったように見えました…が…倒れずに踏ん張って、そのままシュートに持ち込みました。しかし、これは残念ながらポストを直撃！跳ね返ったところ、詰めていた緑川のシュートはDFに阻まれ、さらに白瀬のシュートはクロスバーの上でした。

≫そして…ここで情報です！フランス、1点返しました！2対3です!!大変なことになってきました！日本、予選突破の行方はまったくわからない！残り時間はあと4分！

≫夢野にくさびのボールが入る！あつと後ろから倒された!!…イエローカードが出ます、南アフリカのDF…。…夢野、左肩を押さえています、立てません!…起き上がれないか?…今日は何度も何度も削られてきました。それでもエースです。決定的な仕事をして…ここまで2得点。…日本は交代カードをすべて切りました。もう代わる選手はいません。そして1人退場者を出している日本。ピッチの外に出て、治療もままはなりません。あと、数分…数分です。頑張れ、夢野!!…そして、場内は『つばきコール』だ!!その声に…応えるように…起き上がりました。表情は険しい…が…痛みを堪えて、左腕を挙げる!声援に応え、再び、ゴール前と上がっていきます。

≫フランス対ブラジル、先にゲームが終わりました!2-4!ブラジル勝利!!終了間際にマリアが今日、ハットトリックとなる3点目を

決めて、フランスを突き放しました。！これにより、フランスは1勝1敗1分：得点8、失点9：得失点差は-1となりました。日本は、このままいけば、フランスと勝ち点で並びます。しかし得点は8、失点が10。得失点差は-2となります。このままだと苦しい！あと1点、あと1点取れば、得失点差も並びます！その場合は当該チーム：つまり日本とフランスの1戦は引き分けであった為、より得点の多い方が上位となります。ベンチもこの情報は入っています！上がれの指示！フランス戦同様、パワープレーとなります。

《さあ、これがラストプレーとなるでしょうか！白瀬がインターセプト！緑川に預けた：緑川、左サイドをドリブル：藤城に渡る：夢野がゴール前呼んでいる！その夢野に：クロスが入った！あつとスルー？後ろから九条、フリーだ!!!ああ：外したあ!!外したあ：ボールはシュート回転して右に外れていった！

《低いクロスが入りましたが、夢野がスルー！後ろから九条が合わせましたが：わずかにタイミングが合わなかったか：ジャストミートしませんでした。狙いは良かった：ですが：ゴールならず…。

《そして…ああ…タイムアップの笛だ！日本、勝ちました：勝ちました：1点届かず…。日本、残念ながら、決勝トーナメント進出はなりませんでした…。ピッチにいる選手もそれがわかっていようです：笑顔はありません。倒れ込む選手もいます。…なんと悲しい勝利なのでしょう…。控えの選手も動けません…。

《しかし、決して下を向くことはありません！10人にはなりつつも、立派に闘いました。胸を張りましょう！この3戦、なでしこジャパンの闘いぶりは、日本に勇気を与えました！感動を与えました！…決して、決して…

《すみません…ちょっと…私、言葉が出てきません…。アナウンサーとして失格ですが…許してください…。



~^~U~

闘い終わって、日が暮れて

決勝トーナメント進出ならず…。

タイムアップ直後は、観客席もグラウンドの中と同様の…：なんとも  
言えない重苦しい空気に包まれた。

それでも、この試合に関して言えば、負けたわけではない。  
寧ろ、不可解な判定があり、一人少ない状況で良く戦った。

それはみんな理解していた。

だから、泣き崩れ、挨拶もままならない選手に対し、すぐに健闘を  
讃える惜しめない拍手が送られ…：それは彼女たちがピッチから消え  
るまで止むことはなかった。

応援に訪れたμ's たち15人も同じだった。

選手の姿が見えなくなるまで、立ち上がり拍手で見送った。

「お疲れさまでした！」

「応援、ありがとうございました！」

ひとりきり、そのほとぼりが冷めると、穂乃果たち一行は、周囲に  
いたサポーターから握手を求められた。

そしてなにも戸惑うことなく、極々自然に、彼女たちもそれに応え  
た。

この試合が行われていた間は、芸能人だろうと一般人だろうと関係  
なく『同じ仲間』として、一体となり日本を応援した。

海未などは声を枯らし、話す言葉が聴きとれない。

それほどピンチに悲鳴をあげ、ゴールに絶叫した。

TVの中継が絡んだ『ゲスト的な観戦でない』ことはサポーターも  
理解していたようで、彼らからすれば、真剣に声援を送っていた彼女

たちに『本気』を見たのだろう。

それが感謝の言葉になって現れたのだった。

熱い激闘の余韻は冷めやらぬまま…しかし、やがて彼らは現実の世界に戻されていく。

いつまでも、ここに留まるわけにはいかない。

会場をあとにするサポーターの青い波は、出口へと吐き出され、スタンドの観客席が、徐々に露（あらわ）になっていく。

μ、sの周囲にいた彼らも帰り支度を始めたが、ふと我に返り、思い出した。

日本を応援していた同志が、超有名人であったことを。

「あの…最後に一緒に写真、いいですか？」

こんなチャンスは滅多にない。

アクアスターとA—RISE…そこに滅多に絡むことがない浅倉さくらがいて…なおかつ、つい先日『再結成は不可能』と報じられたμ、sが全員揃っているのだ。

それはそうだ。

このチャンスを逃さない手はなかった。

「ええ、いいわよ。問題ないわね？」

彼らの要望に、意外とあっさりとツバサが返事した。

特に打ち合わせをしたわけではないが、彼女の狙いは何となくわかった。

だから

「いいんじゃない」

と希が代表で返事をしたが、μ、sのメンバーは誰も否定しなかった。

そこから、しばし記念撮影大会が行われ、彼らは大満足な様子で会場をあとにした。

「それじゃあ、私たちもこれで失礼するわ」

ツバサが、sに声を掛ける。

「これで…って、日本に帰っちゃうの!?!」

「ごめんなさい、高坂さん。本当はもつといたいのだけど、スケジュールの都合で…」

「こう言うとなんだが、今日もかなり無理をして来たんだ」

「でも、もう1日くらいなんとかならないのかな?せつかくここまで来て」

「穂乃果ちゃん、そんなん言ったらいかんよ…」

「そうだけどさあ」

「私たちはこういうスケジュール、馴れてるし、気にしないで。国内にいても分刻みで動く日もあるし、ツアーだと四国く北海道く関西く九州く関東みたいな日程もザラだから」

と、あんじゆ。

「ひよえく…」

「目が回る忙しさにや…」

「まあ、そういうことだから…残念だけど。また、時間を見つけて会いましょ」

「ツバサさん…」

「私たちも…」

「えっ、アクアスターの2人も?」

「そして、私も…」

「さくらさんも?…そっか…みんな芸能人だもんね…」

穂乃果は…A—RISEは別としても…アクアスターと浅倉さくらの気さくな雰囲気、ついそのことを忘れていた。

考えてみれば、普段の生活では決して交わることのない3人なのだ。

「また、会ってもらえますか?」

意外なことに、そう言ったのはめぐみだった。

「えっ?」

「そんな不思議そうな顔をしないでください…こういう言い方すると少し恥ずかしいですけど…これも何かの縁だと思うので…」

「ズバリ、友達になってください!!」

はるかはめぐみの言葉を遮るように、いきなり頭を下げながら、右手を出した。

その様子があまりに唐突過ぎて、プツとみんなが吹き出す。

「…なにか…変ですか?」

「い、いえ、そんなことないわよ。でも、ちよつと、穂乃果つぽかったかも…」

と絵里。

「へっ?私?」

「うん、なんか急に宣言しちゃう感じが」

「うくん…ことりちゃんか、そう言うならそうなのかなあ」

「仕方ないわねえ。そんなに言うなら、友達になってあげてもいいけど…」

にこがアクアスターの2人を交互に見る。

「…」

しかし、ノーリアクション…。

「こ、こちらこそ、よろしくお願いします」

変な間を断ち切ったのは、穂乃果だった。

はるかの差し出した手を、ガツチリと握る。

「アタシはスルー!?!」

「さすがアクアスター!にこちゃんの扱い方を心得てるにや!」

「合ってました？」

「マニユアル通りの完璧な『弄り』やね！」

「なんで初対面のアンタたちに弄られなきゃいけないのよ！」

「わあ、すみませ〜ん」

「海未さん、助けてくださ〜い！」

はるかどめぐみが、おちやらけて逃げるフリをする。

その姿を見て笑う面々。

「ごらごら、2人とも、こんなところでやめなさい！」

と、さくらが注意する。

「わあ、さくらさんって、ウチの絵里ちゃんか海未ちゃんみたいだね  
!？」

「え？」

「ビシツとしてる！」

と穂乃果が言う。

「そうかしら？まあ、元々は、つばさと一緒にこの子たちの教育係だったから…。今はあんまり絡まないけど、私にとっては妹みたいなもので」

「そっか！はるかさんも、めぐみさんもことりたちの、ひとつ下なんだったけ？ずっと活躍してるから、あんまりそういう感じがなくて」  
「そうなの、仕事場じゃしつかりしてるから…。でも、普段はわりとこんななの。だから、友達になっってくれるのは嬉しいんだけど、ダメなところがあつたら、ちゃんと指導してあげてね」

「わかつたにや！」

「アンタが返事するんじゃないよ！」

「凜も同じ年でしょ！」

「そ、そうだったにや…」

にこと真姫に同時にツッコまれた凜。

その様子が可笑しくて、一同は再び笑いに包まれた。

「じゃあ、そろそろ…」

ツバサが腕時計にチラツと目をやった。

「あっ…うん…」

「あ、そうそう、大事なことを言い忘れてたわ」

「えっ?」

「今年のクリスマスにチャリティーライブをやる予定なのは決まってるんだけど」

「チャリティーライブ?へえ、素敵だね…」

「良かったら出ない?」

「へっ!?!」

「1日だけの再結成!」

「クリスマスに最高のプレゼントになると思うぞ!」

「悪くない話でしょ? 私たちの永遠のライバル…*μ's*の皆さま!」

「ええ〜!?!」

「ごちそうさまでした」

「かよちゃん、美味しかったね」

「うん!」

スタジアムで観戦を終えた一行は「せっかくここまで来たのだから…」と『花陽の同意を得て』近くの繁華街で夕食を摂った。

「良かったわ、今日は花陽が『フリーズ』しなくて」

「ま、真姫ちゃん…」

「あの時は、本当に大変立ったんだから…」

「そうにや！凜なんか、かよちん死んじやった…って思ったんだから」  
「ウチが『ご飯屋さん』まで、抱っこして連れてってあげたんよ」

「皆さま、その節は、大変お世話になりました…」

『米国に来て、なんでお米が食べられないの…』とか『お米(コメ)一ターがゼロになった』とか、あれは名言やね！」

「うう…」

「今はどうしてるのですか？」

試合終了直後から比べれば、海未の声はだいぶ戻っている。

「は、はい。今はあっちでもネットでも日本のお米を買えるんです」

「ひよつとして自炊してるのですか」

「3食は無理ですけど…」

「凄いな、花陽ちゃん！」

「いえいえ、ことりちゃん。自分の身は自分で守らないと…」です」

「あはは…そうなんだ！」

「それにだいぶ、白米を食べなくも我慢できるようになりましたし…」

「本当に？またあんな思いはしたくないからね！」

「ごめんね、真姫ちゃん。でも3日くらいなら…」

「そんなに変わらないじゃない！」

「そうかな？」

「でも、あの花陽が…ずいぶん逞しくなったものね…」

「そりやあそうだよ、絵里ちゃん！『親がなくとも子は育つ』って言うし」

「それなら、どうしてあなたは、いつまで経っても成長しないのですしょうか…」

「まあまあ、海未ちゃん、それは置いて…」

「アタシから見ると、昔のドジで頼りない花陽のまんまだけだね」

「うん、にこちゃん…花陽は変わってないですよ、なんにも…っていうか、特にみんなの前に来ると、昔の自分に戻っちゃいますね」

「それでいいのよ。アイドルと食事以外でテキパキ、キビキビと動く



花陽なんて、花陽じゃないもの」

「うん、そうだね」

「えっと…真姫ちゃんことりちゃん、花陽のことを軽くバカにしてません？」

「誉め言葉よ、誉め言葉。みんな。アンタのぽわーんとしたところに、癒されてるんだから」

「さつきも、スタンドから走り降りてくるとき、転んじやってたよね？」

「ぴやあ！ことりちゃん、見てましたか！」

「みんな見てたにや〜！」

「でも、花陽ちゃんらしい…って、みんな『ほっこり』したんよ」

「お恥ずかしい…」

花陽は顔を赤らめて下を向いた。

「ねえねえ、だけどき…花陽ちゃん、太ったでしょ!？」

「ぴやあ！」

「穂乃果、いくらなんでもそれは花陽に失礼です！」

「いやいや、甘いな穂乃果ちゃんは…」

「希ちゃん？」

「花陽ちゃんは、太ったんやなくて、またバストが大きくなった…んやろ？」

「ワシワシしなくてもわかるんですか!？」

『E』から『F』にレベルアップ？」

「はい、実は…でも、そこ以外は変わってないんですよ…。はっ！ご、ごめんなさい」

「ちよ、ちよつと、誰に対して謝ってるのよ」

「にこちゃんに決まってるにや！」

「だから、凜！アンタも仲間のクセに、お約束のボケはやめなさいって！」

「私は敢えて触れないでいたんだけど…」

と、花陽の胸から視線を逸らす真姫。

「そうそう。虚しくなるだけにや」

「べ、別にそうは言っていないですよ！」

「まあまあ、女の魅力は胸の大きさだけやないんから…」

「だからあー！それも！毎度毎度、アンタが言っても嫌みにしか聴こえないー！つつうの」

「ですが、やはり、羨ましいです…花陽、なにをすれば、そうなるのですか!？」

「う、海未ちゃん？」

「ど、どうしたん？」

「あ、いえ…一度しかない人生ですから、アレなのですが…豊かな胸と  
いうものも、それはそれで女性にしかない特権で…」

「は?」

「大は小を兼ねるといいますし…」

「?」

「:!!:ハッ！私は何を言ってるいのでしょうか…すみません、今の  
話は忘れてくださいー!」

…まあ、確かに海未の言う通りなんだけどさ…花陽ほどとは言わな  
いけど、にこももう少し大きければ、人生変わったたかも…

…うくん、凜だって、かよちゃんみたいな身体になりたかったにや…

…まあ、私も興味がないわけじゃないけど…豊胸まではしたくない  
し…そんな薬も出回ってるらしいけど、医学的根拠がないって言うし

…

「みんな難しい顔をしてるわね…」

「実は海未ちゃんと同じこと考えてるんやない？こればかりは、ウチもえりちも助けてあげられないけど」

「そんなに悩むことかしら」

「えりち、それはみんなには禁句やで！」

「あ、そ、そうね…」

「穂乃果ちゃん！」

「なに、花陽ちゃん？」

「すごく言いくいのですが…」

「うんうん…」

「穂乃果ちゃんの方が、太ったと思うんだけど…」

「花陽、その通りです！穂乃果、こういうのをブーメランというのはですよ」

「なるほど…そういうことやね？」

「？」

「つまり、穂乃果ちゃんは…花陽ちゃんを仲間に率いれようとしたんですよ」

「！」

「あははは…」

「残念ながら、穂乃果には仲間がいなかった…」

「うう…ヒドいよ、花陽ちゃん！裏切り者め！」

「わ、わたし？」

「ですから、自業自得です！それとも私がダイエットメニューを作りましようか？」

「さあ、次、行こう！次！レッツゴー！！」

「それで誤魔化せると思ったら大間違いです！」

…ああ、この感じ…

…やつぱり、このメンバーは楽しいなあ…

花陽は久々の仲間と過ごす時間に、感慨深げだった…。

〜つづく〜

なににして遊ぶ？

「さあ、じゃあ、お腹もいっぱいになったし、真姫ちゃんの別荘に行こう！」

「穂乃果！私んちのじゃないし…パパの知り合いのコンドミニウムだから」

「いいじゃん、どっちでも」

「どうやって行くん？」

「地下鉄…って言うと、逆方向に行く人がいるから」

と真姫は、穂乃果をチラッと見た。

「たはは…また、古い話を…」

「タクシーで3台に分乗するわ」

「それはそれで不安なのですが…」

「そうにや！また変なところに連れていかれたら困るにや」

海未と凜が穂乃果を見る。

「いや、だからそれも昔の話だって…」

と頭を搔く穂乃果。

「まあ、今回は大丈夫じゃない。海外経験豊富な希と花陽、それに通訳を目指してる絵里がいるし」

「なるほど！そこは前と違うところだね！」

「でも、その3人が一緒に乗っちゃったら…」

凜は残ったメンツの顔を見て、不安そうな表情をした。

「穂乃果ちゃんと海未ちゃんと一緒になったら、絶対辿り着かないにや…」

「随分な言われようだね…」

「でも否定できません…」

「バカね。だから、そうならないように、分ければいいだけでしょ…」

「そっか！」

「そっかじゃないわよ。じゃあ、こっちで組み合わせを決めるわよ。」

私はカギを開けなきやいけないから、先に行くわ。そうしたら…希、穂乃果、1号車」

「は〜い!」

「それから、絵里とことりと凜が2号車」

「え〜凜。かよちんと一緒がいいにや!」

「もう、そういう面倒なことは言わないで…」

「…にや〜…」

「最後、花陽と海未とにこちゃん。以上!」

「はい、わかりました!」

こうして9人はタクシー3台に別れて乗車し、数十分後、無事目的地に到着した。

「うひゃあ、やっぱり広いね!」

「さすが、外人さん仕様にや!」

「ほら、すぐそうやって走り回らないの!まったく、いつまで経っても子供なんだから…」

と真姫はため息をついた。

「でも、確かに食事は済ませてしまったし、寝るだけ…って考えたらもったいない広さね」

「じゃあさ、絵里ちゃん、枕投げしようよ!」

「穂乃果ちゃん、それは面白そうやけど…今日はやめといたほうがいいんじゃない?真姫ちゃんちの別荘やないんだから、なんか壊したら大変よ」

「そ、そうだね…」

「ウチの別荘だって、壊して欲しくないんだけど…」

「ま、真姫！大変よ！」

突然、にこが血相を変えて隣室から走ってきた。

「どうしたの、にこちゃん!! なにかあった!？」

一同に緊張が走る。

「寝室が4部屋あるけど、ベッドがそれぞれ4つずつしかないわ！」

「どういうこと？」

と、首を捻る穂乃果。

「ああ、それ？でも、キングサイズだから、2人1組でみんな充分寝れるでしょ？1組だけ3人になっちゃうけど…」

真姫は意に介していない感じだ。

「なに言ってるのよ！そうしたら、誰と寝るか？」が一番大事じゃない。

「!!」

穂乃果以外はピンときたらしい。

メンバーの視線が彼女に集まる。

「へっ？穂乃果？」

メンバーの中では『穂乃果の寝相の悪さ』は有名で、特ににこは海外ライブを行った際の宿泊において、彼女からの『睡眠妨害』を受けた1人であった。

つまり、組み合わせいかんによって、明日の目覚めが天国と地獄ほど違うのだ。

「そこまで、考えてなかったわ…」

「だ、大丈夫だよ、真姫ちゃん。前にも言ったけど、普段はそんなことないんだから」

「信用ならないわ」

「にひひひ…」

「なんですか！希、そのいやらしい笑い方は」

「いやあ、思いも寄らないところでスペシャルイベントが訪れたやん。穂乃果ちゃんだけでなく、誰と一緒にになるか…めっちゃ楽しみやん！」

「そういうこと？そうね、あの時のリベンジを今、果たす時が来た…つてことね！」

「ここは、穂乃果からの睡眠不足の被害に遭った翌日に行われた『部屋割り組み換えジャンケン』においても『まさかの同室になる』というミラクルを起こしていた。

「穂乃果ちゃんだけ、ここで寝ればいいにや！」

「凜ちゃん、それはヒドいよ…」

「凜、危険なのは穂乃果だけじゃないわよ。希と一緒にっていうのも…」

「た、確かに…」

「え、ここつち。たまには楽しい夜を過ごさへん？」

と希は顔の前に両手を出し、5本の指をワシワシと曲げた。

「ふん、させるか！絶対回避するんだから！」

「わ、私も希と同室は避けたいです！」

「凜はかよちんと一緒にいいにや！」

「ことりも、花陽ちゃんと一緒ならぐっすり眠れるんだけど」

「え、誰か穂乃果と一緒に寝ようよ…」

「まさかと思うけど、海未ちゃん、トランプ持ってきてないよね？」

「ことり、愚問です。トランプは旅の必需品ですよ」

「そ、そうなんだね…」

穂乃果の寝相の悪さと並び『勝つまで止めない』海未のババ抜きも悪名高い。

「ま、負けられないわ…」

真姫も誰と一緒にになるのか、戦々恐々としているようだった。



「うふふ…」

「絵里ちゃん、どうしたの?」

花陽は、メンバーの様子を見て笑う彼女に聴いた。

「なんか、こんなどうでもいいことに盛り上がるのが、μ sらしいっ  
ていうか…」

「あつ…」

「やつぱり、このメンバーでいると、心が和むなって…」

「はい!」

「花陽…」

「はい?」

「今日は本当に来てくれてありがとう。相当無理したんでしょ?」

「いえいえ…」

「μ sは9人揃ってこそμ s…今日、つくづく感じたわ」

「えへへ…絵里ちゃんにそう言ってもらえると来た甲斐があります」

「うん…。ああ、そうだ!どうせなら私も花陽と一緒に寝てみたいな  
…」

「えっ!」

「あ…その…みんなが花陽と一緒に寝ると、すごく気持ちよく眠れ  
るって言ってたから…」

「あははは…光荣です」

「えりち!花陽ちゃん!なにコソコソ話してるん?」

「やるわよ!ジャンケン大会!」

一同が輪になった。

「前回と同様、勝った人から順にA、B、C、Dやね。それでDが3人  
部屋ということだ」

「強制的に割り振るわけね」

「OKにや!」

「誰となっても怨みっこなしだからね!」

「アンタに言われると、なんか腹立つわ」

と、にこが穂乃果を睨む。

「あははは…」

「では、参りましょう。いざ、勝負！」

海未が、まだ少し掠れ気味の声で、音頭をとった。

「最初は、S！ジャンケンポン！アイコでしょ！」

結果は…

A室…にこと凜。

「3回連続穂乃果を回避出来て、本当によかったわ！…凜っていうのがビミョーだけど…」

「にや〜…かよちんと一緒に良かったにや〜！」

「ずっと、これを言ってるさ〜！」

B室…希とことり。

「ことりちゃんと二人つきり…って、初めてやない？」

「うん、そうかも」

「そしたら今日は…『ことりを夜食にしちゃうぞ！』やね」

「え〜、どうしよう。ことり食べられちゃう〜」

「…って、全然嫌そうじゃないんですけど…」

「おや？にこっち妬いてるん？」

「はあ？バカじゃないの！アンタみたいなセクハラ親父と一緒にじゃなくて、ホツとしてるわよー！」

「にこちゃん、代わってあげようか？」

「だ〜か〜ら〜…」

「凜は、にこちゃんより、ことりちゃんがいいにや〜！」

「アンタはどうせ『のび太くん』みたいにすぐ寝るんだから、誰だって関係ないじゃないの！」

「にゃく!!」

「こらこら、騒がしくしないの! って、本当に2人は仲がいいんだから」

「そりゃあ、えりち。川に落ちて、身体を暖めあった仲やもん…ね?」  
「関係ないでしょ!」

C室…穂乃果と真姫。

「どうして、このツアーの企画者の私が、こういう目に遭うわけ?」

「真姫ちゃん、それはないよ…」

「まあ、いいわ。私の睡眠を邪魔するようなら、部屋から追い出すから」

「たはは…」

D室…

「ということで、私たちが3人部屋ですね」

「絵里ちゃんと海未ちゃんと一緒かあ…海の帰りの電車を思い出します」

「海岸でμsの解散を発表した日のことですね」

「ハラシヨー! 確かボックス席で、この組み合わせになって…『各学年の一番年下(誕生日が一番最後)』ってことで盛り上がったのよね」

「あれから、もう5年近くも経つのですね…」

「でも、こうやって1人も欠けることなく、みんなと会える…とても素敵なことだと思わない?」

「はい!」

花陽は元気よく返事をした。

「さあ、そうしたら、順番にシャワーを浴びて、今日は寝るわよ」

「えっ? にこ、トランプはしないのですか?」

「しないわよ! そんな子供みたいなこと」

「別にトランプは大人でもしますが…」

「アンタはババ抜きしかないでしょ!」

「いえ、神経衰弱も…」

「頭使うことはしたくないにや〜」

「…って、ことはアレやね…王様ゲー…」

「するか！」

「なんですか？その王様…」

「別に、海未は知らなくてもいいわよ…」

「はあ…そうなのですか…」

「だったら、やっぱり枕投げ…」

「しない！…ってさつき言ったでしょ！」

と真姫が穂乃果を睨む。

「前にやった時は、凜、怯えてなににも出来なかったけど…今なら結構イケるかも」

「そういうことでしたら、私も『寝起き』を強襲され、瞬殺されましたので…ですが、今なら」

「は、花陽は審判でいいかな…」

「こ、ことりも…」

「だから、しないって言ってるでしょ！」

「じゃあ、怪談話でもする？」

「穂乃果！」

絵里の顔色が一瞬で変わった。

「確かに季節は夏ですが、わざわざ海外まで来てすることでもないです…」

「まあ、それを言ったら、みんなそうやけどね…」

「あれ？凜のバッグにジエンガが入ってるにや…」

「おっ！いいじゃん、いいじゃん！」

「はあ…もう、なにその偶然みたいな言い方？遊ぶ気満々じゃない…」

「にやは！」

「まあ、これなら『平和に』みんな楽しんでるし、いいんじゃない？」

「…とか言ってるえりちも、案外ムキになるタイプやけどね」

「基本的に、負けず嫌いの集まりだから」

「よくし！一番負けた人は明日の朝御飯当番だ！」

と、穂乃果が腕捲りをして、遊ぶ準備を始める。

「パンとコーヒークらいしかないけないけどね」

今いるところは、コンドミニウムだ。

自炊出来るので、スタジアムから夕食に行く前に、簡単な買い物はしてきた。

「それじゃあ、始めますか！」

こうして、ジエンガ大会が始まり、夜が更けていった…。

くつづく

どうしよう、どうしよう…迷うよね!?

交代でシャワーを浴びながら、異国の地で行われたジエンガ大会は深夜にまで及び、日付が変わった頃に就寝となった。

おやすみなさい…と各人、ジャンケンによつて割り振られた部屋に入る。

「凜…もう眠っちゃった?…」

小声でそう呼んだのは、顔に入念なパツクを施した、にこ。隣には、枕を抱いて猫のように丸まって寝ている凜がいる。

小柄な2人には、キングサイズのベッドはあまりに大きく、持て余しているように見える。

「…んうん…なあに、にこちゃん…いい感じで…眠ったところだったのに」

むにやむにや…と凜。

「あ、ごめん…」

「…どうしたにや?…ホームシック?…」

「ぬわんでよ!…その状況で、よくそういう言葉が出てくるわね…」

「…違うんにや?…」

「さっきの話よ!アタシたちが、このあと、どうするかっていう…」

「ああ…その話か…むにやむにや…にこちゃんはまだ未練があるんにや?…」

「未練つてわけじゃないけど…」

「凜はとつくの昔に、諦めてるにや…」

「そ、そうなの?い、いや、にこもそんな話、今更と思うわよ。でも、ほら、ちよつとでも、可能性があるなら…少しはその気になつてもいいかな…なんて…」

「無理、無理…」

「うっ！…そんな無下に否定しなくも…」

「無理にやく！…どんなに頑張っても、にこちゃんはかよちんのおっぱいにはなれないにやく!!」

「わかつてるわよ！そりやあ、アタシだつて、もう少しあれば…つて思つて…る…わ…つて、何の話よ!!そうじゃなくて、A—R—I—S—Eが言つてたチャリテイライブの話！1日くらいなら、復活するのもアリかな？つて、にこは思うわけ。もちろん、9人全員参加が大前提だけど…」

すぴー…

「…つて、寝てるんかい!!」

…まあ、いいわ…

…あんまり変なことを言つて、みんなを惑わせるのはどうかと思うし…

…それに中途半端に、それをやったら、戻れなくなるかも知れないし…

「おやすみなさい」

にこは自分に言い聞かせるように、呟くと、静かに目を閉じた。

…にこちゃん…ゴメンね…

…凜にその話をされても、答えられないにや…

…でもにこちゃん、本当はやりたいたんだね…

…凜も…

…凜も少しはそう思うけど…

…少し？…少しかな…

…ごめん…

…やっぱり、ちよつと、わからないや…

…おやすみなさい…

「ことりちゃんは、A—L I S Eの話、どう思うん？」

「チャリティーコンサートの話？」

希は「そうやね」と頷いた。

こちらはB室。

2人はまだ就寝の態勢には入っていない。

ルームランプだけ点けた薄明かりの中、お互い枕を抱きしめながら、ベッドの端に横並びで座っていた。

もちろん、ことりは自分専用の枕だ。

「うくん、急に言われてもわかんないなあ」

「ウチも…」

「でもね、本当言うと、ときどきμ、sのメンバーをイメージしながら、衣装のデザインはしてるんだ。季節ごとっていうか、イベントごとっていうか…もう誰も着ないってわかってるのに…ね」

「でも、それは今後の仕事に役立つんやない？」

「うん！…だけど…ちよつと違うかな？『希ちゃんだからこういう感じ』…だとか…『絵里ちゃんならこうだよね』…とか…人物が先に出てきちゃって…どうしてもμ、sなの、イメージは…心のどこかで、やっぱり、みんなに着て欲しいって思ってるのかな…」

「着て欲しい…だけ？」

「えっ？」

「…たまに夢に出てくるんよ…。ステージの上からA—L I S Eに呼ばれて…それで『あれ？ウチなんで客席にいるんやろ？早く行かなきゃー』って、慌てて向こうに走るんやけど、着いたら誰もいなくて…。それで『あっ！』て目覚めて…『ああ、ウチ、もうそっちの人間やないやん！』って」



「希ちゃん…」

「これって未練なんやろか？」

「ことりも、似たような夢は見ますよ。ステージの上で歌って踊って…でも、それが夢だった…っていう夢」

「複雑な夢やね」

「起きてもまだ夢の中なのかな…って思っちゃたりして」

「うふふふ」

「えへっ」

「不思議やね…もう全部『やり切ったって』思ってたんやけど…」  
「そうだね…」

そう言ったときり2人はしばし黙りこんだ。

「まあ、今、考えても…ね？今日は寝ますか」

「うん！」

「それじゃ、おやすみ…」

「おやすみなさい…」

2人はベッドに入ると、希がランプの明かりを消した。

それから少しして…

「…ことりちゃん…」

希が小さな声で、囁く

「…はい？…」

「…後ろから…ギョってしていい？」

「えっ！」

「ウチ、こう見えて寂しがりやなんよ…」

「うふっ！いいですけど…でも、ワシワシはなしですよ」

「えく、いいやん！」

「希ちゃんがワシワシしたら、ことりもワシワシしちゃいますよー！」

「大歓迎やけど」

「あはっ！…でも、本当はことりじゃなくて、花陽ちゃんが良かったん

でしょ?」

「ありや、意地悪なことを言うんやね?...でもそういう、ことりちゃんもウチより花陽ちゃんが良かったんやない?」

「ん?...えつと...」

「...」

「...」

「あつ!なら、花陽ちゃんをえりちの部屋から連れ去ってきて、ウチら2人の間に入れば一件落着かない?」

「うん!それだ!」

「...」

「...」

「ね、寝よか」

「う、うん...」

「じゃあ...」

「お、おやすみなさい...」

「おやすみ...」

そしてC室。

「真姫ちゃんと2人きりって、すごく新鮮だね」

「別に、寝るだけだし、そんな意識することじゃないでしょ?」

「それはそうだけどき...」

「さつきも言ったけど、私の安眠を邪魔するようなら、容赦なく部屋から追い出すから」

「頑張るぞ、おう!」

「何の気合いよ…まあ、でも…すぐセクハラしようとする希よりはマシかしら。いつ襲われると思うと、本当に眠れないんだから」

はつくしよん！

「おや？隣の部屋からくしやみが…真姫ちゃんの話、聴こえてたりして」

「まさか…。それより、どうするつもり？」

「えっ？」

「A—L—I—S—Eの話」

「なんだっけ？」

「もう、これだから穂乃果は…しっかりしてよ！チャリテイライブのこと」

「あつ、ああ、その話ね」

「海未が嘆くのもよくわかるわ」

「えへへ…」

「笑ってないで、答えなさいよ…」

「…でもさ、その前に…なんで穂乃果に訊くの？」

「なんで？って…アナタ、リーダーでしょ？」

そう言ってから、真姫は何かに気付いた。

「あつ…」

「ほら！ね？μ sは今なくなっちゃんだから、穂乃果がリーダーっておかしいでしょ…」

「…確かにそうね…まあ、μ sだった時から、穂乃果がリーダー…つてことがおかしかったけど」

「そういうことじゃなくて…」

「こういうことは、やっぱり、まずは隣の人たちに相談するべきね…」

「よし、じゃあ今から…」

「よしなさいよ！今、そんな話をし行ったら、今晚徹夜じゃすまされな

いわよ!」

「そ、そうだね」

「こんな話を振った私が悪かったわ」

「私はやりたい!」

「えっ!?!」

「もうスクールアイドルじゃないけどね…」

「穂乃果…」

「あ、ほら、それはもちろん、全員参加できたら…だよ。でも、みんな都合があるし、難しいとは思うけどさ…」

「そうね…」

…考えてもみなかったわ…

…ううん、うそ…

…いつか、また…って、ずっと思ってた…

…けど…

…そんな日なんて、来るはずないって…

…もう、なんなのよ!…

…こんなこと考え始めたら、また眠れなくなるじゃない!…

…A—RISEのバカ!…

真姫は「はあく…」と大きく深い溜め息をついて、頭を抱えた。

くつづく

「花陽、絵里、今日はありがとうございます」

「海未ちゃんこそ、お疲れ様でした」

「結果は残念だったけど、私は楽しかったわよ。サポーターの声に合わせて応援したり、手拍子したり、選手のプレーに一喜一憂したり…柄にもなくキヤーキヤー叫んじやったわ」

と絵里。

「はい！花陽も後半からしか観られませんでしたけど、楽しかったです」

「そう言っただけで頂けると、私も少しは気が楽になります」

「えっ?」

「元はと言えば、私が原因でこのようなことになったのですから…」

「海未ちゃん…」

『その件』について、直接海未と話すことはなかったが、花陽もある程度の内容は把握していたし、今回のツアーの主旨も理解していた。

だが、合流してから誰一人、その話を表立ってしなかったのも、花陽もずっと触れずにいた。

もしかしたらメンバーは、海未が言う『御祓(みそぎ)』や『けじめ』はスタジアムで終わらせ、それ以降は純粋にμ sとして楽しむ時間としたのかも知れない。

そう考えると、ここに来てからジェンガまでの一件(ひとくだけり)も、海未に内緒で打った『小芝居』だったのではないか。

ただ寝るのではなく、μ sがμ sらしく過ごす為に。

花陽はそんなことを思った。

「いいじゃない。過程はどうであれ、結果として9人が集まるキツカケとなったんだから。それに日本は負けちゃったけど、つばささんは活躍したし…海未の責任は充分果たしたわよ」

「だといいいのですが…」

「はい！」

「花陽は、相当無理をしたのではないですか？仕事は大丈夫ですか？」

「えへへ…気にしないでください。困ったことがあったら、助け合うのが、sですから。それに期せずして、A—L I S Eやアクアスターの皆さんとも会えましたし」

「それは恐らく希が、画策したのだと思いますが…」

「かも知れないわね。でも、彼女たちだってここに来る理由はあったんだし、それは考えなくていいんじゃないかしら…それより」

「つばささんの言葉ですよね」

花陽は絵里の言いたいことをすぐに理解した。

「チャリテイライブの話ですか」

海未も同様だ。

「そう。あなたたちはどう思う？」

「私は…興味深い話ではあると思います。ですが…現実的には難しいのではないのでしょうか」

「花陽は？」

「私ですか？私は…うう…困ったな…えつと…やりたいか、やりたくないかで言えばやりたいです！」

「ハッキリ言ったわね」

「アメリカでだいぶ鍛えられました。向こうは『Yes』か『No』かで、曖昧な返事は厳禁ですから」

「大変ですね…」

「えへへ…あ、でも、その…ライブが『できるかできないか』は別です！」

「そうね…私も花陽と同じ意見だわ。週刊誌に書かれた…私たち内部の不仲説、μ、sとA—R I S Eのファン同士の対立…そういつたことを払拭できるチャンスだと思うし…逆にツバサさんたちが気を

使ってくれたんだと思うけど」

「はい…」

そのことは『当事者である』海未が一番理解していた。

「だから、検討する価値はあると思う」

「だけど絵里ちゃん、膝の具合は？」

絵里は幼い頃に膝を故障し、それが元でバレリーナの道を諦めて  
いる。

以降、膝に負担が掛かるような激しい運動は避けてきだが、スク  
ールアイドル活動はメンバーに内緒で、だましだましやってきた。

それが明らかになったのは、高校卒業の直前であり、μ、sが活動  
を継続しなかった理由のひとつにもなっていた。

「花陽、心配してくれてありがとう。1曲、2曲踊るくらいなら、別に  
問題ないわ。ただ、ステージで中途半端なものは観せたくないから、  
まあ…やる!となったたら、力が入っちゃうと思うけど」

高校を卒業したらスクールアイドルではなくなる。

歌もダンスも『高校生だから』という甘えは許されない。

ライブ優勝チームとして、やるからにはその名に恥じぬよう、  
クオリティを保たなければならない。

いや、それ以上のものにしなければいけない。

9人揃ってこそμ、s。

みんながそう思っている以上、膝の故障を理由に練習の不参加や、  
途中離脱などして、メンバーの足を引っ張りたくない。

パフォーマンスに妥協を許さない絵里としては、それも継続しな  
かった理由のひとつであった。

「無理はいけませんよ!」

「あら?海未も心配してくれるの?…でもそういうあなたが一番厳し  
いでしょ?」

「私ですか？」

「そういえば昔、花陽がね…私より海未の方が怖い…って言ってたわ」  
「ぴゃあ!!え、絵里ちゃん!唐突になんてことを…」

「なるほど。花陽は私のことを、そのように見ていたのですね」  
半笑いで花陽を見る、海未。

「あう…昔の話です…」

「なくんて…。でも亜里沙が言ってたわよ。花陽の指導も結構厳しかったって」

「へっ?そ、そうですか?…でも、まあ、そうですね…やっぱり、ただの仲良し集団にはしたくなかったっていうか…<sup>々</sup> sも絵里ちゃんと海未ちゃんがいてくれたから、まとまっていたと思うので、そこは見習いたいな…と。2人みたいにはなれませんでしたがね…」

「それでいいのです。花陽は花陽なんですから」

「はあ…」

「それで…どうするの?」

「ライブの話ですか?私たちだけじゃ…」

「はい…」

「そうね…じゃあ、またにしましょうか。今日はもう遅いし…」

「そうですね」

「順番はどうします?」

「順番?」

「誰がどこに寝るか…」

「私は別にどこでもいいけど…年齢順でいいんじゃないかしら?」  
「ということ、3人がベッドに横たわる。」

「明かりは…消しちやいけないですよね」

絵里は、暗闇とかお化けとかが苦手だ。

「あ、花陽、私のことをバカにしたでしょ?」

「いえいえ、絵里ちゃんのそういうところが、可愛いなって」

スタイル抜群の美女が見せる弱点、隙…幼さ。

花陽はこのギャップに胸がキュンとなる。

「可愛いだなんて…恥ずかしいわ」



「えへっ！」

「では、寝ます！」

海未はそう宣言すると、仰向けになり、身体を一直線に伸ばした。

…海未ちゃんは寝るとき姿勢まで、ちゃんとしてるんですね…

…余計疲れそうです…

花陽は、横目で海未を眺めながら、そう思った。

「花陽、どうかしましたか？」

海未がその視線に気付く。

「あ、いえ…はい、おやすみなさい」

「おやすみなさい」

絵里、海未、花陽がそれぞれ上を向いて、目を閉じた。

ところが、思い直したようにムクツと上半身を起こすと、自分の右にいる絵里、左にいる花陽を交互に見た。

「海未？」

「海未ちゃん？」

「いえ…」

そう言ってもう一度、2人を見る。

「すみませんが、花陽、場所を替わってもらえないでしょうか？」

「へっ？」

「い、いえ…なんとなく今日は端の方が寝つきが良さそうだと思います  
ものですか…」

「は、はい…別に構いませんが…」

「では、お願いします」

と海未は、花陽と場所を入れ替える。

「？」

隣同士になった絵里と花陽は不思議そうに顔を見合わせた。

…やはり、こうやって横たわって、並んで較べてみると…私の胸は  
絶望的にまっ平らですね…

…このまま2人に挟まれて寝ると、なんとなく夢見が悪い気がします…

これまでの言動から推測するに…*μ*、*s*の中で一番胸の大きさを気にしているのは、にこでも凜でもなく…どうやら海未であるようだ。

翌朝…。

「おはよう…花陽…早いわね」

眠た気に目を擦りながら、絵里が起きてきた。

「おはようございます。絵里ちゃんこそ…」

「私は目を覚ましたら花陽がいなかったから、もしかして…と思って」

「花陽は飛行機の関係で一足先に帰りますので、自分の支度だけは終わらせておこうと思って」

「…で、食事の準備まで？」

「あはっ！これは『つい』です。この食材だとこれくらいしかできないくて」

「これは…フレンチトースト？」

「パンは牛乳を混ぜた溶き卵に浸してありますので、あとは焼くだけです」

「こっちの卵は？」

「ハムエッグにしようかと。卵、卵になっちゃいますけど。あとはサラダを盛り付けて…コーンポタージュを温つたれば、準備OKです」

「ハラショー!!充分過ぎるわ。まあ、穂乃果じゃちよつと怪しいかなと思って、私も早めに起きたつもりなんだけど…あなたには敵わない

わ

名指しされた穂乃果は、昨晚のジエンガ大会で最下位となり、その罰ゲームとして朝食の準備をすることになっていた。

しかし、まだ起きてこない。

「いえいえ、ですから、あくまでこれはついでのので…」

「助かるわ」

「どういたしまして」

「花陽は不思議な娘ね」

「？」

「普段は絶対に守ってあげなくちゃ！って思うくらい可愛い『妹』なのに、でも時おり凄くしつかりした『お姉さん』で…」

「えっ？」

「雪穂ちゃんがよく言ってたわ。『なんで私のお姉ちゃんは、花陽先輩じゃないんだろう…』って」

「それは花陽も言われましたけど…なんで絵里ちゃんが？」

「それはそうよ。週二か週三くらいで家に来るんだもん。それで亜里沙と共に、今日はなにをしました、今日はなにを教わりました、今日もお姉ちゃんが海未先輩に怒られました…って2人が全部報告してくれるの」

「あはは…なんとなく、想像が付きます。それに付き合う絵里ちゃんも大変でしたね」

「でも、亜里沙が目をキラキラさせて話すから、それを見ると嬉しくて…」

「あ、はい…」

「あなたが先輩でいてくれて、本当によかったわ」

「花陽ひとりじゃないですよ…」

「そうね…。でも、亜里沙も雪穂ちゃんも『花陽先輩』には、全幅（ぜんぷく）の信頼を置いていたわ」

「なんか、照れますね。そんな話、初めて聴きました」

「初めて話すんだもの。だって、そんなこと、2人きりになった時でくらしいか言えないでしょ？…それで…雪穂ちゃんからは、さっきの言

葉を何度聴かされたことか…」

「雪穂ちゃんには、そういうことを言っちゃダメだよ！って何度も言ったんですけど」

「まあ、それは私だから言ったんだと思うけど…」

「はあ…」

「だけどね、私もそう思うことがあるの」

「？」

「花陽が、お姉さんだったらな…って」

「え、ええっ！」

「花陽は独りっ子でしょ？」

「はい」

「兄弟姉妹（きょうだい）が欲しい…って思ったことない？」

「…なくはないです…。だから、みんなと知り合って、先輩はお姉さんだと思ってるし、後輩は妹だと思ってます」

「なるほどね。私は姉でしょ？だからお姉さんがいたらな…って思うことがあるの」

「意外です」

「そうかしら？わりと兄妹あるあるじゃないのかしら？それは妹は妹で大変なことはあるかもだけど…逆に上は上で頼る人っていないでしょう？甘えたい時だってあるじゃない」

「それは確かに…」

「私にとって花陽はそういう存在なの」

「花陽が？…」

「優しくって、暖かくって、柔らかくって…」

「それは希ちゃんだって…」

「そうね。でも、希は…同志なの。戦友って言ってもいいかな？お姉さんとはちよつと違うのよね…」

「そういえば、昔、希ちゃんも絵里ちゃんのこと、そう言っていました」  
「でしょ?」

「はい」

「でもね…花陽には甘えられるの。あの時もそうだったわ。初めてあなたに、膝の故障の事を打ち明けた時も」  
「…」

「私は感情が昂って、取り乱して…あのあと凄く自己嫌悪に陥ったんだけど…あれ、相手が花陽だったから、そうなったんだと思うの。他の娘だったら、ああはならなかった。それで気付いたの…『私は花陽に甘えちゃったんだ』って」

「そんなおだてても、なにも出てきませんよ」

花陽は恥ずかしげに頭を掻く。

「希もにこも、同じことを思ってるわ。妹と姉の属性を併せ持つ、不思議な娘…って」

「はう…」

花陽の顔は真っ赤になり、耳から煙が吹き出しそうだ。

「だから…夜はありがとう。お陰でぐっすり眠れたわ」

「はい!いきなり抱きついてくるので、ちよっとビックリしましたけど…」

『甘えさせて』もらっちゃった!みんなが言うように、本当に気持ちよかったわ」

「お、お役に立てたなら…なによりです」

「機会があったら、また一緒にお願いしたいわ」

「は、はい…」

「でも、先約でいっぱいかしら?」

「えっと…その…」

「うふふ…気長に待つわ」

「はあ…」

「これも、理由はわからないけど海未が場所を替わってくれたお陰ね」

「おはようございますー!」

「あ、海未ちゃん、おはようございます！」

「お、おはよう」

…ビツクリしたわ！…

…今の聴かれてなかったかしら…

「2人とも早いですね」

「ええ、まあ…それより、海未、大丈夫？少し魔（うな）されていたみたいだけど…」

「えっ？私が魔されていた？…はて、なんのことでしよう…ええ…大丈夫ですよ」

…高野さんが私を捨てて、絵里と花陽を連れ去っていく夢を見た…などとは、とても言えませぬ…

「なんか、難しい顔をしていますけど」

「触らぬ神に祟りなし…そつとしておきましょう」

花陽と絵里は、アイコンタクトでそう会話をした。

「では、みなさま、花陽はアメリカに戻ります」

「今度はいつ会えるにや？」

「ごめん、凜ちゃん、それはちよつと…」

「お仕事、頑張ってね」

「ありがとう、ことりちゃん」

「私は冬休みになったら、アメリカに旅行に行くから、その時に会いましょう」

「あ、真姫ちゃん、ずるいよ！穂乃果も連れてって！」

「それくらい自分で行きなさいよ」

「え〜!!」

「え〜：じやないわよ！あなたに何回一晩で蹴られたか」

「それは本当にゴメン！夢の中でサッカーしてて…」

「なにそれ？意味わかんない」

「それより穂乃果は、改めて花陽に言うことがあるでしょう？」

「え〜、それは穂乃果がやろうと思ったのに、花陽ちゃんが早く起きしすぎるから…」

「一番最後に起きてきて、何を言ってるんですか！」

「海未ちゃん、またそういうことを言ったら、花陽ちゃんが帰りづらくなっちゃうよ」

「ことり：それはそうですが」

「今度日本に戻ってきたときには、必ずうちに来なさいよ！こころたちが会いたがってるんだから」

「はい、にこちゃん。妹さんに宜しくお伝えください」

「体調に気をつけるんよ！頑張りすぎは身体に毒やからね」

「希ちゃんも…」

「そりゃね！」

「あ、タクシーが来たにや…」

「ではでは、みなさん…」

そう言つて花陽はタクシーの後部座席に乗り込むと、後ろを振り返り、メンバーが見えなくなるまで手を振り続けた。

そして、海未以下8人もタクシーが見えなくなるまで手を振った。

このあと彼女たちは、希のアテンドで、少しかだけ観光をして帰国の徒についた。

一方、日本では…

高野梨里と夢野つばさの会見が、開かれようとしていた。

それは残念ながら…2人を祝福するような…和やかな雰囲気…と  
いう感じではない。

それは『あの男』が、そこにいるからだった…。

く第2部 完く



## 第一部&第二部まとめ これまでのあらすじ

オレの名は高野梨里。

20歳。

『横浜・F・マリノス』に所属するJリーガーだ。

チームでは控えに甘んじているが、オリンピックの予選に召集されたオレは、4得点5アシストと大活躍。

特に、勝てば本大会出場が決まるという試合で、ロスタイムに『ジョホールバルの再来』と呼ばれる決勝ゴールをあげ、その名を全国に知らしめた。

自分で言うのもなんだが、今、ノリにノっている期待のMFだ。

オレには『夢野つばさ』という女友達というか：彼女というか：まあ、そんな感じの『知り合い』がいる。

本名は藤綾乃。

オレは幼い時から『チョモ』って呼んでいる。

小学校の5〜6年の時に同じクラスだったが、卒業後は別々の学校に進む。

まったく接点がないまま1年が過ぎた中2の春：オレたちは一度だけ、偶然、地元の公園で再会したことがあった。

その日がなければ、今のオレたちはこういう関係になっただけはない。

それが運命：神様の悪戯ってやつなんだろう。

彼女は母親から受け継いだ良質なDNA：整った顔立ちとスラリとした長身：を活かし、中学2〜3年時にモデル『AYA』として：既に小中学生のカリスマと呼ばれていた同い年の『浅倉さくら』：と

『C. A. 2 (キャッツ)』というコンビを組み…ローティーンのファッションシーンをリード、一世を風靡する。

高校1年時には、事務所の後輩『星野はるか』『水野めぐみ』とバンドスタイルのユニット『シルフィード』を結成。

『夢野つばさ』名義で左利きのギタリスト兼ヴォーカルとして音楽活動を開始。

事務所の戦略も当たり、シルフィードは音楽界の賞レースを総舐めにし、レコード大賞では最優秀新人賞を受賞。さらには紅白歌合戦の出場も果たした。

しかし、直後にオレはチヨモから『サッカー選手へ転身したい』と『内密の相談』を持ちかけられる。

以前、再会した際「何かあったら相談に乗るよ」と言ったのを覚えていたらしい。

芸能活動と並行してフットサルをしていた彼女だが、サッカーはやはり似て非なるもの。

…というわけで、サッカーの用語からルール、テクニク、その他、何から何まで教え込んだのが、このオレである。

チヨモは、オレが羨むほどの器用さと不断の努力で、知識も技もあつという間に身に付けていく。

そして、オレのレクチャー最終日。

お互い昔から『密かに好意を寄せていた』ことに知り…それまでの『師匠と弟子』の関係から…一線を越えた。

迎えた4月。

彼女は『様々な偶然に導かれ』地元の女子チーム『大和シルフィード』の一員となる。

元々、小学生時代はバレーボールのウイングスパイカーとして、オリンピック出場を目指しており、特待生で中学に進学したほどの運動神経の持ち主。

陸上選手だった父親から受け継いだ身体能力…高い跳躍力と強烈な左足のシュート…を武器に、攻撃的なポジションの選手として、シ

ルフィードを牽引する存在となっていく。

同じチームに所属する『緑川沙紀』とは同い年で、当初は『JKコンビ』と呼ばれていたが：今では某漫画の主人公とその友人になぞらえ『つばさ&みさき（IIゴールデンコンビ）』と称されるペアに成長。オレと同様に、2人揃って女子の日本代表：『なでしこジャパン』に選出されると、見事アジア予選を勝ち抜き、オリンピック出場を決めた。

ところが：である。

オレはオリンピックの合宿を控えた1週間前に、交通事故に巻き込まれてしまう。

トレーニングを終え、帰宅途中、交差点で信号待ちしているところに、正面衝突した1台の車が、その弾みで突っ込んできたのだ。

オレは隣にいた：恐怖で身体が固まってしまっている美女：を車に直撃されないよう突き飛ばした。

これで自分も上手く避けられれば良かったのだが、運悪く、身体はボンネットに乗り上げ、頭から落下。

軽度の頸椎損傷を負ってしまう。

とはいえ、全治6ヶ月。

これでオレのオリンピック出場は絶望的ものとなった。

ちなみに、運転していたのは16歳の少年。

本人は足を折っただけらしいが、同乗していた同い年の少女は、その場で命を落としたとのことだった。

話はこれで終わらない。

オレが突き飛ばした：事故から救った：美女というのが、元スクールアイドル『μ's』の『園田海未』だというのだ。

そういうことに疎いオレは、彼女がどれほどの有名人か知らなかつ

たが、μ sは『伝説』とか『カリスマ』とか呼ばれていて、あの『A—L I S E』が「永遠のライバル」と語るほどのグループだ…とチョコから教わった。

幸い、彼女は掠り傷程度で済んだと聴き、喜んだオレだったが、直ぐに不安がよぎる。

そして、その予感…：残念なこと…に的中する。

彼女に対する誹謗・中傷が始まったのである。

オレが彼女(園田さん)を助けた ↓ 彼女が自分から避けてれば、オレは負傷しなかった ↓ 避けられなかった彼女が悪い…ということだ。

一見すると、この三段論法は成立しているように思えるが、実は違う。

根本がおかしい。

悪いのは事故を起こした加害者であって、オレたち2人は被害者なのだ。

まったくもって非はない

だがネット上では、これを皮切りに、ここぞとばかりに口汚い言葉で溢れかえる。

同じμ sファンの中でも『推しメン』『アンチ』とあるらしく…つまり彼女のことを好いていなかった連中が、攻撃を開始したのだ。

それに自称『オレのファン』が追従する(そういう輩をオレはファンとは認めていないが)。

さらにまったく無関係な…おそらく野次馬的立場のやつらが便乗して、ことを大きくしていった。

言葉での攻撃は彼女へのみならず、元メンバーのファン同士…あるいはμ sとA—L I S Eのファン同士のネガティブキャンペーン合戦へと発展していく。

拳句の果てには、彼女たちのプライバシーに及ぶような記述まで散見されるようになった。

元カリスマスクールアイドルとはいえ、今は解散して一般人として暮らしている彼女たち…このままでは日常生活に影響を及ぼすおそれがある。

それを受けて園田さんは、オレを負傷させてしまったことと、メンバーに迷惑を掛けてしまったこととで、精神的に追い込まれていく。

そんな彼女を救おうと立ち上がったのが、チヨモこと夢野つばさと、かつてμ sファンだったという星野はるかと水野めぐみ（アクアスター）、そしてA—L I S Eだった。

彼女たちは夢野つばさの「オリンピックピック壮行会」に園田さんを招き、事態の収束に向けて、全面協力することを約束する。

その甲斐あって、加熱していたファン同士の争いは沈静化した。

これで一件落着か…と思いきやマスコミがこの騒ぎに目を付けた。

『週刊 新文』が3大スクープと称し、特集を組んだのだ。

ひとつはオレと夢野つばさが恋仲であるということ。

ひとつは『あの人は今!?』と銘打ち、μ sメンバーの近況をリポートしたものだ。

そして最後は…園田さんこそがμ s解散・分裂の元凶であり、その彼女はライバルであったA—L I S Eへの合流を単独で企ており、さらには夢野つばさが不在の間、オレと密会している…というものだった。

なんてふざけた記事だ！

ひとつ目、ふたつ目は百歩も千歩も譲ってやるとしよう。

結婚するかどうかは別として、チヨモとオレはそういう仲だし、今まで気付かれなかつただけで、特に隠すつもりもない。

μ sメンバーの近況も…まあ、ファンが知りたいと望むのであれば、完全否定することはできない。

だが、みつつ目は…

完全な捏造だ。

これは看過できない。

どこかで正す必要がある。

しかし…

ただでさえチョモは、オリンピック直前でナーバスになっている。加えてオリンピックに出られない『師匠のオレ』に対して、引け目を感じている。

そんな状態のときに…つまりこのタイミングで下手にコメントするのは得策ではない。

火に油を注ぐようなものだ。

今はサッカーに集中させよう。

オレも園田さんも同じ想いで、敢えて貝になることと決めた。

こうしてオリンピックは開幕する。

予選グループを1敗1分で迎えた最終戦。

園田さん率いるμ'sとアクアスター、浅倉さくら…そしてA—L I S Eが現地に飛んで声援を送る。

初戦で肩を痛めた夢野つばさは、必死のプレーで2ゴールを挙げた。

だが試合に勝利し、フランスと勝ち点で並ぶも…得失点差でわずかに及ばず、敗退。

決勝トーナメント進出とはならず、失意の帰国となったのだ…。

## 登場人物紹介

### 【登場人物紹介③】 μ, S

#### 【園田海未】

都内の大学に通う3年生。大学では日本文学を専攻しており、併せて教職免許の取得を目指している。

μ, Sのメンバーであった過去は、訊かれれば話す程度で（「1曲歌って」などと言われるのが面倒な為）積極的に公開はしていない。メンバーに『恋愛拒否症候群（穂乃果が命名）』と呼ばれるほどの奥手であるが、興味が無いわけではなく、イメージトレーニング（いわゆる妄想デート）は頭の中で相当数こなしている。

公言していないが男性に求めるものは、穂乃果とは正反対な人で『真面目』『知的』『清潔』などがある。逆に『時間とお金にルーズな人』は絶対に受け入れられない。

穂乃果に対しては、昔は恋愛にも似た感情を抱いていたこともあったが、今はどちらかかという『保護者』いう意識が強い。

貧乳であることに、異常なほどコンプレックスを持っている。

弓道サークルに所属しており、それなりに仲の良い友人はいるが、基本的に群れて行動するのが得意でない為、深い付き合いはしていない。

特に、ことあるごとに理由を付けて行われる『飲み会』は（未成年が飲酒の場に同席することは非道徳的であるとの理由から）これまで参加を見合わせてきた。

しかし（自らが飲酒可能な）20歳になり、初めて『打ち上げ』に出席。その帰り道、事故に巻き込まれた。

オリンピック観戦を前に『一連の騒動のけじめ』として、長年伸ばしていた髪をバッサリと切り、凜と同じくらいのショートヘアにした。

μ, S在籍時、海外ライブの際、2泊目に花陽と同室になり、その時にアイドル研究部部长としての考え方（入部希望者の受入体制、多

様性の許容)を聴き、彼女の精神的成長を感じたと共に、感銘を受けた。

この時に花陽が『最高の抱き枕』であることを確認している。

花陽を、穂乃果の生徒会長後任に推したのは海未。

#### 【高坂穂乃果】

都内の大学に通う3年生。大学ではコミュニケーション学を専攻している。

サークルには所属していないが、誰とでも仲良くなれる社交的な性格は健在で、男女問わず友人は多い。

その為、あちらこちらと誘われることも少なくなき、遊ぶのに忙しい。

男子からは『異性』としてではなく『女友達』と思われるらしく、いわゆる彼氏はいない。

アルコールは好きだが、それほど強くなく、呑みすぎると寝てしまう。

特に目的があつて進学したわけではないが、漠然とマスコミ関係の仕事に就ければ…と考えている。

時折、実家である『穂むら』の店番をすることがあるが、今のところ、実家を継ぐ気はないようだ。

家が自営業であることもあり、高校を卒業してすぐに車の免許を取得している。

ちなみにマイカーは所有しておらず(強いてあげるとすれば配達などに使う実家の軽ワゴン)、遊びに行くときはレンタカーを利用する。

他のメンバーが当時からの体型を維持している中、ひとりだけかなり「ふつくら」としてしまい『週刊新文の柏木』にもそこを指摘された。

オリンピック観戦時、久しぶりに会った花陽を見て「太った」と指摘したが、彼女はバストサイズが大きくなっただけと判明。かつて共に『強制ダイエット』を行った彼女を仲間を引きずりこもうとしたが、自爆に終わった。



上記のようなことも含め、にこ以上の弄られキャラとなっている。  
2歳下の妹（雪穂）も大学生だが、別の大学に通っている。

その雪穂との関係は相変わらずで、ことあるごとに「なんで花陽先輩がお姉ちゃんじゃなかんだらう」と言われている。

μ, sの中で、唯一『花陽に染まっていない』稀有な人物。

【矢澤にこ】

舞台女優（ミュージカル俳優）のたまご。

幼い頃からアイドルになることが夢であったが『（単体では）μ, s以上の存在にはなれない』と早々に見切りをつけ、高校卒業後、専門学校に進んだ。

その過程において管理栄養士や調理師などの資格を取得している。

同時にトレードマークだった『にっこにっこに』と『ツインテール』も封印しており『見た目だけなら』だいぶ落ち着いた印象となった。

それでも芸能界への憧れは捨てきれず、現在は劇団に入り『小庭沙弥（こにわさや）』の芸名で活動している（矢澤にこの反対読み）。

上記のような資格取得は『自分の個性を高める為の付加価値』だと述べている。

しかし、実は『手に職』があれば、いつ芸能界を干されても『食べていける』とセカンドキャリアを考慮してのことで、それほど豊かではない家庭環境で育ったせいかな、当時の言動からは想像もつかないほどの現実主義者である。

また時間をみつけては『穂むら』に出向き、穂乃果の父親から和菓子作りのイロハを教わっている。このため、穂乃果の母からは冗談半分で「うちの跡取り」と言われている。

アルコールは体質が合わないらしく、一滴も飲めない。

当時から2つ学年が下の『まきりんぱな』と行動することが多かったが、今でもその関係性は変わらない。

真姫については『ひねくれた妹』、凜は『お調子者の妹』、そして花陽は『実の妹』と評し可愛がっている。

特に花陽は共通の趣味を持つ良き理解者（何があっても花陽は、にこのことを悪く言うことをしなかった）として特別な存在であり、自分の後継者としてアイドル研究部の部長に指名した。

加えて彼女の妹弟（こころ、ここあ、虎太郎）たちが「花陽姉さま」と慕っていることも理由のひとつである（花陽は高校在学时、度々『主婦のにこ』を手伝う為、彼女の家を訪れ、妹たちの面倒を見ていた）。初めて花陽が彼女の家で宿泊した日の夜、にこは彼女に『イタズラ』をしているが、花陽は気付いていない。

#### 【東條希】

高校卒業後、小さな旅行代理店に就職。

敢えて大手を選ばなかったのは「それやったら、自分がやりたいことができないやん！」とのことで、その言葉通り、堪能な英会話能力と旺盛な好奇心を活かし、海外のスピリチュアルスポットを周るツアーなどを企画。同社の主力商品に押し上げた。

ツアーの添乗はもちろん、事前に現地に乗り込みコーディネートすることも多く、通算すると1年のうち1/4ほどは日本にいない。

レズっ気があり、普段からにこたちに『色情魔』『セクハラ親父』などと呼ばれている。

最近では滅多に発動しないが『特技のワシワシ』は年々バージョンアップしているとのこと。

以前はワシワシの際に、対象者のサイズ、カップを言い当てることが出来たが、今は目測でわかるらしい。

ちなみに穂乃果、海未、真姫、凜、にこの5人組のバストカップを評し『フラット5』と命名し、度々ネタにしている。

度数の高いアルコールでも平気で飲む酒豪。

本人曰く、ある一定量を超えると、相当エロくなるとのこと。

ただし、リミッターが振り切れたらどうなるのかは、μ'sのメンバーがまだその場面に遭遇していない為、不明。

そして、その境界線がどこかは本人も把握していない。

（国内外に）複数のBFがいるようだが、詳細は明らかになっていな

い。

日常生活では標準語を使うが（メンバーに違和感がハンパではないと言われ）彼女たちの前では以前のように関西弁を使う。

μs 在籍時、花陽のバストサイズがアップしたことが判明すると、一緒にブラを買いに『デート』している。

その夜、自宅に招き、花陽は彼女が『独り暮らししている事』を、（絵里を除く）他のメンバーより先に知った。

そして、花陽については『人生を変えた運命の人』『女神様』だと言い、妹とも彼女ともつかない大事な存在だと打ち明けている。

更にその夜、希はベッドの上で『抑えられない欲望』を、花陽に向けて放っており、彼女もそれを受け入れた。

### 【西木野真姫】

都内の医大に通う2年生。幼いころから医者になることは、ある種、規定路線であったが、逸れることなくその道に進んだ。

海未同様、群れることを好まない為、大学では孤独に過ごすことが多いが、本人は特に『寂しい』などとは思っていない。

大学内ではエリート意識、ブランド志向、プライドが高い学生が多く、そんな見栄の張り合いからは、一歩引いている。

進学してから視力が落ち、授業中、および車の運転中は眼鏡を掛けている。

趣味は意外にもドライブで、愛車の真っ赤なアルファスパイダー（アルファロメオのオープンカー）を駆って海や山に出掛ける。

クールなイメージが強い彼女だが、反面、知る人ぞ知るロマンチストで、静かに波音を聴いたり、星空を見たりして、日常の疲れを癒している。

気分転換に自宅でピアノを弾くことあるが、今は人前で披露することはない。

恋愛については「今は面倒」とあまり興味がない様子。

花陽の事は『初めて高校でできた友達』として特別な存在で、彼女の母も同じ想いで接している。

μ, s 在籍時『希とのデート』を偶然目撃し、激しく嫉妬した。そして、どうやったら彼女を『支配できるか』妄想して、自己嫌悪に陥っている。

その後、花陽に自分の想いを打ち明け『プラネタリウムデート』を敢行、永遠に友達でいることを約束した。

今は「話しをしなくても傍にいてくれるだけで落ち着く『精神安定剤』と称し、彼女のおっちょこちょいさえも、愛おしく思っている。しかしその際は必ず「ドジ…」と呟く。

2人になったときだけ、凜の『かよちゃん』に対抗して「かよ」と呼ぶ。

### 【星空凜】

スポーツインストラクターを養成する専門学校に通う2年生。来春卒業したら、系列のスポーツクラブに就職する予定。

お世辞にもあまり勉強ができた方ではない為、自身の長所である『抜群の運動神経』を活かせる職業としてこの道を選んだ。

その後、必死に座学にも精進し『スポーツ（アスリート）フードマイスター』の資格を得ている。

ただし、ラーメン好きは今でも変わらない。

高校卒業を前に（花陽が渡米するのに伴い）『花陽への依存から脱却する』として、ひとり立ちを決意した。

そんなこともあり、同じ専門学校に通う『イケメン』から猛アタックを受け、付き合うことになった彼氏がいる。

しかし、『食事の量の少なさ』や『全部お膳立てして、計画通りに進めたがる』など、これまでずっと一緒に過ごしてきた『花陽』とのギャップに戸惑っていると言いつつ、メンバーから「花陽ちゃんと彼氏を同列で考えるのはおかしい」と諭された。

希と同様にメンバーの前にいる時だけ「…にや」と語尾に付ける（彼のの前で言っている可能性はある）。

μ, s 在籍時、海外ライブの際、1泊目に花陽と同室となり「旅の恥は掻きすてにや」とベッドの上で『長年の夢』を果たしている。

【南ことり】

都内の美大に通う3年生。

将来的には衣装だけではなく、小物やアクセサリ、インテリアなど空間も含めた総合的なプロデューズをしたいと考えている。

元μ'sの知名度もあり、ブライダル業界では、将来を担う注目の若手と評されている。

かつて『伝説のメイド』と呼ばれたルックスと、甘い声、仕草等は健在で、いまでもファンが多く、また初対面の人でも無意識のうちに「オレのことが好きなのかな?」と勘違いさせる能力が高い。

その為、ストーカーまがいの事件に度々巻き込まれている。

『浅倉さくら』が母親方の遠縁であることは、中学生の頃には既に知っていたが、オリンピックの観戦時に初めて対面を果たした。

花陽とは、ともに穏やかな性格で波長やテンポが合うらしく（アルパカ好きなことも含めて）一緒に衣装製作をしたり、スイーツを食べに行ったりしており、姉妹のように仲がいい。

同じように『自分の妹』と主張するにこに対し、少なからずライバル心がある。

ことりは自分専用枕がないと眠れないのであるが、花陽はその『最高の代理品』だと言い、可能であれば『花陽型抱き枕』を製作したいと考えている。

μ's在籍時、ラブライブ決勝前夜、全員で学校に宿泊した際「寒い」と花陽の布団に潜り込み「気持ちいいこと」をしている（本人たちは気付いていないが、希のみ、その事実を知っている）。

【絢瀬絵里】

都内の外語大学に通う4年生。通訳の仕事を目指しており、英語を猛勉強中である。

高校在学時からそのルックスとスタイルの良さは注目されており、芸能事務所からのスカウトが何社もあったようだが、全て断っている。

実は夢野つばさが所属する『飛鳥プロ』もアプローチしていた。

高校在学時はポニーテールにすることが多かったが、現在はほとんどしていない（たまに後ろでまとめる程度）。

幼いころに左膝を痛めており、それが原因でバレエダンサーを諦めている。以降、激しい運動は避けており、μ×sの活動はメンバーに内緒で騙しだまし行ってきた。

それが絵里にとってアイドル活動を継続できなかった理由のひとつとなっている（このことは、高校卒業を目前にした際、にこと希には打ち明けていたが、他のメンバーは知らなかった。しかし、花陽に『揺れ動く心』を指摘され、その旨を白状した）。

自分が卒業したのと入れ替わりで、妹の亜里沙が音ノ木坂に入学、アイドル研究部に入部した為、彼女の面倒を見た後輩の6人には、姉の立場として『深く感謝』している。

中でも（廃校の危機から救った）穂乃果の後を引き継ぎ生徒会長に就任し、音ノ木坂を守った花陽に対しては、特別な想いを持っている。また入部当時、一番頼りなく見え、さらに自分を一番怖がつて避けていると思っていた花陽の精神的成長を、誰よりも嬉しく思っている。

μ×sの『ラストライブ前』に幼き頃の黒沢姉妹（ダイヤ、ルビィ）に（花陽と一緒に）サインをしたことがある。

### 【小泉花陽】

映像クリエイター。

アイドル研究部では、にこのあとを継ぎ2代目の部長に、生徒会は穂乃果のあとを継いで、会長を務めた（副会長は真姫）。

ラブライブを目指すことだけがアイドル研究部の役割ではないと『多様化』を推進し、いわゆる裏方（スタッフ）と呼ばれる側の育成にも力を注いだ（陰ながらμ、sをバックアップし続けてきた『ヒフミトリオ』を、特別部員として招き入れており、後輩には彼女たちに仕事を学んだ者が、照明や音響などの道へと進んでいる）。

μ、s解散後は（メンバー全体に言えることだが）燃え尽き症候群

のような状態になり、上記理由も含め、自分たちがステージに立つことよりも、むしろ後輩の指導が活動の中心となった。

そんな中花陽は、部内のスクールアイドルユニットのスケジュール管理、ステージ演出などの総合演出的な役割を務めた。

その時作ったPVのクオリティ、センスが（A—L—I—S—Eを通じて）彼女たちのプロデューサーに認められ、渡米。現在は若手映像クリエイターとしてアメリカを主戦場として活躍しており、1年のうち大半を向こうで過ごしている。

ちなみにμ'sの『ラストライブ』に参加した他校の生徒と交流を深め、それを機に『日本スクールアイドル協会』の初代会長に就任。ライブ及びスクールアイドルの発展に尽力した。

その為『花陽シンパ』が全国に存在しており、彼女が一声掛ければ数百人動くとも言われている。

「髪を切りいくヒマがない」とのことでは伸ばしており『昔の絵里のように』ポニーテールにしている。

希の指摘により、バストがEからFカップにアップすることが判明した。

μ'sの『ラストライブ前』に幼き頃の黒沢姉妹（ダイヤ、ルビィ）に（絵里と一緒に）サインをしたことがある。

## 第三部 なでしこ帰国

オリンピックの結果は、結局男女とも決勝トーナメントには進出できなかつた。

女子は1勝1敗1分：勝ち点でフランスと並んだが、得失点差でわずか1点届かず、予選リーグ敗退。

男子は2戦目を終わって1勝1分。

3戦目は：引き分け以上ならOKという状況でありながら、0―1で落とし：なんと4チームが1勝1敗1分で並ぶという大混戦になった。

…が：

こちらも得失点差の関係で涙を飲んだ。

長ければ1ヶ月近く現地に滞在するはずだった選手たちは、しかし、最短の日程で帰国することとなった。

失意の表情で空港に戻ってきた彼らを待ち受けていたのは：行きと変わらないくらいの数のサポーター。

しかし、その前を、肩を落とし、無言で通りすぎる選手たち。

惨敗したのであれば、生卵のひとつやふたつ、飛び交うかも知れないが、本当に紙一重の結果である為、サポーターも怒るべきなのか、健闘を称えるべきなのか：どう迎えたらいいかわからない感じで、拍手は起こったものの、黄色い歓声のようなものはほとんどなかった。

メダルを持って帰ってきたなら、ひな壇が用意され、選手全員での賑やかなインタビューとなるのだが、今回は男女ともそういう状況でない。



女子は監督とキャプテンを務めた桐原が代表して、空港に用意された特設会場にて会見を行うこととなった。

その後、個別に『つばさ』と『オレ』の出番が用意されている。オレからしてみれば、それは計画よりも3週間早い。

まだ歩くことはもとより、車椅子で移動することすらできない。

それでも『交際発覚の報』を受け、チーム関係者や代表の広報の小野さんと協議した結果、一回は会見を開いておくべきだ：ということになった。

：といっても、オレは会見場には行けないから、病院の会議室を借りての二元中継ということになる。

チームの結果が結果だけに、どう考えても第1部が明るい雰囲気、和やかなものになるとは思えない。

その後の会見：

気が重くて仕方がないが、園田さんのこともある。

彼女に迷惑を掛けないよう、しっかりと二股疑惑等是否定しなければならなかった。

：であるなら、ずるずる引つ張るよりも早めに行う方がいい。

オレは上半身だけ、代表の公式ウェアであるワイシャツとブレザーに着替えさせられた。

もちろん、首のコルセットはまだ取れていない。

オレの出番は2部とのことなので、それまでは病室で待機：まずはモニターで1部の会見の様子を見守ることとした。

記者会見の冒頭「国民の皆様のご期待に応えられず、申し訳ない」と監督が謝罪し、2人は起立して30秒近く頭を下げた。

まるで法を犯したかのようなその姿に、オレは早々に違和感を覚えた。

まずは監督が3戦を振り返って総括する。

試合直後にもインタビューは行われるが、(勝っても負けても)興奮

状態にあるその時と、時間が経ってからの今とはでは、冷静さが違う。また、まだ試合が残ってる中では言えないことも当然あるだろう。従って、こういった総括は当然必要であった。

監督は冒頭、ブラジル戦の最初の失点で浮き足立ってしまい、それを建て直すことができなかったこと…2度に渡る不可思議な判定により、勝敗が左右されてしまったこと…ベンチワーク（選手交代）等による判断ミスがあったこと…などを挙げ「そういったことも含めて私の責任」と選手を庇った。

まあ、そうだろう。

ここで『誰々が悪い』などと言う監督はいない。

例えばポーズであってもそう言う。

力負けしたブラジル戦、つばさを欠いたまま挑んだフランス戦はさておき、南アフリカ戦は、もう少し何とかなかったかもしれない。

特にPKの判定を受けた後の『抗議によつて喰らった2枚目のイエローカード』は、間違いなく防げた。

例えばPKで失点しても、その後の50分間を10人で戦うか、11人で戦うかでは体力的に全然違う。

そういう意味では、あれは本当に痛かった。

もちろんそれで勝てたかどうかはわからない。

実際、南アフリカのPKは失敗したんだし、日本はつばさの追加点で2-0で折り返したのだから。

だが結果だけを見ると、今大会の『分岐点となった退場処分』だった。

しかし、彼女の心情を考えれば仕方ないことだろう。

責めることはできない。

マスコミからは、改めて個々の試合について、質問が飛ぶ。

》まずブラジル戦ですが、開始0分で失点してしまいました。あれは坂巻選手のクリアミスからだったと思います。キャプテンはどう

思われましたか？

「そうですね…キックオフ直後のプレーでしたので、風が掴めていなかったというか…難しいプレーだったと思います」

「…ですが、そのあたりは試合前に確認しますよね？」

「…風は常に一定に吹いてるわけではありませんで…まあ、思った以上の風だったということじゃないでしょうか」

「日本にとって、非常に大きなミスとなりましたが…」

「いえ、まだ始まったばかりでしたし、そこまでは…」

「…2点目を獲られたほうが大きいと？」

「…そうですね…」

「…あれは日本のC KからG Kにボールを取られて、全体的に前掛かりになったところ、カウンターを喰らいました。残り時間を考えれば、焦る場面ではなかったと思うのですが？」

「…そこは反省材料だと思います…」

「…そんなこと、素人でもわかることじゃないですか？」

「一瞬、その辛辣すぎる言葉に、監督と桐原の顔が引きつった。」

「まあ、ピッチ内にはピッチ内の空気とか感覚みたいなものがありますし、相手あつてのことですから…」

「と監督が代弁した。」

「…しかし、PKで1点返したあとはゴールが奪えず、逆に前半終了間際、3点目を失点してしまいました。」

「これはもう、相手が強かったと言うしかないですね。我々が力不足でした」

「…日本は後半にも、夢野選手が吹っ飛ばされて『PKではないか？』というシーンがありました。国内でも『疑惑の判定』とちよつとした騒動になっているわけですが、その点についてはいかがでしょうか？」

「まあ…騒いだところで判定は覆りませんし…意見書は協会がF I F Aに出すと聴いてますので…」

「…そのプレーで夢野選手は肩を負傷し、目に見えてパフォーマンスは低下したと思うのですが、選手交代は考えなかったですか？」

「なかったです」

と監督は即答した。

「しかし、4点目を獲られた時点で敗色濃厚だったと思われます。これ以上の失点を防ぐ意味でも、夢野選手を早めに交代して、次のフランス戦に備えるという選択肢もあったかと思いますが？」

「負けるつもりで、私も選手も戦っておりませんので」

少し監督がイラツとした表情になった。

「結果として夢野選手はフラン戦のスタメンから外れました。」

「まあ、そこは戦術的なことも含めての判断で…」

「そのフランス戦は4-4でした。最後はギャンブルともいえるパワープレーで、劇的なゴールが生まれ、日本中が歓喜の渦に包まれました。」

「それはもう、ベテランの馬場、佐藤が本当によくやってくれました」

「負ければ終わり、という状況でした。」

「…そうですね。日本の執念、魂…そういったものを、お見せすることができたのではないかと思います」

「そして南アフリカ戦…最後は健闘虚しく1ゴール及びみませんでした。この点についてキャプテンはどうお考えでしょうか？」

「…私たちは精一杯戦いました。でも届かなかった。それだけです」

「この試合でも、疑惑の判定…ブラジル戦とは逆にPKを取られるということがありました。」

「そういったことも含めてサッカーだと思えますので…」

「運も実力のうち…その運が味方してくれなかったということは、我々に自力がなかったのでしょうか」

桐原のあと、監督が言葉を続けた。

「あの場面、振り返って…もう少し冷静になれば、坂巻選手も監督も退場にはならなかったのでは？」

「まあ…そこは…私としても反省しております」

「予選リーグ敗退という結果を受けて、監督自身の進退については？」

「終わったばかりですので、まだ何も…これから協会と相談することになるかと…」

》ご自身の今の気持ちとしては？続投したい…と？

「負けて満足する人はいませんよ。…ですが、評価というものは、自分ですることができませんので…」

想像通り…いや、想像以上に重苦しい会見。

冗談のひとつもなく、まさに『お通夜』のようだった。

くつづく

## つばさと一問一答

「では、高野さん、スタンバイお願いします」

サッカー協会のスタッフが、オレに声を掛ける。

この会見は、セッティングからなにかから、全て彼らに取り仕切ってもらっている。

オレは車椅子にさせられると、看護師に押されて、病院内に設けられた会見場へとやってきた。

そこには中継用のTVカメラが1台と、それを操作するカメラマン…とスタッフ数名。

オレの目の前には会議用の長机と、その上に置かれた複数のマイク、ボイスレコーダー…そして大き目のTVモニター。

『記者会見』は『向こうで』行われ、オレはそれを通じて、受け答えをする段取りになっている。

オリンピック期間中は『チョモ』に連絡を取らないと決めていたオレだったが、こつちでの状況が諸々変化した。

ブラジル戦での敗戦を受けての、ヤツの精神面や…負傷した肩のことも心配だった。

いくら、オレのことで不安にさせたくはなかったとは言え、この状況で何もしないのは、あまりに薄情過ぎる。

一応手術も無事に終わったので、少しでも安心させたいとも思っ  
て、オレはヤツと連絡をとった。

チームが負けたこと…それ自体は、まだこのとき2試合残していたし、そこまで悲観的ではなかったが…やはり肩の痛みについては…相  
当なものだったらしい。

脱臼や骨折はしていないが、腱（すじ）を伸ばしたようで『動かない』と言っていた。

足を使うサッカーという競技において、肩の負傷はあまり関係ないのでは？という人もいるかも知れないが、走るという動作は肩が動かなければ、致命的である。

「フランス戦はスタメンから外れることになると思うけど、勝たなきゃいけないときに力になれない…それが悔しい」とこぼしてた。

そして、このときに帰国後の打合せをした。

オリンピック期間中にも関わらず、ヤツが所属する『飛鳥プロ』、もしくは現地に芸能関係のリポーターや記者が詰め掛け『騒動の真相について』問い質（ただ）そうとしているらしい。

やれ『国の代表だ！』『やれメダルを獲得してこい！』とか言いながら、選手が試合に集中できる環境を作ってあげられないマスコミに対し『どういうことよ！』という憤りを覚える。

せめて大会が終わるまで、待つてあげられないものか？…。だからそんな状況を受けて、ヤツは帰国後すぐに会見を開くと言った。

いずれは、オレたちのことは明きらかになったのだろうし、それはやむを得ないとオレも同意する。

なにより、園田さんのことがある。  
であれば

「オレも同席する」

と伝えると、ヤツはエラく驚いた。

別々に会見を開くよりは、同時に行ったほうがいい。

あとから都合のいいところだけを切り貼りされて、テキストな報道をされるなら、生中継でやってしまおう…オレはそう考えていた。

ヤツと手短かに、会見する内容の擦り合わせを行った。

あとは飛鳥プロとサッカー協会にその旨を伝え、それぞれの『専門家』が段取りをした…というわけだ。

読めなかったのは、その日程である。

オレも『この日になる』とは想定外だった。

本当ならツーショットで会見したかったが、病院から外出許可が下りなかった。

仕方なく、このような2次元中継という、異例の会見になったわけである。

向こうの会場にヤツが現れた。

一斉にフラッシュが焚かれる。

ヤツの姿が金色の光に包まれ、神々しくも、禍々しくも見えた。

一礼して着席すると、部屋は静けさと、もとの明るさを取り戻した。

《まずは、夢野選手、オリンピックはお疲れ様でした。

先ほどまでとは違い、芸能レポーターが複数いるようだ。

その女性の声には、ワイドショーなどで聞き覚えがあった。

《初めてのオリンピック、終わってみて、率直な感想をお聴かせください。

「はい…そうですね…ただただ悔しい…ですかね。オリンピックどうの、個人がどうのではなく、やはりプレーするからには全試合勝ちたいと思っているので」

《とはいえ、オリンピックの舞台というのは、特別なものだったんじゃないですか？

《プレッシャーのようなものはありませんでしたか？

「試合前、整列して国歌を聴いたときははいよいよだなとは思いましたが、プレー中はあまり感じませんでした。メダルを持って帰って来れば、オリンピックに出たという実感もあるでしょうけど」

《日本からも多くのサポーターが訪れました。

何人かが交代で質問している。

「そうですね。その声援は正直、力になりました。ありがとうございます」

《最終戦には、お仲間の浅倉さくらさんやアクアスターも来てましたね？



「…みたいですね…あとから聴きました」

《試合を振り返ってください。まずブラジル戦ですが…ちよつとイヤな形で先制されました。しかし、その直後、素晴らしい超ロングのループシュートを放ちましたね？

「GKが前目にポジジョンしていたので思い切って狙ったのですが…残念ながら防がれてしまいました」

《あれで「日本イけるぞ!」と雰囲気になったのですが。

「決まっていれば、そうですね…入らなかったの…すみません…」  
《しかし、0-2とされてから、ゴール前に放り込んだクロス…シュートのようにも見えましたが…そこに緑川選手が走りこんできてPKを得ました。これはどちらが蹴る…とかそういうのはあったんですか？

「沙紀とベンチを見たら、監督が手を小さくパタパタさせてたので…『つばさ』らしいわよって」

巖（いか）つい監督がしたその仕種を思い浮かべて、記者たちから笑いが漏れた。

《見事なゴールでした。

「なにも考えずに、思い切り蹴っただけです」

《そして…どうでも訊かずにいられないのは…やはりあのシーンです。後半22分、CKで夢野選手が空中戦に挑んだところ、我々の眼からは明らかに故意のファール…膝蹴りを受けたように見えました。ご自身はいかがでしたか？

「…接触プレーがあつたのは事実ですが…それ以上のことはわかりません」

《しかし、ファールを取らなかつた審判と相手DFには、日本国民が強い怒りを持っています。

「…そうですね…私たちを応援してくださいのと同じくらいに、審判にも相手選手にもリスpektしてほしいな…と思います」

《ですが、そのプレーで左肩を負傷、フランス戦はスタメンを外れることとなりました。

「上手に受身を取れなかつた、私の責任です」

《そこまで卑屈になる必要はないんじゃないですか？悪いことは悪い、ダメなことはダメだと、しっかり声を上げるべきだと思いますが？

さっきの会見でも『コイツ』は、度々イラツとさせる質問をしていた気がする…。

「そのあたりは、協会の方にお任せしておりますので…ただ…そうですね…物騒な言動は謹んで頂きたいです」

《わかりました。では話しを進めましょう。フランス戦ですが、ベンチから戦況を見守ることになりました。どのような想いでしたか？どのようない…ですか？『勝つて！』としか…」

《「私を出せ！」とは思いませんでしたか？

「それは…監督が決めることなので…」

《日本を代表するエースとして、ちよつと弱気じゃないですか？もっと、ガツガツいかないと！気合が足りないと思います。」

「私…ですか？…気合はあったんですけどね…」

《そして、南アフリカ戦はスタメン復帰。2ゴールを奪い、面目躍如という活躍でした。まず先制点は緑川選手とのコンビプレーでもぎ取りました。ノールックのヒールパスを受けての、素晴らしいミドルシュート。

「そうですね。あの形は普段からやってるプレーなので…。沙紀がいいタイミング、いい位置に出してくれました」

《その後、これも日本中が怒ってるわけですが、不可解なPKの判定があつて、坂巻選手が退場となつてしまい、苦しい戦いを強いられることになりました。

「ちようど私がピッチの外にいるときのプレーでしたので…シュートを止めたGKの深山さんに感謝ですね」

《ビッグセーブでした。

「はい」

《そしてロスタイムに2点目が生まれます。シュートフェイントからの見事なコントロールシュोटでした。

「ありがとうございます」

『一部ではあのプレイ』ある男子選手の得意技では？』などとも言われてますが？

「……想像にお任せします……」

『後半、南アフリカに1点返され：フランスの得点経過なども耳にしていたと思います。最後、あと1点届きませんでした。』

「そうですね」

『後半40分ごろだったと思いますが、夢野選手が鮮やかなターンを決め、ペナルティエリアに侵入する場面がありました。その時、相手DFの足が掛かったように見えたのですが、そのまま『倒れずに』シュートを放っていききました。結果、ボールはポストに当たり、こぼれ球を緑川選手、白瀬選手が続げざまにゴールを狙っていききましたが、決まりませんでした。あれですね、そのまま倒れていけばPKだったと思うのですが。』

……さっきの記者だ……

……こういうことを言うバカがいるとは思っていたが、まさかこの場で出てくるとは……

……アレ、ヤツの身体能力だから倒れなかったんだぜ……並みの選手なら、飛んでたと思う……

……オレにはあのとときにヤツの気持ちがわかる……

……あの流れからいって仮に倒れたとしても、主審がPKを取ってくれたかどうか……

……日本が先にPKを獲られただけに『アテツケ』と思われなくもない……

……つまり、逆にシミュレーションを取られた可能性が高い……

……それに仮にPKをゲットしても、その時点で『得点が入る』わけではない……

……日本が向こうを止めたように、向こうだって日本を止めないとは限らない……

……だったら、流れに逆らわずに、あそこは迷わずシュートだ……

…その判断に誤りはなかったと思うが…

…左肩の負傷の影響か、スタミナ切れだったのか、最後、もうひと踏ん張りできなかつた…

「PKかどうかはわかりませんが…あのシュートを決めていければいいことで…それができなかったことは、私の力不足です」

…さすがチヨモ、百点満点の回答だ…

《3戦で3ゴール。この結果については？

「自分のゴール云々よりも、やはりチームが決勝トーナメントに進めなかつたほうが悔しいですね」

《なるほど…。さて、ここからは少し話が戻るのですが、大会直前に一部週刊誌によって、熱愛の記事が出ましたが、このことは何か影響があつたでしょうか？

…本当はそつちがメインでお集まりなのでしょう？…

オレは心の中で毒付いた。

くつづく

## 2人の関係は？

《単刀直入に：夢野つばきさんは今、お付き合いされている方がいらっしやる？》

「：付き合ってるという表現が正しいかどうかはわかりませんが、大切な人ではありません」

《それは『高野梨里』さん？》

「：はい…」

《改めて、どういうご関係か教えて頂けますか？》

「えつと：高野くんとは小学生時代の同級生で：私がサッカーを始めるにあたって、色々相談に乗ってもらいました」

《相談だけですか？彼の身体の上には乗ってないですか？》

「…」

《おいおい、さすがにこの場でその質問はないだろう…》

《飲み屋の会話じゃないんだから》

と仲間内から、その発言をした質問者にヤジが飛ぶ。

先ほどから、失礼な質問を繰り返していたヤツとは別人のようだ。

《当時、つばきさんはフットサルをされてましたが、その人たちから教わるということは考えていませんでしたか？》

《なぜ高野選手だったのですか？》

気不味い空気の中、別の記者が話を続けた。

「家が近所だったからです」

わはは…と会場が沸く。

しかし冗談みたいな話だが、嘘ではない。

あの日、あの時、近所の公園で偶然会わなければ、こうはなってい

なかった。

「それに、サッカーとフットサルでは、ボールの大きさも人数もまったく違う競技なので、ルール、システム、身体の使い方やテクニクまで…すでにユース代表だった高野くんにはイチから教えてもらいました。」

《身体の使い方、テクニク？若いのにお盛んだねえ！

「…」

《おい、誰だよ、こんなヤツ入れたのは！

《連れ出せよ!!

記者会見場が騒然となる。

慌てて警備員が、セクハラ記者を外に引っ張っていく。

「バカだな！視聴者や読者が一番知りたいのはそこだろ！」

そいつはそう言い残し、会場から消えていった。

《えくと…まあ、そういう関係でお互いの仲が深まっていった…と？

「そうですね…ええ…まあ…はい…」

《告白はどちらからされたのですか

「…告白…ですか？…どっちもしてない…ですね…」

…一応2人の間では同時…ということになっている…

《ご家族ぐるみの付き合いだとか？

「家が近所なので…」

《今回、週刊誌の報道から熱愛が発覚したわけですが…

「熱愛って言われると…ちよつと、違うかな…と思うんですけど…」

《実は、その高野選手が病院でこの様子を見てらっしゃるとのこと  
で…

「ハッキリさせなくちゃいけないことがあるので…本当は一緒に会見

できればよかったんですけど」

《中継が繋がってるんですね？呼んでもらってもいいですか？

「…はい…高野くん？…」

オレが見ていたモニターの画面が、ヤツの顔からオレに切り替わった瞬間、向こうの会場から「あつ」とも「えっ」ともつかない声が聴こえた。

それは恐らくオレの容姿が、あまりに変わっていたからだろう。

そりゃ、そうだ。

入院してからの1ヶ月、オレはほとんど固形物を摂っていない。

運動もしていない。

体重は10kg以上落ちた。

げっそりとやせ細り、自分でも驚くほどの別人になっていたからである。

報道陣だけでなく、ヤツも驚いているかも知れない。

「高野です」

オレは構わず返事をした。

《ま、まずは…高野選手は今回大変な事故に遭われたわけですが…現在のお加減はいかがですか？

「お蔭さまで、一時は生死をさまよいましたが、何とか死なずに済みました。先日、無事手術も終わり、リハビリを始めたところです。このような状態ですが、口だけはよく動くので…みつともない格好で失礼します。」

《ファンの皆さんは復帰を楽しみに待っていると思います。

お世辞にも『お元気そうでなによりです』…などとは言えまい。

「そうですね…1日でも早くピッチに戻れればと思っております」

《さて、こちらには夢野つばさんがいらっしやっております…オリン

ピックの様子はご覧になりました？

「はい」

《つばささんのプレーはいかがでしたか

「個人としては、よくファイトしたと思います。決められたところ、決められなかったところ、色々あると思いますが、冷静で浮き足立ってもしなかったし、気合負けもしていませんでした。まあ、僕は出場さえしていないので、偉そうなことはいえませんが」

《ご自身は不幸なアクシデントがあつて、そういうことになってしまったわけですが、その想いをつばさんに託したという感じですか？  
「いえ、それはいいです。『こつちのことは気にしないで、暴れてこい』と伝えまし。ただ彼女の方が、それを背負い込んでしまったのかな…とは思いますが」

《それはどのような部分で？

「…本番前に、皆さんが騒いだことじゃないですかね？」

《具体的にお願いします。

「ひとつは私と彼女の関係について。もうひとつは私が二股を掛けているのではないかということについて。まあ、今日はこのことについて…今流行の『説明責任』…って言うんですか？それは果たしに来ました」

《なるほど、では順番にお訊きします。まずつばさんとのご関係を、改めて。つばさんは『大切な人』とおっしゃいましたが

ここでモニターの画面が分割され、右にオレ、左にはヤツの顔が映し出される。

『憧れの人』ですかね」

向こうの報道陣のリアクションが「えっ？」て感じになった。

そしてヤツは「ぷっ」と吹き出した。

お互い意外な回答だったのだろう。

《憧れの人…ですか？

「まあ、みなさん、ご存知だと思いますが…私は小学校のとき、彼女と同じクラスでした。その時から彼女はバレーボールのエースで、背も高く、頭も良くて、明るくて『スター』でしたから。…で、そのあ



と、モデルやつてアーティストやつて…サッカーでも代表になって…  
そんな人生、憧れませんか？普通できないですよ」

《確かに華々しい経歴ですね。  
「当時から精神的にも、大人びてましたし…頼りになる女性だと思います」

《尻に引かれてる感じですか？

「…彼女のイメージがあると思うので、そこはコメントを控えさせて  
頂きます」

「そう言うと、肯定してるみたいでしょ!?対等ですよ」

…あ、今、ちよつとバカップルっぽかったな、オレたち…

《普段はなんて呼ばれているんですか？

「…彼女の本名の…下の名前ですね。『夢野つばさ』で呼んじやうと、  
どうしても芸能人感が出ちゃって、余計な気を使うので」

…この場で『チヨモ』と呼んでいることを明かす必要はないだろう  
…

《つばささんは？

「高野くん…です」

…うそ付け！思いっきり呼び捨てで『りさと』じゃねえか!!…

と表情を変えず、心の中で笑ってみる。

《つばささんは、高野選手を大切な人とおっしゃってます

「そうですね…彼女がサッカーをやりたいから、教えて欲しいと言わ  
れて…最初は師匠と弟子みたいな関係だったと思いますが…覚えが  
良すぎて、あつと言う間に教えることがなくなりました。本当にそこ  
はすごいなと思います、今はお互い刺激を与え合うというか…切磋琢磨

磨している『良きライバル』って感じですかね。

《つばささん、大切な人というのは、そういう意味でよろしいんでしょうか？》

「はい…まあ」

《というと、お互いに恋愛感情はないと？》

「恋愛感情ですか…」

つばさは言葉に詰まった。

恐らく同じことをオレも同じことを考えている。

「恋愛感情？」

助けを求めるように、その言葉を繰り返し、ヤツがカメラ越しにオレに問いかけてきた。

「実はそこどころ、僕たちもよくわかってないんですよ。いわゆる普通の彼氏・彼女の関係かと問われると、実はビミョーなところ…。そもそも何をもってそう言うか、その定義がよくわからないので」

《お互いの将来について考えたりということは？》

「ないですね」

「はい、今はまだ何も」

「なので『熱愛』みたいな表現はちよつと違うかな…と。仲良くしてるのは事実ですけど」

《結婚については、どうお考えですか？つばささんからお願ひします。》

「まだ、考えていません」

《高野選手は？》

「同じく。彼女は、その時々で頂点に立ってますけどね…僕はまだサッカー選手として…言ってもチームではレギュラーでも何でもありませんから…。まあ、もし『彼女と結婚するのであれ』ば、それなりに結果を残さないと『格差婚』とか書かれそうですし、それはちよつと本意ではないので、時期が来るまで当面ないと思います」

『格差婚』という言葉に、報道陣が苦笑した。

単純にサッカー選手としての収入は、オレの方が多い。

しかし、トータルで言えば、スポンサー契約の数は10倍くらい違うし、なんと言つてもアーティストとしての印税が入るから、ヤツのほうの方が明らかに多い（実際いくらもらっているかは知らないが）。

オレが海外でも移籍しない限り、そこはなかなか追い越せないだろう。

《…と、おっしやってますが？

「私は…そこは、それほど気にしてません」

と、ヤツは少し微笑んだ。

《先ほど家族ぐるみというような発言があつたかと思いますが。高野選手、ご両親はどう思われていますか？某テニスプレーヤーの場合、かなりお父さんが反対したりしてますが？

この質問にはドツと笑いが起きる。

「よそのことは知りませんが、関係は良好だと思えますよ。少なくとも僕のお金で買い物とかしませんし…って、彼女の方が稼いでいますから」

オレの返しも、なかなかシニカルだろ？

《改めて、今後のお二人の仲は、どのように進展していくのでしょうか

「まあ、今、話した通りですね。我々もわかりません。成り行きの中で一緒になることもあるかも知れませんが、そうじゃないかもしれないかもしれませんし…」

「はい。静かに見守って頂ければ」

《話しが少し戻りますが、高野選手がこのような事故にあつて、オリンピックのプレーには影響がありませんでしたか？

「ないといえば嘘になります。やはりすごくショックでしたし、そこは2人の共通の目標でもあつたので…」

そこで一瞬、ヤツの言葉が途切れ、下を向いた。  
様々な想いが胸をよぎつたのだろう。

《つばささん？

「すみません…そうですね…一時是最悪の事態も考えましたから…それは…。…ですが、意識が回復してからは、彼も私に余計な気を使わせないよう、気丈に振舞ってくれましたし…本番前だけです、少しナーバスになったのは。試合中はプレーに集中していたので、そこは影響なかったかと思えます」

《オリンピック期間中、高野選手が女性を病室に連れ込んだとの報道もありましたが、それについては…つばささん、いかがですか？

「特になにも…。その人は一緒に事故に巻き込まれた方で…。私が彼を見舞いに行ったときに、初めて顔を合わせたのですが、すぐに仲良くなりまして…。それで私の方から『留守をお願い』していったので、報道されているようなことは事実ではありません」

《であるならば、なぜその時にそういうコメントを発表しなかったのですか？

「それは、サッカーに集中したかったからに決まってるじゃないですか」

オレの少しだけ強めの口調に、報道陣が静まり返った。

くつづく

## 直接対決！

ここまでの話は『オレたち自身のこと』であるし、いずれバレたであろうから、まあ、仕方ないと思っていた。

しかし、この先の話は違う。

まったく無関係な人が巻き込まれているのだ。

ジョークなど必要ない。

「今、話があった通り、報道された人は、僕とともに事故に巻き込まれた被害者です。幸いにも彼女は掠り傷程度で済みましたが、心に負った傷という点では僕と変わりません…。そして、その人が見舞いに来てくれたのは事実ですが、そのを行為を否定するような記事に対しては、強い憤りを感じています」

「同感です」

モニターの向こうでチョモが頷いた。

『しかし、私の取材に対し、その人は「命の恩人以上の何か」を心の内に秘めていることについて、否定しませんでしたよ？」

…私の取材に対し？…

オレは…姿は見られないが、その声の主が誰だか悟った。

「…なるほど…あなたが週刊 新文の柏木さんですか…」

『私をご存知とは…光栄です。』

「さつき退席させられた『セクハラ記者』は別として…あなたもちよくちよく失礼な質問をしていましたね？ 気にはなっていましたか？…そこにいるとは…」

『いますよ、当然。』

「まあ、それならそれで、話が早いです。あなたにはいろいろ言いたいことがありますし、その為にわざわざこの会見を開いたようなもの

ですから」

《おもしろい…どうぞ。

「先ほども言いましたが、僕と彼女は共に被害者という立場で顔を合わせています。それはそこにいる夢野つばさも承知してますし…当然疚しいことなどもししていません。もつとも、この身体じゃ、したくてもできませんがね…」

思いつきり皮肉を言っただけ。

「記事には夢野つばさが不在時に面会しようとしたことについて『泥棒猫』のように書いてありましたが、そうだった経緯(いきさつ)は、さつき彼女が述べた通りです」

「そうです。私が彼がヒマをしていると思うので、話相手くらいになつて頂ければ…とお願いしました。それが軽率だというなら、謝りますけど」

「それに、その人は有名なスクールアイドルの元メンバーだったかもしれないませんが、今は普通の大学生です。一般人を無理やり巻き込むようなことは、やめませんか？」

《しかし、その一般人が、高野梨里、夢野つばさ、アクアスター、ALISEとコンタクトしているのです。興味があるじゃないですか…『何が起きてるんだろう』ってね。だからこそ、記事として成立するのです。我々は新聞記者ではありませんのでね、中立・公正の報道なんてことに興味がないんですよ。読者の知りたいことを代わりに取材しているだけで…。偏った考えであっても、それを見て読者が是非か、判断の材料にしてみらえればいい。

「つまり嘘を書いてもかまわないと？」

《嘘は書きません。ちゃんと取材に基づいて記事にしていますよ。ただし、その結果事実と違うことがあるかも知れませんが…。なるほど、今回の『園田海未』さんの件はおっしゃる通りかもしれませんがね。でしたら次号で訂正を入れましょう。

…ここぞでわざわざ固有名詞を出してきやがった！…

…卑劣な野郎だ…

会見は、急遽、オレとコイツとの1対1の対決の場となった。

《では、せつかくなので、私もこの場を借りて質問を。まず、サッカーの男子代表も残念ながら予選リーグ敗退となりましたが、この結果をどう思われますか。

…急にまともな質問をしてきた…

…何か意図があるのか？…

「1勝1敗1分で4チーム並んだわけですから、実力は拮抗していたと思います。できれば決勝トーナメントに進んで欲しかったです」  
オレは言葉を選びながら、慎重に答えた。

《高野選手が出ていれば、勝てたと思いますか？

…なるほど…

…オレを挑発して、失言を引き出そうって腹か…

「勝負の世界に『タラレバ』はありませんから、僕が出ていたとしても結果がどうだったかわかりません。ですが『オレが出てても結果は同じですよ』なんていう選手は、いないんじゃないですかね？」

《活躍する自信はあった…と。

「さつき、彼女に対し、あなたが言ってたんじゃないですかね？『もつとガツガツいかないと』『気合いが足りないんじゃないですか』って。出るからには、自分を信じて闘うでしょ…それは。

《代役として入った本間選手のプレーは、どう映りました？

「僕は評論家じゃないんで、その件についてはコメントを控えさせていただきます」

《つまり、評価に値しない？

「煽りますねえ。…一緒にプレーもしていないので、他人のことをとやかく言う資格は私にはありません。それに…勘違いされてるかも

知れませんが、サッカーは個人競技ではありません。総括すべきはチームとしてどうだったか？で、個々ひとりだけの問題ではありませんよ」

これは常々俺が言っていること。

代表メンバーから外れるとわかった時にも、一番始めにそう思った。

『私はね、やはり高野選手がいなかったのは大きいと思うんですよ。なんと言ってもチームの中心人物だったわけですから。ただ単に選手が1人代わったということではなく、それによって戦術から連携まで、大きく変わってしまう…これが響いたと。』

『個人的に…そういう評価をして頂けるというのは、サッカー選手として嬉しいことではありません。しかし、自分の実力は…ひとまず置いておいて…今回の戦いにどれくらい影響があったのか…まあ、迷惑を掛けたな…とは思いますが…そのあたりは監督や代表メンバーに訊いてください』

『ズバリ、戦犯はあなただと思いますよ、高野さん。』

「！」

…戦犯？…

オレの心の中で、何かがざわめいた。

『あなたが怪我さえ負わなければ、こうはならなかった。夢野つばさ選手も精神的なダメージを受けることがなく、もつといいパフォーマンスで試合に臨（のぞ）めたでしょう。つまりあなたは男女とも…予選敗退の元凶となったことになる。』

…何を言い出すんだ？…



「ふう…随分な極論をぶつこんで来ましたね…まあ、怪我をしたのは自己責任ですし、否定はしませんけど…戦犯とは言葉が過ぎませんかね？」

≫一緒に巻き込まれた園田さん、それと目撃者等の話によりまして…あなたは突っ込んできた車を避けられたにも関わらず、事故に遭われた。なぜ、逃げなかったのですか？

…ああ？…

…質問の意味が理解できないんだが…

「そこに逃げそびれた人がいたからです」

≫フッフ…『そこに山があるから』…まるで登山家みたいなセリフですね。

「笑うポイントではありませんか？」

≫それで、その逃げ遅れた人が園田さんなんですよね？

「あの…いいかげん、固有名詞を出すのはやめませんか？彼女には何の罪もない！」

徐々にオレの語気が荒くなる。

≫つまり、そうなのですかね？

「何が言いたいんですか!?!」

≫あなたはたった一人の女性を庇ったことにより、自分自身のサッカー選手としての将来を棒に振っただけでなく『日本国民の夢』『男女の決勝トーナメント進出』そしてその後発生したであろう『何百億円という経済効果』…そういういったもの全てを消してしまったのです!!これは日本国に対する背信行為でしょう!?!

「!!」

…大丈夫か、コイツ!?!…

目の前にいたら、ぶん殴っていたかも知れない。

いや、心の中では、ヤツの顔面にストレートをヒットさせていた。だがコイツはモニターの向こうだ。

それが救いだっただ。

そうでなければオレは暴力事件を起こして、警察のお世話になっていたかも知れない。

もちろん、目の前にいても、今のオレには力いっぱい殴ることなどできないのだが。

退席したセクハラ記者：アイツの方が数倍マシに思えた。

うつすらと『暴論だ！』とかいう声と、会場が騒然となっている様子が伝わってきた。

「目の前に困っている人がいた…。本能的に身体が動いた…。ただ、それだけのこと…」

オレの心の中のざわめきが、音を立てて大きくなっていく。

《偽善ですよ、それは。

「偽善？…彼女が…轢かれればよかった…とでも？」

《自分の身は自分で守るものです。他人を庇って自らが命を落とすなんて、本末転倒ではありませんか。美談でも何でもありませんよ…

「ふざけるなあ!!」

オレは腹の底から叫んだ。

マイクを通じて拾った声は、ハウリングを起こしたであろう。

こんな怒りは、生まれて初めてかもしれない。

事故に遭って怪我の状況を知った時ですら、こんな感情は出てこなかった。

いや、ずっと抑えていた…隠していたのかもしれない。

どこかで爆発させたかった…のかもしれない。

でも、できなかつた。  
それがここにきて起爆剤に点火した。

「悪いのは、車を運転していたガキじゃねえか!!同乗していた女子じゃねえか!!その親だろうが!無免許でも運転できる車だろうがあ!!日本経済の損失?知ったこっちゃねえよ!そんなことを考えながらプレーしてる選手は、ひとりもいねえよ!!」

「た、高野くん!!」

オレの傍で見守っていてくれた代表の広報…小野さん…がオレを止めに入る。

『あなたは加害者のことをどれだけ知っているのですか?なんの根拠もなしに、そういうことを言っているんですかね?』

「ああ!?加害者の事情だあ?知るか!」

「高野くん、もういい!相手にするのはやめなさい!…おい、会見は中止だ。回線を切れ!!」

「小野さん!!」

「わかつてる!気持ちわかる!だが、これ以上付き合っちゃいけない!」

「うおおお!!」

オレは荒ぶる感情を抑えきれず、机の上にあつたマイクやらボイスレコーダーを全て払い落とす。

勢いでオレも車椅子から落ちた。

落ちてなお『欲しいものを買ってもらえない駄々っ子』のように、手をバタつかせた。

オレは看護師とスタッフに『取り押さえられる』と、そこから意識がなくなった。

どうやら鎮静剤を射られたようだった…。



## 目指すべき場所

気が付くとオレはベッドの上にあった。  
目を開けると、見慣れた病室の天井が見える。

…夢か…現実か…

夢であって欲しい…そう願ったが、残念ながらそうではなかったよ  
うだ。

「よっ…と…」

オレはベッドの横にセットされているボタンを押す。  
上半身がゆっくりと起き上がる。

「あっ…」

そこにはオレを取り囲むように、知った顔が並んでいた。  
親父、おふくろ、小野さん、チヨモとそのお母さん…。  
みんな椅子に座っている。

「起きたか？」

と親父の声。

「ああ…残念ながら目が覚めた…。ずっと寝てた方が良かったか？」  
「バカいえ。まだお前の葬式を出すつもりはないぞ。もっともつと稼  
いでもらって、父さんたちを世界一周の旅行に1回や2回、連れてつ  
てもらわないと」

「…つつうか、どうしたの？みんな集まって…この雰囲気ですでに葬  
式みたいなんだけど…」

「そりゃ、病室でドンチャン騒ぎするわけにはいくまい」

「まあ、確かにそうだけど」

「で…何しに？」

「様子見だ。あんな姿見たら、さすがに心配になるだろう…」

「そっか…すまなかつたな…それにしても、わざわざ…チョモもおばさんも」

「私は別に…」

「私も。ほら、職場が南青山じゃない？帰り道に寄っただけだから…気にしないで」

「すみません…なんか…。冷静に対応したつもりだったんだけど…」

「大丈夫よ、誰も高野くんが悪いなんて思っていないから」

「誰だってあんなことを言われれば、そうなるさ」

「小野さん…ご迷惑をお掛けしました」

「あははは…たいしたことないよ、これくらい」

「あの後は？」

「会見はあそこで終了！」

「…でしようね…」

「まあ、高野くんも言いたいことが言えたり、良かったんじゃないかな…あれで」

「キミも…相当溜まってたんだね？あんなに恐い顔、初めて見たかも…」

「そうだな…ストレスはあったんだと思うけど…」

本来オレは平和主義なんで、争いごとは嫌いなんだ。

「ちよつとみんな、ビックリしてたよ」

「みんな？」

「あの場に居たから、女子代表」

「いたんだ？」

「あの部屋じゃないけど…。沙紀なんか号泣しちゃって…」

「なんで？」

「キミが『壊れた』と思ったんじゃない？」

「壊れてるのは、アイツの頭人中だろ！」

思い出すだけで、ふっふつと怒りが沸いてくる。

「まあ、人それぞれつつうことだ」

「親父…」

「お前と、あの記者と、どちらが正しいかは世間が判断することだ。それで、お前が負けるようなら、この世の終わりだけだな…」

「…ならいいけど…」

「さて、それじゃ帰るとするか？」

「あん？なにしに来たんだよ？」

「決まってるだろ。『父さんたちはお前の味方だ』。それを伝えに来た」

「それだけのために？」

「それが親子つてもものよ。あなたがいくつになっても、親は親なのよ」

「おふくろ…」

「まあ、じゃあ、そういうことだから」

親父はサツと右手をあげた。

…軽いなあ…

「えっ、ああ…」

「藤さん、たまには一杯いきますか？」

親父がチヨモのお母さんを誘った。

「そうですね、お腹も空いてきたので…一緒にしようかしら」

「どうですか、小野さんも」

「いいですね！でしたら、この近くにいいお店が…」

「じゃあ、またな」

「リハビリ頑張ってるね」

「また来るよ」

そう言っつて、彼らは次々部屋を出て行った。

「おいおい！って…ま、いつか…ん？チヨモ、お前は行かなくていいのか？」

「出て行って欲しい？」

「えっ？あ…いや…」

「久々に顔を見たんだよ。もう少し一緒にいたっていいでしょ？」  
「…そうだな…」

部屋の奥にいたヤツが、ベッドの隣へとやってきて、オレの顔をじっとみた。

「痩せたね」

「そりやあな…ああ、チヨモ…オレ、言い忘れてたよ」

「なにが？」

「もうちよつとこつちに来て…聴こえないと困るから」

「充分聴こえるけど」

と言いつつ、ヤツはオレの口元に顔を寄せた。

「！」

反射的に、オレはヤツの唇に自分のそれを重ねていた。

怒るかなとも思ったが、ヤツは黙ってそれに応じてくれた。

久々に交わすキスだった。

「薬くさいよ」

照れ隠しなのか、唇が離れた瞬間、ヤツはそう言った。

「ムードのないことを言うねえ」

「まあ、仕方ないけど」

「チヨモ…」

「ん？」

「…お帰り…」

「うん、ただいま!!」

そう返事をする、今度はヤツからオレに抱きつきキスをした…。

「なあ、チヨモ…溜まってるのはストレスだけじゃなくて『コツチも』  
なんだけど…」



と、オレは下半身を指し示す。

「調子に乗るなっ！」

ヤツのデコピンがオレの額を捉えた…。

「どうだった、オリンピックは？」

「会見でも言ったけど、始まる前の方がナーバスだったかな。余計なこと考えちゃって…。それで沙紀に怒られちゃったの：『集中しろ！』って。叩かれちゃった…」

「へえ、熱いねえ！」

「うん。沙紀はねえ、普段はおしやべりだけど、サッカーに対する姿勢は凄く真面目で：精神的にも支えてくれて：頼りになるんだ」

「そういう仲間に巡り合えて、良かったな。彼女は闘争心あるし、タフだし：まだまだプレーに粗さがあるけど、これからも長く女子を引っ張っていくんだろうな」

「うん。私もそう思う…」

「チヨモは試合、集中してたな。すごく冷静で。あの超ロングのループシュートを見て思ったよ。『ああ、やっぱコイツすげえなあ…』って」

「ホント？ありがとう。まあ、どこでやっても、サッカーはサッカーだから」

「おっ！一丁前のことを言うねえ…。でも、なかなか普通はそうは思えないもんさ」

「そうかな？むしろアジア予選の方がプレッシャーあったよ」

「ああ、それはわかる。今やオリンピックもワールドカップも『出て当然』と思われてるからな。：それより肩の具合はどうだ？」

「うん、だいぶ痛みは引いたかな」

「正直、ファールだったべ？」

「ブラジル戦の話でしょ？アレね…うん！絶対わざと膝を入れてきた」

「やっぱり？」

「でも、それでPK取れなかったことより、肩を痛めちゃった方が悔しくて…」

「断言しよう。ブラジル戦は別としても、2戦目、3戦目はお前がベストなら絶対勝ってた」

「絶対はないよ」

「フランス戦はあれだけ荒れた試合だ。ちゃんと獲るべき人が獲ってれば、ああはならない」

『タラ・レバ』の話をしてもしようがない…つてさっきの会見で言っ  
てなかったっけ？…もう結果は出ちゃたんだし…」

「バカ、あれは建前だ。男子だってオレが出てりやあ、今ごろ、まだ現  
地で試合してるよ！」

「うん、そうだね…」

ヤツは視線を落とす。

「はい、はい、暗い顔をしない。そんなこと言っても仕方ないんだか  
ら」

「…わかってるけど…」

「そういえば、最終戦…はるかちゃんめぐみちゃんが応援に行っ  
たな」

「1回会っただけで、随分、馴れ馴れしい呼び方じゃない？」

「あとA—L—I—S—Eだっけ？」

「それと、浅倉さくらと…μ、sの皆さん」

「μ、sの皆さん？…確かに、園田さんからは『応援に行きます』つて  
事前連絡があったけど」

「全員で応援に来てくれたみたい」

「全員？」

「9人全員」

「へえ…そうだったんだ。中継でき、何度も何度もはるかちゃんたちが映ってたよ」

「みたいね。あとから聴いたわ。で、その前の席で横断幕を持って座ってた人たちが、μ s…。結構ツイッターとかフェイスブックとかで話題になってるわよ。『奇跡の集結』ってね」

「なんだ、それ？」

「ほら、A—LISEとμ sはファン同士が争ってたし、μ sはμ sで不仲説みたいなのがあったでしょ？」

「あの記事か！」

真相は園田さんから聴いている。

「そんな問題を払拭するくらいに『豪華な顔ぶれが一同に集まった』って」

「詳しいな」

「それは…ね…」

「園田さんはオレも『あつ！』ってわかったけど…それがさ、すごいショートカットになって!!」

「それも結構話題になってるわ」

「本当、詳しいな」

「逆に、キミがそういう情報に疎すぎるのよ」

「…なのかな?…」

「なくんて…。正確なことを言うと、ちゃんと、はるかどめぐみから連絡があったのよ。さくらとA—LISEと応援に行くよ!…って」

「なんだ、そういうことか」

「ただ、μ sが全員集まることは想定外だったみたいで…。こつちは試合に負けて落ち込んでるのに、メチャクチャ高いテンションで『チヨ—興奮した!!』って、報告があったわ」

「あははは…」

「そのメッセ—ジ見たら、なんかおかしくって…ちよつとは楽になったかな」

「空気読めってか?」

「でも、やつぱり…日本に帰ってきて、サポーターのなんともいえない

顔を見たら…悔しくて、悔しくて…」

「負けて平然としている方がおかしいさ…」

「うん…そうだね」

「チヨモはよくやったよ、いや女子はよくやったよ」

「うん…うん…」

「続けるのか？サッカー…」

「えっ？」

「これで満足したわけじゃないだろう？」

「あ、うん…実はまだ、終わったばかりで、あんまり考えてないの…。考えてないっていうか、考えられないっていうか…」

「目指せよ、ワールドカップ」

「えっ？」

「3年後…」

「それは知ってるけど…」

「多くの競技でさ、世界選手権ってのがあって…」

「何の話？」

「『その競技の世界一』を決める大会なのに、どういうわけか日本では、オリンピックの方が価値が高いんだよ」

「？」

「『世界陸上』『世界水泳』『世界体操』『世界卓球』『世界柔道』…数え上げたらキリがないけど、そこで優勝することよりも『オリンピックでの優勝』の方が称えられる。『霊長類最強女子』って呼ばれるあの選手だって『世界選手権』を十回連覇したってことより、オリンピック3連覇の方が『偉業』って思われてるわけじゃん。まあ、この場合、毎年毎年行われる大会より、4年に1回行われるオリンピックのメダルの方が希少価値が高い…って見方もできるかもしれないけどさ」

「だから何が言いたいの？」

「サッカーだけは別なんだよ」

「えっ?」

「サッカーの世界大会…ワールドカップは、オリンピックより『位(くらい)』が上なのさ。女子は年齢制限ないけど…男子はU-23までだろ。オーバーエイジ枠つてのはあるけど」

「う、うん」

「だから、次の戦い…ワールドカップを目指して、世界一になってこい! って言ってるわけ」

「そういうこと? 説明が周りにくいよ」

ヤツはやつとオレの意図を理解したようだ。

「目標はあった方がいい」

「そうだね…でもさ…少し休ませて…。さすがに…疲…れ…た…」

ヤツはバサツとオレの身体の上に倒れこむと、そのままスヤスヤ眠ってしまった。

ヤツの上半身が、オレの太ももあたりに圧(の)し掛かる。

「おーい…起きろ…」

と小声で呼んでみる。

気持ち良さそうに寝ているところ、起こすのも悪い気がした。しかし、ここで寝られても困る。

「おーい…起きないとエッチなことしちゃうぞ…」

反応なし。

…マジ寝かよー…

…まあ、放っておくか…

仕方ない。

ベッドをフラットな状態に戻し、オレも一眠りすることにし

た。

〜  
〜  
〜

悩みは尽きないのです…

オリンピック観戦後、一泊して観光を終えた（花陽を除く）μ、s一行が日本に戻ったのは、高野梨里と夢野つばさの会見の翌日だった。

5年前、海外ライブから帰ってきたときは、自分たちが知らないうちに『スター』となっており、空港に着いたとたんサイン攻めにあっ

た。

それに較べれば、今回はあまりにも静かな帰国である。  
「ふん！『小庭沙弥さまとその仲間たち』が戻ってきたっていうのに、随分寂しいじゃない」

とここ。

もちろん、本気で言っているわけではない。

しかし、彼女たちも、A—L—I—S—Eたちと一緒に観戦していたことが、国内で話題になっていることは知っている。

ここはそのあたりを加味して「もしかしたら」と思ったようだ。

もつともこれは『μ、sへの関心が薄い』ということではない。

前回と違い派手なライブを行ったわけでもないし、仮に彼女たちに気付いたとしても『今は一般人であるメンバー』に、サインや写真をねだるといふのは、どうなんだ？…という話である。

「あつーμ、sだ…」くらいに、遠巻きに眺めるのが『極めて常識的な反応』と言えた。

それよりもなによりも『昨日の今日』ということもあり、街中は『その会見』の話題で溢れていた。

2人が語った内容もさることながら、やはり『放送事故』ともとれる…高野が暴れて、会見が打ち切られた…という前代未聞の事態はインパクト大だったようだ。

当然、このことはすぐに、sのメンバーの目にも耳にも入った。

…高野さん…

海未は今すぐにもでも駆けつけたいと思ったが

「ちよつと、様子を見た方がいいんじゃないかな？あれだけ高野さんが無関係って強調してくれたんやから、今、行くのは逆効果やと思うやけど…」

と希に止められた。

…そうですね…

…そうなのですが…

海未はその助言に従うことにしたが、納得したわけではなかった。

希だって、海未の気持ちが変わらないではわけではない。  
むしろその想いは痛いほどわかる。

だけど、今、直接逢いに行くのは得策ではない。

希たちメンバーが彼女たちなりに全力で海未を守ったように、高野も精一杯海未を守った。

だが、その中で、新たに彼女を不安にさせる要素が発生してしまった。

…いい感じで、危機を乗り切ったと思っただんやけどなあ…

希が心の中で呟いたこと…それは他のメンバーも感じていた。

「だったら現地に行って、夢野つばさを直接応援したらいいんじゃない？」…そう言い出したのは真姫だった。



それを聴いて、往復の飛行機と観戦チケットの手配をしたのは希。しかし彼女は、それだけでなくA—L I S Eにも声掛けをしていた。

そして、その話がA—L I S Eからアクアサクラスターへと伝わった。

当初は『ただただ真剣につばさの応援をしよう!』と始まった計画だが、そこにμ、s みんなで行くことにより、不仲説が払拭できるのでは?という想いが重なった。

さらにA—L I S Eと合流することにより『海未ひとりが抜け駆けしようとしている』という、間違った情報も正すことができる…と考えた。

加えてμ、sとA—L I S Eの距離感を示すことにより、お互いのファン同士の『不毛な争い』に終止符が打てるだろう…とも思った。

アクアサクラスターの3人が合流したことは『嬉しい誤算』『スペシャルボーナス』みたいなものだが…彼女たちが加わったことにより、このツアーの価値は一段と高まった。

試合後、A—L I S Eの綺羅ツバサが、サポーターとの写真撮影の依頼に、心地よく承諾したことも、全ては先述した計算に基づくものだ。

いや、こういう書き方をすると、極めて狡猾的な印象を持たれるかもしれないが…そもそも両者にはなんのわだかまりもないので、純粋にこの騒動を終息させるべく最善の策だったと言えよう。

そして、それが奏功し、もはや2度と見ることがないであろう『μ、s、A—R I S E、アクアサクラスターの』スリーショット』が『奇跡の集結』と呼ばれ、大きな話題になっているのだった。

一部…本当にごく一部だが…それでも、それを信じていない連中がいる。

『アキ過ぎ』『八百長』『作られた真実』『情報操作』…彼らはそんな言葉

それはそれで、仕方のないことだ。

100%『右向け、右!』などという世界は存在しないのだから。

ちなみに、その写真の中に「『夢野つばさがいれば完璧』だったのにな」という声も多く見られる。

それは、実は彼女たちも思っていたことである。

一方で…

「建物は完成と同時に崩壊が始まる」という伝承を例に挙げ「最後の1人が加わる『解散への序章』だとし、これはこれでいいのだと主張する者たちも少なくない。

『奇跡の集結』が『奇跡の終結』になってしまう…。  
なるほど、言い得て妙だ。

いずれにしても『週刊 新文』の記事の…海未に対する疑惑…その半分は誤り…捏造であるということは、概ね解決することができた。  
残りの半分は『高野梨里』と『夢野つばさ』が会見で明かした通りだ。

高野と海未は、以前からの知り合いでも、付き合っていたわけでもなく、偶然その場に居合わせた被害者であり、彼女は事故に関しては何の非もないこと…。

病室への訪問は、純粋に命の恩人の見舞いをしようとしただけで…併せて、それはつばさからも依頼をされていたこと…。

これで海未にまつわる問題は表面上、オールクリア。

会見があのような形で終わり…それはそれで、高野のことは心配ではあるのだが…しかし、これで海未を苦しめる『直接的な心の呪縛』は、ほぼ取り除かれた。

あとは…彼の復帰を待つしかない。

こればかりは時間が掛かる。

高野梨里がピッチの上で躍動し、輝きを取り戻した時、海未にも本  
当の安堵が訪れるのだろう。

こうして、ひとまず海未救出作戦は終息したかに見えた。

ところが…

この作戦にも副作用があった。  
あの話題が再燃したのだ。

それが『μ, sの再結成』である。

観戦前の時とは打って変わって、急に現実味を帯びてきた話。

『μ, sは内部分裂状態』『海未はA—L I S Eに合流か?』なんて言  
われていた彼女たちが、異国の地ではあるが、全員揃ったのだ。

ファンは…希、絵里、にこ、ことり、真姫、そして凜の当時と変わ  
らない姿に驚き…バツサリと髪を切った海未に驚き…いまや国内で  
見ることが難しいと言われる『天然記念物』の花陽の姿に驚き…記事  
の通り太ってしまった穂乃果に驚いた。

新文の記事などで、その近況を知った彼らも、SNSに挙げられた  
写真やオリピックの中継で見た『実物の姿』に、興奮を隠せないで  
いる。

ネット上では、それぞれのファンが、μ, s解散から5年余りの思  
いを書き込んでいく。

好意的なコメント7割、批判的なコメント3割というところか。

その3割は「想い出は想い出の中であるべき」というまとも(?)な  
意見もあったが、やはりというべきか「劣化した」だの「太った」だ  
の、逆に「変わってないのが気持ちわるい」だの「JKだから価値が  
あったのであって、B B Aになったμ, sに興味はない」などという

厳しい言葉が並んでいた。

そして、例によつて例の如く、自分の推しメン以外に対する、誹謗・中傷の類も散見された。

特に今回は穂乃果に対する風当たりが強い。

確かに体型は…であるが、今の彼女は一般人である。

その彼女を口汚く罵ることは、好ましいこととは言えなかった。

…とはいえ、大半はμ'sの活動再開を望んでいるらしい。

そんな話題は、すぐにファン以外の『部外者』にも飛び火した。

これまでそういうことに無頓着だった…あるいは本人の意図を汲んで無関心を装っていた周囲の人々も、やたらこの話題を仕掛けるようになってきた。

その問いに対しては

「どうかなあ…」

とお茶を濁すメンバーたち。

穂乃果などは、妹の雪穂からも「もったいぶらなくてもいいじゃん」などと言われる始末。

だが、誰もその答えを用意していない。

まだA—L—I—S—Eが誘ってきたチャリテイライブの話は誰も知らないが、μ's復活の機運が高まっているのは、メンバーもひしひしと感じているのだった…。

くつづく

海未たちの周りで急激に『μ s 再結成』の期待が高まっている一方で、高野の会見は、様々な方面に波紋を広げていた。

まず世間の関心を集めたのは『夢野つばさとの仲』…というよりは、どちらかというところ『高野梨里と事故そのもの』だった。

彼の…あの痩せ細った姿…あれは視聴者の同情を引くには充分過ぎた。

世間は…恐らくその前に出した『オフィシャルのコメント（高野曰く作文）』などのイメージから、もつと元気な姿を想像していたに違いない。

しかし実際は…

本人は「元気になってピッチに戻る」と言っていたが、とても樂觀視できる状況には見えなかった。

サッカーをすることはもちろん、日常生活さえままならないのでは…そんなことすら思わせた。

『再起不能』…

ネット上は、そんな文字が埋め尽くす。

これは誹謗・中傷…というよりは『現実的な話』とエクスキューズを付けた上で『仮に復帰できたとしても』以前のようなプレーは望めないだろう…という悲しみに満ちた声だった。

大怪我から復活するアスリートは、少なくない。

しかし、それ以前の…いやそれ以上のパフォーマンスを發揮した者がどれくらいいただろうか？

ましてや、高野はまだ若い。

これから絶頂期を迎えようとする選手だ。

その前に負った：選手生命を脅かさんとするほどの怪我。  
ファンならずとも悲観的になるのは、やむを得ないことだった。

そして妙に『口だけが滑らか』だったことも：表現が正しいかどうかはわからないが：カラ元気：痩せ我慢：そんな風にも感じられ、一段と視聴者の悲哀を誘った。

高野が、海未を救ったことを批判する者はほとんどいない。  
むしろ、その勇気と行動力を賞賛する声が大多数を占めている。

当然のことだが『新文の柏木』とのバトル：つまり『救助は間違いだった』『自分の身は自分で守れ！』：ということの是非については、高野に軍配があがった。

緊迫する某国との関係になぞらえて柏木の考えこそが『国防の原点だ』などと言う輩（やから）もいたが、それとこれとはまったく次元の違う話である。

事故をめぐる論点の、本質ではない。

今回の件は、高野が訴えたように『加害者が16歳であったこと』『（当たり前だが）加害者が無免許であったこと』『（死亡した）同乗者の責任』『車の所有者の責任』『親の責任』『メーカーの責任』等々、様々な問題を孕んでいる。

要は『誰が一番悪いのか』ということだ。

ここを追求していくことこそが、マスコミに本来の役割だろ！との声が大きくなる。

しかし、立ちはだかるのは…

『加害者の人権』という壁だ。

これが未成年であるだけに、尚、高くて硬くて厚い。  
今回も、そこがイチから問われることとなった。

これは何年も、何十年も繰り返されてきた、論議。  
だが、未だに結論は出ていない。

世論の大半は、高野支持だ。

信号待ちをしていた彼らには、何の落ち度もない。

悪いのは加害者であり『避けられなかった（避けなかった）方が悪い』などという論理は、どう考えても成り立たない。

ほんの一握り：加害者を『ガキ』と呼んだり、会見中に（挑発されたとはいえ）キレたことについて『高野の人間性を疑う声』が上がっている。

高野だって、やっと次の誕生日で21歳になる若造だ。

「デメエだってガキのクセに!!」というわけである。

だが逆に「悔しい気持ちがよくわかった」「キレて当然」「一緒に泣きました」などと、あの言動を好意的に受け止める声が、批判派を圧倒する。

そして…

加害者の素性を明らかにすべき！という声が一気に高まっていく。

それはつまり、運転手が未成年の為、公には氏名が公開されていないからである。

しかし、高野はそれを望んでいるわけではない。

わかったところで、彼らに加害者を裁くことなどできないのだから。

しかし…正確に言えば、既に運転していた少年と同乗していた少女は、ネット上で氏名も住所も特定され、顔写真まで公開されている。

両者とも、お世辞にも品行方正な容姿とは言い難い。

あえて『一番それっぽい』写真をピックアップしたのではないかと思われる。

「コイツならやりそうだな」と見た瞬間、誰もがそう呟くだろう。

我々の脳内に、彼らの普段の行動をイメージさせるには、それだけ

で充分だった。

ただし警察が公表しなければ、それが『本当に加害者なのかどうか』は、言い切れない。

万万が一、それが誤ったものであったら、それこそタダじゃ済まされない。

公共の電波でさえ、無関係な人物の写真を『犯人』として放送することがあるくらいだ。

一般人が警察や探偵の…あるいは必殺仕事人の真似事をするのは、あまりに危険だと言えた。

高野が訴えたかったのは『誰が、どう責任を取るのか』であって『加害者を晒し者にしろ』ではない。

世論に喚起を促した…ということについては一定の成果はあったが、そういった意味では、あの会見は若干言葉足らずだったかも知れない…と感じている。

彼が世間に投げた爆弾は、これだけにとどまらない。

あの会見では『同乗していた少女の責任』についても触れている。

「彼女がどこかで少年の運転をやめさせていれば、こうはならなかった…」というのが一般論。

「いや、それができるような輩（やから）じゃない」「同乗している時点で同罪」「結局、同じ穴の貉（むじな）だろ」と言うのはイメージ先行派の意見。

「少年に運転を強要したのが、彼女だった可能性もある」という者もいる。

少年が自己保身に走れば、そう主張することもありえよう。

いずれにしても、無免許運転の車の助手席で、事故死した少女に対して…『死んで当然』…とは言わないまでも『同情の余地なし』『自業自得』と世間の声は厳しい。



ところが、養護派も決していないわけではない。

「逆に少年の支配下にあつて、逃げられない状況にあつたのでは」…という意見もある。

なるほど。

百歩譲つて、そういうことも考えられなくはない。

「少年が無免許だと知らなかった」「そもそも『車の運転に免許が必要だ』ということ知らなかったんじゃないか」なんていう、冗談なのか本気なのかよくわからない意見もある。

あまりに馬鹿げている!!…と言いたいところだが…我々が『常識』と思つているだけで、そうじゃないとも言いきれない。

常識の外の世界で生きている人間というのは、少なからずいる。確かに…何をもって常識かなんてことは、人によって違うわけだ。

世の中には（これは2人に言えることだが）車を運転するのに免許が必要だ…ということ知らない16歳がいてもおかしくない。

そして、もしこの意見が正しければ、同乗していた少女に『瑕疵（かし）はない』ということになる。

いやいや、待て待て…やはりそれはそれで問題だ。

「無知は罪なり」。

16歳にもなり、そんなことすら知らないということは、充分、罪に値（あた）いするのではないか…。

もしそうであつたら、バカを世の中に曝け出しているようなものである。

これはこれで、個人（故人）の名誉に関わることだろう。

知つていたのか、知らなかったのか…。

死人に口なし…。

残念ながら、彼女の口から真相を訊く事はできない。  
ただどちらに転んでも、少女に対する評価はそう変わらない。  
今後2人に関しては主従関係のみが、争点になるのだろう。

「彼女にも親族がいる。死者に鞭打つような発言はいかなものか」と口を挟む者がいる。

それはそうかも知れない。

残された遺族は、悲しみにくれているはずだ。

例え娘に非があろうとも、親は親だ。

笑って手を振ることなど、できるはずがない。

いや、敢えてここは『普通の親なら』と言っておくべきか…。

しかし、彼女は被害者でもあるが、その前に加害者の可能性もあるわけだ。

親としては、ある意味、どっちつかずの辛い立場かも知れない。

だが高野からしてみれば、そんなことは関係ない。

親としての監督責任を問うていくことになる。

「何が原因でそうなったか」を解明しない限り、この事故（事件）の解決は見えない。

それを明らかにするのは、残った少年の責務である。

果たして少女は…あの世で何を思っているのだろうか…。

くつづく

## ビルの街にガオー

会見後：高野の新たな敵は、思わぬところから現れた。

彼の発言の中に：『メーカーの責任』：というワードがあったのだが、これに自動車業界が噛み付いたのだ。

「今回の事故について、我々には責任がない」

「車を移動ツールから凶器に変えるかどうかは、運転手の資質の問題であり、それを『メーカーの責任である』と訴えた高野さんの発言は看過できない」

とコメントを発表したのだ。

確かに：

意識回復後の『オフィシャルコメント』を作る際、代表の広報である小野が、高野に『交通事故については極力触れないほうがいい』とアドバイスしていた。

だが、まさか現実にこんな反論が出てこようとは考えてもいなかった。

高野が意図したところはもつと大局的な話であって、個々のメーカーを批判するつもりなど毛頭もない。

もちろん、自動車業界もそんなことはわかっているはずだ。

だが、誰かが焚き付けたのであろう。

高野が所属しているチームのユニフォームの胸には、堂々と親会社である『NASSAN』のロゴが入っている。

これを問題視した者がいたようだ。

つまり彼は、間接的に雇い主を批判した：というわけだ。

困ったのはチーム関係者である。

本来なら「不問に処す」と言いたいところだが、彼が今後、真剣に批判を強めるようであれば、なにかしらの処分も考えざるを得ない。

それだけにあの発言はスルーしてほしかつたのであるが、Jリーグでいえば他にも、浦和（三菱）、名古屋（TOYOTA）、広島（MAZDA）なども親会社（もしくはメインスポンサー）が自動車メーカーである。

海外に目を向ければ、SUZUKIやHONDAもスポンサーになっている。

そんな事情もあつてか、業界としては彼の発言を巡って「おかしな論議が起きないよう」先手を打ったということなのだろう。

ところが、今度はこの自動車業界の出したコメントが反発を招く。

交通事故で被害を受けた本人、または亡くなった人の遺族などで作る有志の団体が、声を荒げたのだ。

彼らにとつて、被害が大きかろうが小さかろうが事故は事故であつて、許せるものなどひとつもないかもしれないが、その中でも無免許運転や飲酒運転など『特に悪質な事故の被害に遭った人々』は、加害者に対して『殺しても殺しきれないほどの恨み』を持つていた。

『車を凶器に変えるかどうかは、運転手の資質の問題』というが、メーカーに責任がないというのは間違いで、彼らはそうさせないための努力を怠つてゐる。それは国も同じだ」

と主張する。

もう半世紀以上も前になるが…

「♪あるときは正義の味方 あるときは悪魔の手先…」

と歌われたのは鉄人28号だったか…。

感情を持たない機械（ロボット）は、操縦者の心ひとつで善にも悪にもなる…ということである。

業界の出したコメントは基本的にこれと変わらない。

正論である。

似たような言葉は、しばしばアメリカでも聴く。

銃の乱射事件が起きるたびに、規制だなんだと、その在り方が問題になるが、結局彼らはこの言葉の前に抵抗できずに終わる。

『銃が人を殺すのではない、人が人を殺すのだ』  
全米ライフル協会の標語である。

これを『銃』ではなく『車』と入れ替えてみるとどうだろう。  
なるほど両者の言っていることは同じである。

ただし、間違っちゃいけないのは、車は『火器』ではない。  
使用目的がまるで違う。

いかに安全にするか？を極めなければならない。

確かに、ここ数年の…自動運転、もしくは高齢者の（アクセルとブレーキの踏み間違いによる）事故などに対する技術革新…などは目覚ましいものがある。

ドライブレコーダーも普及し、事故の検証などには大いに役立っている。

『勝手に目的地に連れて行ってくれる車』も、夢物語ではなくなった。  
そのうち『運転免許』などという概念はなくなるかもしれない。

しかし、それはまだまだ先のこと。

車の開発は進んでいるが、法とインフラが追いついていない。

法とえば、道交法は性善説に立った上で施行されているが、今の社会、そんなものは破綻していると言っている。

ルールもマナーもモラルも「守られないこと」を前提にしなければならぬ。

悲しいことだが『正直者が馬鹿を見る』世の中なのだ。

高野は、会見のあと病室を訪れたつばきに対し

「チョモの親父さんのことも頭にチラついちまって…」  
と語った。

つばき…藤綾乃の父親も飲酒運転のトラックに撥ねられ、亡くなっ

ていた。

彼は直接、彼女の父に会ったことはない。

綾乃と知り合ったときには、既に故人であった。

彼女の父親も、何の落ち度がないまま、この世を去っている。

その無念たるや…。

綾乃もその母親も、何事もなく暮らしているように見えたが、立ち直るまでに相当の時間を要したことを、高野は付き合うようになってから聴いた。

あの時の叫びの中には、そんな想いも含まれていたらしい。

ちなみに：綾乃の父親を撥ねた加害者は、危険運転致死傷罪に問われ、求刑懲役8年に対し：懲役6年の実刑判決が下った。

刑期を全うしたのなら、彼女が高校に上がった前後には、出所していることになる。

綾乃の記憶によれば、加害者からは謝罪のような言葉はなく：反省している様子もなかったという。

そのような者に、こちらからアプローチする気は一切なかったようで、その後については不明だ。

当然ではあるが職場は解雇され、一家は離散した…と風の噂で聴いたとのこと。

果たして彼は、心の底から改心し、二度と同じ過ちを繰り返さないと誓い、日々過ごしているのだろうか。

それでも、まだ彼女たちは恵まれている。

加害者が大手宅配業者のドライバーで、業務中に起こした事故であったことから、多額の賠償金を得ることができたのだ。

金で、不自由になった身体や亡くなった人が帰ってくるわけではないが、被害者やその家族にも今後の人生がある。

『加害者憎し』の感情とは別に、生活を保証してもらおう権利はある。

その為の民事裁判だ。

しかし…今回の高野の事故のように加害者が未成年、無免許であれば、保険金などアテにはできない。

そうになると、通常はその両親へと責任が及ぶものだが…まだその少年の家庭環境などバックグラウンドは明らかにされていないが、果たして賠償金の支払い能力があるかどうか…定かではない。

支払いを命じても、自己破産されたらそれで終わりだ。

泣き寝入りするしかなくなる。

今回、声を荒げた有志は、そういう悔しい思いをしてきた人々の集まりだった。

「運転免許を差し込まなければ始動しない車」

「本人認証システム」

「ドライバーからアルコールが検知されたら始動しない車」

どれも今の技術的なら、そう難しくないとと思われるが、これまでそのような車は市場に出回ってはいない。

※自動車メーカーの飲酒運転防止車両については、開発はされているが実用化に至っていない。

※『アルコール・インターロックシステム』という後付の装置があるが、日本では設置の義務化はされておらず、普及率は極めて低い。

彼らはそこを指摘している。

これらが進まない一番の理由として「1台あたりの車体価格の上昇」が挙げられている。

製造コストが上がれば、それは車体価格に反映させざるをえない。若年層の自動車離れが進む中、メーカーにとって、それは死活問題となることは容易にわかる。

価格が上がることに對しては「そういったこととは無関係のユーザー」から、反発もあるだろう。

一部の無法者の為に、なぜ我々の負担が増えるのだ！と。

しかし、これは自分が不幸にならないため、自分が不幸にしないため：相互の理解を深めて必要がある。

これだけ長い間、飲酒運転が根絶されないのであるから、もはやドライバーのモラルだけに頼るわけにはいかない。

だからこそ

「（ハード面において）掛けられるストッパーは全て装備してほしいや、しなければいけないのだ！」

というのが、業界のコメントに反発した人々の主張なのである。

無免許、飲酒運転：ゼロにはならないだろうが、そういう車がないよりはマシ。

それでも抜け道を探して…あるいは車を改造したりして運転する者はいらるだろう。

だが、そこまでするのであれば、重罰も覚悟の上…：死亡事故など起こそうものなら、それはもう殺意を持った犯行だといっている。

つまり、そういうことだ。

高野が放った言葉の波紋は、じわりじわりと全国へ広まっていくのであった…。

くつづく



## 秘密諜報部員と少年A

会見から2週間ほどが過ぎた。

オレの発言を受けて、いろんなところから取材の申し込みがあるらしいが、今は全て断っている。

ちなみに『それ』は、直接オレに来るわけではない。

これまでは、オリンピック期間中だったこともあり、代表の広報の小野さんに諸々協力してもらっていたが…オレは芸能活動をしておらず、個人のマネージャーもないので…この間から所属チームの広報：『内館さん』…に対応を一任している状況だ。

自分が発言したことについては、なんの間違いもないと思っているが、匿名で書き込むネット上のそれとは違い、多少なりとも名前が知られている身だ。

良くも悪くも、それなりに影響力があることがわかった。

元々、こういうことがイヤでブログとかSNSとか、自ら余計な情報を発信していなかったワケだが、今後についてはより一層、言葉を選びながら…ということになる。

故に、しばらく落ち着くの待つとした。

それでも「発言したことに対する責任は？」とか詰め寄ってくる人もいるらしいが…「じゃあ、誤った報道を垂れ流すアンタら責任は？」と問いたい。

そういえば、今のところ『週刊 新文』から、訂正もなければ謝罪もない。

まるで『そんなことは報道していないかのように』あれ以降ダメージを決め込んでいる。

こつちが名誉毀損で訴えない限り、しらばっくれるつもりなのか？

まあ、オレとしてはそんなことで余計な体力を使いたくないんで、このままでも構わないんだが…この静けさが逆に不気味だ。

何か、新たなネタを仕込んでいる？そんな感じがする。

さてオレはといえば、世の中の喧騒をなるべく遮断し、今は自分のリハビリ（マッサージ）に集中している。

おかげさまで：寝たままの状態ではあるが：ガチガチに凝り固まって動かなかった脚は、何とか自力で曲げ伸ばしできるくらいまで回復した。

ベッドから車椅子に、ひとりで乗り移れるようにもなった。

上半身はまだ、負傷した首に負荷が掛かるから、あまり力を入れてはいけないとのことで、指先ひとつで移動ができる（コントローラーの付いた）電動車椅子が、当面のオレの相棒だ。

ようやく一歩前進って感じ。

これで看護師の手を煩わすことなく、気分転換に院内を動くことができる。

：とはいえ、病院で気分転換ができるところなんて、そう、ない。

せいぜい、屋上に行つて日を浴びるくらいが関の山である。

いや、それも大事なことなのだが。

：とうことで、美人の理学療法士さんとは、これでお別れということになった。

しかし、これといってオレたちの関係が進展することもなく、この日を迎えてしまった。

例えオレに彼女がいたとしても『頭の中だけであれこれ楽しむ』分には許されると思ってるんだが：それは勝手な言い分なのだろうか？

やっぱり、それでも浮気って言うのかな？

：という訳で、いよいよ明日から、気分も新たに本格的なりハビリが始まる。

そのリハビリと共に、並行して進めていかなければならないのが民事裁判の準備である。

加害者の少年の法的責任は、ある程度司法に委ねるとして：いわゆる『オレ個人に対する責任と補償は、誰がどう取ってくれるんだ!』って話である。

その指標になるのが、賠償金ってヤツだ。

残念ながら、こっちの方は、それで解決するしかない。

金銭で失われた時間が帰ってくるわけではないが、それ以外、やりようがないのだ。

当然ながら、オレにそんな知識はないので、弁護士はチームから紹介された『内館さん』を雇うことにした。

これまでも数多くのスポーツ選手の事件や事故等における訴訟、弁護に携わってきた、その筋のスペシャリストらしい。

チヨモからも紹介されたが『この件』は、その千島さんの方がいいだろうと判断した。

来週中にも打ち合わせをしたいと考えていて、日程を調整しているところだ。

で…

その加害者であるが：当然オレは警察から『名前だけ』は聴かされていた。

だからネット上で特定された少年の『氏名』が『正解である』と知っている。

正直、彼らの調査能力には感心させられた。

現場に居合わせなければ、顔すら確認することができないと思うのだが：何を基に調べたのか、よくもまあ、いとも簡単に身元を割り出したもんだ。

…レクサスのナンバーか？…

オレの乏しい推理能力では、それくらいしか思い付かなかった。正面衝突して、こつちに向かつてきた車が、黒のレクサスだった。オレはその時の様子をスローモーション…というよりは、コマ送りのフィルムのように覚えている。

園田さん突き飛ばし、ジャンプしたところまでは…。

…だとしても、素人がそんなに簡単に、調べることができるのか？

『オレと事故に巻き込まれたのが園田さん』だと特定された時にも感じたことだが、個人情報なんて言葉は『死語』なんだろう。

この少年も例外じゃない。

名前だけでなく、住所や顔写真のほか、ご丁寧に彼の素性まで晒されている。

これはこれで、由々しき事態だとオレは思う。

この少年が未成年であるため、彼の両親には監督責任があるとしても…（直接、事件・事故に関わっているなら別として、そうでないのであれば）二等親以上の人たちの生活に影響が出るのは問題だ。

事故に対してオレに同情してくれるのはわかるし、もし自分だったら…と憤る気持ちもわかる。

だが『裁く権利がない人』が、その親族についてどうこう言うのは、かなり筋違いだ。

度を越せば、逆に名誉毀損で訴えられる。

加害者を庇うつもりはないが、普段『プライバシーの侵害だ』などと叫んでるわりには『自分たちのことを棚に上げて…』と思うわけ…。

そうそう、プライバシーの侵害って言えば、気になることがある。TVの街頭インタビューとか野外ロケとかで、最近、通行人の顔にボカシが入ることが多い。

オレは、アレにすごい違和感を覚えている。

確かに、別に映してくれと頼んでいるわけではないだろうし、諸事情で絶対に映りたくない人もいるだろう。

スタッフもそこにいる人全員に声を掛けて、許可を貰うわけにはいかないのだから、ある意味『肖像権で訴えられないようにする為の自己防衛』だというのはわかる。

しかし、一昔前までそんなことはなかったのだから、一般人の意識が高まったということか。

そうになると、そのうちスポーツを見ている観客も、全員ボカシが入るんじゃないかと思う。

別に映りたくて行ったんじゃない、純粹に観戦に行ったんだと。

：そういえば、この間、ローカルアイドルが男性と野球観戦しているところを中継で抜かれて、問題になってたっけ…

今回のオリンピックでは、逆にA-LI-S-Eたちが上手くその辺を利用して、μ'sとの不仲説払拭に利用したわけだが…。

すまん。

すぐに話が横に逸れるのが、オレの悪いクセだ。

話を元に戻そう。

：で、何が言いたいか…っていうと、自分のプライバシーには敏感なくせに、他人のプライバシーについては、土足でドカドカと入り込んでくるヤツが多いってこと。

事故後、園田さんの名前を晒したヤツも同じ。

そのうち、強烈なしっぺ返しを喰らうのでは…と思ってる。

オレなりの忠告だ。

そんなお節介な彼らのお陰で、オレは少年の名前以外の情報を、警察に訊くこともなく得ることになる。

100%信じるわけにはいかないが、恐らく、それほど間違っちゃいないのだろう。

《少年の名前は『那須龍一』という。  
《16歳。

ここまではオレも聴かされていた情報。

この先は、ネットに晒されている話をまとめたものだ。

《幼少期に両親が離婚し、以後、母親に育てられる。

《しかし、その母親の再婚相手と反りが会わずに、中学から不登校に。

《その頃から、離婚前の旧姓である『青山』を名乗るようになる。

《時を同じくして恐喝や強盗未遂などを繰り返すようになり、何度か補導される。

《ただし、組織には属しておらず当初は一匹狼だったが、徐々に仲間が増えていき、地元では『青龍』の名で知られようになる。

《そして、この春から、建設作業員として働いていた…。

…ふうん…

…青山龍一で『青龍』ねえ…

…『成龍』ならジャッキー―||チエンなんだけどなあ…

オレは自分の名前にコンプレックスがある為、ついつい人の名前も気になってしまう。

…と言っても、別に姓名判断なんかは信じちゃいない。

基本的にアレは漢字が使える国のみ通用する話だし、男性でも女性でも結婚して姓が替わったらどうなるんだ？ってことで。

まあ、それを信じる、信じないはその人の勝手で、あくまでオレが否定しているだけなんだが…『読み方』とか『字面(じづら)』はすぐく気になる。

以前にも話したことがあるが、もし自分の子供に名付けるとしたら…読み方がわからないような当て字…キラキラネーム…なんてのは論外だし、あまり良くないようなことを連想させる名前も却下だ。

変なあだ名が付いて、虐められるのも可哀想だし。

こんなことを言ったら、少年には失礼だが…  
『青龍』だなんて、いかにも『そういう道』に進みそうな名前じゃないか。

すまん。

これは完全にオレの偏見。  
人を名前で判断しちゃいけない。

だけど、そういう印象を持たれないためにも、名前つて大事だなってつくづく思う。

それはさておき、この時はまだ、彼の家庭環境が『オレたちの運命に深く絡んでいた』なんて、これっぽっちも想像していなかったのだが…

くつづく

## 園田さんと高坂さんと南さん

さて、諜報部員の皆さんは、同乗して亡くなった少女の情報についても、教えてくれている。

《横山春蘭。

《少年と同じく16歳。

《父親はいわゆる不動産王で、つまり資産家の娘。

《母親は『後妻』で台湾出身だが、本人は生まれも育ちも日本。

《腹違いの兄、姉、兄がおり、末っ子。

《上の3人はいずれも優秀で、それぞれベンチャー企業の社長、財務省職員、医大生である。

《少女自身も有名私立高校に通っており、成績も悪くなかったようだが…素行はあまり良くなく、中学の頃から夜遊びも目立っていた…。

ざつとこんなところだ。

…つてことは、レクサスはこの娘の親父のものか？…

…だとすれば、やはりこの親にも責任を追及する必要があるよな…

家庭環境的には、真逆の生活を送ってきたんだと思う。

だから、この個々の情報だけでは、お互いを結びつける接点はない。どこで知り合い、いつから一緒にドライブするまでの仲になったのか…。

彼らが過ごしてきた月日について、オレが口を挟むつもりはない。それなりに辛いこともあったことだろう。

少年も少女も、家庭の中において『疎外感』みたいなものがあつたのではないか…ということは、想像に難（かた）くない。

それが、ふたりを引き合わせた共通点なのかも知れない。



ただ、そうであつたかも知れないが…無免許で車を運転していい理由にはならない。

それは大きな間違いだ。

どんな理由であれ、自分たちの都合でまったく無関係の第三者を巻き込んでいいはずがない。

情状酌量？

冗談じゃない！

それとこれとは話が別だ！

そうだ…。

オレは会見のときに、ひとつ言い忘れたことがあつた。

それはオレは『少年も救つた』ということだ。

同乗者の少女は亡くなつてしまつたが、下手をすれば、オレも園田さんもあの世に行つていたおそれがあつた。

…となれば、彼は3名の命を奪つていたことになる。

重罪だ。

しかし、自惚れるつもりはないが…オレは、園田さんを助け、自身の機転により直撃も避け『死』という最悪の事態から逃れることに成功した。

つまり間接的にオレは彼を『救つてしまつた』のだ。

皮肉を込めて言おう！

それは少年にとって『良かったのか？』『悪かったのか？』。

「高野さん……」面会の方が……」

そんなことを考えていたら、看護師がオレに声を掛けてきた。

…面会？…

「!!」

…そういえば今日は園田さんが来るって、連絡があつたんだっけ…

会見後…つまり、彼女が帰国後、LINEで数回やりとっていたが…  
…会うのは久しぶりだった。

「失礼致します。園田です」

病室に入る前に、彼女は深々と一礼した。

バツサリと髪を切ってしまったので、パツと見のシルエツトは別人のようだったが、身体を起こしたときに確認した顔は、間違いなく園田さんだった。

「久しぶり」

「こちらこそ、ご無沙汰しております」

「改めてだけど…だいたいイツたね？」

オレは指でハサミの形をつくり、耳の下あたりで、2、3度チョキチョキとした。

「はい。髪を洗うのがこんなに楽だとは思いませんでした」

と、彼女はにこやかに微笑んだ。

「そういえば、今日、友達と一緒に来るって言ってなかったっけ？」

「はい。私ひとりだと、また『密会だ』などと言われて、色々ご面倒をお掛けしてしまいますので…」

「一緒にいるの?…」

「はい、後ろで控えております」

「なんだ。だったら、そんなとこにいないで入ってもらいなよ…椅子

はあるから」

「すみません。では、お言葉に甘えまして…」

彼女は一旦、部屋を出た。

「初めて！高坂穂乃果です!!海未ちゃんが、お世話になってます!!」

「ほ、穂乃果！声が大きいですよ！ここは病院なんですから」

「あ、いけね…そうだった…」

「初めまして。南ことりと申します。今日は海未ちゃんの付き添いでお伺いさせて頂きました。宜しく願い申し上げます」

オレは事前に『予習』をしていたので、2人がどういった人なのかは、ある程度知っている。

確か、園田さんの幼馴染みだ。

「高坂さんに…南さん…わざわざこんなところまで、すみません」

「いえ、海未ちゃんの命の恩人ですから。ぜひ一度、お逢いしたいと思っ  
いでまして…」

「あ、いやいや…。園田さんには何度か謝ったんだけど…あなたたちにも色々迷惑を掛けてしまつて…」

「そんな、高野さんが謝らないでください！私たちこそ、今まで何のお礼も出来ず…」

「はい。海未ちゃんを助けてくださり、本当に、本当にありがとうございます  
いました」

「高坂さんも、南さんも、大袈裟だよ。…あれさ、今思うと、オレがス  
ゲー余計なことしたんじゃないかって思うんだよね」

「えっ?」

「余計なこと…ですか?」

言葉を発したのは2人だが、園田さんも驚いた顔をしている。

「そう。園田さんはあの時アルコールが入っていたから、多分覚えて  
ないと思うけどさ…きつと自力で逃げられたんだよね?」

「えっ?私が…ですか?」

「そう。それをオレが勝手に間に合わないと思って、突き飛ばしちゃったんだな…。完全な判断ミスだ。うん、本当に余計なことをした。だから、謝んなきゃいけないのは、やっぱりオレの方なのさ。今になって、その時のことを思い出したよ」

「そ、そんなことありません!!あのとき私は間違いないく…」

「いや、園田さん!…そうしておいてくれないか…。そう考えれば、お互い気が楽でしょ?いつまでもオレに救われたなんて考えてちや、永遠にオレは園田さんと対等に付き合えない」

「対等に付き合えない…って…で、でも…高野さんには…つ、つ、つばささんという大切な人が…」

「ん?」

「あっ!」

と声をあげたのは南さん。

顔を真っ赤にしている園田さんを見て、何かを察したようだ。

「違うよ、海末ちゃん。高野さんが言った意味は、対等な立場でお話できないうっていう意味だよ」

…そう言ったつもりなんだが…

「…!!…し、知ってます!…もちろん、私もそうだと思ってました!」

「えつと…どうかした?」

「な、なんでもありません!」

…の割には、すごい慌てぶりだけど…

…まあ、いいか…

「えつと…だから…ほらオレも恩人、恩人って言われると、調子に乗っちゃおうし…一旦、その関係はリセットして…これからは、普通に友達

として付き合ってくれたほうが楽になるっていうか…なんとい  
うか…。こんな形ではあるけど、これも何かの縁だと思うし。もちろ  
ん、高坂さんも南さんも含めてだけ…。」  
「うん、うん。そういうことならいいんじゃない。海未ちゃんの友達  
は、穂乃果の友達だし」

…ジャイアンか！…

「穂乃果！どうしてあなたはいつも、そんなに軽々しくそういうこと  
を!!」

「海未ちゃん…」

「あつ、ことり…。すみません、高野さん。つい声が大きくなってしま  
い…」

「あははは…じゃあ、屋上行こうか。こんな病室にいるよりはいいで  
しょう。今日は過ごしやすい…って天気予報で言ってたし」

「は、はあ…」

「冷蔵庫の中に、ジュースが入ってるんだ。悪いけど誰かそれ持って  
くれないかな。多分、人数分はあると思うけど」

「あ、じゃあ、穂乃果が！」

「ですから、あなたには遠慮つてもものがないのですか」

「いいから、いいから。御見舞品で悪いんだけど」

「いえ、いえ」

「ごちそうさまでくす！」

「どうぞ、どうぞ…」

高坂さんが冷蔵庫を空けて、ブリックパックタイプのジュースを手  
にする。

「その辺にビニール袋があるから、それ使つて」

はくいと返事をして、それを入れる。

噂通り屈託のない人だ。

「あつ、そうだ。園田さん、ちよつと見てて…よいしょーつと」

と、オレは車椅子に乗り移った。

「あつー！」

「どう？結構回復したでしょ？」

「はいー！」

「だから大丈夫！オレは必ず、ピッチに復帰するから」

「はいー！」

やっと彼女が力強い返事をしてくれた。

そうなんだ。

オレがこの入院中に気付かされたこと…。

それは自分の為だけではなく、誰かの為に闘うこと。

いや、俺を応援してくれる人、全ての為に。

オレみたいな若輩者が言うのもおこがましいが、オレがメツシに憧れたように、オレも誰かに憧れられるプレーヤーになりたい。

オレのプレーで誰かが勇気付けられるのなら、そういう存在にオレはなりたい。

今までオレは、自分が最高のプレーをすれば、ファンが付いてくると思っていた。

もちろん、それは間違いではない。

だけど、少し独善的な考え方だった。

ファンがいるからオレたちがいる。

ファンに喜んで欲しいから、オレたちは最高のプレーヤーを目指すんだ。

単に技術を磨き、自分だけ満足するのであれば、別に観客などいら  
ない。

そういうことに、改めて気付かされた。

そして、オレの目下の目標は、彼女…園田さんを心から笑顔にする

ことだ。

復帰するまでには、まだ時間がかかる。

だからと言って、いつまでも彼女の心の中に、暗い気持ちを宿しておくままにはできない。

どうするのが正解なのかはわからないが、少なくとも『助けた』だの『助けられた』だの…そういう関係からは早く脱却したかったのだ。

くっくくく

## 風が吹いたの

オレたち4人は病室を出ると、エレベーターに乗り込み、屋上まであがった。

病院は12階建てである。

都心のビル群の中では、決して高い建物ではわけではないが、それでもこの身にあつては、心身とも開放できる貴重なスペースだ。

一番手前を歩いていった南さんが風除室のガラスドアを開けると、ビュッ！と突風が吹き込んできた。

「きゃっ！」

「おっと…」

彼女の細い身体が飛ばされそうになり、オレの方へと倒れてくる。

「ごめんなさい、よろけちゃって…大丈夫ですか？」

南さんは車椅子に座っているオレの目線に合わせる為、わざわざしゃがみこんでそう言った。

顔が近い。

看護師さんと理学療法士さんは別として…チヨモ以外の女性とこんなに接近したのは久々だ。

…可愛い…

思わず声に出そうになった。

少し舌足らずな感じの…いわゆるアニメ声と、視線が逸らせなくなるような上目遣い…。

確かオレと同一年で…つまり、もう成人しているはずなのだが、とてもそんな風には思えなかった。

『正統派の美少女』

オレは新文の記事を思い出す。



…なるほど…初対面でもすぐ惚れちゃうという話はよくわかる…

もつとも、そんな仕草もルックスが伴ってなるから許されるわけだが、きつと彼女は自然にこういうことができる人なのだろう。

「南さんこそ、大丈夫？」

オレは動揺を隠すように、声を掛けた。

「はい」

「ごとり！気を付けてください」

と園田さん。

…ん？…

…一瞬、園田さんの目が、一瞬光ったように見えただけど…気のせいかな？…

「うん、そうだね。思ったより風が強くて…」

南さんは申し訳なさそうに頭を掻いた。

「うわあ、風が気持ちいいねえ!!」

屋外に出た高坂さんが、両手を広げてクルクルと周る。

さすが元カリスマスクールアイドル。

ただそれだけなのに、とても格好良く見える。

「そうですね！今日は湿度も低いですし、心地良いですね」

園田さんは宙に手を翳（かざ）して、目を閉じる。

それもドラマとか映画とかの…そんなワンシーンに見えた。

意識しているわけではないが、目の前にいる人たちが『μ, s のメンバーだ』って思うと、動作のひとつひとつが普通の人と違って見えるから不思議だ。

「地上は無風だったんだけどねえ…」

と南さん。

「やっぱり、地上12階ともなれば、それなりに高さがあるから…」

院内にいたら感じる事ができない、夏の暑さ、太陽の眩しき、そして吹き抜ける風…。

生きてるう!!て感じがする。

幸いなことに、今は誰もいない。

隅にあるベンチは空いていた。

「あそこに座ろうか…」

とオレは彼女たちをそこに誘う。

「屋上かあ…。なんかμ、sの練習を思い出しちゃうね?」

「うん。ことりも同じことを思ったよ」

「はい、私もです」

3人が口々に言った。

「練習?」

とオレ。

「はい! 私たちは高校時代、練習場所がなくて…辿り着いた先が屋上だったんです。だから、周りの景色は違うけど、こうやって空を見上げると、その頃のことを思い出しちゃって…」

「そういうえば高校を卒業してから、屋上に出る機会など、そうそうないですものね」

「確かに…ことりも久しぶりかも」

「屋上が練習場所?…μ、sってスクールアイドルのカリスマって言われてるんでしょ?それがそんなところぞ?」

「カリスマだなんて、大袈裟だよ」

「うん。私たちは全然そんなこと思っていないよね」

「まあ、そう言ってくださるのは、本当に嬉しいことではあるのですが…」

「でも最初は…『残ってた』のが、そこしかなかったから…つてことだったんだけど…大きな音を出しても迷惑にならないし、自分たちしかいないから他の部活の邪魔にもならないし…今思えば、最高の場所だったのかな?つて」

「そうだよね、ことりちゃん!寝てても怒られないしね!」

「穂乃果は場所を問わず寝るじゃないですか！」

「あははは…まあ、そうだけどもさ」

…高坂さんか…

…面白い人だな…

「実は…園田さんには話したことがあるんだけど、オレ、μ、sのことは恥ずかしながら知らなくて」

「いえいえ、そんな…穂乃果たちなんて『知る人ぞ知る』みたいな存在ですし…ねえ？」

「はい」

「皆さんのことについては『新文の特集』で、勉強させてもらったんだけど…」

「あつ…」

「改めて、迷惑をかけてしまつて…申し訳ない。それと園田さんを支えてくれてありがとう！」

「高野さん!」

園田さんが驚いた顔をしてこつちを見た。

「そ、そんな、高野さんに謝られる理由はないですよ」

「いやいや、高坂さん。園田さんが相当精神的に追い込まれていたことはオレも知ってるんだ。もしかしたら、自ら命を絶ってしまうんじゃないかと思つたし…それに対してどうしてあげること出来ない自分に、虚しさもあつた」

「高野さん…」

「だけど、園田さんから聴いたよ。素晴らしい仲間たちに救われたつて。園田さんが元気になってくれることによつて、オレも救われたんだ。本当にありがとう」

「いえ、お礼を言うのこつちです。あのとき海未ちゃんを助けてくれなければ…」

「それでね」

と、オレは無理やり高坂さんの話を打ち切つた。

「どうしても心残りなことがあって…」

「えっ？」

「それが、このことがキツカケで、sの皆さんにまで、話が及んじやったこと。さつき冗談半分で『特集』のことを言ったけどさ…正直読んで腹が立ったし、どうしてこうなったのかな…みたいなの。本当はひとりひとり、直接、謝りたいんだけど…」

「そんな必要はないよ!!」

「高坂さん…」

「確かに、あの記事が出たときは、何これ？って思ったし、頭にきたけど…穂乃果なんか太ったとか書かれてるし…」

「穂乃果ちゃん、それは事実だから…」

「うっ！ことりちゃん…違う、違う…そういうことじゃなくて…えつと、穂乃果はさ、今回のことがあって、また、sの絆がグツと深まったと思ってるんだ。卒業してからも、個々に集まってるし、仲が悪いなんてことはないけど…なんていうのかな、困難を乗り越えて、またひとつ強くなったというか」

「うん、それはそうだね。怪我の功名って言ったら、ちよつと違うかも知れないけど、9人全員集まったのも久しぶりだしね」

「はい。おかげさまで、つばささんを始めとした皆さまとも、つながりが出来ましたし…他のメンバーも喜んでましたので。ですから…」

「そっか…それは良かった。そうやってポジティブに考えてくれるのなら、本当に良かった」

オレは安堵した。

だが、不安の種は残っている。

「でも、このまま、あの新文の柏木ってやつが、黙って引き下がるとは思えないんだ。もし、何かあった時は、迷わずつばさを頼ってくれて構わないから」

「はい。ありがとうございます」

3人が揃って頭を下げた。

「ところで、高野さん、実際のところ、つばささんとの関係ってどうな

「んですか？」

「ぶっ！」

オレはあまりに直球な質問に、飲もうとしたジュースを吹き出しそうになった。

口に入れる前で助かった。

「穂乃果！」

「だって、海未ちゃん。興味あるじゃん、本当のところはどうなんだろう…って」

「いえ、あまりにも失礼です！本当に穂乃果は非常識です！」

「まあまあ、園田さん、そんなに怒らなくても…」

「ですが…」

「そうだなあ…会見で述べた通りなんだけどね…。付き合ってるって言えば、付き合ってるし…付き合っていないと言えば、付き合っていないし…」

「そうなんですか？じゃあ、つばささんって彼女じゃないんですか？」

「彼女って言えばそうかも知れないし…」

「どっちなんですか!？」

「うくん…あはは…よくわからない」

「えっ？」

3人ともビックリした顔でオレを見た。

くっくく

## 運命感じてよ

「オレにとって、ヤツは特別な存在であることは間違いない。でも、それが恋愛感情かかっていうと、正直少し違うかな…とも思ってた…尊敬してる…ってのが正しい表現なのかな…」

改めて『どんな関係か』って訊かれて、オレはそう答えた。

「尊敬…ですか」

園田さんが、不思議そうな顔をする。

「…その言葉が一番しっくりくるかも。そうなった経緯は…話せば長くなるけどね」

「是非聴きたいです!」

「穂乃果!!」

「ええ? いいじゃん、いいじゃん!」

「そんな面白い話でもないよ」

オレは人の色恋沙汰に一切興味はない。

誰がどうやって知り合ったかなんて聴いたところで『だからなに?』と思ってしまう。

しかし、彼女たちは違うらしい。

それがオレの中で『女子』という生き物の、わからない部分でもある。

「そうだなあ…小学校の頃のヤツはオレよりも背が高くて、頭も良くて、リーダーシップもあって…それでスポーツもできて…早い話、何もかも完璧だったわけ」

あまりに興味津々な感じでオレを見てるので、仕方なく話すことにした。

「海未ちゃんみたいだね?」

と南さん。

「そうでしょうか…」

園田さんは、小さく首を傾げた。

なるほど。

確かに根本的な部分では似てるかも知れない。

少なくともヤツは高坂さんと南さんタイプではない。

「そんなわけで当然男としては、面白くないわけよ。なんていうかな…こう…何にも勝てないってことに対して。それで、ついついくだらないことで、反発したり、競ったりしちやってね。その頃は、オレの方が一方的にライバル視してたんだよね」

「いるよねえ。好きな女の子に、ついついちよつかい出しちゃう男の子って」

「今思うと、その感情に近かったのかも。当時は認めたくなかったけど、心のどこかで『コイツには敵わない』って気持ちがあったんだろうね…。言い換えると、それが『憧れ』ってことなのかな」

「なるほど」

高坂さんも南さんも、メチャクチャ頷いている。

…本当に女子って、こういう話、好きなんだねえ…

「それで？それで？」

と高坂さん。

…グイグイくるなあ…

「小学校卒業して、お互い別々の学校に進んだんだけど…ある時、一回だけ地元の公園で逢ったことがあるんだ。本当に偶然に。その時ヤツは、なんか悩んでる感じで…。あとから聞いたところによると、雑誌に読者モデル？みたいな写真が載っちゃって、学校と揉めたらしいんだよね。ヤツはバレーボールの招待生として、中学は進学してたか

ら」

「あつーことり、その時のこと覚えてますよ！確かその翌月号で『J—BEATの専属モデル』としてデビューしたんですよ。すごく綺麗な人で…とても同じ年には見えなかったなあ…」

「うんうん。ことりちゃんが凄く興奮してたのを、穂乃果も覚えてる」

「はい！ありましたね、そういうこと」

「へえ…そうなんだ。よく覚えてるね」

「ことりちゃんは、ずっとファッションが好きで、あの雑誌読み込んでたもんね」

「うん！だから、sで衣装が作れることになった時、夢が叶ったって思ったんです。今、思うと、『AYA』さんとの出会いが、この道に進むキツカケだったのかな…って」

「ターニングポイントか…。ヤツに言わせると、その時にオレと逢ったことで、何かが吹っ切れたらしくって…まあ、同じかな。人生の転機っていろいろの？」

「ドラマチックだねえ！」

「うん。オレもそう思う。本当に『あの日、あの時、あの場所でヤツに逢わなかったら』お互いにこうはなってなかっただろうし」

「どこかで聴いたことあるフレーズですね」

園田さんがクスツと笑った。

「でもオレが『ヤツの人生を変えた』かと思うと、すげえ不思議でさ。ちよつとした責任みたいなのも感じたりして」

「つばささんがサッカーを始めるときも、高野さんに相談したのでしたよね？」

「そうだね。その公園で偶然逢った時…詳しくは何を話したかは忘れたけど『何か相談があったらよろよ』みたいなことを言ったらしくて…ヤツがソレを覚えてた」

「きつと忘れられない一言だったのですね」

「…なのかな？」

「はい」

「海未ちゃんさ、これって、やっぱり『運命！』ってヤツだよな？」



「私はあまりそういうことは信じませんが…でも、何か特別なお互い惹かれ合う力があつたのでしよう」

「まさに『スピリチュアルやね!』」

「穂乃果、別に希のマネをしなくてもいいいです」

「でもさ、私たちだつて『ファーストライブのときに花陽ちゃんが観に来てくれなかったら』9人にはなつてなかったかも知れないし…『真姫ちゃんが生徒手帳を落とさなかったら』とかさ『学校が廃校の危機になつてなかったら』…とかさ、色々『これつて運命!』つて思うこと、いっぱいあつたじゃん」

「そうだよねえ。もつと言つと…ことりと穂乃果ちゃんと海未ちゃんとお会つてなかつたら…つて話だよね」

「そこまで遡りますか!?!」

「オレもね、運命なんて言葉は単純に使いたくないんだけど…人間つて、常に取捨選択しながら生きてると思うんだ」

「取捨選択?」

「例えば、今、こうして屋上にいるわけだけど、まったく同じ話を病室でしていたとして…このあとの生活にどれだけ違いが出るんだろう…つてや」

「『If』の世界ですね?」

「ことりもそういうの、すごく興味あります。例えば衣装作るときも、アクセサリーを付ける?付けない?で、1日中悩んだりして」

「ひよえ〜1日中?」

「お客さんにとつては、もしかしたらどうでもいいことかも知れないし、どつちでも結果は変わらないかも知れど…それだけで印象が変わつちやったりするかもだし」

「ああ、なるほど!ダンス中にアクセサリーが落ちて、踏んづけちゃつて、滑つて転んで、頭を打つて、救急車で運ばれて…そこで素敵な人と出会つて、恋に落ちて、結ばれて…みたいなことがあるかも知れないし…つてことですよ」

「なんですか?その『風が吹いたら桶屋が儲かる』みたいな、ご都合主義の発想は」

「えへへ…」

「でも、基本そういうことだと思うよ。あの時も…事故のあの日、オレはタクシーで帰るって選択肢もあったんだ。そうしていたら、今回のようなことは起きなかったかも知れないし、逆に乗ったタクシーが事故に遭っていたかも知れない。それは誰にもわからないことなんだ」

「オレは自分の意思で歩いて帰った。自分で決めたことなんだから、こうなっても半分は仕方ないと思ってる」

「…高野さん…」

「だからね…『運命』って死んだ時に使う言葉なんだろうなって思うんだ。進行形じゃないと思うんだよね。だってさ、その時の判断ひとつで、まったく違う結果になる可能性があるわけだから」

「む、難しいことを言いますね…」

「そうかな?」

「大丈夫です。穂乃果にはあとで私から説明しますから」

「うう…」

「この間お話した時もそうでしたけど、高野さんはすごく哲学的なことを話されますよね」

「理屈っぽいってことでしょ?」

「いえ、私は嫌いじゃないですよ」

園田さんは、凄く楽しそうな顔をした。

「まあ、話は横に逸れたけど…そこから先は会見で話した通り。ヤツがサッカー選手に転身したいきさつはみんなも知ってるだろうし」

「会見通りか…」

「高坂さん、納得してない?」

「ううん、そういうわけじゃないけど…よくわからないな。お互い『好き』って思ってるのに、それが恋愛かどうかわからないとか、結婚は考えてないとか…」

「あはは…それはオレたちが一番そう思ってるよ」

「じゃあさ、もしつばささん以外に、素敵な人が出てきたら?」

「穂乃果!!失礼ですよ!」

「いいじゃん、折角の機会なんだし」

「うーん、どうかな…その時になつてみなくちゃわからないけど…ヤツ以上に好きになっちゃったら、それはそれでそうなっちゃうかも」

「えっ？そんなこと言っちゃっていいんですか？」

「ごとりー」

「ヤツも多分同じ考えじゃないかな…。少なくともオレはそう思ってるけどね…」

「じゃあ、会見で言ったことって…マスコミ向けの発言じゃないんだあ」

高坂さんは真顔で驚いている。

「ほら、よくあるでしょう？そう言っておきながら、翌月結婚してました…みたいなの」

…ああ、あるね…

「それは大丈夫。まだ結婚のケの字もないし、妊娠もしてないから」

「に…に…妊…」

「海未ちゃん、反応しすぎだよ」

南さんはそう言つて笑う。

「？」

オレは何にどう反応しすぎなのか、よくわからない。

「そうだよな。さすがにお腹に赤ちゃんがいたら、サッカーは無理だもんね」

「当たり前じゃないですか！」

「いちいち目くじら立てないでよう」

「あなたがくだらないことを言うからです」

「くだらない…ってなによ」

「やはり、あなたを連れてくるのではありませんでした…」

「海未ちゃん！穂乃果ちゃん！」

「あっ！私としたことが…」

「えへへ…ごめん」

「すいません、高野さん。でも2人はこれが通常モードなんです」

「へえ…そうなの？」

「もう、ずっと変わらないんです。ちっちゃい時から」

そう言いつつ、南さんの顔は困っている感じではない。

「嬉しそうだけど？」

「はい。私たちは同級生で…昔から一緒にいるんですけど…ことりは2人の『じゃれあい』が聴こえないと、心配しちゃうんです。どっちかが調子悪いんじゃないかな？って。海未ちゃんもあんなことがあって、しばらく落ち込んでたんですけど…やっといつもの海未ちゃんに戻ったな…って」

「ことり！私は好きでこんなことを言うのではありません！」

「穂乃果だって、好きで怒られてるんじゃないよう！」

「はいはい」

「喧嘩するほど、なんとか…ってヤツかな？」

「はい、その通りです！」

彼女はにこやかに笑った。

くつづく

にわかですけど、なにか？

「そういえば、園田さん。μ、sが再結成するとかしないとか騒がれてるけど…」

「あっ！」

3人は一瞬、顔を見合わせた。

「いえ、騒がれているだけで、何も…」

と園田さん。

「そうなんだ」

「うん。A—L I S Eからは誘われてるんだけどね」

「穂乃果！」

「穂乃果ちゃん！」

「あっ！」

「A—L I S Eに誘われている？」

「えっと、今のは…できれば聴かなかったことに…」

「もう遅いですよ…」

園田さんが呆れた顔をして、高坂さんを見た。

「秘密の話…なんだ？」

「はい…。ですが、高野さんならお話してもよいかと」

「いや、無理には訊かないけど」

「いえ、是非ともご意見を伺いたく」

「ん？」

「私たちも迷っていて…参考になればいいかなって」

「そういうことなら…。役に立つかどうかは保障できないけど」

「実は私たち、A—L I S Eから年末に開催を検討している『チャリテイライブに出ないか?』と誘われているのです。まだファンの方は知らない話ですけど」

「ですが、正直どうしたらよいものかと」

「…っていうと?」

『やるべきか、やらざるべきか、それが問題だ』  
と南さん。

何故か芝居チックだ。

「はい。ことりの言うとおりハムレットみたいな心境なんです…」

「やればいいのに」

「えっ?」

園田さん、高坂さん、南さんがオレを見る。

「ん?…あ、オレは観たいなあ…なんて…。あ、いや…あくまでも個人的な意見だけどさ…」

「ところが、そう簡単にはいかないんですよ」

高坂さんが、オレの肩をポンポンと叩く。

「まあ、そうなんだろうねえ。そう簡単にいけば、悩むこともないだろうから」

「ええ…。諸々問題がありますので」

「μ, s フアンのオレから言わしてもらえば…観たい!」

「μ, s?」

「ファン?」

「ですか?」

「そんな驚くこと?…まあ『にわか』なんだけどさ。いや、にわかだから余計なのかな」

「…とおっしゃいますと?…」

「えっと…オレ、園田さんたちを知って…今更ながらなんだけど過去の動画を観させてもらってるんだ」

「μ, s のですか?」

「うん。ほら、つばさも昔から知ってた…っていうし、はるかちゃんもめぐみちゃんもファンだった…っていうから、どんなもんかなと思っ

て…」

「穂乃果たちはあんまり観ないよね？」

「はい」

「どうして？」

「恥ずかしい…と言いますか」

「うん、それもあるし…色々『粗い』っていうか。そういうところに目が行っちゃって。反省ばかりになっちゃうんだよね」

「そうそう！もつと、ここはこうだったかな？とか、あそこはこうだったのかな？とか…もう、歌うことも踊ることもないのに…ね」

南さんの声が、少し寂しそうに聴こえた。

「そうかな？…言葉は悪いけど、当時は普通の高校生だったわけでしょ？作詞も作曲もして、衣装も作って、歌って踊って…それ以上、何を望む？って感じだけど」

「あの時は、無我夢中で何もわからずやっていたから…。でも、改めて今見ると、色々反省点はあるんです」

「へえ…そういうもんかね…」

「それに、今の娘たちの方が全然レベルは高いし」

「それは高坂さん、違うと思うな…。サッカーでもなんでもそうだけど、日に日に技術は進歩していくんだから、そんな比較は意味がない。大事なのは『その時代にどうだったか？』ってことでしょ。『マラドーナ』と『メッシ』を較べて、どっちが凄いつて訊かれても、答えは出せないよ」

「マラドーナ？」

「メッシ？」

「…？…」

…彼女たちにはわかりづらい例えだったか…

「ま、まあ、とにかくオレはまったくの素人だからさ、偉そうなことを言うはどうかと思うけど…その…スクールアイドルとして、道を切り

開いてきた…熱さみたいなのが、パフォーマンスから伝わってきて…はるかちやんたちがファンだった…とか、A—L—L—I—S—Eが永遠のライバル…って言うてる意味がわかった気がするよ」

「恐縮です」

「特に…園田さん!」

「えっ!?は、はい!」

「あ、μ sの中では、園田さんしか顔を合わせたことがなかったから、特に目線がそっちに行っちやうんだけど…」

「は、はい…なんででしょう?」

「あんなにキラキラした笑顔で踊ってたんだね!」

「:!!:ああ…なんか…お恥ずかしい:」

「普段の園田さんも、知的な感じで素敵だけどさ…あんな楽しそうな表情見せられたら、大抵の男はやられちゃうよね?ギャップありすぎだよね…」

「:…あうう:」

そう言うのと座っていた彼女の上半身はよろめき、隣にいる南さんへと寄りかかった。

「:…って園田さん?どうかした?」

「褒められすぎて、恥ずかしくなっちゃたんだよね…」

南さんが、笑いながらそう教えてくれた。

「特に高野さんから…」

「穂乃果!余計なことは言わないでください!」

ムクツと彼女の上半身が起き上がった。

意外と喜怒哀楽が激しい人だ。

「つばさから聴いたんだけど、μ sってさ、ほとんどの人は生で観たことないんですよ…」

「う〜ん…そうかな…名前を知ってもらった時には、解散しちやったから…。それまで応援してくれてた人は別として、あとから知った人



「たちは…」

「だよ。つまりそれって『オレ』と一緒にでしょ。昔から応援してた人は複雑かも知れないけど…観てみたいと思うよ…『生々』s」

「…」

「…」

「…」

「実はね、隠してたけど、オレ、今、結構興奮してるんだ。『画面の中の人が目の前にいる』って」

「いえいえ、私たちから見れば、夢野つばささんが目の前にいる方が、よっぽどすごいことだと思っんですけど…」

と南さん。

「だよねえ」

高坂さんが相槌を打つ。

「初めはね、やっぱりドキドキしたよ。『おお！夢野つばさだ！』みたいな。さすがに今は慣れたけど。あ、いや、オレの話はどうでも良くって…えっと…ライブの話だよ？一応『にわか』なりに勉強してるつもりなんだけど…フアンの中でも意見が割れてるよね…再結成賛成派と反対派と」

「はい」

「まあ、どっちの意見もわかるけどなあ」

「…私たちもやりたい気持ちがないわけではないのですが…」

「みんな別々の道を歩いてるし…難しいかな？…って…」

「ネットになるのはそこ？」

「はい。特に花陽などは、今、生活の拠点がアメリカですし」

「それはなんとでもなると思うけどね」

「えっ？」

「単純にスケジュールの問題だけなら、どうとでもなるよ。現にオリオンピック観戦は全員揃ったんでしょ？」

「ええ…それはそうですが…」

「どっちかって言えば、物理的な事より、気持ちの問題じゃないかな？」

「!」

「μ、sってさ、もう二度とやるもんか! って感じで解散したの?」

「いえ、そんなことは…」

「喧嘩別れしたわけでもないよね?」

「はい」

「やってみたい気持ちはある?」

「ゼロではないかと…」

「なら、やればいいんじゃない? 身体が動かなくなったら、やりたくてもできないんだから…」

「あっ!!」

3人の表情が、一瞬、曇った。

「そりゃあさ、ファン全員を満足させることなんて無理な話だよ。それぞれ考え方とか、想いとか違うんだし。でもさ、これだけの人が支持してるなら、オレはやった方がいいと思う」

「…」

「…」

「…」

「ごめん、ごめん。これはあくまでもオレの考えだから」

「いえ、貴重なご意見を頂き、ありがとうございます」

「もしさ、そういう機会があったなら…オレを呼んでくれないかな?」

「えっ?」

「ダメ？」

「い、いえ！もちろんですとも!!」

「じゃあ、約束ね！」

「は、はい！」

「ちなみにオレのリクエストは：『STRT・DASH』と『No Brand Girls』かな」

「えっ？」

『♪悲しみ閉ざされて泣くだけの君じゃない 迷い道やつと外へ抜け出せたはずさ：』『♪壁は壊せるはずさ 倒せるはずさ 自分からもっと力を出してよ：』：前者は園田さん、後者はオレってところかな？」

「あっ…」

『No Brand Girls』は、前に園田さんが教えてくれたんだよね。自分が作った歌詞にこういうのがあるんです！って。そこからかな、ちよつと聴いてみようかな…って思ったのは「えっ？海未ちゃん、そんなこと話してたの？穂乃果、聴いてないんだけど」

なぜか高坂さんはニヤニヤして、園田さんを見ている。

「べ、別に…隠していたつもりはありませんが…」

「みんな、園田さんの作詞なんですよ？」

「全部ではないですが…」

「なんで今まで知らずにいたんだろう…。心に響く、勇気付けられる歌詞が多いよね」

「あ、ありがとうございます」

「好きだよ。園田さん…」

「な、なんと!!」

「…の歌詞」

「歌詞…ですか…」

「ん？」

「いえ…」

「オレの本心を言えば…」

「は、はい！」

「全部ライブで観てみたい」

「ぜ、全部ですか!？」

「1曲、2曲じゃなくて…全部」

「た、体力が持たないよ」

「大丈夫、高坂さん。まだ若いんだから！…って、オレも同じ年か」

「うう…無理…」

「穂乃果、泣いているのですか？」

「もしそんなことになったら、海未ちゃんにどれだけ扱（しご）かれるんだろうって…自然に涙が…」

「泣くほどのことですか！」

「泣くほどのことだよ！」

高坂さんが脚をバタバタさせる。

その様子に、南さんがオレを見て笑った。

いつもこうなんですよ…そう言っているようだ。

「それにしても高野さんが『好きだよ、園田さん』とか言うから、海未ちゃんが告白されたのかと思っちゃった」

「な、なんてことを言うんですか」

「えっ？オレ、園田さんの『歌詞』ってちゃんと聞いたでしょ？」

「えく…ことりは聴こえませんでしたよ！」

「こ、ことり！」

「だよね？だよね？良かったねえ、海未ちゃん！」

「穂乃果!!」

「あ、あれ？なんかオレ、おかしいことを言っちゃった？」

「い、いえ…この2人が、なにか勘違いしてるみたいで…もう、いい加

減にしてください!」

「でも、海未ちゃんはさ、高野さんのこと…」

「穂く乃く果く」

「うわっ!逃げろ!」

「こら!ちよつと待ちなさい!」

「穂乃果ちゃん、海未ちゃん、ここで鬼ごっこは…」

「穂乃果が逃げなければ追いかけません」

「海未ちゃんが追いかけてなければ、逃げないよ!」

「もう、2人とも…」

「なんかよくわからないけど、園田さんも意外と子供っぽいところがあるんだね?」

「はい。特に海未ちゃんは、穂乃果ちゃんの事が大好きなので」

「ああ、さつき言ってたね。喧嘩するほど…だっけ?」

「はい。お互い性格は『水と油』って感じなんですけどね。どこか惹かれあうものがあるみたいで」

「南さんは水?油?」

「ことりですか?卵黄かな」

「卵黄?」

「はい。水と油と卵黄を一緒にすると『混ぜり合う(ように見える)』んですよ。ちなみにお酢と油と卵黄だと、マヨネーズになります!」

「へえ…そうなんだ」

「海未ちゃん!ストップ、ストップ!」

「なんですか!?!」

「ほら、あっち!あっち!」

「あっち?」

「ことりちゃんと高野さんが、なんかいい感じなんだけど…」

「えっ?あつ…」

「どうしよう、海未ちゃん。高野さんが盗られちゃうかも」

「こ、ことりがそんなことするハズがありません!」

…もつとも…高野さんの方は怪しいですが…

海未は穂乃果との鬼ごっこを一時休戦して、ベンチへと戻っていった…。

くつづく

神奈川にはサッカーチームがありすぎる

『絶句：熱愛中の二人を襲愕の大スクープ』

高野が海未たちと会ってから、数日後…しばらく鳴りを潜めていた『週刊 新文』が、再び動き出した。

『先日、我々は高野梨里選手と夢野つばさ選手の熱愛について報じたが、今回はその続報である。』

『だが、このカプルの『あまりに数奇な人生』を知った我々は、恐れおののき、言葉を失った。』

『これを運命と呼ぶなら、それはあまりに過酷なものである。』

『果たして2人の薬指を繋ぐのは『幸せの赤い糸』なのか…それとも…』

『次週、衝撃の事実が明らかに!!』

『そんな惹起の見出しが今週号に躍る。』

『おいおい、今度は何事だ…』  
と高野。

病室を訪れていたつばさも「さあ…」と首を傾げた。

特に新たな取材を受けたわけでもなく、まったく見当が付かない。お互い、前回の記事について、訂正もお詫びもないまま続報とは思ったが、逆に『驚ほど大仰な見出し』を見て、半分は笑ってしまった。

「実はオレたち、兄妹（きょうだい）だったとか？」

「まさか」

「従兄妹（いとこ）？」

「それもないわよ。だったら、どっちも親が知ってる話でしょ?」

「前世で何かあったとか?」

「何かって何よ?」

「例えば…オレがお前に襲われてたとか…」

「へえ…そういうことを言う?」

「じゃあ、なんだよ?」

「知らないわよ」

「まったく気持ち悪いな…勝手に人の『運命』を語るなっていうの」

「うん、なんなんだろうね…」

そして翌週。

売店で買って来た新文を、つばさがおそるおそるページを開く。

そして2人は…見出し通りの…いやそれ以上の衝撃を受けたのだった…。

病室でつばさが、高野の傍らで新文の記事を朗読する。

『『サッカーの男子オリンピック代表候補』だった『高野梨里選手(以下、高野)』が、トレーニングからの帰宅途中に事故に巻き込まれたのは、合宿を目前に控えた6月某日のことだった。』

『その後については、読者の皆さんもご周知の通り。』

『我々のスクープにより高野と『なでしこジャパンのエース』でもあり、音楽ユニット『シルフィード』のメンバーでもある『夢野つばさ選手(以下、夢野)』の熱愛が発覚。2人は会見を開き、交際中であることを認めた。』

『その際、高野選手は我々の記者に対し「事故の責任を追及するのがマスコミの役割」と声高に訴えたことは、記憶に新しいところだろう。』

『待て待て、そうは言っていないだろう。『事故の被害者が悪者扱い』されるのが、おかしいんじゃないか…って話で』



「ホント、いい加減ね」

「まあ、親父に言わせれば『話題のすり替え』はヤツらの『常套手段だ』っていうけどな…」

《その中で高野選手は自動車メーカーの責任についても問うたが、この発言に対し業界は「事故を起こす・起こさないは、運転手の資質の問題」と突っぱねた。

《しかし、このコメントに対し、交通事故被害者の遺族などで作る有志団体が、「メーカー側も国も、無免許運転や飲酒運転の防止策を怠っている」と猛反発しており、物議を醸していることも、読者の皆さまはご存知であろう。

《今回の事故に関して、国、自動車業界、メーカーにどれくらいの責任割合があるかはさておき、ハード面、あるいはソフト面において、もう一度『安全対策、安全意識』の喚起を促すという意味では、評価できる発言であった。

…何様目線だよ！…

《ところで高野は、横浜F・マリノスに所属するJリーガーであるが、そのチームの筆頭株主といえば『日産』である。皮肉なことに、その日産は長い間、無資格の従業員が完成車を検査していたとして、国内工場の出荷が停止になるという、前代未聞の事態に及んでいる。

《まさに『安全の根幹』に関わる問題で、自動車業界は『運転手の資質』と言ったが、これは逆にユーザーから『企業の資質』を問われなくても仕方がない。むしろ無免許運転や飲酒運転防止策以前の話である。長い間、このようなことを放置していた（もしくは見抜けなかった）自動車業界は赤っ恥を搔いた形になった。

《だが困ったのは高野である。自らメーカーの責任を問うた身だ。交通事故で命の危険を晒された上、所属チームの筆頭株主が『車の安全』を軽視しているのであれば、このチームに居続けることは無理が

ある。いや自主退団するべきである。そうでなければ、言動不一致：自らの発言と整合性が取れない。果たして：高野の選択肢はいかに？去就が注目されるところである。

「…つて書いてあるけど？」

苦笑いしながら、つばさが高野を見た。

「正直これは、難しい問題だ…。まさかこんなことが起きるとは想像もしてなかった…想定外」

「だよね…」

「基本的に、親会社は親会社、チームはチームって言いたいところだけど…ちよつと、状況は厳しいかな…。それより、復帰できるかどうかもわからないし…」

「そんなこと言わないですよ…」

「あつ？…あ、すまん。ただ…回復状態によつては『解雇』だつてあり得るんだ。『公傷扱い（練習や試合中の怪我）』ではないからな」

「でも…」

「まあ、そうなつたらゼロからチャレンジするさ。拾ってくれるチームを探すよ」

「それは大丈夫だと思うけど…梨里を放っておくチームなんてないよ」

「楽観視はできないさ。故障明けの選手なんて、実力未知数だからな。」

「…」

「だけど…ほら…あれだ。今、マリノスにいても出場機会がないし、やっぱサッカー選手は試合に出てナンボだから…元々『移籍』つてことは頭のどこかにはあったんだよ。もちろん実力でレギュラー奪うのがベストだし、オリンピックで活躍して『見せ付けてやろう』と思つてただけどね…」

「移籍？どこの？」

「オレは神奈川で生まれ育ったから地元には拘るなら…川崎フロンターレ、湘南ベルマーレ、横浜FC、SC相模原、YSCC横浜…FC町田ゼルビアもあるな」

「町田は神奈川じゃないでしょ？」

「いや神奈川だろ」

つばさはそれを聴いて笑った。

※あとがき参照

「それはさておき、今、この状況になったら贅沢は言ってられないさ。地方だろうが、地域リーグだろうが…行ったところで、全力を尽くす。そこから這い上がってやるよ」

「うん、そうだね」

「目標は海外リーグだからさ」

「海外…か…」

つばさは高野の目をじつと見た。

「なに？」

「ん？もしキミが海外に行ったら、私はどうしたらいいんだろう…つて」

「あん？」

「もしこの先、2人が一緒になったら…その時、私はサッカー続けられるのかな？それとも専業主婦？海外には…キミだけ単身赴任？」

「あ…」

「…なんてね…」瞬考えちゃった」

「…」

高野も少しの間、彼女を見つめていたが、ふと思い出したように言った。

「お前も海外でプレーすりゃあいんじゃないの？」

「ん？」

「イングランド、スペイン、フランス、ドイツ…ヨーロッパに行けば、大抵女子リーグもあるから」

「確かに…」

「いや、現実問題として、お前の方が先に海外に移籍してる可能性の方が高いか」

「えっ?」

「オリンピックで活躍して、世界にもアピールできたし」

「海外…私が?…」

「そんな意外そうな顔するなよ。すっげー身近なところにフランスリーグ帰りの『羽山優子』って先輩がいるじゃん」

「それはそうだけど…自分が行くなんて、考えてもいなかった…」

「これからオフア…くるんじゃないね？」

「そうしたらどうしよう?」

「オレは受けるべきだと思うけど…まあ、お前がどうしたいかだから…」

「…」

つばさは、しばし黙り込んだ。

「その時はその時だ。今、考えてもしかたない」

「う、うん…」

「…つてことはアレか。愛車のエルグランドも手放さなきゃ…か」と高野は呟くと、はあ…とひとつ大きなため息をついた。

「えっ？車!?!」

急に話題が変わり、つばさはビックリした顔をする。

「ああ、この記事のことだよ。下手したら、オレが車に乗ること自体、非難されたりしてな…」

…なんだ、私のことをもつと真剣に考えてくれてるのかと思つてたのに…

「どうかしたか?」

「ううん…でも、車は別にいいんじゃないの?」

「わからん。充分ありえる話だ。もう、今の世の中、クレームを付けたもん勝ちみたいなどころがあるからな…何にどうケチが付くかわからない」

そう言つて高野は笑つたが、半分は真面目にそう思つていた。

「…で…これが『驚愕の大スクープ』?」

「まだ続きがわるわ」

「だろうな…」

つばさは再び、朗読を始めた。

くつづく

## 悪魔の遺伝子

《さて冒頭の話に戻るが、高野は会見の席で、マスコミに対し大きな挑戦状を叩きつけた。今回は我々『週刊 新文』がその代表として、ジャーナリズムの原点に立ち返り、彼の言う『事故の責任』を追及することとした。

《今回の事故の被害者は高野と、元スクールアイドル『M's』のメンバーで現在は大学生の『Sさん』である。2人が以前から顔見知りだったかどうかはさておき、信号待ちをしていた高野とSさんのところに、信号無視をして衝突した1台の乗用車が弾みで突っ込んできたというのが、概要である。

《この件においては『無免許運転していた少年』に大半の原因があるということとは道理である。では、なぜ彼はそのような行為に至ったのであろうか。彼の家庭環境や生い立ちを追って、つまびらかにしていこう。

《事故を起こしたのは『志賀龍一』という16歳の少年である。

「…実名報道か!?!…」

「…そうみたい…」

「チッ!」

高野は舌打ちをした。

「…続けるよ?」

「あ、ああ…」

《加害者は未成年であるが、既にネット上では氏名が特定されており、削除しきれないほど拡散しているので、今更匿名にする理由は見当たらないだろう。

《そして誰が加害者なのかを明らかにすることにより、不特定多数に向けられる疑いの眼差しを正し、風評被害を未然に防ぐことができ

る。

《従つて未成年であることを理由に情報を隠すのではなく、むしろ無実の青少年を守るために、氏名を公開するべきであるということをご理解頂きたい。》

…ふん！詭弁だな…

…なら、オレたちに対する一連の報道はなんなんだよ！…

高野は露骨にイヤな顔をした。

《少年は幼少期に両親が離婚し、その後の親権は母親が持った。》

《母親は2年後に再婚するが、新しい父親と少年は反りが合わず、小学校高学年頃より、家庭でも学校でも反抗的になり、度々、暴力を振るっていたという。》

《小学校を卒業後は、中学に進学するも実質不登校で、朝からラブホテル街をうろつき、出てきたカップルを待ち伏せ。『口止め料』と言つて現金を脅し取るなどの悪事に手を染めていく。》

《養父への反発か、この時期から『旧姓』の『青山』を名乗るようになり、傷害や強盗未遂事件で何度か、補導されている。》

《離れて暮らす実父と、頻繁に接触していたとの噂もある。》

《『非行』については当初、単独での行動が多かったようだが、徐々に仲間が増えていき、最終的には14〜5人程度のグループになつていたらしい。》

《その仲間には、自ら『青山龍一』を縮めて『青龍』と呼ばせていたらしい。我々はそのうちのひとりから、話を訊くことができた。》

《「ラブホテル街で繰り返し返していた恐喝について」昼、夜問わず、入口の前にいけば、結構、普通に歩いてきますよ。それで、出てきたところを押えるです。大抵はその場で『支払らわせて終わり』です。男に財布出させて、中を見て、入っている札を抜く。それ以上は、深追いすれば逆にやられますからね。それくらいがちようどいい。狙い目は…やっぱ明らかに『エンコー』してたつていうオッサンですかね。》

どんな仕事してるか知りませんが、オツサンほど金持ってますから。オンナからは獲りませんよ。だって、そいつらはまた男を連れてくるかも知れないじゃないですか」

《要は美人局（つつもたせ）の派生型である。彼の話によると、多いときには1日に10万円以上にもなったという。

《「2〜3時間居れば、何組かは出てくるんで。別に1日中そこにいなくてもいいですし、楽に稼げましたよ。ただ、噂が広まっちゃって、真似するヤツが出てきたり、サツが巡回するようになっちゃって…。パクられるヤツも出てきたし、そろそろヤベーかなって、オレらは手を引きましたけど」と悪びれることもなく語る。

《「青龍ですか？ちよつとなに考えているかわからないところがあった…。気にいらないうちがある、仲間でも殴る蹴るはありましたよ…。車の運転ですか？それは、さすがに…。でもあんなの、アクセル踏めば走るじゃないですか？別に難しいことじゃないんじゃないですか？…えっ、事故？ああ、知ってますよ…。運が悪かったんじゃないですかね」と述べる。

《『無免許運転』の上『信号無視』をして、衝突事故を起こし、3人の死傷を出した少年に対し『運が悪かった』と言われては、身も蓋もない。車の運転も『ゲーム感覚』だったのではなからうか。

《同乗していた少女について尋ねると「詳しくは知らない」としながらも「エンコーしてたん娘じゃないですかね？」と言葉を濁した。

《少年はこの春から、建設作業員として働き始めたが、素行は悪く、現場でも手を焼く存在だったようだ。

《我々の取材に対し責任者である親方は「…えっ？青山龍一？あれは使い物にならなかつたかねえ。返事はしねえし、時間は守らねえし、癩癩起こすし、最悪だな。根性がねえやな。なんとかしてやろうと思っただけど、なんともならなかつたよ。普通はよ、どんだけ中坊のときにいきがつてても、周りは『ヤンチャ上がりヤツ』ばっかりだからさ…先輩はある意味、絶対なんだよ。そういう道を歩いてきた兵（つわもの）の集まりだろ？ガキが楯突けるような世界じゃないのさ。



：いや、だけど、みんな仕事に関しては真面目だし、必死だよ。オレたちの仕事をバカにするヤツがいるかも知れないけど、働かないでプラプラしてる連中に較べれば、よっぽど一生懸命頑張ってるよ。：ただアイツはねえ：1ヶ月、もたなかつたんじゃないか？勝手に来なくなつちまつたんだから、解雇だよ、解雇！：へえ、あの事故起こしたの、アイツだったの？：まあ、ウチには関係ないけど：冗談じゃないよ、ここで働いていたなんて名前出さないでくれよな。同乗してた女の子？：さあねえ：とにべもない。

《その後『関係者』に当たってみたが、一様に今回の件での関わりを否定。背後に組織などはなく、彼単独での行動（事故）であった可能性が高い。

《では、少年と少女の関係は？車の所有者は誰なのか？なぜその車を入手できたのか？

「まあ、細かい話はアレだけど、ここまでは概ねネットで晒されてる情報と大して変わらないな」

高野は少しイライラした感じで呟いた。

《その前に、この少年について調査していくと、驚くべき事実がわかったので、まずそちらから報告しよう。それこそが高野梨里選手と夢野つばき選手を繋ぐ『数奇な運命』だと言っても過言でない。

：いよいよ本題か：

《少年が幼少期に両親が離婚したことは、先に述べた通りであるが、その理由は少年の父親が起こした『交通事故が原因』だというのだ。

《彼の父親は、自身が5歳の時、勤務中に飲酒運転で、横断歩道を渡っていた男性を撥ねて死亡させており、危険運転致死罪で実刑6年の判決が下っていた。その父親が服役中に母親は離婚し、少年を引き取った。

《従って彼は（籍は抜けていたとは言え）父と2代に渡り、死亡事

故を引き起こしたことになる。

《さて、この話で「ピン!」ときた読者は、相当の芸能通か、又は夢野つばさファンかも知れない。夢野も小学4年生の時に父親を、同様の事故で亡くしているのだ。

《ただし、これだけなら、だからどうした…という話である。交通事故の死亡者は年間3万人前後いる。さほど、驚くべきことではない。

《だが少年の父親と、夢野の父の加害者が『同一人物』だとしたら、どうだろう。話は別ではないか？

「えっ?」

「マジか!？」

朗読していたつばさと、それを聴いていた高野が同時に声を上げ、思わず顔を見合わせた。

「パパを轢いたのが…」

「コイツの父親だあ!？」

「…」

「…」

しばしの間、病室を沈黙が支配した。

少し声を震わせながら、つばさがその先を読み進める。

《我々はその事実を知った時、啞然として言葉を失った。そんな韓流ドラマのようなことが、現実にあるのかと。しかし、これは紛れもない事実である。

《つまり少年の父親は、夢野つばさの父の命を奪い…自身は夢野つばさの恋人の命を奪おうとしたのである。これが計画的に仕組まれたことでなければ、なんと言おう。まさにこれこそが『呪われた運命』

というのではないだろうか!!

《蛙の子は蛙。離れ離れに暮らしているようにとも、少年には確実に『悪魔の遺伝子』が引き継がれていたのであった。

「…『呪われた運命』とか『悪魔の遺伝子』ってのは、大袈裟だけど…さすがにこれは…オレも驚いた…」

「…そんなことって…」

そう言うと、つばさの目からポロポロと光るものが落ちた。

それは、あまりに突然訪れた感情。

父親を亡くしてから人前で泣かない…泣くときは湯船の中…と決め、ずっとそれを貫いてきた『綾乃』であったが、この涙は不意を突かれて、止めることができなかった。

「ぐ、ごめん…ちよつと、お手洗いに行ってくる!!」

つばさは、両手で顔を覆いながら、部屋を走って出て行った。

「チヨモ!?!」

高野はそう叫んだものの、あとを追いかけることはできない。

行った先がトイレであるのなら、戻ってくるのを待つしかなかった。

…それはシヨックだなあ…

…自分の父親を殺した男の息子が、今度はオレを殺しかけたんだからなあ…

…もうひとつシヨックなのは…

…この少年が、父親から何も学んでないってことだな…

…同じ道を歩んでどうするんだよ…

高野はつばさの心中をおもんばかる。

そして、これ以上、彼女に朗読させるのは酷だと、雑誌を手に取り、自ら黙読し始めた。

『そこで、まず我々はこの少年の家を訪れた。しかし、インターホンを押しても応答がない。近所の住人によれば、事故が起きてから、姿を見ていないという。夜中に荷物をまとめて出て行ったとい目撃情報もあった。いずれにしても、今はここには住んでいないようだ。』

『次に、商社の営業をしているという養父の職場を訪ねた。仕事が終わるのを待って駐車場に現れたところを直撃したのだが「私には関係ない。息子でもなんでもありませんので」と、足早に車に乗り込み、走り去ってしまった。』

…関係ない…か…

この言葉を見た高野に…怒り…悲しみ…哀れみ…いろんな感情が溢れてきて…そして虚脱感に襲われた。

…どいつもこいつも、ろくなもんじゃねえ…

心の中で吐き捨てた。

くつづく

この世界は哀しみに満ちている

しかし、記事はこれで終わりではなかった。

正直、もうどうでもいいと思っただが、つばきはまだ戻ってこない。

高野は仕方なく、記事の続きに目を通した。

《我々はもうひとり、この事故に関わるキーマンを取材した。それは少年の実父である。彼は今、4年余り前に刑期を終えて、関東圏内の某所で一人暮らしをしている。定職にはついていないようだ。

《散歩に出てきたところに声を掛けると「ここまでくるとはね…」と苦笑いした。どういう要件か悟った様子だ。近くの公園のベンチに腰を下ろし、話を訊いた。単刀直入に事件について質問してみると次のように語った。

《「息子が死亡事故を起こしたことは聴いたよ。残念だよね。だけどさ、一緒に乗っていた女の子はシートベルトしてなかったみたいじゃない。ダメだよね、それは守らなきゃ」と、いきなり被害者を批判した。

《すかさず我々が、そもそも無免許運転に原因があるのでは？と指摘すると「その車は息子が盗んだの？違うでしょ？誰だか知らないけど、子供にそんな自動車（オモチャ）を渡した方が悪いんだよ」と予想外の言葉が返ってきた。

《さらに過去に自身が起こした事故の被害者の娘が『夢野つばき』であることを伝えると「へえ…その子供が？それは知らなかった…ふん、そう…親はなくても子は育つんだねえ。ああ、なら、伝えてほしいな…オレは悪くないと。アンタの父ちゃんが勝手に車の前に出てきたんだよ」と言っただけだ。

《しかし飲酒運転であったことは明白で、実刑判決が下り服役していたわけである。そんな言い訳は通用しない。それでも「冗談じゃな

い、オレは酔っ払ってなんかいなかったんだよ。あんな間違った判決、未だに納得しちやいなえよ。そのせいで、オレは仕事をやめさせられ、家族はバラバラになっちまったんだ。怨んでも怨みきれないね」と語気を強めた。

『さらに10年の時を経て、今回の事故が『リンク』したことを告げると「息子がその恋人を轢きかけただって？偶然とは言え、凄いな。ははは…その2人はよっぽど前世でオレたちに悪さしたんじゃないの？」とのたまう始末。まったく反省の色がない。これには普段、鋭く対象者に切れ込んでいく弊記者も、呆れて二の句が出なかつたという。

『出所してからほぼ無職だというこの父親。1、2ヶ月に一度、息子から生活資金を貰っていたらしい。その金とはもしや…。「そんなことは訊くだけ野暮ってもんよ。いいじゃねえか、それが親孝行つてヤツよ。デキた息子だろ？」と我々に自慢する。

『話を訊き終え、帰り支度を始めると、彼は右の手のひらを我々に向け「取材料」と言ったのだった。

…クズ過ぎる…

…当事者でなければ、笑っちゃうかもしれない…

…或いはそのイキっぷりに感心していたかもしれない…

…よくは知らないが、この親父も初めは真面目に働いていたのだらう…

…子宝にも恵まれ、幸せに暮らしていたのだらう…

…だが、どこでどう間違ったのかアルコールの誘惑に負けてしまった…

…そして、いつからか運転中に飲酒をするようになり…ついに人を殺めてしまった…

…刑期通りに出所しているとところをみると、服役中はそれなりに真面目に過ごしていたのだらう…

…ただ、それはあくまで表向きの態度で、内心は違ってたってことだ

…もしくは出所してから、考え方が変わったか…

…アル中?…

…心神耗弱状態?…

…『被害妄想』…『逆恨み』…そんな感情に支配されているようだ

…息子の事故を知ってこうなったのか…以前からこうだったのか

…まともな思考回路ではないことは確かだ…

…それと…

…この親父にチョモの話をしたのは間違いだったんじゃないか?

…夢野つばさは市井に溶け込んでる一般人ではない…

…狙おうと思えば、いつでもどこでも、狙うことができる…

…まさか、そんなことは起きないと思うが…。

…少年にとつては、こんな父親でも愛おしかったのだろうか…

…甲斐甲斐しく生活資金を援助していたとは…

…そこは恐らく彼にしかわからないこと理由があるのはずだ…

…新しい父親とは馴染めなかったらしいが、彼にとつては幼き日の

…父親との楽しかった思い出だけが『現実(リアル)』だったのでは…

…きつと大好きだったんだろう…

…もしかしたら、この父親は子煩悩で親バカだったのかも知れない

…いい思い出というのは、どんどん美化される…

…少年が旧姓を名乗ったのは、単なる反発だけではなく、自分は『青山の息子』だという、彼なりのアイデンティティだったのか…

…そして、父親も唯一、自分に寄り添ってくれる息子が心の支え

だったということか…

記事を読んだあと、この父親に一瞬『殺意を抱いた』高野のだったが、冷静になってみると、少しだけ胸が苦しくなった。

…なんか、切ない…

それぞれにそれぞれの立場がある。

…しかし、この話を美談にするつもりはない…

…彼が父親に渡していた生活資金というのは、恐らくクリーンな金ではない…

…人々を脅したり、傷つけたりしながら奪った金だ…

…どんなに親子の絆が固かろうと、それとこれとは別の話…

…そして自らの不法行為により、人を殺めてしまったという事実…これはそんな言葉でごまかすことはできない…

「ごめん…ちよつと、ワケがわからなくなっちゃって…」

高野がそこまでの記事を読み終わり、そんなことを考えていると、つばさが病室に戻ってきた。

目は赤いが、涙は止まっていた。

「ああ、オレもワケがわからない…特にこの親父はかなりヤバイ」

高野が呟く。

「そうなの?…」

「できれば、お前には読ませたくない。気分が悪くなるだけだ」

「えっ…」

「こんなヤツに殺されちゃったんだったら、親父さんも浮かばれない…」

「梨里…」



「事実は小説より奇なり…か。確かにビツクリする話ではあるが…オレは殺されちゃいない。生き残った。そう簡単に『数奇な運命』で片付けられてたまるかよ!!」

高野は吐き捨てるように言った。

つばさは新文を手にとる。

「オレはやめておいた方がいいと思う。だけど、被害者の知る権利つてのもある。だから、どうするかは自分で決めろ。ただし…読むなら限りなくブルーになることは間違いないから、覚悟しておけ」

「…わかった…」

そう言うつとつばさは、逡巡することなく黙読を始めた。

「…そうなんだ…」

「読み終わったか…」

「うん…キミの言った通りね。ワケがわからないわ…でも…ちよつと哀れかな…」

「どつちが?」

「2人とも…。人を撥ねておいて、この期に及んで謝罪の言葉もない父親もそうだし、何が正しくて何が悪いのか判断できない少年もそうだし…」

「哀れか…」

高野はその言葉を呟くと、黙り込んでしまった。

「…」

「…」

「あ、ねえ…この続きって読んだ?」

この部屋の…時間が止まりそうなくらい澱んだ空気を嫌うかのよう  
うに、つばさが高野に訊いた。

「続き? いや、まだ…」

「ここまで来たんだし、折角だから最後まで読もうか？」

「あ、ああ…そうだな…」

《さて、ここまでは少年の生い立ちを中心に、事故に至った背景を探ってきたわけだが、ここからは前半に挙げた疑問を説明してこよう。

《まず、車に同乗して亡くなった少女であるが、少年のようにいわゆる『不良』であったか？という点、少し違う。彼女は幼小中高一貫教育の有名私立校に通っていた『お嬢様』である。この春からは高校生となっていた。

《成績は悪くなく、学校でもトラブルはなかったようだが、近所の住民によれば、中学生頃から夜遊びが激しく、度々朝帰りする姿を目撃したという。

《我々が独自に入手した情報によると（前述の少年の仲間が語った通り）中学2年生の頃から援助交際を繰り返しており、その時に少年とは知り合ったことが判明。当初は少女も『強請られる立場』だったようだが、その後、徐々に『友人のような関係』へとシフトしていったと見られる（美人局のビジネスパートナーだった可能性もある）。

《そして驚くべきことに、この少女の父親が事故車両の持ち主であったのだ。

《その人物こそ都内で不動産業を営む会社社長Y氏（66歳）である。父親は金融業で財を成した実業家で、そのセレブな生活ぶりは何度かTVでも紹介されているのため、目にした方も多いだろう。

《Y氏には死別した前妻との間に3人、再婚した後妻（37歳）との間に1人の子供がいるが、この子が亡くなった少女であった。

《我々は、なぜ少年がその車を運転するに至ったのか？その謎を解くためY氏を直撃したが、彼は終始無言を貫きはコメントを得ることはできなかった。

《とある関係者からの話によると、自宅には高級外車などが7〜8台ほどあり、Y氏以外にも家族（息子、娘）が乗車していたとのこと。現在警察が当時の力ギの管理状況などを含め、捜査中だという。

「援交ねえ…そういう家庭環境なら、小遣い稼ぎってワケでもなさそうなんだけどなあ」

「だよね」

「ストレスか？」

「ストレス？」

「ああ。少年と違って、こっちの記事はネットほど詳しく書きちやいないけど、上3人は相当優秀みたいだし…1人だけ腹違いとか、その後妻が台湾人だとか、まあ、そんなことが色々あったのかもしれないな。これはオレの想像だけど」

「なるほどね…」

「だからって、同情するつもりは一切ないけど」

くつづく

## 繋がった点と点

「あ、まだ次のページに記事の続きがあった…えつと…」

《ところで、このY氏だが…実は夢野と浅からぬ縁がある。

「えっ!？」

読み上げていたつばさ自身が、驚いた。

「おいおい、またかよ」

「私は何も知らないけど…」

《Y氏は4人兄妹弟（きょうだい）の長男である。その直ぐ下の妹の息子（つまり甥）は、某IT関連企業の代表取締役である。会社はスクールアイドルの甲子園といわれる『ラブライブ』のメインスポンサーであり、自身は大会をアキバドーム開催までの規模に引き上げたメンバーの一人でもある。我々の記事でも取り上げた『M's』の海外ライブを成功に導いた影の立役者とも言われている。

「…うそ?…」

「知ってるの?」

「知ってるも何も…これって『水谷』さん…」

「水谷?」

《そして今は夢野が所属する女子サッカーチームのスポンサーでもある。

「あっ!」

「そうなの…」

有名女子サッカー選手を何人も輩出していたとはいえ、まだ地域リーグで戦っていた『大和シルフィード』。

そこに夢野つばさは、諸々の縁（えにし）と当時の社長の熱意により、半分『広告塔』の役割を担って入団した。

広告塔とはつまり、つばさの知名度を持って、チームの運営資金を集めること…すなわちスポンサーの獲得である。

その結果、胸には（アーティストのシルフィードとして）CM曲でタイアップした菓子のロゴが入り、背中にはIT関連企業の名前がプリントされた。それ以外にも数社がスポンサーとして付き、アマチュアチームとしては充分過ぎるバックアップを得たのだった。

つばさは選手兼リポーターとしてWebを通じて、チームのニュースを発信することを任されていたのだが、まさにそこに関わっていたのが件（くだん）のIT企業であったわけである。

「チームの公式行事とかで直接会ったこともあるし…」

「…世の中、狭いっていうか…逆にお前の顔が広いつてことだろ？これを人脈と言っているかどうかは知らんけど…少なくともサッカー界と芸能界と、両方に身を置いているわけだし」

「う、うん…まあ…」

「確かにこの記事の内容が本当なら、ちよつと気味が悪いなと思うけど…」

「よくわからなくなってきたわ…」

「こういうときは関係図を書くのが一番だ。何か書くものは？」

つばさが自分のバッグからボールペンとメモ帳を取り出した。

「まず、オレ…チョモ…」

高野の言葉に従い、つばさが書き取っていく。

「チョモの親父さん…で…事故死させたのが青山某っていう」

「青山正義（まさよし）」

「!!」

「覚えているわよ『犯人』の名前くらい」

「正義ねえ…今となつちや、皮肉な名前だな…。それで、その息子が、今度はオレを襲ったと…」

「…」

「さらに、同乗して亡くなった少女がいて、この父親の妹の息子が、つばさのチームのスポンサー様だった…と、こういうわけか」

「そうだね…」

「…」

「…」

「まあ、この水谷って人は、事故とは直接関係ないからな、こじつけつて言えば、こじつけだろ」

「う、うん…そうだよね」

「この少女の親父まではさ、管理責任があると思うけど」

「だよね…それより…」

「実はまだ続きがあるみたいで」

「何の？」

「記事の…」

「あん？」

「さつき、一瞬文字が見えちゃったんだけど、そっちの方が気になって…」

「ん？」

《さらにY氏の6歳下の弟(60歳)はB学園の学長をしているが、この学校はかつて夢野が中学1年生時に在学していた学校である。夢野は2年生からモデルとして活動を始めたため、『ゲージ校』に転入しているが、その背景には『雑誌に掲載された写真』を巡って学校とト

ラブルとなり、退学を迫られたとう経緯がある。この辺りの夢野の経歴については、読者の皆さまの方が詳しいかもしれない。

「学長の苗字は『横山』だったはず」

つばさがポツリと呟いた。

…ネットに晒されてた少女の名前は…横山春蘭だったか…

高野も心の中で呟いた。

つばさの脳裏には『あの日のこと』は、今もハッキリ焼き付いている。

母親とJ―BEATの編集長の永井と学長室に出向き、屈辱的な『判決』を受けた日のことを。

…確かに、あそこでああならなければ、今の私はないわけだけど…

時折、あの時、実質『退学を言い渡された』ことが良かったのか、悪かったのか自問自答することがある。

答えは永遠に出ないのだろうが、今は歩んできた人生が概ね上手くいっているので、そのこと自体怨むような考えは持っていない。

逆に少し感謝さえしていた。

しかし、その次の文字を読み進めていくうちに、つばさはその気持ち握り潰されていく。

≫B学園は規律に一際（ひとときわ）厳しい学校として有名だが、果たして身内（学長からすれば少女は姪にあたる）が起こした、破廉恥かつ無法極まりない行動に、教育者としてどう説明責任を果たしているののだろうか。

≫もうひとつ。実はこの学長と、当時、高校のバレーボール部の顧問であった学長の次男（29歳）には、大きな嫌疑が掛けられている。

4年ほど前に在学中の女子部員が自殺したのであるが、その原因が顧問の性的虐待ではないかという疑惑が持ち上がっているのである。

「!!」

…まさか?…

つばさはもちろんのこと、高野もピン!ときた。

「…弘美?…」

《女子部員の名前は『Hさん(享年17歳)』。小学生の頃からバレーボールの才能に恵まれ、背は低いながらも将来を嘱望されたセッターであった。中学は特待生としてB学園に進学。(先に述べた通り、途中で転入してしまった為)1年だけが夢野とはチームメイトでもあり、レギュラーセッターを争い切磋琢磨していた中だという。しかし、3年時に全国制覇を果たすも、高校に進学した翌年、膝を故障し、残念ながら選手生命は絶たれてしまう。それでもマネージャーとして部に残り、スタッフとして懸命に部を盛り立てていたのだったが…ある日、とある場所で遺体となって発見されたのである。遺書はなかったが、現場の状況から自殺と見られている。

《当初は『膝の故障を苦にした挫折』が原因と見られていたのであるが、最近になって遺族が、Hさんは当時の顧問から性的虐待を受けていた旨の話友人から聞いたとして、弁護士と共に独自に調査を開始。この度、その容疑が固まったとして告訴する準備を進めているという。さらに学長はこの事実を把握していながら、隠蔽したのではないかともしられているが…今のところ両者とも関与を否定しているらしい。いずれにしても今後、この名門校が一大スキャンダルに晒されることは間違いない。

《余談ではあるが、Y氏から見て一番下の弟(51歳)は、高野の



父（47歳）と同じ大学の出身で先輩にあたる。お互いテニスサークルに所属しており、面識はあったと思われるが、さすがに2人との間になんらかの因果関係を見つけ出すまでには至らなかった。

《しかし、いかがであったろうか。これらの事実を突詰めていくと、夢野はY一族に振り回されてきたことがわかる。

《高野梨里と夢野つばさ…日本のサッカー界を引つ張る若きエースたちは、このように複雑に絡みあった数々の奇妙な縁（えにし）の中で生きていたのだ。これを『数奇な運命』と言わずして、なんと見えよう。

《今回の特集は我々にとって、非常に興味深いものであった。しかし、これで終わりではない。まだ明かされていない謎がある。そして、新たに生まれた疑問もある。この先も総力を挙げて、それらを解明していこうと思う。もしかしたら、まだ2人には、思いもかけないような事実が隠されているのかもしれない。判明次第、適宜報告しよう。

くつづく

心配にならない…わけがない

高野とつばさが病室で『週刊 新文』の特集を読んでいたのと、ほぼ同じ時刻…。

『穂むら』の2階の一室には、その部屋の主(あるじ)と妹…そして海未が集まり、同じように記事を読んでいた。

「…以上が、今回の特集の内容です」

海未が雑誌を。パタンと閉じた。

「なんか、どつと疲れたね?」

「読み上げていたのは私ですが…」

「聴いているだけで、疲れたってことだよ」

穂乃果は自分のベッドに仰向けでバタツと倒れる。

「う〜ん、話が複雑過ぎるう…」

雪穂もずつと緊張しながら話を聴いていた為か、大きくひとつ伸びをした。

「はい。なんだか推理小説の前半部分が終わったようです」

「なるほど言われてみれば『横溝正史』みたいですね。人間関係がドロドロしてて」

「ヨコミゾセイシ?」

「お姉ちゃん、横溝正史も知らないの? 金田一耕介が活躍するシリーズを書いた作家だよ」

「はい。日本ミステリー界の巨匠です」

「さすがに名前くらいは聴いたことあるでしょ? 『犬神家の一族』とか『八墓村』とか」

雪穂と海未が矢継ぎ早に畳み掛ける。

「ああ、あれね。湖の中で…よいしょっ…こうなってるやつ」

と言うと穂乃果は、ベッドの上で三点倒立をして、脚を左右にパカツと開いた。

「お姉ちゃん…やりたいことはわかるけど…パンツ見えてるよ…」

履いているスカートの裾が、バサツと落ちて、穂乃果の顔を隠す。

「えへへ…スカートだったことを忘れてた…」

「忘れますか!!」

海未が呆れて、雪穂の顔を見る。

妹は『理解不能』とばかりに、肩をすくめた。

「それにしても…つばささん可愛そうですね…」

雪穂は気を取り直して海未に話し掛ける。

「はい、できれば知らなかった方が良かった情報かも知れませんが…」

「自分の父親を轢いた人の息子が、今度はその恋人を轢いた…それだけでも凄いことなのに、その同乗者の一族が、自分の人生に関わってきた人ばかりなんて…ありえないよね?」

スカートを直しながら、穂乃果が2人の会話に参戦する。

「そうですね。そのうちのひとり、あの『水谷さん』だとは…」

「まあ、水谷さんは別に、つばささんに何か悪いことをしたわけじゃないけどさ」

「記事にはμ'sとも繋がりが深いみたいを書いてあるけど?」

「そっか、雪穂は水谷さんを知らないんだ」

「初めて会ったのは…アキバで行われた『利き米コンテスト』の時でしたね」

「花陽ちゃんとA—L—I—S—Eの英玲奈さんが勝ち上がった決勝の、5人の中にいたんだよね。まさかそんなに凄い人だとは思ってなかったけど」

「そこで私たちは1曲披露することになって」

「あ、確かA—L—I—S—Eに挑発されて…即興で『愛してるバンザイ (アカペラ ver.)』を歌ったんですよ?」

「挑発とい表現が正しいかどうかはわかりませんが…」

「…で…それを観て、この水谷さんがスクールアイドルに興味を持つ

てくれたんだよね?」

と穂乃果。

「はい。ラブライブのドーム開催のスポンサーになるキツカケになったと仰ってました」

「それで、お姉ちゃんたちの海外ライブをバックアップしてくれたのが…」

「この水谷さんです」

「なるほど。じゃあ、お姉ちゃんたちのブレイクは、ある意味、この人のお陰でもあるんだ」

※詳細は#82486『Can't stop lovin', you!』〜花陽ちゃんへの愛が止まらない〜の『にご編』『ごとり編』を参照願います。

「はい。ですが、遡れば花陽がコンテストの決勝に残ってくれたお陰でもありますし、その話を持ってきた『にご』のお陰でもあります」

「あはは…海未ちゃん、それを言ったらキリがなくなるって」

「ええ、それはわかっています」

「まあ、この間の高野さんの話を思い出せば、そうも言いたくなるけどさ」

「高野さんの話? 『IF』の世界が、どうのこうの…ってやつ?」

「雪穂にも話たっけ?」

「なんとなくは…ね。お姉ちゃんの説明が下手で、理解するのに苦労したけど」

「どうして、そういうことばかり言うかな?」

「事実だもん。でも、そっか…確かにそこで曲を披露しなかったら、海外ライブはなかったかも…ってことだもんね? うん、そう考えるとラブライブはこんなに大きくなってなかったかも知れないし、スクールアイドルもマイナーなままだったかも…か。にご先輩と花陽先輩に大々大感謝だね!」

「いや、雪穂。その前に、sを立ち上げたのはお姉ちゃんに感謝しなさいよ」

穂乃果はベッドの上に仁王立ちした。

「海未さん、本当にこんなお姉ちゃんに付き合ってくれて、ありがとうございます」

「って…アレ!？」

雪穂のお約束の返しに、コントのようにコケて、ベッドから転げ落ちる姉。

「だからパンツ見えるって…」

そして再び妹から指摘をされた。

「私たちのことはどうでもよいのですが…」

…つばささんのことはかなり心配ですね…

海未はそんなことを考えながら、雪穂が出してくれた…すっかり冷めきってしまった…お茶を啜った。

「ちよつと、シヨック大きいよね」

「うん」

「この少年とその父親のこともそうだけどさ」

「これでしょう？バレーボール部員の自殺の話…」

星野はるかの問いに、水野めぐみは黙って頷いた。

2人は、新大阪に向かう新幹線の車内でこの記事を読んだ。

夢野つばさのメンタルの強さは、よく知っている。

だが、今回の記事は…部外者の自分たちさえ心が痛むのである。当事者が大丈夫であるはずがなかった。

「確かこの人さ、綾乃さんに『別れの挨拶』をしたあと、自殺しちゃったんだよね?」

とはるか。

「うん。あれからしばらくは、さすがに立ち直れなかったもんね。なのであの時、気付いてあげられなかったんだろう…て」

めぐみは車窓に流れる景色に視線を移す。

既につばさは音楽活動を休止しており、一緒に活動はしていなかったが、高校では顔を合わせていた。

1週間ほど体調不良を理由に休んだはずだ。

それまで2人の前では常に明るく振舞っていたつばさだったが、その時に初めて見た彼女の陰の部分…。

あとから、それが父親の事故死が大きく影響を及ぼしていることを知った。

以降、極力、つばさの前では『死』に関連する言葉は避けている。

「去年だっけ? 3回忌やったの」

「うん」

めぐみが外を眺めながら返事をする。

「やつと落ち着いたって頃にこれか…」

「家族はずつと戦ってたんじゃない? 自殺した原因が本当はなんだっただか…その答えがやつとわかった…」

「…そういうことか…」

「その原因が…性的虐待っていうのが、ことさらショックだよね…」

「当時、自殺した理由って『膝の故障が原因で』みたなことだったと思うけど…」

「家族にも知られたくなかったんじゃない? キズモノにされてました…なんてこと」

「これが本当なら許せないね…」  
「そうだね…」

…綾乃さん…

めぐみは心の中で「頑張つて」と呟いた。  
その想いは、はるかも同じだった。

「つばさ…大丈夫ですかね？」

「どうかな…。通常時のメンタルはメチャメチャ強いけど、人の死が絡むと、あり得ないくらいボロボロになっちゃうから」

「優子さん、1回、様子見にいきませんか？また落ち込んでるようなら、直接『喝』を入れてあげないと」

「オリンピックの時みたいに？それと今回のことは、状況が違うわよ。  
『ねえ、暴力はいけないんだよねえ』」

と『優子』と呼ばれた女性は『お腹の子』に向かってを囁いた。

彼女はの名前は『中村優子』…。

旧姓『羽山』。

元なでしこジャパンの名MF。

大和シルフィードで現役生活を終えたあと、チームのトレーナーだった中村と結婚…現在妊娠5ヶ月という身である。

そして、2人の…いや、2、5人の愛の巣を訪れているのは、緑川沙紀。

羽山優子の弟子であり、つばさの親友である。

今はオリンピックブレイク中。

秋になればリーグ戦が再開される。

沙紀は練習のオフ日を利用して、ここに來ていた。

「つわりも治まってきたし、別に行くのは全然構わないけど…今は少しそっとしておいてあげたら？」

「だけど…」

「この間と違って『高野くん』もそばにいるんだし」

「そこなんですよー！」

「えっ?」

「優子さんだから言うんですけど…彼の存在って、つばさにとってプラスだと思えます?」

『ヴェル』…」

今でこそ『みさき』と呼ばれることが多い沙紀だが、優子は今も、昔からのあだ名でそう呼ぶ。

「それはね、彼のことは私だって理解してますよ。いい男だと思うし、悪く言うつもりはないけど…でも、今、つばさにはサッカーに集中して欲しいんです。オリンピックのリベンジもしなきゃいけないし、ワールドカップだってある。男にうつつを抜かしてる場合じゃないですよ」

「別にうつつは抜かしてないんじゃない?」

「…かも知れないですけど、これで結婚・引退なんてことになったら、私はどうすればいいんですか!?!」

「こらこら、そんなに大きい声を出さないでよ。胎教に悪いわ」

「あっ…すみません…つい…」

「ふふふ…ジェラシーね?」



「えっ?」

「つばさが高野くんに獲られるのが怖いんでしょ…妬かない、妬かない」

「なっ…なにを仰いますやら…」

「目が泳いでるわよ?」

「いや…その…私はただ…チームメイトとして…その…」

「気持ちはわかるけどね」

「で、ですよね!?!」

「あれだけのプレーヤーだから、20歳やそこらで引退するのは勿体ないと思うし…世界で活躍できると思ってるから」

「世界…」

「あなたもよ、ヴェル」

「!」

「それは今回オリンピックを戦ってみて、充分実感したんじゃない?」「うくん、それなりにやれるかな…とは思ったけど…自信があるかどうかと言われれば…でも、つばさは確かにそうだと思います。やっぱり彼女は凄いです」

「うん、だから女子のサッカー界を考えれば、まだまだ続けて欲しいと思うの。でも、それは私たちが決められることじゃないわ」

「…」

「だけど大丈夫よ。あの娘はまだ満足してないわ。これで辞めるような娘じゃない。モデルから、女子サッカー界の頂点まで登り詰めた根性の持ち主なのよ? あんな結果に終わって満足なわけじゃない」「優子さん…」

「あのブラジル戦、5―1になっても諦めずに点を獲りいったのは誰? あなたとつばさでしょ?」

「あっ…」

「私、あれ見て泣きそうになっちゃったんだから。『すごい！この娘たち、まだファイトしてる！諦めてないよ』って」

「えへへ…」

「だから、きっと大丈夫」

「はい！」

「もちろん、今回、色々なことが記事になって…さすがに不安定だとは思うから、そこはあなたがカバーしてあげる必要があると思うけど…」

「はい」

「でも、もう叩いちやダメよ！ああいうことは1回しか効果ないんだから」

「わかりました」

「それと…」

「はい？」

「今後はつばさと離れた方がいいわね」

「えっ？離れる？」

「そう。同じチームで息の合ったプレーをするのは、もちろん素晴らしいことだとは思うけど、どっちかが欠けたら持ち味を出せない、機能しなくなるっていうのなら意味ないわ。だから、お互いのレベルを上げるためにも、別々のチームでプレーした方がいいと思う」

「…」

「まあ、2人とも海外に移籍することだってあるわけだし、黙っててもそういう日がくるかも知れないけど」

…考えてもいなかった…

…ずっと同じチームでプレーすると思ってたのに…

…私がつばさの力を一番引き出せるのに…

…つばさが私の力を一番引き出してくれるのに…

「ワードカップ、頂点を狙うんでしょ!?!まだまだ『個』の力を高めないと、とてもじゃないけど勝てないわよ。『引き出し』を増やさない」

「…」

「そんな不安な顔をしないの。大丈夫だって、ちよつとやさつとじゃ、あなたたちの『コンビプレー』は乱れないわよ」

優子は「ねえ?」とお腹をさすりながら、胎内の子に同意を求めた。

くつづく

## F u ・ b a l l (フースバル)

高野の予想通り、つばさにその知らせが来たのは、週刊新文の記事が出てから直ぐのことだった。

「お前に『女子ブンデスリーガのFFCフランクフルト』から、獲得のオファーが届いている。オリンピックでのプレーが、スカウトの目に留まったようだ。非常にダイナミックで、かつクオリティの高い選手だつてね」

クラブハウスに呼び出されたつばさは、チームマネージャーの『柱谷』から、そう告げられた。

「ブ、ブンデスリーガですか!」

サッカーを始めた当初は、ペレもジーコも知らなかったつばさ。

しかし、さすがに5年近くもこの世界に身を置いている。

その話がどれだけ大変なことか、瞬時に理解した。

つまりドイツからのオファーが届いたということだ。

ちなみにブンデスリーガとはドイツ語で『連邦リーグ』という意味で、基本的にはドイツ(またはドイツ語圏諸国)で行われているスポーツは、各々『○○ブンデスリーガ』という『連盟』の中で、競われている。

なので『バレーボール』『ブンデスリーガ』とか『バスケットボール』『ブンデスリーガ』とか『卓球』『ブンデスリーガ』などがあり、変わったところでは『チェス』『ブンデスリーガ』などもある。

もちろん、つばさが誘われたのは卓球やチェスであるはずもなく『(女子)サッカー』『ブンデスリーガ』だということは、言うに及ばずである。

異論はあるかも知れないが、ブンデスリーガは女子サッカー界にお

いて最高峰のレベルだといっている。

「残念ながら、既にリーグ戦は開幕している為、仮に移籍するとすれば…ビザの取得や、メディカルチェック等々の手続きを考えて、早くて11月…もしくはウインターブレイク（12月～1月）明けということになると思う。確か…シーズンは5月までだったかな」

と柱谷。

「ブンデスリーガ？私ですか？」

事の重大さは理解したものの、それが自分自身の話だという実感が無い。

つばさは再度同じ言葉を繰り返した。

『FFCフラנקフルト』といえば『UEFA女子チャンピオンズリーグ』において、歴代最多タイの4度の優勝を誇る、強豪中の強豪だ。チームとして夢野つばさを失うのは痛い、日本のサッカー界のことを考えれば、お前が世界のレベルで揉まれてくることは、悪い話ではない」

「は、はあ…。ですが、いきなりそんなことを言われても…」

「まあ、それはそうだろうな。しかし物事には期限がある。諸々のスケジュールを考えれば、ゆっくりと考えている暇はない」

「どれくらい時間はあるのですか？」

「そうだな…今から2週間というところか」

「2週間ですか！」

「まずは、お前が行く意思があるのか、ないのか？これが大事だ。これは早急に決断しなきゃいけない。行く意思がないのに、長々と回答を引っ張るのは失礼だからな。そして行くのであれば、代理人を通して、条件面での交渉だ。もちろん、この時点で、決裂する場合もある」

「…」

「まあ、代理人で言えば羽山優子や馬場聖子などを担当した『浅野くん』がいるから、彼に任せればいいと思うが」

「はあ…」

「しかし仮にそこが上手くまとまっても、メデイカルチエックで不合格となる場合がある。肩の痛みは…だいぶ回復したと思うが、或いはその辺りが確認ポイントのひとつになるかも知れない」

「その意思表示は、どれくらいで…」

「3日…だろうな」

「3日ですか！」

「突然で戸惑っているのはわかる。だから羽山や馬場あたりにも相談してもいいと思う。もちろん家族にもな。…ただ、決めるのは、周りの人間じゃない。お前自身だ。お前がこのあとサッカー選手としてどう生きていくのか…それはお前が決めることだ」

「…」

「実はな…緑川にも海外リーグからオファーが来ているんだ。お前と入れ違いで…1時間ほど前に、その旨を通達した」

「えっ!？」

「緑川は…フランスリーグ…『デイヴィジョン・アン』の『オリンピック・リヨン』だ。こつちもUEFA女子チャンピオンズリーグではフランクフルトと並んで、4度の優勝を誇る強豪だ」

「それでヴェルはなんて…」

「即答で『行きます！』って答えたよ。」

「!!」

「国は違えど、お互い強豪チームだ。場合によってはチャンピオンズ

リーグの決勝で当たるかもな」

「ヴェルが…移籍する…」

「私も頭が痛い。チームの看板選手が2人もいなくなれば、戦力的にも運営資金も大きくダウンすることは否めない。それでも広い目で見れば、君たちのような才能あるプレーヤーが国内の環境でプレーしていても、これ以上のレベルアップは難しい。緑川はそのことをよく理解していて、ふたつ返事でOKしたよ」

「ヴェル…」

「つばさ…」

マネージャーから通達を受けて数時間後、2人は地元の居酒屋で落ち合った。

チームの関係者も利用している、顔馴染みの店である。

奥のこじんまりとした小上がりに、沙紀がいた。

つばさが着くと簾が下ろされ、個室状態になった。

「グレープフルーツサワー」

「カシスオレンジ」

決してアルコールが強いわけではないが、飲めないわけでもない。

ただ、お互いアスリートである。

頼んでも、1杯く2杯、そんな程度である。

食べ物は既に沙紀がオーダーしていたようで、飲み物とほぼ同時に、何皿か運ばれてきた。

「ごめん、適当に頼んじやったよ」

「あ、うん…ありがとう」

「…」

「…」

「乾杯…はおかしいよね？」

と沙紀。

「あ、でも…海外からのオファーだなんて…やっぱりおめでたいこと  
だと思うから…乾杯でいいんじゃないかな？」

「…そうだね…。じゃあ、カンパ〜イ！」

「カンパ〜イ」

二人はグラスを合わせた。

「フランス…行くんだって？」

『ボンジョワール』くらいしか喋れないけどさ…せつかくのチャンス  
だから」

「そっか…」

「本当はさ、直ぐに連絡しようと思ったんだけど、柱谷さんに止められ  
てね…。『つばさにはオレから話すから』って。だから隠してるつも  
りはなかったんだけど」

「ううん。別に気にしてないよ。きっと先にその話を聴いてたら、ク  
ラブハウスに行つてなかったかも…だし」

「つばさ…」

「だって…ヴェルと離れてプレーするなんて、今まで考えたことがな  
かったから…」

「そうだね」

「私が入ったとき、メチャクチャ喋る子だなんて思ったことを、今でも  
よく覚えてるなあ。あと、ことあるごとに監督に怒られてたことも」



「そ、そう?」

「私の周りは大人びた人が多かったから、結構新鮮だったよ。若いなっていうか、子供っぽいつていうか…」

「軽くデイスられてるわね…」

「あははは…そう聴こえた?」

「私は『化け物』だと思ったわ」

「うわっ、ヒドい…」

「綺麗な顔をして、なんて恐ろしいシュートを打つの!?!」

「練習初日のことだよ? マスコミ向けに、シュートしているシーンを撮らせるって話になって…パス出してくれたのがヴェルだったんだよね? すっごく悪意に満ちたボールだったけど」

「それはそうよ。こっちは『夢野つばさ』がこんなところに何しに来たの?』って感じだったし『なんで私が引き立て役にならなきゃいけないの?』って思ってたから」

「あはは…」

「だけど、アレを見せられたら、まあ、仕方ないか…みたいな。『一生、この人に付いて行こう!』って」

「うそだあ!」

「…思ったよ…」

「えっ?」

「思った」

「ヴェル…」

「最初はさ、アンタに対する反発心みたいなのが物凄くあって…いや、違うか。どっちかって言えば…マスコミに対する敵対心かな。アタシがどれだけ活躍しても、常に見出しは『夢野つばさ』だったから、どうしたら認めてもらえるんだろうって」

「…」

「でも、その気持ちがあたしのスキルを上げていったわけだし、それはそれで良かったって思ってるんだ。自分でいうのもなんだけど、あれで腐ってたら、今はなかったし」

「…」

「それにね…そりゃあ、あんたはさ、ルックスも良くて、実力もあつて…冗談じゃないわ」

…つて、妬んだこともあつたけどさ…つばさはつばさであたしとは較べものにならないくらいプレッシャーの中で闘ってるんだ…と気付いたとき、ああ、あたしってなんて小さいんだろうって思ったのよね」

「ヴェル…」

「そうなんだ…注目されるつてのはさ、活躍したときは称えられるけど、ダメだったときは逆に叩かれるつてことじゃん？ましてや夢野つばさは畑違いのところから入ってきて…口だけじゃなくて、ちゃんと努力して結果を出している。自分にそれだけの覚悟があるかって考えたとき、答えは『NO』だったの」

「そんなことないよ。ヴェルがどれだけサッカーに真剣に取り組んだか、私は知ってるわ」

「それはあんたがいたからよ」

「えっ?」

「だから『夢野つばさ』には、絶対に負けちゃいけない』そう思ったの。お陰で切磋琢磨してきたし、ゴールデンコンビって言われるようになった。まあ『つばさが主役』で『みさきは脇役』っていうのは気に入らないんだけどさ。そもそも『夢野つばさ』じゃなくて『藤綾乃』でしよ!」

と沙紀は笑う。

「そうなんだよね…」

つられてつばさも笑ってしまった。

「アタシはね…日本中で…ううん、世界中で一番、夢野つばさのいいところを引き出せるプレーヤーだと思ってるの。そして、私のいいところを引き出してくれるのが『夢野つばさ』だと思ってる」

「ヴェル…」

「だから、アタシもアンタと離れてプレーするなんて考えたこともなかった。一生、一緒にプレーするもだと思ってた」

「…」

「だけど…優子さんに言われたの。お互いの為に、一旦、別々になるべきだって」

「優子さんが？」

「それこそ、ついこの間、言われたばかりなんだけど…。週刊誌の報道が出て『アイツ、このままサッカー辞めちゃうんじゃない』って心配になってさ、優子さんのところの相談に行ったわけ。その時に、返す刀でそう言われちゃったのよ。離れ離れになつて、もつと揉まれて、個々のレベルアップをするべきだ…ってね」

「…」

「だから…この移籍の話はOKしたの。迷うことなくね…。それは怖いわよ。正直、自分の実力をそこまで過信してないし、そう簡単に通用するなんて思っていないし…言葉だつてわからないし、食べ物だつて

合うかどうかわからない。でも…でもね…」

沙紀の声が聴こえなくなった。

つばさはそれがどういう状況なのかはわかったが、彼女の『嗚咽』が止まるのを待った。

なんて声を掛けていいか、わからなかったからだ。

そして沙紀は搾り出すように言った。

「…上手くなりたんだよ。上手くなって、オリンピックもワールドカップも優勝したいんだよ。だから…だから、やらずに後悔するようなことはしたくない。やってダメでも、何が足りないのかがわかれば、それでいい。そう思ったんだ」

「ヴェル…」

「アンタはどうするの？」

「!？」

「行くんでしょ？ドイツ」

「それは…まだ…」

「ふざけないで!!」

「!？」

「私たちはまだ、何も成し遂げていないのよ！それとも、オリンピックに出れただけで満足なの？アンタはそんな中途半端な気持ちで、この世界に入ってきたの？だったら、アンタと共にしてきた5年間を返してよ！アンタとき、2人で頂点を獲ることを夢見てきた、この5年間を返してよ!!」

「…」

「…なんてね…」

「えっ」

「優子さんに言われた。…とはいえ、私たちがアンタの将来を決めることはできないって」

「…」

「色々な事情があるのはわかるけど…じゃないか…ごめん、やっぱり、わからない。…つらいだろうし、大変だとは思うけど…それがどれくらいのことなのか、アタシには想像つかない。だからさ、本当はアタシなんか口出しちゃいけないんだけど…でも、負けて欲しくない。あんなこじつけみたいな話、ぶち壊してほしい。だって、アンタは『夢の翼』なんだもん。その翼で夢を運ぶんだもん…でしょ？」

沙紀はそう言うと、おしぼりで目の下を拭き、ニッコリと微笑んだ。

くっくくく

## すれ違う2人

「ブンデスリーガかあ…」

「…うん…」

つばきは、沙紀と飲食を共にした翌日、高野の病室を訪れていた。もちろん移籍の件についての報告である。

『FFCフランクフルト』？」

「…うん…」

「なっ？オレが予想した通り、海外からオフアーが来ただろ？」

「…うん…」

「それにしてもまたドイツとはねえ…」

「…うん…」

「個人的にはアメリカの女子リーグもレベルは高いと思うけどさ、歴史が浅いし、ちよいちよチーム数が変わったりするしなあ…。それに較べればドイツは基盤がしっかりしてるから、いいと思うぞ」

「…うん…」

「…って、さつきから生返事ばかりだな…。もしかして…迷ってるのか？」

「…」

「あははは…贅沢！贅沢！身体が動くうちに好きなことができる。こんな贅沢はことはないって。オレは今、身に沁みてそれを感じてるんだ。羨ましくてしょうがない。『迷わずにいけよ！行けばわかるさ！』by アントニオ猪木…なんてね…はははは…」

「…」

「…なんだよ…そんな暗い顔するなよ」

「…うん…でも…」

「デモもストもない！…行つて暴れてこいよ！『Fliegeln  
es Traums』」

「えっ？」

「ドイツ語で『夢の翼』だ」

「あつ…」

「これは余談だけどき、その昔Jリーグに『横浜フリューゲルス』っていうチームがあつたんだよ。全日空が親会社で…チーム名は飛行機だけに『翼』。それをドイツ語読みしたのが『フリューゲル』ってことだ。もつとも、今はなくなっちゃつてマリノスに吸収合併されちゃつたんだけど…だから『横浜F・マリノス』の『F』はその名残つてワケ。それでオレ的には…『夢野つばさ』って名前を初めて聴いたとき、真つ先に浮かんだのこの『フリューゲル』って言葉なんだよ」

「…そう…なんだ…」

「…で…その時、ちょっと調べてみたんだ。じゃあドイツ語で『夢の翼』ってどう言うんだろうって？今は検索掛けると簡単に出てくるからじゃん？そうしたらこの言葉が出てきて…『夢』は『トウラウム』だつて。英語なら『ドリーム』だろ？おお、なんとなく似てるな…みたいいな…。オレは学がないから、ドイツ語どころか英語も話せないけど、そんなことがあつて、ずつと覚えてた」

「…」

「ドイツはさ、男子の選手も沢山在籍してるだろ？元々職人気質の国だから、生真面目で勤勉な日本人とは『性格的に』合うらしいね。女子はどうだか知らんけど」

「…そう…」

「そういうわけで、ドイツに移籍した女子も、わりと男子選手とは交流があるらしいしよ…って聴いてるか？」

「聴いてるよ」

「他人事だと思っただろ？お前のことだぞ」

「キミこそ、他人事だよ。こんな大事なこと、そう簡単には決められないって…」

「何を迷ってるんだよ？」

「それは…」

『みさきちゃん（沙紀）』はフランス行きを即決したんだろ？」

「そうだけど…」

「大和シルフィードも昇格させたし、地元にも充分恩返ししたじゃん。チームも移籍OKって言ってくれてるんだろ？何の障害もないじゃん」

「だけど!!」

珍しくつばさが声を荒げた。

「だけどじゃねえよ！」

つられて高野の声も大きくなった。

「!!」

「今、日本にいてもロクなことにならない。くだらない取材やなんやかんやで、日々の暮らしすらまともにできないだろ？こんな雑音の中で、サッカーなんかできないだろ？」



「…私はまだサッカーを続けるなんて言っていない…」

「…バカを言うな…」

「何がバカなの!?!…私がサッカーを教えるなんて頼まなければ、梨里はこんなことにならなかつたんだよ? 私が頼まなければ、海外でプレーしてたのは梨里なんだよ?それが、どうして私なのよ…」

「ああ!?!記事を気にしすぎだ。あんなの偶然の一致だ!」

「だけど、実際、そうじゃない!」

「違う!お前に関わったからこうなったんじゃない。そんなこと考えるな!」

「考えるよわ!!」

「チヨモ!!」

「梨里がこんな状態なのに、私だけサッカーしてていいの?私はそんなに薄情な人間じゃない!!」

「…オレを置いて、出て行けない…っつか…」

「…」

「…気にするなよ…オレはオレ、お前はお前だ。お前がどうしたいか?それが大事だ」

「…」

「それに…正直に言うよ。自分の夢を『オレのせいで叶えられなかった』なんて言われても困る」

「!?」

「そんなこと言われたら、オレは一生その十字架を背負って生きていかなくちやいけな。悪いがそれはごめん」

「誰もそうは言って…」

「わかってるよ！わかっている…。チヨモはそういう人間じゃないってことはわかっているさ。そんなことを言う人間じゃない…オレにはもったいないほどのデキた人間だ」

「梨里…」

「だけど、お前に気を遣われれば遣われるほど、自分が惨めになる。気を遣わせてしまっていることに対して、どうしたらいいのかわからないんだよ」

「梨里は…梨里は私をこの世界に導いてくれた。でも、私はその恩返しが出来てない」

「バカか！お前がサッカーを始めたとき言っただろ。将来チヨモが代表にでも選ばれたら『アイツを教えたのはオレだよ』って自慢させてもらうから…って。だから、もう十分だって。オレは満足してるよ」「バカ、バカって言わないでよ…」

「いや、バカだろ。頭はいいけど、何もわかつちやいない。オレはお前がいたから、頑張つてこれた。お前の存在が、オレを強くした。恩返しどころか、それ以上のものをもらってるよ」

「ヴェルも同じようなことを言ってた…」

「だろ？だからお前は、もうオレなんか気に遣わずに、やりたいことをやれ！やれるうちにやったほうがいい。それはお前が一番良くわかってるだろう？」

「!?」

「…人間…死んじまったら…なんにもできないんだぜ…」

「…」

「お前の親父さん…山下弘…」

「わ、わかってるよ、そんなこと!!」

つばさはそう叫ぶと、脱兎の如く、病室を飛び出していった。

「チヨモ!!待て!」

と呼び止めたものの、あとを追うことはできない。

…持ってきたバッグが置きっ放しだから、戻ってくると思うが…

それから時間はどれくらい過ぎたろうか。

5分経ち…10分経ち…20分経ち…

つばさは戻ってこない。

そして30分が過ぎた頃、病室のドアがノックされた。

…帰ってきたか…

「こんにちは」

「!!」

「お加減はいかがですか?」

「園田さん!」

「たまたま、近くまで用があったものですから…」

「たまたま?…あ、入って」

「はい、失礼致します」

「今日は…ひとり?」

「あ、はい。やはり大人数で押しかけるのはどうかと思ひまして…」

「別に何人でも構わないよ。μ、sみたいな綺麗な女性に囲まれるなら、大歓迎だよ」

…だから1人で来たのです…

「ん?何か言った?」

「い、いえ…あの…これ…穂乃果の実家の和菓子です。一番初めにお伺いしたときは、まだ召し上がれる状況ではなくて…ですが、もう、普通にお食事が摂れる様になったとお聴きしたものですから…」

「あ、わざわざ、ありがとうございます。そんな気を使わなくてもいいのに…」

「いえいえ…。それより、お二人ともなにか大変のことになってるようですね」

「えっ?ああ、新文の記事の話?」

「はい」

「ま、まあね。何がなんだか…オレたちもよくわからないんだよ。偶然っていやあ、偶然だし」

「特につばささんが心配なのですが…」

「つばさ…あ、ああ…まあ、大丈夫なんじゃない?あいつメンタル強いから」

「そうでしようか…」

「周りが気にしても仕方がないよ」

「誠の僭越ながら、もし私がお役に立てるようなことがあれば…」

「そうだね。その時は遠慮なく相談させてもらよ」

ガチャ…

「!!」

「つばささん!!」

「海未さん!?!」

「ご無沙汰しております。あれから直接お会いできずに…」

「そっか…」

つばさが、海未の言葉を遮る。

「えっ?」

「海未さんがいたんだっけ…」

「チヨモ!」

「…梨里…海未さん…今日は帰るわ…」

つばさは自分のバックを手に取ると「じゃあ…」と振り返りもせず  
に病室を出て行った。

「ま、待ってください!!」

海未があとを追い廊下に出たが

「ごめんね。今日はひとりにさせて欲しいの…」

とつばさは足早にそこから去って行った。

「高野さん…つばささんと…何かあったのですか？」

病室に戻った海未が訊く。

「いや…別に…」

「…という雰囲気ではありませんでしたよ」

「園田さんには、関係ないから」

「いえ、そうはいきません！たった今、何かあったら相談して下さい…  
と言ったばかりじゃないですか！お役に立てるかどうかはわかりませんが、話だけでも楽になると思いますよ…高野さんが私にしてくださいましたことです」

「うん…」

と一回唸った高野。

澁々ながら事情を話した。

「そうでしたか…。私は最悪なタイミングでお邪魔してしまったのですね…」

「だから、もう、そういうのはやめよう！誰がどうこうとか、そういうのはもういいよ！」

「!!」

初めて聴く高野の苛立った口調に、海未は一瞬言葉を失った。

「あ、ごめん。園田さんに当たるつもりはないんだ」

「い、いえ…」

「でも…」

と言ったきり、高野は口ごもる。

それから、しばらくして、その言葉の続きを口にした。

「オレの考え、間違ってるのかな？」

「…どうでしょう…お互いがお互いを思いやった結果だと思えますので、どちらの考え方も間違いだとは…」

「…」

「ただ…あの…参考になるかどうかは、わかりませんが…」

「？」

「実は私たちにも似たような経験がありました…」

「…」

「あれは私たちがμsを結成して、少し活動が軌道に乗ってきた頃でした。突然…この間、一緒にお伺いしたこと…に留学の話が持ち上がったのです」

「留学？」

「はい、ファッションの勉強をするために…パリに」

「パリ？」

「ですが、突然だと思ったのは私たちが知らなかっただけで…ことりは、随分前からその準備を進めていたのです。ただ、なかなか、先方から返事がなく…。その間に、sの活動を始めてしまいましたので…」

「つまり…その返事が、あとから来た?と…」

「はい…」

「それで?」

「ことりの夢でしたから、誰も止める者はいませんでした」

「そうだろうね」

「ですが、本当は…『行って欲しくない』『ここまで一緒にやってきたのに、どうして今なの?』という気持ちもありました」

「それは、でも…」

「はい。私たちのわがままです」

「だよね」

「それでも…それでも…『その気持ち』だけはことりに伝えるべきだと思います。もっと一緒にいたいという気持ちだけは、伝えたるべきだと思ったのです」

「…」

「代表して、穂乃果が空港まで行きました。そして…ことりに言いました…『行かないで欲しい』と」

「…」

「ことりは『うん』と返事をしてくれました。本当は止めて欲しかったんだと…その言葉を待っていたのだと…」

「…夢を…諦めた?」

「いえ、それはちよつと違います。彼女は私たちという『今』を選んで



くれたのです」

「…」

「正直、それでことりが留学しても、別に誰も文句を言わなかったと思います。ですが、本音を伝えずに見送っていたら、後悔していたかもしれない」

「本音…」

「高野さん『も』気を遣いすぎなのです。つばささんに対しても、私に対しても…。高野さんの気持ちを、つばささんは理解していると思いますよ。ですが、ひとこと欲しかったのではないのでしょうか？『本当はそばにいて欲しい』と…」

「えっ？オレが？」

「はい」

「あはは…そんなセリフ、言えるわけないじゃん！」

「言葉にしなければわからないことも、あるのですよ…」

「…」

「…などと、私が言える立場ではないのですが…ことりのときと状況が重なって見えたもので…」

「…そう…」

「すみません。つまらぬことを長々と…今日これにて私もお暇（いとま）させて頂きます。あとで、つばささんには私から一報入れておきますので…」

海未が深々とお辞儀をする。

「あ、ああ……わざわざありがとうございます……」  
彼女はドアの前で立ち止まると、もう一度頭を下げ、病室をあとに  
した……。

くっくくく

キミのくせに…

「それは海未ちゃん、2人の問題やと思うから…放っておくしかないんじゃないかなあ。えりちはどう思うん？」

「私も希と一緒にね。心配なのはわかるけど、海未がどうこうできる問題じゃないと思うわ」

「それはそうなのですが…」

海未からみて、こういう話を真剣に相談できるのは、μ'sの年長者しかない。

しかし、うち2人は社会人。

言葉は悪いが、一番時間が取れそうなのが、まだ大学生の絵里だった。

絵里は3年時には必要な単位を全て取得しており、今は就活中である。

しかし、既に何社か内定をいらしく、この時期それほど焦っている様子はない。

さすが元生徒会長である。

そこで海未は病院を出てから、絵里に連絡を取ったところ『おまけ』に希が付いてきたというわけだ。

希は、たまたま仕事が休みだったらしく、絵里とショッピングを楽しんでいるところだった。

そこで3人は、とあるカフェで合流して…冒頭の会話となったわけである。

「なんだかやるせないのです。お互いがお互いのことを思いやっているのに、2人の気持ち擦れ違っているようで」

「そやなあ…高野さんも迷ってるんやろうね？このままの関係でいるべきか…それともやめるべきか」

「!!」

「記者会見の内容とか、今までの海未ちゃんの話とか聴いてて思ったんやけど、やっぱり高野さんには『男としてのプライド』っていうのがあって、それが邪魔してるんやないかな」

「男の…プライドですか?」

「高野さん、言ってたやん…『格差婚とか言われたくない』って」

「はい、それは確かに…」

「マスコミへのリップサービスもあつたかもやけど…意外と本心なんやかいかな?」

「そうね…。本来なら『オレに付いてこい』って言いたいところだけど…でも、現状は自分がいつ復帰できるかどうかもわからない状態…。ジレンマみたいなのはあるかも知れないわね」

「…」

「一方、つばささんはサッカーを辞めて、高野さんを支える覚悟があつたんじやないかしら…」

「海未ちゃんやったら、どうするん?」

「えっ?」

「海未ちゃんが、つばささんの立場やったら」

「私…ですか?…私なら…サッカーを辞めます!」

「好きな人の為に尽くす?」

「はい」

「海未らしいわね」

「そうやね…。でも、それが重すぎると相手の男性に負担になること

もあるんよ」

「そ、そうなのですか？」

「だから恋愛は難しい…ただ好きって言うだけじゃ成り立たないの…」

「…希も絵里も、さも経験があるような言い方ですけど…」

「それは海未ちゃんよりは…」

「ねえ？」

2人は意地悪く微笑んだ。

…なんでしよう、この屈辱感は…

…私だって好きな男性くらい…

…あ、いえ…ダメです…

…高野さんは、つばささんの…

海未は、一旦、目の前にある抹茶ラテを口して、気持ちを落ち着かせた。

「でも海未ちゃんも覚えておいた方がいいかも。…ウチ、読んだんやったか、聴いたんやったか忘れてしもうたんやけど、好きな言葉があつてな…『恋から醒めたとき、それでも好きでいられるのが愛』…なんやって」

「ハラショー…」

絵里は感心した様子で希を見た。

「…奥深いですね…」

海未もその言葉を、心の中で反芻する。

「お互いがぶつかって、わがままを言い合って、弱点や悪いところ、イヤなところとかが見えて…それでも許してあげる…好きでいられる

…つてことが本当の愛…つてことやね」

「海未と穂乃果の関係みたいね」

「絵里!？」

「ほんまやね」

「私はそういうつもりはありません。ただの幼馴染みといえますか、腐れ縁といえますか…ちゃんと見ていないと何をするかわかりませんので、監視してるだけなんです」

「保護者つてことかしら？」

「はい！」

「なら、それは親子『愛』やん」

「親子…ですか…」

…だとしたら、私はいつになったら子離れできるのでしょうか…

『Like』と『Love』の違いって、そういうことなのね…さっきの希の言葉…よくわかるわ」

「そういう意味では、海未ちゃんが高野さんに言ったように、一旦、本音をぶつけ合うのは大事やと思うけど」

「はい…」

「でもやつぱり、私たちが口を出す問題じゃないわよ」

「…そうですね…」

「…そやけど、なるようになるんやないかな?…続くにせよ、続かないにせよ、お互い納得した上で、解決するんやないかと思うんやけど…」

「…はい…だとよいのですが…」

つばさのスマホが鳴った。

…梨里？…

「もしもし…」

出ようか、やめようか、20秒ほど迷った末、応答した。

「…ああ、オレだ…」

「…なに？…」

「一言、どうしても伝えたいことがあつて電話した」

「えっ？」

「黙って聴いてほしい」

「…う、うん…わかった…」

「オレは…オレは…お前のが…好きだ…」

「い、いきなり!？」

「その気持ちに…変わりは…ない…。だから…本音を言えば…オレのそばにいて欲しい。…お前を…自分だけのモノにしたい」

「り、梨里…」

「園田さんに言われたよ。ちゃんと本音をぶつけた方がいいってね」

「海未さんが？」

「ああ、だから、大事なことからちゃんとと言うよ。本当は今すぐにでも結婚して…毎日お前とエッチがしたい!!」

真剣な話でも、すぐにこういうことを言ってしまうのが、高野梨里

という男だ。

つばさは…いや綾乃はそんなこと百も承知している。

「…ばか…」

つばさはいつものように呟いた。

「だけどさ…オレが今、相、対しているのは『夢野つばさ』なんだよ…」

「えっ?」

「オレの前にいるのは…藤綾乃じゃないんだ」

「なに? どういうこと?」

「お前の存在が、オレにはデカくなりすぎたってことだ」

「…意味がわからない…」

「オレさ…昔からチヨモだけには負けたくないって思ってた…でも唯一自慢できたのはサッカーしかなくて…そのサッカーさえも先を越されて…今のオレには誇れるものは何も残されていないんだ」

「そんなことないよ! だって、リハビリはまだ始まったばかりだし、これから復帰して、活躍して、海外に行くんじゃない!! なに、弱気なことを言ってるのよ?」

「もちろん、そうするつもりだ。だけど、今、この状態で『お前にサッカーを辞めてくれ』とか『日本に残れ!』…なんて言える権利も資格も…オレにはない」

「えっ…」

「もつと言えよ…日本中…少なくともサッカー関係者や、サッカーファンが夢野つばさに掛ける期待を、オレのわがままで消すわけにいかないし…今のオレは『藤綾乃』の夫になれたとしても、『夢野つばさ』



の夫になれる自信はない」

「何を言ってるの？私私私…」

「世間がそういう目で見てくれないさ」

「意気地なし!!」

…目の前にいたら、平手打ちを喰らってたな…

…セイラさんがカイを叩いたように…

高野はガンダムに出てくるワンシーンを思い出した。

「…正解だ…」

「正解？」

聞き間違いかと思い、つばさはその言葉を繰り返した。

「その通りだ」

「えっ？」

予想外の反応に、戸惑うつばさ。

「オレは…お前が小さい頃からオリンピックに出ることが夢だったのを知っている。そして種目は違えど、その夢は叶った。だけど、お前はそれに満足しているのかといえば、絶対NOなんだよ…。オレにはお前があんな中途半端な不完全燃焼な状態で『満足している』『悔いがない』…なんて思ってるとは考えられない。だから、もっともっと上手くなって、もっともっと上を目指してほしいんだ」

「…」

「…なんていうのは、言い訳で…」

「えっ?」

「いや、間違いなくそう思ってる。だけど、それと同時に、もうお前は、オレに関わらない方がいいんじゃないかとも思ってる」

「!?」

「別に新文の記事を気にしてるんじゃない。そんなつもりはない。ただ…お前の中で、オレの存在が負担になるようであれば、それはオレの生き方に反する。お前の人生はオレのものじゃない。お前はお前で生きるべきだ…とってる…」

「…そんな、カッコいい言葉…キミには似合わないよ…」

「ごめん…電話だから言える…」

「…そう…だとしたら…私こそ…ごめんなさい…かな…」

少し間を空けたあと、今度はつばさが謝った。

「ん?」

「梨里のことを言い訳にしてた…」

「あん?」

「私も海未さんから電話が掛かってきて、同じこと言われちゃた。お互い気を使いすぎだって。でも、それじゃ、大事なことは伝わらない…って」

「ああ…そうだな…」

「怖かったんだ、海外に行くのが…怖かったんだ、ひとりになるのが…」

「…チヨモ…」

「だって、私は…ずっと、優しい仲間に囲まれて生きてきたから。さくら…萌絵…かのん…沙紀…優子さん…そして、キミ…。私はみんなに支えられてここまで来た。だけど…向こうに行ったら誰も助けてくれない！向こうに行ったら…向こうに行ったら…。だから、本当はキミに『行くな』って言うてもらいたかったの…止めて欲しかったの…」

「…」

「梨里の気持ちは、凄く嬉しかったよ。だけど…自分の弱さを認められなくなかった…だから…」

「だったら、最初からそう言えよ…」

「前に言ったでしょ？私、女っぽくないよって」

「バカ、それとこれとは別の話だろ？」

「また、バカって言った！」

「オレは四六時中言われてるけどな」

「…でも…意気地なしは…本当は…私だったのね…ぐすつ…」

「…!!…泣いてる？」

「そんなこと訊かないでよ…デリカシーなさすぎ。そういう男はモテないぞ…」

「強がるなよ。…いいんだぜ、泣きたいときは泣けば。電話の向こうじゃ、お前を抱きしめてやることはできないけどさ。泣き終わるま



かあゝ!!……うわあん……ばかあ……うつぐ……うつぐ……りさとの……ばか……  
ばか……ば……か……」

つばさは、ずっと高野に『ばか』と言いつづけた。

そこは風呂場ではなかったが……泣きながら……ずっと……。

それを高野は黙って聴いていた。

泣き声が聞こえなくなるまで……いつまでも、ずっと……。

くつづく

## 決断

「もしもし…園田です」

「つばさです。今、電話大丈夫かしら」

「はい！」

「実は、あのあと、2人で話したの」

「梨里さんと？」

「うん。電話でだけどね」

「…それで…」

「…私…ドイツに行くことに決めたわ」

「あっ！」

「向こうで闘ってくる！」

「は、はい！」

「私ね…逃げてたの」

「えっ？」

「サッカーは続けるつもりだった。オリンピックの結果には満足していないし、ワールドカップだって出たことないから…この先の目標がないわけじゃないの」

「はい。みんな、もっともつとつばさんの活躍を期待してますよ」

「うん、そうね…だから…。でもね、日本を離れるのが怖かったの。今まで、いろんな人のサポートを受けながら、ここまでやってこれたの

に…向こうに行ったら、誰も助けてもらえないでしょ。言葉も通じない異国の地で、ひとりやっていけるのかって」

「わかりますー!」

「えっ?」

「そのお気持ちは、私も痛いほどわかります!」

海未は極端なほどの海外恐怖症である。

確かに日本ほど治安がいい国はそうないから、不安になる気持ちはわからないでもない。

しかし海未の場合、それに輪をかけて偏見に満ちた妄想が膨らみ、恐怖心は2倍にも3倍にもなってしまう。

さすがに今回のオリンピック観戦は、まだ「マシ」だったが、μsで行った解散前の海外ライブの際には、メンバーが説得するのに相当苦労した。

実際、現地でも宿泊するホテルに辿り着かなかつたり、穂乃果が『行方不明』になったりしており、以降トラウマになっている。

そんな彼女だからこそ、つばさの「ひとりでやっていけるのか…」という言葉に激しく同意した。

「それでね、その自分の弱さを、梨里の怪我のせいにして、誤魔化そうとしたの」

「えっ?」

「梨里がそんな状態なのに、私一人が呑気にサッカーなんてしてられないー…って」

「…」

「アイツのこれからのことが心配なのは本当だし、私がサッカーのコーチなんか頼まなければ…今頃、海外からオファーがあつたのは…梨里だったんじゃないのかな?…週刊誌の記事通り、私が疫病神なんじゃないかな?…なんて思ってるのも本当のこと」

「それを言うと、私があそこになければ…という話になります」

「…でも、アイツはそういうこと絶対に愚痴ったりしないでしょ?どうしてあんなポジティブで元気でいられるんだろう…っていうくらい」

「はい」

「だけどね…言われちゃつたの。『オレはお前に負い目を感じさせながら生きるなんてゴメンだ』って。『逆に人に心配されながら生きるのもイヤだ』って。『だから、これからは…オレのことは気にせず、お前はお前の道を行けって』…カッコ付け過ぎでしょ?…」

つばさは「ふふふ…」と笑った。

海未にはそれが、寂しさと強がりと…そんな気持ちが同居しているように聴こえた。

「つばささん…」

「『身体が動くうちに、やりたいことはやっておけ』『死んだら何もできないんだぞ』とも言われたわ」

「ええ、それは私も同じような言葉を聴きました」

「これ…結構、胸に突き刺さっちゃってね…梨里が言うから、説得力があるっていうか…」

「はい。怪我や病気になって、初めて健康であることのありがたみを知る…ということですね」

「そして『今を生きることの大切さ』ってことかしら」

「はい」

「頭では色々わかってたんだけど、それらの言葉をひとつひとつ並べられたら、反論できなくなっちゃって…」

「ドイツ行きを決断されたのですね?」



「うん。もつとも、メディカルチェックもあるし、まだ移籍できるって決まったわけじゃないんだけど」

「そうなのですか?」

「うん」

「あの…」

「えっ?」

「私がお伺いするのは大変おこがましいのですが…」

「はい?」

「高野さんはつばささに、ちゃんと想いを伝えたのでしょうか?」

「えっ?」

「私は…誠に僭越ながら、この間お伺いした際に、本音でぶつかり合うべきだと、生意気なことを言ってしまった。ですが、今のお話を聴いていると…」

「優しいのよね…。バカが付くくらい」

「はい」

「うん…うん…ちゃんと聴いたよ。アイツの本音…」

「!!」

「好きだって言ってくれた。結婚したいとも言ってくれた」

「あっ!!では…」

「だけど…『お前が夢野つばさである限り、オレひとりが独占することはできない』って」

「えっ!?それって…」

「ふふふ…どうやら…体(てい)よくフラれたみたい…」

「そ、そんなあ…」

つばきは一晩経って、吹っ切れているのだろうか。

そのことを語る彼女より、聴いた海末の方がシヨックが大きい。  
ハンマーで後頭部を殴られたようだった。

「し、しかし、それだけでは…」

「私がサッカーに集中できるように、配慮してくれたんだと思う」

「は、はい。そうです。絶対に」

「アイツも今は自分のことに集中したいんだろうし。なぜなら、彼の目標は海外でプレーすることだから」

「だったら、なおさら、つばきさんのような…心の支えになるような人が必要だと思うのですが…」

「そうね。でも…残念ながら、それは私じゃないみたい」

「つばきさん…」

「私は彼にとつてまた『ライバル』になっちゃったみたいだから…」

その声はどこか自嘲気味だ。

「ライバル…ですか!?!…」

「そう。また『追い越せ、追いつけ』という目標ができた』…って。『私を目標にしてどうするの?』って笑ったんだけどね…でも、そう思っ  
てくれて、彼が『生き返るなら』それはそれで私の励みにもなるし」  
「…よいのですか?それで…」  
「いいのよ、気にしないで」

「よくありません!」

「う、海未さん!？」

「納得できません!」

「?」

「そんなことってあるのですか?お互いの気持ちに通じあっているのに、一緒になれないなんて…」

「あるみたいよ…。私もびっくりしちゃった」

「おかしいです」

「おかしいよね…やっぱり…。でもね…元々私たちの関係って、恋人って感じじゃなかったし」

「…」

「私たち、尊重しあってここまでできたけど…甘えたり、甘えられたり…傷付けたり、傷付けられたり…そういうことはして来なかったの。だから海未さんが言った通り、本音をぶつけ合って、成長することが大事なんだと思った。雨降って地固まるってヤツ?」

「あっ…」

「好きな人と結婚する人とは、別ってことかな?」

「も、申し訳ございません。何だか余計なことを言ったようで…」

「ううん、いいの。逆に感謝してるわ。これで踏ん切りがついた…っていうか。だから、心配しないで」

「…」

「でも変わらない。私にとって大事な人…尊敬できる人ってことは変わらないし、きつと距離感みたいなものも変わらないと思うの」

「…」

「だけど…海末さんだから言うんだけど…」

「は、はい？」

「私がアイツにフラれた本当の理由は…」

「は、はい…」

「胸の大きさね！」

「そ、そこですか!？」

「間違いないわ！」

…こんな時に冗談とは…

…やっぱり、つばささんは凄い人です…

「男の本能なのかしら？一緒にいても、そういう娘を見ると、必ずそこに目がいくんだから…。まあ、そうは言っても『口だけ番長』だし、ムツツリよりもいいけどさ…。慣れるまではちよつとイラツとするかも…」

「は、はい？」

「あとは任せたわ」

「なっ…えっ…あっ…」

「ずっと顔に書いてあったわよ…好きなんですよ？梨里のこと」

「!!」

「μ、sのメンバーも、魅力的な人たちが多いから、気を付けてね?」

「つばささん…」

海未はなんと答えていいかわからなかった。

別れ話を聞いた上に、彼女の後継者に指名されたのだ。

好きだという気持ちは、あるにはあったが…それは片思いで十分なものだった。

そして、なにより…自分が奪ったみたいなの罪悪感が、一気に押し寄せて…途端に涙が溢れた。

「つばささん…あの…」

必至に何かを伝えようとする海未。

だが、そのあとの言葉が出てこない。

それを察したのか

「…というわけで、この話はおしまい!!さあ、次はドイツだあ、ドイツ!ドイツに行つて暴れるぞ!!」

と、彼女は強引に打ち切った。

「つばささん…」

「海未さんはドイツ語できる?」

「…はい?いえ、話せるほどではありませんが…」

『Ich mag Fußball.』

海未はそれがなんという意味か理解したようだ。

「あつ?!…はい!え〜『Viel Erfolg!』です  
『Danke schön!』」

つばさは精一杯の明るい声を出して、海未に返事した。

夢野つばさと緑川沙紀の両名が、クラブハウスで海外リーグ挑戦の記者会見を開いたのは、その翌日のことだった。

くつづく

## 内浦の少女たち

「ぴいー！」

「どうしたのですか、ルビィ、素っ頓狂な声を上げて」

「そ、それが…お姉ちゃん、これを見てください」

ルビィと呼ばれた…やや気の弱そうな少女…は、PCの画面を指差した。

「これは!?!…」

口元の黒子（ほくろ）がセクシーな、長い黒髪の少女…が、そこに書かれている文字を見て息を呑んだ。

ここは…静岡県東部…伊豆半島の海沿いにある…とある女子高の…とある一室。

その入口には『アイドル研究部』と書いてある。

ただし『部』という漢字が間違っており、一旦、×が付けられたあと、書き直されているのだが…。

その…部室…には10人弱の生徒が集まっていた。

既に放課後を告げるチャイムは鳴っている。

…ということは、今は部活中らしい。

「どうしたのダイヤさん？」

「大変なことになりました！ラブライブの全国大会ですが…優勝チームは、翌日に行われるA—L I S E主催のチャリテイライブに出演できることが決まったとのことですよ！」

黒髪の少女は丁寧な口調ながら、若干興奮気味に答える。

彼女の名前はダイヤというらしい。

「A—L I S Eの？」

「チャリテイライブ?」

それを聴いた他の部員が、口を揃えて驚きの声を上げた。

「はい。当初は年末に予定されていたのですが…どうやら3月に変更になったようですね」

「どうして?」

「千歌さん、それは私もわかりません。ただ、併せて会場も変更になっておりますね。この間までは『武道館』となっていたのですが…」

『アキバドーム』だ!」

千歌と呼ばれた…セミショートの少女は、画面を覗き込んで大きな声で叫んだ。

「はい、その通りです」

「…っていうことは…どういうこと?」

「わからないのですか? 客席数が倍以上違うということですよ!!」

「客席数が倍、違う?」

「つまり、開催規模が大きくなったということですよ!」

「おお!それに私たちが出られるんだね?」

「言いましたよね!?! ラブライブに優勝したら! です」

「そ、そうだね…」

ダイヤにグツと睨まれ、千歌は少し小さくなった。

「でも、お姉ちゃん。開催規模が大きくなった…ってどういうこと?」  
「そこです!これはもしかして、もしかするかもしれないですわ  
!」

「なにさ? どういうこと?」

「あの伝説のスクールアイドルの出演があるかもしれないということ  
です!!」

「お姉ちゃん!」

「伝説の…」



「スクールアイドル?」

『『セイントスノー?』』

「ブブブー!ですわ。違います!!千歌さん、なぜ彼女たちが伝説のアイドルなのか?」

「じゃ、じゃあ…まさか…μ、s!？」

「ピンポーン!ですわ」

「本当に?」

「会場の規模が大きくなったということは、すなわちそれだけの集客力が見込めるということです。急遽、予定を変更したということは、つまり、武道館では収まりきらないと判断したのではないのでしょうか?もちろん、A—L—I—S—E単体でもアキバドームは一杯にできると思いますが…」

「ナールホドウ…デス」

いかにも『日本人が真似する外国人』みたいなイントネーションで反応したのは、金髪碧眼の少女だ。

制服を身に着けていても、彼女がダイナマイトボデイの持ち主だとわかる。

「鞠莉さん?」

「μ、sは今、再結成の噂が沸騰している、一番ホットなグループアイドルだからね」

鞠莉と呼ばれた…金髪碧眼ダイナマイトボデイ…は、どうやら普通に日本語が話せるらしい。

澁みなく喋った。

「はい。もしμ、sが出演するようなことがあれば、これはもう、ライブの優勝など関係なく、是が非でも観にいかなくてはなりません

ん」

「ラブライブが関係ないことはないけどね」

長めのポニーテールを結った、ダイナマイトボディと同じくらいグラマラスな少女…が、半分笑いなから言う。

2人とも同じくらいの身長だが、彼女の方が細身で、その分だけ背が高く見える。

髪結び目が、高い位置にあることも影響しているかもしれない。

「ダイヤさんとルビィちゃんは、μ'sのメンバーに会ったことがあるんだよね？」

「はい、千歌さん。あれは私が小学校6年生で、ルビィが4年生の時でした。祖母と母に秋葉原まで連れていってもらったのですが…」

「帰る時に立ち寄ったファーストフードのお店に『絵里』さんと『花陽』さんが、いたんだよね！」

「はい」

「凄い偶然だねえ」

「やっぱり東京は、普通に芸能人がいるズラ…」

千歌の隣で、パンを啜えた少女が呟く。

「ルビィたち、アイドルシヨップでμ'sメンバーのプロマイドとかを大量に買い込んで、それだけでも凄く嬉しかったのに、まさかご本人に逢えるとは…って」

「そして、大変おこがましくも、サインをお願いしたところ、プライベートでいらしたにも関わらず、優しく対応してくださって…私には神様に見えましたわ」

「そこからだよ。お姉ちゃんが『絵里さん推し』になったのは」

「ルビィもその時から『花陽さん推し』になったのでしたね」

「あとから知ったんだけど、花陽さんも小さい時からアイドルが大好きで…でも、ちよつと人見知りで、声も小さくて、運動が苦手で…自分がスクールアイドルになるなんて…って感じだったみたいなんです。あつ、ルビィと一緒にだ！って思ったら、余計、親近感が沸いたというか…」

「ステージの様子を観る限りでは、とてもそうは思えないんですけどね…」

「お姉ちゃんは、絵里さんの真似をして、生徒会長になったんだよね？」

「真似をしたわけではありません！感銘を受けたといってください！」

「μ、sかぁ」

「千歌、どうかした？」

とポニーテールが千歌に聴く。

「うん、果南ちゃん、私も動画でしか観たことないから…生で観られたら素敵だろうな…って」

彼女はどうかやら果南というらしい。

「仰（おっしや）る通りです」

ダイヤが大きく頷いた。

「…」

「どうしたの？梨子ちゃん」

「えっ？ううん…私、そんなに有名な人たちと同じ高校に通ってたのに、全然知らなくて…もったいないことをしたな…って、今更ながら思ったりして」

梨子と呼ばれた…パツと見『ツン』な感じの、ロングヘアの少女は、恥ずかしげに下を向いた。

「それはさあ、しょうがないよ。だって、さつきダイヤさんも言ってたけど。μ、sが活躍したのって、私たちが…小学校5年生くらいの事でしょ？それから5年以上も経ってるんだし」

「うん、千歌ちゃん、そうなんだけどね」

「それに前に東京に行った時にさ、音ノ木坂の生徒も言ってたでしょ？『μ、sは部屋に何も残していかなかった』って。だから、在校生でも知らない人がいるみたいだし、梨子ちゃんが知らなくても不思議

じゃないよ」

「私は最初、梨子さんが音ノ木坂から来たと知った時、単純に『羨ましい』と思っただけです。」「

とダイヤ。

「千歌ちゃんがよく見ている『START:DASH!!』って、あの制服で歌ってるんだよね？」

「sを知っている人間であれば『花陽?』と見間違うほどのソックリさんが、梨子に言う。」

「うん、そうみたい」

「いいなあ…」

ソックリさんは、ヨダレを垂らさん勢いで、彼女を見た。

「ふふふ…いくら曜ちゃんが制服マニアでも、あれはあげられません」

梨子はニツコリと微笑む。

曜ちゃん…と呼ばれたソックリさんは、うう…と唸って残念がった。

「マルは『凜ちゃんさん』に会いたいズラ」

これまで静かにパンを食べていた少女が、徐（おもむろ）に口を開いた。

「ずら丸! 『凜ちゃんさん』っておかしくない?」

この部屋には場違いの…なぜか黒いマントを身に纏った少女…からツツコミが入る。

「凜ちゃんさんは『まじえんじえく』なんズラ、本当の天使ズラ。週刊誌によると、今も容姿が変わってないらしいズラ。善子ちゃんの『墮天使』とは違うズラ」

「善子って言うな!」

と黒マント。

しかし彼女は意に介すことなく言葉を続ける。

「ルビィちゃんからsのことを教えてもらって…花陽さんのことも聴いて…その大親友が凜ちゃんさんだって知って…マルもルビィちゃんとずっとそういう関係でいたいな…って思ってたなら、いつのま

にか凜ちゃんさんのことが好きになってたズラ」

「へえ、花丸ちゃんが凜さんのファンというのは意外だねえ。タイプは真逆って感じだけど」

この沼津弁を操る少女は花丸というらしい。

「果南さん、それは違うズラ。」

花丸は、ポニーテールの少女に言った。

「？」

「マルもあんな風に踊れたらいいなって、ずっと憧れたズラ」

「はい、凜さんは小柄ですが、全身バネという感じで、元気の塊みたいな人ですものね」

とダイヤ。

「うちにはいないタイプだね」

「そういえばそうだね。曜ちゃんも、果南ちゃんも運動神経抜群だけど、ちよつとイメージは違うよね」

曜の呟きに、千歌が相槌を打つ。

「ボーイツシユ…って言うのかな？」

「曜さん、それは駄目ズラ！」

「えっ？」

「凜ちゃんさんにその言葉は禁句ズラ。多分一番傷付く言葉ズラ」

「そ、そうなの？ご、ごめん…」

「これを見るズラ」

「こ、これは…ウエディングドレス!!か、可愛い…」

「これでも、ボーイツシユとか言うズラ？」

「よ、ヨーソーロー!!前言撤回するであります！」

と曜は敬礼をしながら花丸に詫げる。

「わかればいいズラあ」

花丸はそう言うのと、食べかけのパンを口に頬張り、満足そうな顔をした。

「μ， s っつてね、歌も踊りも素敵なんだけど、衣装も本当に可愛くつて…ね？お姉ちゃん」

「はい。当時、衣装を担当されていたことりさんは、今は現役の美大生ながら、ブライダル業界注目の人材ですから。当然といえば、当然ですわ」

「なんでダイヤさんが偉そうにしてるのかはわからないけど」

と、善子はボソツと囁いた。

「でも…そつか…ラブライブに優勝すれば、会えるんだね？あのμ， s に…」

「い、いえ千歌さん、待つてください。これはまだ、私の予想で。公式に発表されたわけでは…」

「シャイニー!!ラブライブに優勝してμ， s に会いに行きましょう!! レッツ、ゴーですよ!!」

「だから、鞠莉さん…勝手に決め付けないでください…」

くつづく

## セカンドレイプ

事故から3ヶ月が経過した。

あの頃はカラ梅雨で水不足が心配されていたが、今は解消されている。

なぜなら、7月と8月と雨が異常に多かったからだ。

オリンピックは、日本国中が胸を熱くしての観戦だったが：実際のところは天候不順で、気象庁は『冷夏』だったと発表した。

ところが、この9月に入って、連日『真夏日越え』が続いている。残暑と呼ぶにはあまりに厳しい日差し。

季節が1ヶ月、遅れてきた感じだ。

異常気象といえば、その通りなのだが：とはいえ、毎年、そう言われているので、もう異常でもなんでもないのであるかもしれない。

高野のリハビリは順調に進んでいて、今はプールに入り、向かってくる『水流』に逆らって歩く訓練を行っている。

時折、身体に電気が流れるような痛みが走るが、幸いなことに、手足が痺れるなどの後遺症はみられない。

「あと1ヶ月もすれば、地上でも普通に歩けるようになりますよ」とは、現在、高野を担当している理学療法士の話だ。

彼の止まっていた時間が、ゆっくりと動き始めた一方：『外の世界』では、めまぐるしいスピードで事（こと）が動いていく。

まだ1ヶ月以上も先だと言うのに、既にオレンジのカボチャが視界に入るようになってきた。

「季節感も何もあったもんじゃない」

と高野。

自分が病院から出られずにいて、世間から取り残されているような

感覚に陥っているらしい。

「いや、そんなことないさ。ハロウィーンが終われば、もうクリスマスだよ。昔に較べれば、確実に1年が早くなってる」

見舞いに訪れた高野の父はそう呟いた。

マスコミの話題も、次から次へとめまぐるしく変わる。

それこそ、ついこの間までは、高野の発言を機に「未成年の加害者に対する人権」みたいなことで盛り上がっていたのだが…今は…『Y氏一族のスキャンダル』が一番のネタだ。

同乗して亡くなった少女…が援助交際をしており、それをキツカケに加害者の少年と知り合ったこと。

なぜそうなったのか？を教育学者や有識者、物知り顔のコメンテーターが分析をする。

だからといって、何も解決しない。

彼女が亡くなったところで、援助交際がなくなるわけじゃない。

ところが…である。

ひとつ、何か発覚すると、芋づる式に色々出てくるものだ。

さらにこの父親にも、複数の愛人がいることが判明した。

今の後妻も、どうやらそのうちの1人だったらしい。

浮気だろうが不倫だろうが…それは基本的には当事者間の問題で、他人が口を出すことではない。

議員であれ、落語家であれ…倫理面においては「如何なものか…」ではあるが、法に触れていないのであれば、目くじら立ててヒステリックに騒ぐことじゃない。

『された方』はショックだろうが…それも当事者たちが解決すべき問題で、犯罪者を追求するが如く第三者が叩くのは筋違いだ。



『愛人』であるということは、それなりにオンナも恩恵を授かっていたと思われるが、このような事件が発覚して、ここが潮時とみたのだから。

その信頼関係（と言っているいかどうかは定かではないが）…が狂えば、目も当てられない事態になる。

要は囲われていたオンナが週刊誌に『暴露』したのである。

これが昭和初期ぐらいなら『愛人の1人や2人』で済んだかもしれないが、それから半世紀以上過ぎていく。

『男の甲斐性』

それが通じる時代ではない。

残念ながら、日本では一夫多妻制は認められていないので、当然、バツシングの雨、霰（あられ）である。

しかし、渦中のY氏は…それでも娘のことも、愛人のことも、黙して語らず…。

これがまた世間の反感を買うことになり、彼が所有する関連会社の株は軒並み下がり続けている。

そして、マスコミの目はその子供たちも向けられる。

今日はどこに行つて何をしたかの、誰と会つてどうしたかの、逐一、報道されるのだ。

正直、子供は関係ないだろ！と思つている意見が大半である。

だが、彼らがベンチャー企業の社長であったり、財務省の職員であったり、医大生であったり…という『エリート』なだけに『貶めてやりたい』という、鬱屈とした気持ちはどこかにあるのだろう。

坊主憎しけりや、袈裟まで憎い…。

そんなところだろうか…。

しかし、それにも増して衝撃が大きかったのは：元バレーボール部員の自殺についての報道だ。

これは彼女の両親が意を決して告訴した為、ことさら大々的に取り上げられるようになった。

彼女：『山下弘美』：の自殺の原因は『膝の故障による挫折』とさ  
れていた。

遺書がなかった為、考えられることはそれしかなかったのだ。

いや、当時からバレー部の顧問から性的虐待があつたのでは？とい  
う疑惑はあつた。

しかし遺体解剖の結果、彼女が『非処女』だつたことは判明したも  
のの、疑惑を裏付けるだけの証拠はなかった。

また、両親も娘が『キズモノ』にされたなどと、声高に叫ぶことが  
できなかったのだろう。

悔しさに唇を噛み締めつつ、帰らぬ娘の遺影に、毎日手を合わせて  
いたのだつた。

ところが、事態は一辺する。

彼女の3回忌が過ぎたある日：高校の時に同じバレーボール部員  
だつた友人が、弘美の家を訪ねて告白したのだ。

山下弘美もまた『藤綾乃』と同様に、中学から特待生としてB学園  
に入学した。

将来はオリンピック候補とまで言われた逸材。

当然、期待も大きかった。

だが、高校に進学してすぐに膝を痛め、選手としての道を絶たれて  
しまう。

本来はこの時点で『用済み』と判断され『特待生は解除されていた』  
のだが、バレーボール愛の強かつた弘美は『マネージャーとして残る』  
ことを希望し、部活に留まった。

この彼女のバレーボールへの健気（けなげ）で一途な想いを悪用したのが、当時の顧問：学長の次男であった。

普段から部員に対して「スキンシップ」と称した『ボディタッチ』は行われており、度々、問題にはなっていたらしい。

いわゆるセクハラというヤツである。

しかし表面化しなかったのは、問題になれば部として存続できなくなるおそれがあり、バレーボールに全てを懸けている部員にとって、それだけは避けたかったからだ。

故に『多少のこと』であれば、笑って済ませていた。

だが、弘美に対しては：『多少のこと』では済まなかったらしい。顧問に呼び出されては、姿を消し：涙をこらえながら、部活に戻ってくるのが、多々あった。

察しはついた。

全員、何が起こっているかは理解していた。

だが、彼女の口から一言もその話が出なかったし、自分たちもトバッチリが来るのが怖くて、何も訊くことができなかったのだ。

そして、弘美は口をつぐんだまま…この世を去った。

ところが、生前、彼女は証拠を残していたのだ。

件（くだん）の友人が高校時代に使っていたバッグが不要となり、処分しようとした時のことだった。

そこに1枚のSDが入っていることに気付いた。

長い間、バッグの底板の裏に隠れていたらしく、それまでまったくわからなかった。

はて、なんだろうと…とPCで再生して、啞然とする。

『行為』が録画されていたのである。

そこには、弘美が辱めを受ける姿が映し出されていた。

すぐに再生をやめ、SDを引き抜いた。

泣いた。

泣き続けた。

このようなおぞましい行為が、実際に行われていた事実。

自分のバッグにそれが入っていたことに。

弘美を助けてあげられなかったことに…。

捨ててしまおうと思った。

見なかったことにしようと思った。

どうしたらいいかわからなかった。

『こんな映像が見つかりました』などと、彼女の両親に持っていったところ、見せられるはずがない。

だから…

でも、できなかつた。

どうして？

なんで私のバッグに入れたの？

気付いて欲しかった？

助けて欲しかった？

言葉では言えなかつたから？

わからない…

わからないよ…

ただど彼女の無念を晴らせるのは、私しかない。  
弘美は私にそれを託した。

それが、私のバッグに入っていた理由…。

そう思ってもなかなか行動には起こせなかった。

勇気がいる。

友人にも相談して、ようやく腹を決めた。

そして随分時間が経ってしまったが、今に至った。

彼女の両親は苦しみぬいた末、この件を報告してくれた友人に感謝した。

映像は見るに耐えないものであったが、長い間、謎とされていた娘の死の原因に一步近づいたからだ。

しかし、ここからが精神的にきつい。

顧問を訴えるということは、この映像を証拠として提出するということだ。

愛娘の陵辱されている姿を、誰が好き好んで見せようか。

世間に「私の娘は性の捌け口にされていました」と、なぜ公開しなければならぬのか。

だったら、そっとしておいた方がいいのではないか…。

### 『セカンドレイプ』

性犯罪の被害者（この場合は肉親であるが）の誰もが、最も苦しむことである。

それでも、犯人憎しの気持ちが勝った。

許しておくことはできない。

それが、今回、告訴に至った経緯である。

案の上、マスコミはこの『事件』をセンセーショナルに報じた。余罪がありそうだ…との情報もある。

訊いてもいないの、この顧問の趣味嗜好がどうでこうで…と説明するメディアもある。

中にはご丁寧に彼が借りていた『AVのタイトル』を羅列した週刊誌まであった。

「チツ!!だから、くだらない…っていうんだよ」

高野は吐き捨てた。

…そんな情報を得て、誰が喜ぶんだ?…

…オレには理解できない…

高野は首を振った。

…それにしても…

…ツライ話だな…

…彼女は…なんで最後にチョモに会いに来たんだろう。

…どうして、その時に、そのことを伝えなかつたのだろう…

…ヤツは『気付いて欲しかった』『止めて欲しかった』んだと、自分を責めた…

…そうだったかもしれない…

…そうだったかもしれないが…

…死んだら終わりなんだよ…

…何があっても自ら命は捨てちゃいけない…

…生きてくても生きられない人はいるんだ…

…本当にそうなのか?…

…オレは今、紙一重だが、なんとか生き残った…

…生き残った上に、復帰できるかも知れない…という段階まできた…

…だが、もし…

…もし、どうにもならないほどの怪我だったら…

…ただ生かされているだけの、屍のような状態だったら…

…その人生に何を見出していたのだろうか…

…死んだほうがよっぽどマシだ…

…大抵、そういうヤツほど死ぬ気なんてない…

…口だけだ…

…自ら命を絶っていいハズがない…

…だが…

…本当にそうなのか？…

最近、SNSなどで「死にたい」などと呟いて少女たちが、他人に命を奪われた者がいるというニュースが、頻繁に流れている。

彼女たちは、死して幸せだったのか？それとも後悔しているのか？

高野自身は会ったことはないが、山下弘美という人間が、どういふ想いでこの世を去ったのかを考えると、胸が締め付けられて苦しくなった…。

くつづく

## オレの中に潜む残虐性

「内館です。どうぞよろしく」

「高野梨里です。こちらこそ、宜しくお願い申し上げます」

この人は、オレが雇った弁護士だ。

今回の事故に対する賠償責任を問う『民事裁判』。

オレは、誰に対して、いくら請求するべきか？それを一緒に考えてもらおうアドバイザーだ。

運転していた少年は法律によって裁かれる。

こっちは『刑事裁判』。

『目には目を、歯には歯を！』は唱えたのは…確かハンムラビ法典だったか？

中学の歴史で習った気がする。

オレは基本的にはこの考え方に賛成だった。

犯罪者には、自分が犯した罪と同等の苦しみを与えるべきだ…と少し前までは思っていた。

しかし、ひとりとして同じ境遇の人などいない。

加害者に同じことをして、同じ苦しみを与えられるのかなんて保障はどこにもない…ということに最近気が付いた。

細かく話すと長くなるので割愛させてもらうが、単純な「仕返し」では済まないということだ。

犯罪者の中には、生かしておく価値がないヤツがいるのは確かである。

しかし極端な話、極刑を望んだところで、自分の手で殺めることは不可能だ。



この世の中には『必殺仕事人の中村主水』も『シティーハンターの冴羽遼』もないのだから、誰かに頼んで仇を討ってもらうこともできない。

いや仮に、それ：つまり『仇討ち』ができたとしよう。

だが果たして、それで満足感が得られるのかと言えば：きつと答えに窮するのではなからうか。

少なくとも、その加害者の肉体と魂がこの世から消え去った：という安心感はあると思う。

とはいえ、どのように殺し方をしても『まともな人間』なら、今度は自ら行ったその行為によって、精神的に苦しめられるのではないだろうか？

逆にそこに満足感や快感を覚え『木乃伊（ミイラ）取りが木乃伊になった』：なんてことになれば、本末転倒だ。

日本においては、年に数回、死刑が執行されているようだが、そこに携わる：例えば執行する人、遺体を処理する人：らの精神は正常に保たれているのか、他人事ながら心配になる。

相も変わらず、話が大きく逸れてしまった。

現行の法律では、オレたちが被害者として意見を述べることはできても、自らの手で罰することはできない。

そんなわけで、オレがこの少年をどうしたい、こうしたいと言ったところで、高が知れている。

だから、この少年が1年で出ようと3年で出ようと、正直、オレ自身はあまり興味ない。

何年か経てば『失われた時間が取り戻せる』というなら話は別だが、どうも今の世の中は、そうはなっていないらしい。

どうせこういうヤツは、更生プログラムなんて組んだところで効果がないのだから、数年も立てば、また直ぐに何かやらかす。

この少年の親父の話を聴けば、そんなことは直ぐわかる。

そりや、再犯しないに越したことはないし、なにかあったら大変だが、現行の法律じゃどうにもならない。

365日24時間監視をつけるわけにもいかない。

最新テクノロジーで、西遊記の孫悟空が頭に付けてる輪つかみみたいなものが、疚しいことをしそうになつたら勝手に締め付けて抑制させる…なんてできれば、少しは違うのだろうか…。

だからオレは、今回のような事件でもっとも有効な再犯防止策は『加害者の視力を奪うこと』だと思っている。

どのような方法がいいかまではわからない。

目薬のようなものが無難だろうと思うが、どうなんだろう…。

なぜそう思ったか？

耳や口が不自由でも車は運転できるが、目が不自由ではそうはいくまい。

視力を奪ってしまえば、少なくともこの事件において「再犯」は起きないだろう。

それどころか、何の訓練もしなければ、普通に生活することさえままならない。

勝手に『のたれ死んでくれ』…って感じた。

まあ、それで電車に飛び込まれたり、どこから転落したりして「トバッチリ」を受ける人が出るなら、それはそれで問題だけど。

自分でも恐ろしいことを考えるな…と知っている。

だけど、誰の胸の中にも、残虐性というのがある。

ヒーロー物でも、ヒロイン物でも…あるいはRPGでもアクションゲームでも、オレたちは『敵を倒す』ことにカタルシスを感じている。相手は悪いヤツかも知れないし、怖いモンスターかも知れないが、話し合いで解決しよう…などということは（ほとんど）ない。

ボコボコに叩きのめしてこそ、正義（勝利）なのである。

ルールがある格闘技でさえ、判定よりKOによる決着でないと『面白くない』となる。

これが、オレたちの心の中に潜む残虐性だ。

今回の事件も同じ。

明日はわが身…という怖さはあるにせよ、当事者でない他人が、社会の正義の名の下に、無責任に加害者やその家族をつるし上げる。

実際に、殴る、蹴るといった行為があるわけではないが、言葉の刃を携えながら、何千人、何万人という『私刑執行人』が対象者やその家族を追い詰めていくのだ。

一歩間違えれば『デビルマン(コミック版)』のようになり兼ねない。

主人公『不動明(ふどうあきら)』の恋人の『ミキちゃん』の首が『一般人』に斬られてしまったシーンの、そのショックたるや。

かなり、幼い頃に読んだハズだが、今でも胸に焼き付いている。

しかし、かろうじて、実際に行動にでない…つまり暴力まで発展しないのは…まだ理性がそれに『ギリギリ』打ち勝っているからだろう。

『ギリギリ』。

だから、ことさら、オレが残虐な…サディスティックな人間だとは思っていない。

極めて冷静に判断して導き出した、オレなりの『犯した罪に対する罰』である。

…とはいえ、現実問題、彼の処遇は司法に委ねるしかない。

「少年に対して、何か言いたいことはありますか？」と問われれば「二度と同じ過ちを繰り返さないで欲しい」としか言いようがない。

『視力を奪ってしまえ』などと思っても、表立って口に出すことな

どできない。

オレの『妄想』は、ここで留めておかなきゃいけない。

…であるならば、あとは民事裁判によって闘うしかないのだ。  
そうになると、手っ取り早く、金銭での補償請求ということになる。

「まず、基本的考え方として、交通事故の賠償金は『治療費用＋入院雑費＋休業損害＋入通院慰謝料＋後遺障害慰謝料(死亡慰謝料)』となります」

と弁護士の内館さん。

「なるほど」

「高野さんの場合、休業損害、入通院慰謝料、後遺障害慰謝料がいくら取れるかってことがカギになるでしょうけど…」

「けど？」

「先に断って起きますけど、何億も取れると思ったら大間違いですよん？」

「一般的に自動車事故の過失致死…つまり、不注意などの運転ミスが原因で起きた交通事故で、一家の大黒柱が亡くなったときの賠償金は『2,600万〜3,200万円くらい』が、相場です」

「亡くなってその程度？」

「はい。しかし、残念ながら高野さんは亡くなったわけではありませんで、もつと額は低くなります…」

と内館さんはそう言って笑った。

『残念ながら』…ね…」

オレもつられて笑う。

「請求先は、当然、運転をしていた加害者ということになります」  
「未成年だけ？」

「未成年だからといって、支払う必要がないということではありません。このあたりは今後の争点になると思いますが、現時点では責任能力はあると思われまますので」

「へえ…」

「ですが『支払い責任』と『支払い能力』は別です。未成年でも18歳以上なら、自賠責なり任意保険からの支払いもありえますが…」

「無免許だし、16歳だし…」

「そうですね。支払い能力は皆無ですね」

「だとすると？」

「当然、両親への請求ということになります」

「だろうね…。車の所有者…つまり亡くなった少女の方には、請求できると？」

「できます。ただし、管理責任を追及して、多額の賠償金を請求するところまでは…」

「簡単ではない？」

「時間と労力を相当有すると思えますし、費用対効果はそう見込めません」

「ふうん…。オレの青写真じゃさあ…オリンピックで活躍して、海外に移籍して、個人スポンサーと何社も契約して…年間数億円を稼ぐプレーヤーになってるハズだったんだけど…これで棒に振ったわけじゃない？それどころか、復帰できるかどうかも怪しくなっちゃった…この代償は、どうしてくれるんだ？…って話だけど？」

「気持ちわかります。ですが、現実的に高野さんが将来どれだけ稼げるかを推測するには無理がありますし、せいぜい請求できて今季十來季の年棒くらいまでがいいところでしょうね」

「やられ損だな」

「ええ…これがアメリカとかでしたら『懲罰的損害賠償』みたいな請求もあります…それこそ高野さんの言う『無免許で運転できる車を作った責任』とか『それを認めている国の責任』とか」

「そうは言っちゃいけないけど…いや、言ってるか…」

「制度の違いですけどね。なんせ『ファストフード店のコーヒーが熱すぎて火傷した』で『3億円』の支払いが命じられる国ですから」

「それはほとんど言いがかりに近い」

「はい。それはまだマシな方です。他にも『ハンバーガーを食べ過ぎ」

て病気になった。責任取れ!』とか『猫を乾燥機に掛けたら死んだ。責任取れ!』とか…」

「頭、悪っ!」

「それでも原告が勝ちますからね…」

「…」

「…ということも踏まえて考えて頂いても、日本の現行制度では、今回のケースではなかなか多額の賠償金は望めません」

「…あつそ…」

「ただし、少年少女の一族…特に少女側の風評被害といえますか…社会的・道義的責任は免れないでしょうし、事業における打撃は数億円にも数十億円にも上ることは予想されます。まあ、実際、Y氏の関連企業の株価は暴落してますから」

「別にそんなことは望んでないけどさ」

高野は少し動くようになった首を、左右に何度か動かした。

くつづく

隠しきれない思い

「それで、どうかしら？μ sは参加できそうかしら？」

「あの話は本当だったのですか？」

「あら、単なる社交辞令だと思ってる？」

「いえ、そうは思っていないですけど…」

ここはUTX学院のカフェスペース。

OGである綺羅ツバサは、いわゆる『顔パス』で出入りできるらしい。

なんだかんだ言ってる「ここが一番落ち着くから」…と穂乃果を秋葉原まで呼び出した。

確かにこの中であれば、一般人に囲まれワーキヤー騒がれることはない。

「チャリテイライブの概要が決まったわ。チケット代、グッズの売上げ含む全額を、交通遺児の為の団体に寄付。日付は3月初め」

「えっ？年末って言ってますんですけど？」

「最初はそのつもりだったわ。でも、それじゃあ、準備期間が短すぎるでしょ？」

「準備期間？…」

…それはつまり、私たちの…ってこと？…

穂乃果はツバサの顔を見た。

「もちろん！」という表情だ。

「そして場所は…アキバドームよ」

「!!」

「そう。あなたたちが立つことができなかつた、夢舞台」

「そ、そんな大きいところで…」

「当初は武道館を考えていたんだけど…あなたたちを迎えるのに、そこじゃ『役不足』だわ」

「いやいや…」

「メインは私たちが務めるけど、他に何組か出演してもらうつもり。実は前日にラブライブの決勝大会があるから、その優勝チームにも出してもらおうとも思ってるの。そしてスペシャルゲストが…『μ、s』」

…うわあ！完全に出ることを前提に話が進んでるよ…

ごくり…

穂乃果の喉が鳴った。

「全体としては3時間くらいの予定でいるわ。時間配分とか、細かいところはこれからだけど、μ、sにどれくらいの時間を取るかは…あなた達次第ってところかしら」

「本当に…本当に…私たち？」

「うふふふ…ノーギャラだけど」

「あはは…お金は別にいいんですけど…私たちでは荷が重いというか…」

「あら、μ、s再結成の支持率は70%を超えているわ。なにか問題ある？」

「うくん…」

「ふふふ…ごめんなさい。本当言うと、私たちがどうしてもあなたたちと一緒にステージに立ちたいの」



「えっ?」

『そこ』を封鎖して行ったが、sのラストライブ。あれはあれで楽しかったけど、やっぱり『A—LISEとして』共演できなかったのが心残りで…公私混同かしら?」

「あ、いえ…いまだにそんな風に言ってもらえるなんて、光栄です!」  
穂乃果は頭を下げた。

「今から2週間…」

「えっ?」

「2週間以内に参加の可否の連絡してほしい」

「2週間ですか?」

「今、結論をもらっても構わないけど…『出ます!』って」

「ま、まずはみんなに訊いてみます…」

「でしょ?」

「は、はい。私だけでは決められないですから…」

「最悪、全員でなくても…」

「えっ?あ、はい…」

「いい返事を、お待ちしているわ」

「わ、わかりました!」

穂乃果はそう言うと、出されたジュースで喉を潤した…。

「…っていうことなんだけど…」

と穂乃果。

彼女の部屋には、いつものメンバーが集まっている。ただし、仕事の都合で希、にこ、花陽は来ていない。

「完全に外堀を埋められた…って感じね」

そう言つて苦笑いしたのは絵里だ。

「そうなんだよ。ツバサさんは、もう私たちが出る…って思ってるみたいで…」

「あとは私たちの気持ちひとつ…ということですか…」

「うん！」

「…」

「黙っていても何も決まらないわ。まずはみんなの気持ちを訊きましょ？…できるできないは別として…真姫はどう？やりたい？やりたくない？」

年長者らしく絵里が仕切る。

「どちらとも言えないわ…新しく曲を作る必要がないなら、そんなに面倒ではないと思うけれど…」

「でも、衣装は新調したいな！」

「ことり!？」

「じゃあ、ことりは…賛成ってことかしら?」

「うん…ことりは出たい!…ことりはね…叶うはずはない…って思いながらも、ずっとみんなをイメージしながら衣装のデザインを描き貯めてきたから…。もし、お披露目できるなら、こんなに嬉しいことはないもん」

「なるほど…穂乃果は?」

「うくん…色々考えたんだけど…断る理由が見当たらないんだよねえ…」

「私も穂乃果と同じ意見です」

「海未ちゃん…」

「μ'sを解散した時と今とでは、状況が違います。これを機に活動

を続けよう…などとは思っていませんが、私たちは常に応援してくれる方々の期待に応えたいと歌ってきました。ですから…」

「だよねえ？だよねえ？自分達だけだったらさあ、やりたいな…なんて思っても、なかなか、決心がつかなかったかもしれないけど…A—RISEもここまでしてくれてるし…乗らない手はないと思うんだよね」

「はい。それに…ここでやらないと一生後悔するような気がしてならないのです…。縁起でもありませんが、あと何年、このメンバーで集まれるのかなと思うと…」

「本当に縁起でもない」

真姫は、ぶっきらぼうにそう言った。

「…ごめんなさい…」

謝る海未。

「だけど…わからなくもないわ…。『海未が事故に遭った』…って聞いた時、そういうことを考えなくもなかったから…」

「そうねえ…卒業した時は、精一杯頑張ったつもりだし、やり残したとも思ってたけど…でも、私も海未の事故を知った時は、もうあの頃には二度と戻れないかも…とは考えたわ」

「つまり、真姫ちゃんも、絵里ちゃんも反対ではないってことだね」

「どちらかと言えば…だけど…」

「私も…」

「もう、素直じゃないにや！やりたいならやりたいって言えばいいにや！」

「わ、わかってるわよ！凜に言われなくても。でも、そう簡単に言えるわけないでしょ！それなりに気持ちの整理が必要なの」

「本当に、面倒くさい人」

「ちよつと、それは私のつもり？」

凜に真似されて、真姫は顔を紅くした。

「私ね…思ったんだ…『応援してくれる人たちの期待に応えたい！』ってというのが、*μ's*の原点だったでしょ？だけど、よく考えたら…解散した時って『一方的に辞めます』って感じで、『応援してくれてあり

がとう』じゃなかった気がするんだよね」

「穂乃果…」

海未が彼女の顔を見る。

「えへへ…高野さんが、教えてくれたでしょ？『解散してからμ、sを知った人もいる』って。もう、5年以上も経つてるのにさ、未だにμ、sを愛してくれてる人がいる…。そういう人たちも含めて『もう一回感謝の気持ちを伝えたい』…私はそう思う。ねっ、海未ちゃん？」

「は、はい…いえ…あの…その…はい。穂乃果の言う通りです。高野さん云々は別としましても…私もそう思います。みんな心の奥底では、また、いつかできたらいいな…と思っていたはずです。ですが、それを口にはしませんでしたし、してはいけないと思っていました。ですが…色々なことがあった中で、今、このタイミングでこういうお話を頂いたということは、やはり何かの縁だと思えますし…」

「はあ…ホントA—RISEもお節介だわ…」

「だから、真姫ちゃんは回りくどいにゃ！やりたいならやりたいって言えばいいのに…」

「うるさいわね！そういう凛はどうなのよ?!」

「凛はやるに決まってるにゃ！ダンスなら昔より上手に踊れるよ！」

「あなたは現役だものね…」

「絵里ちゃんは？」

と問い掛けたのは穂乃果。

「今、この状況で、私が水を差すようなことは言えないわ」

「ズルい言い方…」

「真姫…」

「μ、sはひとり欠けてもμ、sじゃないんだから。ちゃんと意思表示はしなさいよー」

「ハラショー…」

絵里は目を丸くした。

「な、なによ…」

「真姫から言われるとは思わなかったわ…」

「ヴェく…なにそれ？意味わかんない…」

「いやあ、わかるにゃく!!」

「凜は黙ってて！」

「ごめんなさい、真姫…茶化しちゃって。正直、膝のこともあるから、不安がないわけじゃないし、足を引っ張るかもしれないけど…それでもいいと言ってくれるなら…」

「うん！うん！これで、ここにいるメンバーはみんな、OKだね！」

「あとは…希とにこと…花陽ですか…」

「希ちゃんは問題ないんじゃないかによ？『ウチのカードがそう出たんや！スピリチュアルやね！』で、終わりにゃ」

「ぷっ…」

凜の真似があまりにも上手く、一同吹き出しそうになる。

「ま、まあ…そうね…」

絵里が笑いを堪えながら、相槌を打った。

「にこちゃんもA—RISEと一緒に言えば、ふたつ返事が出るっというよねっ…」

と穂乃果。

「それでもないんじゃない？」

「えっ？真姫ちゃん！なんで？」

「にこちゃんってアイドルに対して、妙なこだわりを持ってるでしょ？私たちとは、ちよつと考え方が違うもの」

「ありえるにゃ！『いい？一度引退したアイドルは、そう易々と復帰なんてしないの！だから伝説になるんじゃない？私はいつまでも伝説でいたいのに！』とか言いそうにゃ」

「あはっ、言いそうだね？」

ことりが手を叩いて笑う。

「そうね…にこならありえるかも知れないわね」

「そうしたら、花陽ちゃんの出番だね！」

「穂乃果？」

「だって、アイドルのことでにこちゃんを説得できるメンバーって  
いたら、花陽ちゃんしかいないでしょ？」

「確かに、それはそうですが…花陽自身が参加できるかどうか…って  
問題があります」

「でも、海未ちゃん。高野さん、言ってたじゃん。やろうって意思があ  
れば、日程なんてどうとでもなる…って」

「それはそうですが…」

「大丈夫！あと半年もあるんだし、花陽ちゃんなら、絶対OKしてくれ  
るよー！」

「毎回毎回、あなたのその根拠のない自信はどこからくるのでしょうか…」

…ですが、何故か穂乃果が言うと言現できそうで、不思議です…

くっくくく

step by step

「A—RISEから誘われていたチャリティライブの話ですが…」

「あ、ああ…どうすることにした？」

「実は当初、年末の予定と聴いていたのですが、3月に変更となりました…」

「へえ」

「会場も武道館からアキバドームに変わりました」

「そりやあまた、随分スケールアップしたねえ」

芸能関係に疎い高野でも、それくらいのこととはわかる。

「はい。それで、メンバー一同、話し合ったのですが…」

「やっぱり…無理か…」

彼は残念そうに、彼女の顔を見る。

「いえ…お受けすることとなりました！」

高野の病室を訪れた海未は、明るい表情でそう告げた。

「おっ？やるんだ？ライブ！」

「簡単には纏まりませんでしたけど…」

「ん？」

抵抗したのは…案の定、にこだった。

後日、海未と真姫、凜…それとにこが、再び穂乃果の部屋に集まった。

事前にメンバーが予想して通り、にこは開口一番

「いい？アタシたちは伝説のスクールアイドルなのよ！伝説っていう

のはねえ、そんな簡単に復活したら、価値はなくなるの！」  
と言いつつ。

「でもさあ、あのA—RISEと共演出来るんだよ。にこちゃん、*あ*sのラストライブの時言ってたじゃん！『こんなこと一生のうち、1回有るか無いかだ』…って」

「言ったわよ！言ったけど…」

「場所もアキバドームにや！」

「わかってるわよ！」

「それじゃあ、何がダメなのさ？」

「…」

「にこちゃん!？」

「今のアタシは『小庭 沙弥』なの。かつての『宇宙人No. 1アイドル、超絶可愛いラブリーにこちゃん』は、もうこの世にいないのよ…残念ながらね」

「はあ？」

「にや？」

真姫は呆れ顔で、凜は吹き出しそうだ。

「はあ?…じゃないわよ！わかりなさいよ、今の説明で！」

「つまり…当時のキャラを演じるのは、あまりにバカバカしすぎて、で  
きない……ってことかにや?…」

「そうね。22歳にもなつて『にっこにっこに〜!』はちよつとねえ  
…」

と真姫。

「ちよつと、アンタたち！バカバカしいとは何よ!?そうとは言つてないでしょ!?ただ、アタシは今女優なの！だから、そのイメージは崩したくない……って言ってるの！」



「まだ、デビューしてないにや！」

「するの！来月にはステージに立つんだから！」

「端役なんでしょ…」

「その言い方はさすがに失礼かと…」

「あ…ごめん…」

海未に諭され、真姫は謝った。

「そういうアンタたちはどうなのよ？誰も反対する人はいないの？」

「…」

「どうして黙るのよ？」

「いやあ…意外とすんなり決まっちゃったんだよねえ…もつと揉めるかと思っただけど…」

と穂乃果。

「はい。みんな、ずっとやりたかったんです。でも、ああいう形で解散を決めた以上、口にするのは憚（はばか）れましたし…」

「真姫も？」

「私は…まあ、別にどっちでもよかったんだけど…」

「まったく、素直じゃないにや…」

「キツカケが欲しかったんだよ！それをA—RISEが作ってくれるとは思わなかったけどさ」

「まあ、にこちゃんがやりたくないって言うなら断るけど…μ、sは9人揃ってμ、sなんだから」

「ちよつと、真姫、そういう言い方は卑怯じゃない？」

「どうしてよ？誰がひとりでも欠けたらμ、sはμ、sじゃなくなるの。それは今も昔も変わらないわ。だから、にこちゃんが『参加しない』って言えば、この話は断るわよ」

「…」

にこは複雑な表情をしている。

「…ということですよ」

海未が、返答に困っている彼女に追い討ちを掛ける。

「え、絵里はどうなのよ？膝の心配があるでしょ？」

「はい、それは確かに。ですが、絵里も前向きですよ」

「ダンスは身体が覚えてるだろうから、昔ほど追い込まなくても大丈夫だし、数曲程度なら問題ない…ってさ」

「ふん！そんな簡単に…」

「なにを迷ってるにや？にこちゃんもやりたいならやりたい…って素直に言えばいいのに。真姫ちゃんとおんなじにや」

「なんでそこで私が出てくるのよ！」

「まあまあ…」

珍しく穂乃果が仲裁に入る。

普段の自分と海未とのやりとりを見ているようで思わず苦笑した。

「実は…私たちがやろうと決めたのには…もうひとつ理由があるので  
す」

「？」

「恐らく、μ'sとして活動出来るのは、これが最後のチャンスかと  
…」

「！」

「そうね…それがもしかしたら一番大きな理由かも知れないわね」

「な、なに言ってるのよ！そんなこと…」

「そうは思いたくないけど…」

「最後なんて言わないでよ！」

「わかってるわよ。そんなこと思いたくないけど、海未が事故に遭ったって聴いたとき…救急車で運ばれたって聴いたとき…9人で居られるのが永遠じゃない…って思ったの。もちろん、いつかそういう日が来ることはわかっていたけど…それが『突然起きることもある』って、改めて気付かされたのは事実…」

「だから…そうなる前に、もう一度みんなでステージに立ちたいにや！」

「真姫…凜…」

にこは2人の顔を交互に見た。

真姫は少し恥ずかしそうにして目を逸らせたが、凜は真っ直ぐにこを見つめた。

「それに…やっぱり、みんなが待ち望んでくれてる、このタイミングしかないでしょ？」

「穂乃果…」

「でしょ？」

「…花陽は…花陽はどうなのよ？…できる、できない…って言ったら、あの娘が一番ネックじゃない!？」

「にこちゃん、かよちゃんが断るハズないにや!」

「一番弟子がやるって言ってるのに、師匠が出ないっていうのはねえ…」

と意地悪そうな目をして穂乃果が煽る。

「にこちゃん、わりとビビりだから、5万5千人って規模に怖じ気付いてるんじゃない?」

と真姫も、穂乃果に続く。

「そ、そんなこと、あるワケないでしょ!アンタたちと違ってアタシはプロなのよ!」

「じゃあ、やるにやあ!？」

「世界中のファンが、この『にこにー』の復活を待ち望んでることは、よくくわかってるわよ?でも、そんな大事なこと、二つ返事で答えるわけにはいかないの!!」

にこは両手を握ると、ブンブンと2回ほど上下に振った。

そして、しばし間を置いてから

「一日…」

と呟いた。

「えっ？」

「一日だけ考える時間を頂戴よ…」

「にこちゃん…」

「明日には答えを出すから」

穂乃果がみんなの顔を見る。

海未も、真姫も、凜も…黙って頷いた。

にこの回答はわかってる…そんな、どこことなく余裕のある顔だった。

「うん！わかった！待つよ」

「ありがとう…」

にこは小さく呟くと…穂乃果の部屋から出て行った。

「それで返事は？」

海未の話を聴いていた高野が、その先を尋ねた。

『『仕方ないわねえ…』でした』

「OKしたってこと？」

「はい」

「そうだよね？さつき参加するって言ったもんね…でも、その人は、なんでそんなに渋ったのかな？」

「そうですね…それは…話せば長くなりますが…彼女は、sの中で

唯一本気でアイドルを目指していたメンバーなのです。ですから、アキバドームでライブができるなんて、本当は嬉しくて嬉しくて堪らなかったと思いますよ」

「だよねえ」

「なので、もしかしたら、照れ隠しみたいなものもあつたと思います」

「ああ、なるほど…」

「それともうひとつ…本気でアイドルに憧れていたからこそ、その世界から戻れなくなることが、怖かつたのかも知れません」

「ん？」

「彼女は今、アイドルの夢を絶ち切つて、ミュージカル女優の道歩き始めました。もし、ここで、アイドルとしての快感を覚えてしまったら…」

「なるほどねえ…決心が揺らぐかも…つてことか…」

「はい…」

「そりゃあ、確かにあるかも…まあ、なんにせよ、よかつた、よかつた…かな？」

「はい」

「ところで…園田さんは彼氏とかいるの？」

「は、はい？」

「好きな人とか…」

「なんですか!?!いきなり!」

…ま、まさか…

…いえ、そんな…

…心の準備が…

…いえ、いえ、まだ早いです…

「いや、ごめん、ごめん…ふと、雑誌の記事を思い出してさ。ひとりだけいたじゃない?…星空さん…って言ったっけ?でも、他の人は本当のところはどうなのかな…って」

「は、はあ…」

「前にさ、*ム* *S*って色々な特技を持ったメンバーが奇跡的に集まった…って言ってたでしょ」

「ええ」

「だけど、もっと凄いのは、揃いも揃って、みんな美人さんだってことじゃない?オレはそっちの方がよっぽど奇跡だと思うわ。書類審査でもした?って感じで」

と高野は屈託なく笑った。

「そ、そうですね…」

海末の顔は、少し引きつっている。

「だから、みんながみんな、彼氏がいないなんて、にわかには信じられなくて」

「私もすべてを知ってるわけではありませんが…」

「へえ…性格に難あり…とか?いくら綺麗でも、性格悪いのは…だし…」

「そ、そんなことはありません!みんな、とても素晴らしい人ばかりです」

「だろうね。園田さんの仲間だもんね」

「きよ、恐縮です…」

「…っていうと、相手に求めるものが高すぎるのかな?…この間、一緒に来てくれた…高坂さん…だっけ?彼女なんかは、誰とでもすぐに打ち解けそうだし、男子受けしそうな感じだけどなあ…」

「友人は多いと思いますが…恋人は…」

「そっか…なるほどね…」

ひとり頷く高野。

「？」

「あと、もうひとり…えつと…」

「ことりですか？」

「そう！あの娘はヤバイよね！仕草とか声とか、計算してやってるんじゃないとしたら…記事にも書いてあったけど…あれは男が勘違いしちゃうわ」

嬉しそうに話す高野の言葉に、一瞬、眉を顰（ひそ）めた海未。

だが、すぐに

「はい。私もことりに見つめられてお願いされると、何でも許してしまいます」

と切り返した。

「オレも一瞬クラツときたもんなあ…」

「えっ？」

「あ、いやいや…それだけ魅力的な人が多いって話で」

「は、はあ…」

「で？」

「はい？」

「園田さんは？」

「えっ？」

「彼氏…好きな人…」

「あつ…いえ、私もまだ…」

「でも、モテるでしょ？」

「いえ、いえ…」

「まくたまた…謙遜しちゃって…」

「本当です!!」

海未の声が少し大きくなった。

…ああ、恥ずかしい…

…ちよつとムキになってしまいました…

「あつ、すみません…」

「あ、こつちこそ、ごめん。ふうん、いないんだあ…みんな見る目ないんだなあ…」

「いえ、そんなこと…」

「ちなみにどういう人がタイプなの？」

「は、はい？」

「見た目とか…」

「見た目はあまり拘りませんが…」

「いやあ、みんな、そう言うけどさ…見た目って結構大事だと思うけどね…。カッコいいとか、カッコよくないとかじゃなくてさ、タイプかタイプじゃないか…っていう意味で」

「？」

「性格なんて、付き合ってみなきゃわからないんだから、まず導入部はルックスでしょ？」

「は、はあ…」

「特にタイプというのはないのですが…苦手な人なら…」  
「ん？」

「時間とお金にルーズな人は…」

「おお！気が合うねえ！オレもそこにだらしな人はダメだなあ」



「はい！やはり何事にも誠実な人が…」

「そりゃあ、そうだ…」

「あの…」

「ん？」

「高野さんは…」

と言い掛けて、海未は口を噤んだ。

…思わず高野さんの好みの女性を訊こうとしてしまいましたか…

…愚問ですね…

…あんなに非の打ち所がない人と付き合ってたのですもの…

「オレがどうかした？」

「あ、いえ…」

「オレの好きなタイプ？そうだなあ…見た目も大事。中身も大事。あはは…欲張り？ルックスはいいに越したことはないけどさ…あんなりこだわらないんだ」

海未の言いたいことが伝わったのか、高野は自ら話し始めた。

「？」

「さっきの話と矛盾してるだろ？でも…口で説明するのは難しいんだけどさ、可愛い人もアリだし、綺麗な人もアリ。人を外見で判断しちゃいけないんだけど、自分の中の合格点みたいなのがあって、そこをクリアしてればいいかな…って」

「はあ…」

「でも、太ってる人はNGだな。自己管理が出来ない人なのかな？…

て思っちゃう。…ああ、これってセクハラに当たる？大丈夫だよね、園田さんはスマートだし」

「どうでしょう…あまり大きな声では言わない方が…」

「…やっぱり？」

「ですが…自己管理が出来ない…という点では、共感します。もちろん、すべての人がそうだとは言えませんが…」

海未の頭の中に、幼馴染みの姿が浮かぶ。

「だから…μ、sの中だったら誰？って訊かれたら…」

…誰なのですか？…

「答えられないよねえ…タイプは違うけど、みんながみんな、綺麗だし、可愛いし」

それを聴き、メンバーの固有名詞が出てこなかったことに、海未はホッとした。

…ですが…

…高野さんがμ、sのことを知れば知るほど、得も言われぬ不安が襲ってきます…

「？」

「あ、いえ…」

「みんなを生で観られるのかと思うと、今からワクワクしちゃうな」

「観に…来て頂けるのですか？」

「もちろん！…3月って言ったよねえ…あと4ヶ月ちよい？頑張つてね！」

「はい！あ、高野さんもリハビリ…」

「ああ、そうそう。オレさ、順調にいけば、2週間後…来月始めには退院できそうなんだ」

「あっ！」

「歩行訓練もだいぶ進んで、もう少しで松葉杖も取れる」

「おめでとうございます！」

「まだ、早いよ。オレの場合、ここからが長いから…」

「…」

「あ、うそ、うそ！普通の人はずって話。オレはほら、アスリートだし！  
…Jリーグの開幕は3月の末だから…オレも園田さんと一緒に、その  
時を目指すよ」

「は、はい！」

そう返事はしたものの、さすがの海未でも、そんなに簡単ではない  
ことはわかる。

…高野さんは、どこまで優しいのでしょうか…

「園田さん？」

「楽しみにしててください！絶対に素敵なステージにしますから」

「約束だよ！」

そう言っつて高野は右手を肩の上へと上げた。

海未は、その意味を悟り軽く手を合わせた。

それは彼女が、異性と初めて交わしたハイタッチだった…。

くつづく

## 高野が決めたこと

11月…。

事故から5ヶ月間の時を経て、高野はようやく退院した。

当初は全治6ヶ月と言われていたので、見込みより1ヶ月ほど早い。

「さすがアスリート！」などと、病院関係者に煽（おだ）てられたが、どちらかと言えば、肉体的なことよりは、厳しいリハビリをこなした精神力を讃えたのであろう。

そうして高野は、松葉杖を使わずも、普通に歩けるまでとなった。ただ、それは『一般的な生活ができるレベルに回復した』…というだけで、サッカー選手として復帰するには、まだまだこれからのことだ。

超大物有名人などが病院を出るときは、看護師一同が正面入口に並んで大きな花束を渡たし、その瞬間を報道陣のカメラが捕らえる…というシーンがしばしば見られるが、そんなことはレアケースである。花束こそ、治療やりハビリに携わった関係者から渡されたものの、病院を出るときはひとりだった。

高野梨里と言えども、チームでは控えに甘んじているし『やむを得ない事情があったにせよ』結局オリンピックピックに出場もしていない。事故に巻き込まれたことで『色々話題にはなった』が、実績を残しているわけではない。

この半年弱の間に、彼はすっかり忘れられた存在になってしまった。

故に…このような寂しい状況も、当たり前と言えば当たり前だった。

た。

：1年後にはオレも『あの人は、今!』のリスト入りだな…

高野は自嘲ぎみに笑う。

もつとも彼自身は、派手に見送られることを望んでいるわけではない。

そんなことをされるのはガラじゃない。

ただ…

本来なら出迎えてくれたであろう『夢野つばさ』がいないことに、寂しさを感じていた。

自分から『大見得を切つて』離別を決断した手前、女々しいことは言えないが…

季節は秋。

人恋しい季節である。

：園田さんには伝えておくべきだったかな?…

義理堅い彼女のことだ。

花束や手土産を持って、出迎えに来てくれるに違いない。

しかし、そのあとはどうしたらいいのだろう?

まさか、彼女を残して、ひとり立ち去る訳にはいかない。

かと言って、一緒に帰るといいうのも変な話だ。

結局のところ、彼女へは事後報告という形がベストだということで自己解決した。

「寒いなあ…」

昔から高野は寒さが苦手だ。

病院の外に出たとたん、うう…と身体を震わせた。

その時に吹いてきた風に、落ち葉がザサーツと舞い上がる。

彼には、その木枯らしが身にも心にも沁みだ。

つばきは今、ドイツでメデイカルチェックを受けている。

順調にいけば、この月末にも正式入団となる見込みだ。

「オレも負けてらんねえぞう!!」

うーん…と伸びをしながら、大声で叫ぶ。

弱気な心を振り払うように、気合いを入れたらしい。

高野は一旦立ち止まり、身体を反転させた。

「じゃあなー」

と病院に別れを告げると、待たせていたタクシーに乗り込み『クラブハウス』がある横浜へと向かった…。

彼が所属するチームの、今シーズンの成績は、決して芳しいものはなかった。

Jリーグカップ、天皇杯とも早々に敗退。

リーグ戦は…降格争いをする事はなかったが…しかし、優勝争いに絡むこともなく、シーズン終盤を迎えるにあたって盛り上がりに欠けていた。

加えて親会社の不祥事などもあり、輪を掛けて選手の士気も低下しているようだった。

「退院おめでとうー」

そう高野に声を掛けたチームマネージャーの声も、心なしか暗く感じる。

「あんまり歓迎されている感じじゃないですね」

と高野。

「いや、そうじゃない。こんな状況でキミを迎えなきゃいけないというのが、心苦しくてね…」

「監督、辞任すると出ていきましたが…」

「オフレコだが…その通りだ。…と言っても、選手には通達してあるがね」

「そうですか…」

「昨シーズンは戦術が上手く嵌って、そこそこの成績を残せたが…今シーズンは打つ手打つ手が、ことごとく裏目に出た。何より期待していた高野梨里も離脱したし…」

「あははは…心にもないことを」

「そんなことはないさ。私はもっと早くにキミを使えと推していたよ」

「そりゃあ、どうも…」

「キミがオリンピックピックでそれなりの活躍をしてくれれば、注目度も上がっただろうし…私からしてみれば、色々な意味で痛かったよ」

「自分もそのつもりだったんですけどねえ…」

「まあ、事故は不可抗力だ。仕方ない。それにサッカーはひとりプレーするわけじゃない。キミだけ頑張っても、そう簡単には好転しないよ」

「はあ…」

「メツシ級の選手なら別だが…」

「…それは…つまり自分がそこまでの選手じゃない…つてことですよね?」

「ふっ、言葉の綾だ。そう、怖い顔をするなよ…」

「あ、いえ…すみません…そういうつもりじゃ…」

高野は頭を掻いた。

「それで…どうだ?体調の方は…」

マネージャーは徐（おもむろ）に立ち上がると、部屋にあるエस्प

レソマシンにカップをセットした。

「どうもこうも…やつと歩けるようになりました…という程度なので、なんとも…」

「だろうな…」

マネージャーは淹れたてのコーヒーを高野に手渡す。

「実は今日お伺いしたのは、退院の報告だけじゃないんです」

「ん？」

「…退団の申し出に来ました…」

高野は表情を変えることなく、ことも無げに言った。

「!?」

高野が放った言葉と、部屋に漂うコーヒーの芳(かぐわ)しい薫りが不釣り合いだ。

マネージャーは、漂う湯気に向こうの高野の顔をじつと見た。

「長い間…お世話になりました…」

「…どういうことかね?…」

「まあ、気分の問題です。平たく言うと…『解雇』されるとショックが大きいんで、先に自分から辞めようかと」

高野は笑みを浮かべる。

「辞める? サッカーを?」

「あ、いえ…サッカーは辞めませんよ。必ずピッチに帰ってきます。でも…自分は、怪我する前でもレギュラーじゃありませんでしたからね…そんな選手が復帰するのを、チームが何年も待つてくれるとは思



えません」

「待つさ…キミは生え抜きの選手でもあり、宝だからな」

「嘘でも、そう言っただけのものはありがたいですが…」

「嘘じゃない。ファンにとっては、地元の選手、生え抜きの選手っていうのは特別な存在だ」

「…ですね。それはわかります。ただ、理由としては、もうひとつ。チームにいながら復帰を目指しても、甘えが出ちゃうと思うんですよね。『クビー』って言われるまでは、一応給料は貰えるんで」

「退路を断つ…とでも?」

「はい。『復帰』とか『復活』じゃダメなんです。怪我する前と同等レベルじゃ、結局レギュラーは取れませんから。…超えないと…そのレベルを1段でも2段でも超えていかないと、海外じゃ戦えませんので」

「高野くん…」

「自分が闘える!と思えるレベルにまで到達したら、改めて入団テストを受けますよ…まあ、それがマリノスかどうかはわかりませんがどね…」

「なにも、退院した初日にそんなことを言わなくとも…キミはまだ若い。焦る必要はないだろう?」

「そんなことはありませんよ。マネージャーだって期待されながら怪我で泣かされた選手を、さんざ見てきてるじゃないですか」

「それはそうだが…」

「すみません、生意気言いました…。自分は…やっぱり地元のチームだし、ユースから面倒見てもらってるし…レギュラー獲れなかったのは自分の実力ですし…だからこのチームに『砂を掛けて出て行く』つも

りはまったくくないですんですけど…それ以前にサッカーを続けていく為に、どうしたらいいか…いや、続けるだけじゃなくて、活躍する為にはどうしたらいいか…入院中ずっと考えてました。それで出した結論が、これです」

「…」

「2年頑張って、ピッチに戻れなかったら、引退します」

「引退!?!」

「それくらいの覚悟がないと…ってことです」

「…」

「あ、すみません。せっかくなんで、コーヒー頂きます…」

高野は、悪びれることもなく、カップに口を付けた。

「そうか…とりあえず決意はわかった…一旦、こつちで預かる」

苦渋の表情のマネージャー。

「時間が経っても、考え方は変わりませんよ」

「ああ…まあ…だが…発表は待ってくれ。こちらとしてもそれなりの準備が必要だ」

「準備?」

「キミも一社会人だろ?どんな理由であれ『辞めます!』『はい、わかりました』ってほど簡単なものじゃない…ということはわかるはずだ」

「…それは確かに…」

「…ということ、それなりの時間をもらえないかね…。少なくとも今シーズンが終わるまでは待つてほしい」

…そりゃあ、オレが退団するってなりやあ、マスコミがうるさいだろうしな…

…自分から辞めたって言っても、絶対に『辞めさせた』ってことに『したがる』だろうし…

…そんなことになれば、チームもガタガタ…来シーズンのメンバー編成にも影響しかねない…

…それはそうだな…

「…わかりました…」

高野は頷いた。

だが、それとは別にマネージャーの本心はどうか？

高野も読みきれていない。

厄介払いができて良かった。

それも自分から退団するって言ってきたよ！  
ラッキー！

少なからず、そんな気持ちはあるだろう。

…なんせ、オレはメツシではないからな…

高野はそんなことを思いながら、コーヒーを飲み干した。

くつづく

ぶるべり♡とれいんで、大時化（おおしけ）です

「遅いよ…」

「ごめんなさい…初めてのデートなのに遅れちゃいました…」

「オレは、時間にルーズな人は嫌いなんだよ」

「このブラウスのボタンを、開けた方がいいか、留めた方がいいかで悩んじゃって…」

「はあ？」

「高野さんだったら、どっちが気に入ってくれるかな？…って考えてたら出るのが遅くなっちゃって」

「そんなの、どっちだっていいのに…」

「どっちでもよくないです！女の子のオシャレは、とつても、とくつても大事なんです…だから…」

「あ、ああ…わかった、わかった。ごめん、オレが悪かったよ…そんな目で見られたら、許さざるを得ないじゃないか…」

「うふっ！」

「さてと…それじゃあ、南さん、どこに行こうか？」

「ことりでいいですよ？」

「ん？」

「ことりって呼んでください！」

「えっ？あ、ああ…じゃあ、ことりちゃん…どこに行こうか？」

「虹色のマカロンが食べたいです」

「虹色のマカロン？」

「はい！あ、じゃあ、私が案内しますね？」

「えっ？…ああ…」

「美味しかったですう」

「マカロンって、初めて食べた…」

「今度、チーズケーキ食べに行きましょう！」

「ああ…」

「疲れませんでしたか？」

「…っていうより、緊張した…」

「緊張ですか？」

「そりゃ、ことりちゃんどデートだもん…周りの目だつて気になるし…」

「ふふふ…じゃあ、ここでゴロ〜ンって横になって、くつろいでくださいな」

「どこで？」

「はい！背中をマッサージします！」

「ん？」

「もみ、もみ、もみ…」

「あゝ気持ちいい…」

「…ちゅん、ちゅん！…はい、終わりです！」

「ありがとう、楽になったよ…」

「次はご飯を食べましょう！高野さんの為に、じっくりコトコト煮込んだスープです。…あんまり自信ないけど、頑張りました！」

「どれどれ？…うん、美味しいよ！」

「本当ですか！」

「ことりちゃんは、いいお嫁さんになれるねえ！裁縫も得意だし…」

「えへへ…」

「誰かさんとは大違いだ…」

「誰かさん…って、誰かな？」

「ん？えくと…園…」

「ダメですよ！ことりと一緒の時は、他の人を見ちやイヤです」

「あ…」

「私だけを見つめてほしいの…」

「…」

「ことりは高野さんのこと、好きです！高野さんはことりのこと、好き

ですか？」

「ああ、もちろんだよ…大好きだ！」

「嬉しい…。じゃあ、その証拠を見せてください！」

「しよ、証拠？あ、いや…それは…みんなが見てるし」

「じゃあ、私からしちやおうかな？…」

「あつ…」

「ことり!!破廉恥すぎます!!」

海未はそう叫んで、布団を跳ね上げた。

…えっ?…あつ…

…夢…でしたか…

はあ…と大きいため息をついた。

時計を見ると、午前3時。

まだ、起床するまでは3時間ほどある。

…そうですね…

…ことりと勝負したら、勝てる気がしません…

…我ながら女子力の無さに、幻滅します…

…ですが、高野さんも高野さんです…

…いくらなんでもデレデレしすぎです!!…

…時間にルーズな人は嫌いだと言っていたのに、あんなにすぐに許すなんて…

…と…私は夢の中の出来事に、何を怒っているのでしょうか…

「おやすみなさい…」

海未は布団を元に戻すと、気を取り直して再び眠りについた…。

「この人が、海未ちゃんの彼氏の高野さん？なかなかのイケメンさんやね？」

「えっ？ええ…まあ…あつ、梨里さん。こちらが希で、こちらが絵里です」

「ああ、どうも。いつも海未がお世話になってます」

「海未？海未は海未って呼ばれてるの？いつからそんな仲に？」

「はい、つい最近…」

「希さんも絵里さんも、動画では何度も観てますが…実物はもっと綺麗ですね」

「まあ、高野さんって、お世辞が上手なのね」

「あれ？絵里さん、そう聴こえます？…めっちゃ本心なんですけど」

「そうなんや、ありがとさん！でも、…ウチらのこと、ほんまにちゃんと見てくれてるん？胸しか見てないやない？」

「あははは…そんなこと…半分正解です」

「り、梨里さん！」

「だって、海未…それはそれで2人のチャームポイントなワケだし、男として興味ない…って言えば嘘になるじゃん」

「梨里さん！」

「むふっ…正直な人やね！…せっかくやから、ウチのおっぱい…見てみるん？」

「えっ？いいんですか!？」

「いいわけないです！」

「あら、希のだけでいいの？私のは？」

「も、もちろん2人ともが見たいです…」

「ハラシヨー！」

「決まりやね！」

「なにがハラシヨーですか！希も絵里も、梨里さんも、みんな破廉恥です!!」

「海未、そんなに僻むなよ…無い袖は振れないんだし、それは仕方ないだろ?…あ、違うか…無い胸は揺れない…か」

「梨里さん!なんてことを言うのですか!？」

「まあまあ、海未ちゃん…女の魅力は胸の大きさだけやないから…」

「あなたに言われても説得力がありません！」

「じゃあ、海未…そういうワケだから…。梨里さん行きましょう」

「ほな、海未ちゃん」

「絵里!希!梨里さんをどこに連れて行くのです!？」

「ふふふ…どこだつていいじゃない」

「強いて言うなら…『硝子の花園』？」

「意味がわかりません！」

「向こうに花陽と、あんじゅさんと、めぐみさんも待ってるわ」

「ワオ!つて、ことで…海未、じゃあな！」

「ま、待ってください!!」

寝ていた海未は、再び、ガバツと上半身を起こした。

…はあ…はあ…

…夢ですか…

…それはそうです…

…希は多少怪しいですが、いくらなんでも絵里はあんなこと言うハズはありませんし…



…ですが…

海未は自分の胸を触ってみる。

…はあ…

…虚しい…

…いえいえ…

…そんなことを言えば、つばささんだって『ありません』でしたし

…

…私にだって希望は…

…4時ですか…

…眠るのが怖いですが…

…さすがに、起きるにはまだ早すぎますね…

…二度あることは…と言いますが…

…いくらなんでも…

…大丈夫です…

…もう一眠りしましょう…

海未は布団を掛けると、三度眠りについた。

「海未ちゃん！」

「！」

「どうしたの？そんなビックリした顔して」

「穂乃果でしたか…なら、安心です…」

「ん？なんか言った？」

「い、いえ、なにも…」

「高野さんかあ…サッカー選手でしょ？…いいなあ…穂乃果も素敵な彼氏が欲しいよう」

「穂乃果なら、選り好みしなければ、彼氏のひとりやふたり、すぐ作れます」

「それより…ウシシシ…上手くやったねえ…」

「なんのことですか？」

「だって、海末ちゃんがふたりを別れさせたんでしょ？それで、ちゃっかり高野さんと付き合っちゃうんだからさあ」

「そんなんじゃないやありません！」

「穂乃果も、事故に逢おうかな…そうすれば…」

「ば、馬鹿なことを言わないでください！人の生死に関わることで…そんな軽々しく…」

「本当にそうだわ」

「つばささん!?いつの間にも!」

「海末さんが、あの日、あの時、あんな場所にいなければ、梨里は事故に遭わずに済んだのに…」

「…申し訳ございません…」

「まあ、まあ…ふたりとも喧嘩しないの…なんなら穂乃果が高野さんと付き合っただけよ」

「高野さんは、あなたのようにだらしない人とは付き合いません」

「オレは別に穂乃果さんでもいいけどなあ…」

「梨里さん！」

「穂乃果ちゃん、明るいいし、ノリがいいし…海末はオレがボケても突っ込んでもくれないし」

「それなら凧の出番にや〜！」

「どうして凧が出てくるのです!」

「え、だって高野さんなら凜の方が、海未ちゃんよりも、楽しくやれそうじゃん」

「あなたには、ちゃんと彼氏がいるじゃないですか!」

「そうよ!だから高野さんは、私と付き合うってことになってるの!」

「なんで西木野さんが、凜と海未ちゃんの話に入ってくるの?」

「どこかで聞いたことあるセリフね…」

「凜とも真姫とも、高野さんは付き合いません!そもそも胸が小さい人は…」

「別に小さくてもいいけどさ…オレのこと好きでいてくれれば…」

「じゃあ、このアタシにもチャンスがあるってことね?」

「なに!?!」

「もちろん!…っていうか、オレ、全員と付き合うわ!そうすれば丸く収まるんじゃない?」

「収まりません!!」

目を覚ました海未の表情は、殺気立っている。

…危ないところでした…

…あのまま続きを見ていたら、みんなを矢で射抜いていたかもしれない…

…いえいえ、そもそも私は高野さんの何者でもないのです…

…なのに、こんな夢を見てしまうこと自体、間違いなのです…

…修行が足りないのです…

…わかっています…

…高野さんはこれから大切な時期なのです…

…ですから…つばささんとも別れ…

…わかっています…

…わかっているのですが…

…高野さん…

…私は…

…私は…あなたのことが…

海未はやおら起き上がると、パジャマを脱ぎ、ジャージに着替えた。  
時刻はまだ、5時前。

真つ暗である。

それでも海未は、そつと玄関を出ると、夜明け前の街へと走りに出  
掛けた。

寒い。

寒いが、なぜか海未の瞳からは『汗』が流れ落ちていた…。

くつづく

## 朝食

「じゃあ…行ってくる…」

「ああ…」

「キミもトレーニング頑張つて…。ドイツで待ってるわ」

「残念ながら、オレは寒いのが苦手だから、行くならリーガ エスパニョーラ（スペイン）だな」

「うん、わかった…じゃあ、そろそろ…」

「チョモ！」

「ん？…あっ！…」

「別れのキスだ…」

「…もう…ばか…」

「好きだよ…」

「…私も…あ、ダメ…そんなギユツとされたら…離れられなくなる…」

「これが最後だから」

「みんなが見てる…」

「構わないよ」

「それに…それ以上されたら…『したくなっちやう』…」

「する？」

「…ばか…」

「あゝつばささんだ！」

「！」

「穂乃果さん？」

「つばささん、これから旅立たれるのですね!？」

「海未さん?…μ’sのみんな…どうして空港(ここ)に?」

「応援に伺いました!…ご活躍、期待しております!」

「ありがとう!」

「どうぞ、お身体に気を付けて!」

「うん!じゃあ、行ってくる…。またね!バイバクイ!」

「行ってしまいましたね…」

「ああ…」

「それより、先程、つばささんと抱擁の上、口づけをされていたようですが…」

「そうなんだよ。これからだったのにジャマされちゃったよ…」

「す、すみません…」

「じゃあ、その続きを…園田さんとしていい?」

「な、なにを仰るのですか!!」

「だよね…」

「では、ことりとしますか?」

「えっ!？」

「こ、ことり!」

「南さん?」

「そんな他人行儀な呼ばれ方はイヤですよ…ことりと呼んでくださいな」

「ことりちゃん…」

「でも、やっぱり…ここじゃ恥ずかしいから…あっちに行きましょう！」

「おっ?」

「えく、ズルいよう。それなら穂乃果も一緒に!」

「ことりも穂乃果も、なにを考えてるんですか!」

「ちゅん…ちゅん…ちゅん…ちゅん…ちゅん!…はい、高野さん、時間切れです…」

「時間切れ?」

「はい!」

高野はスマホのアラーム音に気付いた。

「…夢?…」

わかった、わかった…と呟きながら、画面をタップして音を止めた。

「…タイムアップ?…」

高野は残念そうに頭を掻く。

「これから…ってとこで起こされちゃったぜ…」

…それにしても…

…チヨモとキスをしたり、抱き合ったり…南さんに手を握られたり

…

…夢と呼ぶにはあまりにリアルな『感触』があった…

高野は左手で、自分の右手を触ったあと、うつすらと朝陽が差し込む室内を見回す。

もちろん、誰もいるハズがない。

「逆にいたら怖いか…」

…ホラーだな…

…しかし、それよりも…

…南さんって可愛いなあ…

…あんな娘にキスをねだられたら…

…例え誰と付き合つていようと、断る自信がない…

…あ、いやいや、待て待て…

…あれは絶対男をダメにするタイプ…

…ハマったら抜け出せない…

…気を付けないと…

…でも…

…ハマってみたいかも…

…もう一度寝たら、続きが見れるかな…

高野はしばし、ベッドの中でそんなことを考えた。

まあ、健全な男なら、それも致し方ないことだろう。

だが、ここは病院じゃない。

自宅だ。

だからこそ、スマホでアラームをセットし、早起きをした。

本格的にトレーニングを始めるにあたり、まずは身体の土台作りが必要だ。

今日から、専属トレーナーの元に通うことになっている。



従って、二度寝する余裕などなかった。

「…起きますか…」

ゆっくりとベッドから這い出る。

…だけど…溜まつてるなあ…

…まあ、これも元気になった『証し』ということか…

自分の『下半身の膨らみ』を見て、呆ながらも、梨里は笑ってしまつた。

「あら、おはよう！」

「お、おう…」

「ご飯食べる？」

「あ…ああ…」

「ふふ…」

「なに笑ってるんだよ」

「逆に…なに緊張してるのかな…って…」

「そ、そりやあ…久々の家だし…」

「自宅に帰ってきて、それはないんじゃない？」

梨里の母は、食事の仕度をしながら笑った。

「あ…いや…まあ…それはそうだけど…やつと帰ってきたっていうか…  
…ようやく、これからというか…ちよつとそんなことを思つて…」

「そうね…」

「悪いいな…また世話になるけど…」

「ばかなこと言わないの…」

「ん？」

「前に言わなかったっけ？幾つになっても、あなたは私の子供なん  
だつて。面倒見られるうちは、頼つていいのよ」

「…そんな…いつまでも頼れねえよ…」

「はい、どうぞー!」

彼女は、彼の言葉を聞き流すように、ご飯が盛られた茶碗を手渡した。

「あ…ああ…いただきます…」

高野は手を合わせると、配膳された味噌汁、焼き鮭、卵焼きに箸を付けた。

「どう?久々の我が家の味は?」

「旅館の朝食みたいだな…」

「メニューじゃなくて、味を訊いてるのよ…」

「…うん…まあまあ…」

随分、素っ気ない返事である。

だが、母は知っている。

彼が言う「まあまあ…」は、不味くないという意味だ。

高野は決して味覚音痴ではない。

自分の好みに合わなければ、容赦なく「しょっぱい」だの「薄い」だのと言って、自分で味を調節する。

それをしないということは「OK」なのであろう。

母は満足そうに、彼の食事風景を黙って見守った。

「見てなくていいよ…食べづらい」

「いいじゃない、見てたって」

「監視されてるみたいで、好きじゃない…」

「ケチ!」

「そういう話じゃないだろ…」

「でも、良かった…こうやって戻ってきてくれて…」

「あ…」

突然の母の眩きに、高野の箸が止まった。

「さて、お母さんは邪魔者扱いされちゃったから、洗濯でもしてくるかね…」

彼女は、ケラケラと笑いながら部屋を出る。

その刹那、彼の胸に何か突き刺さった。

高野は『夢野つばさ』こと『藤綾乃』のDNAを妬んだ時期があった。

国体選手の父親と、モデルの母親。

その2人の『長所のみ』を受け継いだような…非の打ち所のない綾乃。

対して、特になんの特徴もない、ごくごく一般的な両親から生まれた高野。

素材で勝てるハズはない…そう思っていた。

持って生まれた才能は、百の努力にも優る。

どう逆立ちしても、それはひっくり返せない。

綾乃の母を見るたびに『自分の母親との差』を痛感し、絶望することもあった。

高野の母も決して造作が悪い訳じゃないが…元モデルで、現ファッション誌の編集長…おまけに二十代前半で綾乃を産んだ『久美』と、比較することに無理があった。

歳を重ねるにつれ、そんなコンプレックスは少しずつ解消されていったものの、それでも久美を見るとハッとさせられた。

それがどうだろう…

今、この瞬間、母親に対する変な感情が、スーツと消え去ったのだ。まったく予期しなかった。

本当に突然に…。

…バカだなあ、オレも…

…今、気付いちまったぜ…

…オレも親父とおふくろから、何事にも代えがたいDNAを受け継いでるじゃねえか…

…親父もおふくろもスゲーぜ…

一時は意識不明だった、息子。

目を覚ますまでの3日は、生きた心地がしなかったに違いない。

それでも、何事もなく、気丈に振る舞っていた。

高野の前で、悲しい顔など、一切見せなかった。

むしろ、驚くほど普段通りだった。

その様子に、つばさも海未も呆気に取りられていたが、実は当の高野自身が一番驚いていた。

一歩間違えると、それはあまりに冷たく見えるかも知れない。

しかし、事故に遭って誰よりも辛いのは本人なのだ。

本人以上に、周りが取り乱しちやいけない。

そんなことをすれば、本人はもっと苦しくなる。

だから…

…親父もおふくろも、オレの意識が回復しても、余計なことは何も言わなかった…

…強えよ…

…自分の親ながら、大したもんだよ…

…オレがこうして、わりと冷静でいられるのは…

…きつと2人から授かったDNAのお陰なんだろう…

…俺が受け継いだのは、外見や能力じゃない…

…何事にも動じない、強い精神力…

…これだったか…

食事が終わった高野は、洗濯機の前にいる母親の元へ歩み寄った。

「おふくろ…」

「なあに？」

「ごちそうさん…」

「食べ終わった？」

「やっぱ、家のメシが一番美味しい…ありがとな」

「…何か悪いものでも食べた？」

「おい、おい！自分で作っておいて、そりゃあ、ねえだろ？」

高野は、アメリカのコメディアンみたいに、オーバーアクションで母親に突っ込みを入れた。

その頃…

「もしもし…海未？どうしたの？えっ…私に相談？…」

真姫は、滅多に掛かってこない相手からの電話に驚いていた。

しばらく話を訊いたが

「待って！そういう話なら希とか絵里の方が適任じゃない？…ダメです…って言われても…なら、ことりなら…ええ？ことりもダメ？…だからってなんで私なのよ…意味わかんない…」

と明らかに困惑している。

しかし

「わ、わかったわ。電話で話してもラチが開かないから、とりあえず、あとで…うん、じゃあ…」

と電話を切った。

海未に押し切られたたようだった…。

くつづく

カウンセラー 真姫（カルーセル麻紀ではないよ）

「なにかあった？こう見えても、私、結構忙しいんだけど…」

海未に呼び出された真姫は、いつものように面倒くさそうな顔をしていた。

「すみません。相談できる人が真姫しかいなかったものですから…」

「まあ、いいけど…それで、相談って？」

「はい…あの…その…真姫は…人を好きになったことがありますか？」

「はあ？」

「真姫は…その…」

「そ、それは…ないわけじゃないけど…」

真姫の脳裏に真っ先に浮かんだのは、今、アメリカで仕事をしている同級生。

「な、なによ？藪から棒に…」

「私は…私は…今、好きになった人がいます…」

「高野さん…でしょ!？」

「はい…」

一回頷いた海未だが

「な、なぜ、わかつたのですか!？」

と大きな声で叫ぶ。

…知り合って5年以上経つけど…

…海未のこういうところがいまだに理解できない…

「わかるでしょ、普通…」

「そうなのですか」

「そうなのですか…って…まあ、いいわ…それで？」

「私のこの想いを、どうかしてほしいのです！」

「はあ？…そんなこと本人に言いなさいよ。私に言ったって仕方ないでしょ？」

「それが出来れば苦労しません」

「だとしても…電話でも言ったけど、恋愛相談なら希とか絵里にしなさいよ。私に話したって何の解決にはならないわ」

「希や絵里ではダメなんです。サイズが違いすぎます！」

「サイズ？」

「い、いえ、レベルが合わないと言おうとして間違いました」

「？」

「気にしないでください」

「まあ、確かに色々経験値は高そうだけど…」

「はい」

「でも穂乃…は無理か…えっと…ことりだっているじゃない」

「私は真姫に話を聴いて欲しいのです!!」

「…わ、わかったわ…」

海末の剣幕に圧（お）され、真姫は思わず首を縦に振った。

「ありがとうございます」

…希や絵里と較べて、レベルが低いって思われてるのは癪だけど…

「ズバリ、私はどうしたらよいのでしょうか？」

「嘘でしょ？そんな丸投げの相談ってある？」

「…すみません…いささか直球過ぎました…。では、まずは話だけで



も聴いてください」

「…」

「私は…高野さんに助けられて以来、ずっと胸の中に彼がおりました。最初は真姫が言った通り『吊り橋効果』もあったのかもしれない。ですが、日が経つにつれ、高野さんがただ優しいだけの人でなく…考え方とか、生き方とか、共感することが多く…人間として尊敬できる存在へと変わっていったのです」

「へえ…海未がそう言うのなら、よっぽどのね」

「もちろん、高野さんにはつばさんがいらつしやいましたので、私の出る幕などありませんでしたから、それはそれで自制心が働いていたのですが…」

「どうやら2人は別れてしまったらしい…と…」

真姫も、おおよそのことは聴いていた。

「…はい…」

「それを知って、ブレーキが利かなくなってきた？」

「はい」

「まあ、別に人を好きになることは悪いことじゃないと思うけど…」

「実は、毎日のように夢に現れるのです」

「夢？」

「はい、高野さんが…」

「そこまで？」

「そして…」

「そして？」

「…そして…」

「そして？」

「…みんなが高野さんを奪っていくのです…」

「…みんな？…」

「μ, sのみんなです。ある時は希や絵里が大きな胸を見せて…ある時はことりが女子力を武器に…この間は花陽まで私を裏切りま

した…」

…なるほど…

…そういうこと…

…それじゃあ、彼女たちに相談できないわ…

「ん？今、みんなって言ったけど私は？」

「はい。当然含まれてます」

「なにそれ、意味わかんない！私がそんなことするはずないじゃない！」

「しかしながら、真姫は主犯ではありません」

「主犯…って」

…ってことは、なに？…

…海未の中では「私は安心」って思われてるのね…

…女として魅力がないってことかしら…

…そう思うと少し、腹立たしいんですけど…

真姫は思わず苦笑いをした。

「やはり、こんな夢を見てしまう、私はおかしいのでしょうか？」

「精神科は私の専門外…」

「すみません」

「ただ、海未がその人のことを本気で好きだということはわかった」  
「ありがとうございます」

「だったら、その気持ちを書き留めておけば、いい歌詞ができるんじゃない？園田海未、初めてのラブソング…完成したら曲をつけてあげるわ」

「からかわないでください！」

「真面目に相談に乗ってるのに、それはないんじゃない？」

「すみません…つい…」

「言つちやえばいいじゃない」

「えっ?」

「…メンバーに。『園田海未は高野さんのことが好きです!だから誰も盗らないでくださいって』」

「そ、そんなこと…それに…まずは高野さんがどう思っているかが大事かと…」

「なら、答えは出てるでしょ」

「えっ?」

「本人に確かめるのが一番…ってこと」

「そ、それはそうなのですが…いえいえ、やはりそうはいきません。それに…」

「つばささんの存在を気にしてる?」

「もし、仮に…高野さんが私の好意を受け入れてくださったとしても…それだと、まるで週刊誌に書かれた通りになってしまいます…」

「それは、確かにわからなくはないけど…別に海未が別れさせたわけでもないし…たまたまそういうタイミングだったわけで…」

「そう簡単には割り切れません」

「でも本当に、高野さんってそこまでの人なの?結構女好きなんですよ」

「そんなことあり…ま…せん…たぶん…」

…正直、そこは否定できないのですが…

…つばささんは『口だけ番長』と申してましたし…

「でしょ？もう少し冷静になった方がいいんじゃないかしら」

「私は至って冷静です！」

「ふくん…」

…海未がそこまで入れ込むなんて…

…ちよつと興味あるかも…

「そうしたら、一回どこかに誘ってみたら？」

「えっ？」

「別にデートってほど大袈裟なものじゃなくて…ちよつと食事にいきませんか？くらい。ひとりで不安なら、私も付き合っただげるわ」

「はあ…」

「丁度いいじゃない。もうすぐクリスマスだし」

「…って、真姫はクリスマスの予定はないのですか？」

「ヴェー…よ、余計なお世話よ…私はそういうのは面倒くさいから…

その…」

「…」

「…」

「とりあえず、ありがとうございました。話を聴いてもらえて、少し楽になりました」

「…役に立ったなら何よりだわ…」

「そうですね…確かに、まだ自分がどこまで本気なのか、よくわからない部分がありますので、一回落ち着く必要はあるかと思えます。…では、今日はこれで…もう少しどうしたらよいか自分で考えてみます…」

「そう…わかったわ」

そうして2人は「また…」と、軽く手を上げて別れた。

年の瀬も近づいてくると、音楽番組がやたらと多くなる。

TVでA—L I S Eとアクアスターを見ない日はない。

稼ぎ時と言えば、稼ぎ時か…。

そんな彼女たちが、持ち歌ではないクリスマスソングを披露している。

「早いなあ…今年も1ヶ月足らずで終わりだよ…」

高野にしてみれば、入院生活が長かった為、初夏からいきなり冬になった感覚だ。

Jリーガーであれば本来、この時期はまだ、天皇杯を戦っていないければならない。

天皇杯の決勝は1月1日。

従って優勝を争う2チームは年が明けなければ、仕事納めにならない。

しかし、それはサッカー選手として、すごく幸せなことなのだ。

逆に言えば早々に敗退してしまったチームは、もう、今シーズンが終わったことになる。

以前、サッカーは『アップセット(番狂わせ)』が起きやすいスポーツだと紹介したが、日本国内においては、この大会こそ、それが顕著に現れる。

天皇杯は高校生、大学生、社会人、クラブチーム…そしてプロが混じって予選から戦う。

実際、梨里の所属チームも高校生に不覚を取った。

がちりちりと守りを固められ：放ったシュートはバーを叩くなどの運にも見放されたが：結局は延長戦も無得点で終わり、PK戦で涙を飲んだ。

ベスト16入りすらできなかった。

プロ入りしてから3年、常にベスト8入りをしていただけに、これほど早く終戦を迎えるのは初めてのことである。

もつとも、チームが勝ち進んでいたとしても、高野がベンチ入りすることはなかったわけだが…。

…ということ、彼は久々に家で中継を観た。

その結果、今年のベスト4は川崎vs鳥栖、仙台vs神戸となった。どのチームが勝っても初優勝という、とても面白い顔合わせである。

「準決勝は12月23日：川崎と鳥栖は：『等々力』かあ：たまには観戦に行ってみるかな」

『等々力』とは川崎フロンターレの本拠地のこと。

神奈川に自宅がある高野にとって、ほぼ地元と言っている。

…もしかしたら、次のオレのホームグラウンドになるかも知れないし…

そんなことを考えている時に、高野のスマホが鳴った。

「園田さん？」

くつづく

## 水の星が愛をこめて

「はい、高野で…」

「高野さん！いつ退院されたのですか!？」

応答しようとした高野に対して、電話の向こうの相手は、名乗りもせず、喰い気味に言い放った。

「そ、園田さん？」

「先ほど病院を訪ねたら『もう退院されました』と」

…しまった！…

…下手に迎えに来てもらっても…と思ってたから、事後報告にしようとして…

…そのまま忘れてた…

「それは、その…サプライズってヤツ？園田さんをビックリさせたくて…」

「そんなサプライズは要りません！」

「ご、ごめん…決して悪気はなかったんだけど…」

「…でも、良かったです…」

「？」

「無事、退院されて…」

「あ、ああ、お陰さまで…」

「おめでとうございます！」

「あつ…うん、ありがとう」

「…ということとは…」

と一拍間が空いた。

海未の隣に誰かがいるようで、囁くような声が聴こえたあと、

「…か、快気祝いをせねばなりませんね…」

と彼女は言葉を続けた。

「えっ? いいよ、そんな大袈裟なこと…」

「大袈裟ではありません!!…えつと…さ、再来週の土曜日などいかがでしょうか?」

「聴いてる? オレの話…快気祝いなんて…」

「では、せめて一緒に食事だけでも…これまでの事を何かしらの形でお礼を致したいのです」

「気持ちありがたいけど…」

「ご迷惑でしょうか…」

「いや、そういうことじゃ…」

海未の困った顔が、頭の中に投影される。

…あまり頑なに断るのも悪いか…

「…えつと…再来週の土曜日?」

「はい、23日です」

「あれ? その日は…サッカーを観に行こうかと思ってたんだ…」

「サッカーですか!?!」

「天皇杯って知ってる? 元日に決勝が行われるんだけど」

「はい、なんとなくは…」

「その準決勝があつて…」

「高野さんのチームが出られるのですか?」

「いや、残念ながら、うちはとつくに敗退した。でも、まあ、地元ของทีมで、試合会場も川崎だから…」

「ご一緒します!!」



電話の向こうから、囁きが聴こえたあと、海未が力強く返事した。

「えっ?」

「あ、いえ…私もこの間、つばささんの試合を生で観させて頂いたのですが、その時、いたく感動致しまして…」

「えっ…ああ…まあ、構わないけど…」

「本当ですか!？」

「サッカーファンが増える…っていうことはいいことだと思うし。普及活動も選手の役割として大事だから…」

「あ、ありがとうございます!」

「でも、寒いよ? 暖かい格好でこないと…」

「大丈夫です!」

「ちなみに、そこに誰がいる? なんとなく、別の人の声が…」

「は、はい友人が…」

「ああ、良かった。幻聴かと思ったよ」

「いえいえ…あ、それで…できれば、隣の者も一緒に行きたいと申しとおるのですが…」

「友人って…南さん?」

「違います!!」

速攻で否定する海未。

…やはり、高野さんの頭の中にはことりが?…

「…あ、ごめん。オレの中では園田さんの友達って言ったら、南さんと高坂さんだと思ったから…」

「いえ、それは確かにそうなのですが…」

「わかった。じゃあ、その人の分も含めて、チケット3枚取っておくよ」

「は、はい！宜しくお願い致します！」

「…うまくいったじゃない…」

海未の隣で話を聴いていた真姫が、優しく声を掛ける。

「はい。まさか、こんなにトントン拍子に話が進むとは思いませんでした…ですが…真姫がいてくれなければ、途中で会話が終わってました」

と言ったとたん、海未はへなへなと腰から崩れ落ちた。

「ちよつと、大丈夫？」

「…緊張の糸が切れました…」

…海未にしてはよくやったわ…

…でも、こんな調子じゃ先が思いやれるわね…

真姫は海未の身体を引っ張り上げながら

「しつかりなさいよ…これから勝負なんだから」と励ました。

「萌絵…何見てるの？」

忘れてられているかも知れないが『星野はるか』の本名は『田中萌絵』である。

「えっ、ああ、かのん…今年のラブライブの本大会に残ったチームの動画…」

そして『水野めぐみ』は『阿部かのん』。

仕事をしていない時は、お互い本名で呼びあっている。

「そっかあ…今年ももう、そんな時期なんだね。自分達のことです」

杯で、なかなかそこまで気が回らなかった…」

「そうだね。いろんなことがあったけど、1年間あつと言う間だったね」

「まあ、私たちは、ここからがもつと忙しくなるけど…」

「うん…」

「それで、どう。今年のスクールアイドルは？」

「まあ、どこもそんなに変わらないかな。特にこれ！ってところは」

「μ'sとA-RISEがインパクトありすぎだったよ！」

「そりゃあ、スクールアイドルの先駆者だしね。それに比べれば…全体的なレベルは上がってるけど、どうしても二番煎じ、三番煎じに見えるっちゃうのよね」

「あははは…それは仕方ないよ。『スクールアイドルの大会』だもん」  
「楽曲もパフォーマンスも似たり寄ったりで…だから、結局は、いかにビジュアルがいいか…ってことが、勝敗を分けるんだと思うんだけど…」

「毎年のことじゃない」

「その中で…」

「えっ?」

「ひとつだけ『引っ掛かるチーム』がいるんだ…」

「引っ掛かるチーム?」

「これなんだけど…」

「『アクオス』?」

「『Aqours』って書いて『アクア』って読むんだって」

「!!」

めぐみはハツとして、思わずはるかの顔を見た。

「『目の付け所が違うでしょ?』…ってことではないみたい…」

「アクアねえ…」

星野はるかとは水野めぐみのユニットは、正式には『アクアスター from シルフィード』という。

サッカー選手に転身してから、すっかり音楽活動はご無沙汰している夢野つばさだが、実はシルフィードから籍が抜けたわけではない。そもそもシルフィード自体、解散しているわけではない。

つばさが、いつでもこの世界に戻ってこられるように、名前は残してある。

実は結成当初から『シルフィードのオプション』として、デュオで活動することは計画されていた。

そのうちのひとつが『アクアスター』である。

これが、つばさとはるかなら『ドリームスター from シルフィード』となり、つばさとめぐみなら『アクアウィング from …』となる。

「そこはアクアドリームじゃないんかい！」

と突っ込みたいたいところだが、確かに『水の夢』だと意味不明だ。

まあ『水の翼』もどうかと思うが。

それはさておき…

水野めぐみは『アクア』という単語に反応した。

「それはね…全国数千あるスクールアイドルの中で、そんな名前はいくらでもあるだろうけど…」

「敢えてパロディっぽく付けることもあるしね…」

「『新井's』とかでしょ?」

とめぐみ。

「『U's』っていうのも見たことある」

「うん、いたかも…だから、アクアがいようが、スターがいようが、別に構わないけどは思うけど…確かに一瞬『ん?』とはなるわね…」

「でもね、私が引っ掛かったのは、名前だけじゃないんだな…これが。」

この『Aquors』…東海地区代表なんだけど…構成人数は…3年生と2年生と1年生がそれぞれ3人ずつで…」

「結構な大人数じゃない…って、その編成は…」

「やっぱり、そう思った?…絶対意識してるよね」

「それは確かに引っ掛かるわ…」

めぐみは興味深そうに、はるかが見ているタブレットの画面を覗きこんだ。

「色々、突っ込みどころが満載のメンバーよ。μ'sファンの私からすれば、ちよっと喧嘩売ってるんじゃない?…って感じなんだけど…」  
とはるかは半分笑いながら、彼女たちにメンバーのプロフィールを見せる。

「この『鞠莉』って娘は…さしづめ絵里さんってとこかしら」

めぐみは画面を見ながら、はるかに問う。

「百歩譲って、ハーフってとこまでは許すとして…理事長ってなに?理事長って!」

※絵里はクォーターである。念のため…。

「…理事長なの?この娘が?…凄いね、それ…」

「その時点で、もうなんか、おかしいでしょ?」

「うくん、まあ…」

「それで…リーダーの娘が『高海 千歌』だって…どう?この『高坂穂乃果』さんと『園田海未』さんを、足して2で割りました…みたいな名前は」

「本名…だよな?…」

「しかも『高』で始まって『か』で終わるとか…」

「それは、偶然だと思うけど…」

「それに…多分『賢い、可愛い、タカミーチカ』とか言ってるわよ」

「ぷっ！それは流石にないんじゃない？」

「まだまだ！ほら…この『果南』って娘なんて…」

「あっ！確かにこれは…『穂乃果』さんと『南』さん…だね…」  
「でしょ？」

「う、うん…」

「この娘は『梨子』だし」

「えっ？『にこ』さんまでいるの？」

「『りこ』だってさ」

「たはは…りこ…ね」

「ちよつとイラツとしない？」

「そこまでは…。まあ、萌絵のムス愛が強いのはわかるけど…。それこそ、芸名じゃないんだし、そんなことでケチ付けるのは可哀想だよ」

「わかってるけどさ…」

「あら？この娘は…『花陽さん』？どうしてここに？アメリカにいるんじゃない…」

「期待通りのリアクション、ありがとう」

「真面目に、本人かと思った」

「だとしても、高校生のワケないじゃない。他人の空似…ってヤツみたいよ」

「へえ…世の中にはよく似てる人がいるんだねえ」

「私たちも、A—R—I—S—Eに似てるって言われたけど…あくまでも雰囲気…だもんね。ここまで激似だと、さすがに驚きだわ…」

「A q u o r sか…面白いチームね。…で…実力はどうなの？」

「見てみる、地区大会の動画…」

そう言うとはるかは、ライブの映像を再生した。

めぐみは9人のパフォーマンスをジッと観た。

だが…

…えっ!?!…

…飛び道具?…

最後の最後で顔をしかめた。

「やっちゃったかあ…」

めぐみは少し怒ったように呟いた。

「かのんもそう思った?」

「萌絵がイラついてる本当の理由は…ロンダートからのバック転…これじゃない?」

「正解…」

「そうだね…私もこれは必要なかったと思う…」

「でしょ?もう、これ一発で、それまでのパフォーマンスが台無しだもの。全部持っていかれたわ」

「インパクトはあったかも知れないけどね」

「なんだかんだで地区大会は、トップ通過だから『素人受け』はしたかもね。…でも、なんか違うのよ。わからないけど…この娘たちのアピールポイントはこれじゃないでしょ!…」

…萌絵…

悔しそうに話すはるかの気持ち、めぐみにはわかる。

メンバーの名前に文句を言いつつも、同じ『アクア』を名乗る者同士。

少なからず肩入れをしていたのだが…彼女からしてみれば期待を裏切られた格好だ。

「中途半端！やるなら全員！それなら『チームの個性』って認めてあげ  
るけど、アレはない！技は派手だけど、小手先のテクニクに走った  
だけで、歌に熱さが伝わらない！バック転だつて付け焼き刃感が出  
ちやつてるし…」

「まあまあ…萌絵は別に審査員でもないんだから、そこまで熱くなら  
なくても…」

「忘れてない？今年のラブライブの優勝者は、A—R—R—I—S—Eのチャリ  
ティライブへゲスト出演するってこと」

「あつ！」

「ひよつとしたら『私たちとの』競演もあり得る…。もちろんμ'sと  
も…」

「でも…」

「わかつてるよ。別にだからどう…つて話じゃないけど…せつかくい  
いモノ持つてるんだから、勿体ないじゃない。頑張つてほしいな…つ  
ていう、愛のムチ！」

「それは直接言わなきゃ伝わらないけど…」

「言わないわよ、余計なことは。アドバイスなんかしたら他のチーム  
に悪いし…平等じゃなくなるから…」

「うん」

「まあ、本大会でどんなパフォーマンスをしてくれるのか…見守ろう  
とは思うけどね…」

…Aqoursか…

…μ'sのメンバーだったら、なんて言うのかなあ…

くっくく



もう、いくつ寝ると…X, m a s?.

「A—R I S Eからファンの皆様へ 一足早い『クリスマスプレゼント』」

と題され、HP上で発表があったのは、12月の2週目のことだった。

『μ, s』チャリティライブ出演決定のお知らせ!!」

「私たちA—R I S Eとしても、μ, sとの競演は永年待ち望んでいたことなので、今からとても楽しみです!」

詳細は後日…とした上で

「お互い、最高のライブにしようと思っていますので、ファンの皆様もご協力宜しくお願い致します。〈M e r r y X, m a s〉」  
と締め括られていた。

最後の文章は、半年前に起こった『ファン同士の不毛な抗争』を受けてのメッセージだろう。

いわば、牽制球である。

この『A—R I S Eサンタ』からの一足早いクリスマスプレゼントに、ネット上は騒然となる。

お祭り騒ぎだ。

勝手に『歌ってほしい曲ランキング』の投票まで始まった。

「お姉ちゃん、ついに発表されちゃったね!」

「う、うん…」

「なんだか、雪穂が興奮してきちちゃったよ」

「まだ、3ヶ月も先なんだから、今からそんなだったら、もたないよ」

穂乃果は、隣の部屋から飛び込んできた妹に、そう言って笑った。

だが、その笑顔に元気がない。

「でもさあ…やっぱり…またμ，sが観られるなんて…スゴイよ！スゴすぎるよ」

「雪穂はいつも、ここでもみんなに会ってるじゃん」

「そうだけどさ、それとこれは別だよ。それも、A—R—I—S—Eと競演なんですよ!?!夢みたいだなあ…」

「…」

「どうしたの?」

「ねえ、雪穂…あのさあ…お姉ちゃんの代わりに、ステージに立たない?」

「えっ?」

「お願い!代わって!雪穂なら全曲フリも完コピしてるし…髪型変えれば、遠くからならわからないと思うし…」

「なに言ってるの!?!…もしかして…お姉ちゃん…怖いのか?」

「…」

「出た、出た。お姉ちゃんは普段、能天気でガサツでいい加減なクセして、こういう時になると、いきなりテンション低くなるんだから」

「能天気で、ガサツで、いい加減は余計だよ」

「そうは言っても、μ，sのリーダーはお姉ちゃんだから、しつかり引張っていかないよ」

「だってさあ…5万人だよ、5万人!」

「大丈夫だよ、お姉ちゃんなら」

「うう…」

「それで…何を歌うの？」

「それはこれから…」

「ふくん…ネットで見ると…『スノハレ』が今のところトップだね？」

「スノハレかあ…でもチャリテイライブは春だからね」

「雪穂は何が観たいの？」

「私？ そうだなあ…私は…μ's がみんな揃って歌ってくれば、なんでもいいよ」

「雪穂…」

「だって、もう二度と観られないと思ってたから」

「うん…そうだね…」

「だから…」

「だから？」

「ダイエツト頑張つてね！」

「あ…」

「もう、雪穂のお姉ちゃんだけデブったなんて言われなくてね！」

妹はそう言うのと、自分の部屋へと戻っていった。

「余計なお世話だよ〜だ！」

子供のように「べえ〜」と下を出し、穂乃果はその姿を見送った。

「アキバドームでライブかあ…」

…どうなっっちゃうんだろ…

穂乃果はゴロンとベッドに横たわると、ひとり静かに天井を見つめた。

「やるんだって？ライブ…」

凜より30cmほど背が高い男が、彼女に訊いた。

「うん」

「へえ、それは楽しみだな。つてことは…ああいう衣装を着てステージに立つんだ？」

「それはまだわからないよ」

「そもそも、まだ当時の衣装って持ってるの？」

「一応ね」

「マジ？じゃあ、今度着てみてよ!!」

「…」

凜は見上げる位置にある男の顔を、睨みつけた。

「なんだよ…」

「エロいこと考えてるにや」

「そりゃあ…考えるでしょ!」

「あれは『そういうこと』に使っちゃいけないんだから!」

「オレ、あれがいい…ウエディングドレスのやつ!」

「バカあ!それは一番ダメなやつにやあ!!」

「そんな大きい声で怒らなくてもいいじゃんか…ん?…一番ダメなやつつてことは、他の衣装ならいいつてこと?」

「…一回、死んでくるといいにや…」

凜は呟くように言い放った。

「アイドルがそういうことを言っちゃいけないなあ」

「アイドルにそういうことを言わせる『武藤』が悪いにや」

「アイドルだから、そういうことをしてみたいんじゃない！それこそが彼氏の特権だろ」

「…凜はまだ武藤のこと、彼氏と認めてないけど…」

「それはないんじゃない…。オレが凜のことをどれだけ好きか…」

「わかった！わかったから、静かにするにや！…とりあえず、この話はおしまい！早くラーメン食べに行くにや」

「…またラーメン？…たまには違うところに行こうよ」

「イヤなら来なくていいよ。凜、ひとりで行くから…」

そういうと、凜は先にスタスタと歩き始めた。

「…仕方ねえなあ…」

凜の彼氏…武藤…は、大きなストライドで慌ててあとを追った…。

「お姉ちゃん、チャリテイライブの告知、出たよ！見た？」

「見たわ」

「うわあ、どうしよう、どうしよう…」

「どうしようって、別に亜里沙が出るわけじゃないんだから」

姉はアタフタする妹を見て、思わず微笑んだ。

「そんなに嬉しい？」

「もちろん！当日、お姉ちゃんの歌う姿を見たら…亜里沙、涙が止まらないと思う」

「大袈裟ね…」

「大袈裟じゃないよ。雪穂も同じ事言ってたもん」

「そっか…。そんなに喜んでくれるなら、私も参加を決めた甲斐があるわ」

「だけど、ちよつと心配もしてる…」

「えっ?」

「お姉ちゃんの膝…」

「!」

「ライブの途中で『あの時の穂乃果さんみたいに』倒れたりしたら…だから、あんまり激しい曲は…」

「心配してくれてありがとう。でも、大丈夫よ。何を歌うかはこれから決めるんだけど、ちゃんとみんなに迷惑を掛けないようにするから」

「うん!約束だよ!」

「約束するわ」

「あとは…穂乃果さんか…」

「ん?」

「ダイエット…」

「…それは亜里沙が心配することじゃないでしょ?」

「でも、雪穂が言ってたよ。『前みたいに海未さんが管理してくれるわけじゃないから、今回はマズイかも』…って」

「うふふふ…穂乃果はああ見えても、やるときはやる娘よ。仮にもμ'sのリーダーだったんだし…」

「うん、そうだよね!」

「それより…亜里沙…」

「なに?」

「私の替わりに、ステージに立って見ない？」

「えっ?…?…」

「亜里沙が憧れてくれたμ， s…でも私たちのわがままで、結局一緒に歌ってあげることができなかつたでしょ…だから、せめて1回くらいは、どこかのタイミングで…なんて思ってたんだけど…」

「いやだなあ、そんなこと言わないでよ！お姉ちゃんのいないμ， sなんてμ， sじゃないんだから、亜里沙が替わりなんてできるわけないよ」

「…?…」

「でもね…?…」

「?…」

「もしチャンスがあるなら、μ， sと一緒に歌って踊りたい…なんて。お姉ちゃんと一緒に」

「ハラショー…?…」

「えっ?…」

「ううん、なんでもない…?…」

…それもアリかもね…

「にこ姉え」

「なあに？ここあ」

「これ、本当なの？A—RISEのチャリテイライブに出るって…」  
「本当よ」

「！」

「4年ぶりに『にこにこー』が、復活するのよ！」

「どうして、そんな大事なことを黙ってるんですか!？」

「決まってるじゃない、アンタたちの驚く顔が見たかったからよ！」

「…アホくさ…」

「ちよつと、虎太郎、今『アホくさい』って言ったわね？」

「さ、さあ…」

「にこ姉えに歯向かったらどうなるかわかってるわね？今月のお小遣いあげないから」

「それは、マジ勘弁!!」

「今さら遅いわ」

姉は勝ち誇った顔で弟を見た。

「…あの、お姉様…」

「なに？こころ」

「μ，s…ということは、花陽姉さまも出られるのでしょうか？」

「当然でしょ！」

「うわあ！当日、お逢いできますかね？」

「うくん、どうかしら…」

「オレも逢いたい！」

「私も！」

「あのねえ、実の姉を差し置いて、なんで花陽の話になるのよ!？」

「それは、もう何年もお逢いできてませんし…」

「オレも花陽姉ちゃんと、全然一緒に、風呂に入れてねえし」



「入るかあ!!アンタ、いくつになったと思ってるのよ!」

「8歳!」

「威張るな!!まったく、ガキが色気付いて…これだから、男はイヤなのよ」

「お姉様、頑張ってくださいね。こころは…今のお姉様も好きですが…やはり『宇宙No.1アイドル にこにー』が大好きでしたから、この歳になってまた観られるなんて、感激です!」

「嬉しいことを言うじゃない!こころだけよ、そう言ってくれるのは」「そんなことないよ!ここあだつて、にこ姉えのこと応援してるんだから」

「本当?」

「当時はまだちっちゃかったし、正直、ハッキリは覚えてなかったけど…今回は、シツカリ記憶しておこうって思ってるよ」

「ここあ…」

「まあ、みんなの足を引っ張らないようにしろよな。オバサンなんだから」

「虎く太く郎く…」

「わあ、ジョークだよ、ジョーク!これ以上の小遣いカットはマジ勘弁!」

「仕方ないわねえ…バツとして『ニッコニッコニー』を、10回!」

「マジか!」

「別にやりたくなければ、やらなくていいけど…」

「…ニッコニッコニー…ニッコニッコニー…」

「感情がこもってない…」

「わかったよ、やればいいんだろ! 『ニッコニッコニー! ニッコニッコニー!』」

「顔が笑ってない」

「ニッコニッコニー」

「手の角度が…」

「ニッコニッコニー! ニッコニッコニー! ……」

こうして虎太郎は、にこの玩具と化していくのであった…。

くつづく

過大評価じゃないですか？

A―RISEのチャリテイライブに、μ、sが参加を決めてから、初めての打ち合わせ。

穂乃果はA―RISEの所属する事務所に呼ばれた。

今日は海未も一緒だ。

2人は応接室に通されると、程なくして、綺羅ツバサが現れた。

「スゴイ反響よ！『主客転倒』…って言うのかしら…私たちが聞くイベントなんだけどね。μ、sの問い合わせばかり」

彼女たちの顔を見るなり、ツバサはニコツと笑った。

「なんか…すみません…」

「いいのよ、高坂さん。こうなることは予想できたし。それだけファンも待ち望んでいた…ってことでしょ？」

「ありがたいことですね…」

「どうぞ…冷めないうちに…」

ツバサが、テーブルの上のコーヒーを2人に勧めた。

「あ、はい…頂きます…」

ひとしきり雑談をしたあと、ツバサが話を本題に移す。

「さて…前に概要については、簡単に説明させてもらったけど…」  
「はい」

「出演するのは…『VIVACE』『春雪うさぎ』『Short hai  
r grammar』…」

いずれも新進の若手アイドルグループ。

「それと、来春デビューする私たちの事務所の新人と…今回のラブライブの優勝チーム…あとはアクアスターと…μ、sと…私たち」  
「いっぱい出るんですねえ…」

穂乃果は規模の大きさに目を丸くした。

「まあ、私たち以外は『ほぼ素人』だけど」  
「いやいや、素人『は』私たちですから…」  
ポリポリと頭を穂乃果。

出演グループのメンバーはμ, sに比べれば、平均年齢は低い。  
とはいえ、彼女たちはプロだ。  
とても比較対照とはなり得ない。

「私はそう思っていないけど…」  
「えっ?」

「私はいまだにμ, s以上のグループはいないと思ってるもの」

…それはそれで、なかなかのプレッシャーなんですけど…  
…はい、これは中途半端なことではできませんね…

海未に視線を送った穂乃果。  
さすがに長い付き合いだ。

彼女はその意図をすぐに察した。

「それで、時間配分なんだけど…」  
「はい」

「トータル3時間のステージで、私が1時間15分、アクアスターが45分、μ, sが30分で、残りの5グループで30分…ざっとこんな感じ」

「μ, sで…」  
「30分ですか?」

「現役アイドルを差し置いて…」  
「はい、それはいくらなんでも失礼かと…」  
2人が交互に意見を述べる。

「それは大丈夫。彼女たちは本来、ドームに立てるほどの実力なんてないのだから。つまり、こちらが招待してあげた…ってこと」

「はあ…」

「それに相手がμ'sなんだから、文句は言えないわよ。アイドルやってる娘で、あなたたちを知らない人はいないんだから」

「…」

「むしろ同じステージに立てるだけで、光栄…そう思ってるわ」

「ツバサさん、それは誉めすぎです…」

「うん。なんかムズムズしてきちゃったよ…」

と穂乃果は身体をくねらす。

「…1曲4分として…フルフルなら8曲はできる計算かしら」

「えっ?…お、多すぎませんか?…」

穂乃果はツバサの顔を見る。

だが

「そんなことないわ。これだけの期待を受けているのに、1曲で『はい、サヨウナラ』なんて、できないじゃない。そんなことしたら、暴動が起きるわよ」

と彼女は意に介していない。

「それにしても…8曲なんて…」

「これが『最初で最後』かも知れないでしょ。それとも、これを機に…活動を再開する?」

「う、いや、それは…」

「だとしたら、足りないくらいだと思う…。時間は別にどう使ってもらっても構わないわ。多少はMCの時間だつて必要だろうし」

「MC…」

「μ'sの復活を待ち望んでいたファンに、挨拶くらいはしたほうがいいんじゃない?」

「あ、それは確かにそうですね…」

「それに、ちよつと、考えてることもあつて…」

「考えてること…ですか？」

「そうね…まだ、教えられないけど…」

「はあ…」

「高坂さんたちには次の打ち合わせまでに、候補曲を挙げてきてほしいの。そうねえ…最大で8曲、最低5曲」

「最大で8曲…」

「最低5曲…」

「…とはいえ、いくら<sup>4</sup> sと言えども、30分通しは厳しいかな…とは思うから、分割した形になるかも知れないけど」

「はあ…」

「それと…これがステージの形」

とツバサが図面を渡す。

「うわっ！大きい…」

「…ですね…」

「照明とかの演出はこつちで合わせるから、これを元に、どんな曲でどんなパフォーマンスをするかイメージしてみて」

「海未ちゃん…なんかスゴイことになってきちやっただね…」

「はい…」

2人はコーヒーを飲み干すと、次回の打ち合わせ日を確認して、事務所をあとにした。

「私たちって持ち歌、何曲あつたっけ？」

穂乃果が帰りの道中、海未に聴く。

「公式に発表しているのは10曲余りかと…」

「えっと…まずは『START:DASH!!』でしょ」

「はい」

『「これからのSomeday』『Wonder zone』『僕らのLIVE 君とのLIFE』『No brand girls』…』『ユメノトビラ』…それと…』

「アキバの利き米コンテストで『愛してるばんざーい!!』も披露してますね」

「ああ、そうだった!あとは…『Dancing stars on me!』でしょ…『Snow halation』『Kira—Kirac Sensation!』『僕たちは今のなかで』…『Angelic Angel』『SUNNY DAY SONG』…こんなところかな?」

『「Love wing bell」が抜けてますね」

「ああ、そっか!穂乃果は歌ってないから忘れてた…」

「これで…14曲ですか…」

「結構、歌ってるねえ」

「はい」

「それにしても…最低5曲って…ツバサさんも無茶言うよねえ」

「はい。ですが、考えようによっては『この中から1曲』と言われても選定に迷いますが、5曲でしたら、多少は幅を持たせられるかと」

「いやいや、そういうことじゃなくて」

「?」

「体力的な問題だよ。今までのライブだって、そんなに歌ったことないでしょ…」

「それは確かにそうですね…」

「どこかで休憩がほしい…」

「はい、絵里の膝のこともありますし…何を歌うかも含めて、その辺り

はA—LISEとも相談したほうがよいですね」

「ダンス無しにしない？」

「いくえ!!やるからには全力です!そんな失礼なことはできません」

「…あははは…だよね…」

「穂乃果はこれを機に、少し自堕落な生活を改めたらいかがですか？」

「う、うん…まあね…」

「私がトレーニングメニューを組みましようか？」

「…え、遠慮しておくよ…それは自分で何とかする…。そ、それより、海未ちゃん、今年のクリスマスだけ…」

穂乃果はそれ以上の話になると、かなり不利になると思い、話題を180度変えた。

「はい？」

「23日って大丈夫だよね？」

「…23日?…」

「ほら、ことりちゃんと3人でクリスマスパーティーしようって…」

「…はい、言っていましたね…」

と一旦、返事をした海未だが、すぐにハッして叫ぶ。

「に…23日はダメですう!!」

「うわあ、ビックリした!そんな大きな声を出さなくても」

穂乃果は海未の声を驚いて、後方に大きく跳んだ。

「す、すみません…ですが23日は…きゅ、キューヨーが…」

「お休みするの?」

「いえ、休養でなく急用です!」



「ええ!？」

「24日ではダメでしょうか？」

「確かにクリスマススイブはそうなんだけど、その日は日曜日だから…って23日にしたんじゃない！」

「はい、そうでした。それはその通りです!ですが…すみません…その日はどうしても…」

穂乃果のことだ…「高野とサッカーを観に行く」…などと言えば…「私も行く」…と言いかねない。

普段であれば、それはそれで、心強かったりもするのだが、今回は真姫と一緒に付き合ってくれることになっている。

現時点において…少なくともこの件に関しては…穂乃果よりも真姫の方が信頼度が高い。

「本当に申し訳ございません」

海未は何度も頭を下げた。

「まあ、海未ちゃんがそう言うんじゃないか…」

意外にあっさり穂乃果はそれを了承した。

いくら穂乃果が自由奔放、天真爛漫とはいえ、もう21歳である。多少は分別の付く、大人になっているようだ。

「本当に申し訳ございません」

もう一度海未は同じ言葉を発した。

「いいよ、いいよ…これで海未ちゃんに貸しがひとつできた!…ってことだもんね」

…ああ…

…屈辱です…

海未は、ニヤツと笑った穂乃果から視線を逸らせる。

三つ子の魂百までも。

一瞬、穂乃果の成長を感じた海未であったが、それが誤りであったことを、直ぐに思い知らされたのであった。

くつづく

## 冬、到来

ここは静岡県の伊豆半島西部にある…とある高校。  
その名は『浦の星女学院』と言う。

その中のアイドル研究部…の部室には、黒澤ダイヤとルビー、そして高海千歌がいた。

先日、アクアスターが動画を見てダメ出しをしていた…スクールアイドル東海地区代表『Aqours』のメンバーである。

もちろん、本人たちは一切、そんなことは知らない。

「ついにμ'sの出演が、正式に発表されましたわ!」

A—RISE主催のチャリティライブの告知を見たダイヤが、興奮気味に話す。

「はい、お姉ちゃんの言う通りでした」

妹が相槌を打つ。

「観られるんだね、生で!」

千歌も気持ちは昂（たかぶ）っているようだ。

「恐らく、チケットは史上類を見ないほどの争奪戦になるハズです! これは鞠莉さんの力を借りてでも、入手せねばなりません!!」

「ノー サンキューです!」

「鞠莉さん!」

そのタイミングで部屋に入ってきたのは、現役の女子高生でありながら、この学校の理事長でもある小原鞠莉。

資産家の娘でもある。

「ダイヤさくん、μ'sが見たいのはわかりますが、私たちはオーディエンスとしては行きませくん」

「？」

「ウイナーとして、一緒にステージに立つのです！」

「！」

今年のラブライブの優勝者は、そのチャリティライブに出演できるという特典がある。

「そ、そうですね。もちろんですわ」とダイヤ。

「学校の廃校は阻止できなかったけど…それでラブライブに出る意味があるのかな？って思ったけど…そうだよ！観る側じゃなくて、同じステージに立つんだよ！」

「千歌っち、その通りでくす！気持ちをリセットして、まだまだファイトです」

彼女たちの学校は、少子化などの影響もあり、入学志願者が激減し、廃校…正式には近隣の学校への統合…の危機にあつた。

そこに立ち上がったのが、千歌である。

彼女は…かつて音ノ木坂を救ったMusiciansと同じように、スクールアイドルを始めて、学校を内外にアピールし、入学志願者を増やそうと奮闘したのだった。

その甲斐あつて『Aqours』は、東海地区予選をトップ通過。本大会への出場を果たす。

しかし…

肝心要の入学志願者の応募は、定められた期限までに人数が足らず、目標は達成できなかった。

本末転倒。

スクールアイドルを続ける意味を見失いかけていた。

それでも、ラブライブで優勝すれば、その歴史に学校名を刻める。そう思っ、前を向くことにした。

そこに見えた、新たな光。

希望。

それがμ、sとの競演。

ダイヤとルビィの姉妹は、幼い頃からアイドルが好きだった。

μ、sについては、小学生の時にアキバで、偶然遭遇した絵里と花陽にサインを貰ったこともあり、他のメンバーの誰よりも思い入れが強い。

千歌にしても、そもそもスクールアイドルを始めようと思ったきっかけが、μ、sのライブ映像を観たことことであり、以降、憧れの存在として、その影を追い求めていた。

つまり、彼女らにとって『μ、sと競演する』というのは、活動を続ける意味では、十分なモチベーションになり得るのだった。

「ダイヤさん、μ、sには、何を歌ってほしい？」

「私ですか？そうですね…としましたが…選べないですわ！どれも素晴らしいので、1曲に絞ることなどできません」

「そこを敢えて言うത്？」

「敢えて…ですか…」

「私は『START：DASH!!』と『ユメノトビラ』かな」

「2曲じゃないですか」

「あつ…そうだね…。でも、この2曲には思い入れが強くて…」

千歌がスクールアイドルを始めようと思ったのは『START：DASH!!』の映像を観たのが始まりだった。

そして『ユメノトビラ』は、彼女がμ、sみたいになりたい！と本気で思った曲。

梨子が『A q o u r s』に加入するキツカケも、この曲が絡んでいた。

いわば彼女にしてみれば、自分をスクールアイドルに導いた曲であると言っている。

その事情を知っているダイヤも

「千歌さんらしい選曲ですわ」

と頷いた。

「そういえばさ、全然関係ないけど『ユメノトビラ』とき、サッカー選手の『夢野つばさ』って似てるよね?」

千歌くらしいの世代になると、つばさがカリスマモデルであったことや、音楽活動をしていたイメージはあまりない。

彼女の肩書きはサッカー選手なのだ。

「ふふふ、ブツブツ…ですわ。千歌さん、甘いです」

「えっ?」

『ユメノトビラ』のタイトルは、元々『ユメノツバサ』だったらしい…と、この間、アクアスターが語っているのを雑誌で読みました。作詞した海未さんの頭の片隅に、彼女の名前があったようなのです。ですから、似てるのは当然なのです!」

「へえ…そうなんだ…」

普段、クールなイメージが強いダイヤであるが、μ、sの話題になると、途端に熱くなる。

「千歌さんもμ、sファンを名乗るなら、それくらいのことを知っておいてください!」

「は、はあ…ごめんなさい…」

「まあまあ、お姉ちゃんほどμ、sに詳しい人はいないんだから、仕方ないよ」

「それはそうですが…」

「ルビイはねえ…『Wonder zone』かな。メイドさんの衣装で踊ってるんだけど『ああ、これが東京なんだ』って感じで…」

「そうですね、あの衣装は『アキバならでは』ですものね」

妹の発言に、目を細める姉。

少し機嫌は良くなっただけ。

「それで、ダイヤさんは？」

「敢えて1曲と言われたら…『Snow halation』ですわ  
「おお！」

「歌詞はもちろんですが、なんと言っても、あの演出が、とてもステキだと思います」

「うん、イルミネーションがパツパツで一瞬にして『みかん色』に変わるんだよね。あれは確かに綺麗だなあ…」

「内浦は暖かいので、冬になっても、雪など降りませんから、私たちがは、まず考え付かない歌詞ですし」

「なるほど。そうだね…こっちは雪つて、あんまり降らないもんね」  
「うん。ちよつと上の方…御殿場とか行くと雪降ってるのに、下つてくると全然だもんね」

ルビイは千歌の言葉に同意した。

内浦とは沼津市内にある地名で、彼女たちが、今いる場所を指している。

沼津は『V』の形をしていて、丁度凹んだ真ん中あたりに内浦はある。ちなみに御殿場は、そこから北に位置しており、直線距離にして30 kmほどしか離れていないが、海辺の内浦に比べれば標高が高い。実は東名高速道路の一番高い標高は、この御殿場付近なのである。

※454 m

市街地もほぼ同じくらいの高さにある言っている。

御殿場は、夏は濃霧が発生し…冬は富士山からの吹き下ろしの風が、身を切る寒さとなる。

「そういえば、あつちはこの間、雪がチラついたって、誰かが言ったなあ…」

「もう、そういう時期なのですね…」

「早いねえ」

「はい」

「ちなみに、ファンが選ぶ『μ'sに歌ってほしい曲ランキング』でも『スノハレ』は1位みたいです」

ルビィは自分のPCを2人に見せた。

【μ'sに歌ってほしい曲ランキング】

- 1位：Snow halation
- 2位：Angelic Angel
- 3位：START：DASH
- 4位：ユメノトビラ
- 5位：KiRa—KiRa Sensation!
- 6位：愛してるばんざーい!
- 7位：No brand girls
- 8位：Dancing stars on me!
- 9位：僕らは今のなかで
- 10位：僕らのLIFE 君とのLIFE
- 11位：Wonder zone
- 12位：SUNNY DAY SONG
- 13位：これからのSome day
- 14位：Love wing bell

「季節を問わず人気の曲ですが、やはり『スノハレ』は強いですわね」  
「そうだね。夏に集計したら、また変わってくるかも知れないけど…」  
「はい」

「お姉ちゃん、『Angelic Angel』は海外ライブの影響なのかな?」

「そうですね…これでμ'sの名前を知った人も多いでしょうし」



「千歌ちゃんが推してる2曲が上位に入ってるね」

『スタダ』は3人と9人の2パターンが公開されていますし、4位、5位は共にラブライブで披露した曲ですから、知名度的にも高いのでしょうか」

「なるほど」

千歌はダイヤの説明に頷いた。

「ちなみに13位と14位は、9人全員で歌っている曲ではないので、そこが伸び悩んでる原因かと」

「だから逆に、全員で歌つてるところを観てみたい…ってルビイは思います」

「そういう人もいるでしょうね」

「12位のは？」

こうなると、全曲解説を聴きたいと千歌は思った。

「…どちらかというs単体の曲というよりは、今や『ラブライブのテーマソング』となっておりますので」

「ふむふむ」

「意外なのは『愛してるばんぎーい！』が上位にいることですかね」

「えっ…どうして？」

「はい、この中では唯一ダンスがありませんので、ライブということを考えて、物足りないのではないかと」

「それでも6位だよ？」

「ですからそれは…つまりsが歌でも勝負できるグループだった…ということだと思いますわ」

「！」

「あのA—LISEと並び称される『伝説のスクールアイドル』ですから、当然といえば当然ですけど」

ダイヤは、まるで自分のことのように胸を張った。

「でも、お姉ちゃん、改めてこうやって見ると…やっぱり1曲なんて絞

れないね」

「はい。できれば全部歌ってほしいくらいですわ」

「そうしたら、どういう順番で歌うのかな。やっぱり最初は勢いをつける為に、バーン！って曲を持ってきて、真ん中はしつとり聴かせて、最後はドカーン！って爆発して…って感じ？」

「まるで千歌さんが歌うみたいですね」

「でもそういうのって考えるのすごく楽しいよね」

「はい」

「…全曲か…」

「どうしたんですか」

「ん？…うん、ルビィちゃん…私たちもいつか、そんなライブができたら素敵だろうな…って」

「あっ…」

「これまで発表した曲、これから作る曲…全部で何曲になるかわからないけど…歌って、歌って歌いまくって…アンコールもあって…なんてね…」

「そんなこと…夢のまた夢ですわ」

「そうだね、夢だね…でも、叶えられない夢じゃない…」

「…千歌さん…」

「…千歌ちゃん…」

「…なああんでね!!…まずはラブライブの優勝を目指して！」

「はい、がんばルビィです!!」

「はい！突き進みますわよ！」

「オフコース！目指すはラブライブのチャンピオンです」

「!!」

「鞠莉さん！」

「…いたの忘れてた…」

「3人ともトウ ホットです。向こうをルックしてください。みんな中に入れなくて困ってます」

そう言われて3人が向けた視線の先には、室内に入るのを躊躇した残りの部員の姿があった。

「なにしてるの？みんな…」

「なにつて…ねえ…」

と曜。

「うん、私たち、そこまでμ sのこと詳しくないし…なんか会話の邪魔しちや悪いかなあ…なんて」

梨子がそういうと、果南と花丸、善子が頷いた。

「どうやら、彼女たちのμ sに対する想いは『沼津と御殿場』くらい温度差があるらしい。」

くつづく

ふたりハピネス

「すっかり遅くなっちゃったね」

高野は2人に詫びた。

観戦していたゲームは点の取り合いになり、3―3のまま延長に突入したが、それでも決着せずPK戦にもつれこんだ。

両チーム5人ずつ蹴って全員成功。

サドンデスに入り迎えた8人目。

先行の鳥栖の選手が見事決めたのに対し、川崎の選手はこれを外してしまい、ようやくこの戦いに終止符が打たれた。

3人は試合会場を出る。

「バスを待つのは大変だから」と観客の流れに身を委ねて、駅まで歩くこととした。

「久々に長いPK戦だったなあ」

「永遠に終わらないかと思っただわ」

と真姫。

「オレは…リアルタイムじゃないけど14人目までいったPKを見たことがあるよ。浦和と名古屋の試合だったかな…」

「それは凄いわね…」

「いやあ、それにしても悪かったね。こんなに寒い中、付き合せちゃって」

「観たい…ってお願いしたのは私たちだし。それに…そこそこ楽しめたから…」

高野は事情を知らないが、真姫は今日、海未の付き添いで来ている。

正直、サツカーにはあまり興味が無いのだが、それでも合計6ゴールも生まれた派手な撃ち合いと、手に汗握るPK戦を見終わって、多少は満足している様子だ。

「どちらを応援していたわけでもありませんが、PK戦というのは心臓に悪いですね」

海未は緊張感から解き放たれ、少しホツとした表情になった。

「オレも経験あるけど、蹴る前は吐きそうになる。決めて当然と思われてるからね…『外したらどうしよう』って方が頭を支配するんだ」

「高野さんでもですか?」

「高野さん『でも』…って」

「す、すみません…高野さんは余り悲観的な考え方はしない人だと思っていましたので…」

海未は申し訳なさそうに、彼を見た。

…失言です…

…気を悪くさせてしまいました…

だが、高野はまるで気にも留めていないようで

「あははは…そんなにオレって能天気に見える?見えるか」

と言って、もう一度笑った。

「そういう意味では…」

「こう見えて、サッカーに対しては結構真面目なんだぜ。まあ『反省はするけど後悔はしない』がモットーだから、過ぎたことは仕方ないって、開き直るようにはしてるけど」

「はい」

「それでもPKはやだなあ…。これまで何回蹴ったかわからないけど…できれば蹴りたくない」

「そういうものなのですね」

「最後、外した選手は、結構引きずるだろうなあ…」

高野は同業者として、その気持ちをおもんぱかった。

「さて、それはそうと、こんな時間になっちゃったね」

15時から始まった試合。

まともに終わっていれば17時には終了する予定だったが、なんだ

かんだで1時間以上オーバーしている。

「お腹空いたよね? ご飯食べに行こうか?」

「えっ? あ、はい…」

戸惑いながらも、返事をした海未。

元々は『快気祝い』という名目で食事に誘ったのは彼女たちだったが、サッカーを観戦することになってからは、主導権を握っているのは高野だった。

そして『食事をして帰る』ところまでが、今日の予定であった。

ところが

「ごめんなさい、私はこれで失礼させて頂くわ」

と真姫。

「えっ? 帰るのですか!?!」

想定外の発言に、海未は慌てて彼女の顔を見た。

「このあと、予定が入ってるの…。ちよつと時間が押しちゃったから…」

「では、わたしも…」

「あら、海未はいいじゃない…空いてるんですよ。それに、最初高野さんを誘ったのはあなたなんだから、ここで帰ったら、それは失礼だと思わない?」

…じゃあ、あとは頑張つてね…と真姫は目配せをした。

「あっ…」

「高野さん、そういうわけで…今日はありがとうございました」

「えっ、ああ…残念だなあ。もっと色々話したかったんだけど」

「それは…また、今度ということ…」

「あ、ねえ…ひとつだけ訊いていい？」

「な、なんですか？」

「もう、曲、作らないの？」

「えっ？」

「いや、深い意味はないんだけど。オレは音楽ってさっぱりだから…楽器できるだけでも凄いなって思ってた…尚且つ、作曲までするんだから…その要素だけで惚れちゃうよね…」

「！」

…まさか真姫も対象なのですか!?!…

…い、いきなり、何を言い出すのよ!?!…

高野が放った「惚れちゃう」という言葉に、海未も真姫も敏感に反応した。

「才能あるんだから、勿体無いな…ってね」

「えっ？」

「あ…駅に着いちちゃったよ…西木野さんは本当に帰っちゃうの？」

「ええ」

「そっか…じゃあ、申し訳ないけど…」

こくりと頷く真姫。

「気を付けて帰ってね…本当は送って行ってあげたいところだけど…」

「ひとりで帰れますから…」

「うん…わかった。ライブ…期待してるよ」

「そうね。楽しみにしてて…」

そう言うと彼女は2人に別れを告げると、改札の奥へと姿を消した。

「さて、オレたちはどこに行つて、何を食べようかね…。園田さんは好き嫌いある？」

「い、いえ…特には…」

「こつちの方には遊びにくる？」

「いえ、あまり…」

「横浜は？」

「数えるほどしか…」

「そうなの？あ、じゃあ中華街行かない？ここからなら1本だし…30分くらいかかるけど…」

「あ、はい…お任せします…」

「OK！じゃあ、ちよつと待つて…大きいとことじゃないけどさ…美味しいお店があつて…先に予約を入れておくから…混んでは思うけど…」

高野はそう言うのと、スマホを取り出し、店に連絡を取った。

「1時間後くらいなら大丈夫だつて…電車乗つて、歩いて…なんだかんだで丁度いいくらいかな？まだ、お腹大丈夫？」

「えっ、あつ、はい…」

高野に訊かれ、海未はそう返事をしたものの、実は緊張していて腹の空き具合などよくわかっていない。

それどころか、真姫がいなくなつてから思考回路が止まっている。ただ無性に喉が渴いていることだけはわかる。

それが、単に空気が乾燥しているから…だけじゃないこともわかつてる。



トイレに行きたくなるのを避けるため、観戦中は水分をとることを控えていた海未であったが

「すみません。ちよっと飲み物を買ってもよろしいでしょうか…」  
と声を上げた。

「あ、ああ、ごめん、ごめん！そうだよね、何がいい？」

「いえ、自分で買いますから」

「まあまあ、そう言わず…あったかいお茶でいいかな？」

高野は海未の言葉を無視して、自販機に金を入れた。

「はい、どうぞ」

「あ、すみません。では、お言葉に甘えまして…」

「やだなあ…たかがそれくらいのこと、そんなに畏(かしこ)まらな  
いでよ…」

「はあ…」

「でも、それが園田さんなんだろうねえ…」

「？」

「キチツとしてるなあ…って」

「堅苦しいですよね」

「あれ？そう捉えた？褒め言葉のつもりだったんだけど…」  
「えっ？」

「どんなに美人でもさ、礼儀を知らない…とかさ、歩き方がだらしない  
とかさ…そういうのオレ、ダメなんだよね…付き合おうとか、付き合わ  
ないとか、そういうことを抜きにしても」

「はあ…」

「その点、園田さんは非の打ち所がないっていうか…」

「いえいえ、私など…」

「オレの親父なんて『今時の若い人には珍しい』ってベタ褒めしてた  
よ」

「お恥ずかしい」

「拳句の果てには『ヨメを貰うなら、ああいう娘がいいぞ』とか言い出

す始末で…」

「!」

…ヨメと仰いましたか…

…お嫁さん?…

…私が…高野さんの…

「どうかした?」

「い、いえ…」

「勝手なことを言うよね」

「は、はい」

「選ぶ権利があるもんね」

…そうですね…

…私など…

「園田さんにも」

「わ、私ですか!?!」

「それはさ、園田さんみたいな才色兼備で、大和撫子みたいな人は理想だけど…『誰が好き好んでアスリートのヨメになるか!』って話だね。それも何億も稼いでるような選手ならともかく。苦労しかない!…って言うの」

…今、理想と仰いましたか?…

…私が…

…理想…

すでに高野の話は、あまり海未の耳には届いていないようだ。

「おっと、電車が来た…乗れるかな」

ホームは観戦を終えたサポーターで溢れている。

入ってきた下り電車のドアが開いた瞬間、どつと彼らが車内に流れ込んだ。

「うお！園田さん大丈夫？」

「は、はい！」

この状況に海未も我に返った。

高野は必死に彼女が押しつぶされないように、スペースを確保しようとしたが…

「ぬおー！」

負けた…。

「あっ…」

そして同時に声をあげる。

満員の車内で2人の身体が、密着した。

「だ、大丈夫？」

「だ、ダメです…」

「ダメ？」

「いえ、だ、大丈夫です…」

「変なところ触っちゃったらゴメン」

「…もう…遅いです…」

気付けば高野の左肘が、海未の胸の辺りに触れていた…。

…は、破廉恥です！…

そう叫びたい海未であったが、この状況では致し方ない。

恥ずかしさと、満員の車内の暑さで、彼女の顔は真っ赤に染まり、全身は汗でびっしょりとなった…。

くっくくく

## ダイヤモンドプリンセスの憂鬱

「…はあ…」

と電車の中でため息をついたのは、海未たちと別れ、ひとり帰宅した真姫。

…付き添いなんて、しなきゃよかったわ…

…虚しくなっただけじゃない…

後悔の念にかられる。

…べ、別にクリスマスだから、どうのじやないけど…

…それでも独りっぴりというのは、味気無いものね…

高一までは『サンタさん』がいると信じて疑わず…ある意味『純粹』で『世間知らずなお嬢様』だった。

そして彼女にとってのクリスマスは、家族で過ごすものであり、そこに恋人云々が登場することはなかった。

しかし、真姫も年が明けて4月になれば21歳になる。

さすがに、もう子供じやない。

学業が忙しい故(ゆえ)、恋愛は面倒だ…という気持ちに偽りは無いものの、目の前であんな様子を見せられれば、心が揺らぐのも当然だろう。

本心を言えば、高野に会った上で、彼の人物像を見極め、海未の『目を覚まさせる』つもりだった。

ほらね！ろくな男じゃないわよ…と。

ところが、その目論みは覆された。

確かに：歯の浮くような誉め言葉があったり、八方美人的な発言は散見されたものの：『彼の存在を否定して、海未に諦めさせるほどの人ではない』というのが真姫の印象だった。思ったよりチャラチャラしていなかった。

それどころか：

：意外と気遣いができるじゃない：

集合時間のはるか前に来ていたり、脱帽して挨拶したり、ブラケットを用意していたり：真姫がプラスにしたポイントが多い。

さらに高野は、海未だけでなく初対面の真姫にも均等に話を振り：試合中もルールやプレーについて、わかりやすく説明した。

そういったことも好印象だった。

：でも、ちよつと軽いのよね：

：というところがマイナスポイントだ。

それでも：

：ふふつ：大人っぽい：って言われちゃったわ：

：それに美人だとも：

と想い返し、頬を赤くする。

：…って、なに考えてるの、真姫？…

：…そんなの、当たり前じゃない！…

…私を誰だと思ってるのよ…

…でも…

真姫の美貌は自他共に認めるもの。

だが、その人を寄せ付けないオーラからか、言い寄る男は現れない。いわゆる『高嶺の花』。

そんな存在。

だから、高野のように面と向かって、あんなにストレートに言われたことに、物凄い戸惑いを感じているのだ。

動揺していると言っている。

…だから、なに？…

…バカじゃない…

そんなことを言われて、ちよつと浮かれそうになってる自分が恥ずかしくなった。

…クリスマスかあ…

…穂乃果とことりは一緒かしら…

…でも、そこに入っていく勇氣はないし…

…希には絵里がいるし…

…凜は…彼氏がいるから論外ね…

…残るは…

…ああん、もう！どうしてこういうときに、カヨはアメリカなんかにいるのよ！…

…何も喋らなくていいから、傍にいてくれるだけでいいのに…

…でも…

…できれば、ギュッとしてほしい…

(私がいるじゃない！)

…に、にこちゃん？…

…でも、今日は舞台の稽古があるって…

(アンタが落ち込んでるみたいだから、わざわざ来てあげたんじゃないの)

…あ、ありがとう…

(まったくう…仕方ないわねえ…いつまで経っても子供なんだから…さあ、アタシの胸に飛び込んできなさい)

…にこちゃん!!…

『ゴンツ…』

…痛っ!!…

(この石頭！なに考えてるのよ！そんな勢いで突っ込んできたら、痛いに決まってるでしょ！)

…カヨならポヨンって…

(な、なによ…)

…やっぱり、にこちゃんじゃ、カヨの替りにはならないわね…

…あの、抱き心地のよさは異常なもの…



(ふん！そんなことを言うなら、真姫なんて絶交よ！)

…うそ！待ってよ、にこちゃん！…

「ハッ！」

…ゆ、夢？…

真姫はいつの間にか車内のドアにもたれながら、そんな夢を見ていたようだ。

電車の中が適度に暖かく、睡魔に負けたのだった。

その時である…

「ひよっとして…西木野真姫さんじゃないでしょうか？」

彼女の横から聴こえた…囁くような…声。

恐る恐る、そちらを見ると、そこに立っていたのはひとりの女性だった。

大学に入って視力が落ちた真姫。

その人物の顔を認証するまでに、少し時間が掛かった。

「突然、申し訳ございません…ご無沙汰しております『中目黒結奈』です」

彼女が名乗った瞬間、真姫の目のピントが合った。

「あ、あなたは…『ミュータントタート…』」

『『ガールズ』です。『Mutant Girls(ミュータントガールズ)』』

「あ…ごめんなさい」

「ふふふ…お気になさらずに。よく間違われましたから」

『ミュータントガールズ』…

真姫たちが出場したライブで、もしかしたらμ'sに替わって地区予選のベスト4に残っていたかもしれない、4人組のスクールアイドルだ。

穂乃果の見た夢が『正夢』であったのなら、今のμ'sはない。

両者、直接面識はなかったが、真姫と花陽は地区予選を戦う前に『プライベートでプラネタリウムを見に行った』際、その道中で彼女たち…今、目の前にいる『中目黒結奈』と出会う。

その時にはもうひとり『亀井紫恩』もいた。

学年は真姫のふたつ上…つまり絵里たちと同じ年だった。

結奈たちは『自分たちを負かしたμ's』のパフォーマンスのクオリティの高さに驚き、同じスクールアイドルでありながら『ファン』になったと打ち明け、以降、交流を持つようになった。

真姫と花陽が、初めて『対外的に』サインした相手でもある。

『Dancing stars on me!』を披露したハロウィーンのイベントの前にも、μ'sを激励に訪れたり、アキバで行われたラストライブも、ALLISEとともに、衣装製作などをバックアップして、イベントを盛り上げるのに一役買っていた。

「一番初めにお会いしたときも、このような感じでお声掛けさせて頂いたのでしたね…」

「そうね…確か、あの時はバスの中だったかしら…」

「あれから、もう、5年も経つのですね…」

「早いわ…」

「μ's…再結成するのですね？」

当時ボブカットだった結奈だが、今は腰まであるロングヘアである。

そういう意味では、見た目の印象はだいぶ変わった。

しかし口調は同じ。  
海未のように、一言一句が丁寧だ。

「ええ…まあ…」

μ'sのチャリテイライブ出演が公にされてから、真姫の周りも騒がしくなってきた。

しかし、まだ何を歌うかも決まっていない状態で、まったく実感が湧いていない。

どこか他人事のような感じがしているのだ。

それが、さっきのような気のない返事になっている。

ところが、彼女の口から意外な事実を知らされ、表情が変わった。

「実は私も、チャリテイライブに出演するのですよ」

「えっ?」

確かに自分たち以外にも複数のグループが出演する話は聴いていたが、アイドル事情に疎い真姫にとっては（アクアスターは別としても）その他は認識がなかった。

「そ、そうなの? ごめんなさい、まだちゃんと話を聴いてなくて…」

…でも、ミュータントタートルズの名前なんかあったかしら…

聴いていれば、忘れるはずのない名前。

だが、どう想い返してもその名前は出てこなかった。

もつとも『タートルズ』ではなく『ガールズ』なのだが。

「いいえ、私はまだデビューしておりませんので」

「えっ?」

「そのチャリテイライブが、初ステージになるんです」

「あつ…」

…そういえば、A—L I S Eの事務所からデビューする新人云々が  
いるって言ってたっけ…

「おめでとうございます」

「ありがとうございます」

「皆さんで？」

「私ひとりなんです」

「ソロ!？」

「はい」

「そう…」

「また、μ sの皆さんと同じステージに立てるとは…考えてもみま  
せんでした…」

「そうね…。でも、私たちが一番驚いているかも。もう二度とこの世  
界に戻ってくることはないと思っていたから…」

「幸せだと思いますよ」

「えっ？」

「私たちには…もう、できないことです…」

「できない？」

「たった4人しかいなかったのに…ですけどね…」

「どういうこと？」

「私たちも高校を卒業して、スクールアイドルとしての活動は終わりに  
しました。A—L I S Eや皆さんのパフォーマンスを見せられたら、とても幼稚で、その先を目指そうなどと思うメンバーはおりませ  
んでしたから」

「A—R I S Eはともかく、私たちは…」

「そんなことはありません。今も昔も、μ sは私の憧れなんです」

「そ、そう…」

「それで、私たちは各々別々の道を歩みました。私は専門学校に進ん

なのですが…不完全燃焼だったのです。まだ『やるだけやっていない』と思っただけです。それでA—L—I—S—Eの事務所の門を叩き…レッスンを重ねてきました。そうして、ようやくデビューとなったわけです」

「そうなの…。でも、それが？」

「メンバーと仲違（たが）いをしてしまいました…」

「えっ！…」

「…」

「…まさかと思うけど…」

「はい…紫恩です…。キツカケはつまらないことなんですけど…修復できないくらいほど大きくなってしまつて…もう2年以上音信不通で…」

「そんなことってあるの…信じられない…」

ポニーテールと大きなリボンがトレードマークで…μ、sで言えばことりのような容姿だった彼女。

しかし話し方はどちらかといえ、なれなれしく、穂乃果の近かった。

花陽と出掛けた先のバス停で、真姫をガン見していたのが彼女。

2人を見つけて『もしかしたら…』と思って眺めていたのだという。

その後、前述した通り、ミュータントガールズとは何度か顔を合わせており…だから知らない仲ではなかった。

なれなれしい…とは言ったが、裏のないストレートな性格…そういう印象。

結奈と紫恩は…例えて言うなら、海未と穂乃果のようだった。

真姫の記憶の中では、彼女の面影はそこで止まっている。

その2人がまさか：

唐突に知らされた情報に、頭が混乱した。

なぜか『海未が運ばれた』と聴いたときの、あの瞬間がクロスオーバーしたのだ。

双方の事情は違うが、いつかどこかで、誰かが欠けてしまうかも知れない：という漠然とした不安：。

お互いに誓った友情さえも、永遠ではないかも知れない：。

それを思った時、真姫の目から、唐突に涙が溢れ落ちた。

…なんで、泣くのよ…

…意味わかんない…

だがそれは、頭より早く、心が反射的に動いたらしい。

色々な感情が幾重にも重なっている。

「ご、ごめんなさい…」

と謝ったのは真姫。

「い、いえ、謝るのはこちらです。急におかしなことを言ってしまった…」

「ううん、いいの…ちよつと、私にも思い当たることがあったから…。そう、それは辛かったわね…」

「正直、こういうことを続けていいのかしら…という気持ちもありました…」

「いつかどこかで、わかりあえる日がくるわよ…」

「そうですね…だと、よいのですが…。ですから…μ、sのみなさんが全員揃ってステージに戻ってくることは、本当に素晴らしいことだなと…」

「…そうかも知れないわね…」

当事者は意外と気が付いていない。

9人揃ってステージに戻れるということが、どれだけ凄いことなのかを…。

健康でいることはもちろん、彼女たちのように何かが原因でバラバラになってしまえば、それは叶わないのだから…。

「あ、私はここで降りますので…」

「あっ…」

「まだデビューもしていない未熟ものですが、今後とも宜しくお願い申し上げます。では、ごきげよう」

「あ、また…」

「それでは、ライブ、楽しみにしております」

彼女はホームに出ると、ドアが閉まって走り出す電車を、小さくなるまで見送っていた。

真姫は、今日、心の中で沸き上がった様々な感情を整理しながら、ひとり電車の窓に流れる夜景を眺めた。

くつづく

触れた手がまだ熱い…

「混んでたねえ…あんまりオレも電車って乗らないからアレだけど…  
クリスマスってこともあるのかな？」

最寄り駅に着きホームに降りた高野は、海未にそう声を掛けた。  
だが彼女は

「…はい…」

と答えるのがやつとの様子。  
ぐったりとしている。

「大丈夫？」

それを見て高野は心配気に訊く。

「は、はい…車内が暑くて…ちよつと『のぼせた』ようになってしま  
いました…でも、もう大丈夫です」

…のぼせた原因はそれだけではありませんが…

「確かに暑かった…」

それだけに、外に出たときの気温差が激しい。

「うう、寒っ！これ、気をつけないと風邪引くパターンだな」  
と高野。

駅を出て歩き始めた2人の前に、突如として派手な作りの建物が現  
れた。

『ここから中華街です』と見るだけでわかる。

と同時に、あちこちから湯気と食欲を誘う香りが漂ってきた。

「中華まん、食べる？…って言いたいところだけど…これから食事だ  
からなあ…」



「は、はい…そうですね…」

…穂乃果でしたら、あと先、考えずに飛びつくでしょうね…

海未はそんなことを思いながら、高野のあとを歩く。

人出が多い。

まごまごしていると、すぐにはぐれてしまう。

…花陽でしたら「誰か助けてえ！」と言いながら、知らぬ間に姿を消しています…

海未の頭に、再びそんな光景が浮かぶ。

「前に進むのも難儀だね…」

「そうですね…」

「ごめん、ちよつと右手を出して！」

「はい!？」

海未は言われるまま、深く考えずに、高野に向かって腕を伸ばした。

「!!」

高野はすぐさま、彼女の手首を掴んだ。

「高野さんの手、暖かいです」

「今の今まで、カイロ握ってたから」

「えっ?」

「オレ、冷え性なんだよ。1月生まれだけど、寒いのは苦手だよ…。だから、この時期の試合は、手袋が欠かせなくって…」

「そうなのですか…」

「いや、そんなことより…行くよ!離れないで」

その掛け声と共に、海未を引っ張るよう歩き始めた。

…えっ?…

…ああ、高野さん…

…強引すぎます…

海未も彼の手首を掴み返すと、何度も行き交う人にぶつかりながら、必死にその歩を進めた。

どれくらい歩いただろうか。

高野の足が止まった。

心なしか、人通りも減った感じがする。

メインの通りから、ひとつふたつ筋を入ったようだ

それでも人がいないわけじゃない。

『わさわさ』した具合が、若干少なくなった…そんな程度だ。

「着いたよーあんまり大きくもないし、綺麗でもないけどね…味は間違いないから」

そう言つて高野が店に入ろうとした、その時だった…。

「あれ?海未ちゃんやない?」

「!!」

…なぜ、あなたがここにいます!?!…

海未にとつては聴き慣れた声、聴き慣れたイントネーション。

普段であればどうということもないのであるが…今、この瞬間だけは会いたくなかった…そんなところだろう。

「こんなところで、なにしてるん?」

「ひ、人違いではないでしょうか…」

「海未ちゃんも面白いことを言うようになったんやね…って…おや？」

2人はお互いの手首を掴んだままだった。

彼女の視線は海未の手元へから、反対側の人影へと移る。

「むふふ…そういうことやったん？」

「なにがですか！」

海未が怒ったように振り返る。

そこに立っていたのは、想像通り希であった。

「なにがって…」

希は再び、彼女の手元に目を落とす。

「!!」

海未は慌てて手を離した。

「ち、違います!!こ、これは、その…高野さん、説明してください」

「えっと…」

これまで黙って様子を見守っていた高野が、ようやく希の方を見た。

「あつ…あなたはひよつとして、sの…」

「はい、東條希です」

「あつ…初めまして…高野梨里です」

「あなたが高野さん…へえ、ウチのこと、知っててくれてるんやね」  
「もちろんです！一応、sファンを名乗っているのです、これくらいは…。『にわか』ですけどね。でも動画は何回観たことか…確か東條さんはハロウィーンの曲でセンターでしたよね？」

希が歳上だと理解した上で、高野は言葉を選びながら話す。

「うれしいなあ…ちゃんと観てくれてるんや。ウチ、結構『胸の印象しかない』って言われることが多いんやけど」

「それは、まあ、普通の男なら、目が行っちゃいますよ。逆に見ないようにする方が不自然だと思うし」

と高野は、希のそこに目をやった。

決して露出度の高い服を着ている訳ではないが、それでもそのポリウムは人並外れていることがわかる。

「貧乳フェチなら別ですけどね」

と付け加えた高野。

「まあ、正直な人やね」

希は嫌がる素振りも見せず、ニヤツと笑った。

…な、なんですか、これは!?!…

…ま、正夢ですか?…

海未は以前に見た夢を思い出し、キョロキョロと辺りを見回した。

…絵里はいないようですね…

「ん?海未ちゃん、どないしたん?」

「い、いえ、なんでもありません…」

「それより海未ちゃんが、色々お世話になりました…」

「いやいや、とんでもないです…こっちこそ、色々ご迷惑をお掛けしてしまっ…」

「迷惑だなんて、そんなことあらへんよ…」

「そ、それより、なぜ希がここにいるのですか！」

海未は話が軌道修正されたことにホッとしつつ、彼女がここにいる謎に迫った。

「ん？それはそっくりそのまま、海未ちゃんに訊きたいんやけど…」

「実は、彼女が『快気祝いをしましょう』って誘ってくれたんですよ。あ、オレ、退院したんで」

と高野がフォローする。

「あ、そうなん？おめでどうございます」

「あ、どうもです…。それで…」

と、彼は今に至るまでの事情を話した。

…真姫ちゃんがねえ…

「なるほど…」

希はなんとなく彼女がとった行動の意図を察し、この状況を理解した。

「なので、先ほどののは…決して手を繋いでいたわけではありません」

「まあまあ、海未ちゃん…そんな、ムキにならんでも…」

…海未ちゃんやし、そんな大胆にはなれんよね…

「それで、希は？」

「ウチ？ウチは…リサーチやね」

「リサーチ…ですか」

「ほら、ウチ、旅行会社に務めてるやんか。その企画のひとつで『年末年始を中華街で過ごす』っていうのを考えてるんよ」

「へえ…」

「もちろん、今年は間に合わへんから、来年に向けての話やけど」

「はあ」

「それで、このお店に調査に来たってわけやな」

「そんな偶然がありますか！」

「偶然？」

「あ、オレたちも今からここで食事をしようと思ってて…」

「あるんやねえ…」

希は海未の顔を見るとニヒツと笑った。

「そやけど…ウチ、お邪魔みたいやし、別のお店を探そうかな」

「えっ？」

海未は思わず声を上げた。

「折角ですから、ご一緒しませんか？」

「高野さん？」

「別に2人も3人も変わらないでしょ？元々は西木野さんと3人のつもりだったんだし」

「え、でも…悪いやん…」

と言いつつ、希は海未を見る。

「高野さんよければ、私は構いませんけど…」

海未は若干俯きながら、そう答えた。

店内に入ると、3人で食事ができるよう高野が上手いこと都合をつけた。

…ですが、考えようによつては、希がいてくれて助かったかもしれない  
ません…

…高野さんと2人きりというのは…やはり…

本来はここに真姫がいるはずだった。

しかし彼女は気を利かせたのだろう、帰ってしまった。

いや、もしかしたら初めからそのつもりだったのかも知れない。

それが海未にとって良かったのか悪かったのか…。

そう思っていたところに希が現れた。

高野の言葉を借りるなら「起きてしまったことは元にはもどらない。大事なものはこれから先どうするか」とうことである。

海未はそう思い、彼女の出現を前向きに捉えることにした。

「そやけど、高野さん。ほんまに海未ちゃんを助けてくれてありがとう。ウチはその時、海外にいて…事故のことは少し後から知ったんやけど、それでも一瞬、血の気が引いてしまつて…」

「東條さん、その話はもういいですよ。こつちこそ、それをきつかけにμsの皆さんに迷惑を掛けたんだし…お互い『行って、来い』つてことで」

「迷惑だなんて…。むしろ、あのことがあつて、何年ぶりに全員揃つたり、今度のライブが決まつたりと、ウチらにとっては恩恵しか受けてないって感じやけど」

「そう思ってもらえるなら、ありがたいです。…ということ…事故云々の話はこれで終わりにしましょう」

「そやね。それと、東條さんは堅苦しくてイヤやな…希って呼んで」

「の、希!?!」

…私でさえ、まだ『園田さん』なんですよ…

…なぜ、初対面のあなたが『希』になるんですか!…

「ん?」

「い、いえ…」

「それにしても、まさかこのタイミングでまた、sの人に会えるとは…ちよつとツキ過ぎて怖い」

「大袈裟なんやあ」

「このままの勢いで、絢瀬さんと小泉さんにも会っちゃったりして」

…ですから、2人忘れてますって…

そこは何故か冷静な海未。

「ごちそうさまあ」

3人が食事を終えると、高野が大きな声で、厨房の奥にいる店主に挨拶をして店を出た。

「あの…本当によろしいのでしょうか…」

「ウチの分まで払わせてしもうて…」

「まあ、こういう時は男に華を持たせるものじゃない？」

「いえ、そもそも『快気祝いをしましょう』とお誘いしたのは私なのですから…」

「とはいえ、学生さんに払わすわけにはいかないでしょ？大丈夫、こう見えてもプロのサッカー選手だったんだから、そこそこのお金は持つてるよ」

高野はアハハと笑った。

「すみません、では、お言葉に甘えまして…」

「ごちそうさんです…」

「とても美味しかったです」

「ほんまやね。ウチも口コミの情報を頼りにきたんやけど、想像以上の美味しさやった」

「店主のおっちゃんかね、中国人なんだけど、変に込むのを嫌がって、



ずっと取材拒否してるんだよね…。だから、今日みたいに常連には融通を利かせてくれたりもできるんだけど」

「なるほどやね…」

「希さん、ダメだよ、ネットで大々的に紹介なんかしちゃ」

「うう…難しい注文やけど…では、秘密ということで」

「よろしくおねがいします」

高野はそう言々と大袈裟に一礼をした。

くっくくく

不思議なパワーで、お手伝いしよか？

「そう言えば、海未ちゃん『みなとみらいの観覧車』に乗ってみたいって、昔から言うてたやんか」

「えっ！なんですか、突然」と言おうとした海未を、希の目が制した。いいから、ウチに任せときい…そう訴えていた。

「ここはどっ？えっ！中華街…！そんなら、みなとみらいって？なんと、歩いてすぐやん!!これは折角やもん、行くしかないやない?…えっ、ひとりで乗るのは寂しいって?…それはそうやなあ…そやけど、ウチはもう帰らなければいかんよ、門限が厳しくって…あ、でも、高野さんがいるやんか!!そうや、海未ちゃん、高野さんに連れてってもらえばいいやん!」

…希…

…なんですか、それは…

…いくらなんでも、その小芝居は無理があります…

海未は冷やかな目で、希を見た。

「オレは別に構わないけど」

「高野さん!?!」

「考えてみれば、今日、クリスマスだったんだよね…」

「いえ、イブは明日ですから」

「まあ、そう変わらないでしょ。それなのにサッカーに付き合わせちゃったり、中華街でメシだったり…雰囲気の欠片(かけら)もなかったね…まったく考えてなかったわ…」

「いえ、私もそういうつもりではございませんでしたので…」

「園田さんの時間さえよければ、オレはいいよ」

「えっ？あ、はい…その…」

「いいやん、いいやん。ウチは何回も来てるけど、海未ちゃんは滅多に来んのやろ？」

「まあ、それはそうなのですが…」

「ほんなら決まりやね！高野さん、あとはお願いします。ウチは門限が…。今日はごちそうさんでした。ほな、また…」

これがアニメなら『ピュ〜』という効果音が付きそうな勢いで、希は走り去っていった。

もちろん、ひとり暮らしをしている希に、門限などあるはずがない。

「希さんって、あんな感じの人？もつと、おっとりしてるのかと思ってたんだけど…」

「ど、どうでしょう…」

海未はあさつての方向を見た。

「散歩…していく？」

「えっ？」

「食後の運動…」

「あ…はい…」

高野がテクテクと歩き始めた。

そのあとを一步遅れて海未が着いていく。

「目の前に見えるのが『マリントワー』。名前は格好いいけど、イメージだけ先行してる感じ？実際、高くもないし、上に行ってみて…ガツカリ…みたいなの」

「そうなのですか…」

「まあ、話しのタネに1回くらいは行ってもいいとは思うけど…そう何回も行くようなところじゃない…。そして…右の方に首都高が見えるでしょ…その奥にあるのが『港の見える丘公園』。ここからじゃ見えないけどね。…それで…ここが、かの有名な『山下公園』。ん？別

「に有名じゃない？」

高野はひとりで笑う。

2人は海沿いまで歩いてきた。

海風が強く吹いているため、体感温度は相当低くなる。

「寒っ!!」

高野は大袈裟に身体を震わせた。

「園田さん寒くない？」

寒くないわけがない。

ただし、海未は弓道をしていることもあつてか、わりと寒さに強い。思わず

「いえ、そこまでは…」

と答えてしまった。

…ああ、なんて可愛い気のない女なのでしょう…

…ことりでしたら『高野くん、寒いね…』と、スツと寄り添っていいのでしょうか…

ことあるごとに、メンバーを引き合いに出す海未。

「へえ…オレ、ダメかも。早く、このゾーンは抜けよう!」

と、高野の脚は競歩のように速くなった。

ストライドの長い脚が、テケテケと進んでいくのだから、海未は勢い、駆け足に近い形で後を追う。

「ちなみに、右横に見えるのが『氷川丸』。戦前から唯一現存する貨客船で、中は博物館になってるんだ。そして…正面が目指す観覧車だあ!!」

高野の進む速度を上がり、競歩からジョッグ、最終的にはダツシユして公園を通過する。

「えっ、た、高野さん！待ってください!!」  
必死に追いかける海未。

高野は少し走ってから、速度を緩め…止まった。

「はあ…はあ…急に走らないでください」

「ビツクリした？」

「はい…置いていかれるかと思いました…」

「あははは…」

「笑いごとじゃありません！」

「ごめん、ごめん…公園内はカップルしかいないし…なんとなく気ま  
ずいかなって」

「あっ…」

…確かに…手を繋いだり、抱き合ったりしている男女しかいません  
でした…

「あ、でも、すぐくない？オレ、ここまで走れるようになったんだぜ」

「はい…そうですね！」

…つい、この間までは歩くのもままならなかったはずです…

…いくらアスリートとはいえ、相当、トレーニングをされているの  
でしょう…

海未は感心すると共に、順調に回復していることを嬉しく思った。

「そんなもって…この橋を渡った…ここが『赤レンガ倉庫』」

高野が歩きながら説明を続ける。

「綺麗ですね」

「ライトアップしてるんだね」

電球色に照らされた建物は、そこだけが浮かび上がっているように見える。

『スノハレ』だっけ？あの照明みたいだね」

「だいたいオレンジの光に照らされると、そうなります」

と海未は笑った。

「お、ほら、この角度から見ると…赤レンガ倉庫を挟んで右にマリントワー、左にベイブリッジ…」

「わあ、とても素敵な景色ですねえ」

『インスタ映え』ってヤツ？」

「そうですね。私はしておりませんが」

「オレもそういうのしてないけど…折角だから、写真くらいは撮っておくか」

そう言つて高野はスマホを取り出した。

「あ、よければお撮りしましょうか？」

「えっ？」

突然、見知らぬ人に高野は声を掛けられた。

歳は高野より少し上だろうか。

若い男だ。

隣には彼女らしき人が寄り添っている。

「この角度じゃ、自撮りも難しいですから…」

「いいんですか？」

「はいはい、構いませんよ」

お節介なのか、親切なのか…とにかくにも物好きな人がいるものである。

しかし高野は、その好意に甘えることとした。

「じゃあ、お願いしちゃうかなあ」

高野は彼にスマホを渡した。

「はい。あ…ほら、『彼女さん』も早く並んで」

…彼女…ですか…

…私が…

「ほら、照れてる場合じゃないでしょ？もっと寄って、そうそう、はい、じゃあいきますよ…」

カシヤツ

「ありがとうございます」

「いえいえ」

「お二人は撮られたのですか？お返しさせていただきますよ」

高野が礼を言いつつ、彼らに訊いた。

「はい、僕たちはもう…」

と男は三脚を見せる。

「あ、なるほど…」

高野と海未は何回も礼を言い、その場を離れた。

「世の中、親切な方がいらっしやるものですね」

「そうだね」

「私など、見知らぬ人に声を掛けるなんて、到底できないのですが」

「普通はね。でも、意外とああいふ場所では、フレンドリーな人、多いよ。まあ『気持ちに余裕がある人』じゃなきゃ、なかなかそうはならないだろうけど」

「…と、仰いますと？…」

「あの人も『独り身』じゃなかった…ってこと」

「なるほど、そういうことですか…。あ、でも、さっきの方は、ひとつ勘違いをされてました」

「ん？」

「私のことを…高野さんの彼女だと…」  
と海未は俯いた。

「あははは…まあ、そりゃあねえ…親子には見えないでしょ！」  
気不味くなる雰囲気嫌うかのように、高野は冗談を飛ばした。

そうこうして歩いているうちに、2人の眼前にLEDで七色に輝く  
…直径100m、日本最大級…の観覧車が現れた。  
正式名称は『コスモクロック21』という。

「綺麗ですね」

「うん。照明は去年、改修されたんだったかな？」

「高野さんは乗ったことがあるのですか？」

「まあ、何回か」

…何回か…ですか…

乗り場には50mほどの列が出来ていた。  
チケットを買った2人は、その最後尾に並ぶ。

「確か…1周15分くらいだったかな」

「詳しいんですね」

「まあ…地元だから…。逆にいうと、ここ以外はまったく知らない。  
試合で地方にも行くけど、遊んで帰ることはないからなあ。恥ずかし  
い話だけど、デイズニーランドもシーも行ったことないんだ」  
と高野は頭を掻いた。

「では、こんど是非ご一緒に」と心の中で呟く海未。



…なぜ、それを声に出さないのですか!!…

彼女は自分の頭をポカポカと殴った。

「園田さん?」

「い、いえ、何でもありません」

「?」

彼らの順番がやってくる、係員に誘導され、ゴンドラに入った。  
2人は向かい合って座る。

「高いの怖くない?」

「はい。そこまでは…」

…ああ、またも可愛い気のないことを言ってしまった…  
…どうして私はこうもダメなのでしょう…

ゆっくりと地上から離れるにつれ、下界のざわめきが消えていく。  
正確に言えば、なにも聴こえなくなったわけではないが、2人だけの密室の空間が、そういう風に思わせた。

その雰囲気に合わせてのだろうか…ここまで饒舌だった高野も、なぜか黙ったまま外の景色を見ている。

4分の1を過ぎたあたりで、海未が口を開いた。

「あの…高野さん…」

「ん?」

「実は、私、どうしてもお伝えしたいことがございまして…」  
「？」

その言葉に、外を眺めていた高野は海未へと向き直った。

くっくくく

告白日和、です

「園田さん？どうしたの改まって…」

「!!」

高野の言葉を聴いたとたん、海未の神妙だった顔が、突然険しくなった。

「なに？なに？」

「はい。大事なことをお伝えする前に、一言申し上げます」

「は、はい…」

高野は海未の初めて見る表情に、少しビビッている。

「私のことは…『園田』ではなく『海未』と呼んでください！」

「はい？」

「これからは海未でお願い致します」

「えっ？あ、ああ…いや、でも、そんな馴れ馴れしくは…」

「先ほど、希には『希さん』と仰っていましたか…」

「そ、そうだったけ？」

「なぜ、初対面の希には『希さん』と言って、私はいつまで経っても『園田さん』なのでしょうか！」

「そ、それは…園田さんの雰囲気か『園田さん』って感じで、軽々しく『海未さん』などと言ってはいけないような気がして」

「イヤです！」

「…えっ…」

「そんな気の遣われ方は…イヤです…」

「えっ…う、うん…わかった。園田さんがそう言うなら、今後は海未さんと呼ぶようにするよ」

彼女の悲しげな表情に、高野は折れた。

「はい！お願いします！」

海未の表情が、一瞬崩れた。

「あ、ああ…。それで伝えたい話って…」

「はい…」

海未は頷くと、数回深呼吸をした。

「私が高野さんに助けていただいていたから、半年が過ぎました。その間、今日（こんにち）まで様々なことがあり、長いようでもあり短いようであり…」

「そうだね…」

「色々な経験もさせて頂きました」

「うん」

「その中で…近頃、私の中で、どうしても抑えられない気持ちがあることに気が付きました」

「…」

「できれば…そのまま…胸にしまっておきたかったのですが…」

「…」

「…すみません…このままでは…私…どうにかなってしまいそうで…」

「園…あ、いや…海未さん…」

「私、園田海未は…高野さんのことが…高野さんのことが…」

「ストップ!!」

高野は立ち上がって海未を制した。

「!!」

「ちよつと待って!」

「高野…さん?…」

「海未さん、早まつちやいけない!その先はまだ言つちやいけない!」

「なぜですか!」

「そう思わせた、オレが悪い」

「どういうことですか?」

「多分、海未さんは『雰囲気流されてるだけ』なんだ。ああいうことがあって、現実が見えなくなっている。オレは海未さんが想っているような、男じゃない」

「そんなことはありません!」

「そんなことあるさ。そりゃ、クリスマスの夜に、こんなデートみたいなことをすれば、勘違いもするって！そう思わせるようなことをした、俺が悪い」

「勘違いではありません！」

「海未さん！」

「ずっと苦しかったのです…。電話で高野さんの声を聴くだけで、胸が締め付けられました。高野さんの顔を思うだけで、頭がどうかかなりそうでした。生まれて初めてでした…。このようなことは」

「いや、だから…それは…なんだっけ…あ、そうそう『吊り橋効果』ってやつでしょ？」

「はい、メンバーにも初めはそう言われました」

「ほら」

「違うのです。何度かお会いしているうちに…高野さんの人柄に触れていくうちに…私の中で、どんどん高野さんのことが膨れ上がっていったのです。それは単なる一過性の感情ではないのです」

「…」

「高野さんが私のことを、どう想われているかはわかりません。…ですが…ですが、私はいつか、この気持ちを伝えたいと思っていました。…真姫も希も…それをわかっていて…後押しをしてくれたのです」

「…そうなんだ…」

「後悔はしたくありません。ですから…」

「待って！」

「高野さん」

「30秒…いや1分、時間が欲しい。今、その気持ちに『どう応えていいか』考えるから…」

「…はい…。『どんな答えでも』受け入れる覚悟はできております」

「わかった…」

彼らの乗った観覧車のゴンドラは、間もなく頂点に到達しようとしていた。

海未は遠くに見える…青白く光るベイブリッジをボーツと見つめながら、その時を待った。

「いいよ。時間だ…」

高野は合図をすると、海未の横に立つ。

彼も同じように外を見た。

2人の顔が、ガラスに反射して並んで映る。

そのまま外を見ながら海未が呟いた。

「私、園田海未は…高野梨里さんのことが…好きです…」

海未は…ガラスの向こうの夜景を見ていたが…言い終わった瞬間、その目を閉じた。

…ああ…

…ついに言ってしまいました…

ゴンドラ内が静寂に包まれる。

ほんの数秒のことだったが、海未にはそれが、何時間にも感じられた。

「オレも…」

そう高野が口にした瞬間、彼女は弾かれるように目を開けた。

反射しているガラス越しに、彼の顔を見る。

「オレも…海未さんのことが…好きだ…」

「高野さん！」

ポロリ…と涙が落ちた。

「でも…オレはきつと、あなたのことを傷つけてしまう…迷惑をかけてしまう」

「高野…さん?…」

「今のオレは無職だし、怪我が完治したとしても…果たしてサッカー選手としてプレーできるかどうかともわからない。こればかりは気持ちだけじゃどうにもならないから…」

「はい」

「だから、そんなオレを好きになった…ってことは、海未さんにとって不幸なことだと思うんだ」

「バカにしないでください！」

「ん?」

「私は高野さんがサッカー選手だから好きになったのではありません



ん。もちろん、復帰して活躍されることは願っておりますが、正直、それがどれだけ大変なことかはわかってるつもりです」

「…海末さん…でもオレと付き合えば、どうしたって『夢野つばさ』が付いて回るよ」

「はい。つばささんと比較されては、私が勝てる要素なぞひとつもありません。ですが…高野さんが好きな気持ちだけは負けません。それに…」

「それに？」

「つばささんに後を託されたのは、私ですから。他の人には譲れません」

「あははは…オレ、そんなに価値ないけどな…でも、マスコミがうるさくなるかも」

「覚悟してます」

「…」

「なんででしょう？」

「そんなこと言われたら、抱きしめたくなくなっちゃうじゃん…」

「あっ！…あの…それは…その…」

「…つて感じで、オレ、めちやめちやスケベだけど…大丈夫？」

「つ、つばささんからは…口だけと聴いてます」

「ぶっ！なんだそれ？いつ、そんな情報交換を…」

「そ、それは内緒です」

「でも、さっきだつて希さんの胸から目が離せなかったし…」

「仕方ありません。希のあれは、私でも目のやり場に困ることがありますし」

「できれば…触ってみたい…と思ったりするし」

「お、思うだけなら…勝手になさってください…」

「我慢できずに…襲っちゃうかも…」

「それはさすがに許しません!!というか、そこまでいったら犯罪です」

「…だよね…」

「ならば…その分、私を愛してください!…」

「…」

「…」

「…なんか、今、凄いことをサラツと言ったけど…」

「あつ…」

「海未さんが望むなら、毎日毎日、いっぱいいっぱい愛しちゃうけど」

「は、破廉恥です!」

「それこそ、あんなことやこんなこともしてみたいし…」

「ですから破廉恥です!!破廉恥すぎます!!」

海未は高野に向かって、平手打ちを見舞った。

咄嗟の反応。

『パブロフの犬』状態と言ってもよい。

だが、さすがは高野。

スツと身体を沈めると、その右手をかわして、彼女の背後に回った。

海未も負けじと身を翻し、高野と対峙する。

「観覧車の中で暴れたら、危ないって…」

「それはわかってはいますが…高野さんがあまりにも…その…いやらしいことを言うものですから…」

「でも、多分、この性格は変えられないよ…」

「会社だったら、セクハラで訴えられます。『Me too』で、ネットに告発されます」

「好きの人の前ならいいんでしょ？」

「好きな人？…いえ、でも…度を過ぎるのは…」

海未は自分の気持ちを打ち明けてから、初めて高野の顔を正面から見た。

高野も真っ直ぐ、彼女の目を見つめた。

「ごめんなさい、高野さん…」

海未は彼の名前を呟くと、静かに目を閉じた。

…恥ずかしいです…

…こんなところで、私は何をしてるのでしよう…

…ですが…

…ですが…

頭の中でこういうシーンを想定して、何百回もイメトレは行ってきた。

シミュレーションはバッチリだ。

もつとも希がければ

「海未ちゃん、それは妄想って言うんやけどな」と言われそうだが。

「…海未さん…」

高野は彼女が目を閉じた意味を理解し、肩を引き寄せせる。  
海未は小刻みに震えており、その緊張が高野にも伝わってきた。

「…メリークリスマス…」

そう言つて高野の唇が、海未のそこに触れようとした…

まさにその瞬間だった…。

「はい、お疲れ様です！暗いですから、足元、気を付けてお降りください」

無情にもタイムアップの笛が響いた。

ゴンドラの扉が係員によって開けられ、2人だけの時間は終わりを告げた。

「あははは…なんて間の悪い…」

「は、はい…」

「残念ながら『クリスマスプレゼント』はお預けとなりましたあ！」

「え、ええ…」

「それとも…もう1回乗つて…続きをする？スタートから始めれば、もっと『いいとこ』まで進めるでしょ」

「は、破廉恥です！」

ぶんー！

海未の右手が呻った。

バシッ!!

同時に高野が大きく吹っ飛ぶ。  
今度はかわしきれなかった。

「ぎゃあ!!高野さん!!」

自分で叩いておいて、自分でビックリする海未。

…オレ、もう一度、入院するかも…

くつづく

## 新たなる挑戦

「へえ…よかったじゃない」

「はい、これもあなたのお陰です」

翌日、海未は昨夜の結果を真姫に報告した。

途中から希が現れ、彼女がアシストしたことも説明したが、観覧車内での詳細なやりとりについては、省略した。

とても海未の口からは言葉にできなかつた。

「真姫には、なんてお礼を言ったらよいか」

「そんなこと、別にどうでもいいわよ。私はただ、今度のライブに向けて、みんなが万全な状態で臨んでほしい…って思っただけだから」

「ありがとうございます」

「それより…」

と真姫は、電車で会った中目黒結奈のことを話した。

「…そのようなことが…」

「それを聞いたとき、本当にあなたが無事でいてくれてよかつた…つて、心から思ったわ」

「ありがとうございます」

「それと同時に…いつ、どこで誰が欠けてもおかしくない…って不安も…」

「そうですね。私たちに限って、仲違いなどはありえないと思います  
が…」

「わからないわよ」

「えっ?」

「高野さんって確かにいい人だと思うけど…きつと、誰にでも優しくできる人だから…」

「はあ…」

「海未がすっかりしてないと、他の人に盗られちゃうわよ」

「そ、それは確かに心配ですが…」

「その相手がμ sのメンバーだったら…」

「!!」

「そうなったときは、いくら私たちでも…」

「…」

「…なんてことになりかねない…ってこと。実際、私も『あんな人が彼氏ならいいなあ』…なんて思ったし」

「真姫!」

「冗談よ、冗談…。私はパス!だって私にはアスリートの妻なんて務まらないもの」

「…冗談に聴こえませんでした。それに…妻だなんて…まだそこまで…は…」

「まあ、あれだけオープンな人だから、陰でコソコソする感じではなさそうだけど」

「ええ…まあ…」

「それで、次のデートはいつなの?」

「1月3日の予定です」

「三ヶ日? 初詣?」

「それもそうなのですが…高野さんの誕生日でもありまして」  
「へえ…随分おめでたい日に生まれたのね」

「はい。ですから、幼いころは誕生日パーティーをしたことがないと申してました」

「そうね、お正月だと、友達も呼べないものね…って、前にこんな話をして盛り上がらなかった？」

「あれは…花陽が16歳の誕生日を迎えた時のことだったかと」

「そうね…思い出したわ。確か、あの娘も1月が誕生日で、クリスマスとお正月のあとだから『おまけ感が強い』みたいなことを言っていたのよね」

「はい」

「あら？えく…じゃあ、花陽はまだ19歳なの？」

「そうなりますね」

「私なんて4月で21歳になるのに」

「そういう意味では、私もまだ20歳です」

「それって、おかしくない？」

「この時期になると、毎回同じことを言っていますね」

「だって、海未が21歳になった翌月に、私も21歳になるわけでしょう？それだけ早く歳を取るってことじゃない。それなのに花陽は20歳のまま1年を過ぎすんだもの、不公平だわ」

「でも私たちは私たちがで、幼少期は苦労してきたわけですし」

「苦労？」

「私などは3月生まれなので、4月生まれの人に比べれば、まる1年違うわけです。知能の発達や身体的な成長を含めて、この差は大きいと思うのです。それを同じ学年でひと括（くく）りにされるのは、いまだに違和感があります」

「まあ…確かにそうね…」

2人はこのあと、ひとしきり誕生日談義で盛り上がった。

「それで…みんなにはいつ伝えるの？」

「高野さんのことですか？」

「そう」

「どうでしょう…まだ、なにも始まっていないですし…落ち着いたら



…とは思いますが…」

「そうね。まあ、わかつたところで、どうこうなる連中ではないと思うけど…」

「はい」

「でも…ひとり心配な人がいるわ」

「はい？それは一体…」

「穂乃果よ、穂乃果！」

「穂乃果…ですか？」

「当然でしょ？海未に彼氏ができて一番ショックを受けるのは、穂乃果に決まってるじゃない」

「はあ…そうでしょうか？」

「それはそうでしょ？」

…私だってカヨに彼氏ができたって言われたら、しばらく立ち直れないもの…

「まあ、さっきの話に戻るけど、メンバーに盗られないように気を付けて」

「も、もちろんです」

「ごとりあたりは油断していると危ないわよ。私、ドラマみたいな修羅場なんて見たくないんだから」

「そ、そうですね…」

…とはいえ…

…真姫…

…あなたでさえも、私は危険だと思っているのですが…

μ、sのメンバーが、個々バラバラにクリスマスを過ごした週明けの火曜日。

「夢野つばさより一足早く渡仏していた緑川沙紀が帰国し、『オリンピック・リヨン』への正式入団が発表された。

因みに、オリンピックで日本を苦しめた南アフリカ代表の『エマ』も移籍して、チームメイトとなったらしい。

奇しくも芸能界では『エマ』『ヴェルデ』というハーフタレントが活躍していて、それにちなんで、早くも『エマ』『ヴェルデコンビ』などという言葉が作られている。

ヴェルデとはイタリア語で緑の意味だ。

緑川沙紀のあだ名『ヴェル』の由来でもある。

※フランス語なら *vert* (ヴェール)

報道陣から今の心境を訊かれ

「不安しかない」

と苦笑した沙紀。

それでも：ゴールデンコンビが解消されることについては？…との質問に

「今の代表の中心は、つばさだというのは誰もが認めるところです。でも彼女だけがワールドクラスじゃダメなんです。ひとりひとりが、もつとレベルアップしないと。だから私は私で、1の力を2とか3にしていきます。そして今までの私たちが1+1が3であったなら、2+2を5にも6にもする。2人の関係において決してマイナスにはならないと思います」

と力強くコメントした。

『みさきちゃん』らしいな…」

そのやり取りをTVで観た高野はそう思った。

沙紀とは出身地が同じということもあり、度々イベントなどで顔を合わせる。

印象は『よく喋る娘』。

高野は『明るく賑やかな娘』は嫌いじゃないが、『騒がしい娘』は少し苦手だ。

彼女の『それ』をどう感じるかは…体調やその時の気分によって左右されるかも知れない。

もともと彼が『みさきちゃんらしい』と言ったのは、その部分ではない。

彼女のサッカーに対する情熱を評価してのことだった。

沙紀はつばさのように器用ではない。

抜群にテクニックがあるわけでもない。

だが、その分、誰よりもボールを追い続ける。

もちろん『並外れた瞬発力と持久力を併せ持つ沙紀だからこそ』の業（わざ）なのだが、それを差し引いても、試合における彼女の闘争心はズバ抜けている。

手を抜くことを知らない。

精神論を語るのは時代にそぐわないかも知れないが、勝負の世界に生きる者としては『諦めない気持ち』というのは不可欠な要素。

彼女のプレーは華麗ではない…むしろ泥臭い…が、観る人を熱くさせる。

頑張れ！と応援したくなる。

高野もそれは強く感じている。

サッカーに対してはとことんストイック。

近い将来、日本代表の主将にもなるだろう。

高野にとって、性別こそ違おうが、彼女もまた尊敬できるサッカー選手のひとつだった。

…あとは点さえ獲れば…

サッカーの攻撃陣は、ゴールを決めてこそナンボの世界。

緑川沙紀は、チームに対する貢献度は高いものの、まだ『汗かき役』という評価がついて回る。

彼女がこのレッテルを覆すには、シュートの決定率を上げること。これに尽きる。

…とか言って、オレも他人のことを心配してる場合じゃないけどな

…

まだ公にはされていないが、高野は今、無職だ。

チームを退団したことは、明日発表される。

ゼロからの…いや、マイナスからの『リスタート』を自らの意思で選んだ。

今は高くジャンプする為に、膝を曲げ、屈（かが）んでいる状態。

再起を目指す彼の戦いは、既に始まっていた。

退院してからの高野は、1日6時間ほどをトレーニングに費やしている。

もちろん、故障明けだけに、徐々に慣らしながら…という状態。

約1時間掛けてストレッチとマッサージュを行い、その後、アツプに1時間近く費やす。

十分に身体がほぐれたところで、バランスボールなどを使い、体幹を鍛える。

フェイントを交えながら、軽やかなステップで相手をかわしていくドリブルが特徴の高野だが、時折、踏ん張りが利かず、ボールロストをすることがある。

これを機にインナーマッスルを鍛え直し、少々のことでは崩れない  
身体の土台作りを図っているのだ。

そのあとマシンを使った筋トレを行い、午前の部は終了。

休憩を挟んでからは、室内でシャトルランなど、集発力系のメ  
ニューを交えながらの走りこみ。

そしてようやく、1日が終わる。

…かと思いきや…

さらにプールに入りダウンを行い、再度マッサージを受けて、終了  
となる。

まだ、ボールには触れていない。

とにかく、きつい。

最初は走ることさえままならなかった。

ダッシュなんて、とてもできなかった。

どうやって走っていたのかわからず、脚がもつれて、転びまくった。  
頭と身体がバラバラだった。

疲れきって身体が動かない。

それは練習時間の長さではない。

6ヶ月のブランクにより、筋肉が衰えているから、それを取り戻す  
ことがまず大変だった。

尚且つ、これまで使っていなかった部位を鍛えている。

動けなくなるのも当然だった。

自宅に帰れず、近くのビジネスホテルに泊まったこともあった。

高野もつばさ同様、どちらかという天才肌の選手である。

中学生時代は膝を痛めるなど、それなりに苦労はしてきたが、死ぬほどの努力をしてきたかという点、そうでもない。

天性のボールタッチを武器に、ここまでやってきた。だから、シーズンオフのキャンプでも、あまり身体を苛め抜いたことはない。

手を抜いているわけではないが、どこかで自制している部分があった。

それが、どうだろう。

まだ、足りない。

もつとやらなければならぬ。

そう思うようになった。

そして頭も、心も欲している。

だが、これ以上はドクターからもトレーナーからも止められている。

「焦らず、メリハリをつけて、じっくりいきましよう」

オーバーワークで怪我をしては元も子もない。

今はまだ、その時期ではない。

「オフの時間は、サッカーもトレーニングのことも忘れて思いっきり『抜いて』ください」

とも言われている。

サッカーは基本、90分間で勝敗を競うスポーツである。

その短い時間に、いかに集中して、力を出すか。

24時間365日、そのことだけを考えて過ごす…という考えがある一方

「オンとオフの切替えを上手に行い、必要な時だけ力が発揮できるよう、日頃から過ごすのも大事なんですよ」

と、高野のトレーナーは短期集中型を説く。  
どっちが正解かはわからないが、高野は彼の説に従うことにした。

そして、翌日：

男子サッカーをオリンピッククに導いた功労者の、マリノス退団が発  
表された…。

く 第三部 完く

## 第四部（最終章）

Happy new year!!

年が明けて1月1日。

高野が目覚めてTVを点けると『元天才子役の島崎某とかいう女優が、覚醒剤で捕まった』というニュースが流れていた。

…正月早々、ご苦労なこった…

…でも、こういうヤツが数年後シレッと復帰するのが、芸能界つてとこなんだよなあ…

ニュースは臨時だったようで、スタジオのアナウンサーが

「それでは、引き続き駅伝をお楽しみください」

と言うと、画面が切り替わった。

すでに1年のうち『1番早く日本一が決まる大会』…『ニューイヤー駅伝』の走者はすでに2区を走っていた。

気持ちいいほどの快晴。

だが、風は強そうだ。

寒さが苦手な高野は、それを観るだけで身震いがした。

昨晚、高野は何年かぶりに家で紅白を観て過ごした。

…前は確か…シルフィードが出るのか、出ないのか…と騒いでいた時だったか…

星野はるかも水野めぐみも、あれから毎年出演しており、すっかり



常連という感じになった。

もちろん：A——L I S Eも：である。

だが、音楽業界に疎い高野。

8割は知らない歌手だったことに、少なからずショックを受けた。

：さすがにこれは：まずいかな：

21歳かそこらでオッサンになるのもどうか：そんなことが頭をよぎったようだ。

日本のサッカー界では、年が明けて初めてボールに触れることを『初蹴り』と呼び、その多くは、チーム単位で集まり、軽く練習を行った後、餅つきをしたり、鍋を焚いたりして親睦を深め『今年1年頑張ろう！』的なイベントのことをいう。

今日の午後行われる天皇杯の決勝に進んだ2チーム：はともかく、それ以外は帰省して地元で過ごすJリーガーが結構いる。

そういった選手は、自分が出た小・中・高の部活、あるいはクラブチームにOBとして初蹴りに参加したりする。

ファンサービスの一環でもあるが、子供たちからすると、地元のスーパースターと触れ合える絶好の機会。

大きな『お年玉』である。

高野も、昨年の正月までは『出身小学校の初蹴り』に参加していたが、今年は無断した。

諸々事情はあるにせよ『退団した選手が顔を出す』というのは、あまり縁起がいい話ではないだろう。

そう思ったからだ。

その替わりと言ってはなんだが、彼はジャージに着替えるとボールを抱えて、近くの公園へと出掛けた。

もちろん、ベンチコートや羽織い、ネックウォーマー、手袋と防寒対策は万全である。

負傷してからトレーニングを続けてきた高野であったが、実はまだ一度もボールを使った練習はしていなかった。

特に拘（こだわ）りがあったわけではないが『それをするのは年が明けてから』と決めていた。

つまり、まさに今日が退院してからの『初蹴り』ということになる。今、駅伝が行われているのは栃木だが、そことは違い、風は強くない。

室内の窓際にいれば、うたた寝をしてしまうかのような穏やかな天気。

高野はベンチコートを脱ぎ、ネックウォーマーを外した。

ジャンプしなら、右、左、右、左…と交互に足の裏でボールに触れていく。

幼い頃から行ってきた、自分の身体にボールの大きさと距離感を馴染ませる儀式。

ルーティーンと言ってもいい。

当然、高野くらいのキャリアになれば、そんなことをやる必要はないのだが、逆にこれをやらすには何も始められない。

それほど、彼の中に染み付いたものとなっていた。

ひとしきりそれをやったあと、リフティングを始めた。

意外に知られていないことだが、サッカー選手だからといって、必ずしもそれが上手いとは限らない。

『リフティングがへ…』と検索しただけで『リフティングが下手なサッカー選手』と出てくるくらいだ。

更に言えば、日本の小学生と欧州の同年代の子供とでリフティングの回数を較べた場合、圧倒的に前者の方が長い時間続けられる…という話もある。

つまり、その技術とプレーヤーの実力は、一致しないということ。…とはいえ、下手であるより上手いに越したことはない。

特に高野のように…フィジカルやパワーでプレーするのでなく、スピードやテクニクを重視するものにとっては、必要不可欠な技術。

頭、首の後ろ、肩、背中、腰、胸、太もも、膝、足首、踵、つま先  
…1ヶ所ずつ感触を確かめながらボールをぐるぐると回していく。

本人がその気になれば、何時間でもできるだろう。

「さすが、元日本代表!!」

「!？」

一瞬、声の方向に目をやった高野だが

「ばくか！お前と違って、オレはU—23代表だ…つつうの！…ほら、いくぞー！」

と言うと、ポーンと小さくボールを蹴り出した。

「わっ、急に!？」

と受け取った相手は胸でトラップすると、そのまま太ももで数回  
ボールは跳ねさせたが、長くは続かず、地面に落ちた。

「これが本当の…落とし球…なんて」

「なでしこのスーパーエースが言う台詞か？」

「我ながら、恥ずかしいとは思ってる…」

夢野つばさは頬を紅くした。

「あけましておめでとう」

「ああ、おめでとう」

2人はベンチに腰をおろした。

「多分、ここじゃないかなあ…と思って来たら、正解だった」

「まあ、オレにとつちや、聖地みたいなもんだからな…この公園は」

「順調に回復してるみたいだね」

「どうかな…リフティング（これだけ）で、試合ができるんだつたら…って感じだけど」

「全然ブランクを感じさせないね。錆びてない！惚れ惚れしちゃう」

「何千回、何万回ってやってきたことだから…力を使うわけじゃないし…」

「そうだね」

「…で、そつちは？」

「おかげさまで…7日に会見するわ」

「いよいよ、ブンデスリーガか」

「まだ、実感湧かないけどね」

「寒いだろ、向こうは？」

「うん。寒い！たぶんキミが来たら、凍死しちゃうよ」

「やだやだ…やっぱオレはスペインに行くわ」

「ふふふ…」

「あ、お前に報告しなきゃならないことが…2点ほど…」

「なに？」

「オレ、無職になった」

「知ってるわよ、それくらい。思い切ったことしたなあ…って。でも、キミらしいとも思ったよ」

「そう？」

「それはだつて…『夢野つばさ』じゃなくて『海外でのプレー』を選んだ人だもん。それくらいの決意をみせてくれなきゃ『割りが合わない』わ」

「あははは…自分で言うかな？そういうこと」

「やっと私もそう思えるようになった…ってこと」

「そつか…」

「それで？」

「？」

「もうひとつ」

「ああ…まあ…」

「当ててみようか？」

「えっ？」

「海未さんとお付き合いを始めた…でしょ」

ゲホッ！ゲホッ！

咳き込む高野。

「なんでわかるんだよ」

「わかるわよ、それくらい。長い付き合いだもの」

「そういうもの？まあ、いいや…えっと、その…なんだ…この間のクリスマスの時に、お互いの気持ちがお互いになって…まだ、何がどうって話じゃないんだけど」

「普通、そういう話を元カノにする？」

「一応、許可はもらっておいたほうがいいかと」

「…ばか…なんで私の許可が必要なのよ」

「そうなんだけどさ…」

「まあ、キミはそういう人だけどね。変に真面目っていうか、正直っていうか…」

「なんか、お前が知らないうちに『そうやってました』…っていうのも気分悪いだろうと思って…」

「二股掛けられてたなら腹も立つけど、一応、別れたあとのことだし…。これが『はるか』とか『めぐみ』とかだったら、どうやってたかわからないけどね」

「お、おう…」

「実は、キミのこと海未さんに託したのは…私なんだ。キミのことを守ってくれるのは、この人しかないって」

「ちよこっと、そんなことそんな話は聴いたけど…なんで？」

「女の…勘…ってやつ？」

「へえ…」

「…っていうか、やっぱり、そういえないと思うわ。あれだけ礼儀正しくて、純粹で、真っ直ぐで…。だからそうなったのなら、大事にしなさいよ」

「あ、ああ…」

「私と違って、冗談、間に受けるタイプだから」

「そうだね」

「特に下ネタは…キミはすぐ『おっぱいが』…とか言い出すし」

「お、おう…」

…その顔は、もう言ってるな…

さすが、つばさである。

よくわかつている。

「じゃあ、そろそろ…」

「ん？」

「これから初蹴りに参加してくるの」

「初蹴り？どこの？」

「ほら『大和シルフィード』って、下部組織もあるから」

「ああ、そう言えばそうだな」

「今、下は幼稚園児から、上は高校生まで…200人近くいるんだよ」  
「なんだかんだ言つて、一番しつかりしたクラブに成長したよな」

「逆に言えば、女子サッカーの人口は増えたけど、受け皿が少ないって  
いうことかな。地元の子だけじゃなくて、小田原とかから来てる子も  
いるし…」

「小田原？遠いなあ…付き添う親も大変だ」

「うん」

「でも、その中から、お前みたいなのでいっばいでてくれれば」  
「そうね」

「チヨモの責任は重大だ」

「精一杯頑張るわ」

「ああ…。初蹴り、みさきちゃんも来るの?」

「たぶん。ちよつと、ここのところバタバタしてて、確認はとってないけど…」

「そっか」

「じゃあ、行ってくる」

「行ってらっしゃい」

つばさは高野に手を振って歩き始めた。

…が…

直ぐに戻ってきた。

「どうした?忘れ物か?」

「うん、忘れ物…」

高野はベンチから立ち上がって、キョロキョロと周り見た。

「何も落ちてないけど」

「Happy birthday dear RISATO!」

チュッ!

「あっ…」

「明後日、誕生日でしょ?だから…私から最後のプレゼント…」

「…どうせなら…その続きをプレゼントして欲しいんだけど…」

「それは、海未さんに、お願い…し・な・さ・い!」

つばさは左手で、高野の額にデコピンを放った。

「…チヨモ…」

「？」

「世界を驚かせてこいよ！」

「うん！…梨里も…頑張ってね！」

2人はお互いにハイタッチを交わすと、つばさは公園をあとにした。

くっくくく



## 聖地に雪の戦士

「改めまして、あけましておめでとうございます」

彼女が『改めてまして』と言ったのは、LINEで挨拶済みであるからだ。

「おめでとう。今年もよろしく…いや』『…も…』はおかしいか。『これからよろしく』かな?」

「あつ、はい…こちらこそよろしくお願いいたします」

海未は、丁寧にお辞儀をした。

「そして、お誕生日おめでとうございます」

と言葉を続けた。

「ああ、ありがとう。無事、21歳の誕生日を迎えることができたよ。今年初めて顔を合わせた海未に、高野は照れくさそうに返事した。

「それにしても…」

「はい、なんででしょう?」

「綺麗だ…」

「!」

「その着物…」

と高野。

「振袖のことですか!!」

お約束のギャグ…。

「うそうそ、晴れ着の海未さん、めちやくちや綺麗だつて。女優さんみたいだ」

紺地に薄紅の花が咲き乱れる柄の着物で、帯は鮮やかな赤。

特技が日舞、趣味が書道や箏（そう）と言うだけあつて、和服を着慣れている感がある。

「そう言われると…それはそれで恥ずかしいのですが…」

彼女は顔を紅潮させた。

「オレも着物！…って思ったんだけどさ。持ってなかった」

「高野さんのスーツ姿、とても新鮮です」

「1年に1回、着るか着ないか…だからな。変？」

「いいえ！とてもお似合いです」

「ホント？良かった」

…まあ、そりやあそうだな…

…チヨモの見立てで作ったスーツだからねえ…

…海未さんには言えないけど…

1月3日。

晴天。

高野は幼い頃から「初詣」と言えば『八方除の相模國一ノ宮（はつぼうよけのさがみのくにのいちのみや）』である『寒川神社』に参拝することが多かった。

今年も『何事もなければ』そこに行くつもりであったが、今日訪れた場所は違う。

「ここが『神田明神』？初めて来たよ…」

と高野。

そちらにお伺いいたします…と海未は言ったが

「晴れ着で、神奈川の田舎まで出てくるのは大変だから」と断り、彼女の居住区に合わせ、彼が出向いたのである。

初詣の参拝客数ランキングは1位が明治神宮、2位が成田山新勝寺、3位が川崎大師だという。

それに較べれば、神田明神は10分の1くらいの人出らしいが、混雑していることには変わりない。

なにはともあれ、2人はまず、お参りを済ませることとする。

何百人と並んだ参拝客は、数回に分けられ少しずつ前に進み、30分ほどかかってようやく賽銭箱の前まで辿り着いた。

二礼二拍手一礼して祈願を終えると、押し流されるようにして本殿の脇に逸れた。

「せっかく来たんだから、ぐるっと一周歩いてみよう」

との高野の発案で、2人は境内の奥の方を散策し始めた。

高野は一箇所、一箇所、もの珍しそうに歩みを止めながら、建物や石碑を眺めていく。

「あははは…説明書きを見ても何がどうなんだか、さっぱりわからな  
いんだけどね…オレ、歴史とか苦手だし」

「正直言うと、私もあまり奥まではあまり来たことがないので、かなり新鮮な感じですよ」

「そうなんだ…おっ！『力石（りきいし）』だって」

「おそらく『力石（ちからいし）』かと…」

「なくんだ。『力石徹』の墓かと思っちゃったよ」

「どなたですか？」

「知らない？『矢吹ジョーのライバル』で…いや、ごめん、気にしないで」

「？」

高野は歴史には詳しくないようだが、誰の影響なのか、意外に漫画やアニメに造詣が深いようだ。

「海未さん。オレ、さつきからちよつと気になつてることがあるんだけど」

「はい、なんででしょう?」

「ここつてさ、やたらイラストが描いてある絵馬が多くない?」

高野は、自分が普段行く寒川神社にはあまりない光景に、違和感を覚えた。

「そうですね…。実はここは希が昔『巫女』のバイトをしていた所なのです」

「希?この間会つた、希さんのこと?」

「はい」

「へえ…」

「それでいつしか、ここが、sファンにとって、名所のようになりました…」

「そうなんだ…あ、あれ?…なんて言つたっけ?…聖地巡礼?…」

「はい、そう言うようですね。それがいつしか、ラブライブ出場を目指すチームとか、応援する人たちとかが、いわゆる願掛けに訪れるようになった…とのことみたいで…」

「なるほど。確かに良く見ると『ラブライブ』って文字が多いね…そんなでもつて、みんな異様に絵が上手い」

…絵馬だけに…

…絵がウマイ…

高野は海未が拾つてくれないので、自分の心の中で呟いた。

「私たちも、学校のみんなに『ラブライブ頑張れ!』という絵馬を沢山奉納して頂いて、改めて期待の高さを感じたといいますか、勇気をも

らったと言いますか…その時のことは今でもはっきり覚えています」「想い出の場所?」

「ええ…。…ですが…どちらかというところ、東側の神楽殿の前を私たちは練習場所にしていたので、そちらの方が思い入れがあります」

「練習場所?あれ?学校の屋上…って言っただけでなかつたわけ?」

「はい。主に行っていたのはその通りです。ですが、こちらでは体力トレーニングの為に『階段登り』を行ったりしております」

「階段上り?階段なんてあつたわけ?」

「ここからグルッと回って、参門の方に戻るのでありますが…入ってすぐ右手側に神楽殿がございまして、その前が私たちの練習場所でした」

「あ、じゃあ、ここを周っていけばいいんだ」

「はい」

2人は本殿の東側にある『銭形平次の碑』などを見ながら、歩いていった。

「おお!ここか!うわあ、これ結構きつそうだな」

高野は、海未が「想い出の地」と語った階段の上に立ち、下を覗いた。

『男坂』と言って、68段あるそうです。昔はここから海が見えたようですよ」

「海未さん、ここを登ってたの?」

「駆け登ってました」

「マジか!」

「はい!高野さん、私と勝負してみます?」

「冗談でしょ?」

「いえ。冗談ではございません。松の内が明けたら、ここで走り込みをするつもりでありますので」

「走りこみ?」

「チャリテイライブに向けての体力作りです。しばらくブランクがありますし、今回は曲数も増えるので…」

「偉い!!さすが海未さん。意識がプロだね、プロ!」

「高野さんのトレーニングに較べれば、たいしたことではありません」「いやいや…。それって海未さんだけ?」

「個々、忙しいので、無理強いはできません。それに今回のステージが如何に大事で、如何に大変かは各々わかっていると思いますので、それなり調整はしてくると思います」

「そっか…」

「一応、この走り込みには、ことりも穂乃果も誘ってはいるのですが…」

「えっ?ことりちゃんも、ここ、登ってたの?あんな華奢な身体で?」

「当たり前です!」

海未は少しムスツとした。

ことりとはバストサイズこそ違い(…いや、この差がとてつもなく大きいのだが…)身長、ウエスト、ヒップは変わらないのだ。

体重だって、500gと変わらない。

それなのに、ことりが『華奢』と言われたことに、納得いかないようだ。

「イメージ湧かない…」

「ああ見えて、芯は強いのですよ。練習で弱音を吐いたところは見たことありませんから」

間違ったことは言っていないが、少しトゲがある口調。

「へえ…」

しかし、高野は気付いていない様子だ。

「大雪でライブ会場に向かうのが困難だったときも『絶対にあきらめちゃいけない』と私たちに発破をかけたのは、むしろ、ことりでしたし」

「なるほど…」

「そういう意味では、穂乃果の方が心配です。お尻に火が点かないと動かないタイプなので…」

「大丈夫なんじゃない？海未さんの親友でしょ？やるときはやるよ」  
「そうなのですが…」

「あの…人違いでしたら、申し訳ございません」

「えっ!？」

高野とそんな会話をしている時に『一組の少女』が海未に近づいてきた。

ひとりは長めの髪をポニーテールにしており、もうひとりはツインテールである。

「μ，sの園田海未さんではないでしょうか」

「は、はい…」

「わあ、やっぱり!」

「お静かになさい!このようところで、大きな声を出したら、周りの人たちに気付かれてしまいます」

「あっ…お姉さま…ごめんなさい…」

「すみません。実は…私たち北海道でスクールアイドルをしております」

「!!」

「聖地と呼ばれるこのような場所で、まさかご本人にお会いできるとは思っておりませんで…」

「握手だけでもしていただけないでしょうか」

「えっ、ええ…私でよろしければ…」

「あ、ありがとうございます!!」

「北海道から、わざわざ? ひよっとしてラブライブ出場チームなので  
すか?」

「いいえ…去年は出場できたのですが、今年は予選で敗退してしま  
いました。なんとしても優勝して、皆さんと同じステージに立ちたかつ  
たのですが…」

「…それは残念でしたね…」

「ですが、友人が本大会に出場するので、彼女たちを一生懸命応援した  
いと思います」

「ご友人が?」

「はい。東海地区代表の『Aquors』つていいいます。リーダーの娘  
は、μ'sの『START:DASH』を観て、スクールアイドルを  
始めた…と申してました」

「そうなのですか」

「そもそも、なぜスクールアイドルを始めようかと思ったかという  
と、通ってる学校が廃校になっちゃうからだ」と

…!!…

…どこかで聞いたことがある話ですね…

「結果として、それは阻止できなかつたみたいですけど…ラブライブに  
優勝して、歴史に学校の名前を刻むんだ!…μ'sと同じステージに  
立つんだ!と燃えているのです」

「そう。今年のラブライブの優勝チームは、チャリティライブに出演  
できるのでしたね…」

海未は、当時の自分たちのことを想い出した。

「元日から練習されていて…私たちはその応援の帰りなのですが」

「そうですか…では、そのご友人に『頑張つて』とお伝えください」

「は、はい!ありがとうございます。きっと、喜ぶと思います」



「キミたち、カメラ持ってるの？」

突然の呼び掛けに驚く2人。

「!?」

「せっかくだから写真、撮ってあげようか？」

「えっ?あ…」

「これだけの人出の中で、海未さんを見つけて声を掛けてきたんだから、ご褒美をあげてもいいんじゃないかな?お年玉ってことで」

「…そうですね…」

「よ、よろしいのでしょうか…」

「ほら、そういうことだから、パツと撮っちゃおう。カメラ貸して」

「す、すみません」

と…ポニーテールはスマホをカメラ機能のすると、高野に手渡した。

「あ、ありがとうございます!」

「ついでにオレたちも撮ってくれない?」

「あつ、これは気が回りませんで…」

「これでよろしく…」

と今度は高野がスマホを渡した。

「あ、くれぐれもオレたちのことは、内密に頼むよ。こう見えても『お忍び』なので…って、全然隠してないけどね…あははは」

「はい、はい。私たちもアイドルの端くれですので、無粋な真似は致しません。むしろ、このような計らいに感謝申し上げます」

「神対応とはこのことです」

「じゃ、そうことで…」

「ありがとうございます!!」

2人は深々とお辞儀をすると、周りに気付かれないよう、人並みに紛れて姿を消していった。

くつづく

## 初めての経験

「ごめんよ。勝手なことをして」

高野は、先ほどの撮影の件を海未に謝った。

「い、いえ……」

「一応、オレもプロのサッカー選手だったからさ、なるべくファンは大切にあげなきゃ……ってこういう気持ちがあつて……」

「はい」

「黙って写真撮るヤツとかさ、馴れ馴れしく話し掛けてくるようなのは論外だけど、礼節をわきまえている人には、ちゃんと対応してあげたいな……って」

「そうですね。そういうところが高野さんは立派だと思います」

「しかし、アレだね……これだけ人がいて、案外気付かれないものだね」「いえ、私は別に有名人でもなんでもありませんので……」

「謙遜しちゃって……。『灯台もと暗し』ってヤツかな？まさか、その聖地に本人がいるはずないだろ……って言う」

「はあ……ですが、私はもとより、高野さんが気付かれないのが不思議です」

「オレ？そんなもんじゃない？スポーツ選手なんて、ユニフォーム着てなきゃ、意外にわからないものだよ。……それに、オレなんて既に忘れ去られた存在だし……」

「そんな寂しいこと……言わないでください……」

そう言われてしまうと海未も返す言葉がない。

「あ……悪い、悪い……こういうこと言うと、氣い使うよね。以後、注意する」

「はい」

「じゃあ、気を取り直して……もう少し歩きますか……」

「はい」

2人はおみくじを引いたり、お守りを買ったり、縁日の餅などを食べたりして、ひとしきり初詣のイベントを楽しむと、神田明神をあとにした。

「今日はお疲れ」

「いえ、高野さんこそ。こちらまで来ていただいて」

「いいの、いいの」

「申し訳ございません。本当はもつとご一緒したいのですが」

「でも、その格好じゃあ、何するにしても、なかなか難しいですよ」

このあと、どこかで着替えるなら別だが、振り袖姿では、何も出来ない。

「すみません」

海未は謝った。

「別に気にしないで。1年に1回のことでしょう？海未さんの貴重な晴れ着姿を拝めたわけだし…それはそれで仕方がないじゃん。次に会うときは動ける服装で…つてことで」

「はい、そうですね」

「それじゃあ、気を付けて」

「あ、待ってください！」

「ん？」

「肝心なことを忘れてます」

「なんだっけ？」

「今日は高野さんの誕生日です」

「そうだね」

「ですから…その…プレゼントが…」

「えっ、いいよ。そんなことしなくても…気持ちだけで充分だよ」

「そういうわけにはまいりません！本来であれば、高野さんが欲しいものを差し上げたいのですが」

「海未さん！」

「!!…破廉…いえ…その…」

「あ、ウソウソ…でもないか…。ほんとは『姫初め』といきたいところだけどね…晴れ着が着れなくなっちゃうとマズイしね」

…着付けなら、自分でできますが…

…言わないでおきましょう…

「きよ、今日は…その…まだ…心の準備が…」

「プツ！だから、冗談だって。いいよ、本気にしなくても」

「ですが…本気にします…」

プーツと海未は膨れた。

…あははは…

…海未さん、可愛い…

高野は、海未の恥ずかしがる顔が好きらしい。

「…あの…それで、これを…」

「これは？」

「私たちのオリジナルCDです」

「オリジナル？」

「はい。μ sとして公式に発表した曲は十幾つあるのですが、それ以外のもユニット用に作ったり、諸々の都合でお披露目できなかった曲がございまして…」

「へえ」

「恥ずかしながら…私のソロも入ってます…」

「おお！それは貴重だね。って言うか、そういうことでもしてたんだ？」

「はい。ユニットですとか、ソロですとか…企画としてはあったのですが、なにせ活動期間が短かったもので…」

「それはそうだよ。あれもこれもじゃ大変だよ」

「高野さんには、何か『身に付けるものを…』とも思ったのですが、好みもわかりませんし、安物をプレゼントするわけにもいかないので…。今の私には、これくらいしかできず申し訳ございません…」

「いいんだよ。海未さんは海未さんだから。そっか、うん…ありがとう、あとでゆっくり聴かせてもらおうよ」

「はい…あ、あの…次はいつ、お会いできますか」

「えっ？あ、ああ…そうだなあ…それは海未さんの都合次第じゃない？オレは基本的に『無職さま』だから、今は予定なんてどうとでもなるし。むしろ海未さんの方が、学校もあるし、ライブの練習もあるし…で大変でしょ」

「ええ…それはそうですが…」

「オレはいいよ。毎日でも会いに行くよ」

「そんな、無理はなさらないください」

「それでもないよ。チョモとなんか、日中会うのが難しかったから、結構夜中に…あつ、ごめん…イヤだよ、そういう話は。デリカシーがないなあ…」

「いえ、構いませんよ。つばささんのことは、避けて通れませんですから」

「構わないわけではないじゃん。ダメなところはダメって指摘してくれないと…」

「高野さん…」

「…っていうことで…また連絡ちょうだい。オレ、あんまり束縛する

の好きじゃないし、されるのも好きじゃないから…そんなにマメにメールだ、LINEだ…って交換するタイプの人間じゃないけどさ」

「はい。わかりました」

「ほんじゃー」

と高野は手を上げると、背を向けて歩き出す。

海未はその姿を見送った。

今日は、そこでここは終わるハズだった。

ところが…

高野は数歩進んだところで、膝から崩れるようにして、うずくまった。

後ろから狙撃されたようにも見えた。

「!!」

海未が慌てて駆け寄る。

「高野さん!!」

「だ…大丈夫だ…。ちよつと躓いただけだから…」

だが、そうでなかったことは、容易にわかる。

海未は、高野の顔のしかめ具合を見ても、ただ単に転んだわけではないと察した。

腰砕けというか…突如、力が入らなくなったような、そんな感じだった。

「立てますか?」

「…ああ…」

高野はそう答えたが、海未は肩を貸して、彼が起き上がるのを手伝った。

そして、近くにあったベンチまで連れて行った。

「高野さん!？」

「大丈夫だ…ちよつと、ピキツて…身体に電気が走ったっていうか、な  
んていうか…」

「それって…」

…まさか…

…後遺症ですか…

「心配ない…今まで、こんなことなかったから…ちよつとびっくりし  
ただけで…。でも、大丈夫…少し休めば…」

「病院へ行きましょう!」

「大丈夫だって…大袈裟にすることじゃない」

「でも!」

「前に医師(せんせい)からは、ちゃんと言われてるから。『痛みがゼ  
ロってことは、まずありえないって』。コイツとは、ずっと付き合っ  
ていかなきゃいけないらしいから…その度に病院なんて行ってられな  
いだろ?」

「だとしても、1回診てもらわうべきです!この近くに、真姫の病院があ  
りますから…」

「正月早々、迷惑を掛けるわけにはいかない」

「そんなこと言ってる場合ですか!!」

「まあまあ、落ち着いて!」

「何故、私が諭されなきゃいけないんですか?」

「ん?」

「高野さんの、身体のことですよ!」

「…そうだね…ふう…大丈夫…落ち着いたから…」

「高野さん…」

海未は、心配と疑いの眼差しで彼を見た。

それに気付いた高野は



「ダメだな…できれば海未さんのいないところで起きて欲しかったのに…まさかこんなタイミングで来るとは…」

と顔を伏せた。

「このタイミングで良かったです。私の知らないところで起こっていたら、手助けのしようがありません」

「海未さん…」

「そんな悲しい思いは…したく…ありません…。それに…何かあったら次は私が助ける番です」

「…そつか…そうだな…ありがとう…」

「いえ、そんな…」

「それにしても、びっくりした。一瞬何が起こったかと思ったよ」

「私も驚きました」

「でも、これで心の準備はできた。次はもう大丈夫」

…だと良いのですが…

海未は心配そうに高野を見る。

彼は彼女に向かって微笑むと

「じゃあ」

と帰宅した。

…本当に帰ってしまったので良かったのでしょうか…

約2時間後、高野から『無事に家に着いたよ』とLINEが入り、ホッと胸を撫で下ろす海未だった。

くつづく

## 意外と時間はありません

「…ということでは…何を歌うか、候補曲を決めたいと思います」

松の内が明けて、穂乃果の部屋には、海外にいる花陽を除き8人全員が集まった。

加えて今日は、スーパーバイザーとして雪穂もいる。

その彼女が『ファンが希望する曲』の現在の順位を発表した。

- 1位：Snow halation
- 2位：Angelic Angel
- 3位：愛してるばんざーい！
- 4位：ユメノトビラ
- 5位：START：DASH
- 6位：KiRa—KiRa Sensation！
- 7位：No brand girls
- 8位：Dancing stars on me！
- 9位：Wonder zone
- 10位：僕らは今のなかで
- 11位：僕らのLIVE 君とのLIFE
- 12位：SUNNY DAY SONG
- 13位：これからのSome day
- 14位：Love wing bell

「少し前回から順位が入れ替わってますねえ」

「うう…凛がセンターの曲が最下位にや…やっぱり凛は人気ないなあ…」

「そういうことじゃないと思うわ。多分『これからのSome day』と『Love wing bell』は9人全員で歌ってないからじゃない？」

「はい。真姫さんの言う通りです。だからこそ『9人で観てみたい』との声も寄せられています…」

と雪穂。

「そういう意見もあるのでね」

「おお！それはいいことを聴いた。穂乃果、あのウエディングドレス、着てみたかったんだよねえ！」

「穂乃果が歌うつもりですか？」

「だつてさ、元々、私が歌う曲だったんだし…」

「またあ…お姉ちゃんはすぐ自分勝手なことを言い出すんだから」

「なんでよ…」

「ファン代表から言わせてもらうと、できればオリジナルに忠実であつて欲しいな…つて思うんだよね。変にアレンジを加えられると『聴きたかったのは、これじゃない…』感が強くなるというか…」

「わかるにゃ〜!!」

「だから、誰もお姉ちゃんの歌う『Love wing bell』なんて聴きたくないと思うよ」

「今年も雪穂は、姉に手厳しいですね」

海未は自分以上に、穂乃果に辛辣な雪穂に苦笑した。

「一方で、ライブだからこそそのアドリブとか…そういうのも嫌いじゃないんだけど」

と海未をスルーして、雪穂は言葉を続けた。

「む、難しいことを言うね…」

穂乃果が首を傾げる。

「えつと…何曲選ぶんやつたっけ？」

「最高8曲、最低5曲です」

希の問いに、海未が答えた。

「どれも思い入れがある曲だし、私たちが選ぶの…つて、結構無理があるわね」

「絵里、甘いわ」

「にゃ〜?」

「こういうものは、まずライブの構成を考えれば、ある程度は絞込みが

できるのよ」

「構成？」

「やっぱり最初はオーディエンスの心をガシツて掴まなきやいけないから、一番メジャーな曲」

「『つかみはOK!』ってヤツだね」

穂乃果が相槌を打つ。

「2、3曲目はアッパー系で盛り上げて、中盤は一旦、しつとりと聴かせる。メリハリが大事なのよ」

「そうですね。絵里の膝のことを考えれば、休む時間も必要ですものね」

「私の膝のことは気にしないでいいわよ…」

「そうはいきません！」

「そうやね。本番に倒れられても困るもんね」

一同が一斉に穂乃果を見ると

「たははは…」

と頭を掻いた。

「みんな、ありがとう。無理はしなようにするわ」

絵理が小さく頭を下げる。

「そして、最後はドカン!!と一気にボルテージを上げてクライマックスよー！」

「おお!カッコいい!」

「あと…アンコールの曲も用意しておくべきね」

「アンコール？」

「当然でしょ!!恐らくμsとして最後のステージよ!もうこれで見納めなんだから、アンコールが起らないわけじゃない」

「でも、にこちゃん…これμsの単独ライブじゃないにや」

「そんなことはわかってるわよ!でも。そこまで用意しておいた方がいい…ってこと」

「まあ『備えあれば憂い無し』とは言いますので…」

「雪穂は?他になにかある?」

「うくん…基本的には、にこさんの考え方でいいと思います」

「基本的には？」

「曲の新旧のバランスも考えて欲しいなって」

「新旧のバランス？」

「えへへ…新しい曲ばかりじゃなくて、最初の頃の曲も歌ってくれ  
ると嬉しいなって。ほら、μ'sを昔から応援していた者としては、  
ちよつとだけ新規ファンに対抗意識みたいなのがあるっていうか…」  
「なるほど。たまには言いこと言うね」

「穂乃果より、よっぽど頼りになりますけどね」

「まあまあ」

ことりは「また始まった」という顔で、海未を宥（なだ）めた。

「そうやね…それなら、まずは一旦、人気ランキングの上位で構成して  
見たらいいんじゃない？」

「はい、そうですね」

「にこちゃんの案でいけば…『Angelic Angel』が1曲目  
だね」

「うん。μ'sの名前が全国的に広まった曲だからね」

とことり。

「真ん中に『愛してるばんざーい!!』やね。卒業式の時みたいに、真姫  
ちゃんがピアノ弾いてくれたら、カッコいいんじゃないかな…」

「希、それよ、それ！真姫、頼んだわよ」

「ちよ、ちよつと、勝手に決めないでよ」

「ラストは『No brand girls』でドッカーンと」

「穂乃果ちゃんちの前でやった餅つき大会のときも、メチャクチャ盛  
り上がったよね。凛のクラスメイトもすごつく楽しかったって言っ  
てたよ」

「うん！手ぬぐい配って、ぐるぐる回してもらって！」

「そうね。あれは私も『テンション上がった』わ」

「うう…絵里ちゃん、それは凛の台詞にや…」

あははは…

いつもはメンバーの真似をする凛が、逆に十八番を取られて一同の  
笑いを誘った。

打ち合わせが終わり、帰宅の徒についた一同。  
海未にスツと寄ってきたのは、真姫と希だった。

今のところ、海未と高野の関係を知っているのは、この2人だけと  
である。

「どう？それで上手くいってるの？」

「は、はい…それが…高野さん、インフルエンザに罹（かか）ってしまっ  
て」

「おやおや、それは大変やね…」

「お見舞いにいききたいのですが『感染したらいけないから』と…」

「それは仕方ないわね…。それが元で私たちに感染しても…だし…」

「はい。熱はすぐ下がったようなので、元気になったと仰ってました  
が…『インフルエンザどころか風邪すら罹ったことがないのに』と嘆  
いておられました」

「長い間入院してたから、色々、抵抗力が落ちてるのかも」

「そうやね…」

「あの3人…怪しくない？」

海未を中心に、真姫と希が肩を寄り添い合いながら歩く姿に、ここ  
が疑問をぶつけた。

「やつぱり、にこちゃんもそう思うにや？」

凜も同じことを考えていたらしい。

「えくそうかなあ？」

「ことり、アンタの目は節穴？」

「？」

「μ，sの長い歴史に置いて、今だかつて、あのスリーショットを見た  
ことある？」

「うくん…そういえば…」

「別になくんにも怪しいことなんか、あらへんよ」

「希!?!…あ、相変わらず、地獄耳ね…」

「ウチはただ、海未ちゃんと真姫ちゃんに『密かに新曲作ってたりしてないやろね?』って訊いただけやから」

「し、新曲?」

「安心しい…って言ったらいいか、残念ながら…なんかわからんのやけど…それはないって…」

…さすが希です…

…こういう時の頭の回転の早さは天下一品です…

海未がそう思う一方で…

…新曲か…

…イチから覚えるのは面倒だけど…

…それを作り上げていく過程も、実は楽しかったりするのよねえ…

そこにいた面々は、口にこそしなかったが、希の言う通り『残念な気持ち半分』…そんな表情をしていた。

くつづく

Driving a Go! Go!

「大きいお車ですね」

エルグランドの助手席に乗り込んだ海未は、車内をグルツと見回した。

「スポーツカーみたいなのを想像してた？」

「いえ、そういうわけでは…」

「あ、これでも、最高クラスの特別仕様車で、あれこれ手を加えてるから…なんだかんだで『両手』くらいはするんだけどね…」

ハンドルを握っている高野は、あはは…と笑ったが、聴かされた海未は飛び上がるほど驚き、声を失った。

「ん？どうかした？」

「よ、よろしいのでしょうか…私がお乗りして…」

「全然、全然…その席にたまに『うちの親』も座るし」

…当然、つばきさんも…

「ん？」

「あ、いえ…座り心地が…素晴らしいです」

「でしょ？そこは一番拘（こだわ）ったところだからね！」

海未がシーベルトを締めたのを確認すると、高野はアクセルを踏んだ。

2月14日…水曜日。

平日ではあるが、現在『無職』の高野と、大学生の海未なら、予定を合わせることは、そう難しくないことだった。

待ち合わせた東京駅で海未をピックアップした高野は、久々のロングドライブに気分が良さそうだ。



「楽しそうですね？」

「ん？オレ？…オレ、無趣味でさ…まあ、車が唯一、息抜きできる時間なんだよね…。だから、無駄に金掛けちゃって…。一点、豪華主義…ってヤツ？もちろん『速い車』に興味がないワケじゃないけど、そんなのに乗って事故ったら元も子もないし…乗り心地と安全面重視ってことで」

「そうなのですね…」

「それに…好きな人とドライブだし、楽しくないわけ、ないでしょ？」

「…はい…」

海末は少し俯いて、小さな声で答えた。

…まあ、でも、コイツはいずれ手放すことになるんだろうなあ…

プロ選手として復帰できる保証はない。

イザとなれば、売ることも考えなくなればならない…と高野は思っていた。

「あ、そうだ！」

と、思い出したように彼はハンドルのスイッチを操作すると、無音だった車内に曲が流れ始めた。

「!!」

音楽には興味が無い、疎い…言っている高野だが、その印象を覆すほどハイクオリティな音が車内に響く。

それはまるで、上質なコンサートホールにいるかのような臨場感で…海末はそれが如何にいい音響設備（つまりスピーカー）であるか、容易にわかった。

なるほど。

少なくとも『アーティストの彼氏』だった男だ。

海未の前に…永らく助手席に座っていたであろう『彼女の為』に、それなりに…いや、そこを強く拘ったのだろう。

流れてきたのがクラシックであれば、シートのホールド感と相まって、あつという間に深い眠りへと落ちていける。

そんな安らぎの空間になりえた。

だが、海未がハツとしたのは、流れてきた曲が『クラシックではなかったから』だ。

「この間もらったCDだよ…」

「本人の前で掛けますか!」

「ん?」

「恥ずかしすぎます…」

「なんで? 2週間後には、5万人の前で歌うんでしょ? 別にオレが聴くぐらい、どうってことないでしょ…。それに、その為にCD貰ったんだし」

「それはそうですが…」

「この曲、格好いいよね! ラテンぽいっていうか、ブルスが利いてて、ノリがよくて…タイトルなんだっけ?」

『あ・の・ね・が・ん・ば・れ・!』です」

「あつ、そっか! それで…特に間奏の…ここ! ここ好き!」

「…歌詞じゃないのですね…」

「ん? なんと言った?」

「い、いえ…あ、ありがとうございます…」

「あ、この曲も好き」

…その曲はことりと花陽のユニット曲です…

『♪好きですが、好きですか…』こんなこと言われたら『好きです！』ってすぐ答えるよね」

「はあ…」

「…でも、ドライブの時の曲じゃないかな…デレデレしちゃって、集中出来ない…」

…なんですかそれは…

…勝手にしてください…

呆れる海未。

そんな気持ちを知ってか知らずか

「やっぱ平日だね！空いてて走りやすい。天気もいいし、まさにドライブ日和」

と高野はご機嫌だ。

ところが…

車が湾岸線に入ったところで、点滅したハザードの波が、前の方から押し寄せて来た。

高野も、それに合わせ後続の車に合図を送ると、アクセルを弛め、ブレーキを踏んだ。

「渋滞…ですか…」

「うん…なんだろう？ナビにもまだ情報入ってきてないから…これが自然渋滞なのか、事故渋滞なのかわからないけど…」

「慌てなくて良いので、安全運転をお願いします…。事故は渋滞中に起きやすいとも言いますし」

「そうだね…。でも、何が原因かは知りたいよね…」

と高野は、車内をFMラジオに切り換え、交通情報が流れるのを

待った。

その間に数台のパトカーと救急車が、後ろからやって来て、路側帯をすり抜けて行く。

そして約10分後：ようやくそれが『3km先で起きた車3台が絡む事故で、通過に1時間以上掛かる』とわかった。

「わあ…やっぱり『やったばっか』か…」

「先程の救急車などは…」

「これだろうな…」

「事故は…イヤですね…」

「どんなに気を付けてても『もらい事故』ってあるし、オレだって、起こさないとは言い切れないけど…」

「はい」

「3km先か…」

「どうなさいました?」

「いつもこういう時思うんだけどさ、3kmなら時速60kmで3分でしょ?つまり、あと3分早くそこを通過していれば、渋滞に遭わなくて済んだわけじゃん」

「理屈上ではそうなりますね…」

「その3分の差で1時間が無駄になるか、ならないか…その1時間で、オレたちの人生が変わるんだから、不思議だと思わない?」

「人生は言い過ぎじゃないでしょうか?」

「そうかな?だって、3分前に通過した車は…オレたちと目的地が同じだった…と過程してだけ…もう10分か、15分後にはそこに到着するわけでしょ?少なくとも、ストレスは発生しないよね?」

「はあ…」

「一方『期せずして』渋滞に巻き込まれたオレたちは、どうしたってイライラしちゃうだろう?『あはは、渋滞、マジ最高!』ってヤツはあんまりいない」

「ええ、まあ…」

「どんなに仲がいいカップルだって、こいつに嵌まりや、段々、雲行きが怪しくなってくるものよ」

「そういうものでしょうか…」

「挙げ句の果ては『計画が杜撰』とまで、言われかねない。『だから、電車にすれば良かったのに…』とかね。あ、本人の名誉の為に言うけど、チヨモの話じゃないよ。あくまで一般論として…ってこと」

「私は別に…何も…」

「何の話だっけ？あ、そうそう、そんなイライラ、ギスギスした状態でデートしたって楽しくないじゃん。…で、それが原因で別れちゃうことだってあるわけでしょう？」

「ない…とは言えないのでしょうかね…」

「…ってこと」

「…高野さんは、常にそのようなことを考えてらっしゃるのでしょうか？」

「別れるとか、別れないとか…ってこと？」

「いえ、そうではなく…『もしもの世界』と申しますか…」

「海未さんは、そういうこと考えたり

しない？全然、大きなことじゃなくてもさ」

「時折はありますが…」

「『バタフライ効果』って知ってる？」

「はい！」

「ああ、さすが海未ちゃん！小学生の頃、漫画なんかでそれを見てさ…それから、その手の話にスッゲー興味持ちちゃって…。『風が吹けば桶屋が儲かる』とかさ。突き詰めれば、オレのゴールひとつで…海未ちゃんの歌声ひとつで世界が動くわけじゃん」

「私にそんな力は…」

「でも、蝶の羽ばたきひとつで、嵐が起きるんだぜ。あり得ない話じゃない」

「私はともかく、高野ならできると思いますよ」

「海未ちゃんだって」

「私は…」

「いや、もう動かさしちゃったか」

「えっ?」

「μ, s となって…スクールアイドルのカリスマになって…μ, s のファンは元気とか勇気をもらい、そのパワーが日本経済を支えていく…」

「大袈裟です」

「そうかな? 間違っちゃいないと思うけど」

「クスツ」

「ん? どうかした?」

「いえ…やはり高野は面白い人です。単に格好いいサッカー選手ではありませんね」

「それって褒められてる?」

「はい! とても!」

…お話しをされていて飽きません…

「ヒュー…理屈っぽい…って言われなくて良かったよ」

トロトロと進む前の車と距離を測りながら、高野は口笛を吹いたあと、そう嘯(うそぶ)いた。

くつづく

細かいことが気になるのが、オレの悪い癖

渋滞で車が動かない間、点けっぱなしにしていたFMラジオから何曲か流れたあと、番組のコーナーが変わり、DJがニュースを読み上げ始めた。

『まずは嬉しいニュースが飛び込んで来ました！女子サッカーの日本代表で、先月末、フランスに渡ったリヨンの緑川沙紀選手が、初ゴールを挙げました。』

『モンペリエとの試合で、2―1の後半20分に出場した緑川選手は、中盤でパスカットすると、そのままドリブルで駆け上がり、一気にペナルティエリアに侵入。DF2人をかわして右脚を振り抜くと、ボールは詰めてきたキーパーの脚に当たりながらもゴールに吸い込まれ、移籍後3試合目にして、嬉しい初得点となりました。』

『その後も、緑川選手の持ち味であるハードワークで相手にプレッシャーを掛け続け、チームの勝利に貢献。リyonは終了間際にも1点を加え4―1で快勝。ウィンターブレイク前の不調を脱し、3連勝と波に乗って来ました。』

『一方、ドイツのフランクフルトに移籍した夢野つばさ選手ですが、3試合連続でベンチ入りしたものの、出場はありませんでした。』

『チームも格下相手に力なく敗れ、引き分けを挟んで5連敗。地元メディアでは監督解任論も流れており…』

「明暗…分かれましたね…」

「ん？ああ…まあ、一筋縄じゃないかなってことだ」

「ですが、請われて移籍したのに、試合に出してもらえないなんて…」

「そりゃあ、色々事情はあるさ。『オフアアを出したのはフロントであって、監督じゃない』…ってことかも知れないし」

「どう違うのですか？」

「話すと長くなるけど…警察で言えば、キャリア組とノンキャリア組みたいな感じ？現場では犯人はAだって思ってるのに、上からの的外れな指示でBを追え！みたいな」

「ドラマの話ですか？」

「現実はどうだか知らないけど、観るでしょ？そういうの」  
「そうですね」

「サッカーの世界も同じでさ…現場からは『補強してほしいポイントはこのポジション』なのにフロントが引つ張ってきたのは『別のポジションの選手』で…『違うだろ〜！』的な」

「その場合、監督さんはその要望を伝えないのですか」

「ケース バイ ケースだと思うけどね。伝えた結果、やむなくその選手しか獲れなかった…ってことも、無きにしも非（あら）ず」  
「はあ…」

「監督は…責任は負わされても、権限は何も持ってないからね」  
「そうですね…」

「それに…『余所からポンツて入ってきた選手』より『自分が育ててきた選手』に『情が入る』ことだってあるだろうし…あ、それは選手も同じか。…コミュニケーションの問題とか…戦術の問題とか…そんなの無視して監督の好みか好みじゃないか…も大きいし。自分が選んだ選手じゃなきゃ、なおさらね」

「そうなのですか？外国はもつと勝利の為ならドライというか、ビジネスライクというか、そういうイメージがあるのですが」

「それはある意味間違いじゃない。特にサッカーは成績に対してシビアだからね。でも、そこはやっぱ人間のすることだから…。それに夢野つばさは…アジア人だからな」

「どう関係があるのですか？」

「いまだに人種差別的な感情を持つてる人がいるってこと…」

「差別…ですか？」

「偏見って言い直してもいい。あ、これは監督がどうの…とか、選手がどうの…ってことじゃなく、欧米諸国全体に言えることだけどさ。今



はだいぶアジアの選手も活躍してるから『薄まってきた』のはそうなんだろうけど…それでも時折、選手なりサポーターなりが大きな問題を起こしてる。FIFAもそのあたり、相当厳しくしてるんだけど…それって教育の問題だからね…。サッカー選手やサポーター以前の…人としてどういう教育を受けてきたか…って問題」

「スケールの大きな話になりましたね…」

「あつ、ごめん。つまらないよね、こんな話、聴かされても」

「いえ、そんなことはありませんよ」

「そういう偏見みたいなのは、恥ずかしい話、少なからずオレの中にもある」

「えっ?」

「例えば、オレのチームメイトに韓国人選手が『いた』。いや、やめたのはオレだから、彼はまだ『いる』んだけど」

「はあ…」

「オレは彼にプレーヤーとしては、何のわだかまりも持っていないくて、むしろ異国の地に来て、孤軍奮闘しているわけだし、リスペクトもしている。ところが『本国の人たち』があーだこーだと騒ぎを起こすたびに、オレのなかでは『面倒な国民だ』ってことがインプットされちまってる。『それとこれとは無関係だ』『スポーツに政治の話を持ち込むな』ってことは、頭ではわかってるけど、心のどこかで、彼らに対する嫌悪感みたいなものがある。練習してるときとかは、それに集中してるからそんなことはないけどさ…オフってる『ふっ』とした瞬間に思っちゃうんだよね…」

「…」

「もつと究極なことを言うよ。サッカーに限らずだけど、日本は今、急激にハーフとかクォーターとか…帰化した選手が増えてるじゃない?」

「そうですね。アスリートではありませんが、μ、sだと絵里もそうですね」

「ああ、そうだっけ…」

「それが？」

『日本人って何？』って思うことない？」

「えっ？」

「えっと…言葉を選びながら話す必要があると思うんだけど…長らく日本のスポーツ界は『柔よく剛を制す』みたいなのが『美德』ってされてきたでしょ。身体が小さいのをハンデとしながらも、スピードとテクニック…それと根性で立ち向かう…っていうのが」

「はい」

「実際、1980年代後半くらいまではそれで闘えてる部分もあったし、屈強な相手に挑んでいくことこそが、日本人としてのアイデンティティでもあった」

「はい」

「ところが、海外のスポーツのレベルはどんどん上がっていき、やがて、日本人がどう足掻いても『体格の壁』に太刀打ちできない時代がやってきた。否が応にもアスリートの大型化は避けられなくなっていく」

「…」

「時を同じくして、サッカーはJリーグというプロスポーツが誕生。恐らく日本国民が初めてオリンピック以外の世界大会…つまり『ワールドカップ』という名称を強く意識し始めたんじゃないかと思うんだけど」

「それ以外の競技にもワールドカップってありませんでしたか」

「あるよ。ラグビーなんかはサッカーなんかよりも、前に日本は出てくるし。けどラグビーをバカにするわけじゃないけど、大会規模が違うし…話題性ってことで言えば、全然違ったんじゃないかな…。ほ

ら、初めて日本がワールドカップに出れるかどうかって時の『ドーハの悲劇』とか」

「聴いたことはあります。あと少しのところでは出場できなかったのですよね…」

「ロスタイムにコーナーからのヘディングシュートが決まっちゃってね…。その時、ピッチにいたのがラモスさんんだけど、あの人っていわゆる帰化選手じゃん」

「えっ？…あつ、確かに…」

「サッカーはJリーグになる前から、南米出身の日系二世選手がプレーしてて…そのころはどちらかと言うと『技術交流』が主だったわけだけど…セルジオ越後さんとかもそうだったはず」

「そうなのですね…」

「そういう土壌があったから…かな…、その後、呂比須ワグナーさんとか、三渡主アレサンドロさんとか…サッカーは他の競技に較べれば、割と早い段階で帰化選手の日本代表入りが進んだんだ」

「さすがにお詳しいですね」

「でも、親父に言わせれば『相当な違和感があった』ってさ。『見た目日本人の二世』ならまだしも、明らかに異国の容姿の人が『日本代表』…って。今のオレたちでは理解できない感情だし、外でそんなこと言おうものなら、袋叩きにされるだろうけど…」

「そうですね」

「それから30年以上経って、今やどの競技にも普通にハーフとか、クォーターとかの『日本代表選手』がいるわけじゃん。日本の国技、お家芸だっていう柔道でさえも」

「はい。ここ数年特に増えましたね」

「それだけ日本の国際化が進んだ…ともいえるし、世間もハーフの人たちに対する偏見がなくなっただってこと」

「ええ…」

「世論だけでいえば『海外の血をどんどん増やすべきだ』みたいな声も散見される。『日本人そのものの体質改善をしない限り、世界で戦うことはできない』って声も」

「わからなくはないですが…」

「だとすると『日本人って何?』ってことにならない?」

「あっ…」

くっくくく

私は誰でしょう？知りたくなっただでしょう？

高野は前の車との距離を保ちながら、言葉が続けた。

「体格的な優位性ってことで、仮に……ってするけど『欧米人と日本人の子』が『1／2』として……その子が欧米の人と結婚して生まれた子供が『1／4』、さらにその子が欧米人と結婚してできた子供は『1／8』？……つまり『最初の日本人』からすれば『ひ孫』になるわけだけど……7／8が外国人のDNAでも、日本で生まれ育てば『日本人』なんだろうか？」

「それは……」

「ちよつと想像してみてください。何十年後かに、海未ちゃんが弓道を教えようとして……日舞でもいいや」

「はあ……」

「その教え子の容姿が、みんな『見た目 絢瀬絵里さん』なの。海未ちゃんみたいな大和撫子の中に、絢瀬さんがひとりいる……んじゃないんだよ？その逆。絢瀬さんしかない中に、海未ちゃんがひとりしかないの」

「……確かに、ちよつと……変な感じがしますね……」

「でも、近い将来、そうなる可能性があるわけだよな？」

「……」

「サッカーだって、もしかしたら『見た目 黒人選手』が11人、日本代表としてピッチに立ってる可能性が、ないわけじゃない」

「……はい……」

「ところが、これって海外じゃ、別に珍しいことでも何でもなくてさ」「えっ？」

「日本って島国だし、移民を積極的に受け入れているわけでもないし、植民地になったこともなくて……故にほぼ『単一民族みたいなもの』だから、今みたいな話になりや、さすがに違和感しかないけど……欧米各国なんて、もうグチャグチャじゃん。サッカーで言えばさ、フランス

代表とかオランダ代表とかは結構アフリカ系の黒人選手は多いし、ブラジル代表だって半分くらいはいるかも知れない」

「ええ…まあ…」

「だからそういうことを考えてると、最近思うんだ。日本代表、○○国代表って何？って。近い将来、ワールドカップとか、オリンピックとか国別対抗戦ってなくなるんじゃないかね？って」

「すごく興味深いことを仰いますね」

「そう思わない？グローバル化だ、ボーダレスだって叫ばれてる中で、○○人っていう定義を統一しなければ、なんでもありって話でしょ？」

「はあ…」

「話は少し逸れるけど、既に卓球なんかはさ、欧州の団体戦出場3人のうち2人が中国からの帰化選手…みたいな。どの国が出てきても、中国からの帰化選手しかいない…なら、国別の争いにする必要ないよね…って」

「サッカー以外にもお詳しいのですね」

「あ、親父の影響だね」

「でも、仰ってることは、なんとなくわかります」

「ホント？まあ、海未さんならわかってくれるんじゃないかと思ったから、オレも話してるんだけどさ」

「はい」

「それと、もうひとつ危惧してるのがあって…」

「なんでしょう」

「『普通の日本人であることが、差別される』時代がくるんじゃないか…ってこと」

「えっ？」

「まず『普通の日本人ってなんだよ』…って話は置いておいて…さっきの話に戻るけど、良質な体格的DNAを求めていくには、欧米人の血を濃くしていけばいい…」

「そう単純ではないと思いますが…」

「そう！そうなんだ！ハーフやクォーターの人が、必ずしも全員トツ

プ選手か？っていうというと、そうじゃないところが面白いんだけどさ。サッカーでも一応、代表になった選手はいるけど、世界レベルかどうかというところ…。いや、オレが言うのも失礼な話なんだけど」

「何か原因があるのでしょね？」

「そうとなると、本人のやる気とか環境なのかな…とも思うけど…。ただ『日本人の骨格・肉体改造論肯定派』は、今の時代決して少なくないと思うんだ。そして、その考えが主流になって『日本人同士の間でできた子供など、役立たずだ』なんてことになったら？」

「！」

「『選民思想』ってヤツ？」

「まさか…」

「ガンダムに出てくるギレンとザビは『スペースノイドは選ばれた民であり、ジオン国民はその優良種である』として、ブリティッシュ作戦を敢行し、地球圏の人口の半数を死に追いやった」

「ガンダムのことは良くわかりませんが、仰っていることはなんとなく理解できます」

「戦後は…ハーフとは言わないで『混血児』とか『あいのこ』って呼ばれてたらしいけど、それが原因でいじめとか差別とか相当あったらしいんだよね。それがそのうち逆に『そうじゃないこと』が理由で、虐げられる日がくるかも」

「…だとすれば、それはホラーですね…」

「でも、その虞（おそれ）がない、わけじゃない」

「…」

「それでね…一番初めの話に戻るんだけど」

「なんでしたっけ？」

『日本人って何?』

「あ、はい…」

「園田さんって、ご先祖様、何代先まで遡れるの?」

「さあ、どうでしょう?…家計図はあるようですが、しつかりと見たことは…。私のはつきりと認識しているのは6代くらい前ですが…」

ヒューと高野は口笛を鳴らした。

「さすが、良家のお嬢様…家計図があるんだ…」

「よしてください…それがどうかしましたか?」

「オレは昔、高野って苗字の由来を何気なく調べたことがあつてね…そうしたら『紀国造(きのくにのみやつこ)あるいは百済族の高野朝臣(たかののあそみ)の子孫』って出てきたんだ」

「いずれも7世紀前後の豪族ですね」

ヒューと高野は、再び口笛を鳴らした。

「すごいね!」

「その辺りは私が専攻している日本文学の、守備範囲でもありますので…」

「へえ…なら、百済とは?」

「簡単に言えば古代の朝鮮半島にあった国家の名前とでも言えばよいのでしょうか」

「正解!…つてことは、高野の名前のルーツが本当にそこにあるとすれば、オレの遠い遠いご先祖さまは朝鮮からの『渡来系帰化人』…つてことになる」

「…」

「もしかしたら、今、あっちにいる人たちと、ご先祖様は同じかもしれないってこと」

「そうかも知れませんが、そうじゃないかも知れません。ですが、そんなことを言えば…」

「だよね。初めから日本列島にいた人は誰か?…つてことになっちゃう」



「はい」

「だから、日本人の定義って何？ってなる。法律上の話じゃなくてね」  
「…」

「つまり、オレは『見た目 日本人』らしい人たちが何代か交わって…結果、日本で生まれて日本で育ったから『日本人だ』と思って生活している人』ってことなんだよねえ」

「とても複雑な話になりました…」

「あははは…そう思う。オレも自分で話してて、収集が付かなくなってきた」

「とても興味深いお話でした。それに高野さんがとても面白い人だということも、よくわかりました」

「そう？」

「ですから、お話を聴いてて飽きなかったですし、渋滞中もイライラせずに済みました」

と海未はニコツと笑った。

「海未ちゃんは、少し変わってるわ」

「なぜです？」

「普通、こんな話をしたら『引く』でしょ…。2話も使ってするもんじゃない」

「なんですか？2話…って」

「あ、いや…」

「…そうですね…人種とか、民族とか、国家とか…そういうもので争ったり、優劣をつけたりというのは、もしかしたら不毛なことなのかもしれないですね…」

「…っていうと『ワールドカップいらねえじゃん』ってことになっちゃうんだけどね」

と高野は笑った。

「ありやりや…これは随分と派手にやらかしたねえ…」

高野のエルグランドが事故現場に到着する。

3車線の道路は1車線に規制され、それが500mほど続いていた。

車3台が絡む事故：とラジオでは言っていたが、おそらく、その最初の車であろう：原型をとどめていない『それ』：が、レッカー車に吊り上げられている最中だった。

その前方に、巻き込まれたと思われる車が2台。

こちらにも、側面：あるいは後方が激しく損傷しており、その衝撃の強さがわかる。

既に救急車は立ち去ったあとのようだが、お亡くなりになった方が出たと思わせるには充分な『惨状』だった…。

くつづく

## 海未の覚悟

首都高を降りた高野のエルグランドは、左にハンドルを切ると、目的地をグルッと周りこむようにして走り、駐車場へ辿りついた。

元々の到着予定時間は開門の30分前までであったが、事故渋滞の影響で1時間半遅れ：今は10時になろうとしていた。

「平日だっていうのに、こんな混んでるんだ…」

と高野は、駐車場の車の数を見て呟いた。

「いえ、平日なので、この程度かと…」

「そうなの？ふくん、暇人が多いんだね」

「日本全国、土日が休みではありませんから」

「なるほど。それは確かにそうだ」

2人は車を降りて、園内に向かう。

「何年ぶりだろう？中学の遠足で来て以来だから…『高野梨里、6年ぶり2度目の来場』…」

高野はまるで、ワールドカップの出場国をアナウンスするかのよう  
に言った。

「6年ぶりですか…つばささんとは？」

「来てない！来てない！ヤツはチームメイトとかと来てるみたいだけ  
ど…」

「遊園地自体は？」

「まあ、それは何回か…でもここは、ほぼ初心者って言うていい。…と  
いうことで、今日は海未ちゃん、よろしく！オレは黙って後ろをつい  
ていくから」

「はい、かしこまりました！それではまず、目ぼしいアトラクションの  
ファストパスを取りに回しましょう」

「お、おう…」

「高野さんは、苦手なものがありますか？」

「煮物はあまり好きじゃない」

「アトラクションの話です」

「苦手なもの？乗り物ってこと？」

「はい」

「全般的に回転系は得意じゃない…コーヒーカップとか。目が回る…  
とうよりは、気持ちが悪くなる」

「メリーゴーランドとかは？」

「それくらいは平気だけど、この年齢の男が乗るものじゃないでしょ」  
「そうでもないですよ。ここに来たら、老若男女関係なく、皆さんは  
しゃいできますので…」

「ま、まあ…」

…確かにオレより（年齢が）上の男の人でも、楽しそうに被り物し  
てるもんなあ…

…オレにはできん…

「帽子買います？」

「い、いや、オレはいい…。そういう海未ちゃんは？」

「わ、私もそういうのはあまり…」

「だよね！」

「はい…」

2人はお互いの顔を見て笑った。

「ちなみに高野さん…ジェットコースターは？」

「そこまで苦手ではないと思うけど…」

「ちなみに以前いらっしやた時は、何に乗られましたか」

「どこも混んでて、あんまり乗ってないんだよね…えつと、確か…ああ

『It's a 相撲 world』！」

『Smaller』です」

「…とか…『ボーンヘッドマンション』？」

『ボーンテッド』…ですね」

「ああ、あとあれだ！『バックドラフト』」

「それはここではありません…」

「…熊が歌うアトラクション…」

「はい、それはあります」

「…で、寝た記憶がある…」

「うふふ…本当に何も乗ってないのですね…わかりました。では行きましよう！」

丁度、園内では午前のパレードが行われる時間であったが、それには目もくれず、あちこちと走り回る。

『仕切り屋 海未』の本領発揮！というところか。

そして

「少し早いですが、お昼を食べてしましましょう」

と高野をランチに誘い、ひとしきり腹ごしらえをした。

「海未ちゃんも、こういうところって好きなんだ？」

「私もしょっちゅうは来ませんが…年に1〜2回程度でしょうか…。童心に帰る…といいますか、来ればつい無邪気にはしゃいでしまいます」

「へえ」

「なんですか？意外…という顔をされていますが…」

「どつちかといえどインドアのイメージだし、常に冷静沈着な感じだし、海未ちゃんがそうしてる姿が想像できないなって。お化け屋敷とか入っても、逆に退治しそう」

というと、その姿を脳内に投影したのか、高野は笑い出した。

「あ、高野さん。それは酷いです。こう見えても、私、怖がりなんです」  
「嘘？」

「本当です。その…お化けだとか、幽霊だとかは、非科学だと思えますし、信じてはおりませんが…それでもやはり、そのような話は、あまり気持ちの良いものではありません」

『悪霊退散!!エイ！エイ！』って言いながら、御札を貼ったり

「しませんー！」

「矢で射貫（いぬ）いたり」

「しません！」

「炊飯器の中に閉じ込めたり」

「しません！ってなんですか、それは…。勝手に変なイメージを付けないでください」

「あははは…海未ちゃん可愛い」

「ぶっ！…と、唐突に何を言い出すんですか！」

「良かった、良かった。元気になってくれて、本当に良かった」

「高野さん？」

「さて、お昼も食べたし、遊びますか!!…ってどこから周るかわかんないけど」

と高野はテーブルの上のゴミを片付けて、席を立った。

「最初は『ステッチ・エンカウンター』ですね」

「なにそれ？」

「画面の向こうにいる『ステッチ』が、お客さんと直接会話して、盛り上がるというアトラクションです」

「へえ」

「前回、来たときは穂乃果が弄られて、それはそれは大変なことになりました」

「そうなんだ。確かに彼女、そういうの物怖じしなさそうだもんね…」

「はい…あ、ここです…」

「いやあ、いっぱい乗ったし、いっぱい見たねえ。お土産も買ったし…これでオレは、当分の間ここに来る必要はないかも…ってくらい」

「はい。なんだかんだで10時間近くいましたから」

「あ、でも…海未ちゃんはまた来たいよね？」

「そうしたら、次は『シー』に行きましよう。こちらよりはグツと大人っぽくなります。私も向こうはまだ、あまり行っておられませんで」

「なるほど」

「あの…」

「ん？」

「私と1日いて…疲れませんでしたか？」

「全然、全然！正直、アトラクションはそれほど…だったけど、海未ちゃん見てるのは楽しかったよ。なんだっけ？初っぱなのヤツ…穂乃果さんがどうか言ってたら、海未ちゃんが弄られてるし」

「はい。ですが、そのせいで高野さんと一緒にいることがバレてしまいました」

「構わない、構わない。別に隠してることじゃないし…それに誰も気付いてなかったし」

「はあ…」

「なんか知らないけど写真も撮ってくれたし」

「それはそうですが…」

「カヌー漕いだら『お姉さん、競技やられました？メツチャ本格的ですよね？』とか言われてるし」

「…恥ずかしかったです…」

「確かにプロみたいな漕ぎ方だった」

「つい、ムキなつてしまいました…」

「スプラッシュマウンテンは、海未ちゃん、超ビショ濡れになってるし」

「どうして同じ席に座ってるのに、高野さんは濡れないのですか」

「日頃の行いの差ってヤツじゃない？」

「うう…納得できません…。お陰でこんなに派手なパーカーを着替えて買うハメになってしまいました」

「あははは…似合ってると思うよ。とても普段の海未ちゃんらしくな

いけど…っていうか、<sup>々</sup> sの衣装はもつと派手じゃん」

「あれはステージの上…と割り切っておりますので…」

「えく…じゃあ、プライベートでミニスカートとか履いてくれないの？」

「それは…その…」

「見たいなあ…生で！」

「もう…すぐにそういうことを言うのですから」

「ごめん、ごめん。でも、海未ちゃんが魅力的な人じゃなきゃ、そういう気にもならないよ。」

「あつ…と、とにかく、車で来て良かったです。この格好では電車で帰れません」

「車に乗ったらさ、濡れた服、バッグから出してね。後ろの席に置いて、エアコン入れときゃ、乾くでしょ」

「いえ、だいぶ乾いたと思いますが」

「いいから、いいから…」

「はあ、すみません…」

「あ、ねえ…あの観覧車って『シー』にあるの？」

「えっ？あれですか…いえ、違います。あれは『葛西臨海公園』の中の施設ですから、別物ですね」

「へえ」

「乗りたいのですか？」

「ううん。ただ単に、なんだろうな…って思っただけ」

「結構、間違えている人もいるみたいですけどね」

「そうなんだ…つと、車はここか。行き過ぎるところだった。ちよつと待ってね、大急ぎで車、暖めるから」

「あ、はい」

高野はエンジンを掛けると、すぐにエアコンの風量をあげた。

「海沿いだから、風は強いし、まだこの時期は寒いねえ」

「そうですね。春まではもう少しですけどね…」

「あつ！今日は…家まで送っていくよ」

「えっ？いえ、そういうわけには…」



「別に遠慮しなくていいよ。神田だっけ、御茶ノ水だっけ？あの近辺でしょ。東京駅で降ろすのも、家に行くのもそう変わらないじゃん」  
「そ、そうなのですが…今日は…その…」

「？」

「の、のぞ…の家に泊まると家族には…」

「ノゾキの家？」

「希です！」

「…あ、そうなの？…あ、なんだ、希さんの家に行けばいいんだ。だつたら早く言ってくれれば…結構遅い時間になっちゃったけど大丈夫？電話しておいたほうが良くない？」

「ち、違います！希の家にはいきません！」

「ん？」

「ですから…その…今日はバレンタインデーですし…初詣の時には…でしたので…」

「！」

「…と思ひまして…」

「…」

「…覚悟は…決めて参りました…」

「ぶっ！」

「!!」

「それは海未ちゃんらしくない冗談だなあ！そうだね、今日はバレン  
タインデーだね。でも嘘を付いていい日じゃない。それはエイプリ  
ルフルだ」

「それくらいのことには知っています」

「だったら、今すぐ希さんに電話して、泊めてもらうように頼んだ方が  
いい」

「高野さん…」

「気持ちはスツゲー嬉しい。なんなら、今ここで襲いたいくらい」

「あっ…」

海未は顔を赤らめた。

「でも、もし海未さんが本当にそう想ってくれてるとしても…ライブ  
が終わるまでは待とう」

「高野さん…」

『願掛け』みたいなものかな？」

「えっ？」

「いや、正しい表現かどうかはわからないけど…あと2週間ですよ？  
ライブ」

「は、はい…」

「今『しちゃう』と、それしか考えられなくなっちゃうよ」

「そ、そんな『ふしだら』なことには…」

「だよ。海未ちゃんに限ってね…とも言いきれないんだな…」

「…」

「悪いね。折角その気になってくれたのに…」

「あ、いえ…私の方こそ…少し焦ってしまつたみたいで」

「本当はね？メツチャしたいんだよ！今、ここでしちやいたいくらい」

「何度も強調しなくても…」

「でも周りの目もあるしね…」

「!?…ここであつて、この中ですか！へ、変態です!!」

「あははは…」

「わ、笑いごとではありません」

「そうだね…ごめん。オレがこういうこと言い過ぎるからいけないんだよね」

「あ、はい…あ、いえ…その…」

「まずは海未ちゃんは、ライブに集中！OK？」

「は…はい…」

「何？泣かなくてもいいじゃん…」

「す、すみません…なぜか涙が…私もワケがわかりません…」

「きつと、アレじゃない？『目がゴミに入った』ってヤツ」

「『ゴミが目に入った』です！」

「…」

「…」

「あははは…」

「ふふふふふ…」

「よし、じゃあ、車、出すよ」

「は、はい。よろしくお願いいたします」

それから数分後。

…海未ちゃん寝ちやつたよ…

…まあ、このシートで、この車内温度だと…

…そうなるよね…

…チョモも毎回このパターンだったし…

…にしても…

…色っぽい…

…やべえ、オレ、本当に変態になっちゃいそう…

くっづくく

花陽、危うし！

「…ということ、今年のラブライブは萌絵イチオシの『Aquor  
s』が優勝でした」

「別にイチオシだったわけじゃないわよ。注目はしてたけど」

関係者の特別室で、ラブライブ本大会の様子を見守っていた、水野めぐみと星野はるか、表彰式を眺めながら、会話を交わす。

「では萌絵解説員、ズバリ勝因は？」

めぐみがるかに、エアマイクを差し出す。

「他のチームが自滅した…ってところかな」

「手厳しいわね…」

「どのチームも大差はなかったと思う。でも、みんな『彼女たち』が予選会で見せた『ロンバク』に踊らされた感は否めないなあ」

「…っていうと？」

「よりインパクトを求めちゃったのよね、アレに勝たなきゃいけない…って。その結果、無理やり難しいことを取り入れようとして、崩れていった感じ」

「ところが今回、彼女たちは奇を衒(てら)わず、ストレートに勝負してきた、それが奏功した？」

「うん、それは評価していいと思う」

「それだけ？」

「歌も、パフォーマンスも及第点。9人っていう大所帯だし、まあ、よくやったんじゃない？」

「それでも納得してない理由は？」

「うーん…熱量…かな？」

「熱量？」

「注目してた分、厳しく観すぎてたのかも知れない…」

「気持ちはわかるわ」

「ちなみに言うのと…またμ、sとの比較論で、かのんには怒られるかも…だけど…」

「うん」

「μ、sは支えてくれた人々へ感謝の気持ちを歌にして、それをステージの上から観客席に投げた。彼女たちも…想いは同じだったかも知れないけど、それがステージの上で自己完結しちゃった。そんな感じ」

「抽象的すぎない?」

「そうだね、主観の問題。だから言ったじゃん、あくまでもμ、sとの比較論だって。だけど単年、単体で見れば、妥当な結果じゃないかな…とは思う…。かのんはどう観た?」

「概ね、萌絵と一緒に。他のチームの戦略云々は抜きにしても、華があったし、妥当だと思う」

「うん、かのんが言うならそうだね」

「個人的には『アンコールで披露した曲』の方が好きかな」

「さすが、かのん。激しく同意!一番、スクールアイドルっぽい曲だと思う…『青空ジャンピング ニーパッド』って言ってたっけ?」

「『Jumping heart』じゃなかったけ?」

「…だったかも…」

「よし!じゃあ、明日は一緒にステージに立つわけだし、ここは素直にお祝いに行ってくださいますか」

「今から?」

「ふふふ…手ぶらだけど。くれぐれもμ、sと較べて…とか言っちゃだめだよ?」

「言わないよう。そんな無粋な真似はしないって!」

2人は、表彰式が終わるのを待ってAquoursの楽屋へと向かった。

そして、翌日…。

ラブライブ優勝者が決定してから、19時間後。  
チャリテイライブの本番、5時間前。

会場の控室に入ってきたのは絵里だった。

「ごめんなさい、遅くなってしまって…」

そう言った彼女ではあるが、実は遅刻でもなんでもない。

むしろ、集合時間よりは1時間近く早い。

それでも、そんな言葉を発したのは、既にメンバーが集まっていたからだ。

「みんな早いのね」

「えへへへ…やっぱり、待ちきれないというか、ジツとしてられないというか…」

と言った穂乃果だが、様子がおかしい。

はじけるような笑顔ではない。

「私もそれで、早く出たつもりだったのだけど…みんなには負けたわ」  
絵里は不思議に思いつつ、何気なくそう言ったが…メンバーの反応が変だ。

なんとなく、空気が重い。

…本番前の緊張感?…

いや、それとはまったく別物であると絵里は直感した。

「どうしたの? なにかあったの?」

「…う、うん…大変なことが起きてるんだ…」

「穂乃果…どういうこと?」

「花陽ちゃんはまだ来ていないんよ…」

「えっ? それって…」

「本来なら午前中には空港に到着して、それから凜と合流する予定だったんだけど…向こうを発(た)つ時にエンジントラブルか何かがあったらしくて…」

凜は泣きそうな顔で、絵里に説明をする。

「それで間に合うの？」

「今、海未ちゃんが、空港に問い合わせてる」

この部屋に彼女はいない。

どこかで電話をしているのだろう。

「まったく、あの娘のトロさは、相も変わらずね」

「にこちゃん、そんな言い方ひどいにや…」

「そうだよ。悪いのは遅れた飛行機で、花陽ちゃんに責任はないよ」

こつりは凜の言葉に、同調した。

「わかってるわよ、そんなこと。でも、スケジュールは前々から決まっていたんだし、ライブの当日…それも本番直前に帰国って日程が、そもそもおかしいんじゃない？」

「にこつち…それは言ったらあかんよ…花陽ちゃんやって、ギリギリまで仕事の調整してくれたんやから」

「わかってるけどさ…わかってるけど…8人で歌うのなんて、アタシはイヤだからね」

にこは悔しそうに唇を噛む。

「…」

「お待たせしました！」

突如、扉が開いた。

入ってきたのは海未だ。

「どう!？」

「はい。結論から言うと、成田到着予定は今から3時間半後です」

「…っていうことは…ギリギリ間に合う？」

「いえ、穂乃果…荷物の受け取りとかもありますし、成田からここまでは、どんなに急いでも1時間近くはかかります」



「1時間近く…か…」

「それも順調に行つての話ですから…余裕を持って1時間半〜2時間と見たほうが良いのではないでしょうか」

「5分、10分なら開演を遅らせてもらうこともできるかも…やけど…」

「そこまではさすがに引つ張れないわね…」

希も絵里も困り顔だ。

「まずはA—RISEに相談してみるしかないんじゃない？」

今まで黙つて話を聴いていた、真姫が口を開いた。

「私たちは中盤以降に3回に分けての出演だけど、それを極力後ろにズラしてもらおうように頼んでみるしかないと思う」

「…そうですね…真姫の言う通りです。まずはA—RISEに事情を説明してみましよう」

「そうやね…。最悪、曲数を減らしてもらおうとか…」

「うん！わかった。海未ちゃん、行こう！」

「はい！」

穂乃果と海未は、控室を飛び出していった。

その2人が控室を出てしばらくしてからのこと。

ドアがノックされた。

「はい！」

絵里が返事をする。

「失礼します」

ドアが開くと、その向こうに数人の少女が立っていた。

「お忙しいところ、申し訳ございません。本日、ご一緒させて頂く『Aours』と申します」

「ラブライブの優勝チームの？」

「は、はい！」

「そう。優勝おめでとう」

と絵里。

「あ、ありがとうございます。そ…それで、一言、ご挨拶をと思いましたが…」

「…いいわ、入って」

「は、はい！ 失礼します」

千歌を先頭に、そろそろと9人が入室する。

「改めまして。私たちは静岡県にある浦の星女学院のスクールアイドル『Aquours』です。本日はお日柄もよく…じやなかった、憧れのμsさんと同じステージに立って、大変光栄であります」

「うふふ…そんな硬くならないでもいいわ。楽しくやりましょう」

「実は私、秋葉原に来た時に、偶然μsさんの映像を見て…それですごく感動しちゃって…普通の女子高生が、あんなにもキラキラしてて、可愛くて、格好よくて…私も超普通の女子高生だけど、μsさんみたいになれるかな…って思っ、ここまで来たんです。なので、今、目の前に本物のμsさんがいることが信じられなくて」

「そう言っ、て頂けると、私たちも今日、ここに来た甲斐があるつても、ね」

「あの私も一言、ご挨拶申し上げてよろしいでしょうか？」

千歌に替わって、進み出たのはダイヤだ。

「絢瀬絵里さま！」

「私？」

「小泉花陽さま」

「かよちゃんは今、いないにや」

「…それは失礼いたしました…」

「？」

「恐らく…ゴミの如き、私たち姉妹の存在はお忘れだと存じますが…」  
とダイヤは、ルビィを横に引、張つてきた。

「ゴミの如き?」

「いつぞやは、ご丁寧にサインを頂き、誠にありがとうございました。以来、その生写真は家宝と致しております」

「サイン?」

絵里は首を傾げた。

「えりち、覚えてるん?」

「あまりサインなんて書いたことはないけど…」

「絵里さまと花陽さまがファーストフードでお食事されているところ、無理やり、私と妹でお邪魔し…」

「ハラショー!!」

絵里は両手をパチン!と合わせ

「思い出したわ!解散直前の頃ね…確か静岡から旅行で来てて…お母様とお婆様とご一緒に…あの時の姉妹なの!」

と表情を崩した。

「さすが絵里さまです!!」

「ありがたき幸せ…」

ダイヤとルビィは、両の膝を床に付けると絵里を拝み仰いだ。

「これ、なにかの宗教?」

「さあ…」

ここに突然振られ、返答に困ることり。

「やめてよ、そんなことしないで。そう…あの時の姉妹がこんなに大きくなったの…私も歳を取るわけだわ…」

「な、何を仰いますやら」

「オー!ダイヤさん、ベリー ストレンジです」

「まあ、ダイヤにとってはある意味、神と等しいからね」

その様子を見て、鞠莉と果南は頭を掻いた。

「あ、あと…この人は『桜内梨子』って言うんですけど、なんと音ノ木坂出身なんです!」

「ち、千歌ちゃん!? 恥ずかしいから、そんなこと言わなくても…」

「音ノ木坂出身?」

「あ、あの…正確にいきますと、3月まで1年間、音ノ木坂にいて、4月から転校したので…出身というのは語弊があるのですが…」

「Aqoursのメロディーメーカーずら」

と花丸がフオローする。

「そうなんや」

「…ってことは、音ノ木坂でもピアノを弾いていたのかにや?」

「は、はい…」

「へえ、そうなの。まさかこんなところで、私の後輩に出会えるとは思ってなかったわ。大事に使われてたかしら、あのピアノ?」

真姫は梨子の目をまっすぐ見た。

「はい。きちんと、調律もされていましたし、今でもとてもいい音色を奏できます」

それを聴いて、軽く微笑む真姫。

「良かったにや〜! 真姫ちゃん以外、弾く人がいなかったから、その後のことを心配してたんだよね?」

「それは凜、真姫の私物だと思われていたんじゃない?」

「にこちゃん、何、それ? 意味わかんない」

「まあまあ、おふたりさんってば」

と、ことりが制する。

「あの…それで海未さんは…?」

申し訳なさそうに、千歌は小声で訊いてみた。

「ごめんなさい。穂乃果ちゃんと海未ちゃんと花陽ちゃんは、ちよつと用があつて、今は席を外しています」

こどりの返事を聴くと

「そうですか…」

と落ち込んだように彼女は呟いた。

「どうかした？」

「はい…実は今年のお正月に偶然、友達が神田明神で海未さんにお会いして…私たちのことを話したら『がんばってと伝えて』と言ってもらえたとのことだったので、どうしても一言お礼がしたかったんですが」

「そうなの？でも、今は…」

「そうですよね！わかりました！それは、また後にします」

「うん、ごめんね」

「あれ？でも、そうしたらことりちゃんも一緒にいたんじゃないかじゃ？」

「うん…初詣は、穂乃果ちゃんと3人で元日に行ったよ！」

「えっ？元日？あれ？理亞さんから連絡もらったの…って3日だったよね？」

「3日？」

「元日はマルたちの練習に付き合ってくれてたから、3日で間違いないズラ」

「じゃあ、2回行ったんだね」

「2回？1人で？」

「に、にこちゃん、別に今はそこ、どうだっていいことでしょ」

「そ、そうやね。真姫ちゃんの言う通りやん。そこは流すところやん」

「1人じゃなかったみたいですよ。一緒に男の人が…」

「千歌！」

「千歌っち!!」

「千歌ちゃん！」

「あっ！」

「海未に男？」

「高野さん？」

「ハラシヨー!!」

「つてことかによ？」

「真姫と希は知ってたのね？」

「そういえば、この間の帰り、3人でコソコソしてたにやあ」

「…」

「…」

希と真姫はお互いの顔を見合わせた。

そして、覚悟を決めたのは希。

「にこつち、凜ちゃん、ことりちゃん…そしてえりち…黙ってって、ごめん。ウチはクリスマスの時、偶然2人に会ってしまったてな…」

「そんな前からなんだあ」

ことりは呆然としたように呟いた。

「私は正直に言おうと、その少し前から海未に相談されて…」

「でも、今は大事な時期やんかあ。だから、落ち着くまでは、黙ってたほうがいいんやろうなあ…つて」

「でも、別に海未がそういう気持ちだったことは知ってたわけだし、聴いたところで驚きはしないけど」

「そうにや！…そうにや！…にこちゃんの言う通りにや」

「だけど…ひとりいるでしょ？…そんなことを聴いたら、なにもかも手に付かなくなっちゃいそうな人が…」

「あつ…」

真姫の言葉に、にこも凜もことりも絵里も、同じ顔を思い浮かべた。

「なるほど。ということは、ある意味、今、ここにあの2人がいなかった

たことは不幸中の幸いってことかしら?」

と絵里。

「そうやねえ」

「…ってことで、アナタたち。そのお礼の件やけど、海未ちゃんにはウチたちから伝えておくから、あとで会っても、くれぐれも秘密にしておいてや」

「す、すみません…変なこと言っちゃったみたいで…」

千歌は、深々とお辞儀をして謝った。

「それより、凜、さつきからすぐ気になってることがあるんだけど…」

「はい?」

「なんで、かよちゃんがそこにいるのかにやあ!」

「アタシも気になってたんだよねえ」

「ウチも」

「私も」

「ことりもです」

「そ、そんなに似てますか?」

突然注目を浴びた曜は、びっくりして一歩後ずさりをした。

確かにAqoursのメンバーからも、前々から似てるとは言われていた。

だが本人たちから、こぞってそう言われるとは思っていなかったのだ。

「似てるなんてもんじゃないにや。生き写しにや…」

「アンタ、身長は?」

「157cmです」

「1cm高いにや」

「誤差の範囲じゃない?」

と真姫。

「因みにスリーサイズは？」

「希！それはいくらなんでも失礼よ」

「いいやん、えりち。減るもんやないんやし」

「えつと82―57―81です」

「ごめん、無理やり言わせて…と絵里が目で謝った。

「かよちゃんは当時、82―60―83だったはずにや」

「今の花陽ちゃんは、もっと、おっぱい大きくなってるとんやけどね…」

「希！」

「名前は…なんて言うん？」

「は、はい。渡辺曜といいます。曜でいいです」

「曜さん…ひとつ相談があるんやけど…」

「はい」

「花陽ちゃんの代役になってくれへん？」

「よ、ヨーソロ…」

と言いかけて、曜は思い止まった。

「ええ!?!代役う!?!」

Aqoursの9人の大声が、控室に響き渡った…。

くつづく



## 代役ヨーソー

「曜ちゃんが！」

「代役う!?」

「すごいよ、曜ちゃん！」

「はい、まさかまさかの大抜擢ですわ！」

「がんばルビイです！」

盛り上がる千歌、ダイヤ、ルビイ。

「代役？私が？」

しかし、当の本人は困惑気味だ。

「希、それはいくらなんでも、失礼よ」

「そやけど、えりち…今、ここにいないのは花陽ちゃん…そして、ここにいるのがソツクリさん…いないのが凜ちゃんでも成り立たたんし、優勝したのがA q o u r s やなかつたら…やっぱり成り立たたんし」

「…なんか、ミステリー小説のトリックみたいズラ…」

「…これを『スピリチュアル』と言わずして何とするう!!」

「何か悪いものでも食べた？」

希の芝居掛かった口調に、ここは呆れながら、ことりに訊いた。

「ちゅん、ちゅん！」

彼女もどう答えたらいいかわからず、そう言つて誤魔化すしかなかった。

「すみません、訊きそびれましたが、なぜ花陽さまはいないのでしょうか？」

「まさか『漆黒の闇』へと葬り去られたとか?」

「善子は黙ってるズラ」

「ヨハネでしょ!」

「『漆黒の闇』? 『ヨハネ』?」

「あ、希さま、今のは気にしないでくださいませ」

と言ったあと、ダイヤは善子を睨み付けた。

「?」

「かよちゃんは、アメリカから今日の午前中に帰国予定だったんだけど、飛行機のトラブルでまだ、空港に着いてなくて」

「えっ?」

「それで穂乃果ちゃんと海未ちゃんが、そのことを相談しにA—RI SEのところに行ってるの」

凜とことりの説明を聴いて、A q o u r sのメンバーも、ことの重大さに気付いたようだ。

「間に合うんですか!？」

と千歌。

「それが…」

絵里は言葉を濁した。

「えりち…最悪の事を考えれば、頼んでみる価値はあるんじゃないかと思っくんやけど…」

「ちなみにアンタ、この中で歌える曲はある?」

と、ここはセットリストが書かれた紙を曜に見せる。

「はっ、私は全部踊れまっす!」

「千歌さんではありません！曜さんが訊かれてるのです」

「…たぶん、この曲ならイケると思います…」

と曜はその中の1曲を指差した。

「OKわかったわ！それなら話は早い」

「にこ…」

「絵里、この娘に迷惑かけるつもりはないけど、希の言う通り、最悪の場合は想定しておくべきだと思う。曲順を入れ換えて…あとは、この『にこさま』の超絶ラブリーなMCで時間を稼げば…」

「にこちゃんがMCなんてしたら、すぐにみんな寝ちやうにや…」

「なんですって!?!」

「にこー凛！…あつ、ごめんなさい…わかったわ…曜さん…と言ったかしら?」

「はい…」

「そういう事情なの…。もし良かったら…協力して頂けないかしら?」

「…」

「曜ちゃん!?!」

「ヨーソロー…であります!!」

「それは…OKって意味かしら?」

「はい。だって、自分たちの衣装以外にμsの衣装も着れるかも…ってことですよね?はい、やります!やります!頑張ります!」

「あ、ありがとう…」

急にテンションが高くなった彼女を見て、μsのメンバーは「?」  
という表情をした。

「あ、そうになったら、練習しておいた方がいいよね。曜ちゃん、楽屋に戻ろう!では、μsのみなさん、のちほど」

と千歌は、曜の手を引っ張るとドアを開け飛び出していった。

「ちよつと、千歌さん！」

「千歌つちー！」

「千歌ー！」

年長者3人が、次々に彼女の名前を呼んだが、戻ってくる様子はない。

「た、大変申し訳ございません。お騒がせいたしました…」  
と頭を下げるダイヤ。

「ううん…こつちこそ、変なお願いをしちゃって…」  
と絵里も頭を下げた。

「では、一旦自分たちの楽屋に戻りますので…」  
果南が音頭を取り、Aqoursのメンバーは一礼して部屋を出ていった。

「あの千歌っていう娘、穂乃果みたい…」

「えりち？…うん…そうやね。なんて言えばいいんやろ…猪突猛進？」

「うふふ…そうかも…」

「みんな！お待たせ！」

「お待たせしました！」

「…つて言うてたら、ご本人登場…」

「へっ!?穂乃果?…なにになに?…」

「…ということ、A—RISEには事情説明の上、出演順や曲順については、臨機応変に対応頂けるよう頼んできました」

「迷惑を掛けるわね…」

「何言ってるのよ!?元々今日は、私たちμsの為のライブみたいなものじゃない。それくらいのこととは当然でしょ!」

「…なんて、A—RISEの前じゃ、一言も言えないクセに」

「うるさいわねえ!」

「にこつちも、凜ちゃんもその辺にしときい。今は、そんなんしてる場合やないんよ」

「…ごめん…」

「…すみません…」

そのあともμsの楽屋には、一緒に出演するアイドルたちが、代わるがわる訪れ、彼女たちに挨拶をしていく。

そして、全員が全員『伝説のスクールアイドル』と対面できたことに感動し、興奮状態で部屋を出ていくのであった…。

「そろそろ落ち着いたかしら?じゃあ、私たちも準備を始めましょう!」

絵里がパン!パン!と手を鳴らすと、メンバーの表情が一変した。スイッチが切り替わった…そんな感じだ。

「花陽のことは心配だけど、今、考えても仕方ないわ。むしろ、このスリルを楽しみましょう」

「えりち…」

「スリルを楽しむ…ですか?」

「だってそうでしょ?泣いても笑っても、これがμs最期のステージなんだから」

「…そうだよ!うん!楽しもう!」

「穂乃果…」

「その…曜さんだっけ?その娘が歌ってるうしろから、花陽ちゃんが

出てきたら面白いよね」

「ご本人登場にや…」

「それはそれで趣旨が変わってしまいますが…」

「とにかく、アタシたちはできる範囲でベスト尽くす。この期に及んで四の五の言っても始まらないし」

「お客さんを笑顔にさせるのがアイドルだもんね？」

「ことり、わかっているじゃない！」

「その為には、まず自分たちが楽しむ…ってことでしょ」

「真姫ちゃんも随分ポジティブになったもんやね」

「あ、当たり前でしょ。何年あなたたちと付き合っていると思っているのよ」

「それじゃあ、改めて…言っちゃおうかな…」

「？」

「フアイトだよ!!」

チャリテイライブは、定刻より10分遅れで開演した。

オープニングはA—RISEの『Shocking Party』だ。

いきなり、ステージの上から吊られて降りてくるといふ、派手な演出。

少し焦らされたこともあり、会場のボルテージは一気に上がった。

「皆さん、こんばんは！A—RISEです!!」

どわ〜つと地鳴りのような歓声が、場内に響く。

「まずは私たちの代表曲『Shocking Party』を聴いて頂  
きました」

「今日はちよつと天気が怪しくて、みんなちゃんと来てくれるか心配  
だったけど…完全にフルハウスね！」

「凄い熱気だ…こっちも、みんなに負けないくらいのパワーで歌って  
踊るから…今日はよろしく！」

3人のアップがREDの巨大ヴィジョンに映されるたび、それぞれ  
のファンが彼女たちの名前を叫ぶ。

やはりA—RISEは、押しも押されぬせぬトップアーティストな  
のだ。

綺羅ツバサが今日のイベントの趣旨を改めて説明する。

「…そして、この呼びかけに、大勢のアイドル、アーティストが集まっ  
てくれました。どうか、それぞれのファン同士、尊重しあつて、争い  
ごとのないように…3時間と短い時間ですが、みんなで盛り上がって  
いきましよう!!」

と観客に訴えたあと、立て続けに自分たちのヒット曲を2曲披露し  
て一旦、掃けた。

※掃ける＝ステージ上から引っ込むこと。

替わつて、今、売り出し中のアイドルたちが、次々と登場。

今日の目玉はなんとといっても『A—RISE』『アクアスター』そし  
て『μ's』の競演だが、会場の観客たちは、彼女たちにも大きな声  
援を送った。

場内に設置された巨大ヴィジョンには、全曲歌詞が流れているの  
で、お目当てのグループの曲でなくても、メロディーを知っていれば  
口ずさめた。

実はA—RISEが一番気を使った部分だった。

特に昨年は、μ'sのファンと自分たちのファンが、ネット上で不毛な中傷合戦が繰り広げたという、苦い経験がある。

それ故、それぞれのファンが、敵対心を持って憎しみ合うのではなく、同じ仲間としてみんなで盛り上がってほしい。

その想いが、この歌詞テロップに現れていた。

おかげで『推し』だ『アンチ』だという争いもなく、穏やかな雰囲気の中で折り返しを迎えた。

後半戦のスタートはAqoursからだ。

ライブ優勝チームとはいえ、さすがにこの中であっては認知度は低い。

それでも彼女たちは今、持てる力を出し切り、臆することなく歌い切った。

少ないながらも、観客席からメンバー名のコールも聴こえた。

彼女たちにとっては、おそらくこれがAqoursとしての最後のパフォーマンス。

万感の想いを胸に、ステージを降りた。

ここで再びA—RISEが登場して、5分ほどのMCが挟まれた。

「…さて、続いては…来月、私たちの事務所からデビューする新人の登場です」

「実は彼女もスクールアイドル出身で、私たちとは旧知の仲なのよね！」

「とにかく歌が上手なんだ。その美声に酔いしれるがいい！」

3人に紹介されてステージに現れたのは『中目黒結奈』であった。

彼女の路線はアイドルではなく『シンガー』のようだ。

春から始まるアニメの主題歌として、そのサビはCMでも何度も流れているので、会場の観客も耳馴染みの様子だった。

彼女の透き通った声に、客席は静寂に包まれた。

聴き入っている…という表現が妥当だろう。



歌い終わった彼女には、万雷の拍手が送られた。

そして…

続いて、登場したのは『アクアスター』の2人。

ユニットとしてもソロとしても活躍しており、どの曲もヒットを飛ばしている…今回のライブの主催者A—RISEと並ぶ…若手アーティストの双璧。

彼女たちはまず…アクアスターとしてのデビュー曲…を披露したあと、はるかが自分のソロ曲を、めぐみの奏でるピアノで歌い…、めぐみも自分のソロ曲を、はるかが爪弾くアコースティックギターで歌い…会場を魅了する。

拍手が鳴り止むと、場内が暗転した。

おお〜!!

何か大きなことが起こる予感。

胸騒ぎ。

暗闇の中から聴こえてきたのは…フラメンコを思わせる…掻き鳴らすような、荒々しいギター。

それを追いかけるようにキーボードが旋律を紡いでいく。

どお!つという声と共に会場が揺れた。

その音源の主をスポットライトが照らす。

場内に設けられたセンターステージには星野はるかや水野めぐみがいた。

この曲は『シルフィード』として2枚同時にリリースしたデビューシングル『スピードの向こう側』だ。

夢野つばさが音楽活動を休止してから、アクアスターの2人は一度もこの曲を披露したことがなかった。

故に、シルフィードの代表曲でありながら、幻の曲と言われていた。

それが…今…

ライブ仕様なのか…いつもより長めの前奏で、お互いの演奏テクニクをたっぷり魅せ付けたあと、ようやく1コーラス目を歌い始めた。

そして、間奏に入ったとたん、2人は演奏をピタリと止めた。

すると、どうだろう。

入れ替わるように、別のギターの音が鳴り響く。

センターステージに設けられたセリから上がってきた人影に、ライトが当たる。

長身の女性。

手にしているギターは左利き用…。

巨大ヴィジョンに映し出された彼女の顔に、大歓声が起こった。

彼女のギターが軽快なリズムを刻む中

「それでは、メンバー紹介します。星野はるか！  
とめぐみ。

「水野めぐみ！」  
とはるか。

「そして…夢野つばさ…!!」

2人は声を合わせて絶叫した。

うお〜

この日一番の歓声。

一瞬、つばさの鳴らすギターの音は掻き消されたが、そこに、はるかどめぐみが音を重ね、再びメロディーが形成されていく。そして3人で2コーラス目を歌い切った。

「みなさん、こんばんは!!」

「シルフィードです!」

どお〜…

「なんと、5年ぶりに、夢野つばさがステージの上に帰ってきたよう!!」

「皆さん、お久しぶりです。夢野つばさです」

つばさ〜!

つばさちやくん!

お帰り〜!

「どう?この雰囲気は?」

「オリンピックでPK蹴った時より緊張した…」

会場から笑いが起きる。

「今日はわざわざ?」

「うん、この日の為にドイツから戻ってきたんだ」

「試合は?」

「次は日本時間だと、今度の日曜日の深夜かな。みなさん、応援よろしくお願いします…というわけで…じゃあ、あとは頑張つて!」

え〜!?

「えっ？嘘でしょ」

「そうだよ！これで帰るなんて言わせないから…ねえ？」

と、はるかが客席に問い掛けると、自然発生的に拍手が沸き起こった。

「せっかくだから、もう1曲歌っていこうよ」

そうだよ！

もう1曲!!

「じゃあ、お言葉に甘えて…」

うわあゝ

水野めぐみがキーボードを奏で始めた。

これは…

シルフィードのもうひとつのデビューシングル『風の誘惑』である。先ほどとは打って変わって、落ち着いた優雅な音色と、めぐみの澄んだ耳障りのいい声が会場に響く。

そして邪魔しない程度に折り重なる2台のアコースティックギターと、2人のバックコーラス。

特に3人のハーモニーが素晴らしく、場内は誰もがその歌声に聴き惚れた。

元々、圧倒的な歌唱力を武器に、この業界に入った星野はるかとは水野めぐみ。

ここ数年の間、さらなる実力を付けて、今や彼女たちは『若手』という形容詞は外され、ただ単に『ミュージシャン』と呼ばれるほどとなっていた。

先に登場したアイドルグループと、年齢はそう変わらないが、もう充分にベテランとしての存在感、貫禄があった。

そしてつばさも…

長らく音楽の仕事はしていなかったが、サッカーの合間は常にギターを弾いていた為、その腕は落ちておらず、ブランクをまったく感じさせなかった。

むしろ、当時より今の方が上手くなっている感がある。

原曲とまったく同じアレンジで歌い終え、鳴り止まない拍手の中、3人は奈落へとゆっくり姿を消していった。

くつづく

μ、s…ミュージック スタート!!

アクアスターのサプライズゲストとして、夢野つばさが登場し…5年ぶりにシルフィードが結成された。

その興奮冷めやらぬ状態で、A—RISEが登場。

畳み掛けるように自身の『Private Wars』ほか3曲を熱唱した。

しかし開演してから2時間半近く経とうとしているが、いまだにμ、sの姿は見られない。

いくら引つ張ると言っても…

さすがに会場がザワツキ始めた。

そんな観客の心理を見透かしたように、綺羅ツバサが叫ぶ。

「次は、お待ちかね！…ミュ…」

言い終わらないうちに、客席からの歓声…もの凄い音圧が、ステージに押し寄せた。

ツバサは、自分がその声に吹き飛ばされるのではないかと錯覚に陥った程だった。

…さすがμ、sね…

…この人気、嫉妬しちゃうわ…

そんな眩きとは裏腹に、その表情は実に嬉しそうだ。

アクアスターのことも『良きライバル』だと思っているが、戦うフィールド、ジャンルが違う。

ツバサとしては、μ、sこそが、最強にして最高のライバル。

彼女の顔にはそう書いてあった。

メインステージのセリが上がる。

そこには、学校の制服風の衣装に身を包んだ、9人の姿があった。会場にピアノのイントロが流れる。

♪ I s a y …

彼女たちの歌声に『Hey! Hey! Hey! Start dash!』と会場が呼応する。

♪ うぶ毛の小鳥たちも…

♪ いつか空に羽ばたく…

♪ 大きな強いつばさで…飛ぶ…

1フレーズごとに歌い手が替わり、それに合わせて巨大ヴィジョンには、次々と彼女たちの顔が映し出される。

見事なカメラワーク。

その度に、各々のファンからウワア〜と歓声があがる。

ことり…凜…絵里…

海未…希…真姫…

そして…

♪ 明日よ変われ…

巨大ヴィジョンに映し出されたのは…

渡辺曜!

…ではなく…

よく見ないとわからないが…どちらかと言うと彼女よりも、ふつく

らした身体付き…

小泉花陽だ！  
紛れもなく本人。

ステージの袖ではAqoursのメンバーが、そのパフォーマンスに見入っていた。

♪悲しみに閉ざされて泣くだけの君じゃない  
♪迷い道やつと外へ抜け出したはずさ…

彼女たちの歌声に合わせ、千歌も口ずさんだ。  
自分をスクールアイドルへと導いた曲…。  
それを、今、その本人たちが、自分の目の前で歌っている。

…夢じゃないんだ…

千歌の心は爆発しそうなほど、昂っていた。

そして曜も、その隣に並んで口ずさむ。

彼女が代役となるかも知れなかった曲は、千歌に動画を『何度も何度も繰り返し観せられた』ので、自然と頭にインプットされていた。故に、にこからセットリストを見せられたとき『この曲なら歌えます』と答えたのだ。

…花陽さん、間に合って良かった…  
…やっぱり、私があの中で踊るなんて…

♪Hey! Hey! Hey! Start dash!…

曲が終わった。



9色のサイリウムに彩られ、幻想的な世界を醸している観客席。  
メンバーの名前が四方八方から飛ぶ。

「皆さん、こんばんは〜」

「μ，sです！」

9人が揃って挨拶をした。

歓声と拍手がしばらく鳴り止まず、穂乃果は次の言葉を喋るタイミングを待った。

「はい、まずは私たちμ，sにとっての、まさに最初の曲『START：DASH!!』を聴いていただきました」

「この曲を最初に歌ったときは、まだ私と穂乃果ちゃんと海未ちゃんの3人しかいなかったんだよね？」

とことり。

「そうですね。高校の講堂で披露したのですが…」

海未が相槌をうつ。

「幕が開いたら、お客さんが誰もいなくて…本当に泣きそうになったよね」

「はい！ですが…まさか、こんなに大勢の方々の前で披露する日が来ようとは…感慨もひとしおです！」

お帰り〜！

オレたちも待ってたよ〜！！

愛してる〜！

「それも、私たちにとっては憧れだったアキバドーム…皆さんのお陰でここに立てたましたあ！！」

うわあ〜！！

遅いぞ〜！

おめでとう！

「それじゃあ…次は…<sup>ス</sup>は基本的に、海未ちゃんの作詩が多いんだけど…これは私が、この街のことを想って書いた曲です。私たちは、ここから沢山の元気を貰いました。そしてそれを、今日、皆さんと分かち合えたらいいなあ…って思ってます」

「受け取ってくださいー！」

♪Wonder zone キミに呼ばれたよ 走ってきたよ

ことりのソロから始まったのは『Wonder zone』。

正直『歌ってほしいランキング』では、下位に沈んでいた曲。

アップされている動画は、派手な振り付けもなく、衣装も露出の少ないメイド服だった。

おまけにゲリラ的に行った路上ライブで、観客も少ないため、盛り上がりに欠ける。

その辺りが、票が伸びなかった要因と思われる。

だが、彼女たちが奏でるコーラスは伸びやかで美しく、ミディアムテンポの曲調と相まって、実に耳障りのよいナンバーだ。

♪どんなにくじけそうになっても泣かずに頑張らなきや

♪輝けないね…

そしてなにより、彼女たちがこの曲を選んだのは、ここがアキバドームだからに他ならない。

ここで歌ってこそ、意味がある！

そう思ったのだ。

♪Hi! はじまるよ (Wonder feeling)

♪不思議だよ 特別な夢さ

(Wonder feeling) …

そして曲は途切れることなく、次へと進む。

印象的なシンバルのカウントから、うねるようなエレキギターのイントロが流れた。

♪ココはどこ？

♪待つてなんて言わないで わかってる

♪夢に見た熱い蜃気楼なのさ

海外ライブで披露して、彼女たちを一躍全国区に押し上げた、μ'sの代表曲『Angelic Angel』だ。

膝の具合が心配された絵里であるが、堂々とセンターを務める、

♪Ah! 「もしも」は欲しくないのさ

♪「もつと」が好きAngel

♪翼をただの飾りにはしない

曲中、腰に差していた羽扇子を取り出し、クルクルと回すパフォーマンスは、大人の女性へと成長した彼女たちを、より妖艶に見せた。

♪明日じゃない

♪大事なときは今なんだと気がついて

♪こころの羽ばたきは止まらない…

曲が終わると、カットアウトで暗転した。

そして聴こえてきたのはシャン、シャン、シャンという鈴の音…。それが遠ざかるのと同時に、クロスオーバーしきたのはピアノのメロディ。

ステージの照明がフェードインすると、彼女たちは白い衣装に早変わりしていた。

場内の『上空』からは、ヒラヒラと雪が舞い落ちる。

♪不思議だね　いまの気持ち

♪空から降ってきたみたい

μ<sub>s</sub>に歌って欲しい曲ランキングで一度もトップを譲ることがなかった『Snow Halation』だ。

客席のサイリウムが瞬く間に白一色になった。

季節は間もなく春を迎えるが、この会場だけは輝く銀世界へと変貌した。

そして…

♪届けて切なさには…

穂乃果がそう歌った刹那、ステージも客席も一気にオレンジに染まった。

壮観

余談になるが…照明の世界では、光の色合いのことを『色温度』と言う。

そして、それを表す単位を『K(ケルビン)』という。

色温度が高くなればなるほど、光は青白くなり、低ければ低いほど、赤みを増す。

通常、我々がオフィスや学校などで使用している蛍光灯やREDなどの照明は『昼白色(N色)』と呼ばれ5000Kくらいである。

最近は(少しトレンドが変化しているので、一概には言えないが)スーパードなどはそれよりやや高め『昼光色(D色)』…6500Kく

らいが使われることが多い。

一方、飲食店や服飾店など雰囲気作りに使われる照明は『電球色（R色）』で、3000K〜2700Kくらい。

これにはちゃんと科学的な裏付けがあり、色温度が高ければ高いほど：つまり昼間の明るさに近づけば近づくほど：人の動きは活発になり、低くなればなるほど停滞する。

我々は夜行性の動物ではないので、当たり前と言えば当たり前である。

つまりスーパーなどは、客にサクサク買い物してもらい、回転率を上げたいので、色温度の高い照明を使うことが多く：逆に高級店などは居心地の良さを演出する為：人が落ち着く：色温度の低い照明を使う。

最近全国各地、色とりどりのREDを使ったイルミネーションのイベントが盛んに行われているが、綺麗ではあっても、そこに暖かみは感じない。

そういう意味では、この観客と一体になって織り成す『スノハレ』の照明（演出）は、白く寒々しい世界から、我々の心の中に安心感、安らぎを与えるものだと言える。

恐らく、あそこで変わるイルミネーションが電球色でなかったら、ここまで心を打つ曲にはなりえなかっただろう。

ラブライブの予選で、A—RISEを破ることもできなかったかも知れない。

♪微熱の中 ためらつてもダメだね

♪飛び込む勇氣に賛成

♪まもなくStart!!

曲が終わると同時に、今度はドスツ！ドスツ！ドスツ！…とバスドラの重低音が会場に響いてきた。

センターステージのセリに照明が当たる。

そこから現れたのは…

ドラムセットと水野めぐみ。

彼女が規則正しいリズムで、バスドラのペダルを踏んでいる。

その傍らには、アコギからエレキギターを持ち替えた、夢野つばさと星野はるかがスタンバイしている。

「みんな盛り上がってる!?!」

メインステージから、穂乃果がセンターへと走ってきた。

衣装はオレンジを基調としたTシャツに、黒いデニムのジャケットとショートパンツへと変わっている。

「まだまだ終わらへんよ!!」

「全力でいづくにあ!!」

「ラブアローシユートお!」

穂乃果と同じ衣装…自分のイメージカラーのTシャツを着た4人のメンバー…が、次々に会場を煽りながら走りこんでくる。

そして…

その後からツバサが…あんじゅが…英玲奈が…同じ衣装で現れ、シルフィードの3人を中心に、12人がぐるりと円を作った。

「それじゃあ、いくよ!」

穂乃果が、バスドラのペダルを踏み続けているめぐみに合図を送った。

「ワン…ツー…ワン、ツー、スリー、フォー…」

フォーのカウントで、はるかのエレキギターが唸りをあげた。

♪Oh! Yeah!

♪Oh! Yeah!

♪Oh! Yeah!

♪一進一退!

円を作った12人と、ギターを持った2人が、大きくジャンプした。

♪悔しいなまだ No brand

♪知られてないよ No brand

かつて、自虐的にそう歌った彼女たち。

しかし今は…

『スクールアイドルのカリスマ』『伝説』と呼ばれる存在。

当時…本人たちですら、こうなることは想像していなかったであらう。

♪勇気で未来を見せて

♪そうだよ 覚悟はできた

2コーラスを歌い終わり間奏に入ると、ギターの音が鳴り止み、再びバスターの音だけとなった。

「みんなあ…こぶしを大きく突き上げるわよう!」

「みんなの『Oh! Yeah!』聴かせてえ!」

「準備はいいかあ!?!」

A—RISEの3人が叫ぶ!

こんな荒々しい彼女たちを、初めて見た。

ステージの15人は着ていたジャケットを脱ぐと、右手に持った。  
そして

「Oh! Yeah!」

と叫びながら、そのジャケットを振り上げる。

会場から返ってくる5万人強の「Oh! Yeah!」

替わるがわるに、メンバーが観客を煽る。

Oh! Yeah!

「まだまだく!!」

Oh! Yeah!

「もつと大きな声で!!」

Oh! Yeah!

「フアイトだよ!!」

Oh! Yeah!

「そんな大きさはじゃ、ことりのおやつにしちゃうぞ!」

Oh! Yeah!

「ラストお!」

Oh! Yeah!

「ハラショー!!」

♪壁はHi! Hi! Hi! 壊せるものさ

♪Hi! Hi! Hi! 倒せるものさ

♪自分からもつとチカラを出してよ

♪Hi! Hi! Hi! 壊せるものさ



♪Hi! Hi! Hi! 倒せるものさ

♪勇気で未来を見せて

♪そうだよ覚悟はできた

♪Oh! Yeah!

♪全身全霊!

曲終わりはド派手な爆発音とともに火柱が上がり、天井からはキラキラとした紙テープが舞った。

パフォーマンスを終えた15人は、メインステージに戻ると横一列になり手を結ぶ。

その手を頭上に振りかぶってから

「どうもありがとうございます!」

と深々と一礼した。

10秒…20秒…誰も頭を上げない。

そして、セリはそのまま下がっていき、やがてステージの照明は消えた。

その瞬間から、早くも会場からは『アンコール』の大合唱が起きる。

どれくらい経ったろうか…

ステージがうつすらと明るくなった。

そこに1人…2人と人影が集まってくる。

ざわめく場内。

顔は見えないが、全部で40人ほどとなったろうか。

そして弾むようなイントロが流れたのと同時に、明転。

これは…

今日の全出演者がステージにいた。

♪ 楽しいね　こんな気持ち

♪ 笑顔で喜び歌おうよ

実質的にμ's最後の曲…アキバでのスクールアイドル合同ライブで披露した『SUNNY DAY SONG』だ。

♪ SUNNY DAY SONG

♪ SUNNY DAY SONG

♪ 口ずさむ時は

♪ 明日への期待が膨らんでいい気持ち

過去に踊ったことのあるA—RISEと中目黒結奈はもちろん、シルフィードも若手アイドルも…そしてAquorsも、みんな一緒に歌って踊っている。

それは歌詞と同様、心の底からステージを楽しんでいるようだった。

♪ SUNNY DAY Wow! Sun power!

♪ SUNNY DAY Wow! Sun power!

♪ (歌うよ)

♪ SUNNY DAY Wow! Sun power!

♪ (こんな夢)

♪ SUNNY DAY Wow! Sun power!

「今日は皆さん、本当にありがとうございます。私たちにとっても、こういう合同ライブというのは初めてで、すごく不安だったのですが…ここにいる出演者の方々が最高のパフォーマンスを魅せてくれて…そしてなにより、皆さんがグループの垣根を越えて、本当に一生懸命応援してくれて、盛り上げてくれて…最高でした!!ありがとうございます!!」

綺羅ツバサが時おり、言葉を詰まらせながら、挨拶をした。

「もつともつとこの瞬間を味わっていたいけど…いつまでも…ってワケにはいなくて…次が最後の曲となります」

え〜!?

終わらないでくれ〜!

もつと聴かせて〜!

「ふふふ…そうよね…ごめんなさい。またいつか、こういう日が来ればいいなあって思ってます。じゃあ…」

ツバサの視線の先には、いつの間にかセンターステージに現れたグランドピアノ。

そこに向かって歩き出したのは、真姫と…

Aqoursの梨子。

2人はそのピアノに向かって、並んで座った。

「それでは、今日、集まってくれたファンの皆さんに」

「このステージを作り上げてくれたスタッフの皆さんに」

「この歌を送ります」

♪愛してる ばんざーいー!

♪ここでよかった

♪私たちの今はここにある

全員での合唱。

そしてアカペラパートが終わると、ピアノの伴奏が始まった。  
真姫と梨子との連弾である。

♪ら〜ら〜ら らら、ららららら…

総勢40人ほどが、グループ関係なく入り乱れながら、メインス  
テージとセンターステージに散りばって、観客に手を振る。

肩を組んだり、握手をしたり、ハイタッチをしたり…。

中には感極まり、涙を流している者も見受けられた。

そして…

最後のワンフレーズ…

♪ららら、ららららら、ららららら〜ららら〜

♪ららら、ららららら、ららららら〜ららら〜

〜つづく〜

## 打ち上げ

チャリテイライブが終わると、別会場で打ち上げパーティーが行われた。

ビュッフエスタイルの立食。

主催者であるA―R I S Eの事務所関係者や、イベントスタッフの挨拶のあと、乾杯の音頭を綺羅ツバサが取った。

テーブルは10台ほど用意され…初めこそ、各出演者の位置が決まっていたが…すぐにバラけて、思い思いの場所で談笑し始める。

その中で、せわしなくあちらこちらとテーブルを移動する人物がいた。

「この度はご迷惑をお掛けしてしまい、誠に申し訳ございませんでした」

「そんなあ、迷惑だなんて…」

「はい、私たちはμ、sの皆さんと共演できただけで幸せなのですから」

「いえいえ、本当になんと申し上げてよいやら…」

そう言って…小泉花陽…は、次のテーブルに移り、同じように出演者やスタッフに頭を下げた。

「かよちゃん、おかえり」

一通り周り終わり、ようやくμ、sのテーブルに戻ってきた花陽を、メンバーが出迎えた。

「アナタ、何も食べてないんじゃない？少しお腹に入れたほうが…」

心配して真紀が声を掛けたが

「うん、ありがとう。でも今は…」

と花陽は料理に手を付けない。

「もつと堂々としてなさいよ！アンタはどのアイドルよりも立場が上なのよ！」

「にこちゃん、そんなことないよ。花陽なんて、まだまだ駆け出しのクリエーターだし」

「はあ…アンタっていう娘はどこまで、気弱な人間なのかねえ」

「それより…渡辺曜さんって言う人は？」

スタッフを含めると100名以上いる会場。

立食である為、誰がどこにいるかを探するのは、それほど容易でない。

「あら…そういえば…あ、あそこじゃないかしら」

絵里は少し周りを見渡して、彼女を発見した。

「ちよつと、行つてきます」

「ウチも一緒にいく。言い出しつぺはウチやから」

希は花陽の意図を汲み取り、そこまで同行した。

「あの…」

「はい？あつー…」

「改めまして、小泉花陽と申します。この度は多大なるご迷惑をお掛けしてしまい、誠に申し訳ございませんでした…」

「ほんま、余計な気を使わせてしまつて…」

「そ、そんな…全然、気にしないでください。最初は花陽さんの代役なんて務まるかなあ…つて思いましたけど…途中から、これでお客さんを騙せたら面白いなあ…なんて思ったたりして、結構楽しんでましたから…」

「その為に一生懸命練習もしてもらつちやつたみたいで…本当になんと言つていいか…」

「何の問題もないですよ」

「いや、問題はなくないんだけど…開演時間を遅らせてもらつて、曲順も入れ替えてもらつて…」

「終わりよければ全てよし…です」

「ありがとう。そう言つてもらえると、ウチも気が楽になる…」

「千歌ちゃんなんて『μ'sの皆さんに直接ダンス指導してもらうな

んで、曜ちゃんズルイよ』ってずっと言っていました」

「そこまで準備してたなら、1曲くらい、曜さんに踊ってもらえばよかったかな？」

「えっ？、いえいえ…舞台袖から皆さんのパフォーマンスを観させて頂きましたが…やっぱり私の入る隙なんてありませんでした。息もピッタリで…全然クオリティが違うっていうか…でも、アンコールとかで、一緒にステージに立たせてもらって、最高の思い出になりました。ありがとうございます」

「こちらこそ…」

2人はお互い頭を下げた。

…彼女はそれほど気にはしていない様子やけど、責任感の強い花陽ちゃんやから、これ以上思い詰めると神経が参ってまう…

「では、また…」

希は、一旦話を切って、花陽を自分たちのテーブルに連れ戻した。

「かよちゃん！」

「凜ちゃん…」

「ジュースくらいは飲んだほうがいいにや」

「う、うん…ありがとう」

「どう？かよちゃんのソックリさんにご対面した感想は…」

「うくん…みんなが言うほど似てるかなあ…」

「似てるよ！」

「でも、曜さんの方がスタイルがいいし、運動神経も良さそうだし…」

「ほら、すぐ『ネガティブかよちゃん』になる。取り敢えず挨拶周りも終わったんだし、頭を切り替えて、いっぱい食べるにゃ！」

「ほうはひよ、ははほはん。へっはふははは、はべはひほ、ほっはひはひほ」

「穂乃果ちゃんは『そうだよ、花陽ちゃん。せつかくだから、食べないともったいないよ』って言ってます」

「ごとりちゃん、よくわかるね…」

「…というより穂乃果！口に詰め込みすぎです！行儀悪いですよ！」

「ふひはへん」

「因みに今のは『すみません』です。ちゅん、ちゅん!!」

「お疲れ様」

「ふばははん!？」

「穂乃果！いいかげんにしなさい」

「ゴクン：失礼しました。ツバサさん！お疲れ様でした」

「お疲れ様」

「お疲れ様でした」

μ, sのメンバーが次々に彼女を労った。

「今日のライブ：すごく評判いいわよ。今、あんじゅと英玲奈が別室でネット見てるけど『最高だった』…ってコメントばかりだって」

「あ、あの、その今日は本当に…」

「もういいわよ、小泉さん。さすがに私も、ちよっとドキドキしちゃったけど…リハも無しで、いきなりあれだけのことをこなしちゃうんだもん…：たいしたものだよ」

「余計なことを考えてるヒマが無かったっていうのが、正直なところで…」

「結果的にμ, sによるμ, sの為のライブになっっちゃけど」

「はい、すみませんでした」

「でも、それは私が望んでいたことだったのかも」

「えっ…」



「花道…って言えばいいのかしら？本当にこれが最後だなんて、もっ  
たいたいわ」

「つばささん…」

『No brand girls』は、私たちのライブじゃ絶対にや  
らないパフォーマンスだったけど、最高に気持ちよかったわ」

「私もあんなに激しく飛び跳ねているA—RISEを初めて見まし  
た」

と穂乃果。

「うふふ…そうね…」

ツバサは、少し恥ずかしそうに笑った。

「お疲れ様〜」

「つばささん!!…あ、改めて初めまして…ですね!」

穂乃果が代表して挨拶をする。

つばさはつばさでも、こちらは夢野つばさ…と、水野めぐみと星野  
はるか。

確かに…μ sのメンバーはオリンピックでスタンドから一方的  
に観てはいたものの…（海未以外は）対面したのは初めてだった。

「あつ、そうね。初めまして、夢野つばさです。オリンピックの時はわ  
ざわざ観戦に来てくれたみたいで…なかなか直接お礼が言えなくて  
ごめんなさい」

「いえいえ…その時はお互い色々大変な時期でしたし…」

「その節は…」

と海未は頭を下げた。

するとつばさは、スツと彼女に近づき

「どっ？…梨里とは上手くやってる?」

と耳元で囁いた。

「は、はい…お陰さまで…」

海未も周りに聴こえないくらいの声で返答する。

それを聴いて、つばきは「それはなによりね」といった表情で二度ほど頷いた。

「3人のドラムとギター、メチャメチャ格好良かったにや！」

「うん、凄かったよね！ありがとうございました」

穂乃果はつばき、めぐみ、はるかの手を順に握った。

「ぶっつけ本番だったけど、失敗しなくて良かったわ」

「とんでもないです。完璧でした！」

「めぐみは自分たちのライブでもドラム叩いてるし、慣れてるかも知れないけど…私はもうドキドキしちゃって…」  
とつばき。

「私だって、他人の曲を叩くことなんてないもん。緊張しましたよ」

「それなら、私だって！…って張り合っても仕方ないけど」

はるかは、いつものように、あはは…と笑った。

「シルフィードの皆さんに生演奏してもらって…A—RISEと一緒に歌って踊って…最高のステージでした」

「うん、一生の宝物だよね」

ことりが満面の笑みで相槌を打つ。

「それは私も同じよ」

ツバサも大きく頷いた。

「そう言ってもらえると、私もドイツから帰ってきた甲斐があるわ」

「ありがとう。あなたにはだいたい無理なお願いをしちゃって…」

「ううん…いい気分転換になったわ」

「でも聴いたでしょ？あなたが登場した時の歓声を」

「一番のサプライズやったからね…正直、ウチらもツバサさんからライブのプランを聴いたときは『無理や』って思ってたくらいやし」

「私も無理だと思ってた」

「私も。今日の今日まで来ないと思ってた」

「アレ？はるかもめぐみも？私って信用ない？」

「はいー！」

「こらっ！」

「うひゃあー！」

アクアスターの2人も、つばさと久々に再会して、実に嬉しそうだ。そんな様子に、μ'sのメンバーも目を細めた。

「でも、サッカーの方は大丈夫なんですか？」

「穂乃果!!」

海未が思わず叫ぶ。

「あつ、ごめんなさい…苦しんでるって聞いてたから…」

「そうね。結果が出てないのに『こんなことやっていいのか』…って叩かれそうだけど…」

「違うよ、本来は『こっちが本業』なんだからね！」

とはるかが突っ込む。

「ん？…そうだった？」

つばさのとぼけた回答が、一同の笑いを誘った。

「まあ、正直なことを言うと…今は我慢の時かな…って。でも元々、最初から上手くいくなんて思ってたし…毎日、新鮮な気持ちで挑んでるわ」

「世界で戦うって、大変にや〜」

「別に私だけが特別大変なわけじゃないわよ…みんな、何かしらに戦ってるんじゃないかしら」

急につばさが真剣な顔をしたので、その場の空気が一瞬ピリツとした。

「つばささん！次の試合、絶対ゴール決めてください。応援してますから」

穂乃果は背筋を伸ばし、改まって言った。

「うん、出してもらえたらね…」

つばさは大きく頷いた…。

〜つづく〜

だってパーティー終わらない

『μ，sのみ』の打ち上げは、場所をカラオケ店に移して行われた。

最年少である花陽も、1ヶ月前に誕生日を迎え、これでμ，sは全員飲酒できる年齢になった。

「ライブ成功、おめでとう〜」

「カンパ〜イ!!」

それぞれがカクテルやサワーの入ったグラスをカチン!と合わせた。た。

ちなみに体質的に合わない…というにこはノンアルのフアジーネーブルだ。

「それにしても、かよちゃんが間に合ってくれて、本当に良かったにや〜」

凜は花陽の胸元に、顔を擦り付ける。

「凜ちゃん、間に合ってはなないよ…」

「でも、結果的に最初から歌えたんだし、間に合ったと同じにや」

ゴロゴロと花陽に甘える凜は、猫そのものだ。

「はい、予定より早く空港に着いたとのことでしたが…久々にドキドキしました」

「時差ぼけもあったと思うけど、さすが花陽ね」

「でもね絵里ちゃん…実はさっきの打ち上げでお料理食べたら、少し眠くなってきちゃって」

「そうやろね…うくん、花陽ちゃんは寝ててもいいんやない」

「い、いえ…ひとりだけ寝るわけには…」

「大丈夫やって。ウチがちゃんと面倒みてあげるから」

「それが一番危ないんじゃないのよ!」

と、にこが希を睨む。

「心配いらないわ。花陽が寝ちやったら、私が家から車を出してもらって送り届けるから」

「アンタね、こんな時にお金の力を見せ付けられないでよ！」

「そういうつもりじゃないけど…って、凜はいつまでそうやって花陽にくつついてるつもり？」

だが「代わりなさいよー」とは言えない真姫。

「いいなあ！穂乃果も真姫ちゃんちの車に乗ってみたい！」

「穂乃果はどうして、すぐにそういう発想になるのですか」

「前に、花陽ちゃんと一緒に送ってもらったことがあるけど…あの時は緊張しちやって何も喋れなかったよね？…って…あれ？」

…ことりは花陽を見た。

「本当に寝ちやったね…」

「相当、疲れてたんやないかな？」

「そりやそうよ。長時間のフライト…会場に着いて、ぶっつけ本番でライブ…打ち上げ会場じゃひたすら頭を下げまくって…花陽じゃなくても疲れるわよ」

「そうね。私たちだけになって、ようやくホッとしたってことかしら。少しの間、このまま寝かせておいてあげましょう」

絵里は、自分の着てきたコートを彼女の身体に掛けた。

「それより、えりち…膝の具合は？」

「そうですね。予定外に通しのステージになってしまいましたから」

「ありがとう、大丈夫よ。アイシングもしてるし…。今日一日だけ！って思ってたから、本番中もまったく気にならなかったわ。もつとも…こんなステージが何日も続くようなら、きっと耐えられないと思うけど」

「やつぱり…今日が最初で最後のステージだったんだよね…」

「穂乃果…」

「私ね…まだドキドキが止まらないんだ。MCの時にも話したけど、ファーストライブのときは、お客さんゼロだったんだよ！ゼロ…それがまさか、5万人の前で歌う日がくるなんて…」

「ごとりも穂乃果ちゃんと同じ気持ちかな。ファーストライブの時は、目の前に誰もいなくて、泣きそうになったけど…今日は人がいっぱいいて泣きそうになっちゃった」

「はい、私も同じです。それにもう解散から何年も経っているのに、いまだにこんな愛して頂けているのかと思うと、本当に感慨深いと申しますか」

「だから何度も言ってるでしょ！古今東西、μ'sを超えるグループはいないのよ！そして、今日改めて思った。やっぱりアンタたちは最高の仲間だって！」

「にこっち…」

「だけどA—RISE主催のライブだったのに、結果的に私たちのライブみたいになっちゃって…なんだか申し訳ないわ」

「絵里ちゃん…私たちのライブだったんだよ、初めから」

「穂乃果…」

「だってさ、No brand girlsのコラボレーションとか、アンコールの2曲とか、全部ツバサさんがやろうって言ってくれたことだし」

「確かにそうですね。打ち合わせの段階から、ずっと仰ってましたものね。『あなたたちがこの先、活動を続けるのなら別だけど、これが最後なんでしよう？』と」

「うん。だから、これまでの集大成にしよう！…ってね」

「そういう意味では、A—RISEに感謝、感謝やね。彼女たちが声を掛けてくれなければ、今日のウチらはなかったわけやから」

「それを言ったら、海未ちゃんが高野さんと出会わなかったら…ってことだよな？」

「穂乃果ちゃんの言う通り。何がどう転ぶと、こういうことになるんやろか…これが『運命』って言うんなら、ホンマ、不思議やね」

「あ、あの…その件で…皆さんに報告が…」

「報告？」

「はい、ライブも終わり、一区切り付きましたので、そろそろ申し上げてもよろしいかと…」

「なに？なに？海未ちゃんに彼氏でも出来たの？」

「は、はい…実は…」

「えっ？えっ？う、うそでしょ？」

「いえ…本当です…」

「ま、まさか…お相手は…プロレスラー？」

「なんですか！」

「いや、なんとなく…今、旬な話題だし…」

「はい？」

「ううん…なんでもない…。えっ、じゃあ、なにさ？」

「はい…私、園田海未は…この度、高野梨里さんとお付き合いを始めました。まだ、どのようなになるかはわかりませんが、どうか温かい目で見守って頂ければ幸いです」

「えく!!」

と叫んだのは穂乃果。

「…つて…アレ？驚いたのは穂乃果だけ？」

これには海未も意外そうな顔をした。

「凛たちは知ってたにや」

「ごめんね、穂乃果ちゃん」

「ことりちゃん…これつて…ドツキリかなにか？」

「そんなわけ無いでしょ！」

「にこちゃんも知ってたの？」

「真姫！希！まさか…」



「私たちがバラしたわけじゃないわよ。ライブが始まる前、あなたたちがA―R―I―S―Eに花陽の件で交渉に行つてるときに：A q o u r s っって娘たちが挨拶に来て…」

「その娘たちの友人が、海未ちゃんと初詣で会つて…『頑張つて』つて言つてくれたことに対するお礼をしたいんやけど…つて」

「それで、ことりたち、海未ちゃんとは一緒に初詣行つたけど…つてなつて…」

「それじゃ2回行つたのかにや？つて」

「じゃあ、誰と？つて」

ことり、凜、にこがニヤニヤしながら、言葉を繋いだ。

「それで、バレちゃつたんやな…」

「そうなのですか…」

「えー、そうしたら何で穂乃果に教えてくれなかつたのよう」

「そうやね…それは…」

「ええ…ライブ前に余計な心配を掛けるのは良くないと思つたの」

「でも、海未ちゃんもひどいよ！そんな大事なことをずっと黙つてるなんて！」

「すみません。隠しているとか、そういうつもりは無かつたのですが…まだ、私自身も半信半疑なところがあり…それと絵里の言う通り、やはりライブ前に余計な心配は掛けたくなかつたといえますか…」

「そ、そっか…そうだよね」

「すみません」

「あ、謝ることじゃないよ！海未ちゃんが、前々から高野さんのことが『好きかも』…つて話は聴いてたし」

「…はい…」

「いやあ！良かった、良かった！あつ、そうしたら海未ちゃんは『高野

海未』になるんだね?…たかのうみ…お相撲さんみたいな名前だね…  
あははは…」

「穂乃果…」

「うう…ぐすつ…海未ちゃん…おめでとう!幸せになってね!」

「まだ結婚するわけではありませんから」

「ぐすつ…穂乃果のこと、いつまでも忘れないでね…」

「あほか…」

穂乃果のリアクションを見て、にこが冷たく言い放った。

「ん?ことりちゃん、モジモジしてどないしたん」

「えつと…どうしようかな?ことりも言っちゃおうかな…つて」

「にゃ?」

「ついでだから、ことりも報告しちやいますね?」

「?」

「ことりも…今、お付き合ってる人がいます!」

「えく!!」

穂乃果はそのまま気を失ったように、後ろに倒れこむ。

それ以外のメンバーも、あまりに突然の発表に、声を失ったのだっ  
た。

「終わってしまいましたね…」

「うん」

打ち上げが終わって、宿に戻ったAqoursのメンバーたち。  
布団の中で、就寝体制に入っていた。

「夢のような時間だった…」

「そうだね…」

千歌の呟きに、曜が応えた。

「ずっと起きていたいな…」

「千歌ちゃん？」

「だって、寝て起きたら、本当に夢だった…ってことになったら、寂しいもん」

「夢みたいでしたが、夢ではありませんわ。ラブライブの優勝も、μ'sやA—RISEとの共演も」

「ダイヤさん…」

「そして、廃校を阻止できなかったということも…」

「鞠莉さん…」

「人生、いいことばかりじゃない。辛いことも沢山ある。だけど、一生懸命、何かを頑張れば、きっといいこともある」

「果南ちゃん…」

「千歌…ありがとう」

「えっ？」

「…あなたがしつこく誘ってこなかったら、私はただの引き籠もりになっただけと思うの」

「果南ちゃん」

「親の手伝い…それは嘘じゃなかったけど…それを言い訳にしてたのは本当だった」

「イエー！果南のスマイルがアゲインしたのは、千歌っちのお陰です」

「私の力じゃないよ。私はただ、自分勝手にみんなを巻き込んだだけ。みんながいなかったら、何もできなかった」

「それはお互いさまですわ」

「はい。ルビィはずっとアイドルに憧れてたけど…でも、自分ひとり

だったら、絶対そんなことできなかったし…千歌ちゃんがいなかったら、この夢は叶いませんでした」

「オラも同じズラ」

「ルビイちゃん…花丸ちゃん…」

「きつと善子も同じ思いズラ」

「ヨハネ！」

「こんな変わり者を個性と受け入れてくれたみんなに、感謝、感謝ズラ…」

「ズラ丸…随分なことを言ってくれるじゃない」

「私も、千歌ちゃんと出会わなければ…」

「梨子ちゃん…」

「犬嫌いが克服出来なかったかも…」

「そこ!？」

全員が梨子に突っ込んだ。

「なんて…。本当に突然だったけど…真姫さんが連弾に誘ってくれて…センターステージでピアノを弾いてるとき…私ね、音ノ木坂の音楽室にいたんだよ」

「えっ?」

「音ノ木坂の音楽室って、すごく日当たりが良くて、窓を開けておくと気持ちのいいそよ風が入ってきて…空気とか匂いとか…全てがあの時のように感じられたの」

「すごいね…」

「そして、大先輩が弾いていたあのピアノを、私が弾いていたんだ…その先輩が今、私の隣にいるんだ…って思ったら、時間さえ飛び越えた気がして」

『時をかける少女』ズラ」

「でも…それもこれも…今日が最後なんだよね…。μ sも解散をするときはこんな感じだったのかなあ…」

「千歌ちゃん…」

「それは仕方ないズラ。諸行無常ズラ」

「花丸さん、それは違いますわ」

「ぬ？」

「確かに、物事は常に変化しており、ずっと同じということはありません。ですが、その日、その時感じたことは、いつまでも心の中に留まっているのです。ですから、今日感じたこの瞬間は…永遠に心の中で生き続けるのです」

「ダイヤさん…」

「千歌つち…」

「はい？」

「サンキュー ベリーベリー マッチです。これからも自分の道を見つけてシャイニーしてください」

「千歌、本当にありがとう。1年間足らずだったけど、とても楽しかったわ」

「千歌さん。私もお礼申し上げます。素晴らしい思い出を…最高の思い出をありがとうございます」

「違うよ、違う！」

「えっ？」

「まだ終わりじゃないよ」

「？」

「9人でのスクールアイドルはこれで終わりだけど…3年生のみんなは卒業しちゃうけど…これからもみんなでいっぱい思い出

を作っていくんだ」

「！」

「そうでしょ？」

「千歌！」

「千歌さん！」

「千歌っち！」

「千歌ちゃん！」

「うん、そうだよ。まだ、これで終わりじゃないんだ。だから…みんな、いくよ!!…せくの」

「A q o u r s 〽 サンシャイン!!」

とん、とん…

「すみません、お客様…お静かにねがいますよ」  
部屋の外から、仲居の声が聴こえた。

くっくくく

そして最後のページには…

≫それでは、スポーツコーナーです。まずはこの話題から。

≫女子サッカー、夢野つばさ選手の所属するドイツ フランクフルトが、最終戦を待たずにリーグ優勝をしました。

≫この試合、前半14分に先制すると、後半29分には夢野選手の左足が炸裂！相手のクリアボールを迷わずボレーシュートすると、ペナルティエリアの外から放たれた弾道は、一直線にゴールに向かい、キーパーは一步も動けないまま、見事ネットを揺らしました。試合はそのまま2-0で逃げ切り、フランクフルトは残り2試合を残して、今シーズンの優勝を決めました。

≫そして夢野選手はこのゴールが22点目で、2位に8ゴール差。残り試合を考えれば得点王は確実に、ドイツに渡って2シーズン目、大きな花を咲かせました…

≫女優でタレントの島崎涼子…本名、島崎圭容疑者が、覚醒剤所持と使用の疑いで逮捕されました。

≫島崎容疑者の逮捕はこれで、4度目となり…

≫ここで訃報が飛び込んできました…えっ？…あ、すみません、失礼致しました：男子サッカー日本代表のMF 高野梨里選手が、今朝未明、神奈川県内の病院で亡くなりました。28歳でした。

≫高野選手はJリーグの最終戦でハイボールを競った時に、相手選手と接触して落下。頭を強く打ち、意識不明の状態で入院中でした。

≫高野選手は、18歳で横浜F・マリノスに入団。20歳の時には

オリンピック予選で4ゴール5アシストを記録し、日本を本大会出場に導きましたが、本番直前に自動車事故に巻き込まれてしまい、頸椎を損傷するというアクシデントに見舞われ『悲運のエース』と呼ばれました。

≫しかし2年以上のリハビリ、トレーニングを経て5年前に湘南ベルマーレに入団してピッチに復帰すると、その後はチームの中核を担い、今シーズンはベルマーレのリーグ優勝に大きく貢献。そしてこれまでの活躍が認められ、来シーズンからはスペインリーグへの移籍も決まっていたのですが…残念でなりません。心からご冥福をお祈りいたします…

「ねえ、ママあ」

「なあに？『ひな』ちゃん」

「どうして、『みい』ちゃんのパパはしんじやったの？」

「みいちゃんのパパはね…サッカーしてるときに大きな怪我をしちゃったの」

「おおきなけが？ほうたいまいてもならなかったの？」

「うん…」

「おくすりつけても？」

「うん…お医者さんもいっぱいいっぱい頑張ったんだけど…」

「まきちえんちえーでも？」

「真姫先生は『ぽんぽん』のお医者さんだから、お怪我は治せないの…」

「ふくん…そうなんだ…。みいちゃん、かわいそうだね」

「そうだね。だから、ひなちゃんは、いつまでも、いつまでもみいちゃんと仲良くしてあげてね？」

「は～い!!」



《サッカーJリーグのDFで、韓国代表でもあるパク・ヨンソン選手が遺体となって発見されました。

《今日、午前7時ごろ、都内のホテルに宿泊していたパク選手が、集合時間になってもロビーに現れないことをチーム関係者が不審に思い、ホテルの従業員と共に部屋を開けたところ、首を吊った状態で発見されたということです。救急搬送されましたが、すでに心肺停止の状態、病院にて死亡が確認されました。遺書は見つかっておりませんが、現場の状況から自殺したものと見られております。

《パク選手はJリーグの最終戦で、先月他界した高野選手に悪質なファールをしたとして、10試合の出場停止と罰金100万円の処分が下っていました。国内では高野選手が亡くなったのは、このプレーが原因だと、パク選手の永久追放を求める声もあがっていました。

《これに対し韓国のサッカーファン、マスコミからは『高野選手の受身が下手だっただけ』とパク選手擁護論が相次ぎ、日本国中の反発を招きました。そして、お互いのファン、マスコミが非難合戦を繰り返す中、パク選手や高野選手の家族に殺害予告が出さるなど状況は次第にエスカレート。日韓両政府が事態の収束に向け、会合を開くことを検討していると発表した、その矢先のことでした…

《それでは『今日の対談』です。早速ゲストご紹介しましょう。教育評論家の『青山龍一』さんと、女性若手実業家『小原鞠莉』さんです。

《青山さんは未成年の頃、いわゆる非行少年だったとのことですが…その後は更生されて…先日「日本教育大改革論」という本を出版。こちらが今、大変話題になっております…

「萌絵…」

「鞠莉が出てるんだ」

「ううん、そっちじゃなくって…」

「青山龍一？…ソイツって…まさか…」

「更生した…だって…」

「…」

「私は認めたくない…昔、悪かったけど、今、頑張ってますみたいなの…」

「かのん…」

「人を殺しておいて、堂々とマスコミの前に出る神経が信じられない…。この人に限らず…『今、頑張ってる』…は構わないけど…過去に被害を受けた人の償いもなしに、そんなこと主張されても…」

「…うん…」

「あの事故がなければ、高野さんは…。海未さんだって…つばさだって…」

「…理不尽ね…」

「神様って、どうしてこんなに不公平なのかしら…」  
「…」

《はい！現場です！私は今、東京都の文京区にあります音ノ木坂学園の前に来ています。事件があったのは今朝8時過ぎのことです。昨年亡くなった元サッカー日本代表の高野梨里選手の妻で、高校教師の高野海未さんが、通勤途中、刃物で襲われました。

《幸い、命に別状はないとのことですが、海未さんが抵抗した際、手

や腕に傷を負ったようで、地面にはまだ、出血の跡が生々しく残っています。

≫犯人は、そのまま通行人らに取り押さえられ、通報を受け駆けつけた警察官に現行犯逮捕されました。

≫早朝、それも高校の門前で行われた凶行とあって、現場は騒然としており、事件を目撃した生徒を中心に動揺が広がっています。学校は急遽、休校となっています。

≫警察の発表によりますと、容疑者は自称韓国人のキムソツチュと名乗る男で『パクヨンソンの仇である』と口走っているとのことです。今日は高野選手を死亡させたとして、その後自殺したパク選手の命日で、韓国でも大規模な追悼集会が開かれています。この件と関連があるのか、動機を詳しく調べることであります…

「みいちゃんと、みいちゃんママ…こんにちは」

「はい『ひな』ちゃん、こんにちは。『みそら』、ひなちゃんが遊びに来てくれましたよ」

「あつ、ひなちゃん…と、ひなちゃんママと…ほのかおばさん、こんにちは」

「こらあ！おばさんじゃなくて『お姉さん』でしょ!？」

「…あ、まちがえた…」

「ふふふ…」

「海未ちゃん、そこは笑うところじゃないよ！」

「すみません。毎回、毎回同じやりとりなものですから…」

「それは海未ちゃんの教育が悪いんだよ…」

「子供は正直ですから」

「うう…。そ、それより…海未ちゃん、怪我の具合はどう？」

「何度も言いますが、もう大丈夫です。さすがに1年近く経っていますし…」

「無理しちゃって…辛い時は穂乃果を頼っていいんだよ」

「あなたほど頼りない人は…いえ、そうですね…ありがとうございます…す…」

「うん、うん。それでよろしい！海未ちゃんも成長したねえ！」

「子供の前で怒鳴りたくないだけです」

「ぶう…」

「うふっ」

「ことりちゃん！笑わない！」

「は…い…あ、そうそう…はい、みいちゃん、4才のお誕生日おめでとう」

「ケーキ？わあ、おつきい!!」

「ことり、ありがとうございます」

「いえいえ」

「…穂乃果お姉さんも一緒に買ったんだぞ？」

「えっと…ひなちゃんママと、ほのかおば…おねえさん、ありがとう」

「はい、よく間違えませんでした！」

「みんなで食べようね？」

「うん！」

「みいちゃんのパパってサッカーのせんしゅだったんでしょ」

「うん！すごいせんしゅだったんでしょ」

「すごいってどれくらい？」

「ここから…ここくらい？」

「それってすごいのか？」

「うん…えっと…にほんだいひょうだったんでしょ」

「にほんだいひょう？」

「すごいんだよ」

「へえ」

「あ、そうだ！ひなちゃんは、ゆめのつばささんってしてってる？」

「えっと…コマージュナルにでてる、きれいなひと？」

「うん！ひこうきのコマージュナルとか、くつとか」

「…ジューズもあるよね?…」

「うん!それでね…えつと…ゆめのつばささんのサッカーのせんせい  
が、みいのおとうさまなんだよ!」

「え〜…ゆめのつばささんってサッカーせんしゆなの?」

「そうだよ。ゆめのつばささんもサッカーのせんしゆで、につぽんだ  
いひょうなんだよ」

「そうなの?おんなのひとなのにサッカーするの?」

「おんなのひとサツカーするんだよ」

「ねえ、ママ…みいちゃんのパパって、ゆめのつばささんのサッカーの  
せんせいなんだって」

「うん」

「えつ?ママしつてたの?へえ…みいちゃんのパパはサッカーのせん  
せいだったんだ…」

「うふつ…実は、今まで黙ってたけど、ママたち、つばささんと…お友  
達なんだよ」

「えつ?うそだあ…」

「ね?海未ちゃん」

「そうですね。あ、ちよつと待っててくださいね…はい、ひなちゃん  
!」

「おとうさまとおかあさまのけつこんしきのしやしんだよ」

「しやしん?…あ、これが、みいちゃんママ?」

「はい、私です」

「きれい…おひめさまみたい」

「ひなちゃん、それは花嫁さんというのです」

「はなよめさん?」

「そのドレスは、ママが作ったんだよ」

「ママすごい!!」

「ひなちゃんもみいちゃんも、お嫁に行くときは、ひなちゃんママが素  
敵なドレスを作ってあげますよー!」

「わあい!!ひなちゃんママ、ありがとう!!」

「どういたしまして」

「ねえねえ、このひとは？」  
「みいのおとうさまです」  
「かっこういいひとだね！」  
「うん。かっこういいでしょ？」  
「ひなのパパには、まけるけどね」  
「えく、みいのおとうさまのほうがかっこういいよ」  
「ひなのパパだよ！」  
「みいのおとうさま！」  
「はい、はい…ふたりともケンカしないの！どっちのパパもカッコいいよ」  
「はい、ひなちゃんのお父様も、とても素敵なお父様ですよ」  
「えへへ…」  
「ほのかおば…おねえさんは、おとうさまはいないのですか？」  
「へっ？私？私のお父さんはいるけど…」  
「違うよ、穂乃果ちゃん。たぶん旦那さんのことを訊いてるんだと思うんだけど…」  
「うっ！こ、ことりちゃん…知ってたけど…」  
「みそら、穂乃果お姉さんも、そのうち素敵な人と結婚しますよ…」  
「これがひなちゃんのママだよ！」  
「わあ！ママ、きれい！」  
「…って聴いてないし…」  
「この人は？」  
「穂乃果お姉さんですよ」  
「えくいまとぜんぜんちがう…やせてる…」  
「そ、そうだね…その時は今より、少しスリムだったかな…」  
「すこし？」  
「うっ…」  
「うふふ…」  
「海未ちゃん、笑わない！」  
「失礼…」  
「まわりのおんなのひとたちも、ママのおともだち？」

「うん。ほら、ここにさくらお姉ちゃんがいるでしょ？あと、この人が『けいじくん』のママ…この人は真姫先生…『ぽんぽん』のお医者さん」

「あ、ほんとうだ、ほんとうだ！」

「絵里お姉ちゃんに…希お姉ちゃんでしょ…それから、かよちゃんお姉ちゃん…」

「あつ！このひと、テレビでみたことある！さやさんだ！」

「はい。小庭沙弥さんですね！」

「うわあ…みんなきれいだねえ」

「それで…ほら、ここに…ひなちゃんの好きな、A—L—I—S—Eがいて…」

「えく!!ママ、アライズともおともだちなの？」

「最後、はるかちゃんと…めぐみちゃん…そして…ここにつばささん！」

「ほんとうだ！ひな、ぜんぜん、しらなかつた。なんでおしえてくれなかつたの？」

「それは…ひなちゃんが、まだ小さかつたから。でも、少しだけ大きくなつたから、わかるようになったのかな…」

「ふくん」

「あのね、ひなちゃん！みいはおおきくなつたら、にほんだいひようになるんだあ」

「みいちゃんもサッカーやるの？」

「うん！ひなちゃんはやらないの？」

「ひな、ボールあそび、すきじゃないもん」

「えくおもいしろいのに…。いつしよにやろうよ…ボールをねえ、こうやって、ポーンってけるんだよ」

「ポーン！」

「みそら！うちのことでボールは蹴らないでください！」

「ごめんなさい！…えへへ、おこられちゃった…」

「ふくん…みいちゃんは大きくなつたら、サッカーせんしゅになるんだ…」

「ひなちゃんは？」

「ひなはね…みいちゃんのおともだちになるの」

「えく、いまだっておともだちだよ」

「ちがうよ、おおきくなっても、ずっとずっとおともだちでいるんだよ。だってママとやくそくしたんだもん。いつまでもみいちゃんと、なかよくしてね…って」

「ごとり…」

「えへへ…」

「優子監督！」

「…つばさ！…じゃなかった、綾乃…」

「現役を引退して、夢野つばさの看板を下ろしてから、もうすぐ1年経つんですけど…いまだに慣れてくれないんですね」

「ごめん、ごめん…」

「そういう私も、どっちで名乗ろうか迷う時があるんですけどね…」

「沙紀がまだ現役で頑張ってるのに、なんであなたは辞めちゃったかなあ？」

「すみません。でも、もういっぱいいっぱい。体力の限界ってヤツです」

「千代の富士か!？」

「はい？」

「ううん、なんでもないわ。でも…まあ、そうね。ドイツに渡って10年だっけ」

「そうですね…10年弱？」

「その間、5度のリーグ優勝とMVP、得点王になること4回。女子のチャンピオンズリーグで優勝2回。日本代表じゃワールドカップに



3回出場して優勝2回、準優勝1回。オリンピックも2回出場して優勝1回、3位が1回…確かに、もう、やり尽くしちゃったか」

「よく、そんなにスラスラ言えますね」

「当然でしょ。あなたと沙紀は、私の教え子で…誇りなんだから…」

「ありがとうございます…。それより話って？」

「あなたに見せたい娘がいるの」

「見せたい娘？サッカー選手？」

「大和シルフィードに現れた天才少女」

「天才少女…ですか…」

「監督になって5年…こんな逸材、初めて見たわ」

「それほど？」

「びつくりするわよ…えつと…あ、あそこ…今、あそこでリフティングしてる娘…」

「ブルーのジャージの？」

「そう」

「ちっちゃい…」

「ふふふ…それはね、まだ小学1年生だから」

「えつ？それであのボール捌き？…正直私より上手かも…」

「…ねえ…あのリフティング…誰かを思い出さない？」

「誰か？…つて…あっ!!…まさか…」

「綾乃…」

「はい？」

「あなたと沙紀は、いずれ日本代表の監督かコーチになると思うんだけど」

「えつ？」

「その前に、ここでコーチをやってみない？」

「コーチ？私が？」

「そして、あの娘を育ててみない？」

「…」

「彼への恩返しだと思って…」

「彼への…恩返し…」

「うん」

「優子さん…」

『さあ、日本代表までしこジャパン！オリンピックの大事な初戦を迎えます。』

『緑川沙紀、夢野つばさ、森嶋菜々らを擁した黄金世代が代表を引退してから、ここ10年…日本は国際大会での優勝がありません。オリンピックでは12年前の優勝を最後に、前々回が準優勝、前回大会ではベスト8止まりでした。ワールドカップも2連覇した後は、4位、予選リーグ敗退…。捲土重来、再びあの強すぎて、世界に羨まれた日本女子の力を見せ付けることが出来るのか？』

『日本代表を率いるは和泉沙紀監督と松原綾乃ダイレクター（※コーチ）…いや、緑川沙紀と夢野つばさ…日本が世界に誇ったゴールデンコンビと言った方が、通りが良いでしょう。20代の前半から日本の女子サッカー界をリードし、黄金期を作り上げてきた2人が、今

度は監督とコーチとして世界に挑みます！

《そして今日の対戦相手はブラジル。その2人が22年前にオリンピックで対戦したときは、2―5で敗れてしまいました。奇しくも、その時のエースで大会の得点王だったのが…相手ベンチで腕組をしているマリア監督です。

《和泉監督も松原ダイレクターも、マリア監督とはフランス、そしてドイツでチームメイトだったこともあり、公私とも非常に仲が良いとのことです。試合前のインタビューでは両監督とも『お互いの性格、手の内は充分にわかっているだけにやりにくい』と、同じようなことを語っていましたが…果たして…。

《日本はアジア予選を7戦全勝。圧倒的な力で勝ちあがってきました。敵はいません。

《しかしここからは違います。現在のFIFAランクは日本が3位、ブラジル5位。ですが、過去10年間の対戦成績は、2勝7敗5分と相性が悪い相手。とはいえ、この戦いにおいては、一切そんなことは関係ありません。必要なのは勝利のみ！

《そしてその勝敗の鍵を握るのが…『日本の若きエース』『サッカーの申し子』『天才』『フィールドのプリンセス』…どんな形容詞ですら陳腐に思えてしまうほどの才能の持ち主『高野みそら』！弱冠15歳。

《父はご存知『悲運のエース』と呼ばれた、故 高野梨里さんです。《お父さんは、残念ながらオリンピックピックの本戦も、ワールドカップの舞台も、そしてスペインのピックも…いずれも立つことなく、この世を去りました。みそら選手が3歳のときでした。しかし、その遺伝子と魂は、確実に彼女へと受け継がれていました。

《卓越したボールタッチのドリブル、そして独特のリズムから放たれるコントロールショットは、まさに梨里さんのプレーそのもの。さらに幼少期より、今ベンチにいる松原ダイレクターの指導の下、フィジカルコンタクトの技術も磨いてきました。

《松原コーチ：つまり夢野つばさコーチが『高野梨里さんにサッカーのイロハを教わった』という話は有名ですが、今度はその娘を、自分がエースに育ててきました。昔から『縁は異なるもの味なもの』といいますが、これがまさに『運命』というものなのでしょうか…。

《そして、その高野みそらとコンビを組むのが…相手の守備網をズタズタに切り裂くスルーパスの持ち主…『ピッチの空間デザイナー』の異名を持つ『内田陽菜』。母は世界的なウエディングプランナー『南ことり』さん。

《名前は『ひな』ですが、切れ味鋭いパスは、高い位置から急降下し、一瞬で獲物を捕まえる鷹の様子に擬(なぞら)えて『ホークアイ』と呼ばれ、数々の得点シーンを演出してきました。

《高野みそらとは『生まれた時からの幼馴染』で、そのコンビプレー、阿吽の呼吸は、今、ベンチにいる監督とコーチの『ゴールデンコンビ』を凌ぐと言われています。

《今、画面では…スタンドの様子が映し出されていますが…こちらは2人の母親…高野海未さんと南ことりさんですね。ああ…海未さんの手には、夫 梨里さんの遺影が見えます…。きつと、天国から娘のプレーを見守っていることでしょう。

《ピッチの上空を見上げれば、雲ひとつない快晴です。果たして…雛はこの美しく晴れ渡った空の中、夢のつばさを羽ばたかせ、自由に世界を飛び回ることができるのか!?

《さあ、今、運命のキックオフです!!

〜第4部 完〜

オレとつばさと、ときどき  
s  
〜  
W  
i  
n  
n  
i  
n  
g  
W  
i  
n  
g  
s

外伝  
〜終〜

あとがきのこと

あとがきのこと①

【Winning Wings…について】

『Winning Wings（以下、旧作と表記します）』は、私が2010年頃に、某携帯ゲームの『日記』に書いていた作品で、友達登録をした方だけに読んで頂いておりました。

その当時「そういえば、女の子を主人公にしたサッカー漫画ってないよなあ」と思ったのがキツカケで、最初に目指したところは『女子版キャプテン翼』でした。

…なので『夢野つばさ』『緑川沙紀（みさき）』の2人は完全に『それ』を意識したネーミングになっています。

その翌年に『なでしこジャパン』がワールドカップで初優勝して、日本中が熱狂するわけですが…以前から盛り上がるのは代表戦だけで、国内リーグは惨憺たる状況でしたから…おこがましくも自分なりに何かできないかな…と思ったのでしようね。

もちろん、だからと言って、何もできませんでしたが。

（察しのいい方はお分かりかと思いますが）タイトルはサッカーゲームの『Winning Eleven』から、拝借しております。

内容は、概ね今作第一部の通りです。

『藤綾乃』が夢野つばさとなり、女子サッカーに挑戦してデビューするまでのサクセスストーリーです。

もう少し、バレーボールの描写が多かったでしょうか…。

綾乃の小学生時代のポジションは『ウイングスパイカー』でしたが、当然これもタイトルに引っ搔けて…です。

しかし、彼女は中学に入り、セッターへの転向を命ぜられます。

これは現実世界において、私が『世界最小にして世界最強』と詠わ

れた『竹下佳江』選手の実力を認めつつも「今後、あと10cm、いや：あと20cm背の高いセッターが現れないと、日本は戦えないだろうなあ」と思っていた為、その辺りのことが大きく影響しています。余談ですが、昨年引退した『サオリン』こと『木村沙織』選手が、もしセッターに転向をしていたら：などと夢想することも多々ありました。

※ご存じの方も多いと思いますが、彼女はエースアタッカーでありながら、守備も上手く、トスアップの技術も非常に高い選手でした。

サッカー選手になった夢野つばきは：右のウイング（FW）：キャプテン翼というなら『ライン際の魔術師 滝くん』のポジジョン：という設定だったのですが、最近のシステムではすっかり使われなくなってしまう、どちらかという死語になってしまったので、今作ではそこに拘らずトップ、トップ下、サイドハーフまでこなしてもらっています。

旧作の時には、どちらかという学園生活がメインで：今作では割愛しましたが：（幼い時に父親を亡くした影響でファザコンの気がある）綾乃が、編集長の『永井』に想いを寄せてみたり：その永井が母親に好意があることに気付き、シヨックを受けたり：ゲー校の同級生である『島崎涼子（通称：お圭）』に執拗に苛められたり：『浅倉さくら』や『田中萌絵（星野はるか）』『鈴木かのん（水野めぐみ）』と仲違いしたり：といったエピソードを盛り込こんでみました。

そういえば、旧作でのさくらはもつと『仕事で見せる顔』と『学校での顔』との違いがハッキリしていて：『人気が出てきて調子に乗る同級生（男子生徒）』に対し、キレた彼女が『机を蹴り上げて怒（いか）る』という：割と気性の荒いキャラでした（ただし、性格が悪いというわけではありません）。

プロットの段階では『綾乃の父親を撥ねた犯人』が『（幼いころに離別した）さくらの父親』：という設定だったのですが、自分の中で消化できそうもなかった為、採用しませんでした。

ちなみに：さくらの苗字は当時から『浅倉』なのですが：これが後年、今作に繋がろうとは：夢にも思わなかったです。

前述の『人気が出てきて調子に乗る同級生(男子生徒)』は：実は『高野梨里』と『綾乃を巡る恋のライバル』になります。

しかし、在学中に不祥事を起こし退学してしまい、梨里とは直接対決することなく姿を消しました。

それこそ、キャプテン翼の『あねご(早苗ちゃん)』を巡る『翼くん』vs『神田くん』みたいなシーンを考えていたのですが、あまりにもベタ過ぎるのでやめたという感じ です。

そのほか、今作では描かれなかった人物として：『関西弁で喋る落ち目の作曲家』：『たんく』というキャラがいました(モデルになっている人物が誰かは、皆さん容易に想像できると思いますが…)。

彼は：つばさ、はるか、めぐみのユニット『シルフィード』のプロデューサー：で、その卓越した企画力により、見事音楽業界のトップに返り咲きます。

ですが、今作のでは諸般の事情により、出演は見送りました。

【ラブライブ：について】

私がラブライブを知ったのが2016年：たまたま娘がEテレでの再放送を観ていたのがキツカケでした。

確か、第4話だったと思います。

ラブライブという言葉だけは知っていた私…。

最初は「ああ、そういうえば声優で組んだユニットが紅白に出たとか言ってたなあ」くらいの認識しかなかったのですが：それを見て以降、すっかりハマってしまい：後追いでCDを買ったり、ライブ映像を見たり：と研究を重ね(?) いわば梨里同様『にわかラブライバー』になってしまいました。

ついでに言えば、スマホのゲーム(スクフェス)を始めたのも、ほ



んの1年ほど前のことだったりします…。

今作のテーマのひとつに『IFの世界』というのがあるのですが…  
「もし、あの時、あそこで娘が観ていなければ」…私はラブライブに出  
会うことは無かったかもしれません。

希の台詞を借りるなら

「これを運命と言わずしてなんという！」

という感じです。

そんな私が初めて書いたラブライブの長編小説が、前作『Can't  
stop loving you』(花陽ちゃんへの愛が止ま  
らない)(以下、前作と表記します)で…かよちんファンの私として  
は「もつと彼女はクローズアップされるべきだ!」「彼女こそがμ's  
の要(かなめ)だ!」…と思っていた為、そういう気持ちをぶつけて  
みました。

そして、その時から思っていたことが(作品の中で海未に言わせま  
したが)『ユメノトビラ』かあ…そう言えばオレ『夢野つばさ』を主  
人公に作品を書いたなあ」ということです。

ただこの時は、次回作のことなど、まるで考えていませんでした。

【コラボについて】

過去の作品と、ラブライブのコラボを思い付いたのは、連載終了か  
らしばらくしてからのことです。

『ユメノトビラ』と『夢野つばさ』については、上記の通りなのですが  
…ある時、ふと気が付きました。

旧作の主人公と、その彼氏の名前…そして絢瀬絵里…

…『綾乃』…『梨里』…

…『あやの』『絵里』…

…『あやせ』『絵里』…

「あれ?似てるかも」…などと思い…これを活かした物語が書けるん  
じゃないかな…と考えるようになったのです。

…と、いうことで…当初の構想だと、海未ではなくて絵里が主役でした。

しかし、すぐに「いやいや、やっぱり『夢野つばさ』に対するは『綺羅ツバサ』だよ。元々のタイトルは『Winning Wings』なんだし」と思い、彼女を主役に据えようとしたのですが…自分にはツバサというキャラを扱うのは難しいと判断して却下となりました。

次に浮かんだのが…『つばさ』↓『羽』↓『鳥』…ということでした。

今作では、海未と梨里の出会いが交通事故によるものだったのですが…ことりの場合は『ストーカー』に付きまとわれているところを、またま通りかかった梨里が救う』でした。

ベタですね…。

ただ、ことりだと…梨里があつという間に彼女に骨抜きにされてしまい、単なるNTRの物語で終わってしまいそうなイメージ…しか沸かなかつた為、こちらにも採用には至りませんでした。

作中ではところどころ、梨里がことりに靡（なび）きそうな描写があります。それはこの時のプロットの名残（なごり）です。

では、どうしようか…。

いろいろ考えた挙句、白羽の矢を立てたのが海未でした。

これもまったくの偶然なのですが…梨里の幼少期のあだ名が（『リサ』や『リリー』であったことから『リリホワ』の3人に絞り込み…その中で…恋愛事に一番縁遠そう…という理由で彼女を選びました。

【前作からの続編という扱い…について】

さて…旧作とラブライブとのコラボ…ということは思い付いたものの、漠然としすぎていて具体案はありませんでした。

ただ、折角、前作で1年近く自分なりに、sのキャラを作ってきたのだから、単発で終わらすのは勿体無いなあ…とも思っていました。

そんな気持ちに『続編作成』の後押しをしたのが、旧作に登場した、

次の2人の存在です。

まずは『浅倉さくら』。

前作で『ことりの母親（理事長）』の旧姓を『浅倉』と勝手に設定していました。

これは声優さんが『タッチ』の『南ちゃん』だったことから『浅倉南』↓『南〇〇』というだけの理由です。

しかし「そういえば…旧作の準主役は浅倉さくらだったよなあ…」と思った瞬間「ハッ」としました。

そして、もう1人。

旧作では『大和シルフィード』をバックアップするスポンサーとして『IT企業の社長（当時は名無し）』が登場します。

彼は真剣に女子サッカーを盛り上げたいと考える一方、なかなかの野心家でもあり…『萌え要素たっぷり』の『プロサッカーチームを作ろう（サカつく）の女子版』…を開発・販売し、大ヒットを飛ばす…というアキバ文化に理解のあるキャラでした。

そして前作にも『水谷』という、ラブライブのアキバドーム開催に尽力したIT企業の社長が登場します。

今思うと…こちらは逆に、旧作のキャラ設定が潜在意識の奥に残っていた可能性があるのですが…連載当時はまったく気付いてませんでした。

『夢野つばさ』と『ユメノトビラ』…『あやせ』と『あやの』…『梨里』と『絵里』…『つばさ』『ツバサ』『ことり』…『リリー』と『リリホワ』…『理事長の旧姓』浅倉』と『浅倉みなみ』…そして『IT企業の社長』…。

様々なキーワードが絡みあった結果、自分の中で…旧作と前作の…『約7年間の時空が繋がった』気がしました。

そして前作の設定をそのまま活かして『よし！続編にしよう』という結論に至ったのです。

~^~U~

## あとがきのなこと②

【オレとつばさと、ときどきム☒s…について…】

ストーリーとして決めていたのは『夢野つばさでなく梨里を主人公とすること』と『そこに海未を絡ませること』くらいで、ゴール（結末）を設定しないまま、半ば見切り発車的に連載を始めました。

後述しますが、スタートの段階では梨里の結婚相手を誰にするか、固めていなかったのです。

いえ、最後まで決めていませんでした。

故に：頂いた感想の返信などで何度か触れておりますが、良く言えば：書き進めるごとにアイデアが沸くタイプ：なので、自転車操業的といえますか、行き当たりばったりといえますか：自分でもどんな展開になっていくのか、まったく予想ができませんでした。

そう言いながらも、過去のエピソードと矛盾が生じないよう：物語が破綻しないよう：というところはだいぶ気を使いましたが。

前作からの続編とした為、なるべくその時の登場人物やエピソードを流用しようと思いつながら、ストーリーを作りました。

真姫に度々「：タートル」と間違えられるメンバーのひとり『中目黒結奈』などは、その代表格なのですが：彼女たち4人の名前には、ある共通点が隠されています。

気になった方は探してみてください。

ちなみに『前作から出演させそくなったキャラ』として『希御用達のランジェリーショップのお姉さん』と『凜が通うラーメン屋の店員』がいます。

特に後者は、前作の中で『りんぱなどの関係』の伏線を張っておきながら、回収しないまま終わらせてしまったので、今作でフオローす

るつもりでしたが…完全に忘れてしまいました…。

今更ながら『凜の彼氏』はこの店員という設定でもよかった気がします。

なお最終話でことりが娘に写真を見せながら「この人は誰、この人は誰…」と説明しているシーンにおいて、凜の名前はありませんでしたが「けいじくんのママ」というのが彼女です。

何故『けいじ』なのかは…こちらも作中にヒントがありますので、推測してみてください。

オレ…こと高野梨里は、私の化身です。

外見やスペックは似ても似つきませんが…彼の考え方や発言…は、わりと私が思っていることを代弁してもらっています。

今作のテーマは、いくつかあるのですが、そのひとつが『IFの世界』です。

このことは、わりと早い段階で梨里が語っておりますので、ここで私が述べるのもどうかと思いますが…「自分が自販機でコーヒーを1本買っただけで、もしかしたら未来が変わってしまうのかも」…と思うと、不思議な気がしませんか…。

…とはいえ、傍（はた）から見ると、アスリートでありながら理屈っぽくて、もし付き合うとなったら面倒なヤツだと思えます。

相手が海未だったから、色々、話を聴いてもらえましたが…他のメンバーだったら、きつと上手いかなかっただろうなあ…という感じですよ。

そういえば、梨里の名前の由来を書いていなかったですね。

『たかの りさと』は、そもそも私の本名のアナグラム（並び替え）で、普段でも（ゲームなどをする場合などでは）良く使っています。

したがって、まず、この名前ありき…で作品が作られています。

今作の設定としては…彼が生まれる3年前に母親は流産しており、その子に付ける名前が『百合』だった…です（某ビューティークリニッ

クとは、なんの関係もありません)。

作中でも触れておりますが『百合』を英語にすれば『Lily(リリー)』となり…夫婦は、新しく生まれた命に『彼女の名前』を密かに宿していたのです。

しかし2人はこれを一生の秘密として、梨里に明かすことはありませんでした。

彼に『彼女の人生』を背負わせるような…余計な負担は掛けたくないと考えたのでしよう。

誕生前である為、当然、戸籍には載っておらず、周囲でそのことを語る者もいなかった為…彼は自分の名前の由来の真相を知ることなく、この世から旅立ったのでした。

流産のキツカケが、横山一族によるものだった…と一瞬考えたのですが、それは余りにしつこいのでやめました。

「ただ、まだ命を落としたわけではないので、今は私たちが悲観的になってはいけません…そう、頭を切り替えました。悲しい気持ちは家に置いてきたのです。ですから…今は…回復を祈る、それだけなのです」

梨里がICUにいる時、彼の父親が述べた言葉の裏に、実はこのことがあったからこそ…だったのです。

自分で言うのもなんですが、意外と(?)真面目に考えてたんですね…。

さて梨里と海未との出会いは『交通事故』で…のちに加害者の少年は、つばさの父親を撥ねたドライバーの息子…ということが判明するのですが、これは前述した…旧作で私が消化できないと思い採用を見送った『さくらの父親が犯人だった』…という設定を流用しました。

7年の時を経て、花開いたというところでしょうか。

夢野つばさ…こと藤綾乃は、海未とは別の意味で健気な女性です。人前では決して弱さを見せず、常に気丈に振舞ってきました。

その分、彼女が唯一、素直になれる場所…浴室のバスタブ…で、ど

れだけ涙を流したのか…。

作品を振り返ってみれば、反省点はいくつもあるのですが、もつともっと彼女のその部分を書いてあげればよかったなあ…と思っています。

ちよつと、アツサリしすぎました。

そういう意味では、緑川沙紀も人物像を描き切れなかったひとりです。

旧作では、つばさと梨里の関係に嫉妬して、彼に「別れるよう」迫ったりします。

その上で『つばさを好きな梨里を、沙紀が好きになってしまう』という難しい役どころを演じてもらう予定だったのですが…そのあたりの心情を掘り下げることなく、終わらせてしまったのは少し後悔しています。

綾乃の中学生時代のライバル『山下弘美』の自殺の原因については、旧作では謎としておりました。

これは当時の話の展開で『性的虐待』などというのは、あまりそぐわなと思っていたからです。

完全に自己満足で、皆さまにはまったく関係ない話ですが…自分としては今作で消化できて良かったです。

先に述べましたが、当初は綺羅ツバサを主役に据えようかとも考えていました。

最終的にそれはボツとしましたが、どうしても『つばさ×ツバサ』というのは残したくて、無理やりA—RISEを絡ませました。

彼女たちが出演してくれたことで、物語に幅を持たせることができたのかな…と自負しておりますが、その結果『チャリテイライブ開催』などと口走ってしまい…私自身の首を絞めることにもなりました。

今文中でライブは『年末』と言っていたのが『3月』に変更されたのは「どうせなら『Aquour』も出演させよう」と欲張ったからですが…そのシーンを書く準備が出来ていなかった…というのが実情です。



※『サンシャイン』については、別途、述べさせ頂きます。

選曲は迷いに迷いましたが『アニメに準拠』と制約を付けた分、無難なところに落ち着いた感じでしょうか。

書いていて、つくづく「難しいなあ」と感じたのは、音楽を文字にすることです。

自分の力量のなさを痛感しつつ、読んで頂いている方々に申し訳ないという気持ちでいっぱいでした。

『知らないうちに終わっていた』という『ラブライブシステム』を採用しようか…と思ったほどです。

『花陽のトラブルで、曜が代役』…というのは『Aquours』を出演させようと決めたときから、アイデアとしてありましたが…『ワンコーラス歌ったあとに、ご本人登場』という案を最後の最後まで捨て切れず、UPする直前まで悩みました。

それはそれで面白かったと思うのですが…いかがでしょうか…。

困ったのはサンシャインのアニメ展開が『アレ』だったので、決勝に出れるのか？優勝するのか？がまったくわからなかったことですね…。

…ということで、今回はサンシャインについて、少し語らせて頂きます。

くつづく

### あとがきのこと③

【サンシャイン…について】

人それぞれ考え方が違うと思いますので、気を悪くされたらすみません。

あくまで私の感想です。

ご意見、反論等あれば承ります。

作品全体を通して感じたことは『廃校問題』がメインで『ラブライブ』が添え物だったということでした。

一期はなんとなく、μ、sの真似をするのではなく『自分達は自分達』と、道を模索する様(さま)が描かれていて、それなりに納得したのですが…。

二期は…無駄な…或いは一期の中で済ますべき…エピソードが多く、なかなか本筋が進まない展開。

話は少し逸れますが…『善子が仔犬を拾って…』という話がありました。

内容としては嫌いではありませんが…私が遊んでいる『スクフェス』のμ、sサイドのメインストーリーで、たまたま『音ノ木坂に迷い込んだ仔猫をメンバーが面倒をみる』というエピソードをプレイしたばかりだったので「まんまじゃん!」と思って笑ってしまいました。

函館で2話も費やす必要性も疑問に思いましたし…『姉の為に作った』と言いながら、2〜3年の6人が何の打ち合わせもなしに一緒に歌ってしまったシーンには、しばらく目が点になりました。

一期最終回のライブ会場でミュージカルも「??」でしたが…。

廃校の問題にしても『最後の最後まで足掻こう』という感じは見られず『時間が過ぎるのを待つだけ』で…曜は寝ちゃってますし…真剣さが足りないと言いますか…。

そして、なんとと言っても『ラブライブ』というタイトルでありながら、肝心な『本大会のシーン』を省略するという一番の謎。色々な見方はあると思いますが…。

登場人物についても、共感できるポイントが少なかった気がします。

私の別作品の中で軽くデイスらせて頂いてるのですが…『Aqours』って9人いる意味があまりないよね』…と思っていました。何故なら…『作詞』『作曲』『衣装』…2年生の3人で事足りてしまうからです。

…というのは、半分冗談ですが、個人的に9人のキャラクターにあまり魅力を感じなかったのは事実です。

かよちゃん似ということ、最初は『曜推し』だった私ですが、彼女が余りに万能過ぎて、途中から引いてしまいました。

そうかと思えば…その反動なのか二期になると…まったく存在感がなくなり、空気と化して…千歌との関係は、完全に梨子の次へと落ちていきます。

例の『ロンバク』のシーンなどは、千歌になんのアドバイスもせず、ただの傍観者になっていましたし「なんなら、キミがやった方が早いんじゃないか？」とも…。

経験者(?)である3年生ですら「やりたきや、やれば」みたいな感じで、千歌任せにしていたように思います。

花丸は花丸で、元々はルビイの為を思って入部した…心優しい、読書好きな少女だったはず…なのに、いつの間にか、ただ食べるだけのキャラになってしまいました。

穂乃果と花陽のようなダイエツトイベントもなく、まったくスクールアイドルへの意識がなかったのも残念です。

さらに言えば、『函館のシーンで「もう少し、彼女の為に東奔西走するような…『ルビイとの親友感』…みたいなのが出せなかったのだから

うか」…とも思います。

先に述べたように、函館行き自体、不要だったと感じてますが。

果南もビフォアアフターが変わりすぎで…絵里も似たようなパターンでしたが…彼女の方がポンコツ具合が酷いような…いえ、主観の問題です。

S a i n t S n o wの立ち位置も良くわからなかったですし…。

…と、まだまだ、言いたいことは山ほどありますが…文句ばかり言っても仕方ありませんので、それはこの辺りまでにしておきます。

そういう意味で、なかなか彼女たちに感情移入できず、今作に絡まることが難しかったのは間違いないです。

そこで、自分だったらどんなストーリーにするか考えてみました。キャラ設定はこんな感じです。

余裕があつたら、いつかSSを作ってみようかな…と思います。

## #登場人物

### 『千歌』

高校1生の時に、秋葉原へ出掛けた際、大型ヴィジョンでμ'sを観て以来、彼女達に憧れるようになる。

「スクールアイドルを始めよう!」と親友の『曜』を誘うも断られてしまい、その後はひとりμ'sのマネをして楽しむのが趣味となる。『曜』

千歌の親友。

彼女からスクールアイドルの誘うを受けるもの、本業である『高飛び込みとの両立』が難しいことと『音痴』を理由に断る。

しかし、その高飛び込みで極度のスランプ（イップス）に陥り、弱気になったところを千歌に付け込まれ『気分転換程度』の意識でス

クールアイドルへの参加を了承する。

『梨子』

音ノ木坂からの転校生で、ピアニストであることから、千歌から『真姫さんになって欲しい』と熱心に勧誘を受ける。

当初は『楽曲提供だけならしてもいい』という条件で、ステージには立たなかった。

『ルビィ』

千歌同様、幼い頃からアイドルに憧れていた。

彼女たち(千歌と曜)のファーストステージを観て、そのクオリティの低さに驚くも、同時にその勇気と行動力には感銘を受け、仲間に入れて欲しいと直訴する。

しかし、千歌は意外にも「やりたいのなら、自分たちで始めればいい」と言い、返事は『ノー』であった。

『花丸』

ルビィの親友。

彼女のが、スクールアイドル入りを断られたことに腹を立てるも、何も出来ない自分に悩む。

しかし、一念発起してルビィとユニットを組もうと決断する。

『善子』

花丸の幼馴染み。

いわゆる『厨二病』に侵されており、友達も少ない。

花丸がスクールアイドルを始めたのを知り嫉妬するが、後に『世界中に自分のリトルデーモンを育てる』と彼女たちのユニットに参加する。

しかし本心は「自分を変えるキツカケになれば」だった。

『鞠莉』

学校の生徒にして理事長。

かつて廃校の危機から救ったμ'sについては、関係者の間で『音ノ木坂の奇跡』と言われており、当然、彼女も知っていた。

そして、まさに自分がその境遇に立たされ、その再現を目論む。

だが、千歌からは「学校に利用されたくない。ラブライブを目指す

ことと、それとは別」と拒否され、ルビイにも「そんな大役は荷が重い」と断られる。

『ダイヤ』

ルビイの姉で、生徒会長を務める。

かつて自らスクールアイドルをしていた経験から「中途半端にラブライブを目指しても、傷付くだけ」と、彼女たちの活動を全面否定。

鞠莉のアイデアも「甘い」と非難する。

『果南』

千歌とは幼馴染みだが、歳はひとつ上。

彼女たちの良き理解者だが、自らの参加は拒否。

鞠莉とダイヤの間で板挟みになるものの、やがて一挙両得の手段を画策する…。

すみません。

最終的には（スクフェス内でのキャラ設定含め）今は『梨子』が一番お気に入りのキャラです。

梨里と名前も似てますし…。

くつづく

## あとがきのこと④

【終わりに】

前作では花陽をフィーチャーしましたが（最終話で『アメリカに旅立った』という設定にした為）今作は出演を控えてもらいました。

彼女はオンラインピック観戦、チャリテイライブとも遅刻して登場するわけですが：そういう意味では花陽が来るⅡ9人が揃うⅡμ、s：というような特別感を出せたのかなあ：と思います。

スターは最後に参上：って感じてでしょうか。

前作は：『希編』『真姫編』『にご編』『ほのか編（雪穂編）』『ことり編』『みんな大好き編（絵里・海未編）』：と章が分かれています。

しかし絵里と海未については、ひと括（くく）りになってしまっしまいました、個人的には不完全燃焼でしたので：コンドミニウムでの部屋割り、その3人を一緒にしました。

これも結果として、前作のエピソード（解散を発表した海岸からの帰りの電車のシーン）を活かすことができたので良かったと思っます。

特に『朝食の支度のシーン』は、その時に絵里が明かせなかった『花陽への想い』を吐露することができ、私としてはようやく『えりばな編』が終結したという感じですよ。

そして、この前作の絵里編が『今思うと』今作に繋がる大事なパートで：『A q o u r s の黒澤姉妹がなぜ絵里推し・花陽推しになったのか』：という根拠になっています。

前作をご覧になった方ならわかって頂けるかと思いますが、個人的にはこれを書いておいたおかげで『なぜ彼女たち（千歌、ダイヤ、ルビィ）にとってμ、sが特別な存在なのか？』『なぜ同じステージに立ちたいと思っていたのか？』という説得力を持たせることができ、尚且つ、楽屋のシーンに上手く展開できたと自負しております。

従って、ここで『えりばなのエピソード』を挟んだのは、後々登場

する彼女たちとの関係性を強調する為でもあり、私の中では、わりと重要なシーンとなりました。

「行き当たりばったりで書いている」と言いながらも、これについては多少先のことを計算していた感じですよ。

しかし結果論ですが、その花陽と絵里が、梨里と直接絡むことなく終わったというのは、自分でもとても不思議に思っています。

当初は絵里を主役に据えよう！…と思っていたにも関わらず…です。

恐らく、私の中で「おっぱい星人の梨里がこの2人に会っちゃうと、どんどん海未から離れていくだろうなあ」という気持ちが無意識に働いたのかもしれませんが。

前述しましたが、ゴールを決めずに書き始めたことも含めて、青年になった梨里のキャラはあまり固まっていますでした。

最終的には、つばさから『口だけ番長』と言われるような…そこまで非道な人物ではなくなっていました…途中までは『めぐみ』『あんじゅ』『希』『絵里』『花陽』『ことり』たちに手を出しまくる…という展開も考えていました。

どうでしょう？そっちの方が面白かったですでしょうか…。

…とはいえ、書いているうちに「それは内容とマッチしないなあ」と思ふようになり、ニュアンスだけを残してみました。

従って『海未が見た夢』が、本筋になっていた可能性は否めません。

梨里と直接絡まなかったキャラで言えば、凜とにこそそうですね。仮に絡んだとしても、梨里は彼女たちにまったく興味を示さなかったかもしれないですよ…。

ただし書いている側としては彼女たちと希はとても貴重な存在で…セリフの語尾に「…にゃ」を付ければ凜……関西弁にすれば希…だとわかってもらえます。

にこは（前作から一貫して一人称を『アタシ』、二人称を『アンタ』と表記してきたのも踏まえて）、口調からわかって頂けるかな…と



思っております。

つまり、この3人は『ト書き（…と言った…という説明文）』を入れてなくても会話が進むので、すごく使い勝手が良いキャラなのです。

彼女たちがいると、そのシーンはスムーズに進み、スピード感が全然違います。

逆に言えばそれ以外のメンバーのセリフ回しには、すごく苦勞しました。

自分で読み返して「これ、誰が言ったんだろう」みたいなセリフは「○○ちゃんの言う通り…」と後ろの人が固有名詞を口にしてフォローするという苦肉の策を取りました。

このパターンが出てきたら「それなりに苦勞したんだなあ」と、思ってください。

さらに言うなら、梨里と真姫はもう少し絡ませたかったですね。

こちらは上記の巨乳組とは違って…梨里が…というより、真姫の方がほとんど彼を意識してしまうとう展開で…『つばさと海未の関係』から『海未と真姫の関係』というストーリーに移行するつもりでした。

しかし、それを書いていくと、話がダラダラと長くなりそうだなあ…ということ、断腸の思いで割愛しました。

初詣の時に梨里が倒れたシーンでも、彼女の病院に連れて行くかどうか相当悩んだのですが…オリンピック観戦時に「冬休みになったらアメリカに旅行に行くから」的な発言をさせていた為に見送りしました。

将来的に、彼女が彼の主治医になる…ということも一応考えてはみましたが、自分の中で真姫は、外科医というよりは内科医というイメージだったので、それもボツにしました。

そして、本当に最後の最後まで決めかねたのが、梨里の結婚相手です。

ずっと、一発逆転で『ことり』という案を捨て切れずにいました。

これは、先に書かせて頂きましたが、当初は彼女が主役…というプロットもあつたので、それに引きずられた感じですが。

ただ「それではあまりに海未が報われないだろう」と思い、最終的には落ち着くところに落ち着きました。

ちなみに、ことりの娘は『内田陽菜（うちだひな）』としましたが、苗字は考えるのが面倒くさくなり、中の人の名前を借りました。

最終話でアナウンスサーが、母親は『南ことり』と言っており、親子で姓が違うのは、ことりが離婚したわけではなく、彼女が『アーティスト名』を旧姓のまま使用している…と理解してください。

梨里と海未の娘は『みそら』と言います。

漢字で書けば『美空』です。

『自分の名前の呼ばれ方（読まれ方）』にコンプレックスを持っていた梨里は、彼女が『みく』と読まれることを嫌って、敢えて平仮名にした…という設定です。

もちろん『海（未）』に対して『（美）空』だということは、容易に想像が付くと思いますが…もしかしたら『つばさ』『ことり』というワードが彼の潜在意識の中にあり、そこからインスピレーションを得た…ということは否定できませんね。

海未が、それに気付いていたかどうかは定かではありませんが。

世の中は矛盾だらけです。

理不尽なことに苦しんでいる人はたくさんいるでしょう。

それでも時間は止まらないですし、戻りもしません。

この作品では色々なことを問題提起させて頂いてますが、その多くが、簡単には解決できないものばかりです。

作品を書いている最中にも、様々な事件が起き、随時、盛り込んでいきました。

その為、あれこれ散漫な感じになってしまいましたが、根底にあるテーマは同じです。

被害者と加害者のプライバシー、知る権利と報道の自由、ネットリテラシー等々…。

そして何が正義で、誰が正義なのか。  
きつと永遠に答えは出ないのでしょね…。

実は今作のテーマは『デビルマン(コミック版)』がベースになって  
います。

古い作品ですので未読の方も多いと思いますが、デビルマンはコ  
ミックとアニメではまったく内容が違います。

機会があつたら読んでみてください。

作中のどのあたりがそうなのか…「ああ、なるほどね」と感じて頂  
ければ、作者冥利に尽きるというものです。

最終話については、かなり唐突な終わり方をさせたな…と自分自身  
でも思ってます。

もつと色々、間に挟みたいエピソードがありました。

梨里が苦闘しながら復帰するまでとか…それを支える海未の様子  
とか…2人が結婚に至るまでとか…。

そこまで辿り着くのに紆余曲折があつただろうし、μ'sのメン  
バーたちも順風満帆ではなかったハズです。

そして梨里の死後、海未はいかにして立ち直つたのか…。

取り敢えず今は、一旦完了としてしまったので、すぐには書けない  
ですが…気が向いたら『エクストラステージ』と称して、更進しよう  
かな…とも思ってます。

従って『連載完結』にはせずに、しばらくは『連載中』としておき  
ます(もしかしたら別作品として短編にするかもしれませんが…)。

ちなみに不定期連載ですが『アナザー サンシャイン!!』という作  
品を書き始めました。

飽きつぼくて、申し訳ございません。

興味があつたら、覗いてみてください。

最後に…正直、この作品を楽しんで頂けたかどうか、自信はないのですが…お気に入り登録頂いた方々、コメントを頂いた方々、そして一度でも読んで頂いた方々…本当にありがとうございます。改めて御礼申し上げます。

では、また…。

エピソード集（チャリティーライブからの後日談）  
海未の誕生日

「本当に忙しい下期になりましたね…」

「ん？」

「いえ…高校生の時ですか…『花陽』がそんなことを言ったのを思い出しまして…」

「花陽？…小泉さんのこと？」

「はい」

高野はまだ、μ sの他のメンバーを下の名前で呼べるほど、親しくはなっていない。

今は海未以外、全員苗字で呼んでいる状態。

「小泉さんか…1回会ってみたいなあ」

と高野は何気なく呟いた。

彼女は…彼が唯一顔を会わせていないメンバーである。

なぜなら花陽は、チャリティーライブが終わると、その余韻も冷めやらぬうちに、早々と『帰国』してしまったからだ。

μ sのみで行った打ち上げの際に「高野と付き合っている」とみんなに告げた海未。

メンバーからは

「だったら、今から高野さんも呼ぼうよー！」  
と言われた。

海未と高野が出会わなければ、μ sの再結成はなかったのだから。

そういう意味では、彼は『功労者』だとも言えた。

しかし、海未は断った。

ひとつは、やはりμ、sのメンバーだけで楽しみたかったから。

いくら高野がキツカケを作ったから…と言って彼を呼ぶとなれば：『凜』と…やはりこの時に交際宣言をした『ことり』の彼氏も呼ばなければ、スジが通らない。

実に海未らしい考え方である。

しかし、もうひとつ理由があった。

それは、高野の気が変わるのが怖かったからだ。

2人が付き合い始めて、その時点で実質2ヶ月あまりしか経っていない。

だから、海未には、高野が彼氏だという実感が薄い…というのは事実である。

そういう意味で『万が一』を考えるのは、彼女の性格からすれば当然と言えば当然だった。

加えて、高野のあの言動である。

彼が『口だけ番長』だ…ということは『夢野つばさ』から聴いていたし、実際、付き合ってみてそうである…ということは、海未も理解している。

良く言えば素直…悪く言えばデリカシーがない。

一緒に街を歩いていても「今の人、綺麗だったね」とか「凄い胸してたね」とか、平気で言う。

ところが海未も最近少しずつ馴れてきて「そうですね…」と返せるようになっていた。

昔の彼女であれば、一言一言「破廉恥です！」と言つては腹を立てていたことだろう。

だから、μ、sのメンバーに会ったところで、口では『あくだ、こくだ』と言うかも知れないが、高野が心変わりするとは、基本的には

思っていない。

それでも、そう考えてしまうのは…海未自身、自分に自信がないからだ。

いまだに…本当に私でよかったのでしょうか…と問うている。

…私は高野さんが好きです…

…でも高野さんは…

高野の元カノである…夢野つばさ…の存在も大きかった。

2人が共に過ごした時間は長く、濃密だった。

ケンカをして別れた訳ではなく、今でもお互いがリスペクトしあっている間柄だ。

彼の心の中のその存在を、自分の色に塗り換えるのは、そう簡単なことではないと思っていた。

…果たして本当に、私は高野さんに相応しい女性なのでしょうか…

そんな不安もあり、μ'sの打ち上げに呼ぶのは、賛同できなかったのだ。

しかし、心配は杞憂だった。

アルコールが入り、テンションの高くなった穂乃果は、ムリヤリ海未のスマホを奪うと

「今から打ち上げに来てくださーい！一緒に盛り上がりましょう」

と高野に電話を掛けた。

しかし、彼はそれを断った。

今日は自分が出る幕ではない…と。

それを聴き、海未は安心すると同時に、改めて梨里の誠実さに惚れ直したのだった。

そんな高野の性格は理解しているハズだったが…この時の海未は、彼の「1回会ってみたいな」…という眩きが、すごく気になったらしい。

「梨里さんー!」

「ん?」

運転中の高野は、しかし一瞬海未に視線をやり、その表情を確認した。

「…違うよ、なにも疚しいことは考えてないっ…て!」

「私は何も言ってますが」

「顔がそう言ってるけど?」

「梨里さんこそ、花陽の名前を言ったときに、いやらしい顔をしました」

「あれ、やっぱりバレちゃった?なんかよくない?ポワーンとした感じが…。東條さんとも、南さんとも…また、違った魅力があるというか…」

こうストレートに開き直られると、海未も怒る気になれない。

「はあ…確かに、花陽はその場にいるだけで、癒しを与えてくれますので…わからなくはありませんが」

と言うしかなかった。

「…で、なんの話だっけ?」

「えっ、あっ…はい…下半期が忙しいという話です。花陽の誕生日も梨里さんと同じ1月ですので、昔、そんな話を…」

「へえ、そんなんだ」

「ハロウィーンから始まって…クリスマス、お正月、梨里さんの誕生日…バレンタインデーがあつて、昨日がホワイトデーで…」

「なるほど、それで今日が海未ちゃんの誕生日…と。確かにイベントが集中してるね」

「はい、今回はライブもありましたし…」

「だね!」

「だとすると、結婚記念日は夏がいいね」



「ゴ、ゴホッ！…け、結婚記念日ですか！ま、まだ…そんな…早すぎます…」

「ん？…あ、いや…オレとどうこうじゃなくて、今の流れからだ、そういう方がいいんじゃないか…って」

「は、はあ…まあ…」

「あははは…でも、確かに大変だねえ…もし仮に海未ちゃんに子供ができたなら、そこに卒業式やら入学式も絡んでくるしね」

「入学式は年度が変わりますけど…」

「そうか…。あ、でも、その子が女の子なら、七五三もあり…の…桃の節句があり…の…ってことだ」

「そうですね」

「さらに、その子が下期の誕生日だったら…」

「忙しさを目が回ります…」

「じゃあ、夏に生まれるように、子作りも計画的に行いますか？」

「はい。…ですが…こればかりは授かり物といえますので、そううまくいくかわかりま…って、なんで、すぐにそういう話になるのですか！」

「あ、ごめん、ごめん…」

「もう、知りません！」

海未は顔を真っ赤にして、下を向いた。

今日は海未の誕生日だ。

さつきまで花陽を除いた、sのメンバーと、パーティーをしていた。

高野も一緒だった。

彼はそこで初めて、凜、にこ、絵里…と顔を会わせ…故に対面していないのが、花陽のみとなったわけである。

チャリテライブの打ち上げ同様、カラオケルームの一室を借りて行われたのだが、高野は『海未の彼氏だから』とベタベタすることもなく、あちらこちらに気を配り、実によく『働いた』。

ドリンクの手配から、トークの回しから、精算まで…彼の『仕事』は

本当に多岐に及んだ。

本人曰く

「体育会系の人間だからね…こういうことは慣れっこなんだよ」とまいったく意に介していない。

自分の彼女を差し置いて、周りの人にいい顔をするのは…（男性にこの表現が妥当かどうかは別として）…『八方美人』…と言えなくもない。

しかし「ベタベタするのは2人のときだけいい。みんなでいる時は、みんな平等に」と言うのが、彼のポリシーらしい。だが

「海未ちゃんが、イヤだっけ言うなら考えるけど」とも言った。

「そうですね…いくらsのメンバーとはいえ、私たちだけが別世界にいたら、やはりいい気はしなと思いますので…」

「うん、うん…海未ちゃんならわかってくれると思った」

「ですが…あまり、親しげに話をされるのも…なんといいですか…」

「妬いちゃう？」

「いえ…あの…その…ことさら希や絵里とは楽しそうに話していたもので…」

「そうかな？まあ、あれだけのメンバーに囲まれて、興奮しない方がおかしいでしょ！よく理性が保てたと思うよ。偉いぞ、オレ！…なんてね。あははは…」

と高野は笑った。

「それが普通なんです！別に偉くもなんともあり…」

「だから、これからの時間は、いっぱいイチャイチャしようね！」

「は、はい！お願いします…あつ…」

高野の口車に乗せられた海未は、恥ずかしさのあまり横を向いた。

「…いえ…その…な、何てことを言うのですか！は、破廉恥です！」  
そして、そう呟いた。

「ごちそうさまでした。とても美味しかったです」

「それは良かった」

「素敵なお店を知ってらっしゃるのですね」

「…まあ…多少なりとも、そういう世界にいたからね」

彼は今『無職』である。

しかし、ほんの少し前まではバリバリのJリーガーであり、彼女も有名人だった。

年齢は21歳になったばかりだが、それなりに華やかな生活をしてきたことは、容易にわかる。

従って、こういった『高級店』での立ち振舞いも違和感はなかった。

「海未ちゃんは『和』のイメージが強いけど『フレンチ』でも絵になるね。テーブルマナーも完璧だし…」

「そうでしょうか…自分ではわかりませんが…」

「オレもあんまり、こういうところには来ないんだけど…今日は海未ちゃんの誕生日だし…と思って、ちょっと頑張ってみました」

と高野は笑った。

「無理をなさらずとも…」

「いや、いや…全然。昨日のホワイトデーも込みでっことで。デー  
トの度に毎回…って訳にはいかないけどさ」

「あ、ありがとうございます」

「さて、そこで…だ…」

「はい…」

「このあと、この上のホテルを予約してるんだけど…どうするっ…」

「…!!…どうするっ……というのは…その…」

「選択権は海未ちゃんに預けるよ…イヤなら断ってもいいんだけど…」

「私の口から…そういうことを言わせるのですか…」

「…じゃあ?…」

高野の問い掛けに、海未は…こくつ…と黙って頷いたのだった…。

海未の誕生日

くおわりく

## サッカー留学（前編）

「イギリスに留学…ですか？」

高野の突然の申し出に、海未は目を丸くした。

「ああ…正確に言うといギリスじゃなくて、イングランドだけだね」

ご存知の通り、イギリスの正式名称は『グレートブリテン及び北アイルランド連合王国』だ。

イングランド、ウェールズ、スコットランド、北アイルランドの4つの王国から形成されている。

オリンピックなどでは、イギリスという国名单体で出場しているが、ことサッカーやラグビーに関しては、各々協会が分かれており『イギリス』とひと括りにはされない。

因みに現ジュビロ磐田の中村俊輔選手が所属した『セルティック』は『スコットランドリーグ』のチームだ。

サッカーに関わる者として、例えば海未であってもそこは譲れない。

高野はやりわり指摘した。

ふたりが付き合いを始めてから、まる1年が経とうとしていた。

来週はクリスマス…そんな時に高野から聞いた言葉は、とてもサプライズプレゼントなどと呼べるようなものではなかった。

「本格的にトレーニングを始めて1年…お陰さまでトレーナーからフィジカルについては、もう問題なし！つてお墨付きをもらってるんだ」

「はい、それは聴いています…」

「あとは…試合勘を取り戻さないと…実戦をこなさないと…選手として復帰出来ない」

「それも聴いてますが…」

「うん、そうだね…。それで急と言えば急なんだけど…マリノスにいた時の大先輩が今、そのイングランドの…とあるチームでコーチ研修を受けててさ…」

「はあ…」

「良かったらこつちで練習してみないかって、誘ってくれたんだ」

「いつのことですか？」

「今日の夜中…いや、もう明け方に近いかな…」

「本当に急ですね…」

「向こうとは時差があるから…」

「そういう意味ではありませんが…」

「ん？」

「いえ…だからと言って…決断が早すぎませんか？」

「うん…そうだね…」

「…」

「海未ちゃんも、この来春から高校の先生になるんだろ？自分のことで手一杯になって、オレの面倒見てる余裕なんてなくなるだろ？」

「面倒を見るなんて…私はそんなつもりで梨里さんとお付き合いしてません！」

海未はプイツと横を向いた。

「ああ、ごめん…語弊があった。でも、余裕がなくなるのは確かだろ？」

「だからこそ、側にいてほしいといえますか…」

「海未ちゃんには、いっぱい助けしてくれる仲間がいるじゃん」

「それはそうですが…」

「前にも言ったけどさ…ただ復帰するだけじゃダメなんだ。レベルアップして『おっ！コイツ、前と違うぞ！』って思われないと、結局、レギュラーにはなれない。そうじゃなきゃ意味がないんだ」

「わかりますけど…」

「だから…半年…いや、もしかしたら1年くらいかも知れないけど…  
待っててくれないか…」

「ときどき梨里さんは、私に有無を言わせないほど、強引になるのです  
ね…」

少し伏し目がちに海未は言った。

「多少、男っぽいところも見せておかないと…」

「…信じて…いいのですね?…」

「ん?」

「あの…その…つまり…」

「ああ…そういうこと?大丈夫だって!オレは外国の女の人には興味  
ないから。それに、ほら…向こうのヤツらはデカイし…」

海未もその件(くだり)は知っている。

高野は…今でこそ176cmあるとはいえ、幼い頃は背が低く、相  
当なコンプレックスを持っていた…という話だ。

だから嘘か誠か、海未の身長…159cm…は「彼女としてジャス  
トサイズだ」と彼は言っている。

そう言われればそうですね…と、この時の海未は思った。

しかし、あとから穂乃果たちに

「甘いよ!そんなわけないじゃん!だって、つばきさんは海未ちゃん  
より10cmも背が高かったんだよ!」

と激しく怒られたりするのだが…。

「まあ、オレも心配は心配なんだよ」

「えっ？」

「そりゃあ、先生になるとはいえ、μsの園田海未だもん。周りが放って置くはずがない……」

「そんな…それは買い被りすぎです…」

「正直に言うよ。本当は一緒に来てほしい！」

「あつ…」

「でも、海未ちゃん、極度の海外恐怖症だから。連れていこうにも、連れていけない」

と高野。

その顔は半分笑っている。

「ひ、ひどいです！そんな理由で…」

顔を赤くして、拗ねる海未。

「うそ、うそ…それはうそだけど…本当のところは、さっき言った通り。来春から先生になるんでしょう？海未ちゃんは海未ちゃんで、そこはしっかりしないと…」

「…はい…そうですね…。それは梨里さんの仰る通りです」

「真面目な話、オレも真剣なんだ。練習生ではあるけど、インングランドっていうサッカーの本場で、学べるものは、すべて吸収してきたい。もしかしたら、回り道になるかもしれないし、うまくいかないかもしれない。でも…そうだったとしても、何も得られないってことはないと思うんだ…」

「梨里さん…」

海未は、彼の顔を見た。



「だから…頼む！オレに時間をくれないか？」

高野は海未を抱き寄せると、彼女の耳元で囁いた。

「…わかりました…」

海未はそう呟いて、静かに頷いた。

「…サンキュー…」

「…ですが…ですが、これだけは約束してください！」

「ん？」

「絶対に…絶対に…ケガだけはしないと…」

「…ああ…そうだな…。約束するよ」

「はい…」

「あ、それと海未ちゃんに、ひとつお願いがあるんだけど…」

「はい、なんでしょう？」

「オレ、英語話せないからさ…」

「はあ…」

「絵里さんに『専属の通訳になってほしいんだけど』って伝えてくれな  
い？」

「…絵里にですか!?!…さ、最低です！梨里さんは最低です！英語く  
らい自分で覚えてください！…よりによって…絵里などと…」

「ダメなの？ああ、じゃあ、希さんは？彼女も英語ペラペラなんでしょ？」

「希はもつとダメです！」

「もつてダメって…ああ、じゃあ、花陽ちゃんだ！彼女もアメリカ在住だし…」

「花陽もダメです!!…と言いますか、英語じゃなくて、胸の大きさと選んでませんか！」

「あははは…そんなわけないじゃん！…あ、でも…みんなそうか…あれ？海未ちゃんの海外恐怖症と、胸の大きさと…なにか関連があるのかな？」

「も、もう！本当に怒りますよ！まったく関係ありません！と、とにかく、*Ms*のメンバーに手を出すのだけは絶対にやめてください！」

「わかってる…って…。出すわけないじゃん」  
「信用なりません…」

「あれ？園田海未の選んだ男…ってその程度のヤツなんだ…」

「…ズルいです…そんな言い方…」

「ごめんよ…」

「い、いえ…別に…」

「だから、今日はいっぱい歩いていい？」

「な、なにをですか!？」

しかし、高野はその間には答えず、ただニヤニヤしている。

「な、な…どうして、すぐにそういう話になるんですか!？」

「…ダメ?もう、しばらくできなくなっちゃうし…」

「えっ?…あつ…いえ…その…ダメでは…ないですが…」

「海未ちゃん…大好きだよ!」

「梨里さん…わ、私もです!」

「それで…いつ旅立つのですか?」

翌朝、深い眠りから覚めた海未は、先に起きてコーヒーを飲んでいたら高野に訊いた。

「えっと…なんだかんだの手続きが必要だから…2月末くらいかな?」

…あと2ヶ月も先の話だったんですね…

…騙されました…

サッカー留学（前編）

くおわりく

## サッカー留学（後編）

「園田先生！夏休みはどこに行くんですか？」

「夏休み…ですか？…部活もありますし、学校でも色々仕事がありますから…特に予定はありませんが…」

春から母校の教壇に立ち、1年生を受け持っている海未。

1学期も終わりに近づいてきた頃の放課後、教え子たちから、そんな質問が飛んだ。

「え〜！彼氏と旅行に出掛けたりはしないんですか？」

「彼氏…ですか…」

「あれ？ひよつとして…いない？」

「え〜…それはヤバくない？」

「先生は真面目すぎるからなあ」

「寂しいねえ。見た目は悪くないのに…」

「やつぱり…だからじゃね？」

『…』の時、彼女たちの視線は、海未の胸元にあった。

「ああ…」

納得といった感じの一同。

…ああ…じゃありません!!…

…そもそも、あなたたちの発育が良すぎるのです!!…

どう考えても海未たちが現役の時と較べ、平均値が上がっている。それは、穂乃果や雪穂ともよく話すことだった。

「あなたたちには関係ない話です！」

「胸の話ですか？」

「違います！いえ、それもそうですが…いえ、そうではなくて…私のプライベートのことです！」

「でも、興味あるよね？」

生徒は引き下がらない。

「先生はどういう人がタイプなんですか？」

「絶対、理系男子だよね？」

「案外、筋肉ムツキムキのスポーツマンだったりして」

「体育会系？あり得ないでしょ！」

「あれ？みんな知らないの？園田先生はサッカー選手と付き合ってるんだよね」

と、その中のひとり。

「サッカー選手？」

「1年くらい前にさ…夢野つばさの彼氏を奪ったとか、奪わなかったとかの騒ぎがあったじゃん。その相手って先生でしょ？」

「え…：そうなの!?その騒動は知ってるけど…名前なんて出てたっけ？」

余計なことを…と海未は一瞬、目を伏せた。

「実名で出てたかどうかは覚えてないけど…うちのお兄ちゃんが『これってμ、sの園田海未じゃん!!』て。凄いショックを受けてたのを覚えてるもん」

「え〜!!」

「そもそも、その時はμ、sって誰…って話だったんだけどさ」

「私は学校入ってから知った」

「だよねえ！私も音ノ木坂に通ってる…って言ったら、やたら周りからμ、sの高校だ…って言われて」

「その人が、高校の担任になるとは…だけど…」

「先生が、元々、sって言うのは、みんな知らなくはないけど…」

「そんなに凄い人なの？だって、夢野つばさから奪ったんでしょ？」

「だとしたら、それって略奪婚ってヤツじゃん」

「結婚してないから『婚』ではないよね」

「じゃあ、不倫？」

「不倫？…それも違うんじゃない」

「まあ、どっちでもいいけど…先生もやることやってるんじゃない！」

海未には「やることやってるじゃん」がとても卑猥な言葉に聴こえた。

「あなたたち…大人をからかうのではありませんよ！」

彼女の額（ひたい）に縦線が入り、口元はヒクヒクとしている。

「あ…」

「か、帰ります!!」

「さ、さようなら!!」

その表情を見た生徒たちは、蜘蛛の子を散らすように教室から出て行った。

「わずか数年で、音ノ木坂の生徒のレベルも落ちたもんやね。『学校の救世主』『カリスマスクールアイドル』『希代の作詞家』も、その娘たちの前じゃ形無しやんね？」

「…はあ…まあ、でも今の娘たちは、そういうものかと…。μ、sも名前くらいしか知らないでしょうし」

『今の娘は』…か。私たちだってまだ、社会人になったばかりなのに、そんな言葉を使うようになるとはねえ…」

と絵里は、ひとつ大きなため息をついた。

この日は…特別何がある…というわけではなかったが、たまたま都合のついた5人…希、絵里、穂乃果、真姫…それと海未が食事に集まった。

「私なんて、まだ学生なんだけど…」

真姫はそう言って笑った。

彼女は大学5年生だ。

医学部は6年制の為、あと1年半通わなければならない。

「高校1年生か…。ウチらと5つか6つ、違うだけなんやけどね…」

「はい…」

「それで？」

「はい？」

「夏休み、行かんへんの？イギリス…」

「い、行きません！なぜ、わざわざ私が…」

「海未の海外嫌いも相当なものね…」

「ち、違います！私が行ったところで、彼の迷惑になるだけですから…」

と、海未は真姫の言葉を否定した。

しかし、希たちはニヤニヤしている。

信じていない。

「ほ、本当です！別に海外だからどうのではありません！」

「そやけど…心配やあらへん？」

「それは…『ない』といえば嘘になります。…ですが、私が行ったところで、どうにかなるものでもありませんし…」

「そうかしら？」

「絵里？」

「やっぱり、嬉しいものじゃない？わざわざ会いにきてくれるなんて」

「はあ…そういうものでしょうか…」

「海未がその立場だったら、どう？嬉しくない？」

「それはそうですが…梨里さんは、そういうところは本当に真面目ですし」

「ふうん…」

「真姫？」

「ねえ…ひとつ訊くけど、海未は本当に高野さんのこと好きなの？」

「えっ？」

「逆に高野さんは、本当に海未のことが好きなのかしら」

「えっ？」

「絵里の言う通り…口では『来なくていい』なんて言われても…やっぱり来てくれたら嬉しいんじゃないかしら。私なら行くわ」

「真姫…」

「だって、ああいう人でしょ？周りが放っておかないわよ。私なら、向こうに行くわ」

「!!」

「おっと、爆弾発言！どうする？海未ちゃん！真姫ちゃんが狙ってるよ」

と穂乃果。

海未の耳元で、囁くフリをした。

もちろん、みんなに聴こえている。



「…べ、別に深い意味はないわよ。わ、私は…そういう経験がないから、どうなのかな…って思ったただけだから」

と慌てて弁解する真姫。

「わ、わかってます。ほ、穂乃果も変な煽りをしないでください」

「でも、ちょっとドキツとしたでしょ？」

「それはその…いつも不安というか…そういうのはあります。梨里さんは、誰にでも優しいですから」

「ほんま、ママやし…お世辞も上手やし…女の子を悪い気にさせへんもんね。それは真姫ちゃんやなくても、惚れちゃうわ」

「だから、私は関係ないから」

「ですが、ママなのは大勢でいる時だけなんです」

「釣った魚にエサをやらないタイプ？」

「いえ、穂乃果！それは違います！」

ちよつとムツとした表情で、海未は彼女を見た。

「梨里さんは、放任主義と言いますか…『相手を束縛するのは嫌い』と明言されていますので、基本的には電話やメール等はあまりありません。反対に『束縛されるのも嫌い』とのことですから、こちらからも必要以上のことは連絡しませんが」

「それって楽しいの？」

と穂乃果。

「…わかりません…。ただ、今の私たちには、それが丁度いいとは思ってませんが」

「ふくん…そうなんだ…」

「まあ、人それぞれってことやね…」

「はい…」

「あっ……」

「希？…どうしました？」

「ウチ、来月、ロンドンに行くんやった！」

「ロンドン…ですか？」

「ウチの会社で新しく始めるヨーロッパツアー…のコースの下見なんやけどね…。様子…見てきてあげよっか？」

「えっ？」

「高野さんの…。現地の人と仲良くなつてないか、心配やあらへん？」

「どことなく希の言葉が意地悪い。」

「い、いえ…結構です。大丈夫です」

「ホンマに？」

「梨里さんは…外国の女性には興味ないと言っていますし…」

「でも、えりちのことはタイプなんやろ？見た目はそんな変わらないやん…」

「そ、それはその…確かに…胸が大きい人とポニーテールが好きというのはそうなのですが…ですから髪を下ろしてる絵里が好きかどうかは…」

「なら、ウチがポニーテールやったらどうやろか？高野さん、ウチを好きになつてくれるやろか」

「の、希！」

「冗談やって。海未ちゃんはすぐに本気になるんやから」

「冗談じゃなくなる恐れがあるから怖いのです」

…胸の大きさ…

…ポニーテール…

…胸の大きさはどうにもならないけど…

…髪型なら…

「真姫、どうかした？」

「えっ？なんでもない…」

「？」

「いつ、帰って来るんだろうね…」

「はい…長くて1年と申してましたので…」

「あと半年か長いね…」

「はい…」

その時だった。

誰かのスマホが鳴った。

「LINE？」

各々、自分かと思い、確認する。

「私でした…」

それは海未のスマホだった。

「梨里さんからです…」

東京とロンドンの時差は8時間。

ちょうど向こうは昼だった。

「…高野さん？」

「ん？…あつー…はい、そうですが…」

そう呼ばれて振り向きむくと、そこには、小柄な日本人女性が立つ

ていた。

「やっぱり…似てる人だとは思ったけど」

「あつ…A—RISEの…」

「初めまして…ですね」

「えっ…ああ…そうですね…。こっちは一方的に何度も観てますけど…」

「私も…色々あったから、初対面って感じがしないわ」

『その節』は『2人』がお世話になりました」

そう挨拶されて、彼女はちよつと返答に困った。

「お世話だなんて…そんなつもりで言ったんじゃないんだけど…」

本当は『逆に感謝してる』…という気持ちがあるのだが、彼にそれを言うのは『不謹慎』だと思った。

「こんなところで会うなんて偶然ね。…旅行？」

誤魔化す様に、話題を変える。

「いえ…サッカー留学…武者修業みたいなもんです…」

「どこで？」

「はい…もう、こっちに來て半年くらい経ちますけどね」

「そうなんだ…知らなかった…」

「当然ですよ。オレなんて世の中の的には、忘れ去られた存在ですから」

「そういう意味で言ったわけじゃ…」

「ツバサさんは？」

「私はレコーディングで」

「ひとりですか？」

「ううん…3人で來てるわよ。今はランチタイムなの」

高野梨里と綺羅ツバサ。

2人が出合ったのは、ロンドンの…とある和食レストラン。

高野が入店してしようとしたところに、ツバサがそれに気付き、声を掛けたのだった。

「ぐ」一緒にいいかしら?」

「えっ? あっ…はい、どうぞ」

店員に「何名様ですか?」と訊かれ、高野は指で「2」と示した。

「ここのお店はよく来るんですか?」

「こつちに来た時は必ず寄るわ」

「和食派なんですか?」

「…っていうより、イギリスの食が合わないだけ」

「あははは…同感です。英国料理が不味い…っての事前に聴いてましたけど、ここまでは思ってたなくて…オレもほぼ毎日、どこかしらで日本食を食べてます」

「うふっ…私も英玲奈からは『味覚オンチ』ってバカにされてるんだけど…その私が『無理』って思うんだから、よっぽどよね…」

とツバサは笑った。

「他の2人は?」

「各々、どっか違うところで食べてるんじゃないかしら」

「仲、悪いんですか?」

「まさか! ほぼ、365日24時間一緒にいるんだもん。ひとりになる時間だってあるわよ」

「まあ、そりゃあそうですね…」

そんな話をしながら、2人はメニューを眺め、それぞれ店員に料理を注文した。

「サッカーの留学?」

「はい。先輩がこつちのチームでコーチ研修を受けてて…その縁で、練習生として参加させてもらってるんです」

「今は…サッカー選手…じゃないんだっけ?」

「はい、無職です」

明るく答えた高野であったが、ツバサにはそれが切なく思えた。

直接会うのは初めてだが、彼を通じて色々な事があった。

最終的には、s復活ライブの足掛かりになったワケで…そういう意味ではツバサにとって、プラスの出来事だったと言えなくはない。

しかし本人を前にして、そんな事は言えるはずもない。

「…あんなことがなければ…」

正直、それしか言いようがなかった。

「いえ、それはもういいんですよ。アレがなくても、サッカー選手として、今、どうなってたか…はわからないし…」

「…」

「逆に自分が、ステップアップする為のキツカケになった…つてことで。まあ、この留学もそのひとつなんですけど」

「強いのね…」

「そう思わないと…やっていけないですよ」

「…そうね…」

それは本心なのだろう。

ツバサはそう思った。

「チヨモ…いや、つばさ…あ、いや…つばさって言っても『夢野』の方のつばさですけど…」

「わかるわよ…それくらい」

とツバサは笑う。

「あ、いや…やっぱりツバサさんを目の前にして『つばさ』とは呼び捨て

にできないです」

「ゴメンね、紛らわしくて」

「…なので、ツバサさんの前では、ヤツの本名…綾乃って呼びますね」  
「そんな気を使わなくてもいいわよ」

「いやいや…ってなんの話でしたっけ？あ、そうそう…綾乃には負けられない！ってのが、オレのモチベーションになってるんですよ」  
「うん、つばささん…頑張ってるわね」

「はい。1年目は苦労したみたいですけど…今シーズンは結果を残してますし…さすがとしか言いようがないですね。もう、実績では、オレの遥か上を行ってますから」

そう言った高野の目は、どこか憂いがあった。

「別れても…好きな人？…」

「そんなんじゃないですって…いや…やっぱ、そうですねですかね…ライバル？憧れ？…まあ、今でも特別な存在なのは、間違いないですね」

「私もね…同じ『ツバサ』を名乗る者として、彼女のことは尊敬してるの。アーティストとしても、サッカー選手としても…。いつか私も、彼女のように世界で認められるようになりたい…そう思ってるわ」

「同感です…。あつ！でも、勘違いしないでくださいね。恋愛感情っていうか…それとは別の話ですから」

「うふふ…そこで恋愛感情がある！…って言われたら困っちゃうんだけど…」

「あはは…そうですね…」

ここで店員が、注文した料理を運んできいたので、2人は一旦、話を止めた。

「それで？」

「はい？」

「園田さんとは上手くやってる？」

「…と思ってますけど…彼女、何か言ってますか？」

「ううん…そうじゃないけど…」

「一応、1週間に1〜2回程度は連絡してますし…」

「えっ!?! ちょっと待って!」

「はい？」

「1週間に1〜2回? 1日に…じゃなくて？」

「はい…」

「そんなに少ないの? 驚いたというか、呆れたというか…」

「そうですか？」

「園田さんも、それでよく我慢してるわ」

「我慢…ですか…」

「今の時代、いくら遠距離とはいえ…」

「あ、もちろん、何かあったときは、ちゃんと報告してますよ」

「何かあったとき？」

「例えば、今みたいなとき。『綺羅ツバサさんとランチしてます』…とか」

「私でした…梨里さんからです…」

「噂をすれば…っやつね」

「なんて書いてあるの？」

「ほらほら、穂乃果! 人のLINEを覗かないの!」

と絵里。



「『ツバサさんと、ランチ、なう』…」

「えっ！つばささん？…夢野？」

穂乃果が聴き直す。

「いえ…カタカナ表記なので…」

「まさかA—RISEの？」

「…どうやらそうみたいです…写真が送られてきました…」

海未は躊躇（ためら）いもなく、画像を見せた。

「ほんまやね…」

「なんで、ツバサさんがいるの？」

「レコーディング…だそうです。偶然、会ったと…」

「ほほう…高野さんも隅に置けん人やね。夢野つばささんの次は、綺羅ツバサさんとは…」

「梨里さんはそんな人ではありません。どちらかと言うと、こういうことについては、何でもオープンにする人ですから」

「そうだよ。あとから『会ってました』…って言われるよりは」

「甘い、甘い。そう見せ掛けておいて…やん。こうやって海未ちゃんを安心させておけば…」

と希は『にひっ』と意地悪く笑った。

「げ、下品です！」

「でもレコーディングってことは…他の2人も一緒にでしょ？なんでツバサさんだけなんだろう？」

「さ、さあ…そこまでは…」

「これは海未ちゃん！ひよつとして、ひよつとするんやない？」

「い、いえ…そんなハズはありません！そもそも、ツバサさんは梨里さんのタイプではありませんし」

「それは関係ないやいんやない？『つばさ』を忘れ掛けてたところに、新たな『ツバサ』が現れて…もう、その名前の響きだけでキュンッと

しちやったんやね」

「たかの…つばさ…。鷹の翼？…出来過ぎてるわね」

真姫はボソリと呟いた。

「あ…ああ…」

海未はフラフラだ。

ボクシングで言えば…必死にガードを固めて、顔面への攻撃は凌いでいたものの…ボディブローを何発か喰らったような状態。

『鳥繋がり』なら、ことりちゃんにも気を付けたほうがいいんじゃない？」

「そうだよね。彼氏と別れたばかりだし…」

「なぜ、そこでことりが出てくるんですか！」

「あれ？海未ちゃん、知らなかったっけ？ことりちゃんの別れた原因…」

「いえ、もちろん知ってます。…彼氏の束縛がきつすぎて、精神的に耐えられなくなったと…」

「ことりも、ああ見えて独占欲が強いから、最初はお互いさま…って思ってたけど…アレは度が過ぎてたわね」

と絵里。

「私から言わせれば、物理的な暴力がなかっただけで、アレは一種のDVよ」

真姫も「そうだ」と同意する。

「ほんまやね…」

「そ、それはわかりますが…それとこれと…どう繋がるのでしょうか」

「ことりちゃん、ずっと思ってたんだって…。どうして私の彼は、高野さんみたいに穏やかじゃないんだろう…って。今度、付き合う人は、絶対に高野さんみたいな人にしよう…って」

「傷心者の女にとって、あの優しさは『罪』やね。そんな状況やったら、ことりちゃんやなくてもコロツていつちやうんやい？」

「は、初耳です！」

「そりや、海末ちゃんの前では言わないよ」

「では、なぜ、今、言うのですか！」

「えつと…それは…話の流れで…ねえ？」

「そう言えば…ことりちゃんも来月ロンドンに行くんやなかったっけ？」

「あつ！言ってた！言ってた！世界的なブライダルショーがあるとかないとか」

「これは…ひよつとしたら、ひよつとするんちゃう？」

「こ、ことり！行かないください!!」

海末は、そこにはいない彼女の名前を叫ぶと、へなへなと膝から崩れ落ちた。

ボディを打たれるのを嫌って、ガードを下げたところ、ガラ空きになった顔面にストレートを打たれた…という感じか。

10カウントを待たずに、ノックアウト負け。

これには

「ちよつと海末、大丈夫!?!…希！穂乃果！ちよつと悪戯がすぎたんじゃない？」

と絵里が眉をしかめた。

「う、うん…ちよつとね…」

と穂乃果は頭が掻く。

「うう…みんな…酷すぎます…」

「違うんよ。海未ちゃんが羨ましくて、ちよつとからかっただけやん」  
「う、羨ましい…ですか？」

「そ、そうだよ！穂乃果なんか、いまだに彼氏ができないんだから」  
「で、ですが…高野さんが誰かに靡かないとは…言い切れないのです…」

「大丈夫やって。少なくともウチらは、いくら高野さんが素敵だ…つて言うても、手え出さへんつて」

「でも高野さんが…」

「そこは海未が信じなくてどうするのよ」

「真姫…」

「…なんて、私が偉そうなことを言える立場じゃないけど…いいんじゃない？まったくモテない男より、少しくらいモテる男の方が」

「そうね。あの夢野つばさを捨てて、園田海未を選んだのよ。もつと自信を持ちなさい」

「絵里…」

海未は彼女の顔を見た。

絵里は黙って頷いた。

「そ、そうですね。私が信じないと…はい…」

そんな話をしているうちに、またもやスマホが鳴った。

再び、一斉に自分のものかと確認する。

「私でした…」

と海未。

「今度はなんやって?」

『『あんじゅさん、英玲奈さんと合流! A—RISE勢ぞろい!』』

「あつ、やっぱり、みんないたんだね」

『『どうしよう! あんじゅさんの胸から目が離せないんだけど(笑)』』

そう言ったきり、彼女は固まった。

「…海未ちゃん…」

穂乃果が、恐る恐る声を掛ける。

「梨里さん!! いちいち、そんなことまで報告しないでください!!」

海未の叫びに…もつともだ…と苦笑しながら4人は頷いた。

「園田先生! 見ましたか!?!」

翌朝、海未が出勤すると、そこに次から次へと生徒が駆け寄ってきた。

「なんですか? 朝から騒々しいですよ!」

「ほら、これこれ」

と、そのうちのひとりがスマホを見せる。

『夢野つばさの元カレ。ロンドンで綺羅ツバサとデート』

それは現地で2人を目撃した観光客が、SNSにあげたものだった。

た。

それが拡散して、芸能ニュースのトップ記事になっていた。

「はい、知ってますよ」

海未はまったく意に介さず…と涼しい顔だ。

「先生の彼氏、ヤバくない？」

「不倫じゃん、不倫！」

「略奪婚？」

「結婚してないから、不倫でも略奪婚でもないけどね」

「相手はあのA—RISEの綺羅ツバサでしょ？先生勝ち目ないじゃん！」

しかし海未は微笑を湛えながら

「はい、そうですね！」

と返答した。

「えく…なんか、余裕なんだけど」

「なにそれ、気になるう」

「別に、あなたたちが気にすることではありません」

「気にするよ！」

「そうだよ、先生、こんな男とはすぐ別れた方がいいよ！」

「はい、はい…私のことはどうでもいいですから、あなたたちは自分のことを心配しなさい」

「えくなに、それえ」

「明日から期末テストです！」

「あっ！」

「そうだった…」

「1学期早々、赤点なんて許しません…から…ね!!」

表情は穏やかだったなままだが…その口調から冷気が放たれた。

「は、は〜い…」

海未は慌てて逃げていく生徒たちに、かつての穂乃果や、にこ、凜の姿を思い出したのだった…。

サッカー留学（後編）

〜おわり〜

## 思い出① クリスマス（前編）

『お母さん』…はい、これ…」

「なんですか、これは？」

『みい』からのプレゼント」

「プレゼント…ですか？…ですが…今日はクリスマスでも、誕生日でもありませんが…」

「結婚記念日…でしょ？今日…20回目の」

「あっ…」

『磁器婚式』って言うんだって！20周年は」

「磁器婚式ですか…」

「それでね…たいしたものじゃないんだけど…」

「開けてもいいですか？」

「もちろん！」

娘が手渡したのはジュエリーショップの紙袋。

その中に入っていたのは…薄いブルーのベルベットを纏ったハート型のリングケース。

母親はそれを手に取ると、ゆっくり開いた。

中から現れたのは翡翠の指輪だった。

大きすぎず、小さすぎず…それは上品な深い碧の光を放っていた。

「へへへ…なかなかセンスいいでしょ？」

『みそら』…」

「なくんて…『陽菜』のお母さんを選んでもらったんだけどね」



「ことりが…」

「あのね…お母さん…お父さんと結婚してくれて…ありがとう！」

「!!」

「あ、ほら…2人が結婚しなかったら、私は生まれてなかったわけだし…その…」

「みそら…」

そう言ったまま母親は何も言えず、娘をギュツと抱きしめた。

「や、やだなあ…泣かないでよう…今の私に出来ることって言ったらさ…こんなことしかないから…」

暫くの間、それに応えるように、娘もまた、母親を強く抱きしめ返した。

「指輪なんてもらうの…何十年ぶり…でしょ？」

「何十年とは…それは言いすぎです…。ちゃんと梨里さんは記念日ごとにプレゼントしてくれましたよ」

どれくらい経つたろうか。

お互い昂っていた感情は少し落ち着き、娘が放った軽口にも、母は笑みを浮かべながら答えた。

「へえ…そうなんだあ…。あつ！じゃあさ、初めて指輪をプレゼントされた時のことって覚えてる」

「当たり前です」

「どんな感じだったの？」

「そ、それはですね…いえ、内緒です」

母親は顔を赤くして下を向いた。

「えく！なにそれえ…いいじゃん、教えてくれたって！」

「ダメです！」

「娘だよ」

「ダメです！娘とはいえ、話せることと話せないことがあります」

「修羅場があったとか？」

「ありません！」

「じゃあ、話せることだけ話してよ！」

「…そうですね…まあ、それなら…」

園田海未は教職に就いて、初めての年末を迎えようとしていた。春先に『イングラランド』へサツカー留学した彼氏は、まだ戻ってこない。

「長くても1年」

その言葉を信じ「あと3ヶ月の我慢です」と自分に言い聞かせているのだが…仮装に浮かれるハロウィーンのバカ騒ぎが終わり、街がクリスマス一色となった途端、日に日に寂しさが込み上げてくる。

もちろん、その理由は街中がカップルで溢れているからだ。

それまで海未にとって、クリスマスは穂乃果やことり…あるいはμ'sのメンバーと過ごすイベントだった。

それほど他人…カップル…を羨んだこともない。

いや、そう言うとうソになるかも知れない。

自分もいつかは…という気持ちはあったし、その日を妄想していた。

しかし、気を紛らわすことができず仲間がいたから、ツラくはなかった。

しかし、今は…。

彼氏がいるにも関わらず、腕を組んで歩くことができないのだ。その寂しさは、例えようがない。

だからと言って、*μ's*のメンバーにそんなことを話そうものなら「海未ちゃん、それはイヤミっていうものだよ」などと言われるのがオチである。

…いるだけマシですか…

何度もそう呟いて、自分を無理矢理納得させたのだった。

思えば…高野に自分の思いを打ち明けたのは2年前のこの時期…横浜にある大観覧車の中だった。

今でもあの日のことを思い出すと、胸が苦しくなる。

「好きです」と伝えたいだけだった。

だが、それを言うことは許されない。

言うてはいけない。

彼を好きになることは『罪』…そう思っていた。

そんな葛藤の中…しかし彼は自分の気持ちの全てを受け入れてくれた。

すぐに破廉恥な言葉を口にするけれど…そのことを除けば、自分にとつて贅沢すぎる相手だった。

そして…『この人の為に、自分の生涯を捧げよう』…そう思える人と気持ちが一いつになれたことが、なによりのプレゼントだと思った。

その次のクリスマス…つまり昨年…彼は『留学』を宣言した。  
突然のことに困惑したが、お互いがお互いの夢を叶えるための決  
断。

反対は出来なかった。

彼がサッカー選手でなくていい。

海未にとっては、好きになった人がたまたまサッカー選手だったの  
だから。

でも、彼にとっては、そうじゃない。

サッカー選手として輝くことが、彼の真髄。

だから…認めた。

しばしの別れ。

今は、少し我慢の時。

そして、その日は…付き合い始めてから1、2を争うほどの…『濃  
密な夜』を過ごしたのだった…。

海未が大学を卒業したのと、ほぼ同時に、彼は海外へと旅立った。  
それから一度も帰国していない。

周りは「いくらなんでも、それは酷い！」と言うが、海未はそうは  
思わなかった。

彼がサッカー選手として復活に懸けるその想いに、一点の曇りが無  
いことを知っている。

それだけの決意をもって渡英したのだ。

決して自分が蔑（ないがし）ろにされてるとは思っていなかった。

そして、付き合い始めてから今回が3度目のクリスマス。

頻繁に…というわけではないが、それなりに連絡は取っているし、声も聴いている。

それでも、隣に寄り添う相手がいらないというのは

「こんなにも切ないものなのですね…」

としみじみ思っている。

しかし『イブ』の前日。

高野から「海未ちゃんにプレゼントを渡すよう『知人』に頼んでおいたから、受取ってね」と突然LINEのメッセージが入った。

12月24日、指定の時間に、東京駅で待っていてほしい…とのとどった。

「知人…ですか？どなたです？」

「それは…内緒！まあ、楽しみにしてて」

…いわゆるサプライズということでしょうか…

海未は考えた。

…梨里さんと私と接点がある人物と言えば…

…やはりμ'sのメンバーでしょうか…

…もしもの時の為…ということで、LINEの連絡先交換はしておきますし…

…であるならば…

真姫を除けば、みんな社会人である。

そう自由に動けるメンバーはいない。

いや、それ以前に…いくら高野とはいえども、そう気安く頼めることじゃない。

もし、それをしたのであれば、頼む方も頼む方だが、受ける方も受

ける方である。

自分の知らないところで、そんなに仲が良いのかと勘繰ってしまう。

…さすがにそれはないと思いますが…

それでもあえて可能性を探すなら

「ごとりか希でしようか…」

とひとり呟く海未。

双方とも仕事でロンドンに行っており、その際わざわざ『様子見』と称して高野と面会している。

2人とも「疚しいことは何ひとつしていない」と言っているし、海未もそれは信じている。

だが、その時にこの日の依頼をされた可能性はある。

もしくは、その面会をキツカケに、話を進めたのかも知れない。

…いえ、μ'sのメンバーとは限りませんね…

…その前にA|R|I|S|Eの3人とも会っていますから…

…!!…

…ま、まさか…つばささん…夢野つばささん?…

…だとしたら…あまりに非常識です!!…

元カノを經由してプレゼントを渡される…そんなバカなことなどあるのだろうか。

海未は眉を顰めた。

いずれにしても、自分の知らないところで、高野が誰かと密かに打

合せをしているのかと思うと、いたたまれなくなってきた。

ワクワクよりも：ソワソワというか、イライラというか：なんとも  
言えない気持ちで、その時間まで過ごすこととなった。

幸い、明日から高校は冬休みに入る。

こんな状態で生徒と接したら、きつと八つ当たりしてしまうところ  
だった。

それは海未にとって：いや彼女たちにとって不幸中（？）の幸い  
だったと言えるだろう。

想い出①クリスマス（前編）

くおわりく

## 想い出① クリスマス（後編）

当日の19時。

海未は東京駅の八重洲口：待ち合わせのメツカ『銀の鈴』前：にやってきた。

指示された時間よりは30分も早い。

早め早めに行動するのは彼女の性分なのだが：それとは別に：なんとなく、いても立つてもいられず自宅を出た：という感じだった。果たして：どこから、誰が来るのか：忙（せわ）しなく、周りを見る。

そして何度も時計に目をやる。

その様子は傍から見ると『約束の時間になっても現れない彼氏を待っている』ようだった。

これが：東京駅：でなく、渋谷や原宿、六本木あたりであれば、確実にナンパされているところだろう。

…時間です…

海未がそれを確認すると同時に、高野からLINEのメッセージが入った。

向こうの時間なら、お昼前である。

＜着いた？

＜はい、着きました

＜そのまま、1Fに上がって

＜上がりました



＜そうしたら、東京駅日本橋口に向かって

…日本橋口…

…こっちですね…

＜着きました

＜目の前に広場がある？

＜はい

＜それに向かって、右向け、右！

＜しました

＜そうしたらトラストタワーまで歩いて

…一体、梨里さんはどこに連れていくつもりなのでしょう…

…なんだか、誘拐犯に指示されて身代金を運んでいるみたいですね…

＜はい、着きました

＜その隣にホテルがあるでしょ？そこの前まで行って

…ホテル…

…右側ですね…

＜進みました

＜OK！そうしたら、大丸方面を向いて待ってて

…このまま前方ですね…

〽はい、かしこまりました

そして待つこと約3分。

海未は、前から歩いてくる女性がそうなのかな？と幾人もの顔を眺めていたが、誰もが自分を通り過ぎていった。

…どなたが現れるのでしょうか…

本当に来るのか…と、少しずつ不安が募る。

その時だった。

高野から新たなメッセージが届いた。

〽訊くの忘れてた。海未ちゃん、今日のパンツの色は？

〽はい？何を考えてるんです!!貴方は変態ですか!!

〽間違った。今日の服装はどんな格好？特徴教えて

〽服装ですか…緑のベレー帽に、白のニットセーター、緑のジヤンパースカート…それに白いロングコートを着てます。あと赤いマフラーをしています。

〽めっちゃ、クリスマスカラーじゃん(笑)了解!伝えておくよ

…それは多少意識はしましたが…

その直後

「園田海未さん…ですっね?」

と後方から声が聴こえた。

ビクッ!

完全に予想外の展開。

突然の呼び掛けに、心臓が飛び出るかと思うほど驚いた。  
待ち人は前から来るものだと思っていたので、背後はまったくケア  
していなかったのだ。

そして、その声の主が女性ではなかったことに、もっと驚いた。

「は、はい…」

慌てて振り向く海未。

その人物の顔を見て、さらに驚いた。

「な…なぜ…ここに…」

「メリークリスマス！」

「…」

海未は状況が飲み込めず、ただ呆然と彼の顔を見た。

「お待ちせ！海未ちゃんの『知人』の登場…なんてね…」

「…」

「あれ？お呼びでない…って感じ？」

「い、いえ…その…あまりに唐突なことなので…どう言葉に表してよ  
いのか…」

「そっか…うん…じゃあ、改めて…『高野梨里』だった今、イングラン  
ドから帰国しました！」

「は、はい!!お帰りなさいませ!!」

海未は顔をくしゃくしゃにしながら、高野に飛び付いた。

「おお！1年ぶりに嗅ぐ、海未ちゃんの匂い」

「はっ！や、やめてください！そういうことはあとにしてください」

「抱きついてきたのは、海未ちゃんなんだけど？」

「そ、そうでした」

と言つて彼女は慌てて身体を引き離した。

それを見て笑う高野。

「うう…こんなサプライズ…卑怯です…」

海未は恥じらしい顔から一転、半泣きになった。

「お腹空いてない？」

「い、いえ…それほどでも…」

「…つて言うと思った。じゃあ、言い方を変える。オレ、腹減った。食事に付き合ってくれ」

「は、はい…そうですね。すみません、私の気が回りませんでした」

と海未は2度、3度と頭を下げた。

「まあまあ、いいからいいから…ということ、この中へ」

「この中？…このホテルですか？」

「ダイナーの予約を入れてあるんで」

「…」

「どうかした？」

「用意周到…と申しますか…一体、いつからこのような準備を…と思  
いまして…」

「その辺の話は…それより早く中に入ろう。海未ちゃんが抱きしめて  
てくれないから、寒いんだよねえ」

「一言多いのは気になりますが、仰る通りです。私も身体が冷えてき  
ました…」

こうして2人はホテルの中へと入っていった。

「ご馳走様でした。とても美味しかったです」

「やっぱり、日本の食事は格別だあ！最高に美味しいよね」

「はあ…ですが、本当によろしかったのでしょいか。このようなところでディナーなど」

「まあ、今日はクリスマスだから特別ってことで。…今のオレだと、毎日毎日とはいかないけどさ」

「そういうつもりでは…」

「ところで、このあとの予定は？」

「特にありませんが…」

「μ'sのメンバーとパーティーとか？」

「い、いえ…大丈夫です」

「なるほど。実は…オレ、今日、このあと、ここに泊まるんだ」

「そうなのですか!？」

「今から、家に帰るのも面倒だし。っていうか、もうチェックイン済みなんだけども」

「手荷物がなかったたので、不思議に思っていましたか…」

「…で、部屋は一応、スイートで取ってる」

「えっ?」

「2名で1泊」

「あつ…」

彼女はその意味を悟ったようだ。

「で、ですが…そういう準備はしてきてないので…」

「別にいいじゃん」

「そういうわけには…」

「…だよね…」

「あ、いえ…その…嫌だという意味では…。一旦、出直してくるとい  
うはいかがでしょうか?」

「全然OK! まあ、そんなこともあるかと、ここを押えたんだけど  
ね」

「どういうことでしょうか?」

「だって、ここなら、すぐに戻れるでしょ?」

「ええ…確かに…」

海未が住む『神田・御茶ノ水・秋葉原のデルタゾーン』と、今いる  
ホテルは目と鼻の先である。

タクシーに乗り、30分もあれば、行って帰ってこれる。

「わかりました。そうさせていただきます」

「うん、待ってるよ」

「なんだか今日は驚くことばかりです」

「まだ、まだ。これで終わじゃないから」

「…それは…いやらしいことですか?」

「それを期待してる?」

「してません!!」

「それはそれで…なんだけど…もつと違うこと」

「はあ…」

「それは、また、あとで」

「はい…。では、一旦戻って準備してまいります」

「うん、わかった。じゃあ、またあとで」

「はい」

海未はホテルの前でタクシーを拾うと、自宅へと戻っていった。

「本当にこのようなところに泊まるのですか?」

約1時間後、海未はホテルの38階にいた。  
眼下にはオレンジ色にライトアップされた東京駅が小さく見える。

「何度も言うけど、今日は特別だって」

「ですが…」

「その替わり、年末年始はおとなしく過ごすよ…」

「それは構わないのですが…」

「それより知ってる？このホテルの名前」

『SHANGRI-LA HOTEL TOKYO』と書いてありました…」

「μsにもあったよね、そんな曲？海未ちゃんからもらったCDに入ってた」

「はい…『Shagllila Shower』ですね…。非公開ですが」

「オレ、あの歌の『♪確かめる光のshower』…のあとの…『wowo!』の部分が好きなんだよね」

「そこですか!？」

と海未は苦笑した。

「ここね、チェックアウトは12時までなんだって」

「随分と遅いんですね」

「だから、折角だし、明日の昼までゆっくり満喫しよう」

「は、はあ…」

「あとで館内を散策してみよう。アメニティも充実してるみたいだし」

「はい、わかりました」

「…と…その前に…まずは…はい、これ。お土産…」

「あ、ありがとうございます」

「ごめんね、クリスマスプレゼントも兼ねて…なんだけど」  
「い、いえ…そんな…あつ…ネットクレス…」

「指輪…とも思っただけど、まだ早いかな…って」

「すみません、ありがとうございます」

「安物だけど」

高野はそう言ったが、海未は一目見てそれがそうではないことを認識した。

一流ブランドのものだった。

「このようなものは頂けませ…」

「まあまあ…」

「ですが！」

「大丈夫だって！心配しないでいいから。ここまでオレを支えてくれたことへの、お礼」

「本当によろしいのでしょうか…」

「いらぬなら、絵里さんにあげちやうよ！」

「なぜですか！」

「決まってるじゃん、タイプだもん」

「そういうことでしたら、ありがたく頂戴いたします」

高野はプツと吹いた。

ムツとする海未。

「そうしたら、次は私の番です!!」

と少し強めの口調で彼女が言った。

「いいよ。海未ちゃんの身体さえあれば…」

「破廉恥です！すぐにそういうことを言うのですから！」

「おっと！それはそうでしょ。1年間、我慢したんだよ」

「そ、それは私だって同じです!!」



「でしょ？だから、あとでいっぱいしようね！」

「はい！もちろんで…あつ…いい、いえ…そういうことではなくて…と、とにかく私からもプレゼントがあるので、受取ってください！」

「くつくつくつ…わかったよ…まったく変わってないねえ…海未ちゃんは」

「か、からかわないでください！」

「…これは…万年筆？」

「はい。いつ戻ってこられるのか、わからなかったものですから…お渡しする準備だけはしております」

「あれ？ひよつとして…さつき、これの為だけに戻った？」

「それだけではありませんが…まさか今日会えるとは思ってなかったので…」

「サンキュー！ありがたく使わせてもらおうよ」

「すみません、つまらないもので…」

「いやいや、海未ちゃんらしいよ。…あ、そうだ！じゃあ、さつそく契約書はこれでサインしよう」

「契約書…ですか？」

「実は今日、もうひとつプレゼントがあるんだ」

「もうひとつ？」

「プレゼントって言うと、語弊があるけどさ…まあ、報告に近い…かな」

「なんでしょう？」

「オレ、Jリーグに復帰することになったよ」

「!!」

「湘南ベルマーレからオファーがあつてね」

「あつ…」

「正式契約は年明けなんだけど」

「お、おめでとうございます!!」

「ああ…ありがとうございます。まあ、ようやく、ここまできたって感じかな」  
「でも、よかったです」

「そうは言っても、契約金1千万、年俸460万…プラス出来高払い…  
一番下からのスタートだから…まだ今は海未ちゃんを贅沢させてあげられない」

「私の贅沢などはどうでも良いのですが、梨里さんの夢のために頑張ってください」

「了解!」

「ああ…本当に良かったです…」

海未の瞳から自然に涙がこぼれた。

「泣かないの!」

「…す、すみません…」

「まずはここまで、ありがとうございます。海未ちゃんなりにプレッシャーがあつたよね?」

「い、いえ…梨里さんの苦労や努力に較べれば…」

「確かに。あんじゅさん、ことりちゃん、希さんの『おっぱいの誘惑』にも耐えて頑張ってきたんだからね」

「そうですね」

と、一旦は頷いた海未。

しかし

「…って、どうしてまたそうなるんですか!!」  
と高野を睨んだ。

「あははは…」

「もう、知りません!!」

海未はプイと横を向いた。

「あ、ねえ…海未ちゃん、ひとつお願いしていい?」

「なんででしょう?」

「1時間だけ、寝かせて」

「えっ?」

「時差ぼけ」

「あっ!」

「知ってると思うけど、オレ、シヨートスリーパーだからさ。ちよつとだけ休ませてもらえれば、すぐ復活するから」

「は、はい…そうですね。さすがにお疲れですよね」

「疲れてはいないけど…眠い」

「はい。わかりました」

「じゃあ、おやすみ。ちゃんと起こしてね!」

「はい」

「起きたら…いっぱい…」

「わ、わかりましたから!」

「本当に?」

「約束しますから、安心して寝てください」

「海未ちゃん…」

「はい?」

「好きだよ」

「私もで…って…な、なんですか!いきなり!」

「はははは…じゃあ、また、あとで…」

言うが早いか、高野はスーツと眠りに入ってしまった。

…梨里さん…

…デイナーよりも…ネックレスよりも…

…貴方がこうして戻ってきてくれたことが、私には何よりのプレゼントでしたよ…

…そして、サッカー選手として復帰できるということも…

…お返しに、今夜はいっぱいいっぱい愛します…

…ですから、私のことも…

…いっぱいいっぱい愛してくださいね!…

「お母さん?」

「は、はい!」

「話してくれるの待ってるんだけど」

「そ、そうでした！ちよつと当時のことを思い出していたもので…」

「すごいニヤけてたけど…」

「そ、そんなことありませんよ！」

「いいよ、隠さなくても。その顔を見て、お父さんとの仲が超ラブラブだったんだな…ってことは、想像できたから」

「別に、そういうことでは…」

「はい、はい、ご馳走さまでした！詳しくは陽菜のお母さんに訊いてみよう…つと」

そう言おうと娘は、ケラケラと笑いながら部屋を出ていった…。

想い出①クリスマス（後編）

くおわりく

## 海で海未と

サッカーの世界は、野球と違い、選手の出入りが激しい。

その要因のひとつはJ1、J2合せて40というチーム数の多さに起因している。

上から下まで『資金力の差』が激しい為（一概には言えないが）基本的には、優れた選手はどんどん『上のチーム』へと引き抜かれていくからだ。

故に、折角J2からJ1に昇格しても、そこで活躍した選手が移籍してしまい、戦力ダウン。結局、その穴を埋められないままシーズンが終わり、1年でJ2に逆戻りというパターンは良くあることだ。

高野梨里が入団した：湘南ベルマーレ：もそんなチームのひとつである。

J1、J2を行ったり来たり。

その様子から「エレベータークラブ」とも揶揄されることもあった。イングランドに留学していた高野に、ベルマーレの関係者から連絡があったのは11月のこと。

J2に所属していたチームは、このシーズン圧倒的な強さを誇り、数試合を残して昇格を決めた：その直後のことだった。

しかし、この時点ですでに、チームの主力選手には、他チームからのオファーが掛かっていた。

特に：ゲームメーカー的存在だった『本間洋平』：が移籍することは、確実視されていた。

本間は：高野が出場するはずだった3年前のオリンピックピックで、彼に替わって追加召集された選手だ。

そして、その大会をキツカケに、以降は代表に定着。

いまや『日本の中盤』と言ってもいい。

「キミには彼の替わりをして欲しい」  
それがチームの関係者の言葉だった。

…オレが抜けた穴に洋平が入って、洋平が抜けた穴にオレが入る…  
…これが運命ってヤツなのかな…

提示された条件は年俸460万円＋出来高払い。

ポジションによって異なるが、高野の場合『出場1分につき5千円』  
だという。

つまり、1試合フル出場すれば『×90分＝45万円』となる。

それを高いとみるか安いとみるか…。

リーグ戦だけで計算すれば、フルフルで『×36試合＝1,620  
万円』だ。

カップ戦、トーナメント戦も勝ち進み出場できれば、さらに上乗せ  
がある。

それに1ゴール50万円、1アシスト25万円…その他、試合での  
貢献度、個人タイトル料などが加味される。

だが、2年以上もblankがある高野。

オフアールがあつたからと言って、レギュラーが確約されたわけでは  
ない。

チーム内の競争に勝ち、監督の信頼を得てゲームに出られなけれ  
ば、1円にもならないのだ。

イチかバチか…の賭けである。

しかし、贅沢なこととは言えなかった。

…どのみち、やるしかないんだ…

むしろ「いち早く声を掛けてくれた」ことに感謝すらしていた。  
実は…高野の留学先での評判はよく、日本国内でも日に日に注目が集まっていた。

獲得に数チーム動いているとの噂も流れていた。  
とはいえ、やはりネットクになったのは、ケガの状態と実戦経験の少なさ。

オリンピック予選では活躍したが、マリノスに、在籍中は控えに甘んじてきた選手。

年が明ければ24歳となる高野に、果たして伸び代がどこまであるのか、その見極めが二の足を踏ませていた。

そんな中、真っ先に動いたのがベルマーレ。

先に述べたチーム事情により、補強したいポジションがピタリと合致したということだろう。

背番号は『28』。

本間は『10』だったので、そのエースナンバーは、誰か別の選手が付けるということだ。

つまり、ベルマーレとしても、まだ、そこまでの期待はしていない…ということだった。

…でも、それでいい…

…これでダメなら、オレもそれまでってこと…

ピッチにさえ戻れば、大暴れできるだけの自信はあった。

苦しかったりハビリ、トレーニング…そして、この9ヶ月間の留学を経て、そう言えるだけのものを身に付けた。

「宜しくお願いします」



高野は、こうしてJリーグに復帰することを決めたのだった。

そして1年が過ぎた。

開幕当初はベンチ入りできなかつた高野だが：主力外国人選手の故障により、徐々に出場機会を増やしていき、前半戦を折り返す頃にはレギュラーを奪っていた。

元々のプレースタイルである：小刻みなステップで突き進むドリブル、キーパーのタイミングを外すシュート：それらは健在で、大いにサポーターを沸かせた。

そこに力強さが加わった。

復帰までに徹底的に鍛え上げた体幹によつて、相手と競つても当たり負けしなくなったのだ。

それだけじゃない。

その成果は守備にも好影響を及ぼし、ボール奪取能力も高まつていた。

そこで終盤にはボランチのポジションを任されることもあった。

こうした高野の活躍もあり、リーグ戦は13位でフィニッシュ。

1年でJ2逆戻りは免れた。

出場24試合、1,627分、3得点、6アシスト（リーグ戦、カップ戦含む）。

この結果、彼の出来高払いは1千万円を超えたのだった。

天皇杯は早々に敗れてしまい、残念ながらチームとしても、個人としてもタイトルを取ることはできなかったが、それでも、この年から新設された『カムバック賞』には輝いた。

こうして彼は『高野梨里の名』を、サポーターやファンだけでなく、

再び世間に知らしめたのである。

年が明けて1月3日。

ここ数年、正月は晴れが続いている。

この日も穏やかな、優しい日差しが降り注いでいた。

今日は高野の誕生日。

24歳になった。

『出会って4度目となる初詣』を済ました、高野と海未。

彼の実家で着替えて一服したあと、車で江ノ島へと向かった。

県道467号を南下し『白幡の交差点』を左折する。

その先にあるのは『藤沢橋』。

半日前には箱根駅伝の復路を走る選手が、ここを通った。

駅伝ファンなら『遊行寺(ゆぎようじ)の坂』の手前…とえば、イメージしやすいかも知れない。

その応援の為…十重二十重の人波でごった返していた道…を選手が走った方向に車を走らせ、海岸線に出た。

海水浴シーズンではない為、今はさすがにそこまでの賑わいはないが…かといって閑散としているわけではなく…歩道と浜辺にはカッブルが、海にはサーファーの姿が見られた。

高野は西浜の駐車場に車を止めると

「たまには散歩でもしてみる？」

と海未を誘った。

「寒いのは苦手じゃなかったのですか？」

「その為に、海未ちゃんがいるんじゃない？」

「私はカイロですか？」

そう言いつつも海未はニコッと微笑み、高野の左腕に自分の右腕を絡ませ、グツと身体を引き寄せた。

たわいのない会話をしながら、砂浜の上を歩く。

そんな時間を過ごすのは、久々のことだった。

9ヶ月間、日本を離れていた高野。

だが、戻ってきてからもすぐキャンプに入ってしまった、それほどゆっくりしているヒマは無かった。

そしてシーズンイン。

通常、水曜もしくは土日が試合の高野。

土日が休みの海未。

なかなか、2人の時間は合わなかった。

「こんな風にして歩くのは、いつ以来でしょうか？」

「付き合ってから1年目の秋が最後かな？」

「そうでしたね…梨里さんは途中から私のことを放置して、砂浜ダッシュを始めたんですよ？」

「悪いと思ってすぐやめたじゃん」

「それはそうですが…デートに来てトレーニングをするとは思いませんでした」

「そういえば…海未ちゃん、波打ち際で転んじゃって、ビショビショになったよね？」

「あれは梨里さんが押したんです！」

「そうだったけ？」

「はい」

「自分でコケたんじゃなかったっけ？」

「いいえ！梨里さんが押したんです！下着まで濡れてしまい…大変

だったのですから」

「そっか！それで服を乾かさなきゃ…って、そのラブホに緊急退避したんだっただ」

「あつー…」

海未は何かを察したように声をあげた。

「その再現…する？」

「言うと思いました！」

海未は組んでいた腕をサツと離そうとしたが、それより早く高野は彼女を抱き上げた。

「ま、待つてください!!だ、ダメです!!今は冬なんですから、風邪引いちゃいます！」

「そうしたら、ほら、あそこで焚き火やってるから、暖まらしてもらおう」

「そういうことじゃ!!わっ！わっ!!」

「いくよー！イ〜チ、ニ〜の…」

お姫さま抱っこ状態で身動きの取れない海未を、高野は前後に大きくスイングさせた。

「きゃあ!!」

「…なあんてね…」

「ひどいです…」

「あははは…」

「笑いごとじゃありません！」

「うん、ごめん」

「…つと…いつまで、この状態なのでしょうか？もう、降りしてください」

「いや、この年末に食べ過ぎてないかな…つて…体重測定中…」

「な…降ります！降ります！！降ろしてください！！」

足をバタつかせる海未。

「つてことは、思い当たる節がある？」

「ありません！ありません！」

「暴れない！暴れない！暴れるなって！」

ドサツ…

高野に海未の浴びせ倒しが決まった…。

「うう…まだ、背中がジャリジャリしてる…」

高野と海未は、浜辺に設けられたコンクリートの階段に腰を掛けた。

「すみません…」

「ちよつと、もう一回、砂、落としてくれない？」

と高野はシャツを捲った。

「はあ…」

海未は持っていたハンドタオルで擦るようにして、背中に貼り付いた砂を払った。

「でも、梨里さんが悪いのですよ！あのようなことをしたのですから」  
「あははは…ああ、海未ちゃん、ほら夕陽が綺麗だよ」

「誤魔化さないでくだ…本当ですね…」

「逆初日の出？」

「今日は元日でもありませんし、普通に『日の入り』でいいと思います  
が」

海未はふふふ…と笑った。

「なんかさ、海に沈んでいく太陽って見ると、すごく落ち着かない」  
「はい」

「沈んだら、寂しくなっちゃうけど」

「そうですね…。でも、梨里さん…」

「ん？」

「私は『海で夕陽』と言うと、どうしても高校の時を思い出してしまう  
のです」

「高校の時？」

「当時の3年生…にこたち…に、 $\mu$  s の解散を告げたのが…この先  
の湯河原の方の海岸で…まさに太陽が沈む前のことだったんです」

「へえ…」

「みんなで手を繋いで…『 $\mu$  s は…解散します』って叫びました」

「青春ドラマみたいなこと、してたんだ」

「たまたま、誰もいませんでしたから」

「いたら？」

「恥ずかしくて、できなかつたかもしれません」

「それはどっちなの？いい思い出？それとも…」

「悪い思い出はありません。ですが、そこに至るまで、相当悩みまし  
たので…それを告げることがとても辛かったです。今でも、あの時の  
ことを考えると、胸が苦しくなります」

「ふくん、じゃあ、ここで別の思い出を作ってみる？」

「はい？」

「オレも叫んでみようかな？海未ちゃんの思い出に残るようなこと」

「い…今、ここですか？まだ、周りにいっぱい人がいます」

「いいんじゃない別に。聴かれて困るようなことじゃないし」

「な、何を？…」

「よいしょ…つと」

高野は、スクツと立ち上がった。

「ま、待ってください!!」

海未は、高野の腕を引っ張った。

「ん？」

「いえ、やはり、やめましょう…。何かすごくイヤな予感がします」

「イヤなことか…そうだね。必ずしもハッピーなことじゃないかもね」

と高野は、再び腰をおろした。

「す、すみません…」

「ううん、ちよつと、驚かせてみただけだから」

「は、はい…」

「でも、大事なことだから、よく聴いてほしい」

「は、はい！」

そう言われて、海未は正座をして高野に向き直った。

「オレさ…たぶんね、これから先も『希さんとしてみたい』とか『絵里さんとしてみたい』とか言っちゃうかも知れない」

「…それは、もう慣れました…」

『「ごとりちゃんともしたい』って」

「はい…」

『「花陽ちゃんともし…」』

「全員言わなくてもいいですから」

「恐らく、これからどんどん活躍するから、色んな可愛い娘と噂になっちゃうかも知れない」

「はい、そうなるくらい活躍してください」

「でもね…オレを支えてくれくれるのは…海未ちゃんしかいない…って思ってるから」

「えっ…」

「すごく勝手だっことは、わかってるんだけどさ…」

「はい」

「だから…これを受け取ってほしい」

高野はそう言うと、ポケットからリングケースを取り出し、海未に差し出して、片膝を付いた。

「オレが死ぬまで、一緒にいてほしい」

「…り、梨里さん…」

そういう流れになると、途中から気が付いた。

もしかしたら、この場で…と思っていた。

だが『「それ』がここで出てくるとは…それは想定外だった。

「お！なんだ？なんだ？…」

高野のその姿勢を見て、周りのカップルが注目し始めた。



「あれ？ベルマーレの…」  
さすが地元のJリーガー。  
すぐに面が割れた。

海未は恥ずかしさのあまり、気を失いそうだった。  
いや、いつそうこのまま倒れてしまおうかとも思った。

だが…

「謹んでお受け致します。不肖、園田海未、一生、梨里さんに付いていきます。不束者（ふつつかももの）の私ですが、何卒、よろしくお願い致します」

彼の差し出したリングケースを受け取り、頭を下げた。

いつか言うだろうと、練習していたセリフ。

まさか、このタイミングで…とは思っていなかったが、思いの外（ほか）スムーズに口から出てきたのだった。

「おお!!」

歓声と同時に拍手が沸き起こった。

「海未ちゃん…」

「当たり前です！つばささんに『バトンを渡された時』から、覚悟を決めていましたから」

アレ！タカノリサト！

オウ！タカノリサト！

ボン ジョカトーレ！ リサト！

アレ！アレ！アレ！

手拍子と共に、チャント（コール）が始まった。

それに高野は、ゴールを決めたときと同様に、手を挙げて応えた。

そして海未は…正座の状態から立ち上がると、彼らに向けてゆっくりと頭を下げた。

表情を隠すかのように、ずっと下を向いていた…。

マスコミが2人の婚約を正式に報道したのは、それから1ヶ月後のことだった。

海で海未と

くおわりく

## ラストゲーム（前編）

それは海未にとって、7年半ほど前に見た光景だった。違うのは季節ぐらいである。

あとのときは初夏だった。

愛娘は母親に預けてきたので、ここにはいない。

だからICU：集中治療室：の前にいるのは、自分と父親、そして高野の両親：あの時と同じだった。

押し黙って、ただひたすら、彼の回復を待った。

暗く長い時間はいつまでも続く。

そして、そこに光が戻ることは：ついになかった。

高野梨里がJリーグに復帰して5シーズンが過ぎた。

湘南ベルマーレに入団した『背番号28』は、主力としてチームを牽引し、今シーズン20数年ぶりのJ1制覇に貢献した。

この日はリーグ戦の：そしてホームの最終戦でもあり：さらには高野が『日本国内でプレーする最後の試合』だった。

彼は年が明けた2月から、念願だったスペインリーグに移籍するからだ。

留学していたイングランドのチームからもオファーがあったが『寒い』『メシが不味い』との理由で断っている。

もちろん、それは公にはしていない。

それは妻の海未だけが知っていること。

その妻と娘は、彼の勇姿を関係者席から見守っていた。

ゲームの終了後は、その勝敗に関わらず、サポーターに向けての…優勝報告や挨拶…が行われるセレモニーが予定されている。

そして…

復帰から5年間、チームを引っ張ってきた高野梨里の退団イベント…壮行会も。

だが…

海未とみそらは、彼に花束を渡すことになっていたが…それをすることは叶わなかった。

…。タイムアップの笛が鳴ったとき、彼はピッチにいなかったからだ…。

アクシデントは、後半も残り僅か…という時に起きた。

スコアレスのまま迎えたベルマーレのCK。

高く上がったボールに、ジャンプして競った高野。

そこに…相手DFが交錯した。

「!!」

選手も、スタッフも、観客も…誰もが「ヤバイ!」と叫んだ。

高野はそんな落ち方をした。

競った相手の右腕が彼の喉元に入り、そのまま引き落としたように見えた。

プロレスでいうなら、クローズライン…もしくはネットクドブリーカードロップである。

主審は即時ファールを宣告し、胸のポケットに手を入れた。取り出したのは赤いカード。

悪質なプレーと判断して一発退場の判定が下された。

ここはベルマーレのホームである。

首を振りながらピッチを去るDFに、容赦ないブーイングが飛んだ。

両チームの選手はわりと冷静だった。

通常カードが出た場合は…審判に詰めよって取り消しを求めたり、選手同士で小競り合いが起きたりするもの…であるが、出された側のチームも「今のは仕方ない」とある意味諦めるようなファールだった。

しかし、ファンはそうではない。

ベルマーレのサポーターが、相手チームを罵倒した。

ファールを犯したのは選手だ。

そんなことはわかってはいるが、すぐに怒りの矛先は、その選手がいるチームを応援しているサポーターに向いた。

売り言葉に買い言葉。

これに数少ないアウエーのサポーターが反応し、緩衝地帯を挟んでが争い始まった。

すぐさま警備員が飛び出してきて、騒然となる会場。

しかし、その怒声や争いも、やがて沈静化する。

ピッチの異様な雰囲気を知りしのだ。

サポーターの視線はゴール前で倒れている、高野へを注がれた。

敵味方関係なく、心配そうに彼を取り囲む。

高野はピクリとも動かない。

「梨里〜!!」

「梨里さ〜ん!!」

「高野〜!」

会場の四方八方から、彼の名前を叫ばれる。

だが、その呼び掛けに…彼は高野応じない。

担架が運び込まれたが、トレーナーはすぐに大きくバツを作り、手を上下に動かす仕草をした。

医療スタッフが駆け寄り、心臓マッサージを始めたのを見て…場内から悲鳴や泣き声が聴こえた。

事態は深刻だ。

誰もがそれを悟った。

「奥さん!」

スタンドにいた海未は、チームの関係者に呼ばれた。

その声に弾かれたように…夫に渡すはずだった花束…を放り投げると、娘を抱きかかえ、誘導されるまま通路を走った。

ピッチに到着した救急車が…高野とスタッフ、そして、あとから来た妻と娘…を乗せると、赤いランプを点灯させながら、スタジアムを出て行った。

場内は、静寂に包まれた。

水を打ったように…というのはまさにこのことだ。

その中で、嗚咽の声だけが聴こえる。

誰もが、このまま試合が続けられるような状態ではないと感じていた。

それはサポーターの応援を取り仕切る、コールリーダーも同じだった。

普段なら、負傷した選手を鼓舞する為、名前を連呼するところだが、それはこの場合『不謹慎』だと思い…どうしていいかわからず、黙り込んでしまった。

審判団も同じ思いだった。

残り時間は5分余りあったが…果たしてこの状況下、まともな状態でプレーできるのだろうか…。

選手、監督、マツチコミッショナーが集まり協議した結果…ゲームは成立したものとして、このまま、タイムアップとなった。

異例の判断だった。

しかし、このままゲームを続けても、両チームとも選手のモチベーションが上がらないことは、充分予想できた。

ベルマーレはもちろん、相手チームも言い訳できないほどの悪質なファール。

チームの勝利よりむしろ、高野への同情心のほうが勝ってしまうことが危惧された。

だが、例え5分ほどとはいえ、無気力でプレーするとなれば…気持ちはわからないでもないが…それは審判団としては看過はできない。プロである以上、最後まで全力を尽くすのが『是』であるからだ。

協議は10分以上続いたが…結論は先に述べた通り…となった。

そしてサポーターもこれを受け入れた。

暴動にすら発展しかねない、そんな状況であったが、幸いそこには

至らなかった。

いや、それを幸いと言ってよいものか…。

兎にも角にも、彼らもこの状況では致し方ないと判断したようだ。

予定されていた、最終戦のセレモニーは延期となった。

もちろん、主役が不在となった高野の退団イベントも…だ。

脳挫傷と頸椎損傷。

それが下された診断だった。

意識不明のまま病院に運ばれた高野は、すぐさま緊急手術が行われた。

「最善は尽くしました」

医師はそう言ったが…その顔を見れば、状況は極めて厳しいことがわかる。

一命は取り留めても…という表情だった。

そして彼は目を覚ますことなく、2日が過ぎ…3日が過ぎた。

「…何回、親に心配掛ければいいのかしら…」

「…まったく…」

高野の父は頷いた。

「お義母さん、お義父さん…」

「海未さん、申し訳ない。息子に代わって、まず私から謝らせてもらおうよ」

「そんな…謝るだなんて…」



「息子に『海未さんみたいな女性を嫁にもらえ』と言ったのは私です。あなたは本当にいい娘さんだ。息子にはもつたいないほど、できた娘さんだ。でも、それは私たちのエゴだったのかも知れない…。海未さんにとつては…最低な結婚になってしまった」

「やめてください…。いくらお義父さんとはいえ、そんなことは…私には私の意思で梨里さんと一緒にになりました。最低だなんて思ったことなど、一度もありません！」

「海未さん…」

「ええ、選手からもファンからも愛されている素晴らしい息子さんじゃないですか。海未がその選手の妻であること…それがどれだけ光栄なことか。彼は私にとつても、自慢の『息子』ですよ」

と海未の父。

「そう言つて頂けるのはありがたいのですが…」

「大丈夫よ。梨里は絶対戻ってくるわ」

「お義母さん…」

「だって、こんなに綺麗な奥さんと、あんなに可愛い娘を残して…先に逝くわけないじゃない」

「はい…」

「信じましょう。だって私たちには、それしかできないんだから」

「はい、そうですね」

だが…

「残念ながら…」

無情にも医師が海未たちにそう通告したのは、彼が意識を無くしてから5日後のことだった。

ふらり…と倒れそうになる海未。

それを受けとめたのは高野の母だった。

しかし、今まで気丈に振舞ってきたものの…彼女の精神も限界だった。

2人はお互い、抱き合ったまま膝から崩れ落ち…泣いた。

高野の父は「親不幸者が…」と言い残し、どこかへ姿を消した。それは彼なりの…精一杯の強がり…なのだろう。

奇跡は起こらなかった。

7年半前と同じような状況であったが、その再現はならなかった。

高野梨里は、あと10日ほどで29歳となるはずだったが…その前に生涯を終えてしまった。

そしてこの瞬間から、接触したあのDFは『殺人鬼』と呼ばれるようになったのだった…。

ラストゲーム（前編）  
おわり